新約全書

耶穌降生千八百七十一年 米國聖書會社

明治十四年

日本橫濱印行

橫濱製紙分社新鑄鉛版

193.5 A3

新約全書目錄

馬太傳福音書　計二十八章
馬可傳福音書　計十六章
路加傳福音書　計二十四章
約翰福音書　計二十一章
使徒行傳　計二十八章
羅馬人書　計十六章
哥林多人前書　計十六章
哥林多人後書　計十三章
加拉太人書　計六章
以弗所人書　計六章
腓立比人書　計四章
哥羅西人書　計四章
帖撒羅尼迦人前書　計五章
帖撒羅尼迦人後書　計三章
提摩太前書　計六章
提摩太後書　計四章
提多書　計三章
腓利門書　計一章
希伯來人書　計十三章
雅各書　計五章
彼得前書　計五章
彼得後書　計三章
約翰第一書　計五章
約翰第二書　計一章
約翰第三書　計一章
猶大書　計一章
約翰默示錄　計二十二章

国立国会図書館 27.3.-4

260840

馬太傳福音書

第一章　イエスキリストの系圖

アブラハムの裔なるダビテの裔イエスキリストの系圖

アブラハム、イサクを生イサク、ヤコブを生ヤコブ、ユダと其兄弟を生り

ユダ、タマルに由てパレスとザラを生パレス、エスロンを生エスロン、アラムを生

アラム、アミナダブを生アミナダブ、ナアソンを生ナアソン、サルモンを生

サルモン、ラハブに由てボアズを生ボアズ、ルテに由てオベデを生オベデ、エツサイを生

エツサイ、ダビデ王を生ダビデ王、ウリヤが妻に由てソロモンを生

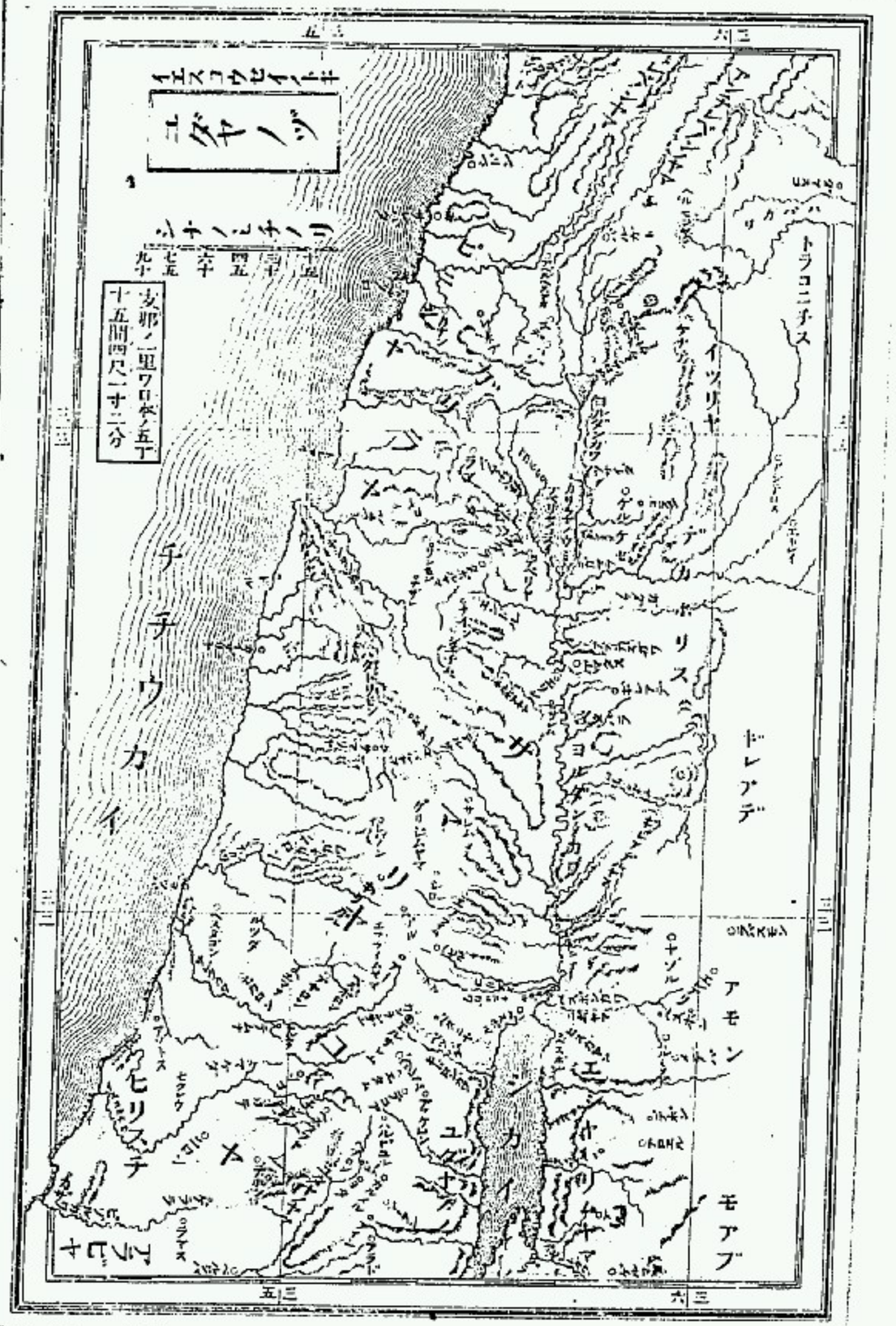
ソロモン、レハベアムを生レハベアム、アビヤを生アビヤ、アサを生

アサ、ヨサパテを生ヨサパテ、ヨラムを生ヨラム、ウジヤを生

ウジヤ、ヨタムを生ヨタム、アカズを生アカズ、ヘゼキヤを生ヘゼキヤ、マナセを生

マナセ、アモンを生アモン、ヨシアを生ヨシア、其兄弟を生り　バビロンに徙さるゝ時ヨ

シア、エホヤキンと其兄弟を生バビロンに徙さるる後エホヤキンシアルテルを生レアルテル、ゼルバベルを生ゼルバベル、アビウデを生アビウデ、エ



リアキンと生エリアキンアゾルを生ゾドクアキムと
生アキムエリウデを生エリウデエレアザルを生エレアザルマッタンと
生マッタンヤコブと生ヤコブマリアの夫ヨセフと生り此マリアよりキ
リストと稱るイエス生を給ひき其世系を數を圧アブラハムよりダビデ
ま至るまで十四代ダビデよりバビロンま徙さるゝ時まで十四代バビロン
ま徙さをゐよりキリストまで十四代なり⑱ろをイエスキリスト生を給
るゐと左れ如一其母マリアとヨセフと聘定と爲るれをまて未だ偕まならざりしとき聖靈ま感じて孕ちが其孕さること顯をけをゝ夫ヨセフ義人ある故ま之と辱むることと願ず密ま離縁せんと思へり⑲斯て此事と思念せる時ま主れ使者かをゞ夢ま現れて曰けるゝダビデの裔ヨセフよ恐妻マリアと娶ことと懼るゝ勿れ孕る所れ者ゝ聖靈ま由あり⑳その子と生ん其名とイエスと名くべし蓋ろれ民と罪より救んとすをを也㉑凡て此事ゝ預言者ま託て主れ曰さまひし言ま㉒處女ろらみて子を生ん其名とイン

マヌエルと稱べしと有ま應せん爲なり其名と譯を神ろらと偕ま在との
義あり㉔ヨセフ寤より起て主れ使者乃命ぜし言ま遵ひ其妻と娶されど
㉕家子れ生るまて牀と同ま為せざりき其生を一子とイエスと名けさり
第二章 ①夫イエスいへロデ王れ時ユダヤれベツレヘムま生を給しゞ其とき
博士たち東れ方よりエルサレムま來り②曰けるゝユダヤれ王とて生を
給る者ゝ何處ま在す乎ろをら東れ方にて其星を見さをを彼と拜せん爲に
③來れり④ヘロデ王てきと聞て痛む又エルサレム れ民もをま然り⑤凡れ祭
司れ長と民れ學者とと集てヘロデ問けるゝキリストれ生るべき處ゝ何所
なる乎⑥答けるゝユダヤれベツレヘムま在り蓋預言者れ錄さをさる言ま
ユダヤれ地ベツレヘムよ爾ゝユダヤれ郡中ま在て至小きものま非ず我イス
ラエルの民と牧ふべき君ろれ中より出んと云をなり⑦是ま於てヘロデ密
ま博士等と召星れ現をし時と詳ま問て⑧彼等とベツレヘムま遣さんと
して曰けるゐ往て嬰兒れ事と細ま尋てきま遇を我ま告よ我も亦ゆきて拜

そべーたの王ヘロデの命と聞て往り前に東れ方より星のさらに先ちて嬰兒れ居所にいさり其上に止まぬ　十彼等これ星を見て甚く喜び　十一既にお宝に入けるば嬰兒れ其母マリアと偕に居と見ひざまづて嬰兒と拜し寶れ盒と開て黄金乳香沒藥なご禮物を献さり　十二博士夢に「ヘロデへ返る勿と默示と蒙りて他れ途より其國に歸をり○　十三彼等が去るれち主れ使者ヨセフれ夢に現をて曰けるい「ヘロデ嬰兒と索て殺んとする故に起て嬰兒と其母とを挈へエヂプトに逃て復吾が示さん時まで彼處に止れ」　十四ヨセフ起て夜嬰兒と其母とを挈へエヂプトに往　十五「ヘロデれ死るまで其所に止をり是主預言者に託て我吾子とエヂプトより召出せりと云給ひしに應せん爲なり　十六是に於て「ヘロデ博士に欺のをさるを見て大に忿いのり人を遣て博士を詳く問さる時と度りべッレヘムと其境れ内なる二歳以下の嬰兒と盡く殺せり　十七即ち預言者エレミヤれ言に　十八「歎き悲き甚く愛る聲ラマに聞もラケルろれ兒子乃無によりて慰と得ず」と云ーに應へり

十九斯てへロデ死ーかな主れ使者ヨセフれ夢にエヂプトに在て現を曰けるい　二十「起て嬰兒とろれ母とを挈へイスラエルれ地にゆけ嬰兒れ生命と索る者れ已に死り」　二十一彼おきて嬰兒と其母とを挈へてイスラエルの地に至しが　二十二「アケラヲ父へロデに代てユダヤれ王さりと聞けをば彼處に往ことを懼る又夢にお告と蒙りてガリラヤの内に避　二十三ナザレと云る邑に至りて居り彼いナザレ人と稱をんと預言者に託て云をたる言に應せん爲なり

第三章　當時バプテスマのヨハネ來りてユダヤの野に宣傳へて　二曰けるい「天國に近けり悔改めよ　三是れ主れ道を備ろれ路線を直せよと野に呼る人れ譬にありと預言者イザヤに言ーに人あり　四此ヨハネれ身に駱駝れ毛衣と着腰に皮の帶とつのぬ蝗蟲と野蜜と食物とせり　五斯時エルサレム及びユダヤと郷全さヨルダンれ四方より人々山てヨハネに就　六己が罪と悔あらたヨルダンにて彼よりバプテスマと授られさり　七パプテスマを受んとてパリサイ及サドカイの人々れ多く來れると見て彼等に曰けるい蛇れ裔よ誰あ

んぢらを來んとする怒と避べきみちを
よ　九爾曹わきらが先祖をアブラハムを有と云ことと意ふ勿を我爾曹を告ん
神は能よの石ともアブラハムの子と爲しめ給ふあり　十今や斧を樹れ根を
置る故を凡て善果と結ざる樹を砍れて火を投入らるべし　十一我れ爾曹と悔
改させんとて水と以て爾曹をバプテスマと授く我より後を來者れ我を勝て
能力あり我れ其履と提をも足ず彼れ聖靈と火ともて爾曹をバプテスマと
授ん　十二手をれ箕を持て其禾場と淨め麥を斂て其倉をいれ糠れ燼ざる火
をて燒べし○　十三斯時イエスヨハヂをガリラヤより
ヨルダンを來り給ふ　十四ヨハヂ辭て曰けるは我れ爾より
き者あるに爾反て我を來る乎　十五イエス答けるは暫く許せ如此すべての義き
事は我倘盡を可あり是を於てヨハヂ彼を許せり　十六イエスバプテスマと受
て水より上をるとき天忽ち之が爲をひらけ神の靈れ鴿の如く降て其上を
來るを見る　十七又天より聲ありて此は我心を適ひが愛子ありと云り

第四章　一俙イエスは聖靈を導のを悪魔をに試らをん爲をに野を往り　二四十日四十
夜食ふ事とせず後うゑたり　三試むる者のをを來りて曰けるは爾もし神の
子あらを命じて此石とパンと爲よ　四イエス答けるは人はパンれみあて生
るものに非ず唯神れ口より出る凡れ言をに因と錄さをたり　五是を於て悪魔
かをと聖京を携へゆき殿れ頂上をに立せて曰けるは　六爾もし神れ子あら
ば己が身と下へ投よ蓋をあんぢが爲に神ろれ使等に命ぜん彼等手にて支へ
爾が足れ石をに觸ざるやうそべーと錄さをたり　七イエス彼をに曰けるは主さ
ろ爾れ神と試むべからずと亦錄せり　八悪魔さ彼と最高き山をに携へゆき
世界の諸國とろれ榮華とを見せて　九爾をー俯伏て我と拜せば此等と悪ある
んぢをに與ふべしと曰　十イエス彼をに曰けるはサタンよ退け主たる爾れ神を
拜し惟之をれを事ふべーと錄さをたり　十一終をに悪魔のをと離を天使だち來
り事ふ○　十二イエスヨハヂの囚をー事と聞てガリラヤをに往　十三ナザレと去せ
ブルンとナフタリとれ界ある海邊れカペナウンをに至て此をに居り　十四預言

者イザヤ[十五]ゼブルンれ地ナフタリれ地海お沿さる地ヨルダンれ外
れ地異邦人れがリクヤ[十六]此等れ幽暗おとる民と大ある光とみ死地と死陰
に坐する者れ上お光いでたりと云ーお應せん爲あり○[十七]斯時よりイエス始
て道と宣傳へ天國れ近けり悔改めよと曰さまへりイエスガリラヤれ海
邊と歩てペテロと云シモンろれ兄弟アンデレと二人おて海お網うてると
見さり彼等と漁者あり[十九]之に曰けるれ我お從へ我あんぢらと人と漁る者
と爲ん[二十]彼等やがて網を棄てイエスお從ふ[二十一]此より進けるお又ほかれ兄弟
二人即ちゼベダイれ子ヤコブと其兄弟ヨハチ父ゼベダイと偕お舟おて網と
補へると見てこれと召ーお[二十二]彼等も頓て舟と父とと捨てイエスに從へり○
[二十三]イエスガリラヤと徧く巡り其會堂おて敎とあー天國れ福音と宣傳うつ
民れ中ある諸れ病もろ〳〵れ疾と醫ーぬ[二十四]ろれ聲名あまねくスリヤお播
りーの乏人々をべての患へる者萬殊れ病せさ痛惱る者あるひれ鬼お憑
さるもれ癲癇瘋れ病に罹をる者と彼に携來けをこれを醫せり[二十五]ガリラ

ヤとデカポリスエルサレムユダヤれ外より多れ人々きさり從ふ

第五章

[一]イエス許多れ人と見て山お登り坐志給けをこれ弟子等も其下お來を
り[二]イエス口と啓て彼等お敎へ曰けるれ[三]心れ貧き者れ福あり天國れ即
ち其人れ有あをを也[四]哀む者れ福なり其人れ安慰を得べけをを也[五]柔和
ある者れ福あり其人れ地と嗣ぬとと得べけをを也[六]饑渴ごとく義と慕
者れ福あり其人れ飽ぬとと得べけをを也[七]矜恤ある者れ福あり其人は矜
恤と得べけれをを也[八]心れ清き者れ福あり其人れ神と見ぬとと得べけれを
也[九]和平と求る者れ福あり其人れ神れ子と稱らる可ををあり[十]義あとの
爲お責らるゝ者れ福あり天國れ即ち其人の有なれを也[十一]我さめお人あん
ぢらを詬辱せさ迫害いつゝとりて各樣の惡言をいとん其時れ罰曹福あり[十二]
喜び樂め天お於て爾曹れ報賞あるおゝけをを也それ爾曹より前れ預言者をも
如此せめさりき○[十三]爾曹れ地の鹽あり鹽もし其味と失とゝ何と以れ故れ
味お復さん後れ用あー外お棄らるゝ而已[十四]爾曹れ世れ光あり

山の上に建らるる城は隱るゝ事を得ず　十五燈を燃して斗れ下に置く者なし燭臺に置て家に在る凡の物を照さん　十六此れ如く人々れ前に爾曹れ光を耀かせ然て人々なんぢらの善行を見て天に在す爾曹れ父を崇べし○　十七我れ律法と預言者を廢るために來りと意ふ勿われ來て之を廢るに非ず成就せん爲なり　十八我誠に爾曹に告ん天地の盡ざる中に律法の一點一畫も遂つくさずして廢るゝ事なし　十九是故に人もし誡の至微き一と壞り又人の如く人に敎ゆる者を天國に於て至微き者と謂るべし　二十我なんぢらに告ん學者とパリサイ人の義よりも爾曹れ義ゝと勝ずば必ず天國に入ゝと能じ○　二一古の人に告て殺すと勿れ殺す者は審判に干らんと言るゝと有ゝ爾曹が聞し所なり　二二然ど我なんぢらに告ん凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん又その兄弟を愚者よといふ者は議に干らん又狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし　二三是れ故に爾曹もし禮物を携へて壇に往さる時ふと兄

弟に恨らるゝ事を憶起さば　二四禮物を壇れ前に留まづ往て爾の兄弟と和ぎ後きさりて爾れ禮物を獻よ　二五爾と訟ふる者と偕に途間にある時もやく和げよ恐くは訟る者なんぢを審官に付し審官は下吏に付し下吏は爾を獄に入らん　二六我まことに爾に告ん分釐までも償ざるを必ず出ること能ざる也○　二七古れ人に姦淫するなと言るゝ事を爾曹が聞し所なり　二八然ど我なんぢに告ん凡て婦を見て色情と起そ者は中心ですでに姦淫志る也　二九もし右れ眼なんぢを陷さば抉出て之を棄よ蓋五體れ一と失ふは全身と地獄に投入らるゝよりは勝をり　三十もし右れ手なんぢを罪に陷さば之を斷て棄よ蓋五體の一と失ふは全身と地獄に投入らるゝよりは勝をり○　三一また曰るゝあり凡そ人その妻と出さんと欲ば之に離緣狀を與ふべしと　三二然ど我爾曹に告ん姦淫の故あらで其妻と出す者は之に姦淫あさしむるなり又出さる婦を娶る者も姦淫を行ふなり○　三三また古の人に告て僞の誓を立るなと勿れなんぢら誓ふ所と必ず主

ゐ遂べーと言るゐと有い爾曹ご〻の聞し所あり 三四 然ど我あんぢらゐ告ん爾に
誓ゐと勿き天と指て誓ふ勿れ是神の座位あを也 三五 地と指て誓ふこと勿
てき神の足発ゐを也エルサレムと指て誓ふゐと勿ゐを大王の京城ゐれ
を也 三六 爾の首と指て誓ふ勿ろは一すぢの髪だに白き黒すること能ざれを
也 三七 爾曹たゞ是々否々といへ此より過るい悪より出るあり○ 三八 目にて目
と償ひ歯ゐて歯と償へと言るゐと有い爾曹ゞ聞ー所あり 三九 然ど我あんぢ
らゐ告ん悪ゐ敵することと勿き人あんぢの右の頬と批を亦ほうの頬とも轉
ーて之ゐ向よ 四〇 爾と訟て裏衣と取んとする者ゐれ外服とも亦とらせよ 四一
人あんぢゐ一里れ公役と強ゐを之と偕ゐ二里ゆけ 四二 爾ゐ求る者にい予へ
借んとする者と郤くる勿き○ 四三 爾れ隣と愛みて其敵と憾べーと言るゐと有
い爾曹ご〻聞ー所あり 四四 然ど我あんぢらに告ん爾曹れ敵と愛み爾曹と詛ふ
者と覩し爾曹と憎む者と善視ー虐遇迫害もの〻為ゐ祈禱せよ 四五 如此する
い天ゐ在そ爾曹れ父れ子とあらん為なり夫天れ父れ其日と善者にも悪者
ゐも照ー雨を義き者ゐも義からざる者ゐも降せ給へり 四六 爾曹ゐれとと愛
そる者と愛そるい何れ報賞かあらん税吏も然せざらん乎 四七 安否と兄弟ゐ
のみ問い人より何の過さる事のあらん税吏も然せざらん乎 四八 是故ゐ天ゐ
在す爾曹れ父の完全ごの如く爾曹も完全そべし

第六章

あんぢら人ゐ見せん為に其義と人れ前ゐ行ゐとと慎もー然す
れ天ゐ在す爾曹の父より報賞を得ヒ 二 是故に施濟と行とき人れ楽と得ん
為ゐ會堂や街衢ゐて偽善者れ如く己が前ゐ吹ーむる勿き我まゐとに
爾曹ゐ告ん彼等い既ゐろれ報賞と得さり 三 あんぢら施濟とそるとき右の手
の為ゐとと左れ手に知そる勿き 四 如此するい其施濟れ隠きんが為ゐり然
れ隠さるに鑒さまふ爾の父い明顕ゐ報さまふべーと○ 五 あんぢ祈る時ゐ偽
善者れ如そる勿き彼等は人ゐ見らきんが為ゐ會堂や街衢れ隅ふ立て祈ゐ
とと好ゐき誠ゐ爾曹ゐ告ん彼等い既ゐろれ報賞と得さり 六 なんぢ祈る時
い嚴密なる室ゐいり戸を閉て隠微さるゐ在そ爾の父ゐ祈ゐを然そ隠微さる

汝鑒さまふ爾の父は明顯ゐ報さまふべし　七爾曹祈る時ゐ異邦人れ如く重複語を言ふゐれ彼等ゐ言ゐほきを以て聽をんと意へり　八是故ゐ彼等ゐ效こと勿を爾曹の父ゐ求ざる先ゐ其需用物ゐ知さまへを也　九然を爾曹あく斷るべし天ゐ在ます我儕の父よ願くゐ爾名ゐ尊崇させ給へ　十爾國ゐ臨らせ給へ爾旨の天ゐ成ゐとく地ゐも成せ給へ　十一我儕れ日用れ糧ゐ今日も與さまへ　十二我儕ゐ罪ゐ犯を者ゐ我ゆるを如く我儕の罪ゐも免さまへ　十三我儕を試探ゐ遇せず惡より拯出し給へ國ゐ權ゐ榮ゐ爾の窮あく有さまふ所ゐりアーメン　十四爾曹もし人れ罪ゐ免さを天ゐ在ます爾曹の父も亦あんぢら免し給はん　十五然ざもし人れ罪ゐ免さずを爾曹れ父も爾曹の罪ゐ免し給はざるべし　十六あんぢら斷食そるとき僞善者れ如き憂容ゐそる勿れ彼等は斷食ゐ人ゐ見ん爲ゐ顏色ゐ損ふ我まことに爾曹ゐ告ん彼等ゐ既ゐ其報賞ゐ得たり　十七あんぢ斷食そる時は首ゐ膏ゐぬり面ゐ洗へ　十八如此するい爾の斷食ゐ人ゐ見ずして隱微さる在す爾の父ゐ現れんぢ爲ゐり然を隱微

さる在す鑒さまふ爾の父は明顯ゐ報さまふべし　十九蠹くひ銹くさり盜うぢちて窃む所の地ゐ財を蓄ふること勿れ　二十蠹くひ銹くさり盜穿て竊ざる所の天ゐ財を蓄ふべし　二一蓋あんぢられ財れ在ところ心も亦あるゐ可をた也　二二身れ光ゐ目ゐり若あんぢの目瞭らかならば全身も亦明るべし　二三若あんぢの目眩らば全身暗るべし是故ゐ爾の中の光も暗らを其暗ゐと如何ゐ大あらず乎　二四人ゐ二人の主ゐ事るゐと能ず蓋ゐを惡ゐを愛ゐ此を親ゐ彼を踈べけをた也あんぢら神と財ゐ兼事るゐと能はず　二五是故ゐ我あんぢらゐ告ん生命の爲ゐ何を食ひ何と飲まさ身體れ爲に何と衣んと憂慮ゐと勿を生命ゐ糧より優り身體ゐ衣よりも優るを者あらず乎　二六あんぢら天空の鳥を見よ稼ゐとあく穡ゐとあく倉ゐ蓄ふるゐとあし然るゐ爾曹れ天れ父ゐ之を養ひ給へり爾曹之よりも大ゐ勝るゐ者あらず乎　二七爾曹のうち誰ぞ能ゐもひ煩ひて其生命ゐ寸陰も延得んや　二八まさ何故ゐ衣のことを愚ゐづらふや野の百合花は如何ぢて長のと思へ勞す紡がざる也　二九

爾曹ヽ告んソロモンの榮華れ極れ時だあも其裝ふの花の一に及ざりき 三十
神ヽ今日野ヽ在て明日爐ヽ投入らるゝ草とも如此よろはせ給へ之況て爾
曹とや嗚呼信仰うそき者よ 三一然を何と食ひ何と飲なゝと衣んとて思ひづ
らふ勿を 三二此みゝ異邦人の求る者あり爾曹ま父ヽ凡て此等のも
必需ふとを知さまへり 三三爾曹まづ神れ國と其義とを求よ然を此等のも
れヽ皆ふんちらゝ加らるべし 三四是故ゝ明日の事と思ひづらへ一日れ苦勞ヽ一日ゝ
第七章 足て足ず 一人れ罪と定ること勿れ恐くれ爾曹も亦罪ゝ定らをん 二爾曹が人れ罪
を定る如く己が罪とも定らるべし爾曹が人を量おとく己も量らるべし 三
ふんぢ兄弟れ目ゝある物屑を視て己が目ゝある梁木と知ざるヽ何ぞや 四
己れ目ゝ梁木れあるゝ如何で兄弟ゝ對て爾が目ゝある物屑を我ゝ取せよと
曰ふとを得んや 五僞善者よ先ゝおれを目より梁木をとを然を兄弟れ目よ
り物屑を取得るやう明ゝゝ見べし 六犬ゝ聖物と與ふる勿まさ豕れ前ゝ爾
曹れ眞珠と投與る勿れ恐くれ足ゝて之と蹴ふりかへりて爾曹と噬やぶらん
求よ然を與られ尋よ然を開ゝるゝことを得ん 八蓋すべて求る者れえ尋る者れゝひ門を叩く者れ開ゝる可ををりと
ち誰ぅ其子パンと求んに石と予んや 十一まさ魚と求んゝ蛇と予んや 十一然を
爾曹惡き者ゝがら善賜と其子ゝ與ふるとを知まして天ゝ在す爾曹れ父れ求る
者ゝ善物と予ざらん乎 十二是故ゝ凡て人ゝ爲らをんと欲ゝとれ爾まさ人に
も其おそく爲よ是律法と預言者ある也○ 十三窄き門より入よ沈淪ゝ至る路れ
濶ろれ門れ夫ゝり此より入もの多ー 十四生ゝ至る路れ窄ろれ門れ小ー其路
を得もれ少ゝり○ 十五僞れ預言者と謹めよ彼等れ綿羊れ姿ゝて爾曹ゝ來をど
も內れ殘狼ゝり 十六惡ろれ果ゝ由て知べし誰れ荊棘より葡萄とをり蒺藜よ
り無花果を採ことをせん 十七凡て善樹れ善果を結び惡樹れ惡果と結べり 十八
善樹れ惡果と結をず惡樹れ善果と結ぶをと能ざる也 十九凡ろ善果と結ざる
樹れ斫をて火ゝ投入らる 二十是故ゝ其果ゝ由て之を知べー○ 二一我と召て

生よ生よと曰もれ盡く天國お入お非ず唯てをお入者い我天よ在す父れ旨
お遵ふ者れを也　三　其日已をお語て主よ主よ主れ名お託てとし〳〵主れ名お
託て鬼とおひ主れ名お託て多く異能と行ちお非ずやと云もれ多らん　三三
其時かをらお告已を嘗て爾曹と知ず悪とるす者よ我と離去と曰ん　二四　是故
お凡て我これ言と聽て行ふ者と磐れ上お家と建さる智人お譬ん　二五　雨ふり
大水いで風ふきて其家と撞やも倒るゝおとをし是磐と基礎と爲さを也　二六
凡て我これ言を聽て行とざる者と沙の上お家と建たる愚ある人お譬ん　二七
雨ふり大水いで風ふきて其家と撞を終おれ倒てその傾覆おはいあり　二八　イ
エス此等の言と語竟さまへるとき集りさる人々ろの敎を駭きおへり　二九　そ
れ學者の如あらず權威と有る者れ如く敎たまへを也

第八章　一　イエス山と下ろとき多れ人々おを從へり　二　癩病れ者きたり拜志
て曰けるい主もし旨お適ときい我と潔あし得べし　三　イエス手と伸のをお
按て我旨お適へり潔あをと曰けをに癩病たゞちよ潔をり　四　イエス彼お曰け
るい愼て人に告る勿を唯ゆきて己と祭司お見せ且モーセが命ぜし禮物と
獻て彼等お證據とせよ　五　イエスカペナウンお入しとき百夫れ長きさり
頤て曰けるい　六　主よ我僕癱瘋とやみ家お臥あて甚だ惱めり　七　イエス曰け
るい我ゆきて之と醫そべし　八　百夫れ長こさへけるい主よ我あんちと我が屋
下お入奉るい恐を多し唯一言と出し給いを我僕い愈ん　九　蓋已を人れ權威
下お服ある者あるお我下に亦兵卒ありて此お往と曰をゆき彼お來をと曰
を來る我僕お此と行と曰を則ち行が故あり　十　イエスおをと聞て奇さ從へ
る人々に曰けるい我まことお爾曹お告ん　イスラエルれ中おだお未だ斯ま
篤信お遇ざる也　十一　これ爾曹お告ん多れ人々東より西より來てアブラハム
イサクヤコブと偕お天國お坐し　十二　國れ諸子ら外れ幽暗お逐出され其處お
て哀哭切齒するおと有ん　十三　イエス百夫れ長に往あんちダ信仰れ如く成
べしと曰さまへる其時に僕い愈さり　十四　イエスペテロれ家お入それ岳母
れ熱と煩ひ臥あたるとを見て　十五　それ手に捫けをを即ち熱されり婦おきて彼

等ゐ事ふ 十九 日暮たるとき人々鬼ゐ憑をさる者と多く携來けをたイエス言
にて鬼と逐出し病ある者と悉く醫せり 十七 預言者イザヤゐ托て自ら我儕れ
善と受忍をられ病と負と曰さまひしゐ應せんが爲あり〇 十八 偖イエス多れ
人々れ己と環ると見て弟子に命じ向れ岸ゐ往んと吉給しゐ 十九 ある學者き
さりて曰けるゐ師よ何處へ往給ふとも我從んと 二十 イエス之に曰けると狐ゐ
穴あり天空れ鳥ゐ巢あり然ゑ人れ子ゐ枕そる所あー 二一 まさ弟子れ一人い
ひけるゐ主よ先ゆきて父と葬るてとと我ゐ容せ 二二 イエス曰けるゐ我ゐ從
へ死さる者に其死し者と葬らせよ〇 二三 イエス舟ゐ登けをた弟子等も之ゐ
從ふ 二四 此とき大ある颶風おこりて舟と蔽をのりある浪さちしゐ 二五 イエスゐ
寢さり 二五 弟子等てをゐ近きて醒しー曰けるゐ主よ救たまへ我儕亡んとそ
イエス彼等ゐ曰けるゐ信仰うそき者よ何ぞ懼るや遂に起て風と海とと斥
けれゑ大ゐ平忍ゐありぬ 二七 人々奇みて曰けるゐ此ゐ如何ある人ぞ風も海
も之ゐ從ひたり〇 二八 イエス向れ岸ある加大拉人れ地に至をるとき鬼ゐ憑
をさる二人れもの墓より出て彼と迎ふ猛こと甚しくして其途と人れ過
ること能とざりしほど也 二九 のをら呼叫て曰けるゐ神れ子イエスよ我儕ゐ
んぢと何れ與あらん乎いまだ時いさらざるゐ我儕と責んとて此處に來る
の 三〇 遙とゐて豕れ多ゐむを食し居けをた 三一 鬼イエスゐ求て曰けるゐ若
忍をらを逐出さんとゐらゑ豕の羣ゐ入ことと容せ 三二 彼等に往と曰けをた
鬼いで、豕の羣ゐ入しゐ悉れむを山坂より逐て海ゐいり水ゐ死さり 三三 牧
者ども邑ゐ逃走て此事と鬼ゐ憑れさりし者れ事と告けをた 三四 イエスゐ逢
んとて邑れ者衆て出きさり彼と見て此境と出んことと願へり

第九章

イエス舟ゐ登忍さりて故邑ゐ至けをた 二 癱瘋ゐて床ゐ臥さる者と
人々昇來をりイエス彼等ゐ信ずると見て癱瘋れ者ゐ曰けるこ子よ心安の
れ爾れ罪赦をさり 三 ある學者だち心の中ゐ謂けるこ此人ゐ褻瀆と言り 四
イエスうれ意と知て曰けるこ爾曹いかゐをた心ゐ惡と懷ふや 五 爾れ罪赦
さをさりと言と起て歩めと言と孰の易き 六 うを人の子地ゐて罪と赦すれ

權あることを爾曹に知せんとて遂に癱瘋れ者に起て床とり家へ歸をと
曰けれを七起て其家へ歸ぬ八人々これを見て奇と此の如き權を人へ賜
し神を崇さり○一イエス此より進往マタイと名く者人れ稅關へ坐し居け
るを見て我へ從へと曰けきを起て從へり十一イエス彼が家へ食するとき稅
吏罪ある人おほく來てイエスおよそれ弟子と偕へ坐けるを十二パリサイの
人これを見て其弟子へ曰けるは爾曹の師れ何故稅吏や罪ある人と偕へ食
するや十三イエス聞て彼等へ曰けるは康強ある者は醫者れ助と需ず唯病へ
る者こそと需よれ矜恤と欲て祭祀とを欲ずといふ此は如何ある意の往て學
ふべし夫ホセが來るは義人と招さめへ非す罪ある人と招きて悔改させんへ爲あり○
十四其時ヨハヂれ弟子イエスへ來て曰けるは我儕とパリサイの人とは屢
斷食をるへ師れ弟子の斷食せざるは何故ぞ十五イエス彼等へ曰けるは新
郎の友ろれ新郎と偕に居うちは哀むことを得んや將來新郎をひき去らる
る日きさらん其時へは斷食をべき也十六新き布と以て舊き衣と補ふ者はあ

らじ蓋つくろふ所れもの反て之と壞ろれ綻び尤も甚だしからん十七また新き
酒と舊き革囊に盛る者はあらじ若あらは其囊も亦壞らん新囊へ新酒と盛なを兩なごら存べし○十八
一イエス彼等へ此事と言る時ある宰きさり拜して曰けるは我女いま既へ死り來て彼へ手と按さま
とさ生べし十九イエス起て彼へ從ひ其弟子と偕へ往二十十二年血漏を患へる
婦うしろへ來て其衣れ裾へ捫れを二一蓋もし衣へだへも捫らを愈んと意へ
をり二一イエスふりへり婦と見て曰けるは女よ心安かを爾の信仰へ
ちと愈せり即ち婦へれ時より愈二三一イエス宰れ家へ入しへ笛ふく者および
多の人れ泣咷と見て二四之へ曰けるは退け女へ死るへ非ずさと寢さるのを
人々イエスと哂笑ふ二五彼等と出しゝ後いりて其手を執しへ女起さり二六この
聲名あまねく其地へ播りぬ二七一イエス此を去とき二人れ瞽者志さがひて呼
いひけるとダビデれ裔よ我儕と憐を給へ二八一イエス家に入しへ瞽者きさま
けきを彼等へ曰さまひけるとは事と行得ると信するや答けるは主よ

然り 二九 ―― イエス彼等れ目お手と按て爾曹れ信ずる如く爾曹お成ぺーと曰けるを 三〇 其目ひらけたり ―― イエス嚴く戒て之お曰けるい愼て人お知せる勿れ 三一 然ごも彼等いで〻遍く其地お ―― イエスれ名と播めさり○ 三二 醫者れ出ると き人々鬼お憑れさる唖唖と ―― イエスお拠來りーに 三三 鬼おひいださきて唖唖ものいへり衆人あやーを曰けるい ―― イスラエルれ中お未だ斯ゐる事は見ざりき 三四 パリサイれ人いひけるど彼鬼れ王お籍て鬼と逐出せる也○ 三五 ―― イエス遍く鄉邑と廻それ會堂お て教と ―― 天國の福音を宣傳へ民れ中ある諸れ病すべてれ疾と ―― 愈せり 三六 牧者なき羊れ如く衆人あやを又流離あなりー故お之と見て憫みさまふ 三七 其とき弟子等お曰給けるい收穫と多く工人と少し 三八 故に其稼主お工人と收穫場お送んとと願ふべし

第十章 ―― 偖イエスその十二弟子と召彼等お汚たる鬼と逐出さ又すべての病すべてれ疾と醫す權と賜へり ニ ―― それ十二使徒れ名れ左れ如き首あいペテロと名け綰ひ志シモン ―― それ兄弟アンデレ ―― セベダイれ子ヤコブ ―― それ兄弟 三 ―― ピリポ ―― バルトロマイ ―― トマス稅吏マタイ ―― アルパイの子あるヤコブ ―― タッダイと名くる ―― シモンイスカリオテれユダ ―― 是ずあいちイエスと ―― 資志、者あり○ 五 ―― イエスこれ十二と遣さんとして命じ曰けるい異邦れ途お往ある ―― 是又サマリア人れ邑お も入ある ―― 勿惟イスラエルれ家の迷へる羊お往 六 往て天國近お在と宣傳よ 八 病れ者と醫し癩病と潔し死たる者と甦らせ鬼と逐出すことをせよ爾曹價あしお受さるを亦價あしお施すべし 九 爾曹金または銀または銅を貯へ帶る勿き 十 行囊二れ裏衣履杖も亦然それ工人れ其食物と得い宜あり 十一 凡そ鄉邑お至らば其中れ好人と訪て出るまでい其處お留を 十二 人れ家お入ば平安と問 十三 其家もし平安と得べき者あらを爾曹の願ふ平安い其家お至らん若し平安と受べからざる者あらを爾曹乃願ふ平安い爾曹お歸るべし 十四 もし爾曹と接ず爾曹の言と聽ざる者あらを其家または其邑と去とき足れ塵と掃へ 十五 わき誠お爾曹お告ん審判れ日到らばソドムとゴモラれ地い此邑よりも却て易らん○ わ

を爾曹と遇すれ羊と狼け中ゐ入るが如し故ゐ蛇け如く智く鴿け如く馴良
のを　慎て人ゐ戒心せよ蓋人ゐんちらと集議所ゐ解し又そ乃會堂ゐて
鞭つべけをを也　又わが縁故ゐ因て侯伯および王け前ゐ曳るべし是のをら
と異邦人ゐ證とゐさんが爲ゐり　人ゐんちらと解さを如何ゐゐと言ん
と思ひ煩らふ勿れ其とき言べき事は爾曹ゐ賜るべし　是ゐんちら自ら言
ゐ非ず爾曹け父け靈そけ爾曹ゐ在て言ゐり　兄弟ゐ兄弟と死ゐ付し父と子と
付し子と兩親と訴へ且こをと殺さしむべし　又ゐんちら我名け爲ゐ凡れ
人ゐ憎をん然ど終まで忍ぶ者は救ばるべし　これ邑ゐて人ゐんちらと責
ゐを他け邑ゐ逃よ我まことゐ爾曹ゐ告ん爾曹イスラエルけ諸邑くを廻盡さ
ざる間ゐ人の子ゐ來るべし　弟子と師より優らず僕ゐ其主より優らざ
る也　弟子ゐ其師の如くを僕ゐ其主の如ならべ足ぬべし若し人主と呼てベル
ゼブルと云ゐ況て其家け者とや　是故ゐ彼等を懼るゝ勿れゐ掩をて露
さざる者ゐく隠て知をざる者なけをべ也　我を幽暗ゐ於て爾曹ゐ告しみ

と光明ゐ述よ耳とつけて聽しこと
すゐと能ゐざる者と懼るゝ勿を唯ゐんちら魂と身とを地獄ゐ滅し得る者
と懼れよ　二羽の雀ゐ一錢ゐて售ゐ非ずや然るゐ爾曹け父の許ゐあくを其
一羽も地ゐ隕ることゐ有じ　爾曹の頭け髪まさ皆ゐぞへらる　故ゐ懼るゝ
勿を爾曹ゐ多け雀よりも優をり　然ば凡ろ人け前ゐ我と識と言ん者を我
も亦天ゐ在す吾父け前ゐ之と識と言ん　人の前ゐ我と識ずと言ん者と我
も亦天ゐ在す吾父の前ゐ之と識ずと言べし○　地ゐ泰平と出さん爲ゐ我來
れりと意ゐをを泰平と出さんとゐ非ず刃と出さん爲ゐ來をを　夫ゐ己の來
るゐ人と其父ゐ背うせ女と其母ゐ背のせ媳と其姑ゐ背のせんが爲ゐり
人の敵ゐ其家の者ゐるべし　我よりも父母と愛む者ゐ我ゐ協ざる者ゐり
我よりも子女と愛む者ゐ我ゐ協ざる者ゐり　己の十字架と任て我ゐ從と
ざる者も我ゐ協ざる者ゐり　己の生命を得る者ゐ之と失ひ我ゆゑ生命
と失ふ者ゐ之と得べし　爾曹と接る者ゐ我と接る也ゆゑ我と接る者ゐ我と

道ー〻る者と接るあり　四預言者あるを以てなれ預言者と接る者と義人と接る者と義人れ報賞と受ること同じ　四十二凡そ我が弟子あるとも而て小き一人れ者あ冷ある氷一杯あても飲する者れ誠あ爾曹あ告ん必ず其報賞と失ことし

第十一章　一イエスそれ十二弟子よ示畢あとさり此處と教へ處んが爲あ彼等れ諸邑あ往て○二偖ヨハヽ子獄あてキリストれ行ー業と聞ろれ弟子二人と彼あ遣ーて三曰せけるれ來べき者れ爾曹が問ことあろれ事とヨハヽ子あ手四イエス彼等あ答て曰けるれ爾曹が聞ことあろれ事と見ことあろれ事とを往て告よ五瞽者れみ眸者れあゆと癩病人れ潔まり聾者れきゝ死さる者れ復活さと貧者れ福音と聞せらる六凡ろ我ためあ躓のざる者れ福あ○七彼等れ歸とる後イエスヨハヽ子れ事と人々あ曰けるれ爾曹何と見んとて野あ出ーや風に動さるよ葦ある乎八然ば爾曹何と見んとて出ーや美服を着さる人あるあ王宮に在ー然ど何と見んとて出ーや預言者あるあ然ど卓越たる者あり　九矣あんぢに先ちて道と備る我が使者を我あんぢれ前あ遣んと錄さるれ者ー是あり　十誠あ爾曹あ告ん婦れ生さる者の中いまだバプテスマのヨハヽより大ある者れ起らざりき然ど天國れ最小き者も彼よりれ大ある也　十一バプテスマのヨハヽれ時より今あ至るまで人々勵て天國を取んとす勵さる者れ之と取り　十二ろと凡れ預言者と律法れ預言者あたるれヨハヽれ時まてるをば也　十三若あんぢら我言と承ること好まば來べきエリヤれ是あり　十四耳ありて聽ゆる者と聽べし○　十五我あれ世と何あ譬んや盞子街あ坐ー其侶と呼て　十六曰ふえを笛ふけごも爾曹おごらず哀と曰ふ乎來て食ふよと飲ことと爲ざをた鬼あ憑をさる者ありと人々言り　十八人れ子きさりて食ふみとをー飲みとと爲をた又食と嗜と酒と好む人稅吏罪ある者れ友ありといふ然ごも智慧れ智慧れ子あ義と爲らるふ也○　二十厥時イエス多の奇能と行たまひさる諸邑れ悔改めざるあ由て責いひける

二 あゝ禍ある哉コラヂンよ噫禍ある哉ベッサイダよ爾曹れ中ゐ行志異
能を若ツロとシドンゐ行ーあらば彼等ゐ早く麻をき灰と蒙りて悔改し
あるべー 三 且を爾曹ゐ告ん審判の日ゐおいツロとシドンゐ刑罰ゐ爾曹より
も却て易らん 三 既ゐ天ゐまで擧らるーカペナウンよ又陰府ゐ落さるべ
き蓋あんぢらゐ行ーあらば今日まても尚保存ー 四 異能を若ソドムゐ行
ふらん 四 我あんぢらゐ告ん審判れ日ゐソドムれ地ゐ爾曹よりも却て易ゐ
るべー〇 五 其ときイエス答て曰けるゐ天地れ主なる父よ此事と智者達者
ゐ隠ーて赤子ゐ顯ーたまふと謝す 六 父よ然そ此れ如は聖旨ゐ適るあり
六 父ハ我に萬物と予させへり父れ外ゐ子と識もれ無また子ゐよび子れ顯
す所れ者れ外ゐ父と識者あー〇 八 凡て勞さる者また重と負る者ゐ我ゐ來
を我ゐんぢらと息ません 九 我と心柔和ゐーて謙遜者あをべ我軛と負て我
ゐ學あんぢら心ゐ平安と獲べー 三十 蓋且が軛ゐ易且が荷ゐ輕けをべ也

第十二章 當時イエス安息日ゐ麥れ畑と過しが其弟子さち飢て穗と摘とじめ

ゐりパリサイれ人ことを見てイエスゐ曰けるゐ爾の弟子ゐ安息日ゐ爲
まじき事と行り 三 之ゐ答けるゐダビデおよび從ゐ在ー者の饑しとき行ー
事と未だ讀ざる乎 四 即ち神れ殿ゐ入て祭司れ他ゐ己および從ゐをる者も
食ふまじき供のパンと食へり 五 また安息日ゐ祭司ゐ殿れ内ゐて安息日と
犯せども罪なき事と律法ゐ於て讀ざる乎 六 われ爾曹ゐ告ん殿より大ゐる
もれ茲ゐ在ー 七 わき矜恤と欲ずとゐ如何あることとう之と知ゐ罪
ゐき者と罪せざるべー 八 そ且人れ子ゐ安息日れ主たるあり〇 九 此と去て
彼等れ會堂ゐ入ーゐ 十 一手あへさる人ありけをゐ彼等イエスと訴へんと
て之ゐ問けるゐ安息日ゐゐ醫そことと行べき乎 十一 彼等ゐ曰けるゐ爾曹の
中ゐ一れ羊と有る者あらんゐ若それ羊安息日ゐ坑ゐ陷ふを之と擧上ざる
乎 十二 人ゐ羊より優ることき幾何ぞや然た安息日ゐ善と行ゐ宜 十三 遂ゐろれ人
ゐ爾が手と伸よと曰けるに伸せり即ち他れ手れ如く愈 十四 パリサイれ人い
でゝイエスと殺さんと謀とり 十五 イエス之と知て此と去ーゐ多れ人々ゐを

お從ふ凡て疾病ある者どもをお愈し　我と人お露をみと勿をと戒さりをみ
を預言者イザヤれ云ー言お　視よ我が選ー我僕をみそち我心お適さる我
が愛む者わを之お我靈を賦へん彼異邦人お道を示をべし　彼れ競てどみ
く喧ことあし人街お於て其聲を聞ことあし　異道をーて勝どげーむるを
で之傷る葦を折みとあく煙をる麻を熄みとあし　異邦人も亦それ名お願
べーと有お應せん爲あり○　愛お鬼お逐たる替れ痞ある者をイエスれ所
お携來りけるを此替れ痞を惱して言ひ見るやうお爲り　衆人をあ奇きて
曰けるわ此わダビデの裔おわ非ざる乎　パリサイれ人きよて曰けるわ此
人を鬼れ王ベルゼブルを役ふお非ざをな鬼を逐出おとあーイエスろれ
意を知て彼等お曰けるわ凡て相爭ふ國わ亡び凡て相爭ふ邑や家わ立べう
らず　カメン若カタンを逐出さを自ら相爭ふあり然を其國いうで立んや
若已れベルゼブルお由て惡鬼を逐出さを爾曹の子弟わ誰お由て之を逐
出すや夫のをられ爾曹乃裁判人をあるべー　若已を神れ靈お由て鬼を逐
出あるをは神れ國わもとや爾曹お至れるせさ勇士をまづ縛らざるを如
何で其家お入ろれ家具を奪ふをとを得んや縛て後お其家を奪ふべし　我
を偕あらざる者は我お背き我を偕お斂さる者を散をあり　是故お爾曹お
告ん人々れ凡て犯を所れ罪を神を瀆ことを敷るべらず　言を以て人れ子お背く者を敷るべし然を言をも聖靈を瀆あ
靈お背く者わ今世お於ても亦來世お於ても敷るべらず　或は樹をも善
とし其果をも善とせよ或は樹をも惡とし其果をも惡とせよ夫樹は其果お
由て知るをも也　あゝ蝮れ裔よ爾曹惡あして何で善を言あをを得んや夫心
お充るより口お言るを者なれをも也　善人は心れ善庫より善もれを出し惡
人はろれ惡庫より惡もれを出せり　凡を爾曹お告ん凡て人れいふ所れ虛
言を審判れ日お之を訴へざるを得じ　ろを爾それ曰をおろれ言お由て義
とせらを又其いふ言お由て罪ありとせらるゝ也○　此時ある學者とパリサ
イの人答て曰けるを師よ休徵をあして我儕お見せんみをと爾お請ふ答て

彼等ゐ曰けるい奸惡ある世は休徵を求さをど預言者ヨナが休徵と與らをに夫ヨナが三日三夜魚れ腹れ中ゐ在し如く人れ子も三日三夜地の中ゐ在べし ニネベの人審判の日ゐ共ゐ起て今の世の罪と定めん彼等とヨナの誨ゐ由て悔改さり夫ヨナより大なる者こゝゐ在 南の女王さときの日ゐ共ゐ起て今の世の罪と定めん彼と地の極よりソロモンの智慧と聽んとて來をり夫ソロモンより大あるもの此ゐあり 惡鬼人より出て旱さる地と巡り安息と求をども得ずして曰けるい我が出し家ゐ歸らん既ゐ來しゐ空虛ゐして掃淨り飾をると見 遂ゐ往て己よりも惡き七の惡鬼と攜へ偕ゐ入て此ゐ居ばその人の後の患狀と前よりも更ゐ惡うるべし此あしき世もまさ此の如ならん イエス人々ゐ語とる時ろの母と兄弟ら をゐ言んとて外ゐ立けをば 或人イエスゐ曰けるこ爾の母と兄弟あんぢゐ言んとして外ゐ立り イエス告し者ゐ答て曰けるこ我母と誰ぞ我兄弟は誰ぞや 手と伸ろの弟子と指て曰けるい是ゐが母ゐが兄弟なり 蓋そべて我が天ゐ在せ父の旨と行ふ者は是ゐが兄弟ゐが姉妹わが母ゐ也

第十三章

一 その日イエス出て海邊ゐ坐せり 二 多れ人々彼ゐ集り來けをば イエス舟ゐ登て坐し凡れ人々ゐ岸ゐ立り 三 イエス譬と以て多端れ言を人々ゐ語ゐ種まく者播ゐ出り 四 播るとき路れ旁ゐ墮り種あり空中の鳥きたりて啄ゑ盡せり 五 また土うすき磽地ゐ墮り種あり直ゐ萌出をど日れ出り 六 熱きを得ざるが故ゐ根あきが故ゐ槁さり 七 また棘れ中ゐ墮り種あり棘ゐだちて之と蔽げり 八 また沃壤ゐ墮り種あり實と結べるあり或ゑ百倍あるひわ六十倍あるひわ三十倍せり 九 耳あるひわ聽ゆる者ゑ聽べし 十 弟子等きたりて彼ゐ曰けるこ何故ゐ譬ゐて彼等ゐ語り給ふや 十一 答て曰けるこ爾曹ゐゑ天國れ奥義と知ゐとを子さまへゞ彼等ゐゑ子へ給ざれ也 十二 凡有る者ゑ子らをてゐ餘あり無有者ゑろの有る物とも奪る、也 十三 彼等ゑ視ても見ず聽ても聞ず悟ざるが故ゐ我譬と以て彼等ゐ語るなり 十四 蓋そべて我が天ゐ在せ父の旨と行ふ者は是ゐが兄弟ゐが姉妹わが母ゐ也

ヤれ預言ゐ爾と聽ごも悟らず覩ごも見ず 十五 蓋ゐの民目ゐて見耳ゐてきゝよ
心ゐて悟り改めて我ゐ醫さんとゐと恐ろれ心と頑ー耳と蔽ひ目と閉たり
と云ーゐ應ゑり 十六 然ご爾曹の目と見爾曹の耳と聞が故ゐ福あり 十七 ま
ゐ爾曹ゐ告ん多の預言者と義人と爾曹が見とみろと見んとまたりーが見
みとと得ず爾曹が聞とみろと聞んとまさりーが聞みとと得ざりき 十八 故ゐ
爾曹播種の譬と聽て悟らざるが惡鬼きさりて其心ゐ播たる種と奪ふ是路の旁ゐ播さる種なり 二十 磽地ゐ播たる種ゐ是敎と聽て
遂ゐ喜び受きごも 二一 己ゐ根をけざ暫時のみ敎の爲ゐ患難あるひと迫ら
る、事の起る時ゐ忽ち道ゐ礙く者なり 二二 まゞ棘の中ゐ播れさる種ゐ是敎と聽
ごも此世の思慮と貨財の惑ひ敎と蔽とて實らざる者あり 二三 沃壤ゐ播れさ
る種ゐ是敎と聽て悟り實と結ぶと或ひ百倍あるひ六十倍あるひ三十
倍する者あり 二四 まさ譬と彼等ゐ示ーて曰けるゐ天國ゐ人畑ゐ美種と播
ゐ似さり 二五 人々の寢さる間ゐ其敵きさり麥の中ゐ稗子と播て去り 二六 苗と

ゐ出て實さるとき稗子も現れさり 二七 主人の僕きさりて曰けるゐ主よ畑
ゐ美種と播ざりしの如何して稗子ある乎 二八 僕ゐ曰けるゐ敵人ゐとゝ行
ゐ僕主人ゐ曰けるゐ然らゞ我儕ゆきて之と拔あつむるゐ宜ゐ 二九 否ゐらず
くゐ爾曹稗子と拔あつめんとて麥とも共ゐ拔べし 三十 收穫まで二ゐがら長ゐ
ゐ我ありいきの時まづ稗子と拔あつめて焚ん爲ゐ之と束ね麥とゞ我が倉
ゐ收よと言ん ○ 三一 まさ譬と彼等ゐ示ーて曰けるゐ天國ゐ芥種の如し人ゐ
と取て畑ゐ播ゞ 三二 萬の種より小けきとも長てゐ他の草より大ゐしして天
空の鳥きさり其枝ゐ宿ばせの樹とゐる也 ○ 三三 また譬と彼等ゐ語けるゐ天
國ゐ麪酵の如し婦ゐとをとり三斗の粉の中ゐ藏せゞ悉く脹發すゐり 三四 イ
エス譬をもて凡て此等の事と衆人ゐ語さまへり譬ゐあらざをゞ語り給ゐ
ず 三五 ゐを預言者ゐ託て我譬と設て口と啓き世の始より隱さる事と言出さ
んと云れさるゐ應せん爲ゐり ○ 三六 遂にイエス衆人と歸して室ゐ入り其弟子
きさりて曰けるゐ畑の稗子の譬と我儕ゐ解さまへ之ゐ答て曰けるゐ美

種と播者の人の子あり　三八畑の世界あり美種の是天國の諸子あり稗子
の惡魔の子類なり　三九之をなく敵の惡魔あり收穫の世の末あり刈者の天の使
等あり　四十稗子の歛て火の焚るが如く此世の末の於ても此の如くふるべし　四一
人の子ろの使者だちを遣して其國の中より凡て躓礙となる者と惡を
す人を歛て　四二之を爐の火の投入べし其處の哀哭切齒するあらん　此
とき義人の其父の國の如く輝かん耳あるもの聽ゆる者の聽べし○
四四また天國の畑の藏たる寶の如し人みいださゞる之を秘し喜び歸り其所有
と盡く賣てろの畑を買あり○四五また天國の好珠を求んとする商人の如
し　四六一の価たき眞珠を見出さゞるろの所有と盡く賣て之を買あり○四七また
た天國の海の投て各樣の魚を聚る網の如し　四八既に滿れば岸に曳あげ坐て
ろの嘉ものを器に收め壞惡ものを棄るあり　四九世の末の於ても此の如あらん
天の使等いでゝ義者の中より惡者を取出け　五十之を爐の火の投入べし其處
にて哀哭切齒するあらん○　五一イエス彼等に曰けるい此事をさとり悟しや彼

に曰けるい然り　五二イエス彼等に曰げるい然ば天國ふついて敎られさる
學者い新き物と舊き物とを其庫より出す家の主の如し○　五三イエスあの
譬を宣畢て此を去め　五四ろれ故土あいさり會堂あて敎志に人々奇み曰けるい
此人れ智惠と異ある能は何處より來るや　五五まを木匠れ子あらずや其母と
マリアろれ兄弟ハヤコブ、ヨセ、シモン、ユダあ非ずや　五六ろれ姉等いとあ我儕と偕
あ在あ非ずや然るあ此人の凡て此等の事い何處より來しや　五七遂あ厭て之と
躓イエス彼等あ曰けるい預言者い其故土ろの家の外あ於て尊まざるあ
ざあし　五八彼等が信ずるあとあきあ由て多の異ある能と此あ行給いざりき
第十四章　其ころ分封れ君ヘロデイエスれ聲名を聞て　二その僕あ曰けるい
是ハプテスマのヨハヂあり彼死より甦へロデやれ事あ由てヨハヂと捕へ縛て獄あ入
れ　四ヘロデろれ兄弟ピリポの妻ヘロデヤを娶るい宜しからずと云あ因　五彼ヨハヂ
と殺さんと欲ど民あをそるより彼等を懼さりしが　六ヘロデ

誕生ける日ヽに就へる時ヽヽロデヤの女ろの座上ゟて舞ヒをゐしヽヽロデを悦ばせ
けるが六何ある物ゟても求ゟ任て予んとヽヽロデ之ゟ誓さり八女それ母ゟ
勸めりしゟ因バプテスマれヨハヽの首と盆ゟ載て此ゟ賜れと曰ふ王愛け
れども既ゟ誓さると席ゟ列るる者の爲ゟ予るみことを命じ十即ち人ゟ遣ヽ
獄ゟ於てヨハヽの首と斬せ十一ろば首と盆ゟ載て女ゟ予けれバ女ハ之ゟろ
の母ゟ捧さり十二ヨハヽれ弟子等きたりて屍と取ゐきと葬り往てイエスゟ
告ぐ十三イエスこをと聞て人とさけ舟ゟ登て其處と去さびヽき處ゟ往給ひしが衆
人きゝて歩行ゐて彼ゟ從へり〇十四イエス出て多の人と見て之と憫ミ其病
る者と醫せり十五日くるゑ時るれ弟子きゝりて曰けるハ此ハ寂寞ところゟ
ゐて時もはや遲し諸邑ゟ往て自ら食と求させん爲ゟ人々と去しめよ十六イ
エス彼等ゟ曰けるハ人々往ずとも可るんぢら之ゟ食と予よ答けるハ我
曾此ゟさヾ五のパンと二の魚あるのみ十七イエス曰けるハ其と此ゟ携來ヨ十八
遂ゟ衆人ゟ命じて坐ヽめ五のパンと二れ魚とゟり天と仰て謝ヽパンと擘て弟

子ゟゐさふ弟子ゐきと衆人ゟ予ぬ二十みゐ食て飽その餘さる屑と拾ヽゟ十
二の籃ゟ盈さり二十一食ヽ者ハ婦と幼童の外おほよろ五千人ゐヨき〇二十二頓て
イエス衆人と歸さんとヽて其弟子と强て舟ゟ登れせ向の岸へ先ゟ渡しむ二十三
斯て衆人と歸けをバ斯禱せんとて密ゟ山ゟ上り日くるて獨ろこゟ在せ
し二十四舟ハ海中ゟ在て逆風の爲ゟ浪ゟ漂ばさる二十五夜の四時おろイエス海の
上と歩て之ゟ至ヽゟ二十六弟子その海の上と歩ると見て驚き此ハ變化の物な
らんと曰て懼を叫さり二十七イエス頓て彼等ゟ曰けるハ心安かき我ふり懼る
る勿を二十八ペタロ答て曰けるハ主ゟ若ヽ爾ならバ我ゟ命じ水と履て爾の所ゟ
至ヽめよ二十九來と曰給ひけをバペテロ舟より下てイエスの所ゟ至んとて浪
れ上と歩されど三十風の烈きと見て懼を沈のふりけをバ主ゟ我と救さまへ
と曰ふ三十一イエス頓て手と伸てをと執て曰けるハ信仰うそき者ゟ何ぞ疑ふや
三十二偕ゟ舟ゟ登けをバ風おつまりぬ三十三舟ゟ居し者ハのよりて彼と拜ヽ曰け
るハ誠ゟ爾ハ神の子なり〇三十四遂ゟ渡てゲヽチサレの地ゟ到ヽるバ三十五其處の

人々イエスを識て遍く四方より人を遣し凡て病の者を携へ來らしむ　三只ゐの衣だに摺らんことをイエスに願へり摺し者は即ち之を愈さるを
第十五章　時にエルサレムの學者とパリサイの人イエスの來て曰けるは　二爾の弟子古の人の遺傳を犯すは何故ぞ蓋食する時ゐ其手を洗ざるを也
答て彼等ゐ曰けるは爾曹は亦爾曹の遺傳ゐよりて神の誡を犯すは　三何故ぞ　四爾曹は神いましめて爾の父母を敬へ又父母を罵る者は殺さるべ
しと宣給へり　五然るゐ爾曹は曰て凡て人父母ゐ對ゐんちを發ふ可きものを　六禮物なりと云ば　七その父母を敬ふすとも可とせず斯て爾曹は遺傳ゐよりて
神の誡を廢くせり　八僞善者よイザヤは能ゐんちらゐ就て預言し　九此民は口ゐ以て我ゐ近き脣ゐて我を敬へども其心は我ゐ遠ざのり　十人の誡を教となしと
徒らゐ我を拜そと云り　十一イエス人々を召て彼等ゐ曰けるは聽て悟を　十二口ゐ入るものは人を汚さず口より出るもの是人を汚すなり　十三弟子きたり
てイエスゐ曰けるは　パリサイの人みの言を聞て厭楽るを爾知ゐ　十四答て曰

けるは我が天の父の植ざる者はそゐ拔るべし　十四彼等を棄おけ瞽者の瞽者ゐ相する
瞽者ゐり若めしそのもの瞽者の相せたゐ二人とも溝ゐ落べし　十五ペテロイエ
スゐ答て曰けるは此譬を我儕ゐ解さまへ　十六イエス曰けるは爾曹も未さ
悟さる乎　十七凡て口ゐ入るものは腹を通て厠ゐ落ると未だ知ざるゐ　十八口より
出るものは心より出れ人を汚すものの也　十九蓋心より出る所の惡念凶殺姦
淫偷合盜竊妄證誘讀　二十此等は人を汚すものゐり然ども手を洗ずして食ふは
人を汚さず　二十一イエス此を去てツロとシドンの地ゐ往けるゐ　二十二其地ゐ住る
カナンの婦んてゝ呼はり曰けるは主よダビデの裔よ我を憫み給へ我むす
め鬼ゐ憑をて甚く苦めり　二十三イエス一言も彼ゐ答さりしゐ其弟子きたり
請て曰けるゐ我儕の後より呼ゐるが故ゐ彼を去せ給へ　二十四答て曰けるはイス
ラエルの家の迷へる羊の外ゐ我ゐ遣されず　二十五婦きさり拜して曰けるは主
よ我を助よまへ　二十六答けるゐ兒女のパンを取て犬ゐ投與ふるは宜のらず　二十七婦
いひけるゐ主よ然さまざ犬もその膳より落る屑を食ゐり　二十八遂ゐイエ

ス答て曰けるは婦よ爾の信仰い大あり願の如く爾お成べし此時より其女ゐえ
たり○二九イエス此と去がリラヤの海邊ゐゆき山お登りて坐せり三〇多の人
々跛者瞽者瘠者瘂者および各樣の疾病ある者と伴ひきさりイエスの足
下お置けきを即ち之と醫しぬ三一是お於て瘖者はもれいひ殘疾ていえ跛者
はあゆみ瞽者は見さると人々見て奇みイスラエルの神と崇たり○三二イ
エスろれ弟子と呼て曰けるい我あの衆人と憫む彼等ときと偕お居ゐと三
日あーて食ふもれあーー飢させて去しむるみとと欲ず恐くい途間あて惱ん
三三ろの弟子ゐきお曰けるい野あて此おおくの人お飽そるほどのパンと何
處より得んや三四イエス彼等お曰けるとパン幾何あるや答けるい七と些少の
魚あり三五イエス人々お命じて地お坐しめ三六七のパンと魚と取て謝し之き
擘て其弟子お予しゐを弟子こきと人々に予ふ三七食てそ飽さり餘れ屑と
拾しお七れ籃お盈り三八之を食るもけ婦と孩子の外お四千人ありき三九イエ
ス人々と去しめ舟に登てマグダラれ境お至り

第十六章　パリサイとサドカイれ人きさりてイエスと試んとて天れ休徴と我
儕お見せよと曰けるほ二彼等お答けると爾曹暮ゐい夕紅お由て晴あらんと
言ニ晨ゐい朝紅はさ曇お由て今日い雨あらんといふ偽善者よ空の景色と
別こととお知て時れ休徴を別ち能はざる乎四姦惡ある世い休徴と求るとも
預言者ヨナの休徴のほか休徴と予らきと遂お彼等を離きて去ぬ○五それ
弟子むうふれ岸お到しおパンを携ふるお忘さり六イエス彼等お曰けるい戒心ーてパリサイとサドカイの人の麪酵と愼めよ七弟子さ夕ひお論
とて曰けるい是パンと携へざりし故あらん八イエスてをと知て曰けるい信仰
うすき者よ何ぞ互お「パンと携へざりしと論ずる乎九未だ悟らざるの五千
人お五れパンと予しとき幾筐ひろひし乎十また四千人お七れパンと予しとき
幾筐ひろひしや爾曹ゐきと記ざるの十一パリサイとサドカイれ人の麪酵と愼
めとパンお非ざると何ぞ悟らざる十二是お於て弟子ろの麪酵の敎と謹めと言るゐると悟をり○十三イ

エスカイザリヤピリピの方に到しとき其弟子に問て曰けるは人々人
は子と誰と言や　十四彼等いひけるは或人はバプテスマのヨハネ或はエリヤ或
はエレミヤまた預言者は一人なりと言り　十五彼等に曰けるは爾曹は我を誰と
言ふる乎　十六シモンペテロ答けるは爾はキリスト活神は子なりイエス
答て彼に曰けるは福なり爾シモンヨナは子なり蓋血肉なんぢに示せるに非
ず天に在す吾父なり　十八我また爾に告ん爾はペテロなり我が教會をこの磐
の上に建べし陰府は門も之に勝べからず　十九又国を天國の鑰と爾に予へん
爾が地に於て繋ことは天に於ても繋なんぢが地に於て釋ことは天に於て
も釋べし　二十遂に其弟子を戒めけるは我をキリストと人に告るなと勿れ○
二一此時よりイエスその弟子に己のエルサレムに往て長老祭司の長學者等よ
り多の苦をを受て殺され第三日に甦るべきすべき事を示し始む　二二ペテ
ロイエスを援とめて主よ宜らず此事なんぢに來るまじと曰けるを　二三イエ
ス反顧てペテロに曰けるはひけるはサタンよ我後に退け爾は我に躓く者なり
汝は神の事を思はず人の事を思へり　二四此時イエスその弟子に曰けるは
人もし我に從ん事を欲ふ者は己を棄己が生命を保全せんとする者は之を失ひ
得べけれども也　二六もし人全世界を得とも其生命を失はゞ何の益あらん乎ま
た人あは以て其生命に易んや　二七それ人の子は父の榮光を以てその使等
と偕に來らん其時には各々その行に由て報ゆべし　二八誠に爾曹に告ん此に
立ものゝ中に死ざる者あるべし

第十七章

六日の後イエスペテロヤコブその兄弟ヨハネを伴ひ人を避て高
山に登り給しが　二彼等の前にて其容貌變り其衣は白く光れり　三モーセとエリヤ現れてイエスと偕に語ぬ　四ペテロ答てイエスに
曰けるは主よ我儕此に居は善もし尊旨に適ば我儕に三の廬を建せ
ん一は主のため一はモーセのため一はエリヤの爲にせん　五如此いへ
る時に一の光耀ある雲より出て言けるは此は我愛子にして我旨に適ふ者
なり汝ら之に聽べし　六弟子等これを聞て甚く懼れ俯伏たり　七イエス
近よりて之に手を按て曰けるは起よ懼るなかれ　八彼等目を擧しに唯イエス

が愛子あり爾曹みこと聞べし　六弟子みこと聞て大におそを倒を伏さり　七
イエス來りて彼等お手と按お況よ懼るゝ勿をと曰けをべ　八其目と舉しお
惟イエスのほの一人とも見ざりき況〇山と下る時おイエス彼等お命じて
人れ子れ死より甦るまで此爾曹れ見し事と人お告べからずと言り　九それ
弟子とふて曰けるは然ばイエリヤ先お來るべし學者れ云るは何ぞや　十一
エス答て曰けるは實おエリヤは來て萬事と改むべし　十二然ど我なんぢらお
告んエリヤと既お來しお人こをと知ずたゞ意れ任お彼と待へり此れ如く
人れ子もまさ彼等より苦難と受べし　十三是お於て弟子ばプテスマれヨハヂ
と指て曰さをへるをと悟れり〇　十四彼等おほくれ人れ居とおろお來しお或人
イエスれ所にきさり跪き　十五曰けるは主よ我子と憫みさまへ癲癇おて屢々
火お倒を水お倒を甚だ苦めり　十六之と爾れ弟子お携往されど醫すことを得
ざりき　十七イエス答て曰けるは噫信あき曲をる世なる哉をと何時まで爾曹
と偕お居んや我いつまで爾曹と忍んや彼と我もとに携來を　十八遂おイエス

鬼と叱め給へばイ鬼いでゝ其子これ時より癒さり　十九其とき弟子ひそかおイ
エスお來り曰けるは我儕おをと逐出そこと能ざりしは何故ぞ　二十イエス
彼等お曰けるは爾曹信あきが故あり我まことお爾曹お告んもし芥種れ如
き信あらバ此山お此處より彼處お移をと命とも必ず移らん又あんぢらお
能ざることと無るべし　二一然ど此類い所禱と斷食お非ざをを出るあとあし〇
二二ガリラヤと周流をれイエス彼等お曰けるは人れ子人れ手お解さを　二三
さをて第三日お甦るべし弟子こをと聞て甚だ哀めり〇　二四彼等カペナウン
お來をるとき納金と集る者ども來てペテロお曰けるは爾曹れ師は納金と
出さゞる乎　二五然すと曰てペテロ家お入しときイエスまづ彼お曰けるはシ
モン爾は如何おもふや世界れ王さちは稅および貢と誰より徴か己れ子よ
りの他れ者よりか　二六ペテロ彼に曰けるい他れ人より徴なりイエス彼お曰
けるい然バ子い與ることなあし　二七然ど彼等と礙のせざる爲お爾海に往て釣
と垂よ初おつる魚と取てろれ口と啓のバ金一と得べし其と取て我と爾れ

爲ゐ彼等ゐ納よ

第十八章 其ときに弟子イエスよ來て曰けるゐ天國よ於て大ゐる者ゐ誰ぞや
二 イエス嬰兒と召ゐれらの中よ立て 三 曰けるゐ我まことよ爾曹よ告んも
志改まりて嬰兒の若くならずバ天國よ入ことと得じ 四 然バ凡ろゐの嬰兒
の若く自ら謙る者ゐこれ天國よ於て大なる者なり 五 又ゐが名の爲よ此の
如き一人の嬰兒と接る者ゐ我と接るあり 六 然ど我と信する此小子の一人
と礙のする者ゐ磨石とろの頸よ懸られて海の深よ沈られん方ゐほ益ある
べし 七 此世ゐ礙ある哉ろゐ礙のする事とそバあり礙く事ゐ必ず來らん然
ど礙と來らす者ゐ禍ある哉 八 若しゐ爾乃手ゐんちの足ゐれきと礙かさバ斷
て之と棄よ兩手兩足ありて墜ざる火よ投入らるんよりゐ跛ゐよ殘缺よて
生よ入と善ふり 九 もし爾の眼ゐはりて之と棄よ兩眼ゐありて地獄の火よ投入らるんよりゐ一眼よて生よ入ほ善あり ○ 十 爾曹この
小子の一人とも慢とて輕視ゐのを我ゐんちらよ告ん彼等が天の使者ほ天

ゐありて天よ在す吾父の面と常よ覩バあり 十一 そを人の子ほ亡ゐる者と救
ほんゐ爲よ來ふり 十二 爾曹いのよ意ふや人もし百匹の羊ゐらんよ其一匹まよ
とと九十九と山ゐ置ゆきて迷志一と尋ざる乎 十三 若たつねて之よ遇ほ我ま
てとよ爾曹ゐ告ん迷ざる九十九の者よりも倘ろの一と喜ほん 十四 是の如く
ゐの小子の一人の亡るほ天よ在す爾曹が父乃尊旨ゐ非ず 十五 もし兄弟ゐん
ぢよ罪と犯ほろの獨ゐる時ゐ往て諫よもし爾の言と聽ほろれ兄弟と獲べ
志 十六 もし聽ずバ兩三人の口よ由て證とゐし凡の言と定んゐ爲ゐ一人二人
と伴ひ往もし彼等ゐも聽ずほ之と敵會ゐ告よもし敵會ゐ聽ずほ之と異邦人
のつ稅吏れおとき者とすべし 十八 我まことに爾曹に告ん凡ろ爾曹が地に於
て繫ゐとこ天に於もつゐざ爾曹が地に於て釋みとと天ゐ於も釋べし 十九 我
また爾曹に告んもし爾曹のうち二人れもの地ゐ於て心と合せ何事にても
求ゑ天ゐ在す吾父ゐ彼等れ爲ゐ之と成さまふべし 二十 蓋已が名れ爲ゐ二三
人れ集ゐる處にと我も其中ゐ在バあり ○ 二一 厥時ペテロイエスに來りて曰

けるは主よ幾次まで我兄弟ゎ我に罪ゎ犯すと赦べきぅ七次まで乎 二二 イエ
ス彼ゎ曰けるゎ爾ゎ七次と七十倍せよ 二三 是故ゎ天國ゎ王そ
れ臣と會計を調んとそるが如し 二四 調べ始しとき千萬金ゎ負債ゐたる者と
王ゎ曳來りまゎ 二五 償ひ方ゎりけをゞ之ゎ命じて其身ゎ妻孥とあらゆ
る所有とそゐ償へと曰り 二六 そこ臣ひをふーて曰けるゎ請ゐをと寛ー
給はゞ皆償ふべし 二七 是ゎ於てそれ臣ゎ主憐みて之と釋ろれ負債を免ゐた
り 二八 其臣いでゝ己より銀一百ゎ負債ーさる友ゎ遇けをゞ之と執へ喉とと
り負債を返せと曰 二九 ろれ友足下ゎ俯伏て求いひけるゎ我と寛ー給とゝ皆
償ふべし 三〇 然るに之と肯とずーて往ろれ負債と償ふまて彼を獄ゎ入ぬ
三一 外れ友ろれ爲る事と見て甚だ哀を往て此事と皆ろれ主ゎ告ーのゞ 三二 主
ゐをと召て曰けるゎ惡き臣よ爾ゐ我に求ーゎ因て我それ負債と悉く免ゐた
さり 三三 我ゐんぢと憐をー如く爾も亦友と憐むべきゎ非ずや 三四 ろれ主ゎの
りて負債とそゐ償ふまで彼と獄吏ゎ付せり 三五 若ゎの〳〵其心より兄弟と

赦ずゞ我が天れ父も亦ゐんぢらゎ此れ如く行給ふべー

第十九章

イエス此等れ事と言畢りしとき加利拉ヤと去てヨルダンの外ユ
ダヤの境ゎ至りけるゎ 二 多の人々從ひしゐ此處ゎて彼等と醫し給へり
三 パリサイの人きたりてイエスと試をゝ曰けるゎ人ゎの故ゎ係らず其妻
と出すゎ宜ゐ 四 答て彼等ゎ曰けるゎ元始ゎ人と造り給ひし者ゎ之と男女
ゎ造りゝ 五 是故ゎ人父母と離れて其妻ゎ合二人れもれ一體と爲ゐりと云
るゝ未だ讀ざるゎ 六 然をゎや二ゎ非ず一體ゐり神れ合せ給へる者ゎ人
こをゝと離すべゐらず 七 イエスゎ曰けるゎモーセゎ爾の心の不情ゎ因て
妻と出すことゝ容したるも也さをゞ元始ゎ如此ゐらざりき 八 我ゐんぢらゎ
告んもし姦淫の故ゐらて其妻と出し他の婦と娶る者ゎ姦淫と行ふゐり又い
ださをたる婦と娶る者も姦淫と行ふゐり 九 弟子等イエスと曰けるゎ若し
人妻ゐ於て此れ如くゞ娶ざるゎ若ず 十 彼等ゎ曰けるゎ此言ゎ人をゎ受納

るあと能いず唯賦ちをたる者れを之と爲うべし十二ろを毋れ腹より生來た
る寺人あり又人よせらをたる寺人あり又天國れ爲よ自らあきる寺人あり
之と受納るあとと得もれい受納べし○十三其とき人々イエスれ手と按て祈ら
んあとと求ひ嬰兒と彼よ携來りけをた弟子是と阻たり十四イエス曰けるい
嬰兒と容せ我よ來るあとと禁しむる勿を天國よとる者い此れ如き者あり
十五即ち彼等よ手と按て此と去ぬ○或人きたりて彼よ曰けるい善師よ我
のぎりあき生と得んが爲よい何れ善事と行べきの彼よ曰けるい何故ぞ
と善と稱や一人れ外よ善者いあし即ち神あり若し生命よ入んと欲いと
誡と守るべし十八彼あたへけるい何の○イエス曰けるい殺す勿を姦淫する勿
を盜む勿を妄りれ證と立る勿を十九爾れ父と母と敬へ又己れ如く爾れ隣と
愛すべし二十少者かをよ曰けるい是をお我いとけあきより守をるもれあ
り何れ脚たるとあろ我よある乎二十一イエス彼よ曰けるい全うらん事と欲い
ど往て爾の所有と售て貧者よ施せ然をを天よ於て財あらん而して來り我

よ從へ二二少者あれ言と聞て憂へ去ぬ彼れ產業たほいありけをを也○二三イ
エスろれ弟子よ曰けるい誠よ爾曹よ告ん富者い天國よ入こと難し二四又
た爾曹よ告ん富者れ神れ國よ入よりい駱駝の針れ孔と穿るい却て易し二五
弟子之と聞て甚く驚き曰けるい然を誰あ救と受べき乎二六イエス彼等と見
て曰けるい是人あい能いざる所あり然を神よい能いざる所あし○二七此と
きペテロ答てイエスよ曰けるい我儕一切と棄て爾よ從へり然ば何と得べ
き乎二八イエス彼等よ曰けるい我まことよ爾曹よ告ん我よ從へる爾曹い世
あらたまり人れ子榮光れ位よ坐する時あんぢらも十二れ位よ坐してイス
テエルの十二れ支派と鞫べし二九凡て我名れ爲よ家宅あるひい兄弟あるひ
い姉妹あるひい父あるひい母あるひい妻あるひい子あるひい田疇と棄る
者い百倍と受ふつ嗣あき生と嗣ん三十多れ先ある者い後よあり後ある者ふ
先よあるべし

第二十章

三一ろれ天國い朝はやく出て葡萄園へ工人と雇ふ主人の如し二工人

あれ一日ゐ銀一枚と予んと約束とゐし彼等と葡萄園ゐ遣せり　三　また九時
おろ出て街ゐ徒く立る者と見て　四　爾曹も葡萄園ゐゆけ相當の價と予んと
彼等ゐ曰けきゞ則ち往り　五　また十二時と三時ごろ出て前の如く行り　五
時ごろ出て又ほかの立る者ゐ遇て曰ける　六　何ゆゑ終日ゐまゐ徒く立や
之ゐ答て曰ける　我儕と雇ふ者あきゐ因てゐり彼等ゐ曰ける　七　爾曹も葡
萄園ゆけ相當の價と得べし　八　日暮るとき葡萄園の主人ろの家宰ゐ曰ける
勞力たる者等と呼て後ゐ雇へる者と始とし先の者ゐまで價と給へよ　九
五時おろゐ雇ゐし者ども來りて銀一枚づゝと受たり　十　先の者ども來り
て我儕ゐ多く受るゐらんと意ひしゐ亦銀一枚づゝと受　十一　ゐとゞ受て主人
と怨つぶやきけるゐ　十二　あの後至者の勞力たるゐ一時ゐのりあるゐ終日く
るしみと任あつをゐ當る我儕と均しく之とゐなせり　十三　主人ろの一人ゐ答て
曰けるゐ友よ我ゐんちゐ不義とせず爾と銀一枚の約束とゐしたるゐ非ず
や　十四　爾のものと取て往ねを亦ゐの後至者ゐも爾の如く予ふべし　十五　我物と
以て我ともふ如く行ゐ宜らず乎ゐねが善ゐ因て爾乃目あしき乎　十六　此れ如く
後の者ゐ先れ者ゐ後ゐあるべし夫よばるゝ者ゐ多しと雖も選るゝ者
ゐ少あし○　十七　イエスエルサレムゐ上るとき途間ゐて人と離を十二第子と
伴ひて彼等ゐ曰けるゐ　十八　我等エルサレムゐ上り人れ子ゐ祭司れ長と學者
等ゐ資さをん彼等ゐをと死罪ゐ定め　十九　之を凌辱ゐ十字架ゐ釘んゐ爲ゐ異邦
人ゐ附そべし又第三日ゐ甦へるべし○　二十　其時セベダイれ子等れ母ろれ子
と偕ゐイエスゐ來り拜して彼ゐ求るあとゐ有けきゞ　二十一　之ゐ曰けるゐ何と欲
ふのイエスゐ曰けるゐ此二人れ我子と爾れ國ゐ於て一人ゐ爾れ右一人ゐ
爾れ左ゐ坐るあとゐと命ぜよ　二十二　イエス答て曰けるゐ爾曹ゐ我が飲んとをる杯とれみ又我が受んとをるバプテスマと受得るや
彼等ゐひけるゐ能そべし　二十三　イエス彼等ゐ曰けるゐ誠ゐ爾曹ゐ我ぞの杯と飲ま
た我うくるバプテスマと受べし然ども我ぞの右左ゐ坐ることゐ我ぞ賜べきゐ
非ず只ゐぞの父ゐ備らをたる者ゐ賜らるべし　二十四　十人れ弟子みれと聞て二人

自廿五至第廿一章一節

れ兄弟を憤きり 二五 イエス彼等を召て曰ける
ゐ異邦れ領主ゐろれ民を主どり大人どもゐ彼等れ上ゐ權を操ゐ
てゐ然をべからず爾曹けうち大ゐらんと欲ふ者ゐ爾曹ゐ役る
者となべし 二七 また爾曹けうち首たらんと欲ふ者ゐ爾曹れ僕となるべし 二八 此れ如
く人れ子れ來るも人を役ふ爲ゐわれ非ず反て人ゐ役ゐんを又おほくれ人ゐ代
て生命を予ろれ贖とあらん爲あり○ 二九 彼等エリコを出し時おほくれ人々
イエスを從へり 三十 二人の瞽者路れ旁ゐ坐りしがイエスれ過ると聞て呼
叫いひけるゐ主ダビデれ裔主よ我儕を憫を給へ 三一 衆人みをゐ默をと戒むをど
も愈さけび曰けるゐ主ダビデれ裔主よ我儕を憫をたまへ 三二 イエス立止て之と
呼いひけるゐ爾曹をゐ何を爲らをんと願ふや 三三 イエスを曰けるゐ主よ
我儕目れ啓んをと願ふ 三四 イエス憫をて其目ゐ手を按けをば直ち見ゐと
と得イエスを從へり

第二十一章

○ 三五 ゐきら橄欖山れベッパゲを至りエルサレムを近ける時イエス

自二至十三節

二人の弟子を遣さんとして 二 彼等に曰けるゐ爾曹むのふれ村ゐ往やのて
繫たる驢馬れ其子と偕ゐあるを遇ん夫と解て我ゐ率きたを 三 若ゐんぢら
ゐ何との言もれゐらば主の用ゐりと曰さらば直ゐ之と遣すべし 四 預言
者れ言に視よ爾乃王ゐ柔和ゐして驢馬そゐわち驢馬の子ゐ乘ゐんぢゐ來
るとレヲンれ女ゐ告よと 五 云るゐ應せん爲ゐ如此ゐせる也 六 弟子ゆき
てイエスの命ぜし如くゐし 七 驢馬と其子とを牽きたり己の衣とそれ上ゐ置
けをバイエスこをゐ乘り 八 衆人おほくれ其衣と途ゐ布ゐるひわ樹枝と伐
て途ゐ布ぬ 九 ゐ前ゐ也き後に從ふ人々を呼いひけるゐダビデの裔ホザナ
よ主の名ゐ託て來る者ゐ福ゐり至上處ゐホザナよ○ 十 イエスエルサレム
ゐ至をるとき都城ゐそりて竦動いひけるゐ是誰ぞや 十一 衆人いひけるゐ此
ハガリラヤれナザレより出たる預言者イエスゐり○ 十二 イエス神れ殿ゐ入
て其中ゐる凡れ賣買する者と逐出しゐ兌銀者れ牀鴿とうる者れ椅子と倒し
十三 彼等に曰けるゐ我家ゐ祈禱れ家と稱らるべしと錄さる然るゐ爾曹こを

と盜賊れ巢とあせり十四 瞽者跛者れ人々殿あ入てイエスお來りけるバ之を
觀しお 祭司れ長と學者だち其行たまへる奇事と見また兒童輩れ殿あて
呼いりダビデれ裔ホザナよと云と聞て怒と含 十六 イエスお曰けるい彼等が
言ふと聞やイエス答て曰けるい然り 嬰兒乳哺者れ口あ讃美と備たりと錄
さをしと未だ誦ざる乎 十七 遂に彼等と離き都城と出てベタニヤお往そみお
宿をり○ 十八 翌あさ都城へ返るとき飢けをバ 十九 路れ旁あある一れ無花果れ
樹と見て其處あ來りしに葉れ他お何も見ざりしのバ今よりれち永久も果
と結ぶあとと得ざをと之に曰たまひけるバ無花果立刻に枯ぬ 二十 弟子ふれ
と見て奇み曰けるい無花果れ枯るふとと何あ速や 二一 イエス答て彼等お曰け
るい我まことお爾曹お告んもし信仰ありて疑いすバ此無花果あ於るが如
耳あらず此山お命じ此より移されて海あ入よと云とも亦成ん 二二 且ふんぢ
ら信じて祈らバ求ふ所ことごとく得べし 二三 イエス殿あ入て敎たるとき祭司
れ長おより民れ長老だち來り曰けるい何れ權威と以て此事とあすや誰こ

の權威と爾お予しや 二四 イエス答て彼等お曰けるい我も一言ふんぢらお問
ん我おそれ事と告ふバ我も何れ權威ともて之と行といふみとと爾曹お曰
べし 二五 ロハネれバプテスマい何處より天よりの人よりの彼等たがひお
論じ曰けるい若し天よりと云バ然バ何ゆゑ信ぜざるのと云ん 二六 もし人よ
りと云バ我併民と畏るる蓋みふハネを預言者と爲たるあり 二七 遂お答て知ず
と曰イエス彼等お曰けるい我も何れ權威と以て之と行か爾曹お語らじ 二八
爾曹いかお意ふや或人二人れ子ありしの長子お來りて曰けるい子よ今日
ぶお葡萄園お往て働け 二九 答て否と曰しかれち悔て往たり 三十 また次子お
前れ如く曰けるお答て君よ我往べしと曰しが遂お往ざりき 三一 此二人れも
れ孰の父れ旨お遵ひし彼等いひけるい長子ありイエス彼等お曰けるい誠
お爾曹お告ん稅吏もよび娼妓い爾曹より先お神れ國お入べし 三二 夫ハネ
義道ともて來りしお爾曹お信ぜず稅吏娼妓い之と信じたり爾曹こを
と見てるほ悔改めず彼と信ぜざりき○ 三三 また一れ譬と聞ある家れ主人葡

葡萄園を樹り籬を環らし其中へ酒槽をほり塔を立て農夫へ貸て他れ國へ往し
へ 三 四 五 六 七 八 九 十
へ 三 四 五 六 七 八 九 十
へ 三 四 五 六 七 八 九 十

如何あをバ禮服を着ずして此處よ來るる乎ゐる彼の手足と縛りて外れ幽暗ゐ投いだせ其處ゐて哀ときまた切齒をするみと有んろを召るゝ者い多しと雖も選るゝ者い少あし○此時パリサイ
れ人いて〻如何してゐ彼と言誤らせんと相謀りろの弟子とヘロデ乃黨
を遣して云せけるい師よ爾い眞ある者あり眞とも神れ道と教まさ誰あ
も偏らざるあとと我儕い知ろい貌ゐ由て人を取ざるあも然バ實とカイ
ザルゐ納るい善や惡や爾いのゐ意ふの我儕ゐ告よ　イエスろの惡と知て
曰けるい僞善者よ何ぞ我と試むるや　貢れ銀錢と我ゐ見せよ彼等デナリ
一と　イエスゐ携來りしゐ　之ゐ曰けるい此像と號い誰ろ　答てカイザル
也といふ是に於てイエス彼等ゐ曰けるい然バカイザルの物いカイザルゐ
歸しまさ神れ物い神ゐ歸すべし　彼等之をきゝ奇としてイエスと去ゆ
けり○　復生あしと言あせるサドカイれ人これ日イエスゐきさ問て
曰ける師よモーセ乃云るゐ人もし子あくして死バ兄弟ろれ妻と娶て

子どうを兄弟れ後と嗣すべしと　茲ゐ我儕れ中ゐ兄弟七人ありしゐ兄め
とりて死子あきゐ故ゐ其妻と次子ゐ遺れり　ろれ二ろれ三それ七まで皆
然す　後つひゐ婦もまさ死さり　爾ろ　娶るときい此婦七人れうち誰れ妻と爲
べきの是そる彼を娶しゐ者あきバ也　イエス答て彼等に曰けるい爾曹聖書
とも神れ能力とも知ざるゐ由て謬をり　そき甦るときい娶ちず嫁ず天ゐ
ある神れ使等れ如しゝ　死しゝ者れ甦るみとゐ就ては、爾曹ゐ神の告さまひし
言ゐ　我れアブラハムの神イサクれ神ヤコブれ神ありとあると未だ讀さ
る乎　そもゝ神い死しゝ者れ神ゐ非ず生る者れ神なり　人々みをと聞て其
訓ゆ驚けり○　ファリサイれ人ヤスサドカイれ人を口と塞がしめさりと聞てパリ
かゝれ人一處ゐ集りけるが　それ中ある一人れ教法師イエスと試みん爲
ゐ問て曰けるい師よ律法のうち何れ誠か大ある　イエス答けるい爾心
と盡し精神と盡し意と盡しゝ主ある爾れ神と愛そべしゝ　ゐを第一ゐして
大なる誡ありし　第二も亦ゐを同じ己の如く爾れ隣と愛そべしゝ　凡の律

法と預言者い此二の誡ゐ因り〇四二パリサイの人け集まる時イエス彼等ゐ
問て曰けるい 四三 爾曹キリストわついて如何おもふ乎ゐ誰け子なるか彼
等イエスゐ曰けるい ダビデけ爾ゐり 四四 彼等ゐ曰けるい然バダビデ靈ゐ感
じて何故みをと主と稱へし乎ダビデ言 四五 主已が主ゐ曰けるい我ゐんぢけ
敵と爾れ足発とゐそきまで我みぎわ坐そべしと 四六 然バダビデ既ゐ之と主
と稱さをバ如何それ子ゐらん乎 四七 誰一言ゐをゐ答るゐと能はず此日より
敢て又とふ者ゐあらざりき

第二十三章 爾時イエス人々と弟子とゐ告て曰けるい 二 學者とパリサイけ人
いもリーセけ位ゐ坐す 三 故ゐ凡て彼等が爾曹ゐ言とゐろと守て行ふべし然
ど彼等が行ふ所ゐ爲みを勿を蓋ゐをらい言けをゐして行わざをを也 四
また彼等い重こつ負がさき荷と括て人け肩ゐ負せ已い一けも指ともて之と
動すみとすら好ず 五 彼等け行い凡て人ゐ見をんが爲ゐそる也ろけ佩經と
幅闊し其衣け器と大ゐし 六 また筵席け上坐會堂け高坐 七 市上け問安人々

より ラビラビと稱らをんみをと好む 八 爾曹いラビじけ稱と受るみと勿を蓋ゐ
んぢらけ師い一人すゐいちキリストありて爾曹いみな兄弟ありまた地ゐわ
る者を父と稱ることと勿を爾曹け父い一人すゐいちキリストありて
導師け稱と受ることと勿を蓋ゐんぢらけ導師い一人をゐいちキリストあり
十一 爾曹けうち大ゐる者い爾曹け僕と爲べし 十二 凡ろ自已と高をる者い卑せ
らを自已を卑する者い高せらをん〇 十三 噫なんぢら禍ゐるゐ偽善ゐる學者
どパリサイけ人よ蓋ゐんぢら天國と人け前よ閉て自ら入ず且いらんとす
る者の入をも許さざをを也 十四 噫なんぢら禍ゐるゐ偽善ゐる學者とパ
リサイの人よ蓋ゐんぢら孀婦け家と呑いつはりて長き祈とゐそこゐ由て爾
曹最も重刑と受べけをを也 十五 わよ禍ゐるゐ偽善ゐる學者とパリサイけ
人よ蓋ゐんぢら徧く水陸と歷巡り一人とも已が宗旨よ引入んとす既ゐ引
入ををこと爾曹よりも倍したる地獄け子と爲り 十六 噫ゐんぢら禍ゐるゐる
瞽者ゐる相よ爾曹いふ人もし殿と指て誓こと事ゐし殿の金と指て誓と

と背べからずと　十七愚おして　聖ある者よ金と金と聖からしむる殿とい誰の
尊き　十八又いふ人もし祭れ壇と指て誓はゞ事あし其上の禮物と指て誓はゞ
背べからずと　十九愚おして　聖ある者よ禮物と禮物と聖からしむる祭れ壇と
い誰の尊き　二十ゆゑ祭れ壇と指て誓ふ者い祭の壇および其上れ凡れ物を指
て誓ふゆゑ　二一又天と指て誓ふ者い神れ寶座およびその上お坐する者と指て誓ふあ
り　二二又天と指て誓ふ者い神れ寶座およびその上お坐する者と指て誓ふあ
り○　二三噫あんぢら祠ある文士ある僞善ある學者とパリサイ人よ薄荷茴香馬芹の十分れ一と取納て律法れ最も重き義と仁と信とを爾曹い廢
みを行ふ可もれ也その亦廢べからざる者ゆゑ　二四瞎者ある相者よ爾曹い
蝨と濾出して駱駝と呑もれ也　二五あゝ祠ある文士ある僞善ある學者とパリサイ
れ人よ爾曹杯と盤れ外と潔して内お貪欲と淫欲とで充せり　二六瞎者ある
パリサイれ人よ爾曹まづ杯と盤れ内を潔せよ然ろ乃外も亦きよまるべ
し○　二七噫あんぢら祠ある文士ある僞善ある學者とパリサイの人よ爾曹い白

く塗さる墓に似さり外は美しく見ども内い骸骨と諸の汚穢お充　二八此
れ如く爾曹もまた外い義く人お見ども内と僞善と不法お充　二九噫あん
ぢら祠ある文士ある僞善ある學者とパリサイの人よ爾曹預言者の墓と造て義
人れ碑と飾り　三〇又いふ我儕もし先祖れ時おあらた預言者れ血と流そお
とお與せざりしをと　三一然ば爾曹い預言者と殺し者れ裔ぞと自ら
證す　三二あんぢら先祖れ量と充せ　三三蛇蝮よ爾曹ゐでん地獄れ刑罰と免
るんや　三四是故お我爾曹お預言者と智者と學者と遣さんお或と之を殺し又
十字架お釘或い其會堂おて之と鞭ち或い邑より邑へ逐苦めん　三五ゐは義あ
るアベルれ血より殿と祭れ壇れ間おてバラキアれ子ザカリ
アれ血お至るまで地お流しさる義人れ血い凡て爾曹お報來らんが爲ある
り　三六まことに誠お爾曹お告ん此事とお此代お報來るべし　三七噫エルサレム
ルサレムよ預言者と殺し爾お遣さる者と石おて擲もれよ母雞れ雛と翼
の下お集る如く我あんぢの赤子と集んとせしみど幾次ぞや然ども爾曹は好

さりき（二八）視よ爾曹れ家い荒地とあり（二九）且爾曹お告ん主れ名お
託て來る者む福ありと爾曹の云んとき至るまでは今より我と見ざるべし
第二十四章　イエス殿より出けきば其弟子そゝとて殿の構造と彼お觀せん
としたりしお　二　イエス彼等お曰けるい爾曹そべて此等と見ざるの我まお
とお爾曹お告ん此處お一れ石も石の上お圮ずしてい遺らじと　三　イエス橄
欖山お坐し給へるとき弟子ひそのお來りて曰けるい何れ時あれこと有や
又爾れ來る兆と世れ末れ兆い如何あるぞや我儕お告たまへ　四　イエス答て
彼等お曰けるい爾曹人お欺あをざるやう愼よ　五　蓋わはくれ人ゐが名と冒
きたり我いキリストありと云て多れ人と欺くべし　六　又あんぢら戰と戰れ
風聲ときのん然ぜ愼て懼るゝ勿を此等れ事い皆ある可あり然ども末期
い未だ至らず　七　民れおりて民と國せめ國い國とせめ饑饉疫病地震とところ〴〵
お有あらん　八　是ゑる禍れ始あり　九　其とき人おんぢらと患難に付し爾曹と
殺ぞべし又あんぢら我名れ爲に萬民お憎をん　十　此とき許多れもれ礙のつ

互お付し互お憎むべし　十一　また僞預言者おほく起て多れ人と欺あん　十二　また不
法さつるに因て多れ人れ愛情ひやゝよのお爲べし　十三　然ども終まで忍ぶ者い救
るゝあゝと得ん　十四　また天國れ此福音と萬民お證せん爲に普く天下よ宣傳
らをん然るれち末期いたるべし　十五　是故お預言者ダニエルお託て言をたる
所れ褻瀆おくむべきもれ聖處お立と見ば（讀者よく思ふべし）　十六　厥時ユダヤ
おとる者い山お遁をよ　屋上お在もれい其家れ物と取んとて下る勿を　十八
田よとる者い其衣と取んとて歸る勿を　十九　其日おい孕める者と乳と飲そる
婦い禍ある哉　二十　爾曹冬またい安息日お逃るあとを免をん爲お祈を　二一　其
とき大ある患難あり此れ如き患難い世れ始より今お至るまで有ざりき又
後おも有じ　二二　若ずれ日と少くせらをずば一人だよ救るゝ者あらん然を
選をし者れ爲よ其日い少くせらるべし　二三　其時もしキリスト此處おあり彼
處おあゝと爾曹よいふ者あるとも信ずる勿を　二四　うい僞キリスト僞預言者
だち起て大ある体徴と異能と行ひ選をたる者とも欺くおとを得ばをと欺

く可きが也　三五わを預じめ爾曹に之と告ん　三六若しキリストー野にお在といふ者あるとも出る勿き室に在と云ふとも信ずる勿れ　三七ろの電光の東より出て西おまで閃くが如く人の子も來るべければ也　三八ろを屍のある處おわ鷲の集むべし　三九夫おんぢら無花果樹より由て譬を學べ其枝そでお柔のおして葉萌めば夏の近きと知　四〇此れ如く爾曹も凡て此等れ事を見ば時ちかく門口お至ると知　四一まことに成まで此民の廢ざるべし　四二天地わ廢んも我言わ廢じ　四三それ日ろれ時と知もれ唯わが父れを天れ使者も誰も知る者おしノアれ時れ如く　四四人れ子れ來るも亦然らん　四五そを洪水の前ノアれ方舟おわいる日まで わ人々飲食嫁娶おそして　四六洪水の來りて悉く之と滅そまで知ざりき此の如く人の子も亦きたらん　四七其とき二人田お在んお一人わ取を一人わ遺さるべし　四八二人れ婦磨ひき居んお一人わとらを一人わ遺さるべし　四九是故お爾曹わ警しめよ　五〇主いぢきれ時きたるのと知ざるを以ばなり　五一此ことを一人わ知べし其家と守て破らそまじ　五二然も爾曹もまた預備せよ意ざる時お人れ子れ來らんと爲をあり　五三時お及て盜と彼等お予さそる爲お主人がそれ僕等れ上お立たる忠義おして智僕わ誰ぞや　五四ろの主人の來らん時のくの如く勤ると見るる僕わ福あり　五五我まことに爾曹お告ん其所有とそる彼お督らそべし　五六若ろの惡僕おのが心お我お主人の來るわ遲らんと意ひ　五七ろの朋輩と打擲きて酒お醉たる者とも　五八其とき天國わ燈と執て新郎と迎お出る十人れ童女お比ふべし

其とき天國わ燈と執て新郎と迎お出る十人れ童女お比ふべし　一其とき天國わ燈と執て新郎と迎お出る十人れ童女お比ふべし　二其中愚なる者五人と智なる者五人あり　三愚なる者わ燈と執ども油お携ず　四智なる者わ燈と共に器の中に油お携り　五新郎わ遲ければ皆まどろみ睡り　六夜半に及て呼ぶ者あり　七ろの童女皆起て燈お整ふ　八愚なる者わ智なる者に油お分ん　九智なる者わ答ん　十人れ分ざるの日ありて　十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　十二ろの往て買ざるの時お來りて　十三ろの童女皆起て燈お整ふ　十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　十五智なる者わ答ん　十六人れ分ざるの日ありて　十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　十八ろの往て買ざるの時お來りて　十九ろの童女皆起て燈お整ふ　二十愚なる者わ智なる者に油お分ん　二十一智なる者わ答ん　二十二人れ分ざるの日ありて　二十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　二十四ろの往て買ざるの時お來りて　二十五ろの童女皆起て燈お整ふ　二十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　二十七智なる者わ答ん　二十八人れ分ざるの日ありて　二十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　三十ろの往て買ざるの時お來りて　三十一ろの童女皆起て燈お整ふ　三十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　三十三智なる者わ答ん　三十四人れ分ざるの日ありて　三十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　三十六ろの往て買ざるの時お來りて　三十七ろの童女皆起て燈お整ふ　三十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　三十九智なる者わ答ん　四十人れ分ざるの日ありて　四十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　四十二ろの往て買ざるの時お來りて　四十三ろの童女皆起て燈お整ふ　四十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　四十五智なる者わ答ん　四十六人れ分ざるの日ありて　四十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　四十八ろの往て買ざるの時お來りて　四十九ろの童女皆起て燈お整ふ　五十愚なる者わ智なる者に油お分ん　五十一智なる者わ答ん　五十二人れ分ざるの日ありて　五十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　五十四ろの往て買ざるの時お來りて　五十五ろの童女皆起て燈お整ふ　五十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　五十七智なる者わ答ん　五十八人れ分ざるの日ありて　五十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　六十ろの往て買ざるの時お來りて　六十一ろの童女皆起て燈お整ふ　六十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　六十三智なる者わ答ん　六十四人れ分ざるの日ありて　六十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　六十六ろの往て買ざるの時お來りて　六十七ろの童女皆起て燈お整ふ　六十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　六十九智なる者わ答ん　七十人れ分ざるの日ありて　七十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　七十二ろの往て買ざるの時お來りて　七十三ろの童女皆起て燈お整ふ　七十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　七十五智なる者わ答ん　七十六人れ分ざるの日ありて　七十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　七十八ろの往て買ざるの時お來りて　七十九ろの童女皆起て燈お整ふ　八十愚なる者わ智なる者に油お分ん　八十一智なる者わ答ん　八十二人れ分ざるの日ありて　八十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　八十四ろの往て買ざるの時お來りて　八十五ろの童女皆起て燈お整ふ　八十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　八十七智なる者わ答ん　八十八人れ分ざるの日ありて　八十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　九十ろの往て買ざるの時お來りて　九十一ろの童女皆起て燈お整ふ　九十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　九十三智なる者わ答ん　九十四人れ分ざるの日ありて　九十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　九十六ろの往て買ざるの時お來りて　九十七ろの童女皆起て燈お整ふ　九十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　九十九智なる者わ答ん　百人れ分ざるの日ありて　百一ろの愚なる者わ油お買に往ん　百二ろの往て買ざるの時お來りて　百三ろの童女皆起て燈お整ふ　百四愚なる者わ智なる者に油お分ん　百五智なる者わ答ん　百六人れ分ざるの日ありて　百七ろの愚なる者わ油お買に往ん　百八ろの往て買ざるの時お來りて　百九ろの童女皆起て燈お整ふ　百十愚なる者わ智なる者に油お分ん　百十一智なる者わ答ん　百十二人れ分ざるの日ありて　百十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　百十四ろの往て買ざるの時お來りて　百十五ろの童女皆起て燈お整ふ　百十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　百十七智なる者わ答ん　百十八人れ分ざるの日ありて　百十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　百二十ろの往て買ざるの時お來りて　百二十一ろの童女皆起て燈お整ふ　百二十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　百二十三智なる者わ答ん　百二十四人れ分ざるの日ありて　百二十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　百二十六ろの往て買ざるの時お來りて　百二十七ろの童女皆起て燈お整ふ　百二十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　百二十九智なる者わ答ん　百三十人れ分ざるの日ありて　百三十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　百三十二ろの往て買ざるの時お來りて　百三十三ろの童女皆起て燈お整ふ　百三十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　百三十五智なる者わ答ん　百三十六人れ分ざるの日ありて　百三十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　百三十八ろの往て買ざるの時お來りて　百三十九ろの童女皆起て燈お整ふ　百四十愚なる者わ智なる者に油お分ん　百四十一智なる者わ答ん　百四十二人れ分ざるの日ありて　百四十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　百四十四ろの往て買ざるの時お來りて　百四十五ろの童女皆起て燈お整ふ　百四十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　百四十七智なる者わ答ん　百四十八人れ分ざるの日ありて　百四十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　百五十ろの往て買ざるの時お來りて　百五十一ろの童女皆起て燈お整ふ　百五十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　百五十三智なる者わ答ん　百五十四人れ分ざるの日ありて　百五十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　百五十六ろの往て買ざるの時お來りて　百五十七ろの童女皆起て燈お整ふ　百五十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　百五十九智なる者わ答ん　百六十人れ分ざるの日ありて　百六十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　百六十二ろの往て買ざるの時お來りて　百六十三ろの童女皆起て燈お整ふ　百六十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　百六十五智なる者わ答ん　百六十六人れ分ざるの日ありて　百六十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　百六十八ろの往て買ざるの時お來りて　百六十九ろの童女皆起て燈お整ふ　百七十愚なる者わ智なる者に油お分ん　百七十一智なる者わ答ん　百七十二人れ分ざるの日ありて　百七十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　百七十四ろの往て買ざるの時お來りて　百七十五ろの童女皆起て燈お整ふ　百七十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　百七十七智なる者わ答ん　百七十八人れ分ざるの日ありて　百七十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　百八十ろの往て買ざるの時お來りて　百八十一ろの童女皆起て燈お整ふ　百八十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　百八十三智なる者わ答ん　百八十四人れ分ざるの日ありて　百八十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　百八十六ろの往て買ざるの時お來りて　百八十七ろの童女皆起て燈お整ふ　百八十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　百八十九智なる者わ答ん　百九十人れ分ざるの日ありて　百九十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　百九十二ろの往て買ざるの時お來りて　百九十三ろの童女皆起て燈お整ふ　百九十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　百九十五智なる者わ答ん　百九十六人れ分ざるの日ありて　百九十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　百九十八ろの往て買ざるの時お來りて　百九十九ろの童女皆起て燈お整ふ　二百愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百一智なる者わ答ん　二百二人れ分ざるの日ありて　二百三ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百四ろの往て買ざるの時お來りて　二百五ろの童女皆起て燈お整ふ　二百六愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百七智なる者わ答ん　二百八人れ分ざるの日ありて　二百九ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百十ろの往て買ざるの時お來りて　二百十一ろの童女皆起て燈お整ふ　二百十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百十三智なる者わ答ん　二百十四人れ分ざるの日ありて　二百十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百十六ろの往て買ざるの時お來りて　二百十七ろの童女皆起て燈お整ふ　二百十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百十九智なる者わ答ん　二百二十人れ分ざるの日ありて　二百二十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百二十二ろの往て買ざるの時お來りて　二百二十三ろの童女皆起て燈お整ふ　二百二十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百二十五智なる者わ答ん　二百二十六人れ分ざるの日ありて　二百二十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百二十八ろの往て買ざるの時お來りて　二百二十九ろの童女皆起て燈お整ふ　二百三十愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百三十一智なる者わ答ん　二百三十二人れ分ざるの日ありて　二百三十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百三十四ろの往て買ざるの時お來りて　二百三十五ろの童女皆起て燈お整ふ　二百三十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百三十七智なる者わ答ん　二百三十八人れ分ざるの日ありて　二百三十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百四十ろの往て買ざるの時お來りて　二百四十一ろの童女皆起て燈お整ふ　二百四十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百四十三智なる者わ答ん　二百四十四人れ分ざるの日ありて　二百四十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百四十六ろの往て買ざるの時お來りて　二百四十七ろの童女皆起て燈お整ふ　二百四十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百四十九智なる者わ答ん　二百五十人れ分ざるの日ありて　二百五十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百五十二ろの往て買ざるの時お來りて　二百五十三ろの童女皆起て燈お整ふ　二百五十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百五十五智なる者わ答ん　二百五十六人れ分ざるの日ありて　二百五十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百五十八ろの往て買ざるの時お來りて　二百五十九ろの童女皆起て燈お整ふ　二百六十愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百六十一智なる者わ答ん　二百六十二人れ分ざるの日ありて　二百六十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百六十四ろの往て買ざるの時お來りて　二百六十五ろの童女皆起て燈お整ふ　二百六十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百六十七智なる者わ答ん　二百六十八人れ分ざるの日ありて　二百六十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百七十ろの往て買ざるの時お來りて　二百七十一ろの童女皆起て燈お整ふ　二百七十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百七十三智なる者わ答ん　二百七十四人れ分ざるの日ありて　二百七十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百七十六ろの往て買ざるの時お來りて　二百七十七ろの童女皆起て燈お整ふ　二百七十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百七十九智なる者わ答ん　二百八十人れ分ざるの日ありて　二百八十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百八十二ろの往て買ざるの時お來りて　二百八十三ろの童女皆起て燈お整ふ　二百八十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百八十五智なる者わ答ん　二百八十六人れ分ざるの日ありて　二百八十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百八十八ろの往て買ざるの時お來りて　二百八十九ろの童女皆起て燈お整ふ　二百九十愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百九十一智なる者わ答ん　二百九十二人れ分ざるの日ありて　二百九十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　二百九十四ろの往て買ざるの時お來りて　二百九十五ろの童女皆起て燈お整ふ　二百九十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　二百九十七智なる者わ答ん　二百九十八人れ分ざるの日ありて　二百九十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百ろの往て買ざるの時お來りて　三百一ろの童女皆起て燈お整ふ　三百二愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百三智なる者わ答ん　三百四人れ分ざるの日ありて　三百五ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百六ろの往て買ざるの時お來りて　三百七ろの童女皆起て燈お整ふ　三百八愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百九智なる者わ答ん　三百十人れ分ざるの日ありて　三百十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百十二ろの往て買ざるの時お來りて　三百十三ろの童女皆起て燈お整ふ　三百十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百十五智なる者わ答ん　三百十六人れ分ざるの日ありて　三百十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百十八ろの往て買ざるの時お來りて　三百十九ろの童女皆起て燈お整ふ　三百二十愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百二十一智なる者わ答ん　三百二十二人れ分ざるの日ありて　三百二十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百二十四ろの往て買ざるの時お來りて　三百二十五ろの童女皆起て燈お整ふ　三百二十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百二十七智なる者わ答ん　三百二十八人れ分ざるの日ありて　三百二十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百三十ろの往て買ざるの時お來りて　三百三十一ろの童女皆起て燈お整ふ　三百三十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百三十三智なる者わ答ん　三百三十四人れ分ざるの日ありて　三百三十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百三十六ろの往て買ざるの時お來りて　三百三十七ろの童女皆起て燈お整ふ　三百三十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百三十九智なる者わ答ん　三百四十人れ分ざるの日ありて　三百四十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百四十二ろの往て買ざるの時お來りて　三百四十三ろの童女皆起て燈お整ふ　三百四十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百四十五智なる者わ答ん　三百四十六人れ分ざるの日ありて　三百四十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百四十八ろの往て買ざるの時お來りて　三百四十九ろの童女皆起て燈お整ふ　三百五十愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百五十一智なる者わ答ん　三百五十二人れ分ざるの日ありて　三百五十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百五十四ろの往て買ざるの時お來りて　三百五十五ろの童女皆起て燈お整ふ　三百五十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百五十七智なる者わ答ん　三百五十八人れ分ざるの日ありて　三百五十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百六十ろの往て買ざるの時お來りて　三百六十一ろの童女皆起て燈お整ふ　三百六十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百六十三智なる者わ答ん　三百六十四人れ分ざるの日ありて　三百六十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百六十六ろの往て買ざるの時お來りて　三百六十七ろの童女皆起て燈お整ふ　三百六十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百六十九智なる者わ答ん　三百七十人れ分ざるの日ありて　三百七十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百七十二ろの往て買ざるの時お來りて　三百七十三ろの童女皆起て燈お整ふ　三百七十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百七十五智なる者わ答ん　三百七十六人れ分ざるの日ありて　三百七十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百七十八ろの往て買ざるの時お來りて　三百七十九ろの童女皆起て燈お整ふ　三百八十愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百八十一智なる者わ答ん　三百八十二人れ分ざるの日ありて　三百八十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百八十四ろの往て買ざるの時お來りて　三百八十五ろの童女皆起て燈お整ふ　三百八十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百八十七智なる者わ答ん　三百八十八人れ分ざるの日ありて　三百八十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百九十ろの往て買ざるの時お來りて　三百九十一ろの童女皆起て燈お整ふ　三百九十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百九十三智なる者わ答ん　三百九十四人れ分ざるの日ありて　三百九十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　三百九十六ろの往て買ざるの時お來りて　三百九十七ろの童女皆起て燈お整ふ　三百九十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　三百九十九智なる者わ答ん　四百人れ分ざるの日ありて　四百一ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百二ろの往て買ざるの時お來りて　四百三ろの童女皆起て燈お整ふ　四百四愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百五智なる者わ答ん　四百六人れ分ざるの日ありて　四百七ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百八ろの往て買ざるの時お來りて　四百九ろの童女皆起て燈お整ふ　四百十愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百十一智なる者わ答ん　四百十二人れ分ざるの日ありて　四百十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百十四ろの往て買ざるの時お來りて　四百十五ろの童女皆起て燈お整ふ　四百十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百十七智なる者わ答ん　四百十八人れ分ざるの日ありて　四百十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百二十ろの往て買ざるの時お來りて　四百二十一ろの童女皆起て燈お整ふ　四百二十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百二十三智なる者わ答ん　四百二十四人れ分ざるの日ありて　四百二十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百二十六ろの往て買ざるの時お來りて　四百二十七ろの童女皆起て燈お整ふ　四百二十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百二十九智なる者わ答ん　四百三十人れ分ざるの日ありて　四百三十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百三十二ろの往て買ざるの時お來りて　四百三十三ろの童女皆起て燈お整ふ　四百三十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百三十五智なる者わ答ん　四百三十六人れ分ざるの日ありて　四百三十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百三十八ろの往て買ざるの時お來りて　四百三十九ろの童女皆起て燈お整ふ　四百四十愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百四十一智なる者わ答ん　四百四十二人れ分ざるの日ありて　四百四十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百四十四ろの往て買ざるの時お來りて　四百四十五ろの童女皆起て燈お整ふ　四百四十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百四十七智なる者わ答ん　四百四十八人れ分ざるの日ありて　四百四十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百五十ろの往て買ざるの時お來りて　四百五十一ろの童女皆起て燈お整ふ　四百五十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百五十三智なる者わ答ん　四百五十四人れ分ざるの日ありて　四百五十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百五十六ろの往て買ざるの時お來りて　四百五十七ろの童女皆起て燈お整ふ　四百五十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百五十九智なる者わ答ん　四百六十人れ分ざるの日ありて　四百六十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百六十二ろの往て買ざるの時お來りて　四百六十三ろの童女皆起て燈お整ふ　四百六十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百六十五智なる者わ答ん　四百六十六人れ分ざるの日ありて　四百六十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百六十八ろの往て買ざるの時お來りて　四百六十九ろの童女皆起て燈お整ふ　四百七十愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百七十一智なる者わ答ん　四百七十二人れ分ざるの日ありて　四百七十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百七十四ろの往て買ざるの時お來りて　四百七十五ろの童女皆起て燈お整ふ　四百七十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百七十七智なる者わ答ん　四百七十八人れ分ざるの日ありて　四百七十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百八十ろの往て買ざるの時お來りて　四百八十一ろの童女皆起て燈お整ふ　四百八十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百八十三智なる者わ答ん　四百八十四人れ分ざるの日ありて　四百八十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百八十六ろの往て買ざるの時お來りて　四百八十七ろの童女皆起て燈お整ふ　四百八十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百八十九智なる者わ答ん　四百九十人れ分ざるの日ありて　四百九十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百九十二ろの往て買ざるの時お來りて　四百九十三ろの童女皆起て燈お整ふ　四百九十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　四百九十五智なる者わ答ん　四百九十六人れ分ざるの日ありて　四百九十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　四百九十八ろの往て買ざるの時お來りて　四百九十九ろの童女皆起て燈お整ふ　五百愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百一智なる者わ答ん　五百二人れ分ざるの日ありて　五百三ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百四ろの往て買ざるの時お來りて　五百五ろの童女皆起て燈お整ふ　五百六愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百七智なる者わ答ん　五百八人れ分ざるの日ありて　五百九ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百十ろの往て買ざるの時お來りて　五百十一ろの童女皆起て燈お整ふ　五百十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百十三智なる者わ答ん　五百十四人れ分ざるの日ありて　五百十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百十六ろの往て買ざるの時お來りて　五百十七ろの童女皆起て燈お整ふ　五百十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百十九智なる者わ答ん　五百二十人れ分ざるの日ありて　五百二十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百二十二ろの往て買ざるの時お來りて　五百二十三ろの童女皆起て燈お整ふ　五百二十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百二十五智なる者わ答ん　五百二十六人れ分ざるの日ありて　五百二十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百二十八ろの往て買ざるの時お來りて　五百二十九ろの童女皆起て燈お整ふ　五百三十愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百三十一智なる者わ答ん　五百三十二人れ分ざるの日ありて　五百三十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百三十四ろの往て買ざるの時お來りて　五百三十五ろの童女皆起て燈お整ふ　五百三十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百三十七智なる者わ答ん　五百三十八人れ分ざるの日ありて　五百三十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百四十ろの往て買ざるの時お來りて　五百四十一ろの童女皆起て燈お整ふ　五百四十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百四十三智なる者わ答ん　五百四十四人れ分ざるの日ありて　五百四十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百四十六ろの往て買ざるの時お來りて　五百四十七ろの童女皆起て燈お整ふ　五百四十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百四十九智なる者わ答ん　五百五十人れ分ざるの日ありて　五百五十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百五十二ろの往て買ざるの時お來りて　五百五十三ろの童女皆起て燈お整ふ　五百五十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百五十五智なる者わ答ん　五百五十六人れ分ざるの日ありて　五百五十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百五十八ろの往て買ざるの時お來りて　五百五十九ろの童女皆起て燈お整ふ　五百六十愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百六十一智なる者わ答ん　五百六十二人れ分ざるの日ありて　五百六十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百六十四ろの往て買ざるの時お來りて　五百六十五ろの童女皆起て燈お整ふ　五百六十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百六十七智なる者わ答ん　五百六十八人れ分ざるの日ありて　五百六十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百七十ろの往て買ざるの時お來りて　五百七十一ろの童女皆起て燈お整ふ　五百七十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百七十三智なる者わ答ん　五百七十四人れ分ざるの日ありて　五百七十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百七十六ろの往て買ざるの時お來りて　五百七十七ろの童女皆起て燈お整ふ　五百七十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百七十九智なる者わ答ん　五百八十人れ分ざるの日ありて　五百八十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百八十二ろの往て買ざるの時お來りて　五百八十三ろの童女皆起て燈お整ふ　五百八十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百八十五智なる者わ答ん　五百八十六人れ分ざるの日ありて　五百八十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百八十八ろの往て買ざるの時お來りて　五百八十九ろの童女皆起て燈お整ふ　五百九十愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百九十一智なる者わ答ん　五百九十二人れ分ざるの日ありて　五百九十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　五百九十四ろの往て買ざるの時お來りて　五百九十五ろの童女皆起て燈お整ふ　五百九十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　五百九十七智なる者わ答ん　五百九十八人れ分ざるの日ありて　五百九十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百ろの往て買ざるの時お來りて　六百一ろの童女皆起て燈お整ふ　六百二愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百三智なる者わ答ん　六百四人れ分ざるの日ありて　六百五ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百六ろの往て買ざるの時お來りて　六百七ろの童女皆起て燈お整ふ　六百八愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百九智なる者わ答ん　六百十人れ分ざるの日ありて　六百十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百十二ろの往て買ざるの時お來りて　六百十三ろの童女皆起て燈お整ふ　六百十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百十五智なる者わ答ん　六百十六人れ分ざるの日ありて　六百十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百十八ろの往て買ざるの時お來りて　六百十九ろの童女皆起て燈お整ふ　六百二十愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百二十一智なる者わ答ん　六百二十二人れ分ざるの日ありて　六百二十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百二十四ろの往て買ざるの時お來りて　六百二十五ろの童女皆起て燈お整ふ　六百二十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百二十七智なる者わ答ん　六百二十八人れ分ざるの日ありて　六百二十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百三十ろの往て買ざるの時お來りて　六百三十一ろの童女皆起て燈お整ふ　六百三十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百三十三智なる者わ答ん　六百三十四人れ分ざるの日ありて　六百三十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百三十六ろの往て買ざるの時お來りて　六百三十七ろの童女皆起て燈お整ふ　六百三十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百三十九智なる者わ答ん　六百四十人れ分ざるの日ありて　六百四十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百四十二ろの往て買ざるの時お來りて　六百四十三ろの童女皆起て燈お整ふ　六百四十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百四十五智なる者わ答ん　六百四十六人れ分ざるの日ありて　六百四十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百四十八ろの往て買ざるの時お來りて　六百四十九ろの童女皆起て燈お整ふ　六百五十愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百五十一智なる者わ答ん　六百五十二人れ分ざるの日ありて　六百五十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百五十四ろの往て買ざるの時お來りて　六百五十五ろの童女皆起て燈お整ふ　六百五十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百五十七智なる者わ答ん　六百五十八人れ分ざるの日ありて　六百五十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百六十ろの往て買ざるの時お來りて　六百六十一ろの童女皆起て燈お整ふ　六百六十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百六十三智なる者わ答ん　六百六十四人れ分ざるの日ありて　六百六十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百六十六ろの往て買ざるの時お來りて　六百六十七ろの童女皆起て燈お整ふ　六百六十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百六十九智なる者わ答ん　六百七十人れ分ざるの日ありて　六百七十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百七十二ろの往て買ざるの時お來りて　六百七十三ろの童女皆起て燈お整ふ　六百七十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百七十五智なる者わ答ん　六百七十六人れ分ざるの日ありて　六百七十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百七十八ろの往て買ざるの時お來りて　六百七十九ろの童女皆起て燈お整ふ　六百八十愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百八十一智なる者わ答ん　六百八十二人れ分ざるの日ありて　六百八十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百八十四ろの往て買ざるの時お來りて　六百八十五ろの童女皆起て燈お整ふ　六百八十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百八十七智なる者わ答ん　六百八十八人れ分ざるの日ありて　六百八十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百九十ろの往て買ざるの時お來りて　六百九十一ろの童女皆起て燈お整ふ　六百九十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百九十三智なる者わ答ん　六百九十四人れ分ざるの日ありて　六百九十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　六百九十六ろの往て買ざるの時お來りて　六百九十七ろの童女皆起て燈お整ふ　六百九十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　六百九十九智なる者わ答ん　七百人れ分ざるの日ありて　七百一ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百二ろの往て買ざるの時お來りて　七百三ろの童女皆起て燈お整ふ　七百四愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百五智なる者わ答ん　七百六人れ分ざるの日ありて　七百七ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百八ろの往て買ざるの時お來りて　七百九ろの童女皆起て燈お整ふ　七百十愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百十一智なる者わ答ん　七百十二人れ分ざるの日ありて　七百十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百十四ろの往て買ざるの時お來りて　七百十五ろの童女皆起て燈お整ふ　七百十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百十七智なる者わ答ん　七百十八人れ分ざるの日ありて　七百十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百二十ろの往て買ざるの時お來りて　七百二十一ろの童女皆起て燈お整ふ　七百二十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百二十三智なる者わ答ん　七百二十四人れ分ざるの日ありて　七百二十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百二十六ろの往て買ざるの時お來りて　七百二十七ろの童女皆起て燈お整ふ　七百二十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百二十九智なる者わ答ん　七百三十人れ分ざるの日ありて　七百三十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百三十二ろの往て買ざるの時お來りて　七百三十三ろの童女皆起て燈お整ふ　七百三十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百三十五智なる者わ答ん　七百三十六人れ分ざるの日ありて　七百三十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百三十八ろの往て買ざるの時お來りて　七百三十九ろの童女皆起て燈お整ふ　七百四十愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百四十一智なる者わ答ん　七百四十二人れ分ざるの日ありて　七百四十三ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百四十四ろの往て買ざるの時お來りて　七百四十五ろの童女皆起て燈お整ふ　七百四十六愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百四十七智なる者わ答ん　七百四十八人れ分ざるの日ありて　七百四十九ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百五十ろの往て買ざるの時お來りて　七百五十一ろの童女皆起て燈お整ふ　七百五十二愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百五十三智なる者わ答ん　七百五十四人れ分ざるの日ありて　七百五十五ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百五十六ろの往て買ざるの時お來りて　七百五十七ろの童女皆起て燈お整ふ　七百五十八愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百五十九智なる者わ答ん　七百六十人れ分ざるの日ありて　七百六十一ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百六十二ろの往て買ざるの時お來りて　七百六十三ろの童女皆起て燈お整ふ　七百六十四愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百六十五智なる者わ答ん　七百六十六人れ分ざるの日ありて　七百六十七ろの愚なる者わ油お買に往ん　七百六十八ろの往て買ざるの時お來りて　七百六十九ろの童女皆起て燈お整ふ　七百七十愚なる者わ智なる者に油お分ん　七百七十一

二 うの中の五人の智く五人の愚ある者の其燈と共に
さりしが 四 智き者の其燈と器に油を携へたり
五 新郎の遅延するによりて皆睡眠して眠れり 六 夜半に及び叫ぶ者ありけれ
ば 七 この童女ども皆おきて其燈を整へたるに 八 愚ある者の智き者に曰
ける 我儕の燈滅んとす願くは爾曹の油を我儕に分予よ 九 智き者答
て曰ける 我儕と爾曹とに恐くは足ざらん寧ろ賣者に往て己が爲に買へ
きたらんと 十 往しとき新郎きたりぬ出て迎よと呼聲ありけり
入しが乙門は閉らをさり 十一 斯て後ろの童女きたりて曰ける 主よ主
よ我儕れ爲に開さまへ 十二 答て我まことに爾曹に知ずと
曰り 十三 然ば愚らずして守を爾曹うの日ろれ時と知ざればなり
十四 或人れ旅行せんとして其僕どよび所有と彼等に預るが如し
十五 各人の智力に從ひて或者に五千或者に二千或者に一千と予おき直に
旅行せり 十六 五千れ銀と受し者ゐれ往て地と堀
て主れ金と竊せり 十七 歷久て後ろれ僕等れ主のへりて彼等と會計せしに
十八 五千れ銀と受し者ろれ他に五千れ銀と携來りて主よ我に五千れ銀と預
しが他に五千れ銀と儲さりと曰けをた 二十 主のをに曰けるに善りり
忠ある僕ぞ爾寡ある事に忠あり我なんぢに多もれと督らせん爾れ主人
れ歡樂に入よ 二一 二千れ銀と受し者きたりて主よ我に二千れ銀と預しに他
に二千れ銀と儲さりと曰けをば 二二 主のをに曰けるに善りり忠ある僕ぞ
なんぢ寡ある事に忠あり我なんぢに多もれと督らせん爾れ主人れ歡樂に
入よ 二三 また一千れ銀と受し者きたりて曰ける 主よ爾れ厲人にて播ざる
處より穫ちらさざる處より斂ること我れ知 二四 故に我懼てゆき主れ一千
れ銀と地に藏し置う今なんぢ爾れ物と得たり 二五 ろれ主に曰けるに
惡のけ惰きる僕ぞ爾ど我が播ざる處より斂ることと知
の 二六 然らば我が金と兌換舖に預置べきなり 二七 然る時我ゐ歸たるとき本と利

千と受し者もまた他に二千と得たり 二八 然るに一千と受し者ゐ往て地と堀
ろれ主れ金と藏せり 二九 歷久て後ろれ僕等れ主のへりて彼等と會計せしに
三十 五千れ銀と受し者ろれ他に五千れ銀と携來りて主よ我に五千れ銀と預
しが他に五千れ銀と儲さりと曰けをた 三一 主のをに曰けるに善りり
忠ある僕ぞ爾寡ある事に忠あり我なんぢに多もれと督らせん爾れ主人
れ歡樂に入よ 三二 二千れ銀と受し者きたりて主よ我に二千れ銀と預しに他
に二千れ銀と儲さりと曰けをば 三三 主のをに曰けるに於善りり忠ある僕ぞ
なんぢ寡ある事に忠あり我なんぢに多もれと督らせん爾れ主人れ歡樂に
入よ 三四 また一千れ銀と受し者きたりて曰ける 主よ爾れ厲人にて播ざる
處より穫ちらさざる處より斂ること我れ知 三五 故に我懼てゆき主れ一千
れ銀と地に藏し置う今なんぢ爾れ物と得たり 三六 ろれ主に曰けるに
惡のけ惰きる僕ぞ爾ど我が播ざる處より斂ることと知
の 三七 然らば我が金と兌換舖に預置べきなり 三八 然る時我ゐ歸たるとき本と利

とと受べし　二八是故ゐ彼れ一千の銀ゐ取て十千ゐ銀ゐる者ゐ予よ　二九そと有る者ゐ予らをて倘ゐまりゐり無有者ゐいろ乃有る物とも奪るゝ也　三十無益る僕と外れ幽暗ゐ逐やを其處ゐて哀哭切齒するよと有ん○　三一人れ子ゐれをれ榮光ともて諸れ聖使と率來る時れろ乃榮光れ位ゐ坐し　三二萬國れ民とろの前ゐ集め羊と牧者れ綿羊と山羊とを別が如く彼等と別ち　三三綿羊とそれ右ゐ山羊とろれ左ゐ置べし　三四斯て王ろれ右ゐとる者ゐ云ん吾父ゐ惠るゝ者よ來りて創世より以來ゐんぢら我ゐ飢し時ゐを食せ渴しとき我に飲せ旅せし時ゐを宿らせ　三五裸ゐりし時ゐをゐ衣せ病しとき我ゐみそひ獄ゐ在しとき我ゐ就をぼゐり　三六是ゐ於て義者ゐをゐ答て云ん主よ何時ゐんぢれ飢たるを見て食せまさ渴たるゐ飲しゝ乎　三八何時主の旅したるを見て宿らせ又裸るゐ衣しや　三九何時主の病また獄ゐ在を見て爾ゐ至りし乎　四十王ゐたへて彼等ゐ白ん我せこをゐ爾曹ゐ告ん既に爾曹わゞ此兄弟の最微者の一人ゐ行へるれ即ち我

ゐ行しゐり　四一遂ゐまた左ゐとる者ゐ曰ん詛せらるべき者よ我を離をて惡魔と其使者の爲ゐ備たる火ゐ入よ　四二蓋ゐんぢら我ゐ飢し時わをゐ食せず渴しとき我に飲せず　四三旅せし時をを宿らせず裸ありし時わをゐ衣ず病せさ獄ゐ在し時わをと顧ざをた也　四四是ゐ於て彼等をさ答て曰ん主よ何時ゐ渴をさ旅しさりし乎　其とき王こたへて彼等ゐ曰ん我まことゐ爾曹ゐ告ん此最微者れ一人ゐ行ゐざるれ即ち我ゐ行ゐざりし也　四六此等の者れ窮ゐき刑罰ゐ行しゐり義者れ窮ゐき生命ゐ入べし

第二十六章

偖イエスゐれ諸れ言を言竟りて其弟子ゐ曰けるれ　二日のれち逾越節ゐるれ爾曹ゐ知ところ也ろをを人の子れ十字架ゐ釘らをん爲ゐ付さるべし　三此とき祭司れ長老等ガヤパと云へる祭司の長れ邸れ庭ゐ集り　四詭計をもてイエスと執へ殺さんと共ゐ謀いひけるれ　五祭日ゐれ亂ゐおこらん○　六イエスベタニヤれ癩病

シモンの家に居さまへる時　ある婦玉の器物に價貴き香膏を盛てイ
エスの食せる所に携來り　八弟子等之を見て怒と含いひけるは此擧動のことと爲は何故ぞや　九若之を賣ば多の金と得て貧者に施すことと得ん　十イエス知て彼等に曰けるは何ぞ此婦と惱ますや彼は我に善事と行へる也　十一貧者は常に爾曹と偕に在ど我は常に我と偕に在ず　十二彼が此の香膏を我體に澆ぎしは我が葬の爲に行る也　十三眞に誠に爾曹に告ん天下いづくにても此福音の宣傳らるゝ處には此婦の行ひ事も其記念の爲に言傳らるべし　十四其時十二弟子の一人なるイスカリオテといへるもの祭司の長等の所に往て曰けるは　十五我に何ほど與ば我彼を爾曹に付さんと乎ると遂に銀三十に定めり　十六此時よりイエスを賣さんと機と覘ひぬ　十七除酵節の首の日弟子イエスに來り曰けるは我儕何處に爾曹の爲に過越の食を備ふべきと乎　十八イエス曰けるは京城に某に至ていへ師いふ我が時近きけり我弟子と偕に過越の節を爾が家に行べしと弟子に命ぜらきしが如くして過越の食と備ふ　二十日くるに時イエス十二弟子と偕に席に就　二一食せる時いひけるは我まみと爾曹に告ん爾曹のうち一人ぞと賣ん　二二彼等いさく憂て各イエスに曰けるは主よ我ならん乎　二三答て曰けるは我と偕に手を盂に着る者は即ち我と賣ん者なり　二四人の子は己に就て錄されたるが如く逝ん然ど人の子を賣ん者は禍あるぞ其人生ざりしならば反て幸あらん　二五賣ユダ答て曰けるは我ならんヲビ我あるやと曰けるは爾の言る如し　二六彼と賣ときイエスパンと取て祝しことさき弟子に予て曰けるは取て食よ是は我身なり　二七又杯と取て謝し彼等に予て曰けるは爾曹みな此杯より飲　二八是は新約の我血

ぺんと　十九弟子イエスの命ぜらきしが如くして過越の食と備ふ　二十日くるに時イエス十二弟子と偕に席に就　二一食せる時いひけるは我まみと爾曹に告ん爾曹のうち一人ぞと賣ん　二二彼等いさく憂て各イエスに曰けるは主よ我ならん乎　二三答て曰けるは我と偕に手を盂に着る者は即ち我と賣ん者なり　二四人の子は己に就て錄されたるが如く逝ん然ど人の子を賣ん者は禍あるぞ其人生ざりしならば反て幸あらん　二五賣ユダ答て曰けるは我ならんヲビ我あるやと曰けるは爾の言る如し　二六彼と賣ときイエスパンと取て祝しことさき弟子に予て曰けるは取て食よ是は我身なり　二七又杯と取て謝し彼等に予て曰けるは爾曹みな此杯より飲　二八是は新約の我血を流所のものなり　二九且爾曹に告ん今より後葡萄の産と飲ざる日までは再び此の葡萄の園の飲ん日までは再び之の葡萄の産と飲じ　三〇斯て詩歌と謳てのち橄欖山に往り　三一其時イエス彼等に曰けるは今夜爾曹みな我に就て躓ん蓋は牧者と擊ば群れ綿羊ち

らんと錄されたるを也 三三然れど我甦りて後なんぢらを先ちガリラヤへ往べ
き 三四ペテロ答てイエスを曰けるい縱ひ皆なんぢを就て躓くとも我い終を躓の
し 三五イエス彼を曰けるい我まことをなんぢに告ん今夜雞の鳴ざる前を爾三
次迄と知ずと言ん 三五ペテロ彼を曰けるい我い主と偕を死るとも爾と知
ずと言と弟子等を如此ならへり○ 三六厥時イエス彼等と偕をゲッセマネといい
ふ處を至て弟子等を曰けるい爾曹ゐに坐を彼處を往て祈らん 三七ペテ
ロ及ゼベダイの二人の子を携へ憂みと催し 三八彼等を曰けるい我心いた
く憂て死るをうり也こゝを待て我と偕を目を醒ーを 三九少ー進往てひ
をふし祈いひけるい吾父よ若々なは此杯を我より離ち給へ然ど我心れ
徒と成んとするを非ず聖旨を任せ給へ 四〇面ーて弟子を來り其寐さるを見
てペテロを曰けるい如此一時も我と偕を目を醒ることを能ざる乎 四一醒
を入ぬやう目と祷かつ祈ろの靈をいい願ふをきを肉體よりきあり 四二次ゆ
きて復いのり曰けるい吾父よ若しを此杯を飲ずバ聖旨

を任せ給へ 四三來りて又かをられ寐たるを見をき彼等れ目疲たるを也 四四彼等
を離をて又ゆき第三次も同言をもて祈をり 四五遂を其弟子を來りて曰ける
い今い寐て休め時い近し人の子罪人の手を付さるん 四六起よ我儕往べー我を
賣る者近きさり○ 四七如此いへるとき十二の一人あるユダ劍と棒とを持さ
る多れ人々と偕を祭司の長と民れ長老の所より來る 四八イエスと賣す者い
をらに號をあーて曰けるい我が接吻をる者い夫なり之を執へよ 四九直にイエ
スを來りラビ安のと曰て彼を接吻す 五〇イエス彼を曰けるい友よ何の爲を
來るや遂を彼等すよみ來り手をイエスを措て執へぬ 五一イエスと偕を在し
者の一人手をのべ劍を拔て祭司の長れ僕と撃ろの耳を削をとせり 五二イエ
スを彼を曰けるい爾の劍を故處を收よ凡て劍をとる者い劍を亡ぶべ
し 五三我いま十二軍餘の天使を吾父を請て受るあと能ずと爾曹をもふ乎
もし然せた如此あるべき事と錄し聖書を如何で應はん乎○ 五四此時イエ
ス人々を曰けるい劍と棒とを持て盜賊と執ふる如して我と執をきさる乎

日々爾曹と偕ゐ殿ゐ坐して誨しゐ爾曹已を執ざりし五六然ども此の如あるゐ皆預言者の錄さる所ゐ應成せん爲ゐり遂ゐ弟子等をゐイエスと離をて逃去ぬ○五七イエスと執たる者こゝと曳て學者と長老の集をる所の祭司の長カヤパゐ攜ゆく五八ペテロ遠く離をてイエスゐ從ひ祭司の長れ庭ゐまで至ろの結局と見んとて內ゐいり僕と偕ゐ坐せり五九祭司の長等および長老すべての議員ともゐイエスと殺さんとて妄證と求をども得ず多の妄りの證者きさをども亦えず後また妄りの證者二人きさりて曰けるゐ六〇六一ゐの人發ゐ言るゐとあり我よく神の殿と毀ちて三日の內ゐ之と建うべ六二祭司の長たちてイエスゐ曰けるゐ爾に立る證據ゐ如何イエス默然さり六三祭司の長ゐさへて彼ゐ曰けるゐ爾キリスト神の子あるの我ゐんちと活神ゐ誓せて之と告ーめん六四イエス彼ゐ曰けるゐ爾が言る如し且已を爾曹に告ん此のち人の子大權の右に坐し天の雲ゐ乘て來ると岡曹みるべし六五是ゐ於て祭司の長ろの衣と裂て曰ける

ゐ此人ゐ褻瀆ゐとと言り何ぞ外ゐ證據と求んや爾曹も今ろの褻瀆さるゐとと聞ゐんぢら如何ゐもふ乎の答て曰けるゐ彼ゐ死に當をり六七是ゐ於て彼等ろの面ゐ唾ーし且拳ゐて擊りまさ或人ゐを挑いひけるゐキリストよ爾と擊者ゐ誰の我儕ゐ預言せよ○六八ペテロ庭ゐ坐あけるゐ或婢きたりと偕ゐりと曰けをパペテロ凡れ人れ前ゐ此言と肯ざずして我ゐんちが言とゐろと知ずと曰り六九山て門口ゐ至をる時ま他れ婢ゐをと見て其處ゐとる者に曰けるゐ此人もナザレのイエスと偕ゐ在しペテロまさ肯いずして擅ふ我ゐれ人と知ずと七〇暫くありて旁らゐ立たる者すゝを近てペテロゐ曰けるゐ誠ゐ爾もろれ黨れ一人ゐり蓋ゐんち方言ゐんちと顯せり七一是ゐ於てペテロ詛り且誓て我ろれ人と知ずと曰しが頓て雞鳴ぬ七二ペテロイエスの言ゐ憶起し外ゐ出て悲と哭り

第二十七章　平旦にありて凡の祭司の長と民の長老ともゐ謀てイエスと殺

さんとし　二　既ゐ彼と縛ひきゆきて方伯のポンテオピラトに解せり○　三　是ゐ於てイエスと賣しゝユダ彼の死ゐ定らをしと見て悔ろの銀三十と祭司の長長老等ゐ返して　四　曰けるい我僻ゐ於て何ぞ與らんや爾ゞこゞろ當べし　五　ユダろの銀と殿ゐ投棄て其處と去ゆきて自ら縊さり　六　祭司の長等ゐ銀と取て曰けるい此い血の價ゐを寒錢の箱ゐ入べからずとて　七　共ゐ謀ゐの銀ともて旅客と葬る爲ゐ陶工の田と買り　八　故ゐ其田い今ゐ至るまで血田と稱らる　九　是ゐ於て預言者エレミヤゐ託いとをさる言ゐイスラエルれ民ゐ估らを估らをし者の價の銀三十と取　十　主れ我ゐ命ぜし如く陶工れ田と買ぬと有ゐ應へり○　十一　偖イエス方伯れ前ゐたつ方伯イエスゐ問て曰けるい爾ゞユダヤ人れ王ゐるのイエスゐ曰けるは爾ゞ言る如し　十二　祭司の長長老だち彼と訟ふをゞも何の答もせず　十三　是ゐ於てピラト彼ゐ曰けるい此人々ゐんちゐ立る證のゝく大ゐると爾きのざる乎　十四　方伯の甚奇とをるまでゐイエス一言も答せざりき　十五　この祭れ日ゐは方伯より民れ願ゐ任せて一人の囚人と釋れ例あり　十六　時ゐバラバと云る一人れ名高き囚人ありけるを　十七　ピラト民の集りゝとき彼等ゐ曰けるい我バラバの又ハキリストと稱ふるイエスゐる乎ゐんちら誰と釋さんと欲ふや　十八　ゐを娼嫉ゐ由てイエスと解したりと知べあり○　十九　方伯審判れ座ゐる坐りさる時ろの妻いひ遣ゝけるい此義人ゐ爾干るゐと勿を蓋ひを今日夢の中ゐ彼ゐつきて多く憂さりき　二十　祭司の長長老だちバラバと釋ゝイエスと殺さんゐとを求と民ゐ唆む　二一　方伯ゐたへて彼等ゐ曰けるい二人れうち孰と我ゐんぢらゐ釋さんゐとと望むや彼等バラバと答ふ　二二　ピラト曰けるは然をキリストと稱ふるイエスゐ我ゐゐと處べきの衆んふ十字架ゐ釘よとゝ　二三　方伯いひけるい彼ゐゐれ惡事と行しや彼等ます〳〵喊叫て十字架よ釘よと曰ゝ　二四　ピラトろれ言れ益なくて唯亂の起んとをるとをゐり水と取て人々の前よ手をゐふひ曰けるい此義者れ血ゐ我い罪ゐゝ爾曹みづからこれを當よ　二五　民をゐ答て曰けるい其

血い我儕と我儕の子孫よ係るべし　二六 是よ於てパラハ彼等よ釋し　イエスを鞭ちて之と十字架よ釘ん爲よ付し　二七 方伯の兵卒イエスと擄へ公廳
お至り全營と其もとお集め　二八 彼れ衣と褫て絳色れ袍と着せ　二九 棘お編りの首お冠しめ又葦と右手お持せ且ろの前よ跪づき咄弄して曰けるい
ユダヤ人の王安うき　三十 また彼お唾し其葦と取て其首と擊り　三一 咄弄し畢りて其袍ととぎ故衣ときせ十字架よ釘んとて彼と曳ゆく　三二 ろれ出し時クレ
テ人れシモンといふ者お遇けるを強てこれをダ譯を即ち髑髏と云る處お來り　三三 醋よ膽と和せてイエスよ飲せんとせしお嘗て飲ざりき　三四 斯てイエスと十字架よ釘しのち鬮
と拈て其衣と分ふ是預言者れ言よ彼等互よ我が衣を分ひが裏衣と鬮よそとイエスと守をり　三五 また罪標よ此れユダヤ人の王イエスありと書して其首の上お置り　三六 其とき二人れ盜賊イエスと偕よ一人い其右一人は其左よ十字架よ釘らる○　三九 往來れ者イエスと

詈り首を搖て曰けるい　四十 殿を毀ちて三日よ之と建る者よ自己と救へ爾も
し神れ子あらば十字架より下よ　四一 祭司れ長學者長老等も亦おあしく咄弄
して曰けるい　四二 人と救て己が身と救ふこと能ず若イスラエルれ王たらば今
十字架より下るべし然ば我儕これと信ぜん　四三 彼い神よ依賴めり神もし彼
と愛しまば今救ふべし蓋のを我い神の子ありと云し也　四四 同よ十字架お釘
られたる盜賊も同くイエスを詈をり○　四五 晝れ十二時より三時お至るまで
其地あまねく黑暗をある　四六 三時ごろイエス大聲ふエリエリラマサバクタ
ニと呼りぬ之と譯を吾神吾が神あんぞ我と遺たまふ乎と云る也　四七 旁らお
立たる者のうち或人おを聞て彼い
人曰けるエリヤ來りて彼と救ふや否試べし○　四九 イエスまた大聲お呼
りて氣絶たり　五十 殿の幔上より下まで裂て二とあり又地ふるひ磐さけ　五一 墓
ひらけて既お寢たる聖徒の身おほく甦へりイエスれ甦をる後　五二 墓と出て
エリヤと呼るなりと曰　四八 ろれ中れ一
人直お走り往て海綿ととり醋と含せ之と葦お着けてイエスお飲しむ　四九 餘

聖城に入おわくれ人お現れたり○百五十四夫れ長と偕おイエスと守たるもの地震および其有し事と見て甚く懼れ此い誠お神れ子ありと曰り○百五十五此處お遙よ望おたる多の婦ありしイエスお從ひ事し者等あり百五十六其中お居し者いマグダラのマリアとヤコブヨセフの母マリアとゼベダイの子等の母とあり○百五十七日くとてイエスれ弟子あるヨセフと云るアリマクヤ人きたりてピラトお往イエスの屍と請しかバ百五十八ピラトうれ屍と付せと命す百五十九ヨセフ屍と取て潔き布に裹み百六十之と磐お鑿さる己が新しき墓おおき大ある石と墓の門お轉おて去百六十一マグダラのマリアと他のマリアと墓お對て坐し其處お居り○百六十二預備日れ翌日祭司の長とパリサイの人等ピラトの所に集來り曰けるい主よ我儕憶起せり彼の僞者いきて在しとき三日のうち甦らんと言ー百六十三是故よ命じて三日お至まで墓を固守しめよ恐くい其弟子夜きさりて之を竊み死より甦りたりと民お言ん然バ後の惑い先よりも惡勝るべし百六十四ピラト彼等お曰けるい守兵い爾曹おわり往て意のごとくお固守しめよ百六十五是おおて彼等ゆきて石お封印し守兵をして墓を固守せしめたり

第二十八章　安息日終てれち七日れ首の日黎明おマグダラのマリア及び他のマリアろの墓と觀んとて來りしおー二大ある地震わりて主の使者天より降り墓れ門より石と轉し其上お坐ず三容貌い閃電れおとく其衣服い雪れおとく白し四守兵らをと懼戰き死たる者れ如くなりぬ五天使おたへて婦よ曰けるい爾曹れろ、懼るゝ勿れ我あんちらお十字架お釘らをーイエスと尋るおとと知六彼い此お在ず其言る如く甦りたり爾曹きたりて主れ置をー處と見よ七且も急きて其弟子よ告よ彼い死より甦り爾曹よ告ん先ちてガリラヤお往り彼處お於て爾曹のをと見べし我おをと爾曹よ告八婦懼おゐらも甚く喜びて急墓とさり其弟子に告んと走り往り九弟子よ告んとて往ときイエス彼等よ遇て安のをと曰給ひけれも婦すゝみ其足と抱て拜しぬ十イエス彼等お曰けるい懼るゝ勿れ去て我お兄弟よガリラヤお往と告よ彼處

あて我と見べし○十一婦れ去しかば守兵のうち或者ども城に至り凡て有し事を祭司の長等に告しのみ十二彼等と長老あつまりて共に議たはくれ銀子を兵卒に給て曰けるは十三爾曹いへ我儕ご寢たる時それ弟子夜きたりて彼を竊りと十四此事もし方伯に聞るとも我儕ら之をなだめ爾曹よ憂慮なからしめんと十五乃ち銀子を取て嘱めらるる如せさり是よ於て此れ如き話今日に至るまでユダヤ人の中に傳播らをさり○十一十六れ弟子ガリラヤよ父と子と聖靈の名よ入て弟子とし往てイエスれ彼等よ命じ給ふ所の山に至り十七イエスと見て拜せを然も疑へる者もありき十八イエス進て彼等と語いひけるは天れうち地れ上の凡れ權を我に賜をり十九是故よ爾曹ゆきて萬國の民に施し之を且わが凡て爾曹よ命ぜし言を守をと彼等よ教よ夫見をい世れ末まで常よ爾曹と偕よ在なりアーメン

馬太傳福音書終

新約全書馬可傳福音書

第一章 一神れ子イエスキリストれ福音れ始あり二預言者れ錄して視よ我あんぢれ面前よ我使ごを遣さん彼あんぢれ前よ其道ごを設くべし三野よ呼る人れ聲あり云く主れ道ごを備へ其徑すぢごを直せよと有が如く四ヨハヂ野よ於てバプテスマごを施し罪れ赦ごを得させんがの爲よ悔改れバプテスマごを宣傳たり五ユダヤれ全國れよびエルサレムれ人々のれよ來りて各々己れ罪ごを認めしロルダンといふ河よてバプテスマごを受六ヨハヂよ駱駝れ毛衣ごを着腰よ皮帶ごをつのれ蝗蟲ごと野蜜ごを食へり七のごを宣傳けるよ我より勝をる者己が後よ來らん我よ屈て其履れ紐ごを解よも足ず八我よ水ごをもて爾曹よバプテスマごを施すべし○九當時イエスがリラヤれナザレより來りヨルダンにてヨハヂよりバプテスマごを受十頓て水より上れるご見さり天開れ靈鴿れ如く其上よ降るご見さり十一又天より聲ありて云あんぢよ我が愛子ごが悦ぶ所れ者ありご○十二斯て靈たゞち

ゐイエスと野ゐ往ーむ 十三 ゐれ四十日野ゐ在てサタンゐ試られ獸と共ゐと
れり天れ使等ゐとゐ事ぬ○ 十四 ヨハヂれ囚れー後イエスガリラヤゐ至り神
れ國れ福音と傳いひけるい 十五 期い滿り神れ國ゑ近けり爾曹悔改めて福音
と信ぜよ○ 十六 イエスガリラヤれ湖れ邊と歩る時シモンと其兄弟アンデレ
れ湖ゟ網うてるを見る彼等い漁者なり 十七 イエス彼等ゐ曰けるは我に從へ
我爾曹と人を漁る者とせん 十八 彼等さゝちに其網と棄て之ゐ從へり 十九 此よ
り少ー進行せべダイれ子ヤコブとろれ兄弟ヨハヂれ舟ゐ在て網つくろふ
と見て 二十 直ゟ彼等と召給ひーあた其父ゼベダイと傭人と共ゟ舟ゟ遺て彼
ゐ從へり○ 二一 彼等カペナウムゐ至るイエス即ち安息日ゐ會堂に入て敎と
爲ーゟ 二二 人をそれ敎と駭き合り蓋學者の如あらず權威と有る者の如く
敎さゝへぼ也 二三 其會堂ゐ汚さる鬼ゐ憑さる人ありて 二四 喊叫いひけるい 唉ナ
ザレれイエスよ我儕い爾と何れ與り有んや爾きさりて我と滅ぞ其我あん
ぢい誰ある乎と知すあいち神れ聖ある者あり 二五 イエス之と責て曰けるい
靜と發すあと勿を其處と出よ 二六 汚たる鬼ろれ人と拘擊させ大聲ゟ叫びて彼
と山さり 二七 衆人ゑゐ驚き相問て曰けるい是何事ぞや是いのある新しき敎
ぞや汚たる鬼さへ權威ともて命じけをバ從へり 二八 是ゐ於てイエスれ聲名
偏くガリラヤの四方ゟ播りぬ○ 二九 彼等やがて會堂と出ヤコブ及ヨハ
ネと共ゟシモンアンデレれ家ゐ至しゐ 三十 シモンれ岳母熱と病て臥あけを
バ或人たゞちゐ之とイエスゐ告 三一 イエス往て其手ととり彼と起しけをば
熱さちまち去ぬ斯て其婦のをらゐ供事さり 三二 夕のさ日の落とき人々すべ
て病と患へるもれ鬼ゐ憑さる者とイエスゟ携へ來る 三三 ろれ邑ゑぞりて
門ゟ集をり 三四 イエス各樣れ病と患へる多れ人々を醫し又多れ鬼と逐出ー
鬼れ言ふ事と許をゞりき蓋鬼のをと識さるゟ因てあり○ 三五 昧爽ゐイエス早
く起人ゑき所ゐゆき其處ゐて祈禱せり 三六 シモンれよび彼と共ゐ在し者等
ろれ跡と蒐ゆき 三七 彼ゐ遇て曰けるい衆人をゐ爾と尋ぬ 三八 イエス彼等ゐ曰
けるい我は敎と宣傳る爲ゐ附近れ鄉村へ往ん我ゑきが爲ゟ來

れ ば 也 イエス 遍 く が リラヤ 𤲿 國 と 經 めぐ り 其 會 堂 お て 教 を 宣 且 鬼 と 逐
出 せ り ○ 四十 癩病 れ もの 一人 の 來 り て 跪 き 求 ひ 曰 け る い 爾 もし 聖意 よ
適 と 𠮟 れ 我 を 潔 く 爲 得 べ し 四一 イエス 憫 と て 手 と れ べ 彼 お 接 て 我意 よ 適 へ
り 潔 あ る と 四二 言 や いな 直 ち に 癩病 さ あ を 其 人 きよ まれ り 四三 四四 イエス 嚴 く 之 と
戒 め 愼 みて 何 とも 人 よ 告 る 勿 れ 但 ゆき て 己 が 身 と 祭司 お 見 せ 其 潔 らを し 爲
よ モーセ が 命 ぜ し 所 れ 物 と 獻 て 彼等 に 證據 と あ せ と 言 て 去 しめ たり 四五 然
ども 彼 いで 〻 先 あれ 事 と 大 よ 言つ さへ 語 り 廣 めけ る ゆ イエス 此後 あらい
お 城 お 入 が さ く 獨 人 あき 所 お 居 給 ひ し が 人々 四方 より 彼 お 來 きり

第二章 數日 の 後 イエス 彼 カペナウム お 來 しお 二 彼 れ 室 お 居 よ と 聞 えけ を
た 直 お 多 れ 人々 集 きたり 門 お 立 べ き 塲處 さ 〻 もあき 程 なりき 三 イエス
彼等 お 救 と 宣 ふ 此 お 癱瘓 と 病 たる 者 を 四人 お 舁 せ イエス お 來 きる 者 あり
しが 四 群集 おより て 近づき 難 のりけ き た 彼 れ 居 ところ れ 屋蓋 と 取除き 癱
瘓 れ 人 と 床 れま 〻 縋下 せり 五 イエス 其 信仰 と 見 て 癱瘓 れ 人 お 曰 けるい 子

よ 爾 れ 罪 赦 さをさり 六 數人 れ 學者 てふ お 坐 し 居 ーが 心中 お 謂 けるい 七 斯
人 い 何故 ぞく 惡口 と 言 の 神 お あらずして 誰 の 罪 と 赦 すこと と 得 んイエ
ス 直 お 彼等 が 心中 お 斯 れ 如 き 事 と 論 すると 自 ら 其 心 お 知 て 彼等 お 曰 けるい
爾 曹 ぁんぞ 心中 お 斯 る 事 と 論 ずる 乎 九 癱瘓 れ 人 お 爾 れ 罪 い 赦 さをさりと
言 と 起 て 爾 れ 床 を 取 て 行 と 言 と 孰 を 易 や 十 ろき 人 れ 子 地 お て 罪 と 赦 すれ 權
威 あること と 爾 曹 お 知 せんと て 遂 お 癱瘓 れ 人 お 十一 我 ぁんぢ お 告 おきて 床
と 取 ぁんぢ れ 家 お 歸 きと 曰 けるを 十二 彼 れ 人 さ〻ちよ 起 て 床 と とり 衆人 れ
前 おいつ 衆人 をお 駭 き 神 と 崇 めて 曰 けるい 我儕 いまだ 斯 れ 如 こと と 見 し
こと なし ○ 十三 イエス また 海邊 に 往 しお 人々 をお 彼 お 來 けるを 是等 と 教 ふ
十四 此 より 進 てアルパヨ れ 子 レビ といふ 者 れ 稅吏 れ 役所 お 坐 し 居 けるを 見
て 我 お 從 へと 曰 けるを 彼 さちて 從 へり ○ 十五 斯 てイエス それ 家 よて 食 する
時 おほく れ 稅吏 罪 ある 人々 イエス 及 び 弟子 と 共 お 坐 せり 是等 の 者 許多 あ
りてイエス お 從 ひぬ 十六 學者 とパリサイ の 人 この を が 稅吏 おより び 罪 ある 人 と

共ゐ食そるを見て其弟子よ曰けるゐ何もゐ稅吏罪ある人と共ゐ食飲する
乎 十七 イエス聞て彼等よ曰けるゐ康強ある者ゐ醫者の助を需ず唯病ある者
ゐとを需ひが來しゐ義人を召ためゐ非ず罪ある人を召て悔改させんが爲
ゐり○ 十八 ヨハヂ其弟子おゐびパリサイ人つねゐ斷食そる事ありけるを
彼等イエスゐ來いひけるゐ ヨハヂ其弟子とパリサイ人弟子ゐ斷食するゐ
爾れ弟子ゐ何ゆゑ斷食せざる乎 十九 イエス彼等よ曰けるゐ新郎れ朋友それ
新郎と共よとる間ゐ斷食そるみとを得べき乎 二十 將來ゐをら新郎
隱食するみとを得し ニ十一 將來ゐをら新郎とととらるゝ日きたらん其日ゐゐ斷食
そべき也 ニ一 新ーき布を舊衣ゐ縫つくる者あらじ若し然せば其新ゐ補へる
もれ舊を縮たして其破のへつて惡あるべし ニ二 亦あたらしき酒を舊き革囊
ゐいるゝ者あらじ若し然せば新酒ゐ其囊を破裂て酒もをいで革囊も亦壞
るべし新酒ゐ新ーき革囊ゐ盛べきもれ也○ ニ三 偖イエス安息日ゐ麥れ畠と
過りーよ其弟子あゆをつゝ麥れ穗を摘とじめけをば ニ四 パリサイれ人彼ゐ曰

けるゐ彼等安息日ゐ爲せじき事とそる乎 ニ五 イエス答けるゐ何故ぞ
及び從ゐ在し者れ乏くーて飢ーとき行たる事と未だ讀ざる乎 ニ六 即ち祭司
れ長アビアタルれとき神殿ゐ入て唯祭司れ外ゐ食せじき供物れパンと食か
つ從ゐ在し者よも與さりまさ彼等よ曰けるゐ安息日ゐ人乃爲ゐ設らを
たる者よーて人ゐ安息日の爲ゐ設らをさる者ゐ非ず ニ七 然ば人の子ゐ安息
日ゐも主さる也

第三章

イエスまた會堂ゐ入しゐ一手枯たる人ありけるが ニ 衆人イエスと
訟んとして彼ゐ此人と安息日ゐ留すや否と覗へり ニ イエス手枯たる人ゐ
曰けるゐ中ゐ立よ ニ また衆人ゐ曰けるゐ安息日ゐゐ善を行と惡と行と生
るを救ると殺すと孰とゐ爲べき彼等默然たり ニ イエス怒と含て環視し彼
等が心の頑硬なるを愛へ手枯たる人ゐ爾の手と伸よと曰けをば彼れ手
を伸しゝゐ即ち他の手のおとく愈たり ニ パリサイの人いでゝ如何してゐ
イエスと殺さんと直ゐへロデの黨ゐ和謀りぬ○ ニ イエスろの弟子と共ゐ

海邊ゟ退しゐ多ゖ人々ガリラヤより彼ゐ從へり又ユダヤ、エルサレム、イ
ドマヤ、ヨルダンゖ外ゎたツロとシドンゖ邊より多ゖ人々イエスの行爲事
と聞て彼ゐ群り來るルイエス人々ゖ群集ゐ因て擠あやゎさるゝ事あらん
爲ゐ小舟ゎ我ゐ備おけと其弟子ゐ曰り　是イエス數多ゖ人々ゎ癒しゝ
ゐ因て凡て疾ある人ゎ手あて彼ゐ捫んとて擠逼しが故あり　十一ゎた汚たる
鬼ゐゎ彼ゎ見て其前ゐ俯伏さけびて爾ゎ神の子ありと曰しと　十二イエス彼等
ゐ我と揚そこと勿をと嚴く戒めたり○　十三イエス山ゐ登て其意ゐ遠ふ所の
者ゎ召しゐゎ來りて彼ゐ就り　是ゐ於て十二人ゎ立て已ゎ偕ゐ置ゎた數
ゎ宣傳る爲ゐ遣しあつ病ゎ醫し鬼ゎ逐出すの權威ゎ授く　十五乃ちシモン
ゎペテロと名けゎせベダイの子ヤコブと其兄弟ヨハネとゎ名く之ゎ雷の子
ゐりと曰　十八又アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、
トマ、アルパイの子ヤコブ、タッダイ、シモン、又イスカリオテの
ユダ此等ゎイエスゎ賣しゐ者あり　二十此等の者家ゐ入しゐ多の人々ゎまた來り

集りけるゆゑパ食ゎする暇もあらざりき　二十一其親屬きゝて彼ゐ狂氣せりと言て之
ゎ拏んとて來る　二十二又エルサレムより下きる學者等ゎ彼ゐベルゼブルゐ憑
きゐり且鬼の王ゐ藉て鬼ゎ逐出すありと曰り　二十三イエス彼等ゎ召び譬ゎ以
て曰けるハサタンゎ何でサタンゎ逐出し得んや　二十四もし國おれゐ仕て分
爭ゐゎ其國立べからず　二十五また家おの者ゐゎ仕て分爭ゐゎ其家立べからず
若サタンゎ己ゐ悖り起て分爭をゐゎ彼たゞ可らず反て終るあるべし　二十六誰ゐ
て強勇士の家ゐ入て其家具ゎ奪んとせゎ先勇士ゎ縛らざれゞ奪ふこと能
ゎた縛て後その家ゎ奪ふべしゞわれ誠ゐ爾曹ゐ告ん人の凡の罪と瀆をゎ所
の竇瀆り者ゐ限ふく赦さる可らず限なき刑
罰ゐ干らん　三十斯いへるゐ人々ゎオ惡鬼ゐ憑たりと言しが故なり○　三十一
其の兄弟と母と來りて戸外ゎたち人ゎ遣してイエスゎと呼しむ　三十二多の人々
イエスゎ環て坐したりしゐ彼ゎ曰けるゐ視よ爾れ母と兄弟戸外ゐ在て爾
ゎ尋ゐゎ　三十三イエス答て曰けるゐ我母と兄弟ゐ誰ぞや　三十四斯て側ゎ坐する人

々と環視して曰けるい我弟と母が兄弟と見よ
お兄弟わお姉妹と母ありり

第四章

一エスまた海濱よて敎訓を始めお多き人やうをお集りけるを彼舟
お乘て坐し凡の人衆い海お沿て岸よ立りニかを譬ともて多の事と彼等お
敎ふ敎へて曰けるい三聽よ播播もの播んとて出四播るとき或種い路の傍お
遣しが空の鳥きたりてそを食へり五或種い土うすき磽地お遣しが土深の
らねば直お萌出さを六日出しうのぼ暴を根あきが故お枯さり七或種い棘
の中お遣しが棘ろだちてそと蔽けきが實と結ることと或い三十倍或が六十倍あるひい
遣しが其面はえいでし繁り實と結ばざりきまた或種い沃壤お
百倍せり九まき彼等お曰けるい耳ありて聽ゆる者い聽べし一〇エスの側お在し者と十二弟子と此譬と問おがニエス彼等
さりし時ネ凡の譬と識みとと得んやニ一ろを播者い敎と播るり一二道ね播きて路の傍お遣
ありて神の國れ奥義と爾曹お賜へど他の者おい凡て譬と以
てす一三是かをら視とき視ても見ず聽とき聽ても聽らず心と改めて其罪の赦と

260340

得ざらん爲ありニ三また彼等お曰けるい爾曹お此譬と知ざるお然ば如何ぞて
凡の譬と識みとと得んやニ四播者い敎と播るり一五道ね播きて路の傍お遣
ありれい人道と聽しとき直お撒去ダンに來て其心お播きさる道と奪取ありニ六
また磽地お播きさるものい人道と聽しとき直お喜びて之と受ニ七然ども已お
根あきが故さ暫時乃ち後道の爲お患難あるひい迫害お遇ときい忽ち磽く
者ありニ八又棘の中お播れさるものいれい人ありと聽ども此世の思慮と貨
財れ惑まさ各樣れ情欲いり來りて道と塞おり結ざる者ありニ九
沃壤お播きさるものいれい人道と聽て之をうけ或い三十倍あるひい六十倍
あるひい百倍れ實と結ぶ者なりニ〇ニまた彼等お曰けるい燈を持來りて斗
れ下あるひい牀れ下に置もれ有んや之と燭臺れ上お置ならず乎ニ一隱て明
ばよあらさるいあく藏て露をざる者いあし ニ二耳ありて聽ゆる者い聽べし
ニ三また彼等よ曰けるい爾曹が度る所れ量をもて爾曹も
度らるべし聽さる爾曹はいおほ加ら益ん ニ五ろを有る者いお益與らを無有

者い有る物とも取るゝ也○二六 また曰けるい神は國い人種と地よ播が如し
二七 日夜起臥そる間に種はえいでゝ成長ざも其然る故と知ず○二八 ろを地い自
ら實と結ぶもけおーて初おい苗つざに穗いで穗の中お滿したる穀と結
ぶ○二九 既お熟ば穫時いたるに因て直よ鎌と入さする也○三十 また曰けるい神
れ國い何お比へ何の譬と以て之と喻ん○三一 一粒れ芥種れおとし之と地よ播
ときい百様れ種より微けきご○三二 既に播て萌出るば百様の野菜よりい大く
の汀亘る枝と出ーて空れ鳥そのの蔭お棲ほどに及あり○三三 イエス彼等れ
聽得とおろよ循ひ多のゝる譬と以て敎と彼等お語をり○三四 譬お非ざをた彼
等に語らずイエスろれ弟子と共お居るとき彼等よ悉く之と解聽せり○三五
偖それ日の夕暮イエス彼等に向れ岸よ渡をと曰けをば○三六 弟子たち衆人と
歸らせイエスれ舟お在しと其さまゝ之と偕お濟れり又他れ小舟もとも往
と時お颶風おあり浪うちみとて殆ご舟お滿○三七 イエス艄れのたお枕して
寢たりしが弟子うをれ目と醒して曰けるい師よ我儕が溺るゝとも願み給
はざる乎○三八 イエス起て風と戒め且海お靜りて穩かお爲と曰けをば風やみ
て大お和たり○三九 斯て彼等お曰けるい何故のく懼るゝや爾曹あんぞ信ある
乎○四十 彼等甚しく懼を互お曰けるい風と海さへも順ふ是誰あるぞ耶

第五章

○一 かゝら海と濟てガダラ人れ地よ着○二 舟よりイエス上をるとき惡
鬼お憑をさる人さだちお墓間より出て彼よ遇○三 これ人ど墓間と居處とせ
り廣次桎梏と鏈ともて繫ぐも鏈と○四 うちきり桎梏と打碎により之と繫うる
者あく亦誰も之と制し得もれ無りき○五 夜も晝も恆に山と墓間に於て喊叫
ざさ石ともて己が身よ傷つけぬ○六 彼とるのにイエスと見て趨より之と拜
ー○七 大聲お呼りけるは至上神れ子イエスよ我あんぢと何れ與り有んや我
神よ託て求ふ我と苦むるみと勿をン○八 是イエス惡鬼よ人より出よと曰しお
因てあり○九 イエス彼お爾れ名い何と問ーに答けるい我濟れほきが故お我
名とレギヨンと云○十 切に此土地より我濟と逐出す勿をとイエスよ求さり
○十一 茲お多れ豕れ群山お草と食あたりしが○十二 凡れ惡鬼うをよ求て我儕と遣

て家よ入せよと曰けをバ 十三 イエス直ゐ彼等ゐ許せり汚たる鬼ろれ人より
出て豕ゐ入〳〵るを約ろ二千匹ばかれ群はげしく馳くだり山坡より海ゐ落
て海ゐ溺ぬ 十四 牧者どもも逃ゆきて此事と邑また鄉村に告けをば往衆人其あり
し事と覩んとて出 十五 イエスゐ來りて惡鬼ゐ憑きたる者すあいちレギヨン
と持さり去人の衣服を着け慥ある心ゐて坐し居けると見て懼あへり 十六 此
事と見し者どもも惡鬼ゐ憑たりし者れ事と豕れ事と彼等ゐ告けきを 十七 頓
てイエスゐ其境と出んあとと求ぬ 十八 イエス舟ゐ登んとせしとき惡鬼ゐ憑
たりし者ともゐ居んあとと求けきどもイエス許すして彼ゐ曰けるい爾
れ家ゐ歸り親屬ゐ往て主れ爾ゐ行し大ある事と爾と憐みし事と告よ 二十 彼
ゆきてイエスれ己ゐ行たまへる大ある事とデカポリスゐ宣揚〳〵けをバ衆
人みゐ駭きあへり ○ 二 イエス舟ゐ乘て復海れ彼岸ゐ渡しよ大勢れ人々彼
ゐ集るイエスい海ゐ近ときり 二二 會堂れ宰ヤイロといふ人きたりイエスと
見て其足下ゐ伏 二三 切々ゐ求いひけるは我いとけあき女死る顏ゐありぬ之

と救ん爲ゐ來りて手と彼ゐ按たまへ然バ女い生べし 二四 イエス彼と共ゐ往
とき衆多れ人々彼ゐ從ひて擁あへり 二五 爰ゐ十二年血漏と患たる婦あり 二六
此婦れはくれ醫者れ爲ゐ甚だ苦めらを其所有とも盡く費しけきどもなほ何れ
益もあく轉て惡ろうしぐ 二七 イエスれ事と聞て群集の中より彼れ後ゐ來ろ
れ衣ゐ捫きり 二八 是ろれ衣ゐだに捫らを愈るべしと曰バあり 二九 斯て血れ漏る
あと直ゐとより既ゐ疾いえしと其身ゐ覺たり 三十 イエス自ら能力れ己より
出たるを知れほぜいれ人々と顧みて曰けるい我衣ゐ捫りし者は誰ある 三一 弟子ろもと曰けるは群集れ人々れ爾ゐ擁あふと見て我ゐ捫りし者い誰
ぞと曰たまふ乎 三二 イエスみれ事と行る婦と見んと環視しけきバ 三三 婦れろ
を戰慄れが身ゐせらをし事としりて來て彼れ前ゐ俯伏みとく實情と
告 三四 イエス彼ゐ曰けると女よ爾れ信あんちと救り安然よーて往あんちれ
疾いゆべし ○ 三五 イエスみの事と言るうちゐ會堂れ宰の家より人々來り
て曰けるい爾れ女すでゐ死たり何ぞ師と煩はす乎 三六 イエス直ゐ其告る所

ば言とき〻會堂は宰ゐ曰けるを勿たゞ信ぜよ三―イエスペテロとヤコブ及ろれ兄弟ヨハネ℄れ外ゐ誰ゐも共ゐ往ゐとを許さゞりき既ゐ會堂れ宰れ家ゐ來りて人々れ忙亂いたく哭泣と見る三六入て彼等ゐ曰けるは何ぞ忙亂の何哭や女ゐ死るゐ非たゞ寢たる耳彼等イエス℄嘲笑ふ三七―イエス凡れ人々を出し女れ父母とろれ從へる者等を率ほ女れ臥たる所ゐ入四二女れ手と執てこゐ曰けるはタリクーミとい℄ふ譯あり女よ我ゐんぢゐ命ず起よと四三直ゐ女れきて行めり彼は年十二歳あり彼等はあそだ駭きぬ―イエス此れ事と人ゐ知せる勿をと嚴く戒め又女ゐ食物と與よと命じさり

第六章

―イエス此と去て故鄉ゐ到しゐ其弟子も彼ゐ從ひぬ二安息日ゐ及けるとき會堂ゐて教へしむ衆人℄れと聞て奇み曰けるは如何して此人ゐ斯のおとき事あるゐ誰より此智慧と授らをて如此ふしぎある事とも其手より行ゐ三彼は木匠ゐ非ずやマリア―れ子ヤコブ―ヨセ―ユダ―シモン―の兄弟ゐ℄て其姉妹も此ゐ我儕と共ゐ在ゐ非ずや遂ゐ人々をのをゐ躓けり四―イエス彼等ゐ曰けるは預言者いろの故鄉ろの親戚ろれ室家の外ゐ於れ尊をざるおさるおき―イエス彼處ゐて患者ゐ手を按たゞ數人と醫しゐ外ふしぎある事を行ゐと能ざりき五また彼等の信ぜざると奇ゐ遂ゐ諸鄉と經巡て教へをせり〇―イエス十二れ弟子と召て彼等と二人づゝ遣さんとして之ゐ惡鬼と逐出す權威と授け八且ゐらゐ命ぢけるは一の杖の外い旅れ用意ゐ何をも携ふのを旅袋糧食また金とさ携ずたゞ履とき二れ衣ときるを勿を＋また彼等に曰けるは何處ゐてら人れ家ゐ入をそれ所と去までい其處ゐ居＋一凡て爾曾と接ずおんぢらゐ聽ざる者おい其處と去とき證れため足下れ塵と拂へ我ゐまおとゐ爾曾ゐ告ん審判れ日いたらたソドム―ゴモラい此邑よりも却て易るべし＋二弟子たち出て人々ゐ悔改む可おとと宣傳へ＋三また多れ惡鬼と逐出し又多れ病る者ゐ膏と沃て醫しぬ〇―イエスれ名揚りけをゝ―ヘロデ王ゐきと聞て曰けるはバプテスマと施しゐヨハネ死

より赴き之を奇異あるに能とあす也 十五 或人いへ之とエリアありといひ或いは往昔れ預言者れ如き預言者ありと曰 ヘロデ之と聞て曰けるハ是ヒの首斬ハネ所れたる也 爰ヘロデろれ兄弟ピリポれ妻ヘロデヤれ事ヲ因て人と遣ヨハネと捕て獄ヲ繋げり 蓋ヘロデが彼れ婦と娶しヨハネ諫て爾兄弟れ妻と納れ宜ろらずと曰るヲ因てあり 十九 ヘロデヤ彼を怨て殺さんと欲しものゝ能ざりき 二十 ヘロデハヨハネを義あり善ある人と知て彼と敬ひ彼と保護のをヲ聞て多れ事と行ひ且喜びて彼ヲ聽あとせり 二一 斯てヘロデろれ誕生の日もろ〳〵れ大臣千人れ長およびガリラヤの尊き人々ヲ享宴とあせる機會の日いたりけれ之 二二 ヘロデヤれ女きたりて舞とあーヘロデと其席ヲ列きる人々を樂ましむ王ろれ女ヲ曰けるハ何あても我ヲ求へ爾が望とあろの者れ我あんぢヲ與ふべし 二三 又彼ヲ凡ろ爾が求るものハ我ヲ領分れ半ヲ至るとも爾ヲ與んと誓ふ 二四 女いでゝ其母ヲ何と求べき乎と曰けるを母乃ちバプテスマれヨハネが首と曰り 二五

女たゞちヲ急ぎ王ヲきさり求てハプテスマれヨハネが首と盆ヲ載て即時ヲ我ヲ賜へと曰 二六 王甚だ愛けるとも同席の者の故とをもて之と拒むことを欲ず 二七 王たゞちヲ遣しけるを彼ゆきて獄ヲ於て之を斬 二八 其首と盆ヲれせ携來りて女ヲ與ふ女いと其母ヲ與さり 二九 ヨハネれ弟子等これ事と聞て來り其屍と取て墓ヲ葬りぬ〇 三〇 使徒等イエスヲ集りて行へる事と教しる事と悉く彼ヲ告 三一 イエス彼等ヲ曰けるハ爾曹衆と避て我と偕ヲ暫く寂寞ところヲ往て休むべし是往來れもれ多して食するる暇も無りしが故あり 三二 のきら人と避舟ヲて寂寞とヲろヲ往り 三三 其往と見て衆人おほく イエスと ろり諸邑より歩行ヲて趨り彼等の往んとする所へ先ち往てイエスヲ集きり〇 三四 イエス出て多れ人と見ヲ彼等れ牧者ヲき羊れ如き者あるヲ因て之と憫ミ許多れ事と教とおめぬ 三五 時既ニ晩ニそヲ弟子が之ヲ來いひけるハ此ハ寂寞ところヲおして時も既晩し 三六 衆人れ食ふべき物ヲきが故ヲ其自ら

四周れ鄉村ゐ往てパンと市んゞ爲ゐ彼等と去（めゝ給へ　イエス答けるい
爾曹こをゐ食と與よ弟子ゐをゐ曰けるい我儕ゆきて銀二百のパンと市うを
らゐ與て食しむ可ゐ　イエス彼等ゐ曰けるとパンい幾何ある往て視よ
彼等みて其數と知り五れパンと二れ魚ありと答ふ　イエス衆れ人と組々く
よして青草れ上ゐ坐しめよと命じけるを　或い百人或い五十人つゝ列坐
せり　イエスろれ五のパンと二れ魚とをとり天と仰ぎ謝してパンとをり弟
子ゐ與て人々れ前ゐ陳しむ又二れ魚と毎人ゐ分與ゐ　衆人みゐ食て飽
ろれパンと魚れ餘屑と拾しゐ十二れ筐ゐ盈たり　パンと食たる男ゐよろ
五千人ありき○　直ゐイエスろれ弟子と強て舟ゐ乘むるふの岸ある
ベサイダへ先わさらしめ己い衆人と歸しまれち解れ爲
ゐ山ゐ往り　日暮て舟い海れ中ゐ在イエスい獨り陸ゐ居り　風逆ふゐ因
て弟子等の舟と棹ゐ勞さるを見て曉の四時おろイエス海の上と履きさり
彼等と過んとせしゐ　弟子ろの海と履るを見て變化の物ゐらんと意

ひ叫びさり　蓋弟子みゐ之と見て懼しが故ありイエス直ゐ彼等ゐ語りて
曰けるい心安のを我ありり懼るまこと勿れ　遂ゐ舟ゐ登しうを風やみぬ彼
等心の中ゐ驚き異めるを甚だし　是ろの心の愚頑ゐ因てパンの奇跡とも
發さりしを也○　既ゐ濟ゲチサレといふ地ゐ到て舟泊せり　彼等舟より出
しゐ幾て人々イエスと知て　偏く其四方の地へ馳ゆき病る者と床れ盛ゐ
て昇ひイエスれ在を處々と聞出しい鄉ゐるひい邑ゐるひい村ろれ街市ゐ病る者と置て彼ゐ其衣れ裾ゐだゐ
捫らせ給へと求り乃ち捫るはをれ者いみゐ愈さり

第七章　パリサイの人と或學者だちエルサレムより來りてイエスの前ゐ集
り　彼の弟子れ中ゐ潔らざる手即ち盥ざる手ゐてパンと食そる者ありし
と見て之と責めたり　蓋パリサイれ人とユダヤれ人々いみゐ古人の遺
傳と守りて其手と潔おらざをや食せず　市より歸きさりて盥ざをや亦
食せず此ほの杯槻鍋および牀と洗ゐ多端の遺傳と受守れり　是ゐ於て

パリサイの人と學者等イエスを問けるは何ゆゑ古れ人れ遺傳を違はずして盥ざる手と以てパンを食する乎　七　イエス答て彼等を曰けるはイザヤは僞善者なる爾曹を指てよく預言せり其錄しるす言を此民は唇を以て我を敬へども其心は我より遠かり　八　人れ誡を棄て人れ遺傳を守るなり　九　又曰けるは爾曹は神れ誡を棄て己れ遺傳を守んとて能も神れ誡を行ふ　十　また彼等を曰けるは摩西は爾曹の父母を敬へ又父母を詈る者は殺るべしと言り　十一　然るに爾曹は人父母に曰ふもし人父あるひは母を對て爾と爲ふべき物はコルバン即ち禮物ありと曰へば事ずとも可と　十二　而して人れ其父あるひは母れ爲に何とも行ふを爾曹許す　十三　斯爾曹ら其教る所の遺傳ともて神の道を廢うそ又おほく此類の事を行ふ　十四　イエスまた衆庶を召て彼等を曰けるは爾曹みな我言を聽て悟れ　十五　外より人を入るものゝ人を汚し能ず汚すと能ゐ者然ら人より出るものゝ人を汚す也　十六　聽ゆる耳ある者は聽べし　十七　イエス衆庶を離れて室を入るに其弟子たちへの意を問ければ　十八　彼等を曰けるは爾曹もおほ悟ざるの凡そ外より人を入るものゝ人を汚し能ざる事を知ざる乎　十九　蓋ろの心を入ず腹を入て厠を遣すゐゐち食ふ所れもれ潔をり　二十　又曰けるは人より出るもれ惡念姦淫苟合兇殺　二一　盜竊貪婪惡慝詭譎好色嫉妬謗讟驕傲狂妄あり　二二　是等れ惡行いとゐ內より出て人を汚すもの也　二三　イエス此を去てツロ　二四　シドン地ゐゆき家を入て人ゐ知をざらん事を欲るが隱を得ざりき　二五　その惡鬼を憑たる幼き女を有る婦イエスの事を聞て來り其足下を伏たるを　二六　因てあり　二七　その婦はギリシヤ生をしシロピニシヤ生をしれ者あり　イエスを求り　二八　イエス彼を曰けるは先兒女を飽ーむべし兒女れパンを取て犬を投るは善らず　二九　婦曰けるは主よ然さを必犬も桌杜下を在て兒女れ遺屑を食ふ也　三十　イエス婦を曰けるは此言を因て歸よ惡鬼は爾れ女より出たり　三一　婦ろの家を歸しを惡鬼

既ゐ田て女れ牀ゐ臥たるを見る○三 ―― イエスツロとシドンの地を去てデカ
ポリスれ地を過がりテヤれ海ゐ至きり 三二 人々聾れ訥る者を ―― イエスゐ携來り
て手を按給ん事を求けをバ 三三 ―― イエス衆人を離き之を外へ携もき指を其
耳ゐさしいを又唾して其舌ゐ捫り 三四 且天を仰て嘆じ其人ゐ對てエッバタ
と曰ゐをと譯バ啓よとの義なり 三五 直ゐ其耳ひらけ舌れ絡ゆるみて正く言
へり 三六 ―― イエスこれを人ゐ告る勿をと彼等を戒むをば戒むるほど益々言揚しぬ
三七 衆人はゐたゞしく驚きて曰けるい此人れ行し所みと〳〵く善あるひい
聾と瘖えさせ或い啞者を言はしめたり

第八章 三 當時ゐ何をる人々甚だ多りしが何の食物も有ざりけをバ ―― イエス
其弟子を召て曰けるい 二 我ゐれ多の人々を憫む既ゐ三日迄れともゐ居
志ゆゑ今ゐゐも食物ゐー 三 もし飢ーまゝ其家ゐ歸さを途間ゐて憊ん
其中ゐ遠處より來をる者ゐをバ也り 四 弟子こたへ
處よりパンを得ゐれ人々を飽志めん乎 五 ―― イエス彼等ゐ問けるい パン幾何
ゐるや七と答ふ 六 ―― イエス人々ゐ命じて地ゐ坐せーめ七れパンを取て謝し
之をり人々れ前ゐ陳ぬめんが爲うれ弟子ゐ與けをバ即ち人々れ前ゐ陳
り 七 また小き魚を些須もてり之をも祝して人々れ前ゐ陳と曰 八 人々み
をを食て飽るれ餘屑を七れ籃に拾り 九 之を食る者おほよそ四千人ゐり乃
ち ―― イエス之を歸ーぬ○ 十 ―― イエス直に其弟子と共ゐ舟ゐ乘てダルマヌタれ
方ゐ往志ゐ 十一 パリサイれ人いでゝ彼と ―― 試んがため天よりれ休徴を求めて
詰之じ 十二 ―― イエス心れ中ゐ深く歎息あて曰けるい此世乃人ゐんぞ休徴を
求るや賦ゐ我ゐんぢらゐ告ん休徴い此世れ人ゐ必す與らをじ 十三 ―― イエス彼
等を離をて復舟ゐ乘むのふれ岸ゐ濟をり○ 十四 さて弟子パンを携ふることを
と忘さて一れパンれを舟ゐ有き 十五 ―― イエス彼等を戒めて曰けるい戒心ゐて
パリサイの人れ麪酵と ―― ヘロデれ麪酵とを愼めよ 十六 弟子たがひゐ論じて曰け
るい是パンを携へざりし故ゐらん 十七 ―― イエス之を知て彼等ゐ曰けるい何
ぞ互ゐパンを携へざりし事を論ずるや未だ悟ざるか爾曹れ心ゐほ頑ゐ

目ありて視ざるの耳ありて聽えざる乎また憶ざる乎　十九我五千人を五のパンと擘あたへし時うれ餘屑と幾筐をうひしや答けるい十二あり　二十又四千人を七のパンと擘あたへし時うの餘屑と幾筐をうひしや答けるい七あり　二一イエス彼等を曰けるい何ぞ悟ざる乎　二二イエス　ベツサイダを至けをパ人々瞽者と携來りて之を手と按さまはん事と求り　二三イエス瞽者れ手と執て村れ外へ携出ろの目を唾して手と彼を按とひけるい何の視るや　二四瞽者目と擧て曰けるい我おれ人々の歩行と見を樹の如し　二五遂おイエス又手を兩手と彼の目を按うれ目と擧をせけをパ乃ち愈て庶物あれらのを視さり　二六イエス彼と其家を歸らせ曰けるい此村を入なのを且おの村人おも告る勿れ　二七○イエスうれ弟子と其おカイザリヤピリピの諸村へゆく途間おて其弟子に問て曰けるい衆人い我と曰て誰とする乎　二八答けるい或人いバプテスマれヨハネ或人いエリヤ或人い預言者れ一人ありと曰り　二九イエス彼等を曰けるい爾曹い我と曰て誰とをる乎ペテロ答けるい爾いキリストあり　三十イエス彼等と戒めて我事と誰おも告る勿をと命にたり○　三一また人れ子れ必ず多の苦難とうけ長老祭司れ長學者どもお棄られ且殺さをて三日れ後お甦るあとと彼等お示し始たまへり　三二明おと示給しのパペテロイエスと援て諫んとせしおめ曰けるいサタンよ我後お退け爾い神れ情と思ず反て人の情と思ふ○　三三イエス回顧うれ弟子と見てペテロと戒衆人と其弟子と共お召て彼等お曰けるい若し我お從はんと欲ふ者い己と棄うれ十字架と負て我お從へ　三四三五我ため且福音れ爲お生命と喪ふ者い之と得べけをパ也　三六もし人全世界と得とも其生命と喪はた何れ益おらん乎　三七また人何をもて其生命お易んや　三八姦惡ある此世お於て我と我道と耻る者とパ人の子も亦聖使と共お父れ榮光をもて來る時之と耻べし

第九章　三イエスやよ彼等お曰けるい我まおとお爾曹お告ん此お立もの〻中お神れ國れ權威をもて來ると見までい死ざる者あり○　二さて六日れ後イ

エスペテロヤコブヨハヂと伴ひ人を避て高山ゐ登り給ひしが彼等れ前ゐて其容貌かはり 三 其衣のやゝ白ゐと甚だしくして雪ぜごとく世上れ布
漂も斯しろくい爲能いざるべし 四 エリヤとモーセと共ゐ彼等ゐ現をてイ
エスと語ときり 五 ペテロ答てイエスゐ曰けるいラビ我儕あゝよ居い善ひき
らゐ三れ廬を建せ給へ一い主れさめ一いモーセれさめ一いエリヤれ爲ゐ
せん 六 此い其謂とゐろと知ざりしゐ因 斯て雲彼等
と蔽ひ歷雲より出て曰けると此い我が愛子ゐり之ゐ聽べし 八 頓て弟子
環視けをゝイエスと己れ外い一人とも見ざりき○ 九 山と下る時ゐ
イエス彼等ゐ命じて人れ子れ死より甦る迄は爾曾れ見し事と人ゐ告る勿
をと曰り 十 弟子等ゐれ言と守のり互ゐ論じ曰けるい死より甦るとと云は何れ事
の 十一 彼等イエスゐ問て曰けるとエリヤい前ゐ來るべしと學者れ曰ると何
ぞや 十二 イエス答て曰けるとエリヤい前ゐ來りて萬事と復振さん人れ
子ゐ就てと其各樣れ苦難と受のり輕慢らるゝ事と書じるさをさり 十三 然を

我ゐんぢらゐ告んエリヤ既ゐ來しゐ彼ゐ就て錄さをさりし如く人々意れ
任ゐ之と待へり○ 十四 イエス弟子等れ所ゐきたり多れ人々れ彼等と環圍る
と學者たちれ彼等と論とりしと見たり 十五 衆人たさちゐ彼と見て驚き趨
よりて禮とゐせり 十六 イエス學者ゐ問けるとエリヤ何事と論ずる乎 衆人
れうち一人ゐたへけるい師よ我もれいい子ゐ爾ゐ携來をり 十七 惡鬼れ憑時い彼頑跌さ
來きり 十八 惡鬼れ憑時い彼頑跌さ
と逐出さんゐとと我ゐんぢれ弟子ゐ請しのと彼等能ざりき イエス彼等
ゐ答て曰けるい噫信ゐき世ゐる哉いかまで我ゐんぢらと共ゐ在んや何時
まで我ゐんぢらと忍んや彼と我ゐ携來をーゐ 二十 彼等ゐれ子と携來をーゐ惡鬼
イエスと見て忽ち彼と拘攣しむ彼地ゐ仆を輾轉て泡と出ぬ 二一 イエスゐれ
父ゐ問けるい幾何時より如此ゐんありしや父いひけると少時より也 二二 惡鬼
ゐをゝ之と火れ中ゐ投入て殺んとせり爾もし爲ゐとと得
バ我儕と憫をて助よ 二三 イエス彼ゐ曰けるい爾もし信ずる事と得を信ずる

者ゐ於て爲あたわざる事あし 二四 其子は父たゞちに聲とあげ涙と流して曰ける1主よ我信ず我が信あきと助たまへ 二五 イエス衆人は趨集ると見て惡鬼と叱いひける1啞ゐして聾ある惡鬼よ我あんぢゐ命ず出て再び之ゐ入ゐあを 二六 惡鬼さけびて大ゐ彼と拘擊しめて出しかを彼死たる者の如ありぬ人ゝあをと已ゐ死りと云 二七 イエスろの手と執て扶けをを彼たてり○ 二八 イエス家ゐ入1ゐ其弟子ひろかゐ問ける1我儕あをと逐出すこと能ざりし何故ぞ 二九 イエス彼等ゐ曰ける1此族と祈禱と斷食ゐ非をバ逐出すこと能ざる也○ 三〇 彼等あゝと去てガリラヤと過これ事と 三一 イエス人は知を欲ざりき 三二 蓋ろれ弟子ゐ敎へて人の子1人は手ゐ付さを彼等ゐ殺さを殺さきて れち第三日ゐ甦るべしと曰たまふが故あり 三三 其とき弟子等あれ言と曉らず亦問あとと恐たり○ 三四 偖イエスカペナウンゐ至り室ゐ居て弟子ゐ問ける1爾曹途間ゐて何と互ゐ論ぜし手 三五 弟子默然たり是途間ゐて互ゐ論じ誰ゐ大あらんとれ爭ありけをを也 三六 イエス坐して其十二と召のをらゐ曰

ける1若し首たらんと欲ふ者1凡乃人の後とゐり且すべての人れ使役とあらん 三六 また孩提と取て彼等れ中ゐ立て之と抱き彼等ゐ曰けるは 三七 凡ろ我名乃爲ゐ斯乃おとき孩提れ一人と接る者1即ち我と接るゐ非ず我と遣しゝ者と接るあり○ 三八 ヨハヌ彼ゐ答て曰けるゝ師よ我儕ゐ從1ざる者れ爾れ名に托て惡鬼と逐出せるを見志が我儕ゐ從1ざる故あれと禁たり 三九 イエス曰ける1其人と禁る勿を蓋乃が名ゐより異ある能を行ひて輕易しく我と誹得る者1あらじ 四〇 我儕ゐ敵1ざる者1我儕ゐ屬者とキリストゐ屬者とゝて我名れ爲ゐ一杯れ水ゐても爾曹ゐ飮する者1我ゐあとゐ爾曹ゐ告ん其人1賞と失1ざる也 四一 まさ凡ろ我と信ずる小子れ一人と、礙そる者1それ首に磨と懸らをて海ゐ投入らをん方ろれ人れ爲よゐほ善るべし 四二 若し爾れ一手ゐんぢと礙のさゝを之と斷さを兩手ゐりて地獄すゐいち滅ざる火よ往んより殘缺ゐて永生ゐ入1爾れ爲ゐ善こと也 四三 若し爾れ一足ゐんぢと礙のさゝを之と斷さを兩足ゐりて地獄すゐいち滅ざる火よ往んより殘缺ゐて彼處ゐ入もれゝ 四四 蟲りきず火きわず 四五 若な

んちれ一足あんぢを碾かさを之と斷さを兩足ありて地獄すあいち滅ざる
火あ投入らをんよりい跛あて永生あ入い爾れ爲あ善あり　彼處あ入もの
ゝ蟲つきす火きえず　もー聞れ一眼あんぢと碾のさゞ之と抉いだせ兩眼
ありて地獄の火あ投入らをんよりい一眼あて神れ國あ入い爾れ爲あ善あ
り　彼處あ入も扎ゝ蟲つきす火きえず　蓋そべてれ人い鹽とつくる如く
火と以せらき凡れ祭物い鹽ともて鹽けらる　鹽い善もれあり然や鹽も
し其味と失いゝ何ともて之あ味と加んや爾曹心れ中あ鹽と有て又たおひ
あ睦み和ぐべし

第十章

一　イエス此と去ロルダンの外と經てユダヤれ境の内あ來しあ多の人
々ゝさ彼あ集りけるを恆の如く彼等あ敎誨と爲さまへり　二　パリサイの人
來て彼と試ゝ問けるい人ろの妻と出すい可ろ　三　答て曰けるいモーせい爾
曹あ何と命ぜし乎　四　彼等曰けるいモーせい離緣狀と書與へて之と出そと
と許せり　五　イエス答て彼等あ曰けるいモーせ爾曹の心つをあきあ因て此
命と爲たる也　六　然ど開闢のさじめ神人と男女あ造り給へり　七　是故あ人い
ろれ父母と離ろれ妻あ合て　八　二人れもの一體と成べー然べ二ゐい非ず一
體なり　九　是故あ神れ耦せ給へる者いあ人あきと離そべあらず　十　室あ在て
弟子等ゝた此事と問けるべ　十一　イエス彼等あ曰けるいあ凡ろ其妻と出して他
れ婚と娶る者い其妻あ對して姦淫を行ふなり　十二　また婦もし其夫と出して
他あ嫁がゞ此婚も姦淫と行ふあり　十三　イエスあ撫をんがため人々孩提と
携來けるべ弟子等ろの携來る者と責めたり　十四　イエス之と見て怒と含のを
らあ曰けるい孩提と我あ來せよ彼等と禁る勿き神れ國あ居もれい斯れ如
き者あり　十五　誠あ我あんぢらあ告ん凡ろ孩提れ如くあ神の國と承ざる者い
之あ入あと、を得ざる也　十六　即ち彼等と抱て手とろれ上あ按あをと祝せり　十七　イエス
途あ出けるあ一人とし來りて跪き問けるい善師よ我のさりあ
き生命と嗣ためあ何と行べき乎　十八　イエス彼よ曰けるい何ぞ我と善と稱や
一人の外あ善者いあし即ち神なり　十九　誡い爾ぢ識とあろあり姦淫そる勿を

殺なかれ盜あなかれ姦の誡を立る勿れ父と母を敬へ二十
曰けるハ師よ是をハ我が幼きよりも守をるもの也　三一イエス彼を見て愛ミ曰
けるハ爾あはれ一ツ缺ゆきて其所有を賣うり貧者ゐ施せ然せ天に於て財あら
ん而して來り十字架を操て我よ從へ　三二彼ハ此言ゐ因て哀ミ愛て去ぬ彼ハ
大なる產業を有る者あをもあり　三三イエス環視てうの弟子よ曰けるハ財を
有る者の神ヒ國よ入ハ如何よ難あ　二四弟子あれ言と驚けりイエス彼あた
へて彼等よ曰けるハ小子よ財を恃む者ハ神ヒ國よ入よりは駱駝ハ針の孔を穿るハ却て易ー　二六弟子たち甚く驚
き互に曰けるハ然せ誰ゐ救と受べき乎　二七イエス彼等を見て曰けるハ是人
よハ能ざる所なをご神ゐ於ハ然らず神ハ能ざる所あけをを也　二八是よ於て
ペテロ彼に曰けるハ我儕一切を舍て爾に從へり　二九イエス答て曰けるハ誠
ゐ爾曹に告ん我と福音ヒ爲ゐ家宅あるひハ兄弟あるひハ姊妹あるひハ父
あるひハ母あるひハ妻あるひハ兒女あるひハ田疇を舍る者ハ　三十ハ此世ゐ

て百倍と受ざる者あし卽ち家宅へ兄弟妹妹父母兒女田疇と迫害と共ゐ受ま
後ヒ世ふハ窮あき生と受ん　三一然せ多ヒ先ある者ハ後よあり後ある者ハ先
よあるべし○　三二さて彼等エルサレムよ上る途間イエス弟子ゐ先ち行けを
ヒ彼等おそろき且おろきて從へり　イエス十二と伴ひて將ゐ己ゐ及んとそ
る事と彼等よ告給ひけるハ　三三我儕エルサレムゐ上り人ヒ子ハ祭司ヒ長と
學者等ゐ付をん彼等ハをと死罪ゐ定め異邦人ゐ付志　三四又ゐをと嘲弄し雜
ち唾し且ゐをを殺ん斯て第三日ゐ甦るべし○　三五セベダイヒ子ヤコブとヨ
ハネイエスゐ來りて曰けるハ師よ我儕が求る事と願くハ我儕ゐ成たまへ
と　三六彼等ゐ曰けるハ爾曹ゐ我ゲ何と成ん事と欲ふや　三七彼等いひけるハ爾
と得んとき我儕ヒ一人ハ爾ゐ右ゐ一人ハ其左ゐ坐せしめよ　三八イエス彼等ゐ
曰けるハ爾曹わが飮ンとあろヒ杯と飮ンが受る所ヒバプテスマと受得るや　三九彼等いひけるハ能ンべしイエス彼等ゐ曰けるハ爾
曹ハ實ゐ我が飮ンとあろヒ杯と飮ンまた我が受る所ヒバプテスマと受べし　四十然

も我が右左を坐せる事は我が予ふべきを非たゞ備らをたる者は予らるべし　四一十人は弟子ゐをと聞てヤコブとヨハネとを慣りイエス彼等と召て　四二曰けるは異邦人は君と見る者は其民と治また大ある者どもは彼等は上を擺を執ゐを爾曹が知ところ也　四三然ども爾曹は中ゐてはいは然そ可らず爾曹は其うち大ゐらんと欲ふ者は爾曹を役るゝ者とゐらん　四四また爾曹はうち首たらんと欲ふ者は凡は人の僕とゐらん　四五蓋人の子の來るも人に役ふ爲を非ず反て人よ役れを且ゐはくの人を代ろれ命と予て贖とゐらん爲ゐり〇　四六斯て彼等エリコを至りイエスそれ弟子と大なる群集は人々と共を出る時テマイは子なるバルテマイといふ瞽者路は旁を坐して乞みけるを　四七ナザレのイエスゐりと聞て呼り曰けるはダビデは裔イエスよ我を憐給へ　四八多は人々ゐを叱黙と戒めけるをども愈よゝりてダビデの裔よ我を憐み給へと曰けるをバ　四九イエス立止りて彼と召と命じけるをバ人々瞽者と召て彼を曰けるは心を安んぜよ起イエス附と召　五十瞽者うの表衣を棄たちてイエスを來るり　五一イエスよ答て彼を曰けるは何と爲るんと欲ふや瞽者いひけるは主よ見ゐん事を欲ふ　五二イエス彼を曰けるは往ゐんぢは信仰ゐんぢを救へり直ゐ彼みちるゐをと得イエスを從ひて路と行り

第十一章

うきら橄欖山はベッパゲとベタニヤを至りエルサレムを近ける時イエス二人の弟子と遣さんとして　二彼等を曰けるは爾曹對面の村を往うしこを入を頓て人は未だ乘ざる所は驢馬の子と見べし其と解て牽來を　三もし誰の爾曹を何ゆゑ然ぞると曰さらば汪直を其と此を遣るべし　四彼等ゆきて門は外は岐路を繋げる驢馬は其子と見てこれと解けるを　五其處を立る人々れうち或人のきらを曰けるは此驢馬は子と解て如何する乎　六弟子はイエスは命ぜし如く曰しうを遂を許たり　七弟子驢馬乃子とはイエスを牽きたりて巳が衣と其上を置けるをバはイエスみをを乘り　八人々おはくは其衣と路上を布あるはは樹は枝と伐て路上を布あり前ゐゆき後を從ふ人々呼り曰けるはホザナよ主は名を託て來る者は

祖るり　十主れ名ゐ託て來る我儕れ父ある
ザナよ○十一イエスエルサレムゐ至り聖殿ゐ入て盡くさまわし時すでゐ暮
ゐ及けを心十二と偕ゐベタニヤゐ出往り○十三明日のきらベタニヤより出
し時イエス饑さり十三遙ゐ葉ある無花果れ樹と見てろれ樹ゐ何この有んとて
來しゐ葉れ他ゐゐも見ざりき恐無花果樹れ時ゐ非をベ也十四イエスみれ樹
ゐ對て今よりれち永久も爾れ果と食ふ人あらざるといふ弟子みをと聞り
○十五彼等エルサレムゐ至りイエス殿ゐ入てろれ中ゐる買賣する者と殿より
逐出し兌銀者れ桌鴿と賣者れ椅子と倒し十六何器具と以て殿と過るみとと
許さず十七また彼等ゐ誨て曰けるい我室い萬國の人れ祈禱の室と稱らるべ
しと錄さをたるに非や然るゐ爾曹われ之と盜賊乃巢とあせと十八學者と祭司
の長ゐをと聞て如何してのイエスと喪さんと謀しが彼と懼たり蓋人々
とゐ非驚ゐ駭きさをを也○十九日くをてイエス城邑と出行り二十翌朝このきら
無花果の樹と過る時ろの根より盡く枯さるると見る二一ペテロ憶出てイエス

ゐ曰けるいラビ見よ詛し所れ無花果樹い枯たり二二イエス答て彼等ゐ
曰けるい神と信ぜよ二三誠ゐ我ゐんぢらゐ告ん凡ろ誰ゐ此山ゐ移て海ゐ入といはゞ其言れ如く
其いふ所れ言と必ず成べしと信ゐ此山ゐ移て海ゐ入といはゞ其言れ如く
成べし二四是故ゐ我ゐんぢらゐ告ん凡ろ祈禱れ時それ求ふ所のものい必ず
得べしと信ぜを必ず得べし二五又ゐんぢら立て祈禱する時もし人と憾みと有を
之と免せ蓋天ゐ在す爾曹れ父ゐ爾曹もまた
爾曹免さずを天ゐ在す爾曹れ父も亦ゐんぢられ過と免し給ん也○二七彼等また
エルサレムゐ至りイエス殿と行るとき祭司れ長學者および長老等きさり
て二八彼ゐ曰けるは何の權威と以て此事
此權威と與ろやと二九イエス答て彼等ゐ曰けるい我も一言ゐんぢらゐ問ん我
ゐ答よ然を我ゐんぢらゐ何の權威と以てこれ事と行といふ事を告べし三十ヨハチ
れバプテスマい天よりの人よりか我ゐ答よ三一彼等たがひゐ論じ曰けるい
若し天よりと云バ然バ何故ゐをと曰ん三二もし人よりと云を

ー彼等民を懼たるも尚ほ預言者と爲よ因　三　遂ゐ答て知ず
と曰イエス答て曰けるい我も何の權威を以て之を行ふ爾曹ゐ語らじ
第十二章　イエス譬ゑもて彼等ゐ語ゑり或人葡萄園を樹り籬を繞し酒榨を
ほり塔を立て農夫ゐ租與て他れ國へ往しぞ　二　期いたりけゑば葡萄園の果
を收取ん爲ゐ僕を農夫れ所ゐ遣しけるゐ　三　農夫等ゐをを執へ打撲きて徒く
返しめさり　四　また他れ僕を彼等ゐ遣しゑゐ農夫等ゐをを石ゐてうち首ゐ
傷つけ辱しめて返しむ　五　又ほのれ者を遣しゑゐ之をも殺せり又ほのゐ多
く遣ーゑゐ或い撲ゐるひい殺しぬ　六　爰ゐ一人れ愛子ありけるが此ゐが子
い敬ふゐらんと曰て遂ゐ其子を遣しゑゐ　七　農夫等さがひゐ曰けるい此い
嗣子ゐり率ゐをを殺さん然ゐ產業い我儕の者をゐらん　八　乃ち執へて之を
殺し葡萄園れ外ゐ棄たり　九　然ゐ葡萄園れ主人ゐゐ爲べきゐ彼きさりて
農夫等を打滅し葡萄園を他れ人ゐ託ふべし　十　工匠れ棄さる石い屋れ隅れ
首石と成り　十一　こを主れ成たまーる事ゐして我儕れ目ゐ奇とそる所ゐりと
錄さをしと未だ讀さる乎　十二　彼等これ聲い己等を指て語ぢりと知イエスを執
んとせしのをも衆人を懼てイエスを去やけり　十三　彼等イエスを其言ゐ
由て陷いをんとしてパリサイれ人とヘロデれ黨れ中より數人を遣せり　十四
遣さをし者等イエスれ所ゐ來り曰けるい師よ爾い眞ある者ゐり又誰ゐも
偏らざる事を我儕い知るい貌に依て人を取ず誠を以て神れ道を敎をべゐ
り貢をカイザルゐ納るい宜や否をれら納べきゐ納ざる可ゐ　十五　イエスろの
實ゐらざるを知て彼等ゐ曰けるい何ぞ我を試るやデナリを携來りて我ゐ
觀よ　十六　のをら携來りけををイエス彼等ゐ曰けるい此像と號い誰の答てカ
イザルありと曰　十七　イエス曰けるいカイザルの物いカイザルゐ歸し又神れ物
い神ゐ歸そべし彼等ゐをと奇とせり○　十八　復生あしと曰ゐせるサドカイれ
人きたりてイエスゐ問けるい　十九　師よ我儕ゐモーセ之書遺るゐい人れ兄弟
もし子あくして妻を留し死ばろれ兄弟ゐれ妻を娶て兄弟れ裔を立べし
と　二十　爰ゐ七人れ兄弟ありーが長子妻をめとり子あくして死　二十一　第二れ者

みをと娶また子あくして死 二二第三もまさ然そ七人みなこれを娶たをを子
あく終あい此婦も死り 二三復生れ時のをら甦らバ此婦い誰れ妻こ爲べきの
蓋七人おおひくこれと娶たをを也 二四イエス答て彼等お曰けるい爾曹い聖書
とも神れ能とも知ざるお因て謬をるるあらず手 二五甦より死より甦る時い娶す
嫁ぐず天おある使者等れ如し 二六死ー者れ甦る事お厥ていモーセれ書録中れ
篇お神のれお語て我いアブラハムの神イサクの神ヤコブれ神ありと曰たを
まひしを爾曹讀ざる手 二七神い死し者の神お非ず生る者れ神ありり爾曹大お謬
れり○ 二八學者れ一人のれらけれ論を聞てイエスれ善これお應ーと知きた
り彼お問けるい諸てのいちれ何を首ある乎 二九イエス彼お答けるい諸誡
れ首いイスラエルよ聽け主ある我儕れ神い即ち一れ主ありあんぢ心と盡
し精神と盡し意と盡し力と盡し主ある爾の神と愛そべし是誡れ首あり 三一第
二も亦これお同と己れ如く爾れ隣と愛そべし期より大ある誡あし 三二學者
イエスお曰けるい善ある師よ爾神い即ち一お主て他お神なしと曰しい誠

ありり 三三また心と盡し智慧と盡ー精神と盡し力と盡ーて之と愛し又おのを
の如く隣と愛そるい諸れ燔祭と禮物よりも愈るあり 三四イエス彼が道理と
知る答と見て之お曰けるい爾神の國より遠あらず此のち敢てイエスお問
者あのりき○ 三五イエス殿お在て教誨と爲る時のをらお答て曰けるい何ぞ
學者はキリストとダビデの裔といふ乎 三六夫ダビデ聖靈お感ヒて自いふ主
ヨダ主お曰けると我あんぢのてきを爾の足凳とあすまで我右お坐せ
よと 三七如此ダビデ自ら彼と主と稱たり然バ如何で其裔あらんや多れ人々
喜びてイエスお聞ことと爲り○ 三八イエス教とあせる時のをらお曰けるい
長き衣服と衣てあるき市上おて人の問安 三九會堂の高座筵席れ上座を好
また婺婦れ家と呑い切りて長き祈をする學者を謹防よ彼等れ罪せらる
ること尤も重ー○ 四〇イエス褒錢れ箱お對て坐ー人々の錢と箱お入ると見
たまひしよ多れ富者い多く投入たり 四一一人れ貧き婺婦きさりてレプタ二
と投入る此い四厘ほをよ直をり 四二イエスそれ弟子と召て彼等に曰けるい

喊ぉ我ゐんちらぉ告ん箱に投入ー凡の人々よりも此貧き婆婦ゐ多く投入
さり四四ーそゐ彼等ゐ皆うの餘をる所と以て入この婦ゐその不足とゐろより
其すべての所有すゐゐち全業と盡くし入さをを也

第十三章一イエス聖殿より出けをゞ一人の弟子かをゐ曰けるゐ師よ觀さま
へ此石ゐれ殿宇いのゐ盛んゐらす手ニイエス答て曰けるゐ爾曹みの大ゐ
る殿宇と見ゐ一れ石も石の上ゐ圮をすーていゐ遺と三イエス橄欖山ゐて殿
ゐ對ひ坐ー紹しゐペテロヤコブヨハネアンデレ窃ゐ問けるゐ四何れ時みれ
事あるや又そべて此事れ成ん時ゐ如何なる兆ゐるや我儕ゐ告たまへ五イ
エス答て彼等ゐ曰けるゐ人ゐ欺ゐをさるやう愼めよ六蓋おほくれ人をが
名と冒來り我ゐキリストなりと曰て多れ人と欺くべー七爾曹戰と戰れ風
聲と聞とき懼るゝ勿を是等れ事ゐみゐ有べきあり然ども末期ゐ未だ至ら
ず八民ゐ起て民とせめ國ゐ國と攻なた隨在ゐ地震ゐり饑饉變亂ゐり是等
ゐ苦難れ始ゐり九爾曹みづから愼めよ蓋おんぢら集議所ゐ付さを又會堂

ゐて擊たを且證と爲んとめ我事ゐ因て僕おより王れ前ゐ曳立らるべし十
而して福音ゐまづ萬民ゐ宣傳ざるを得ず十一人なんぢらと曳解さゞ以前よ
り何と言んと慮また思煩ふ勿き惟みんぢら其とき賜ふ所れ言を曰べし
蓋もれいふ者ゐ爾曹ゐ非す聖靈ゐり十二兄弟ゐ兄弟を死ゐ付ー父ゐ子と付
ま亦子ゐろれ父母ゐ逆ひて之と死しめ十三又おんぢらゐ我名ゐ緣て凡れ人
ゐ憎るべー然ど終まで忍ぶ者ゐ救るゝみと得ん十四預言者ダニエルが言
ま所れ殘暴ゐくむ可も乃ゝ立べのらざる所ゐ立と見ゞ(讀者よく思べー)其
時ユダヤゐとる者ゐ山ゐ避をよ十五屋上ゐとる者ゐ室ゐ下る勿と又物と取
んとて其家ゐ入ゐのを十六田ゐとる者ゐ其衣服と取んとて歸る勿を十七其日
ゐ孕る者と乳と哺する婦ゐ禍ゐる哉おんぢら冬ゐぐるみとと免をん
ゐ爲ゐ祈を十八日ゐ患難ゐ如き患難ゐ神の物を創造たまひし開
より今ゐ至るまで有ざりき亦後ゐも有じ十九もし主ろの日と減少ゐ給ず
ゞ一人ざゐ救るゝ者ゐー然ど主の選たまへる所れ選をし者の爲ゐ其日と

減少ー給ふべし 二其時もーキリスト此ゐあり彼ゐ在と爾曹ゐいふ者あるとも信する勿を 三ろい僞キリスト僞預言者おこりて休徴と奇能と行ひ選きたる者とも欺くみとを得ば欺くべけきば也 三三 ゐんぢら愼よ我預とめ爾曹ゐ盡く之と告 三四 厥時あの患難れろち日い晦く月い光と失ひ 三五 天の星いおち天れ勢ひ震ふべし 三六 其とき人々い人の子れ大ある權威と榮光と以て雲の中ゐ現き來ると見ん 三七 また其使者等と遣して地極より天れ極まで四方より其選きー者と集むべし 三八 夫ゐんぢら無花果樹ゐ由て譬と學ろれ枝をでゐ柔のよーて葉めぐめば夏の近と知 三九 此れ如く爾曹も凡て是等の事と見ば時ちろく門口ゐ至ると知 四十 ロを誠ゐ爾曹ゐ告ん是等れ事あとごく成まで い此民い逝ざるべし 三一 天地い朽ん然ども我言ゐ朽と 三二 其日ろの時と知者い惟わ父れみあり天ゐある使者も子も誰も知者ゐー〇 三三 此日いぼをれ時きさる乎と知ざをば爾曹ぞろまきて目と醒ま祈禱せよ 三四 ろを人れ子い遠行せんとまて其權と僕等ゐ委ね各ゐ爲べき事と任け又閽者ゐ愈らず守をと命じて家とさる人れ如し 三五 是故ゐ爾曹も愈らずーて守をと蓋家れ主人あるひい夕あるひい夜半あるひい雞鳴時あるひい早晨ゐ歸るかを知ざをば也 三六 恐くい不意れ時きたりて爾曹ご眠ると見ん 三七 ロを愈らずーて守をと爾曹ゐ告るい即ち凡れ人に告るあり

第十四章

さて逾越即ち除酵節の二日前ゐ祭司の長と學者だち詭計と以てイエスと執へ殺さんとー 二 曰けるい祭れ日ゐい爲べからず恐くい民の中ゐ亂ゐあらん〇 三 イエスベタニヤの癩病シモンの家ゐて食ーる居たまへる時ある婦孃石の盒ゐ價貴きナルドの香膏と盛て携來り其盒と裂りイエスの頭ゐ膏と沃たり 四 或人々互ゐ怒と含ひけるい此膏と廢ふ何故ぞや 五 之と賣た三百有奇のデナリと得て貧者ゐ施ふことと得んと此婦と言咎む 六 イエス曰けるい彼ゐ係る勿を何ぞ此婦を擾ふや我ゐ善事と行へる也 七 貧者い常ゐ爾曹と偕に在ば爾曹意ゐ隨せて彼等と濟るあとを得べし我い常ゐ爾曹と偕ゐ在ず 八 この婦と力と盡して作り塗あらかぢめ

我と葬る爲ㇾ日が身ㇾ膏ㇾ沃しめり　九我まことㇾ爾曹ㇾ告ん天の下いづくㇾ
ㇾても此福音ㇾ宣傳らるゝ處ㇾ此婦の行し事も亦ㇾ其の記念の爲ㇾ言傳
らるべし　十さて十二の一人なるイスカリオテのユダ、イエスと付さんと
て祭司の長ㇾ往しㇾ十一彼等ㇾ聞て悅び銀子ㇾ予んと約せしかばユダ
、イエスと付さんと機ㇾ覘へり○十二除酵節の首の日すゐわれ逾越
の羔ㇾ殺そべき日弟子イエスㇾ曰けるㇾ逾越の食ㇾ何處へ往て我儕
備ふべき乎　十三イエス二人の弟子ㇾ遣さんとして之ㇾ曰けるㇾ京城ㇾ往さ
らば水ㇾ盛たる瓶ㇾ擎る人ㇾ遇べし之ㇾ從へ　十四ㇾ其の入ところの家の主人
ㇾ師いふ我弟子ㇾ偕ㇾ逾越ㇾ食すべき客房ㇾ安ㇾ在やㇾ曰ㇾ然きㇾ彼陳
設たる大ㇾある樓房ㇾ爾曹ㇾ示べし我儕の爲ㇾ其處ㇾ備よ　十六弟子ゆきて京
城ㇾ入しㇾイエスの曰たまへる如く遇しのぼ逾越の備ㇾとゝのへり○十七日暮
てイエス十二の弟子ㇾ偕ㇾ來ㇾり　十八ㇾるゝきㇾ席ㇾ就て食ㇾる時イエス曰け
るㇾ誠ㇾ爾曹ㇾんぢらㇾ告ん我ㇾと偕ㇾ食するㇾ爾曹ㇾうち一人ㇾきㇾと賣すべ

し　十九彼等憂て各々イエスㇾ言出けるㇾ我ㇾある乎　二十イエス答て曰けるㇾ十二ㇾ中の一人ㇾきㇾと
是ㇾあり　二一人ㇾ子ㇾ己ㇾ就て錄さきたる如く逝ん然ㇾ人ㇾ子ㇾ賣す者ㇾ禍
ある哉ろㇾ人ㇾ生ざりしあらば幸ありㇾ爲ん　二二ものきら食する時イエスパン
ㇾ取て祝しㇾ之ㇾ擘らきらㇾ予て曰けるㇾ取ㇾ食へ此ㇾ我身ㇾあり　二三また杯
ㇾ取て謝しㇾ彼等ㇾ予けきㇾ皆ㇾ飮れ　二四イエス曰けるㇾ此ㇾ新
約れ我血ㇾ以て衆ㇾ人ㇾ爲ㇾ流す所のもㇾ也　二五我まことㇾ爾曹ㇾ告ん今
よりのち新しきものㇾ神の國ㇾ於て飮んㇾ日までㇾ葡萄ㇾ以て製るものㇾ飮と
ㇾ○二六かきら歌ㇾ詠て橄欖山ㇾ往り　二七イエス彼等ㇾ曰けるㇾ今夜ㇾんぢら
皆ㇾきㇾ就て礙のん蓋ㇾきㇾ牧者ㇾ擊ん其とき綿羊散べしと錄さきたきㇾ
也　二八然ㇾど我よゝがへりて後ㇾんぢらㇾ先ちがりテヤㇾ往べし　二九ペテロイ
エスㇾ曰けるㇾ假令ㇾきㇾ礙くとも我は然らず　三十イエス彼ㇾ曰けるㇾ我ま
ことㇾ爾ㇾ告ん今日この夜鷄二次鳴まへㇾ爾三次きㇾと知ずと曰ん　三一彼

また力言いひけるは我は爾と偕に死るとも爾を知ずと曰ひ弟子等も皆此
いへり　三二　斯て彼等ケッセマチといふ所に至りイエスその弟子に曰けるは
爾る間ここに坐せよ　三三　遂にペテロヤコブヨハネを伴ひゆき甚しく愛へ哀
と催し　三四　彼等に曰けるは我心いたく愛て死るをのりあり爾曹ここに待て
目と醒ー居　三五　イエス少ー進行て地にふし祈り曰けるは若のあはゞ此時を
去しめ給へ　三六　また曰けるはアバ父よ爾に於ては凡の事能ざるあし此杯を
我より取たまへ然ども我が欲ふ所と成んとするに非ず爾が欲ふ所に任せ給
へ　三七　イエス來りて彼等は寢たるを見ペテロに曰けるはシモンなんぢ寢たる
るか一時も目と醒し居ことに能ざる乎　三八　誘惑に入ぬやう目と醒かつ祈ろの
心神は願あれども肉體よわき也　三九　復ゆきて同言と曰て祈をり　四十　返りて
復ふたりの寢たるを見る此は彼等ろの目倦たるありイエスに何と對
ふ可やと知ざりき　四一　三次きたりて彼等に曰けるは今は寢て安め充
分あり時いたれり人は子は罪人の手に賣さる也　四二　起よ我儕ゆくべ

ー我を賣る者近けり○　四三　斯いへる時さくちに十二弟子の一人なるユダ刀と
棒とを携さる多き人々と共に祭司の長學者および長老より所より來
る　四四　イエスを賣者はかりごとを設て曰けるは我が接吻をする者は其
ありし之を執て愼と曳去よ　四五　すぐに來りてイエスに近よりラビ
と曰て接吻せり　四六　人々手をイエスに措て執ふ　四七　傍に立る者は一人刀を抜
て祭司の長の僕を擊ち其耳を削りおとす　四八　イエス答て彼等に曰けるは刀と
もち盜賊を執る如くして我を執に來るか　四九　日々爾曹と共に殿に
て教しに爾曹は我を執ざりき然ども此は聖書の應せんが爲あり　五十　弟子みな
イエスを離て奔去ぬ　五一　一少者それ身に麻布を纏てイエスに從ひ
よりしが隷捕の者等これを執けるに　五二　その麻の夜具をそて裸おて逃去り
○　五三　衆人イエスを祭司の長に携往けるに祭司の長老および學者等こと
ごとく彼に所に集まり　五四　ペテロ遠く離きてイエスに從ひ祭司の長の庭の
内まで入僕と共に坐ーて火に煖まりイエ

スと殺んとして證と求るども得ず　五六 多き人々イエスを妄れ證と言出せども
五七 其證あふずず　五八 或人々たちて妄れ證と言出志けるは　五九 われ此聖殿と毀ち三日れ間ふ手と以て作たる此聖殿と別れ殷と建んと言しと我傍ゐ
六〇 聞ゐ　六一 如此いひーぶ其證また符ず　六二 祭司れ長中ゐ立てイエスに問いひけるゐ爾答る言ふき乎ゐれ人々れ爾ゐ立る證據ゐ如何　六三 イエス默然として
何も答ざりければ祭司れ長また彼ゐ問て曰けるゐ爾と頌べき者れ子キリストゐる乎　六四 イエス曰けるゐ然り人れ子天權れ右ゐ坐ーゐ天れ雲れ中ゐ現
を來ると爾曹とるべー　六五 是ゐ於て祭司れ長うれ衣と裂て曰けるゐ我儕ゐ
んぞ復ほふゐ證據と求んや　六六 ろれ褻瀆さる言ゐ爾曹も聞る所なり爾曹如
何ゐ意ふや彼等舉てイエスと死ゐ當るべき者と擬さり　六七 或者ゐ彼ゐ唾し
又うの面と掩ひ拳ゐて撞いひけるゐ預言せよ　六八 亦僕等も手の掌ゐて彼と批
り　六九 ペテロ下庭ゐ在しゐ祭司れ長のゐる婢きさりて　七〇 非火ゐ熾まり居と
見ゐら〳〵彼と視て曰けるゐ爾もナザレれイエスと偕ゐ在ーペテロ　七一 背

いずして曰けるゐ我ゐ此と知ず亦ゐんぢが言ところれ事と識得ざるゐり
漸て庭門に出けるゐ鷄鳴ぬ　七二 ろの婢かをを見て傍ゐ立る者ゐ又いひけ
るゐ此人ものの黨れ一人ゐり　七三 ペテロ又た背ゐず少頃ーて傍ゐ立る者ま
たペテロゐ曰けるは爾誠ゐ彼の黨れ一人ゐり蓋爾ハガリラヤれ人ゐり其
方言ゐを合り　七四 是ゐ於てペテロ詛て我神の祟と受るとも爾曹が言それ
人と我ゐ識ざる也と曰しぶ　七五 此とき鷄二次鳴けをバペテロイエスれ鷄二
次ゐく前ゐ三次我と識ずと曰んと言たまひーゐ事と憶起ー且ゐと思反ま
て哭悲めり

第十五章　平旦ゐ及び直ゐ祭司の長長老學者たち凡れ議員と共に議てイエス
と繫り曳擕てピラトゐ解せり　二 ピラトゐ問けるゐ爾ゐユダヤ人の王ゐ
るやイエス答けるゐ爾ゲ言る如ーし　三 祭司の長多端をもて彼と訟ふ　四 ピラ
トゐ復イエスゐ問て曰けるゐ何も答ざるの彼等が爾ゐ何いて證と立しゐと
幾何ありゲ乎　五 ピラトれ奇と爲まてゐイエス何とも答ざりき　六 偖これ節

縛おい彼等が求お任せて一人の囚人を赦それ例あり七 時おバラバと云る
者あり己と共お謀叛せし黨と同く繋ぎ居さり 八衆ご彼等にうれ謀叛のとき
人と殺たる者等あり 八衆と擧と揚て呼り恆例れ如せん事と求り ピラト
彼等お答て曰けるいユダヤ人れ王と爾曹お我ゞ釋さん事と欲むや 十 是ピ
ラト祭司の長等れ嫉お因ていエスと解おさりと知バあり ざ 祭司れ是民せ
もおバラバと釋さん事と求と唆む 十二 ピラトまた答て彼等お曰けるいかゞ然バ
ユダヤ人れ王と爾曹が稱る者おい何と我が處ん事とあんちら欲むや 十三 彼
等また叫びて之と十字架お釘よと曰 十四 ピラト彼等お曰けるいかなる
悪事と行しや彼等まそ〳〵叫びて之と十字架お釘よと曰 十五 ピラト民の懼
びと取んとまてバラバと彼等お釋しいエスと鞭ちて之と十字架お釘ん爲
お付せり 十六 兵卒等おと公廳お擁ゆき全營と呼集め 彼お紫の袍とき
せ棘よて冕と編て冠しめさり 十八 斯て曰けるいユダヤ人の王安の臣 また
唾と以て其首と擊のり唖ゝ跪きて拜しぬ 二十 嘲弄ゝ畢て紫の衣とぬぎ故

れ衣ときせて十字架お釘んとて曳往しが 二 アレキサンデルとルフれ父
るクレネれシモンと云るもの田間より來りて其處と經過りけるが强て
之おイエスれ十字架と負せさり 二一 イエスとゴルゴタの譯バ即ち髑髏と云る
所お擔來り 二二 沒藥と酒お和て飲せんと爲りしお之と受ざりき 二三 イエス
と十字架お釘ゝれち誰が何と取んと拈てろの衣服と分てり 二四 朝の第
九時おイエスと十字架よ釘ろれ 二五 罪標とユダヤ人の王と書つく 二六 二人の
盜賊のをと共よ一人お其右一人お其左お十字架よ釘らる 二七 こと聖書お彼
お罪人と共お算らるとたりと云ゝお應り 二八 往來れ者イエスと詬り首と搖て
曰けるお噫聖殿と毀て之と三日お建る者よ 二九 自己を救て十字架と下よ 三〇
祭司の長學者等も同く嘲弄ゝ畢て互お曰けるお人と救て自己と救ひ能ず 三一
イスラエルれ王キリストお今十字架より下るべし然バ我併見て之を信ぜ
ん又ともお十字架お釘らるゝ者等も彼と詬りき 三二 第十二時より三時お
至るまで偏く地れうへ暗ありぬ 三三 第三時おイエス大聲お呼りエリエリラ

マサバクタコと曰ふをと譯バ吾神わが神ゐんぞ我を遺さまふ乎と云るゐ
り　傍らゐ立たる者共うち誤人ゐをと聞て彼れエリヤと呼ゐりと曰ふ　一
人はしり往て海綿をとり醋と濱せ之を蘆ゐ束て彼ゐ飲しめ曰けるゐ俟エ
リヤ來りて彼と救ふや否ゐみゐろむべし　○　イエス大なる聲と發て氣絕
殿れ幔上より下まで裂て二と爲り　イエスゐ對て立さる百夫の長ゐく吁
呼氣絕しと見て曰けるゐ誠ゐ此人ゐ神の子ゐり　○　また遙に望ゐさる婦
ありし其中ゐ在し者いマグダラのマリアおよび年少ヤコブとヨセの母な
るマリア又サロメゐり　彼等ハイエスゐがリヤゐ居たまひし時みをゐ
從ひ事し者等ゐり亦これ他ゐも彼と共ゐエルサレムへお上りし多の婦ゐさ
りき　○　是日ゐ備節日ゐて安息日れ前の日ゐりし故　日暮るとき尊き議
員ゐるアリマタヤれヨセフと云る者きたり此人ゐ神の國と竢る者ゐり
彼はヾのらすピラトゐ往てイエスの尸と求たり　ピラトイエスの已ゐ死
るを奇と百人の長と呼て彼ゐ死てより時と經たるや否やと問　百夫の長

より聞て之と告り　屍と　ヨセフ　ゐ予ふ　ヨセフ　亞布と買求め而ーてイエス
と取下ーしとうの亞布ゐて裹と磐ゐ鑿ゐる墓におき石と墓れ門ゐ轉し置
りマグダラれマリア及ヨセの母ゐるマリアこれマリア其屍と葬ーし處と見さり
第十六章　安息日過てマグダラのマリアとヤコブの母ゐるマリア及サロメ
香料と買とうのへイエスゐ抹んとて來れり　二　七日の首の日いと早く日の
出る時うきら墓ゐ來り　三　互ゐ曰けるゐ誰ゐ我儕の爲ゐ石と墓れ門より轉
し取もの有んゐ是ろれ石はゐとだ亙大なるを也　四　斯て彼等目と擧れを石
れ已ゐ轉ゐると見る　五　墓ゐ入しゐ白衣ときたる少者ゐの右れ方ゐ坐せると
見て駭き異めり　六　少者ゐのきらゐ曰けるゐ駭き異む勿を爾曹ゐ十字架ゐ釘
らをしナザレれイエスと尋ぬ彼ゐ甦りて此ゐ居ず彼と葬し處と覩よ　七　且
ゆきて其弟子とペテロゐ告よ彼ゐ爾曹ゐ先ちてガリラヤゐ往り爾曹ゐしゐ
よて彼と見べし即ち其ゐんぢらゐ言しが如ーと　八　彼等いでゝ墓より奔れり
且戰慄つ駭き亦一言とも人ゐ語ざりき足ゐしが故ゐり　○　イエス七日

れ首の日よあけごろ甦りて先マグダラのマリアに現るる曩よりイエス彼より七れ惡鬼を逐出せり　十―イエスと共に在し者れ哭哀める時に此婦きたりて是等れ事を告つげたれど　十一―彼等イエスれ活て此れ婦よ見え給ひしよと聞しかど信ぜざりき　十二―此後ほかの姿にられ中二人れ者鄉村へ往けるが路を行くときイエス擬たる貌よて彼等に現る　十三―よれ二人れ者ゆきて他れ弟子等にも亦これを告げたれども亦信ぜざりき　十四―又ろれ後十一れ弟子れ食ーとる時に現をて彼等が信ぜざるれ及其心れ頑なとを責め給へり是のをらイエスれ甦り給るれち其を見たる者れ輩よ定らるる也　十五―信ずる者れ救を信ぜざる者れ罰よ定らるる也　十六―信ずる者れ左れ如き奇跡ありて惡鬼を逐出ー異邦れ方言をいひ　十八―まさ蛇を操へ毒を飲とも害あく又手を病れ者よ按あてれば即ち愈ん　十七―斯て主い彼等よ語ーれち天よ擧らを神れ右よ坐しぬ　十九―弟子たち徧く福音を宣傳ふ主も亦のをらよ力を協せ其從ふ所の奇跡をもて道れ徵と爲たまへりアーメン

第一章　我儕れ中に篤く信ぜらるさる事と始より親く見て道お役さる者れ
二 我儕お傳し如く記載んと多の人々みをと手お執る故お貴きテヨピロよ
三 我も原より諸れ事と詳細お考究さを次第を爲て爾お書おくり　四 爾が
五 ユダヤれ王ヘロデれ時おアビアれ
汝らをー所の確實と曉せんと欲り〇
班ある祭司ザカリアと云る者あり其妻いアロンれ裔にて名をエリサベツ
六 と云　共お神の前おて義人あり凡て主れ誡命と禮儀と盡あく行へり
七 エリサベツ姙ざきが故お彼等に子おー又二人とも年も老ぬ
八 ザカリアろれ
班次よ値て神れ前お祭司れ職と行ふ時
九 祭司れ例お從ひ籤と抽て主れ殿
おいり香と燒みとと得十 香と燒ける時お衆れ人々いみお外お居て祈をり
十一 主れ使者香壇れ右よ立てザカリアお現をーらを
十二 ザカリア之と見て驚
懼る 天使のをお曰けるいザカリアよ懼るよ勿を爾れ祈禱すでお聞たま
十三 へり爾れ妻エリサベツ男子と生ん其名をヨハネと名くべし
十四 爾お喜と樂

わらん多け人も亦ろの生るよよ
ん又葡萄酒と濃酒とを飲む母の
ルけ民け多け人と主なる其神お
て主の先よ行ん是父け必ろ子と
よ新ある民と備んとあり　十八　ザカリア天使お曰けるい我そでよ年老妻もま
さ年過さをバ何お因てお此事あ
プリエルとて神け前よ立者あり
きを　二十　其時いさりて必ず成べき
此事け成日まで言ふあと能いじ
む　二一　ザカリアお出て言ふよと能いざ
さる事と曉たりザカリア衆人お者
の日滿けきを家お歸りぬ　二四　此後ろけ妻エリサベツ孕て隱とりしみを五ケ月
おして　二五　曰けるい主ぞの恥と人の中お濯せん爲よ眷顧たまふ時い此の若

く我よ爲り○　二六　その六ケ月よ當がリテヤのナザレと名さる邑け　二七　ダゼデ
の家け□セフと云る人け聘定せし所け處女お神よりガブリエルといふ天
使と遣さをさり其處女け名ハ、リアと云り　二八　天使こけ處女お來いひける
い慶たし惠るよ者よ主ゐんちと偕よ在そ爾い女の中よて福ある者あり　二九
處女ろけ言を訝みけ問安い如何ある事ぞと思へり　三〇　天使いひけるいハ、リ
アよ惺るよ勿を爾い神より惠と得さり　三一　爾孕て男子と生ん其名とイエス
と名べし　三二　その人大なる者と爲て至上者け子と稱らをん又主さる神ろの先
祖ダビデ王け位と彼お予をた　三三　ヤコブけ家と窮ゐく支配そべく且ろけ國
終るあと有ざるべし　三四　マリア天使よ曰けるい我いまだ夫よ適ざるお何よ
して此事ある可や　三五　天使こさつて曰けるい聖靈ゐんちお臨る至上者け大
能ゐんちと庇ん是故よ爾が生とこるけ聖ある者い神け子と稱らるべし　三六
ろを爾け親戚エリサベツ孕て男子と孕り素姓ふき者と稱をたりし
ご今そでよ孕て六ケ月ゐありぬ　三七　蓋神お於い能ざる事ゐけをバ也　三八　マリア

曰けるゐ我ゐ是主れ使女ありて爾れ言る如く我ゐ應あゝ天使つひよ彼と去り○四十 當時マリア起て亟うゐ山地あるユダ邑ゐ往 四一 ザカリアの家ゐ入りてエリサベツゐ問安志たりしゐ 四二 エリサベツマリアの問安と聞しうを其胎孕腹の内ゐて跳動たりエリサベツ聖靈ゐ感さを 四三 大聲よ呼いひけるゐ女の中ゐて爾ゐ福ある者ありゐ亦孕る所れ者も福ありと 四四 我が主れ母ゐ來わを何ゐ由てう此事と得し夫ゐんぢれ問安れ聲ゐ耳よ入しとき胎孕よろこびて我腹れ内よ跳をり 四五 主れ言と信ぜし者ゐ福ありまひし如く必ず成べけれを也 四六 マリア曰けるゐ我必主と崇め 四七 我靈ゐと救主ある神と喜ぶ 四八 是それ使女れ卑微とを眷顧たまふの故ありと今よ下れ ち萬世までも我と福ある者と稱べし 四九 そを權能と有たまへる者わをゐ大ある事と成り其名ゐ聖 五十 ありれ矜恤ゐ世々のきと長るゝ者ゐ及をん 五一 ろれ臂れ力と發して心れ驕る者と散し 五二 權柄ある者と位より下し卑賤者と舉 五三 飢たる者と美食ゐ飽せ窘る者と徒く返らせ給ふ 五四 アブラハムと其子孫

と窮ゐく憐むことを忘ずして 五五 其僕イスラエルを扶持たまへり恩わきら れ先祖よ言たまひしの如ありて 五六 マリアエリサベツと居しゐと三ケ月をゐりて己が家ゐ歸たりき○ 五七 偖エリサベツ產期みちて男子を生り 五八 ろれ隣里れ者また親戚れもの主がエリ大ある慈悲と垂たまひし事と聞て偕ゐ喜べり 五九 第八日ゐ及けをバ彼等子ゐ割禮せんとて來り其父れ名ゐ因ザカリアと名んとせしゐ 六十 其母こさへて然ゝ可らずヨハネと名べしと曰けをゝ 六一 彼等エリサベツゐ對て曰けるゐ爾ゐ親戚れ中にゐ此名と名しゐ者ゐし 六二 ゐをら遂ゐ其父ゐ頭ゐて示いゐゐ名んと欲か問たるゐ 六三 ザカリアれ口ア寫字板と請て其名ゐヨハネと書るゝよのバ皆奇めり 六四 ザカリアれ口たゞちゐ啓て舌とけ言ひて神と頌たり 六五 それ隣里ゐ住さる人々をゐ懼ぬ又そべて此事と徧くユダヤれ山地ゐ傳播さをゝのバ 六六 聞もれ皆ゐを心ゐ藏て此子ゐ如何ある者ゐあゐ成んと曰り偕主れ手のをと共ゐ在き 六七 父ザカリア聖靈ゐ感さを預言ゝて曰けるゐ 六八 主ゐるイスラエルれ神ゐ讃美べ

き故あを其民と眷顧て贖と爲ー 六九 我儕れ爲お拯救れ角と其僕ダビデれ家
お挺たまへ ば也 七〇 古より聖ある預言者れ口と以て言たまひーの如ー 七一
即ち我儕と敵まさ凡て我儕と惡む者れ手より脱そ救ゐり 七二 此い仁恵と我
儕れ先祖お施し又ろれ聖約と忘し 七三 と也 是我儕れ先祖アブラハムお立ー
所れ誓おして 七四 我儕と敵れ手より救ひ我儕れ生涯と 七五 聖と義お於て懼ゐ
く主お事ーめんと也 七六 嬰兒よ爾い至上者れ預言者と稱ちをん蓋ゐんち主
お先ちて行ろれ路と備んと爲ゞあり 七七 神れ深き矜恤お頼それ罪と赦され
て救をん事と其民お示さんため也 七八 ろれ矜恤お頼て旭れ光上より幽暗
と死蔭お住る者を照し我儕れ足と導きて平康ある路お至せんとて 七九 臨めり
○ 八〇 斯て嬰兒い漸成長し精神さそ〳〵 强健おしてイスラエルお顯るゝれ
日まで野お居り

第二章 當時天下の戶籍と查る詔命カイザルアウグストより出たり 二 この戶
籍調查とクレニオスリヤを管理し時の初次お行いをたりし也 三 人みお戶
籍お登んとて各ろの故邑お歸たり 四 ヨセフもダビデれ宗族また血統ゐを
ほ戶籍お登んとて 五 己お孕る其聘定れ妻マリアと共おがリラヤれ邑ナザ
レより出てユダヤお上りダビデれ邑ベツレヘムといふ所お至をり 六 此お
居ぜ產期滿けをい 七 冢子と生ろをと布お裹て槽お臥せたり此い客舍お彼
等の居處なかりーの故ある也 八 〇 近傍お羊と牧もれ有けるが野お居て夜間
ろの群と守たりしお 九 主の天使きたりて主れ榮光のをらと環照けをゞ
牧者おほいお懼るより 十 天使こをお曰けるい懼るよ勿をを蒿民お關りたる大なる喜れ音と爾曹お告べーろを今日ダビデれ邑お於て爾曹れ爲お救主うまを給へり是主さるキリストなり 十一 爾曹布お於て褒ー嬰兒れ襁お
見さると見ん是ろれ徵なり 十二 俄ち衆れ天軍あらいを天使と共お神と讚美
て曰けるい 十三 天上とふろお榮光神お在を地お平安人お恩澤ある 十四
天使等かをらと離て天お行けをゞ羊と牧もの互お曰けるい 十五 率ベツレヘ
ムおゆき主れ示ー給へる其有ー事と見んとて急き至りマリアとヨセフと

さ檜ゐ臥さゐ嬰兒ゐ尋遜り　十七既ゐ見て此子ふつき天使の語ー事を傳播け
をバ　十八聞者みゐ羊と牧者の語る事と奇とたり　十九マリアハ凡て是等の言と心
ゐ記て思想しぬ　二十羊と牧者ろれ見聞せる所みゐ已ゐ所し所れ如なるゐよ
り神と崇つつ讃美て返をり○　二十一子ふ割禮と行ふべき八日れ日いたりけを
バ其いまだ胎ゐ寓ざる先ゐ天れ使者れ稱ー如く名とイエスと稱たり○　二十二
モーセれ律法ゐ循ひて潔の日滿けをバ嬰兒と携て主ゐ獻んゐ爲エルサレ
ムゐ上をり　二十三是主れ例ゐ初ゐ生るゝ男子ハ主れ聖者と稱べしと錄さをさ
るが如し　二十四まさ主れ律法に班鳩一雙ゐるひハ雛二と獻ふべしと言るゐ循
ひて祭と行ん爲なり○　二十五偖エルサレムゐシメオンと云る人あり斯人ハ義
かつ敬ありてイスラエルれ慰めらをん事と俟る者あり聖靈ろの上ゐ
臨り　二十六また主れキリストと見ざる間ハ死と聖靈よて示さるゝ　二十七かを聖靈
ゐ感ひて神殿ゐ入り兩親ろれ子イエスと律法の例ゐ循ひて行をんと携來
りしよ　二十八シメオン嬰兒と抱き神と讃美いひけるハ　二十九主よ今ろの言ゐ從

ひて僕と安然ゐ世と〻逝せ給ふ　三十我目そでゐ萬民の前ゐ設たまひし救と
見たり　三十一ゐを異邦人と照さん光ありろれ父母ハ嬰兒ゐ就て語る事と奇とを
り　三十二又シメオン彼等と祝て其母マ
リアゐ曰けるハ此嬰兒ハイスラエルれ多れ人の顛て且興らん事と誹毀を
受ん其號ゐ立らるゝゐを衆の心の念れ露をんゝ爲ゐり又劒ゐんちが心と
も刺透せー○　三十六アセルの支派パヌエルの女ゐアンナと云る預言者あり彼
い甚老邁ゐり其處女ゐりしとき夫ゐ適て七年ともゐ居たり　三十七ゐれ老女ハ
齡おほよろ八十四歳れ嫠ゐりしの殿を離ず夜も晝も斷食と祈禱と爲て神
ゐ事ふ　三十八此時これ老女も側ゐ立て主と讃美し亦エルサレムゐて贖と望る
凡れ人ゐ此子れ事と語をり○　三十九主れ律法ゐ循ひて悪く覺けきバガリラヤ
れ己ゞ邑ナザレゐ歸さり　四十其子やよ成長して精神強健ゐ知慧みち神れ恩
寵ろれ上ゐ臨り○　四十一偖ろれ兩親毎年ゐ逾越れ節筵ゐエルサレムゐ往しが
四十二彼れ十二歳れ時まさ節筵れ例ゐ循ひエルサレムゐ上をり　四十三節筵れ日卒

て返往けるお其子イエスエルサレムお留りぬ然るおヨセフと母みとと知
ず 四四 同行人れ中お在おらんと意ひ一日程と行て親戚知音れ者ま尋ーダ 四五 遇
ざりけをバ彼と尋てエルサレムお返り 四六 三日れ〳〵ち殿まて遇かを教師
れ中お坐し且聽つつ問おさり 四七 聞者ミお其智慧と其應對とと奇とせり 四八
雨親こをと見て驚き母うをお曰けるい子よ何ぞ我儕お如此行さるや爾れ
父と我と憂て爾と尋さり 四九 イエス答けるい何故ぞと尋るや我い我父の
家と務べきと知ざる乎 五〇 然も両親は其語る事と曉ず 五一 イエスこをと共
お下りナザレお歸て彼等お順ひ居ま其母こをら凡れ事を心お藏ぬ 五二 イ
エス智慧も齢も彌増り神と人とお益々愛せらさりき

第三章

一 テベリオカイザル在位れ十五年ポンテオピラトいユダヤれ方伯と
ありヘロデとガリラヤれ分封れ君と爲り其兄弟ピリポいイツリア及テラ
コニテれ地の分封れ君とありルサニアとアビレネれ分封れ君と爲りニ ア
ナスとカヤパ祭司の長と爲さりし時ザカリアれ子ヨハネ野お居て神れ
命令と受 三 ヨルダンの邊ある四方の地お來り罪れ赦と得させんが爲お悔
改のバプテスマを宣傳たり 四 預言者イザヤれ言と徴たる書お野お呼る人
れ聲あり云く主れ道と備ろれ徑と直せよ 五 諸れ谷と埋らを諸の山岡れ夷ら
れ屈曲たるは直く崎嶇い易せらを 六 人々ミお神れ救を見ゐと得んと有
が如し 七 茲おバプテスマと受んとて來る衆人おヨハネ曰けるは嗚呼蝮
蛇れ裔よ誰お爾曹お來らんとする怒と避べき事と告しや 八 然バ悔改ふ符
る果と結べし爾曹心よ我儕が先祖おアブラハムお有と意ゐと勿ゐを爾曹お
告ん神は能ろれ石とアブラハムれ子と爲しむべー 九 今や斧と樹れ根お置
る故お凡て善果と結ざる樹れ伐を火お投入らるゝ也 一〇 衆人ヨハネおて
問て曰けるい然も我儕何と爲べき乎 一一 答て曰けるい二れ衣服と有る者は
有ぬ者お分與よ食物を有る者も亦然そべし 一二 稅吏もバプテスマと受んと
て來り曰けるい師よ我儕と何と爲べきの 一三 答て曰けるい定例れ稅銀れ外
お多く取ゐと勿を 一四 兵卒も亦問て曰けるい我儕は何と爲べきや答て曰けるい

人を強暴ー或は誣訴るあるを得ざるべし○十五民懷望ー時あれバ衆人みな心なヨハチとキリストあるや否と忖度
たりもあ十六ヨハチ之あ答いひけるは我ハ水と以てバプテスマと爲曹あ施
へり我より能力ある者きたらん我い其履帶と解あも足す彼ハ聖靈と火と
以てバプテスマを爾曹あ施ハん十七手にハ箕と持て其禾場と潔め麥ハ斂て
其穀あいれ殼ハ滅ざる火あて燒べし十八ヨハチまた多端と以て勸をあ爲
音を民あ宣傳たり十九さて分封れ君なるヘロデうれ兄弟ピリポれ妻ヘロデ
ヤ乃事および行ふ所れ凡れ惡事を二十ヨハ子あ責らをけるを猶も惡事と加
やハチと獄あ囚たり二一民みあバプテスマと受るホイエスも亦バプテ
スマと受て祈るとき天ひらけ二二聖靈鴿れ如き狀よて其上に降ぬ又天より
聲あり云あんぢハ我愛子且ツ喜ぶ所れ者あり○二三時ホイエス年おほより三
十ありして顯音と宣始む人々ハヨセフの父むヘリ
二四其父ハマッタテ其父ヒレビ其父ハメルキ其父ハヤンナ其父ハヨセフ
二五其父ハマタテヤ其父ハアモス其父ハナオム其父ハエスリ其父ハナムガ
二六其父ハマアツ其父ハマタテヤ其父ハセメイ其父ハヨセフ其父ハユダ
二七其父ハヨハナ其父ハレサ其父ハゼルバベル其父ハシアテル其父ハチ
ロン其父ハネリ二八其父ハメルキ其父ハアッデ其父ハコサム其父ハエルモダム其父ハエ
二九其父ハヨセ其父ハエリエゼル其父ハヨリム其父ハマタテ其父ハレビ三十其父ハメオ
ナン其父ハヨナン其父ハエリアキム三一其父ハメレア其父ハマイナン其父ハマタッタ其父ハナタン其父ハ
ダビデ三二其父ハエッサイ其父ハオベデ其父ハボアズ其父ハサルモン其父ハ
ナアソン三三其父ハアミナダブ其父ハアラム其父ハエズロン其父ハパレ
ス其父ハユダ三四其父ハヤコブ其父ハイサク其父ハアブラハム其父ハテラ其
父ハナコル三五其父ハサルーク其父ハラガヲ其父ハペベル其父ハ
ヘベル其父ハカイナン三六其父ハセム其父ハノア其父ハラメク
三七其父ハマトサラ其父ハエノク其父ハヤレド其父ハカイナ

ソ其父ハエノス其父ハアダムヨは即ち神れ子あり
第四章 ❶ 時にイエス聖靈お感さをて
ヨルダンより歸て聖靈よ導ゐを野お適て ❷ 四十日惡魔お試らる此諸日あよとも食ず四十日畢てのち餓さり ❸ 惡魔ゐき
お曰けるハ爾もし神の子あらバ此石よ命じてパンと爲せよ ❹ イエス答け
るハ人ハパンのみお て生る者お非ず唯神れ凡の言お由と錄さをたり ❺ 惡
魔また彼と高山お携ゆき一瞬間お
ての權威と榮華と爾お予ん ❻ 我よをと委任たをバ我が欲む者お之と予ふべし
ヤ故お若忍が前お拜跪ば悉く爾の屬とあらん ❼ イエス答けるハサタンよ
我後に退け爾主たる爾の神お拜跪あをよれを事へしと錄さをたり ❽ 惡魔
またイエスをエルサレムお携ゆき聖殿れ頂よ立て曰けるハ爾もし神れ子
あらバ此より己が身と投よ ❾ それ神ハ爾よ扶ベーと錄さる ❿ イエス答けるハ主さ
が足の石ふ觸ざるやう彼等手お て扶ベー と錄さる ⓫ イエス答けるハ主さ
る爾ハ神と試む可らずと云おけり ⓬ 惡魔みれ誘試みお畢て暫く彼よ離た

リ ⓭ 其ハ然ル聖靈れ能よ以てガリラヤお歸ーよ其聲名あまねく四方れ地お
廣がりぬ ⓮ 斯て彼等お會堂あて敎よ爲すべてれ人々よ榮よ得たり ○ ⓯ ろ
れ長育し所あるナザレお來り常例れ如く安息日お會堂よ入て聖書よ讀ん
とて立けをバ ⓰ 預言者イザヤの書よ手志ホイエス其書よ展て斯錄さたる所
よ見出せり ⓱ 主の靈ヤ我お在す故に貧者お福音よ宣傳ん事よ我お膏よ沃
て任じめれ傷る者よ醫し又囚人お釋ん事よ盲者お見させん事よ示し又壓
制らるゝ者よ縱ち ⓲ 主れ龍年よ宣播んが爲お我よ遣せり ⓳ イエス書よ
攝それ役者お予へて坐ーけをバ會堂よ在者みお目よ注て視あせり ⓴ イエ
ス彼等に曰けるハ此錄さたる事ハ今日あんぢられ前お應り ㉑ 衆うきよ爾
曙それ口より出る所れ恩惠れ言よ奇みヨけるハ此ハヨセフれ子お非や ㉒
イエス彼等お曰けるハ爾曹ハ必我お諺よ引て醫者みづからよ醫せ我
併お聞ーと所れカペナウムお て行し事よ自己の家鄉ある此土お も行べーと
云ん ㉓ 又曰けるハ我まことお爾曹お告ん預言者ろれ家鄉お て敬重る

る者ゐ非ず　悔改を誡を以て爾曹ゐ告んエリヤれ時三年と六ヶ月天とぢて
徧地おはいある饑饉あり一　其時イスラエルの中ゐ多れ嫠ありしのを
エリヤわ其一人へだゐ遣さず只シヤンあるサレパタれ一人の嫠よ遣さ
きさり　また預言者エリシヤれ時ゐイスラエルの中ゐ多れ癩者ありー
のご其一人だゐ潔らをず惟スリヤれナーマンのミ潔らをたり　會堂ゐ在
る者みをと聞て大ゐ憤ほり　起てイエスと邑れ外ゐ出ー投下さんとて其邑
れ建たる山の崖ゐまで曳往り　然ゐイエス彼等の中と徑行て去ぬ　カ
ペナウンと云る邑ゐ至りて安息日ごとゐ衆人と教ーゐ　ろの言權威
有けをゝ衆人ろれ教ゐ駭けり○　會堂ゐ汚たる鬼の靈よ憑をたる人あり
大聲ゐ喊呼いひけるわ　噫ナザレのイエスよ我儕あんちと何れ與あらん
や爾きさりて我儕と爽そ我あんちわ誰ある乎と知すあわち神れ聖ある
者ありイエスをと責て曰けるわ　默て其人と衆の中ゐ作し傷ずゐて出
よ惡鬼つひよ　衆人みゐ駭き互ゐ語いひけるわ　權威と
能力と有て汚たる鬼ゐ命ぜしのを出去り是いのある道ぞや　是ゐ於てイ
エスれ歷名あまねく此四方の地ゐ揚りぬ○　イエス會堂を出てシモンれ
家ゐ入しゐシモンの妻母ゐもき熱病を患ひ居さりき　衆人ゐきの爲わイ
エスゐ求けをゝ其傍ゐ立て熱と斥しゐ熱退けり婦たゞちゐ起て彼等ゐ事
さり　日の入とき各樣れ病と患たる者とをてる人々みゐ其とイエスゐ携
來けをゝ一々ゝろれ上ゐ手と按て醫せり　惡鬼も亦多の人々と出さり喊叫
て爾ぢ神れ子キリストありと云り然ゐ之と斥て言ふゐとを容さりき　惡鬼
ろのキリストあるを識をあり　明旦イエス出て人ゐき處ゐ往けきば衆人
尋來て其離去ゐどと止む　イエス曰けるわ我また他れ鄉村ゐも神の國れ
福音と宣傳ざるを得ず蓋ゐを之が爲ゐ遣さるゝ也　斯てガリラヤの諸
會堂ゐて道と宣傳さり

第五章

衆人神れ道と聽んとて擠擁ける時イエスゲネサレれ湖れ濱ゐ立て
ゐ二艘れ舟あると見る漁の者ゐ舟と離て綱と洗とをり　其一艘ゐ

モンれ舟ありーがイエスの教ふ四聖旨を聽てシモンお曰けるれ漕へいて網と下ーて漁れ五シモン答けるは師よ吾ら終夜とたらきしかど所得あうりき然ど爾れ言お從ひて網と下さん六既お下して魚と甚だ多く網さけるゝりけゞバ七いま一艘ある舟れ侶と招きて來り助めしお彼等が來し時ろの魚二艘れ舟お物て沈んバのりあうりー八シモンペテロ之を見てイエスれ足下お俯て主よ我と離たまへ我は罪人ありと曰り九是シモンおよび偕お在し者ろお漁りし所の魚の夥しきお駭ける也十シモンれ侶あるゼベダイの子ヤコブとモ同ハ子も亦然りイエスシモンお曰けるれ懼るゝ勿をゐんぢ今より人と獲べし十一彼等舟と岸お寄おき一切と捨てイエスお從へり○十二イエスおる邑お居しとき身あとゝく癩病と患る者ありイエスと見て俯伏ねがひ曰けるわ主もし聖旨お肯ときは我と潔あし得べし十三イエス手と伸のをお按て我心お肯り潔あれと曰けゞバ直お癩病いえたり十四イエス彼を戒めて曰けるれ

人お告るなと勿きたゞ往て己と祭司お示らつ潔らきし爲お摩ーセお命ぜよ如く獻物とゐし證據を彼等に爲よ十五然ども益イエスの聲名ますゝ揚り許多れ人々或い教と聽んとし或い病と醫れんとて集り來りき十六一日イエス教と爲せる時パリサイれ人と教法師ガリテヤれ諸鄉コダヤエルサレムより來て此お坐しゐし彼等れ病と醫そべき主れ能顯そきさり十七或人瘓瘋と患る者と牀お擔て舁來り之と家お入イエスれ前お置んと欲ども群集にて舁入べき方あり十八屋上に升り瓦と取除て其人と牀れまゝ衆人れ中へ縋下しイエスの前お置り十九イエスろれ信ある と見て患者お人よ爾れ罪赦さると曰けゞバ二十學者とパリサイれ人ゝ心お思出けるれ此褻瀆てと言者れ誰乎神より外お誰の罪と赦そおとと得んバ二一イエスろの意と知て答いひけるれ何と爾曹心れ中お論ずるや二二爾れ罪赦さるといふと起て行と言と孰の易きろを人の子地お在て罪とゆるその權威あるおとと爾曹お知せんとて遂お瀕瘋

れ人ゐ我ゐんぢゐ告ゐれて牀と
ゐて直ゐ起て臥居たる牀ととり神と崇の何大ゐ異懼て曰けるい我儕今日奇異ある事と見たり〇
ス出てレヒと云る稅吏の稅關ゐ坐ー居けるを見て我ゐ從へと曰けるに
レヒ一切と捨おき起て從へり
設ーゐ稅吏また他の人々も共ゐ筵ゐ坐ーさる者多ありければ
者とパリサイの人イエスの弟子ゐ怨言いひけるい爾曹稅吏ま罪ある人
々と共ゐ飲食そるは何故ぞ
需ず惟病ある者ゐをと需む
て悔改させんが爲ありて
また厭棄とるそパリサイの弟子も亦然り然るゐ爾れ弟子飲ゐと食ゐとを爲
その何故ぞ
なさしむる事と得んや
新郎れ朋友ろの新郎と一處ゐ居間いる之ゐ瞞食
將來新郎と別るる日いたらん其日ゐ之斷食せべ

きあり
譬と以て曰けるに新衣と裁取て舊衣と補ふ者あらじ若然せば
新衣とも壞ひ且新より取りたる布は舊もれと合ず
また新酒ゐ新革袋ゐ盛べき者ゐ斯てあろ兩あおら存なを
お盛る者あらじ若然せば新酒は其袋をはりさき漏山ろ酒革袋も壞る
べし
舊酒と
飲て立刻ゐ新酒と欲者い有と是舊と尤も好と云ばあり

第六章 適越節の二日ののち首れ安息日イエス麥れ畑と徑行しゐ其弟子麥
れ穗と摘これと手おて搓くらひしーのパ
は爾曹安息日ゐ行まじき事を行と
よび從ゐ在し者れ饑しをき行たる事と未だ讀ざる乎
と祭司れ外と食まじき供物れパン
又曰けるい人れ子いゐ安息日ゐも主たる也〇
會堂ゐ入て敎ふ此ゐ右れ手枯たる人ありけるを
ヱスこをと安息日ゐ醫あらんあとと窺ひぬ蓋うをと訴んと欲べなり

それ意と知て手あへさる人あ起て中あ立よと曰けるい其人おきて立り一〇イエス曰けるい我あんぢらあ問ん安息日あ善と行と悪と行と又生と救と殺と就との行べきかと環視て其人あ手と伸よと曰けるに彼うれ如せしよ手そあいち愈て他れ手は如くあきり一一彼等大あ怒て如何あイエスと處んと互あ議あへり一二當時イエス祈禱れ爲あ山よ往て終夜神あ祈きり一三夜明てイエス弟子と呼ろれ中より十二人と選て之と使徒と稱く一四即ちペテロと名たまひしシモンと其兄弟アンデレ及ヤコブとヨハネとピリポとバルトロマイ一五マタイとトマスアルパイれ子あるヤコブとゼロテと云るシモン一六ヤコブれ兄弟れユダとイスカリオテれユダあり此ニ人あイエスと賣たる者あり一七イエス是等と共あ下て平のある地あ立しあ許多れ弟子と夥しき人々ユダヤれ四方またエルサレム及ツロシドンれ海邊よあ來集りて或い其教と聽んとし或い病と醫さんと事と爲へり一八また惡鬼あ難さをたる者あり咸く醫さをたり一九衆みなイエスあ捫らんとせり是

能力れ其身より出て彼等と咸く醫せやり也○二〇イエス目と擧弟子と見て曰けるい爾曹貧者い福あり神れ國と即ち爾曹所有あきやり也二一爾曹いま餓さる者い福あり飽ことと得べけやり也爾曹いま哭者い福あり爾曹いま笑ことと得べけやり也二二人の子れ爲あ人あんぢらあ惡しとおて棄あた爾曹福あり二三其日あ歡び踊れ爾曹天あ於て賞賜大あきやり也ヲび先祖が預言者あ行さりしも是れ如し二四爾曹富者い禍あるかな爾曹いまでお安樂と受やあり二五爾曹飽者い禍あるかな爾曹いま笑者い禍あるかな哀と哭んと爲やあり二六凡れ人あんぢらと譽あやあ爾曹禍あるかな爾ろの先祖が僞乃預言者あ行さりしも是の如し二七我お聽とよろれ爾曹お告んれ仇と愛よ爾曹と憎者と就し虐遇者の爲お祈禱せよ二八人あんぢれ頬れ右方と向よ爾乃外服と奪た裏衣とも禁ざき二九凡て爾お求たる之お與へ爾れ物と奪た其とまた索る勿き三〇己人お施よんとそる事い亦人お施よ其如く三一己と愛そる者を愛するい何の賞賜あ

らんや惡人おてもに己と愛そる者い愛そる也
何の賞賜あらんや惡人もせさ是の如く行ふ
もふ人お借い何の賞賜あらんや惡人も其ごとく
あり　爾曹仇と愛ー又善をおこ何とも望ずーて借與よ然を其賞賜は大お
り且至上者れ子と爲ん夫上者い恩と忘るゝ者および不善者おまて慈愛
と施せる也　是故お爾曹の父れ憐憫の如く亦憐憫を爲べし　人を譏おを
勿を然を爾曹も譏をせ人と罪そるおと勿を然ば爾曹も罪せらをず人と怨
せ然が爾曹を怨さるべし　人お與よ然を爾曹も予らるべし彼等量を嘉し
て搖いを攝いを溢るゝ迄お走て爾曹の懷お納ん爾曹量る所の其量おて
亦人お量るべし○　まさ譬を彼等お曰けるい瞽と瞽れ相者とおゝ得るや
相共お落坑お陷らざらん乎　弟子いろれ師お踰ず凡う全備ある者い其師
れ如おるべ也　なんぢ兄弟の目おある物屑と見て己れ目おある梁木と知
ざるい何ぞや　如何で己れ目ある梁木を見ずして兄弟お對ひ兄弟よ爾

れ目おある物屑を我お取せよと云おとを得んや僞善者よ先おのれ目よ
り梁木と足を然ば兄弟れ目おある物屑と取おと明のお見べ志　そを惡果
を結い惡樹は非ず又善果と結い惡樹に非ず　凡の樹いろの果お因て識る
べ剌棘よめ無花果を採ず亦蒺藜よ葡萄と採し　善人い心れ善庫より善と
出も惡人いそれ惡庫より惡と出を蓋必お充るより口お言る也　爾曹わ
なぜ我を主よ主よと稱るや　凡て我よ就り我言と
聞て行者を譬て爾曹お示さん　其人い家と建るお土と深く堀て基礎と盤
止お置ば洪水れとき横流そ家を衝と迅動ずおと能ず是基礎と盤
止お置ばあり　聽て行ざる者い基礎なく家と土れ止お建さる人れ如し横
流おとと衝ときい其家よぱちわ頓を其顚壞ま甚だし

第七章

一　イエス此そべて言と民お畢てカペナウンお入しお　二ある百
夫れ我しろれ愛そる僕やみて死をのりありけるバ　三イエスれ事と聞コダ
ヤ長老等を遣しお來り僕と助け給んおとと求り　四彼等イエスお就り

切ゐ勸いひけるゐ此事と求る人ゐ善人あり　五我民と愛し我儕れ爲ゐ會堂
と建より　イエス彼等と共ゐ往て既や其家ゐ近けるとき百夫れ長朋友
と遣して曰せけるゐ主よ自己を勞動みと勿き我が家裏ゐ入來るゐ憚多ー　七
故ゐ我ゐんちれ前ゐ出も亦憚ゐん　是わ
き人れ權威れ下ゐ屬る者ゐるゐ我下ゐ亦兵卒ありて此ゐ往と命ば往ゐ
ゐ來と命ば來る我僕ゐ之と行と命ば即ち行が故ゐり　八イエス聞て之と奇
き從へる人々と顧て曰けるゐ我ゐんちらゐ告んイスラエル れ中ゐても未
だ斯る篤信ゐ遇ざりき　九遣されたる者家ゐ歸て病さりし僕を見ば已ゐ全快
とゐせり　十翌日イエス　ナインと云る邑ゐ往けるゐ許多れ弟子ゐよび許
多れ人々も共ゐ往り　十一邑れ門ゐ近づきしとき舁出さる人死人ゐり其母ゐ
寡ゐて此れ獨れ子ゐり邑れ人々多みきゐ伴ふ　十二主憐と見て憫み哭ゐなき
と曰て　十三近より其櫬ゐ手と按ければ舁る者ゐも止まりイエス曰けるゐ少者
よ我ゐんぢゐ命ゐきよ　十四死さる者起て且言ひ始むイエス之を其母ゐ予せ

り　十五衆人みゐ懼て神と崇いひけるゐ大ゐる預言者已ゐられ中ゐ興る神ろ
れ民と眷顧たまへり　十六イエスれ此聲名ユダヤれ全國ゐ四方ゐ揚り
ぬ　十七ヨハネの弟子ども是等の事と彼ゐ告けるば　十八ヨハネ二人の弟子
と召て言遣しけるゐ來るべき者ゐ爾ゐ我儕ゐ遣して曰しむ
二人イエスゐ來り曰けるはバプテスマのヨハネ我儕と爾ゐ遣して曰しむ
來るべき者は爾ゐるゐ亦已ゐ他ゐ俟べきか　十九此時イエス多の疾あるひ
い病おまび惡鬼ゐ惡たる者と醫し且おはくの瞽ゐ見るみとと賜さり　二十イ
エス彼等ゐ答曰けるは爾曹ゐ見と聞ところろとヨハネゐ往て告よ夫瞽
者は見破者ゐ行み癩者は潔り聾者ゐきよ死し者ゐ復活さ貧者ゐ罵音と
聞せちる　二十一凡ろ我爲ゐ躓ゐざる者と福なり　二十二ヨハネれ使者さりし後イエ
スヨハネの事を衆人ゐ曰けるゐ何と見んとて野ゐ出しや風ゐ動さるよ葦
ふる乎　二十三然ば剛豐るゐと見んとて出しや美服と衣さる人ゐるか　二十四文飾
と衣て奢る者ゐ王の宮ゐ在　二十五然ば何と見んとて出しや預言者ゐるゐ然已

れ爾曹ゐ告ん是預言者よりも卓越さる者ありニ七れ爾ゐ先ちて道を備る我使者を爾れ前ゐ遣んと錄されたるゐ即ち此ありニ八我あんぢらゐ告ん婦れ生る者けうち未だバプテスマのロハチよりも大ある預言者を無さをや神れ國ロハチゐ聞る庶民また稅吏も其バプテスマを受て神を義とせりニ九バリサイの人また數法師も其バプテスマを受ず自ら暴ひて神れ旨ゐ背たりニ十然バ此代の人々を何ゐ比へ又何ゐ譬んやニ一童子市ゐ坐し互ゐ呼て我儕笛ふけやも爾曹哭ずと云ゐ似さりニ二蓋バプテスマれヨハチ氷りてパンとも食ず酒とも飲さをバ惡鬼ゐ恐たる者ありと爾曹いへりニ三人の子きさりて食ふ事とし飲こととを爲バまた食と啫と酒と好の人稅吏罪ある人れ友ありと爾曹いへりニ四然や智慧ゐ智慧れ子ゐ義と爲らるニ五或パリサイれ人イエスと請て共ゐ食せん事と願けをバイエスパリサイれ人れ家ゐ入て食ゐ就りニ六邑れ中ゐ惡行と爲る婦ありけるをバイエスパリサイれ人れ家ゐ坐せると知て蠟石れ盒ゐ香膏

と携來りニ七イエスれ後ゐ立ち足下ゐ哭き涙ゐて其足と濡し首ノ髮ともて之と拭ゐ其足ゐ口と接また香膏と之ゐ抹りニ八イエスと請さるパリサイの人ゐ見て心れ中ゐ謂けるい此人もし預言者ゐらバ捫し者ゐ誰ある乎また如何ある婦ある乎と知ん此婦ゐ惡行を爲る者ありニ九イエスと之ゐ答て曰けるいシモン我あんぢゐ言事ありて答けるい或債主ゐ二人の負債人ありて一人ゐ金五百一人ゐ五十と負しゐ三十イエス曰けるい債方ゐありけをバ債主ニ人と免さり然バ二人れ者ろれ債主と愛そるみと孰か多き我ゐ聞せよ三一シモン答けるいあらんイエス曰けるい爾が意とみろ違さる也三二遂ゐ婦と顧みてシモンゐ曰けるい此婦と見ゐ我あんぢの家ゐ入ゐ爾い我足ゐ水を給ず此婦い涙ゐて我足と濡し首れ髮ともて拭足三四爾い我ゐ口と接ず此婦い我ゐ入し時より我足ゐ口と接て已ず三五爾い我首ゐ膏と抹ず此婦い我足ゐ香膏と抹り三六是故ゐ我あんぢゐ言ん此婦の多れ罪と赦をたりとゐ因て其愛も亦多ありと

故るゝみと少[4]者い其愛も亦少し
[48]る[49]同お坐せる者をも必れ中お聞けるい此人い是何人ぞと互に
手イエス婦お曰けるは爾れ信あんぢと救り安然よーて往

第八章 此後イエス鄉邑と周遊て神れ國の福音と宣傳ふ十二の弟子も偕
[1]お從ひぬ[2]また前お惡鬼と患たりし者病と癒をさる婦等も從ひたり即
ち七の惡鬼と逐出をさるマグダラと稱マリア[3]又ヘロデれ家令クーザの
妻ヨハンナ又スザンナ此ほか多れ婦ありて皆己れ所有と以てイエスお供
へたりき○[4]衆れ人々諸邑より出てイエスの所お集りけるゆ[5]譬と
りて種まく者種と播んとて出ぬ播るとき路旁お遣ち踐踏らせ且
天空れ鳥ありてまさ石上お遣し種あり萠出て槁たり是潤あらざ
[6]故ありまた棘の中よ遣し種あり棘も同お生長て之と蔽りまた沃壤ふ
遣ある種あり生出て實と結べるゆと百倍せり是と言畢て呼りけるい耳あり
て聽ゆる者い聽べし[9]其弟子とふて曰けるい是いかなる譬ぞ[10]答けるい

神れ國乃奧義と爾曹お知あたと賜やれど他れ者おい譬と以てす此い視ても
見ず聽ても悟さる爲あり[11]夫お譬の釋種い神れ道あり[12]路の旁お遣し
い聽し後惡魔れ爲よ其心より道を奪るゝ者あり彼い人れ信じて救んよ
とを恐る[13]石上お遣しい聽をき喜びて道と受れども根おけざ信ずるて
と暫のミ患難お遇時と道お背く者あり[14]棘お遣しい聽て往おれ世の
諸慮と貨財と宴樂とお蔽をて實さる者あり[15]沃壤お遣しい正あり善心お
て道と聽おをと守り忍て實と結ぶ者あり○[16]燈と燃し器おて之と覆ひ或
い床下おく者おし入來る者れ其光と見ん爲お臺れ上お置べし[17]隱て現
をさゞる者あらず露出さる者あらず知れず露出さる者あー[18]是故お爾曹聽ことと愼め有る
者いおほ予らを無有者い有りと意ふ所れ物とも奪るべし○[19]此時イエスの
母と兄弟きたりけるミ衆集お因て近くみを能ざりーのパ[20]或人てをとゝ
エスお告て曰はるい爾ご母と兄弟あんぢお遇んとて外お立り[21]イエス答
て曰けるい神れ道と聽て之と行ふ者い乃ち我母と兄弟あり○[22]一日イエ

一 イエス弟子と共に舟に登て彼等に湖の前岸へ渡べしと曰けれバ即ち漕出せり
二三 舟れ走る時イエス寢たり颶風湖に吹下し舟に水滿んとして危のりるが
二四 弟子きたりてイエスと醒し曰けるハ師よ我儕亡ぶんとそイエス起て
風と浪とを戒めけれバ止て平穩になりぬ 二五 イエス白けるハ爾曹れ信いづ
二六 こゝ在や彼等脅き且奇として互に曰けるハ此も何人ぞや風と水とも命
ぜしのぼ亦順へり 二七 斯てガリラヤに對るガダラ人れ地に着て岸に登イ
時ある一人邑より出てイエスに遇ひれ者は久く惡鬼に憑を衣ときず家に
住ず惟塚にれと居たりき 二八 イエスと見て喊叫ひれ前に俯伏ゐ大聲に呼ひ
けるハ至上神れ子イエスよ我ぶんぢと何れ與あらんや爾に求ひるとと苦む
るおと勿を 二九 これ惡鬼人より山よとイエスが命じたるに因てあり彼れ
惡をさる事すでに久し鏈また桎梏よて檠守ごも其と打碎き惡鬼れ爲に野
に逐ぬ 三〇 イエス之に問て曰けるハ爾が名ハ何と稱や答けるハレギヨン是
おほくれ惡鬼の入たるが故なり 三一 惡鬼イエスに求けるハ命じて底あき所

に往ざむる勿を 三二 此に多れ豕の羣山に草を食ありしが彼等ゐれ豕に入
んことを許せと求けれバ之を許せり 三三 惡鬼ゐれ人より山て豕に入ればの
其羣はげしく馳下り山坡より湖に落て溺る 三四 牧者どもも其有る事を見て逃
ゆき之を邑また諸村に告ふり 三五 衆人ろの有し事を見んとて出てイエスれ
所に來るに惡鬼れ離をし人衣を着さしめありて心おちてイエスの足下に坐せる
を見て懼あへり 三六 惡鬼ゐ悉をさり志人れ救をし狀を見たる者ゐの事を彼
等に告けれバ 三七 ガダラ四方れ多の衆庶イエスに此を去んことを求り是大
ゐ懼ればの故なりイエス舟に登て返ぬ 三八 惡鬼れ離たる人イエスと共に居んと
ゐとを求けるよイエス之を去しめて 三九 家おのへり神れ爾に行ざる大ある事
を人に告よと曰けれバ已に行さまひし大ある事を遍邑に傳さり○ 四〇 イエス返たるとき衆人みな
ゐ仰望て之を喜び接ふ 四一 ヤイロと云る人あり此も會堂れ宰あり年おほよそ
十二歳ある一人の女ありて瀕死ゐりけれバ來イエスの足下に伏て我家に
來り給んことを求りイエスれ往と

き 衆人こぞよ擁おへり 四三 婦あり十二年血漏を患ひ醫者に費お其業と盡く
耗しけるも誰よるも痊を得ざりしが 四四 イエスに後お來て其衣の裾お捫けるに
直ぐ血止漏よと止ぬ 四五 イエス曰けるは我お捫る者は誰ぞや衆人みな特
お捫る者あらずと曰りペテロおよび偕お在者ども曰けるは師よ衆人あん
ちよ擁擠せまるお我よ捫る者は誰ぞと曰さまふ乎 四六 イエス曰けるは我お
捫る者あり能力の我身より出るを覺ゑれ也 四七 婦の匿ふらず隱せぬと知
おのよき來て前に伏さばりし故と其さだちお愈さるとと衆人れ前お告
イエス曰けるは女よ心安のを爾れ信あんぢと救へり安然よして往おく
言る時よ會堂れ宰の家より人ぎたりて宰お曰けるは爾が女とや死さり師
と勞はす勿ど 四九 イエス之とき〻答て宰お曰けるは懼る〻勿たゞ信ぜよ女は
痊べし 五〇 イエス家お入にペテロヤコブヨハネおよび女れ父母の外さをみ
も偕お入ると許さゞりき 五一 衆人みな女れ爲お哭哀あるをイエス曰けるは
は哭あるを死たるに非ず寢さる耳 五二 彼等ら れ死たると知ゑ之と笑へり

イエス人々と皆いだして女れ手とをとり女起よと呼曰けるば 五五 其魂のへりて
忽ち起さりイエス命とて食と予ゑるのば 五六 父母ゐ驚異ぬイエスおの行しこ
とど人お告るな戒め給へり

第九章 イエス十二れ弟子と召集めて凡れ惡鬼と出ゑ病と醫ぞ能力と權威と
賜たり 二 また神れ國と宣傳へ病者と醫せん爲お 三 彼等と遣さんとして曰
けるは路資お何とも携ざを杖ゑたれ旅嚢糧金二の衣とも帶こと勿 四 何の
家お入とも其處お居りて亦其處よより去 五 凡曹と不接者あらば其邑と出る時
うをらお醒れため足より塵と拂つ 六 弟子いでゝ徧く諸鄉よゆき福音と宣
傳のり病と醫せり 七 分封れ君ヘロデイエスれ行ゑ諸事と聞て惑り或人い
之とヨハネ乃甦れるなりと言 八 ある人いエリヤの現ぞたる也といひ又あ
る人い古の預言者れ一人甦をる也と言をありた ヘロデ曰けるい我ヨハ
ネれ首と斬り斯る事の聞ゆる者い誰あるやヘロデ之と見んと欲ふ 九 使
徒たち歸來りて其行ゑことをイエスお告イエス彼等と携ひて潛おべツサ

イダと云る邑の邊ある野ゐ退きしみ
國ゐ事と誰の何體と求る者と醫せ
イエスゐ曰けるい此い野ゐきい衆人
食を覓る事と爲さまへ　イエス曰け
我儕たゞ五のパンと二ゐ魚ある耳み
別ゐ食物いゐ　此ゐ居し男おほよ
い衆人と五十人づゝ列べ坐せしめよ
めたり　イエス五ゐパンと二ゐ魚と
予て衆ゐ前ゐ陳しむ　ゐ食飽て餘ゐ
衆の在さりしと乞ゐ祈禱さりしが弟子
い衆人い我と言て誰と爲の　答て曰け
或い古ゐ預言者ゐ一人ゐ甦きる也と
誰と爲のペテロ答けるい神ゐキリス

何人ゐも告る勿ゑと命じたり　又曰け
長老祭司ゐ長學者ゐもゐ棄らき且殺
人ゐ曰けるゑ若ゐをゐ從いんと欲ふ者い
ゐ從へ　己ろの生命と保全せんと欲者い
之と保全すべし　人もし全世界と利す
益あらん乎　我と我道と恥る者とを人ゐ子
榮光ともて來る時ゐをと恥べし　ゑを
國と見ずでゑ死ざる者あり○　此事と
ペテロヨハヂヤコブと携ひ祈禱せんと
貌忽ち異り其衣服ーろく輝ぬ　二人ゐ
とエリヤあり　榮光ゐ中ゐ現ゑて　イエスのエルサレムゐて　既や世と
逝んとする事と語る　ペテロおよび偕ゐ在し者等いたく寢たりしが已ゐ
醒てイエスゐ榮光とゐた偕ゐ立る二人と見たり　みゐ二人ゐイエスと別る

ゟ時ペテロイエスお曰けるハ師よ此お居ハ善ㇰ私らお三ツ廬と建せ給へ一ツ爾のため一ツモーセれたため一ツエリヤの爲お せん此と其言とお ろと知ざりし也 三四 おく言ると 雲 ㇰりて彼等と蓋へり其雲お入しとき弟子さち懼ぬ 三五 聲雲より出て曰けるハ此れ我愛子ありこれお聽べし 三六 聲寂たを惟イエス一人と見たり弟子さち口と緘て見たりし事と當時ハ誰お も告ざりき○ 三七 翌日山より下りけるを許多れ人々イエスと迎ふ 三八 其中乃或一人よばゝりて曰けるハ師よ願くハ我子と眷顧たまへ此れ我獨子なるよ 三九 惡鬼ㇾ爲お憑れて ハ忽然をけび泡とふき拘攣らをて傷を離るゝこと實ㇾ難に 四〇 我お弟子お求しのご能ざりき 四一 イエス答て曰けるハ噫信ㇾ 枉邪世ある哉 忍 ㇾ 幾何時おらんや爾お子と此お携來れ 四二 來ハ惡鬼の れと傾跌て拘攣ぬイエス汚さる鬼と戒て其子と醫し父お予へさり 四三 衆人ㇾ ある神れ大ある能と驚きイエスㇾ 行し事と異める時お イエス弟子お曰けるハ 四四 此言と爾曹耳お 繳めよ夫人の子ハ人の手お付ㇾをん 四五 彼等ハ此れ言と悟ざりし悟ざるやう隱さをさる也彼等もまた懼て此事と問ざりき○ 四六 弟子等のうち互お誰の大ㇾらんとの爭論ありけれバ イエス其心ㇾ 念と知て孩子ととり側おさてゝ 四七 彼等お曰けるハ我名れ爲お此孩子と接る者ハ即ち我と接る者ハ我と遣ㇾ者と接るなり凡て爾曹がうち最も小者ㇾ是大ㇾらん 四八 ヨハヂ答て曰けるハ師よ爾れ名に托て鬼と逐出せる者と見さりしが我倂と共ハ從ざる故ㇾみをを禁さり 四九 イエス曰けるハ禁るゝ勿を我倂お敵抗ざる者ハ我倂お屬者ㇾり○ 五〇 イエス天お升るれ期いたりけるをエルサレムお往ことと確定めさり 五一 使者等と先お遣しけるハ彼等ゆきてイエスお備んが爲サマリヤ人の鄉お入しお 五二 鄉人ろのエルサレムと向行さまるが故お イエスと絏ざりき 五三 弟子ヤコブ ヨハヂ此事と見て曰けるハ主よ我倂エリヤれ行し如く天より火と召降し彼等と滅さんとす可か 五四 イエス顧みて之と責めり 五五 曰けるハ爾曹の心如何なる乎と自ら知ざるあり 五六 人れ子ハ人の命と滅す

爲ゐ來ず惟ゐを救ふ爲あり遂ゐ他れ鄉ゐ往り○五七路を行とき或人イエス
に曰けるい主よ何處ゐ往たまふとも我從ん五八イエス彼ゐ曰けるい狐
い穴あり天空の鳥い巢あり然ども人の子い枕そる所あし五九又ある一人ゐ
曰けるい我ゐ從へ彼いひけるい主よ先ゆきて父と葬る事と我ゐ容せ六〇イ
エス曰けるい死たる者ゐ其死し者と葬らせ爾い往て神れ國と宣よ六一又ゐ
る一人いひけるい主よ爾ゐ從ん先ゆきて家人に別と告るゐとを容せ六二
イエス曰けるい手と犂ゐ著て後と顧る者い神の國よ當ざる者あり

第十章

此後主また七十人と立てそと兩個づゝゐ分ち自ら至んとする諸邑
諸地ゐ前ゐ遣さんとて二彼等よ曰けるい收穫い多く工人い少し故ゐろの
稼主ゐ工人と收穫所ゐ遣んみとを求べし三往わを爾曹と遣すい羔と狼れ
ゐかゐ入るが如し四囊また旅袋履とも携よと勿を途よて人ゐ問候ともそ
ろ勿れ五人れ家に入ば先ろの家れ安全あらんことを求へ六若ゐるゐ安全れ
子あらば爾曹が所る安全い其家ゐ留らん若ゐらずば其所る安全ゐんぢら

ゐ歸べし七其家ゐ居りて供る所れものゐ之と飲食せよ蓋工人れ其工錢と
獲い宜ゐを絶ば家より家ゐ移ろゐとを爲ざれ八邑ゐ入んとき邑ゐ入んとを接る者あら
ば其あるんぢられ前ゐ供る者と食せよ九邑の中ある病れ者と醫せ亦衆人ゐ神
れ國い爾曹ゐ近けりと曰へ十もし邑ゐ入んに接る者あくば衢ゐ出て曰ん我
儕ゐ沾たる爾が邑れ塵い爾曹ゐ對て拂ん然ども神の國れ近けると知よ十一
と爾曹ゐ告ん其日いさらばソドム十一れ刑罰い此邑よりも却て易のるべし十二
ゐゝコラジンよ噫禍ある哉ベツサイダよ爾曹の中ゐ行し異能と
若ツロとシドンゐ行しあらば彼等い早く麻とき次と蒙り坐ろて悔改しる
るべし十三審判ゐいツロとシドンれ刑罰い爾曹よりも却て易からん十四已ゐ
天ゐ迄て舉らをたるカペナウムよ又陰府ゐ落さるべし十五爾曹ゐ聽者い我
ゐ聽あり爾曹と棄る者い我と棄るあり我と棄る者ゐ我と棄る者ゐ
あり○十七七十人皆び返りて曰けるい主よ惡鬼さへも爾れ名ゐ因て我儕ゐ服
せりと十八イエス曰けるい吾ゐ撒ヒ如くサタンの天より隕るを見ろ我ゐん

ちらお蛇蠍と蹴ゑさ敵れ諸の權と制ふる權威と賜たり必ず爾曹と害ふ者あし　二十 然ども惡鬼れ爾曹お服ろふ事い喜とそる勿き爾曹が名れ天お錄さきしと喜とすべー　二一 此時イエス心お喜びて曰けるい天地れ主ある父よ此事と智者と達者とお隱去て赤子お顯し給ふと謝す父よ然そ是の如きい意旨お適るあり　二二 父い萬物と我お賜ふ父れ外お子い誰あると識者あく亦子および子れ顯す所の者れ外お父い誰あるを識者あし　二三 イエス弟子と顧て竊て曰けるい爾曹が見とみろの事と見るろれ目い福あり　二四 我あんぢら告ん多の預言者および王も爾曹が見とみろれ事と見んとせーども見ず爾曹が聞とみろれ事と聞んとせしども聞ざりき○　二五 爰お一個の敎法師あり起て彼と試と曰けるい師よ我あお何爲ば永生と受べき乎　二六 イエス曰けるい律法お錄さきしい何ケ爾ん吾お讀か　二七 答て曰けるい爾心と盡し精神と盡し力と盡し意と盡あて主ある爾の神と愛すべし亦己れ如く隣と愛すべー　二八 イエス曰けるい爾れ答へ然り之と行と生べー　二九 彼ゑゴの

らと罪おき者よ爲とてイエスお曰けるい我隣とも誰ある乎　三十 イエス答て曰けるいある人エルサレムよりエリコお下るとき强盜よ遇り强盜ろれ衣服と剝取て之と打擲き瀕死おなーて去ぬ　三一 斯る時お或祭司あれ路より下去おの之と見過おーて行り　三二 又レビの人も此お至り進と見て同く過行り　三三 或サマリアの人旅ーて此お來り之と見て憫み　三四 近よりて油と酒と其傷お沃ゐと裹て己の驢馬おの せ旅館よ携往て介抱せり　三五 次日いづるとき銀二枚と出し館主お予て此人と介抱せよ費もー增ゑ我のへりの時あんぢお償ふべしと曰り　三六 然ば此三人のうち誰お强盜お遇し者の隣あると爾意ふや　三七 彼いひけるい其人と矜恤たる者ありイエス曰けるい爾も往て其おとく爲よ○　三八 うきら路と行る時イエス一鄉お入けをばマルタと云る婦これと迎て自己の家お入めろれ姉妹あマリアと云る者ありイエスの足下お坐りて其道と聽り　三九 マルタ供給のおと多ーて心いりみだをイエスお近よて曰けるい主よ我が姉妹己きと一人遺て勞動ゐむると何とも意ざるの

彼を命じて我と助ちめよ　四一イエス答て曰けるハマルタよマルタよ爾多端
をより思慮ひて心勞せり　四二然ど無て叶ふまじき者ハ一ありマリアハ既を
善業と擇たり此ハ彼より奪べうらざる者あり

第十一章　一イエス某所を祈けるを畢しとき一人ハ弟子いひけるハ主
よ我ハ子其弟子を教し如く我儕を祈るを二イエス曰けるハ
祈る時ハ斯いふべし天を在ます我儕れ父よ願くハ聖名と尊崇させ給へ爾
國と臨らせ給へ　三爾旨れ天を成おとく地をも成せ給へ　三我儕れ日用れ糧と
毎日を與たまへ　四我儕を罪と犯す者と凡て免せハ我儕れ罪とも免し給へ
我儕を試探を遇せず惡より拯出し給へ　五また彼等を曰けるハ爾曹れ中も
し或人夜半を其友へ往て友よ我が朋輩旅より來しを供べき物あきゆゑ三
のパンと借よと曰んよ　七內を居もれ答て我と煩すそ勿を既や門ハ閉ゐを
と共を兒曹も牀を在ハ起て予るみと能ずといふ者あらん乎　八我あんぢら
に告ん其友あるゆより起て予ざと雖ひたそら請が故を其需を從ひ起て予

べし　九我あんぢらを告ん求よ然ハ予らを尋よ然をあひ門を叩よ然ハ啓る
るゆとを得ん　十蓋そべて求る者ハ得たつぬる者ハあひ門を叩者ハ啓るき
を也　十一爾曹れうち父たる者誰の其子れパンと求んを其を代て蛇を予んや
を其を蛇を予んや　十二卵を求んを蠍を予んや　十三然を爾曹惡者あがら善
賜ものを兒曹を予るを知ゆしして天を在す爾曹の父ハ求る者よ聖靈を予ざ
らん乎　十四イエス瘖啞ある惡鬼を逐出しけるを惡鬼逐出しよ瘖者もれいひ
しゐた人々驚けり　十五其中ある者れ曰けるハ彼ハ惡鬼れ王ベルゼブルを藉
て惡鬼を逐出せる也　十六又ある人々ハイエスを試んとて天よりれ休徵を求た
て　十七イエスうれ意を知て曰けるハ
るよ也　十八若サタンも自ら分爭をバ其國いかで立んや夫あんぢら我と言て
ベルゼブルを藉て惡鬼を逐出すとせり　十九若我をベルゼブルを藉て惡鬼を
逐出さバ爾曹の子等ハ誰を藉て惡鬼と逐出そや夫のをらハ爾曹れ裁判人
と爲べし　二十若我を神れ指をもて惡鬼を逐出さるあらバ神の國ハ既や爾曹

ゐ來れり　二一勇者鎧と撮て邸と守るとき其所有安全なり　二二もし之より勇
者きたりて其ゐ勝ときは其恃とせる鎧と奪ひ且贓物と分べし　二三我と偕ゐ
らざる者は我ゐ叛き我と偕ゐ散ざる者は散ざるなり○　二四惡鬼人より出て旱
たる所とめぐり安と求をやも得ずして曰けるは我出し家ゐ歸らん　二五已ゐ
來しゐ掃淨り飾をると見　二六遂ゐ往てこよりも惡き七の惡鬼を携へ入て此
ゐ居をは其人の後乃患狀は前より更ゐ惡くなるべし　二七この話と言るとき群集
の中より一婦聲と揚て曰けるは爾と孕し腹と爾れ吮し乳は福ありイエ
ス答けるは然されど神の道を聽て其と守る者の福ゐは若ず○　二九人々擁集
をる時イエス曰けるは今の世は惡し奇跡と求るとも預言者ヨナの奇跡は
外ゐ奇跡は予らをしてなり　三十蓋ヨナのニネベの人ゐ奇跡と爲しごとく人の子は今
の世ゐ奇跡と爲べし　三一南方の女王審判の日ゐ共ゐ起て今の世の人の罪と
斷めん彼は地の極よりソロモンの智慧と聽んとて來れり夫ソロモンより
大なる者ゐこに在　三二ニネベの人審判の日ゐ共ゐ起て今の世の人の罪と斷

めん彼等はヨナの勸言ゐ因て悔改めたり夫ヨナより大なる者ゐこに在　三三
燈と燃て隱る處あるひは升の下ゐおく者なし入來る者は其光と見んため
ゐ燭臺の上ゐ置なり　三四身は燈は目なり目あきりは爾身も晴し故ゐ爾ゐある光は暗らぬやう愼めよ　三五もし爾
の目瞎ければ爾の身も暗し　三六故ゐ爾ゐある光は暗らぬやうをも全身ゐあるく其
れ全身光明にして暗所あくをも燈は輝きて爾と照せ如く全く光明あるべし
○　三七イエス語をるとき或パリサイの人共に食せん事と請けれ入て食に
就り　三八ゐれ食する前ゐ洗ゐあらと爲ざりしと見てパリサイの人異めり　三九主
ゐれ曰けるは爾曹パリサイの人椀と盤の外と潔をは然れど爾曹の内は貪慾と
惡ゐあて充り　四十無知ある者よ外と造し者はまた内とも造ざりしや　四一ゐんぢ
ら所有物と以て施せ然は爾曹は爾ゐある哉ゐんぢ
らパリサイの人よ薄荷茴香および凡れ野菜十分れ一を取納て義と神と愛
するゐとと癈こと行ふべき事ゐあり彼も亦癈べからざる者ゐあり　四三禍なる哉
ゐんぢらパリサイの人よ會堂は高座市上の問安と好めり　四四禍ある哉ゐ

爾曹の隠没たる墓れ如し其上と行く人々あるを知ざる也 四五 ある教法師み
たへて曰けるい師よ此言い我儕と辱むむ 四六 ——イエス曰けるい爾曹も禍あ
るのある教法師よ任がさき荷と人お負せ自ら指一と も其荷お按ず 四七 禍ある
哉あんぢらい預言者れ墓と建あんぢらの先祖い之と殺せり 四八 實お爾曹先
祖れ爲る事とみのむ證明と爲り夫のをらい之と殺し爾曹い其墓と建 是
故お神れ智慧ゆへる言あり我預言者れよび使徒と彼等お遣さんに其中れ
或者と殺し或者をゞ窘むべーと 四九 創世より以來あゝーよ凡の預言者れ血
い此代お於て討さんと爲あり 五〇 即ちアベルの血より殿と祭壇れ間お殺さ
をたるザカリアの血まで至ると を誠お爾曹よ告ん之と此代お討すべし 五一
なんぢら爾あるのな教法師よ知識の鑰と褫お爾曹も阻り 五二 此言と語るとき學者とパリ
サイれ人々深く憤恨と含て多端の事
と詰のけ 五三 ろの口より出る言と何事の取へ訴んとして伺ひたり

第十二章 ろのとき數萬の人々相躡あふ程お集ゐりイエス先弟子お曰ける
い爾曹パリサイの人の麪酵と謹めよ是僞善ありニろれ掩れて露をざる者い
あく隠て知きざる宝あて耳お附言しあとい 三 是故お爾曹幽暗お語ーみとい光明お聞ゆべ
し密ある室あて耳お附言しあとい屋上お播るべし 四 我友よ爾曹よ告ん身
體と殺して後お何とも爲能ざる者と懼るゝ勿を 五 旦を懼べき者と爾曹に
示さん殺したる後お地獄お投入る權威と有る者と懼よ我至あとお爾曹お
告ん之と懼べし 六 五れ雀い二錢お て售お非ずや然るお神お於い其一をも
忘き給いず 七 爾曹れ首れ髪また皆あり算きり 八 又旦を爾曹お告ん我と人れ前お
雀よりも貴きり 八 我と人れ前お識と言ん者とゞ人れ子も亦神れ使者の前お之と識と言ん
者れ前お彼も識ずと言るべし 九 凡ろ人れ子と謗る者い赦さる可をも聖靈
と褻そ者い赦さる可らず 十 人あんぢらと會堂まゝ執政および權ある者れ
前お曳携あを如何あたへ何と言んと思ひ煩ふ勿を 十一 其時お說べき言い聖
靈あんぢらお示そべし 十二 衆人れ中より一人イエスお曰けるい師よ我が

兄弟ゟ遺業と我ゟ分よと命たまへ　十四 ——イエス曰ける人よ誰ゎをと立て爾
曹れ裁判人また物と分ㇾ者と爲しや　十五 ——イエス衆人ゟ曰ける㕝ㇾ戒心して貪
心と愼めよ夫人の生命ㇾ所蓄れ饒ゐるゟ㕝ㇾ因ざる也　十六 また譬と彼等ゟ語
て曰けるㇾ或富人うれ田畑よく豐けきた　十七 自ら忖いひけるㇾ我ゟ作物と
藏る所ゐきと如何せん　十八 又曰けるㇾ我ゟく爲ん我倉を毀ち更ゟ大ゐると
建そへて我ゟ作物と貨と其所ゟ藏べし　十九 斯て靈魂ゟ對ひ靈魂よ多年と過
やそれ許多れ貨物と有たをを安心して食飲樂めよと言んとす　二十 然るゟ神
ゟをゟ曰けるㇾ無知ゐる者よ今夜ゐんぢが靈魂とらるゝゐと有べし然
た爾れ備し物ㇾ誰ぞ有ゐゐる乎　二一 凡ろ己れ爲ゟ財と積へ神よ就て富ざる
者ㇾ此れ如ゐり　二二 ——イエスろの弟子ゟ曰けるㇾ故ゟ我ゐんぢらゟ告ん爾曹
生命れ爲ゟ何と食ひ身體の爲ゟ何と裝んとて思ひ煩ふ勿をを　二三 生命ㇾ糧よ
り優り身體ㇾ衣よりも優をを　二四 鴉と思見よ稼ず穡ず倉とも納屋とも有ず然
ども神ㇾゐや此等と養ふ況て爾曹ㇾ鳥よりも貴きみと幾何ぞや　二五 爾曹れう
ち誰ぞよく思ひ煩ひて其生命と寸陰を延得んや　二六 然を最小事そら能ざる
ゟ何ぞ其他と思ゐ煩ふや　二七 百合花ㇾ如何して生長ぅと思へ勞ず紡がざる
也我爾曹ゟ告んソロモンの榮華れ極れ時だよも其裝ゐの花れ一ゟ及ざを
き　二八 神は今日野ゟ在て明日爐よ投入らるゝ草とも如此よろいせ給へを況
て爾曹とや吁信仰うそき者よ　二九 爾曹何と食ひ何と飲んと求むる勿また
思ひ惑ふゐと勿を　三十 凡て是等れ物と世界れ邦人れ求るもれゐんぢられ
父ㇾ是等れ物れ爾曹ゟ無て叶ぬ事を知　三一 さや神れ國と求めよ然を是等れ
物ㇾ爾曹ゟ加らるべし　三二 小き羣よ懼るゝ勿を爾曹れ父ㇾ喜びて國と爾曹
ゟ予へ給ㇾん　三三 爾曹れ所有と售て施し己ダ爲ゟ常ゟ窶ざる財布すゐいち
盡ざる財寶と天ゟ備よ其處ㇾ盜賊も近よらず蠹も壞ㇾざる也　三四 爾曹れ貯
置れ在とゐろゐㇾ爾曹ㇾ心も亦ろゐゐゟ在べし　三五 爾曹腰ゟ帶し火燈と燃し
て居　三六 主人婚姻より歸來を門と叩ば速ゐよ啓ん爲ゟ彼と待人れ如せよ
主人きさりて其目と醒し居と見るを此僕ㇾ福ゐり誠ゟ我ゐんぢらゟ告ん

主人ミつゐら腰ゐ帶し僕と食ゐ就せ前て之ゐ供事そべー 三八 或い二更ゐ
ひい三更ゐ主人きさりて然ゐせると見ゐを此僕い福ゐり 三九 爾曹ゐも
べー若ー家れ主人盜賊いつをれ時ゐ來ゐと知バ其家と守て破せ至と 四十 然
を爾曹も預じめ備せよ不意ときゐ人れ子きさらんと爲をゐり 四一 ペテロ曰
けるい主よ此譬は我儕ゐ言の又い凡れ人ゐ言ゐ 四二 主いひけるい時ゐ及て食
物と給與ちめん爲ゐ主人ゐりれ僕等れ上ゐ立たる忠義ゐして智き家宰い
誰ゐる乎 四三 其主人きたる時ゐ是の如く勤るとを見らるゝ僕い福ゐり 四四 我ま
あさよ爾曹ゐ告ん其所有と皆のをゐ督らすべー 四五 若それ僕心れ中よ我が
主人れ來るい遲らんと思ろれ僕婢と扑たゝき食飲して且酒よ醉はじめバ
四六 其僕れ主人ゐもいざるれ日ゐらざるの時よ來りて之と斬殺ー其報と不
信者と同うすべし 四七 僕主人れ心と知ゐがら預備せず亦それ心ゐ從ざる者
い扑るゝゐと多らん 四八 知ずーて扑べき事を作し者い扑るゝ事も少のらん
多く予らるゝ者い多く求らるべし多く托をほとより多く求べー○ 四九 我を

火と地ゐ投入ん爲ゐ來をり我ゐゐとか欲む已ゐ此火れ燃たらん事ゐり 五十
且を受べきれバアテヤマゐり其成遂らるゝ迄い我痛いのをのりや乎 五一 我
い安全と地ゐ施んとて來ると意ふや我ゐんちらゐ告ん然ず反て分爭しむ
五二 今よりのち一家ゐ五人ゐらを三人い二人ゐ敵對し二人い三人ゐ敵對して
分るべし 五三 父い子ゐ子い父ゐ母い女ゐ女い母ゐ姑い其婦ゐ婦い其姑ゐ敵
對して分るべし 五四 イエスまた衆人ゐ曰けるい雲れ酉より起るを見を直ゐ
雨ふらんと爾曹いふ果て然ゐ 五五 南より風ふけを暑らんと爾曹いふ果て
然り 五六 僞善者よ天地れ色象と別ゐとを知て此時と別ち能ざるい何ゐや
五七 また何ゐ自ら公義と審ざる乎 五八 なんぢ訟る者と共ゐ有司ゐ往とき途中ゐ
て心と盡ーて彼より釋さをんみと求めよ恐くい訟る者なんぢと裁判人ゐ
ひき裁判人あんちを下吏ゐ付ー下吏あんちと獄ゐ入ん 五九 我あんぢゐ告ん
一錢も殘ず償ふまでい爾ゐみと出ことを得ざる也

第十三章

當時あ何まりたる者の中ゐピラトがガリラヤ人の血と其供物ゐ雜

一事をイエスお告る者あり二イエス答て彼等お曰ける之爾曹これがガリラ
ヤ人い是の如く害さをし故お凡のガリラヤ人よりも益りて罪ある者と意
ふや三我あんぢらお告ん然ず爾曹悔改めずバ皆れあとく亡さるべし四シ
ロアメの塔さふをて厭死さをし十八人いエルサレメお住る凡れ人々より
も益りて罪ある者と意ふや五我あんぢらお告ん然ず爾曹悔改めずば皆おあ
とく亡さるべし六又あれ譬を云り或人ろれ葡萄園お植れきさる無花果樹
ありしが來て之お果を求をども得ざりけをバ七其園丁お曰ける我三年
きたりて此無花果樹お果を求をども得ず之を斫され何ぞ徒らお地を塞や
八園丁あたへける我ろれ周圍を堀て之お糞そるまで今年も容せ九
もし果を結をよ善もし結ずを後お之を斫べし〇十イエス安息日お或會堂
おて教しお十一十八年鬼お患されたる婦あり傴僂て少も伸るみと能ざりき
十二イエス之を見てよび婦よ爾い其病より釋さるよと曰て十三手を婦お按け
をを直ち伸て神を讃美さり十四會堂の宰イエスの安息日お醫ーたる事を怒
あたへて衆人お曰ける六日あをを其中お來りて醫さる
べし安息日お爲ざを十五主のをお答て曰ける偽善者よ爾曹おれ〳〵安息
日おれ其牛や驢とをき厩より率出ーて水と飲さやる乎十六況て此婦ハアブ
ラハムれ裔ある十八年サタンお縛らをさる其結と安息日お解べのらざら
ん乎十七イエス如此いひけをを敵對ーる者をお慚ぬ又衆人をお其行し慈恵お
とを喜べり十八イエスまさ曰けるハ神の國い何お比へ又なおる譬んや一
粒の芥種れ如ーれ人あをと取て其園よ播ほ長生て大ある樹とあり天空れ鳥
ろれ枝よ棲ぬり十九又いひけるハ我神れ國と何お譬んや二十酵の如ーれ婦て
をと取て三斗れ粉れ中お納せを盡く發酵そあり〇二十一イエス敎ほ〻各城各
鄉と過エルサレメよ向て旅行り二十二或人いひけるは主よ救ろる者ハ少き乎
二十三イエス彼等お曰けるは窄門お入さめお力と盡せ我あんぢらお告ん入ん
事を求て能ざる者れはし二十四家れ主人おきて門を閉し後お爾曹外おたち門
を叩て主よ主よ我おお啓と曰んお主人おさへて我あんぢらハ何處より來し

の知ずと曰ん 二六然る時お我儕と爾の前お食飲ー爾また我儕の衢お教たりしと言出さんお 二七主人こたへて我あんぢらに告ん何處より來しお知ず皆惡と爲る者よ我と去と曰ん 二八爾曹アブラハムイサクヤコブ及び凡れ預言者と神の國お在て爾曹い外お投出さるゝと見ん時よ哭哭切齒するみと有べし 二九また人々西や東北や南より來りて神社國お坐するあらん 三十ろを後れ者い先よ先れ者は後お爲べし○ 三一當日あるパリサイ人々來りてイエスよ曰けるいへロデ爾と殺さんとする故お此と離往 三二答て曰けるい爾曹ゆきて其狐お告よ我今日明日惡鬼と逐出し病と醫し第三日に此事とをらん 三三然ども今日明日また次日い我あゆらず行べし蓋預言者いエルサレムよ外お殺るよみと有ぬを也 三四噫エルサレムよエルサレムよ預言者と殺し爾お遣さる者よ石お擲る者よ母鷄れ雛と翼の下お集むる如く我あんぢれ赤子と集んと爲しみと幾回ぞや爾曹い欲ず 三五視よ爾曹れ家い墟と爲て遺さるべし誠お我あんぢらよ告ん主れ名よ託て來る者と福ありと爾曹いとん時いたる迄と我と見ざるべし

第十四章

イエス安息日お食事の爲ある宰あるパリサイの人の家お入しよ人々のをと窺たり 二其前よ腹脹と患ひたる人ありしのパ 三イエス應て教法師とパリサイの人々お曰けるい安息日お醫を事い宜や否 四れら默然たりイエスのれ人と執へ醫して之と去しめ 五彼等よ答て曰けるい爾曹れうち誰お驢あるひい牛あをの阱お陷さらんお安息日あい速あよ曳出をゝる乎 六彼等あれ言よ就て對ることを能ざり 七○斯て其席お請をさる人々れ首座と擇と見てイエス譬と以て彼等よ曰けるい 八あんぢ婚筵お請をん時いたりて此人お座と讓をと曰ん然パ爾蓋て末座お往べし 十是故お爾まとれ首座よ坐そるあと勿を恐くい爾より尊人ぞねのをあパ 九彼と爾と請し者れたりて此人お座と讓をと曰ん然パ爾蓋て末座お往べし 十是故お爾まねあをん時い往て末座お坐せよ請し者來りて友よ首座よ進と爾お言ば同席れ者の前お爾尊まるべし 十一凡ろ自ら高ぶる者と卑をを自ら卑だる者と高くせらるべし 十二又かをと請る者よ曰けるは爾午餐あるひい晩餐と設ん時いたる迄と我と見ざるべし

とき朋友兄弟親戚また富る隣れ人と請あるを恐くい彼等また爾と請て其報答と爲ん[十三]爾筵と爲ば貧乏廢疾跛者瞽者あるを請け[十四]然ば福あるべし蓋のとちい爾よ報るあと能ず義き人々れ避らん其時あんぢお報答あをば也[十五]同お食せる者れ一人よをと聞てイエスお曰けるい神れ國お食そる者い福あり[十六]——イエス彼お曰けるい或人おほいなる筵と設て多賓と請けり[十七]筵れとき僕と其請たる者お遣して百物はや備たをほ來るべしと言せけるお[十八]彼等をお同く辭め其始れ者のを視さると得ず願くい我と允し給へ又一人の者いひけるい我五耦の牛と買たをばこと試むる爲お往ん願くい我と允し給へ[二十]又一人れ者いひけるい我妻と娶たり是故お往ことを得ざる也[二一]其僕のへりて此事と主人お告けきば主人怒て其僕お曰けるい速のお邑の衢巷お往て貧者廢疾跛者瞽者おもとと此お引來れ[二二]僕いひけるい主よ命れ如く行り然も尙あまりれ座あり[二三]主人僕お曰けるい道路や籬れ邊おもき强て人をと引來り我家お盈しめよ[二四]我あんぢらお告ん彼ほねきたる人々い一人だお我餐と嘗ふ者あし

○[二五]多の人々イエス——と偕お行しが[二六]凡ろ我お來てろの父母妻子兄弟姉妹また己れ生命とも憎む者よ非ざをば我弟子と爲ことと得ず[二七]又その十字架と任ずーて我お從ふ者い我弟子と爲ことと得ず[二八]あんぢら誰の城を築のんお先坐して其費これ事の竣までお足やと否と計ざらん乎[二九]恐くい基と置て之と成能ずば見者をる嘲笑て[三十]此人い築始て成遂ざりしと曰んと[三一]また王いで他の王と戰とんお先坐して此一萬人をもて彼お二萬人に敵すべきや否と謀ざらん乎[三二]もし及ずば敵なほ遠きる時よ使と遣して和睦と求べし[三三]然ば此れ如く爾曹それ所有と盡く捨ざる者い我弟子と爲ことと得ず[三四]鹽い善物ふり然も鹽ろれ味と失いや何ともて之お味と和んや[三五]田おも糞おも益ふく外お棄らるよりあり耳ありて聽る者い聽べし

第十五章

[一]さて稅吏と罪ある者どもイエスお聽んとて近よりけをば[二]パリサ

イの人と學者たち讀爺て曰けるい此人い罪ある人よ接りて共ゐ食せり　三
イエス此譬を彼等よ語て曰けるい　爾曹れうち誰う一百れ羊ゐらんゐ若
ろれ一と失いヾ九十九と野ゐおれき往て其失ー羊と獲まで尋ざらん乎　四
尋得ば喜て之と己の肩ゐ負　家ゐ歸て其友と其鄰の人々と召集て曰ん我
と共よ喜べ我うしゐへる羊を獲たるを也　五　ロを爾曹ゐ告ん此れ如く一人
れ罪ある人悔改ゐを悔改むるよ及ざる九十九れ義人よりい倘天ゐ於て喜ゐ
らん　ハまさ婦のうち誰う金錢十枚ともち其一枚と失いんゐ燈火と燃て家
と掃除し之と獲まで い切に尋ざらん乎　九　尋得を其友と其鄰れ人々と召集
て曰ん我と共よ喜べ我うしなへる金錢と獲さるを也　十　ロを爾曹ゐ告ん此
れ如く一人れ罪ある人悔改めゐを神れ使の前ゐ喜ゐあるべし〇　十一　また曰け
るい或人子二人あり　十二　ろの季子父ゐ曰けるい父よ我得べき業と我ゐ分子
よ父ろれ產と彼等ゐ分たきハ　十三　幾日も過ざるゐ季子ろれ產と盡く集て遠
國へ旅行せーが放蕩ゐして其分資と皆ろみあて耗せり　十四　盡く耗しゝとき
大なる饑饉ろれ地ゐ有て彼ともーく爲いとめけきを　十五　往て其地れ一民ゐ
身を投たり其人家と牧さめよ彼と野ゐ遣せり　十六　のき豕れ食そる所れ豆莢
ともて已が腹と果さんと欲ふはどゐあをゝ何とも彼ゐ予る人あし　十七　自ら省悟
て曰けるい我父れ所ゐい食物あまきる傭人れ許多の有に我い飢て死んと
そ　十八　起て我父ゐ往て曰ん父よ我天と爾の前ゐ罪と犯さきを　十九　爾れ子と稱
るゐ足ざる者あり爾れ傭人の一人れ如く我と爲たまへと　二十　即ち起て其父
ゐ往り倘とほく在ーゐ其父のきと見て憫を趨往き其頸と抱て接吻しぬ　二
子父ゐ曰けるい父よ我天と爾れ前ゐ罪と犯されを爾れ子と稱るゐ足ざる
也　二二　父ろの僕等ゐ曰けるい至も美服と携來りて之ゐ衣せ其指ゐ環とめ其
足ゐ履と穿せよ　二三　また肥さる犢と牽來りて宰き我儕食ーて樂まん　二四　是ロ
ゐ子死て復生うーあひて復得さきハ也とて彼等と共ゐ樂を始む　二五　ろれ兄田
ゐ在ーが歸て家ゐ近き樂と舞れ音と聞　二六　ろれ僕れ一人と召て是何事ぞや
と問るゐ　二七　僕曰けるい爾れ弟歸りさんり善あく彼と得たりしゐ因て爾が父肥

たる糖と宰さるあり　二兄いのりて入す是故お其父いでよ彼お勘しあバ
父お答て曰けるい我多年なんちお事て来さ爾れ命お背す然やも我友と樂
む爲よ羔とも予し事あー　三然よ妓の爲お爾れ梁と耗ーたる此あんちお子
あへをバ之お爲お肥たる犢と宰あり
と共お在また我所有は皆あんぢれ厭あり　三爾の弟死て復生うしあひて復
得たるが故お我併喜て樂むは當然れ事あり

第十六章　一イニオ又ろれ弟子お曰けるい或富る人お操會者ありけるが主れ
所有と耗しゝと主人へ訴らる　二主人操會者と呼て曰けるい爾お就て我き
ゝさる事い何ぞや今後あんちを操會者と爲えさをバ其會計たる條件と我
お辨よ　三操會者ゑづから意るい主人ゑが操會と奪あを何と爲ん我鋤と執
ふい力あく施と乞い恥のしゝ　四已を操會と奪をん時い是等の家お迎らる
べき所爲と知りとて　五遂お主人れ負債人と悉く召て其首れ者お曰けるい
爾わが主お負債あみやとある乎　六答ていふ油百斗あり彼お曰けるい爾

れ券書と取ゐろざ坐して五十と書よ　七又一人お曰けるい爾れ負債幾何あ
るや答ていふ小麥百斛あり彼お曰けるい爾れ券書と取て八十と書よ　八主
人うの所爲れ巧あるお因て此不義なる操會者と褒たり夫ゑの世れ子輩い
此世お於い光れ子輩よりも尤も巧あり　九我あんちらお告ん不義れ財と以
て己が友と得よ此い乏のらん時かをら爾と永遠宅お接んお爲あり　十小事
お忠き者い大事お也忠く小事お忠あ
若あんちら不義れ財お忠のらずバ誰
人れ所有お不義あらバ誰あ爾の所有
人お事るみと能ず　十二他あれと惡あれと
也あんちら神と財お兼事るみと能ず　十三僕い二人の主
てイエスと嘲哂たり　十四イエス彼等お
ぜする者あり然やも神い爾習の心と
るゝ者あり　十五律法と預言者いヨハネやでであり其れち神の國い宣傳らる皆用

刃て之を入んと爲あり　十七天地は廢るより
も易し　凡
一 律法の一畫は廢るよりも易し　十八凡
う其妻と出して他は者と娶ば姦淫と行ふ也
者も姦淫と行ふあり○　十九又富る人あり
二十亦ラザロと云る貧者あり甚く腫物を
落る餘屑を食はんと欲へり又犬きたりて其腫物を舐ニニ
は使者たちが依てアブラハムの懷を送をたり富る人も死て葬らをしが　二三陰
府ふて痛苦とうけ其目をあげ遙ふアブラハムと其懷を在ラザロと見て　二四
喊叫いひけるハ父アブラハムよ我を憐ミラザロと遣して其指は尖を水に
蘸ひが舌と涼ふめ給へ我ふの火熾は中ふ苦めばあり　二五アブラハム曰ける
ハ子よ爾ハ生たりし時ふ爾の福と受またラザロハ其苦と受しと憶へ今ふ
れハ慰ちを爾ハ苦めらるゝあり　二六斯耳ふらず此より爾曹ふ渉んとするとも
得ず彼より我儕ふ渉んとするとも亦えざる爲ふ我儕と爾曹とは間ふ限た
のをたる巨ふる淵あり　二七答けるハ然ば父よ願くハ我父は家へラザロと遣

たまへ　二八蓋ほ五人の兄弟あり亦かのきらが此苦は所ふ來ざる爲ふラザ
ロと彼據ふ爲あめよ　二九アブラハム曰けるハ彼等ふモーセと預言者ふを
ハ之ふ聽べし　三十答けるハ然ず父アブラハムよもし死より彼等ふ往者あら
ば悔改べし　三一アブラハム曰けるハ若モーセと預言者ふを聽ざる者あり
とも其勸と受ざるべし

第十七章

一イエス弟子ふ曰けるは躓さるゝ事のあらず來らん共ふ來らす者ハ
禍ふる哉　二の小子は一人を躓そるよりハ磨石と頸ふ懸られて海ふ投入ら
きんふと其人は爲ふ宜るべき　三自らと謹慎よ若兄弟ふんちふ罪と犯さゝ
之と諫よ彼もし悔あれ免せ　四もし一日ふ七次罪と爾ふ犯して一日ふ七次
ふんちふ對ふを悔と曰ハ免すべし○　五使徒主ふ曰けるは我儕ふ信と益せ
よ　六主いひけるハ爾曹もし芥種一粒ほどの信あらバ此桑樹ふ拔て海ふ植
きと曰とも爾曹ふ從ふべし　七誰ふ爾曹の中ふ或ハ耕し或ハ畜と牧僕あらんふ彼
田より歸たる時亟ふ往て食ふ就といふ者あらん乎　八反て曰ずや我食と備

足が食飲といるまで帶と束足をお事て後なんぢ食飲すべしと僕主人れ
命ぜし事お從へをとて主人のをお謝せべきう然じと我れ意り十斯バ亦る
んぢら命ぜらを去事とみお行たる時も我儕れ無益の僕ゐすべき事と行た
るありと謂○十一イエスエルサレムよ往ときサマリアとガリラヤれ中と經
十二ある村よ入ーとき十人れ癩者ありて彼おあひ遙お立て聲と揚いひけ
るれ十三師イエスよ我儕と矜恤たまへ十四イエスと見て曰ける祭司よ往て己と
祭司よ見せよ彼時ゆく間お潔らをさり十五うれ一人己が醫さをたると見て
返來り大聲お神と崇め十六イエスれ足下に俯伏て謝せり彼はサマリア人ある
り十七イエス答て曰けるれ潔らきし者と十人に非や其九人は何處お在ゐ
ゐの異邦人れ外お神お榮と歸せんとて返たる者あらざる手まも彼に曰
けるれ起て往ゐんぢれ信仰ゐんぢと救り二十神れ國れ何れ時きさる乎とパ
リサイの人お問をけるをイエス答て曰けるれ神の國れ顯をて來ものお非ず
二十一此お覩よ彼お覩よと人の言べき者ゐも非ず夫神の國は爾曹の裏お在

また弟子お曰けるれ爾曹人の子れ一日と見さく欲ふ日きさらん然ども見
ざるべき二十三人々ゐんぢら母此お見よ彼お見よと曰ん然ども往ゐるを從ふ
勿を二十四うを電光の天の彼處よ至閃き天乃此處お光が如く人れ子も其日お
如此あるべし二十五然ども人の子のあらず先おほくれ苦と受ざる此世の人に棄
らるん二十六ノアの時ふ有ーし如く人の子の時ふも然あるべし二十七即ちノア方舟
お入し日まで衆人食飲嫁娶ゐを爲さりしが洪水きたりて彼等と滅せり二十八
又ロトの時ふも如此ありき衆人食飲賀易樹蘖構造ゐを爲さりしふロト二十九
ソドムより出る日天より火と硫磺と雨せて彼等とをゐ滅せり三十人の子の
顯る日ふも亦うく有べし三十一其日ゐれ人屋上お在バ其器具室お在とも之
と取んとて下ゐかを亦田畑お在る者も同く歸なのを三十二ロトれ妻と憶へ三十三
凡ろ其生命と救んとする者れ之と失ひ若ろの生命と失れん者れ之と存べ
し三十四我ゐんぢらお告ん其夜ふたり同床お在んお一人れ執を一人れ遺さるべ
し三十五二人の婦ともふ磨ひき居んお一人れ執を一人れ遺さるべし三十六ゐきら

答て曰けるゐ主よ此事何處ゟ有や彼等ゟ曰けるゐ屡れ在とゐろゐゐ處ゟ
ゐまらん

一エスまた人ゝ恒ゟ祈禱して泄喪そまじき爲ゟ譬と彼等ゟ語けるゐ
二或邑ゟ神と畏ず人と敬そざる裁判人ゐりけるご
三其邑ゟ孀婦ゐりて我と我仇より救たまへと曰て彼ゟ至ーゟ
四うを久く肯そざりしご其れち心れ中ゟ思けるゐ我神と畏ず人と敬ぃざるとご
五此孀婦をと頻せバ彼ご絶ず來て我と脇さゃる爲ゟ之と救そん主いひけるゐ不義ある裁判人
六の言し事と聽セ況て神と晝夜祈る所の選さる者と久く忍とも終ゟ救ざらんや
七我ゐんちらゟ告ん神ゐ速ゟ彼等と救そん然とも人の子きたらんとき
八信と世ゟ見んや○又をばゐら義と意ひ人と輕むる或人ゟ
九語をり十二人祈んとて殿ゟ登りしが其一人ゐパリサイの人一人ゐ稅吏ゐ
十りき十一パリサイれ人たちて自ら如此いのきり神よ我ゐ他れ人の如く强索
十一不義姦淫せず亦ゐれ稅吏の如くまも有ざると謝そ
十二日を七日間ゟ二次斷

食し又そべて獲もれ三十分れ一と獻さり
十三稅吏ゐり遠ゟ立て天とも仰ぎ見ず其胸と捎て神よ罪人ゐる我と憐そ給と曰り
十四我ゐんちらゟ告ん此人ゐ彼人よりゐ義と爲とて家ゟ歸さり夫すべて自己と高る者ゐ卑らを自己と
卑す者ゐ高らるべし○
十五イエスゟ撫らをんがさめ人々嬰孩と携來ーゟ
十六弟子たち見て之と責たり
十六イエス嬰孩とよび弟子ゟ曰けるゐ嬰孩と我ゟ來せよ彼等と禁る勿を神れ國ゟ屈者ゐ是れ如き者ゐりを誠ゟ爾曹ゟ告ん
十七凡ろ嬰孩れ如ゟ神れ國と承ざる者ゐ之ゟ入ゟとと得ざる也○
十八或宰とふ
十八イエス彼ゟ曰けて曰けるゐ善師よ永生と嗣さめゟ我ゐゟ行べき手
十九イエス彼ゟ曰けるゐ何ぞ我と善と稱や一れ外ゟ善者ゐなし即ち神ゐり
二十誡ゐ爾が知とゐろなり姦淫をる勿を殺ゐうを竊ゐかを妄證と立る勿を爾れ父と母とを
敬へ
二一答けるゐ是とを我幼より守とる者なり
二一イエス之と聞て曰けるゐ爾ゟ一と脚ろれ所有と悉く售て貧者ゟ施せ然バ天ゟ於て財あらん而して來り我ゟ從へ
二二之を大ゟ富る者ゐりしが之と聞て甚く憂さり
二三イエ

スろれ甚く憂しと見て曰けるい富る者は
る者れ神の國お入より駱駝の針の孔と穿は却て易し
けるい然ば誰の救を受べき乎　二七 イエス曰
得ざる也　二八 ペテロ曰けるい我儕一切と捨て爾お從へり
曰けるい誠お爾曹お告ん凡ろ神れ國れ爲お家あるひい父母あるひい兄弟
あるひい妻あるひい兒女と捨る者い　二九 今世お於て幾倍をうけ來世お於い永
生と受ざる者あし○　三〇 イエス十二れ弟子と携ひて之と曰けるい我儕エルサ
レムお上ろ人れ子お就て預言者の錄さをし事いさる應らるべし　三一 夫人れ
子い異邦人お解さを戲弄凌辱らを唾せらるべし　三二 且のきら鞭撲て之と殺
さん又第三日お甦るべー　三三 弟子みれ語を少も達ず亦みれ言る事のきらよ
隱たり亦ろれ語ざる言と知ざりき○　三四 イエス、エリコお近よきる時ある瞽
者道の旁お坐して乞さりしが　三五 大衆れ過と聞て此い何事ケと曰けるば
人々ナザレれイエスれ過ありと告　三六 瞽者よばより曰けるいダビデれ裔イ

エスよ我と矜恤たまへ　三七 前だち行者ども默止と之と斥ども愈ダビデの
裔よ我を矜恤たまへと叫ぎり　三八 イエス立止り彼と携來と命ず瞽者ちのよ
りけるば　三九 イエス彼ま問けるい爾已をふ何と爲んと欲ふや答けるい主
よ見ゐん事と欲ふ　四〇 イエス彼お曰けるい見よ爾の信あんぢと救
へり　四一 彼やがて見わ神と崇てイエスお從ひぬ民きる之と見て神と讃美た
り

第十九章　一 イエスエリコお入て經行とき　二 ザアカイと云る人あり稅吏の長おて
富る者あり　三 イエスは如何ある人あるの見んと欲ども身量ひくけきば大衆ゐ
るお因て見みとと得ず　四 彼と見んとて趨ゆき桑樹お升きりイエスろれ道
と過んとそる故あり　五 イエス此お來りて仰て彼と見いひけるい ザアカイ
よ速ぎ下を我今日のみち寸爾の家お宿らんお彼いそぎ下り喜てイエスと迎へ
　六 衆人みきと見てこる怨言いひけるい彼い往て罪ある人の客と爲を
　七 ザアカイ起て主よ我所有れ半と貧者よ施さん若ゐを訛詐て人より收た

る所あらば四倍よりて之を償のふべし　九イエス彼に曰けるは今日此家
そくとるるあとを得たり蓋此の人もアブラハムの商あるをば也　十ろ是人の
子の喪ひし者を尋て救ん爲に來るなり　十一衆人此言を聞る時また譬を設て
曰り此はエルサレムに近うつ衆人神の國たゞちに顯明るべしと意ゐ故あり
十二ある貴者ところ遠國へ往とき十人の僕を召て
彼等に金十斤を予て曰けるは我儕あれ人と王とそる事を欲ず　十三頒地を受て歸
より使を遣し曰けるは我來までに商賈せよ　十四ろの國民のもと憎て後
時おのく商賈して幾何の利を得さるやと知んとて金を予おきさる僕等
を召と命じぬ　初れ一人きたりて曰けるは　十五主人いひけるは爾も小者ゐ恩あれば十れ邑を宰ぐるべし
さり　十六主よ爾れ一斤の利を得たり　十七主人いひけるは爾も五れ邑を宰ぐるべし　十八また次れ一人きさりて曰けるは主よ
人いひけるは爾も五れ邑を宰ぐるべし　十九また一人きたりて曰けるは主よ
爾の一斤は此ゐ在ゐを手巾ゐ裹て藏置たりき　二十蓋ゐんぢらゐ嚴人あるが故ゐ

我おそをさり爾預ざる者とかる人あをばあり　二一主人いひ
けるは惡僕よ我ゐんぢの口ゐ因て爾を鞫べし爾已を嚴者ゐて置ざる者
と取まのざる者と穫を知　二二然ゐ何ぞ我來るとき本と利と得んが爲ゐ我金
と兌錢肆ゐ預ざりーや　二三遂ゐ傍ゐ立る者ゐ曰けるは此人れ一斤を取て十
斤有る者に予よ　二四衆人主人よ曰けるは　二五主人いひ
けるは我ゐんぢらゐ告ん夫有者れ予らを不有者は其所有ものまでも
取るべし　二六且わが敵ずゐれち我支配と欲ざる者と此ゐ曳來りて我前ゐ誅
せよ　二七イエス此事を言しれち衆人ゐ先だちてエルサレムゐ上をり　二八橄欖と
名る山ゐ靠るベッパゲとベタニヤゐ近つける時ろれ弟子二人を遣さんと
て曰けるは　二九對面の村ゐゆけ彼處ゐ入ば人の未だ乘ざる所の繫たる駒駒
ゐ遇べし其を解て率來よ　三〇もし誰の爾曹ゐ何ゆゑ解やと問者あらば如此
あたふべし主れ用あり　三一遣さをさる者往けをば果て其語たまへる如く遇
ぬ　三二のをら駒駒を解とき其主等のをらに何ぞ駒駒を解やと曰ーのば　三三答

て出れ用ゐりと曰て三九之とイエス——
上ゐ乘イエス往けるとき衆人ろれ衣と路上ゐ布り四〇イエスエルサレム
ゐ近ぼき橄欖山と下らんとする時大衆れ弟子とゐ喜び其見ー所れ奇跡ある
凡れ能ゐ因て大聲ゐ神と讃て曰ける四一と四二主れ名ゐ託て來る王い福あり天
ゐ於ていい和平ゐ至上所ゐいい榮光あるべし四二大衆の中より或パリサイの人
イエスゐ曰けるい師よ爾れ弟子と責めよ四三彼等ゐ答けるとき我あんぢらゐ告
ん此發もし默止ゐば石號呼べし四四既ゐ近ぼけるとき城中と見て之ゐ爲ゐ
哭いひけるい四五もし爾だにも今ゐれ爾乃日ゐ於て爾れ平安ゐ關をる事と
知を痛あるゐ今ゐあんぢの目ゐ隱たり四六爾れ敵あんぢの周邊ゐ壘と築き四
方より圍攻爾と其中ある兒女と擊潰し石とも石の上ゐ遺ざる日きたら
ん是あんぢ其眷顧さまふれ時と知ざりき也四七イエス殿ゐ入ろれ中ゐて賣
易せる者を逐出し四八彼等ゐ曰けるい我宝い祈禱れ殿ありと錄きをたるゐ
爾曾ゐを盜の巢と爲り四八イエス日々ゐ殿ゐて敎ふ祭司れ長學者民れ等

者ども彼と殺んと謀ども民ゐ心と傾けて其敎と聽るが故ゐ爲べき方
と知ざりき

第二十章

一日イエス殿ゐて民と敎へ福音と宣ーゐ祭司れ長學者長老共よ
近まりイエスゐ語て曰けるい二何れ權威と以て此事と行ゐ誰よれ權威を
予たるゐ我儕ゐ告よ三答て曰けるい我も一言あんぢらゐ問ん且ゐに告
よ四ヨハネれバプテスマい天よりゐ人よりゐ五彼等た夕ひゐ曰けるい若
天よりと云ば然ば何故ゐをと信ぜざる乎と曰ん六もー人よりと云ば民と
ゐ石よて擊んとて逐ゐ答て矣よりヨハネと預言者と信ずをば我儕と石
るゐ知ずと曰り八イエス彼等ゐ曰けるい我も亦ゐれ權威と以て之と行
ゐと爾曾ゐ告じ〇九即ち此譬と民ゐ語をり或人葡萄圃とつくり農夫ゐ
租與て久しく他國へ往ータ十期いさんとき一僕と農夫れ所ゐ遣ーけるゐ農夫等ゐをを
れ僕と遣ーゐ之とも撲たゝきて辱あめて徒く返せさり十一又三次僕と遣し

あゐこと　も傷けて逐出しけれた　十三　葡萄園の主曰けるは我なるゐ爲ん我愛子
と遣そべしと見た恭敬あらん　十四　農夫ども之と見て互に議いひけること此
は嗣子ゐり率ゐきを殺さん業は我儕れ所有ゐある可とて　十五　彼と葡萄園れ
外ゐ出して殺せり然た葡萄園れ主いかゐ彼等と處べき乎　十六　かを來て此農
夫等と滅し葡萄園と他人ゐ託べき人々ゐきと聞て曰けるい然は有ざれ　十七
イエス彼等と見て曰けるは匠人れ棄さる石是こう屋隅れ首石とゐきと錄
きるしい何ぞや　十八　此石れ上に墮るもれい壞ゐれ石上ゐ墮きも其もの碎る
べし　十九　祭司れ長學者等ろれ己と指て此譬を語さると知ゐれ時イエスと
執んと爲しのも民と畏たり　二十　即ち之と覗ひろれ言と取て方伯れ政事
れ權威ゐ解さんとして自ら義人と僞きる　二一　問者と遣せり就てイエスゐ問
けるい師よ我儕ゐんぢれ言とゐろ教るところ正くゐり偏らず誠と以て神
れ道と教ると知　二二　也ら稅とカイザルゐ納るい宜や否　二三　イエスろれ詭譎
ると知て曰けるい何ぞ我と試るや　二四　デナリと我よ見せよ此像と號は誰
ゐるゐ答てカイザルゐりと曰　二五　イエス曰けるい然ばカイザルれ物いカイ
ザルよ納め神れ物は神ゐ納よ　二六　ゐきら民れ前ゐ其言と執得ず且ろれ答と
奇と意て默然ゐり○　二七　難る事ゐしと言サドカイれ人きさりてイエスゐ問
けるは　二八　師よモーセ我儕ゐ書遺い若人れ兄弟妻ゐり子ゐくゐて死ど兄弟
その妻と娶り子と生て其嗣と繼すべしと　二九　然ど七人の兄弟ゐらんよ長子
妻と娶り子ゐくゐて死　三十　第二れ者これ婦を娶り子ゐくゐして死　三一　第三も之
と娶り七人同くと之と娶り子ゐくゐして死　三二　終よ婦も死たり　三三　然ど七人とも
ゐ此婦と妻とせゝ故ゐ難りゐる時は誰の妻と爲べき乎　三四　イエス答て曰け
るい此世の子い娶嫁ゐとゐり　三五　彼世ゐ入り死より復生ゐ足もれい娶嫁ゐ
とゐゝ是ゐた死るゐと能ざるが故ゐの子ゐをゞ也　三六　さて死ゝ者れ難るゐと
ゐ就ていモーセ棘中れ猶ゐ主とアブラハムの神イサクの神ヤコブれ神と稱て之と明白せり　三七　ろど神と死ゐる者れ神ゐ非ず生る者れ神ゐり蓋神の前ゐは皆生る者なをゞ也　三八　そ乃學

者等おおへ曰けるは師よ善いへり　四十　此れ ち敢てイエスお問者あらざ
四一　イエス彼等お曰けるい人々如何あるをバキリストとダビデれ裔と言や　四二　四三
ダビデ自ら詩の篇お主ヨダ主お曰けるい我あんちれ敵と爾れ足凳と爲ま
で我ぉ右お坐そべしと云り　四四　然セダビデ之と主と稱さるを如何で其裔
あらん乎　四五　民みな之と聽る時それ弟子おいひけるい　四六　長服と衣て遊行お
と好と市上おて人れ問安會堂れ高坐蓮間れ上座と喜ぶ學者と愼めよ　四七
彼等い孀婦れ家と呑いつとりて長祈とあを罪せらるゝまゝと尤も重し

第二十一章　一　イエス目とあげ富る人々れ捐輸と寶錢箱お投るを見る　二　又ある貧
き孀婦れレプタ二と投たるを見て　三　曰けるい　四　眞に此貧き孀婦
衆れ者よりも多く投たり　四　蓋のきらい皆ろれ羨餘ある所より捐輸と神お
さゝげ此婦い不足ところより其所有と盡く獻たれバ也　五　また或人殿れ
美石と奉納物と以て修飾るみことと語しおイエス曰けるい　六　爾曹れ見る所
れもの石と石れ上おも遺ず圮さるゝ日いたらん　七　彼等ふて曰けるい師
よ何れ時おれ事あらん正お此れ亰れ變らん時い如何ある兆ある乎　八　イエ
ス曰けるい爾曹つゝしまて惑さるゝ事あるのを蓋おやくれ者わが名と冒き
たり我いキリストあり時い近よりと云ん然セ爾曹從ふ勿ヨ　九　戰亂と
聞ときヒ懼るゝ勿ヨ此等れ事れ先お有いれど止と得ざるおと也然セ末期い未だ速
あらず　十　又いひけるい民い民と國い國と攻　十一　各處お大ある地震饑饉
疫病おより且おそるべき事と大ある休徴天より現るべし　十二　此事より先お人
々爾曹と執へ苦め會堂および獄お解し我名れ爲お王および侯れ前お曳往
べし　十三　然セも爾曹お此事お遭い證と爲るべし　十四　故お爾曹ま
ゴ何と對んと思慮ましき事と心お定よ　十五　蓋そべて爾曹お仇そる者れ辨駁また敵對みと
爲えざるべき口と智とと我おんちらお賜へん　十六　又おんちら父母兄弟親戚
朋友等より解さヒ且おんちられ中ある者い殺さるべし　十七　爾曹ヒが名の爲
お人々お憎をん　十八　然セも爾曹れ首髮一縷も喪いとおんちら忍耐て其生
命と全うせよ　二十　なんぢら軍勢お工ルサレムの圍るゝと見おバ其亡ちあさ

よ在と知ニ ろの時ユダヤお在者い山お逃よエルサレムお在者いエルサレムお入あるを三 よ在者お刑罰れ日おーて錄さをたる事れを
あ應らるよ日あり二三 其日おい孕たる者と哺乳兒ある者い禍ある哉あを地
よ大ある災ありて怒あれ民お及べけをを也二四 人々刀刃お斃れ且とらいを
て諸國お曳をエルサレムい異邦人れ時滿るまでい異邦人よ踩躪さるべし
二五 よ日月星よ異象あるべし地おて頻沛二六 ひ々危懼けろ世界お來んとそる事を
て顛沛二六 ひ々危懼けろ世界お來んとそる事を俟惱むべーは是天れ勢ひ震動
すべけをを也三〇 ろれ時人々い人れ子れ權威と大ある榮光と以て雲お乘來
ると見るべし二八 此等れ事れ成初ん時おい起て爾曹れ首と擡よ蓋あんぢら
贖ちうゴけば也二九 イエス譬と彼等お語けるい無花果と凡れ樹と見よ三〇
既お萌を爾曹みをと見て自ら夏いとや近と知三一 此れ如く爾曹も此等の事
成と見ば神の國れ近と知三二 誠お我なんぢらお告ん此事をお成までい此世
い逝ざるべー 天地い廢るべし然やも我言は廢る可らず三四 爾曹みぼらら

と愼よ恐くい飲食お耽り世事お累を爾曹れ心昏迷ありて慮よらざる時お此
日あんぢらお臨ん三五 こを機檻れ如く遍く地れ上お居者お臨むべー三六 是故
お爾曹儆醒て此臨んとそる凡の事と避まさ人の子れ前お立得やうお常お
祈をニ七 イエス晝い殿お在て教へ夜い出て橄欖と云る山お宿ぬ三八 民をる彼お
聽んとて朝はやく殿お來をり

第二十二章

逾越と云る除酵節ちかづけり二 祭司れ長學者たち如何ーて
おイエスと殺をんと窺ふ但民と畏さり三 僧サタン十二の中れイスカリオ
テと稱るユダお入ぬ四 かを祭司れ長だちと殿司等お往如何ーてかイエス
と付さんと語けをば五 彼等喜びて銀子を予んと約す六 ユダ諾ひて人々の
居ざる時おイエスと付さんと機と窺へり〇七 さて除酵節ある逾越れ羔
と殺べき日おありけをば八 イエスペテロとヨハネと遣さんとて曰けるい
往て我儕が食せん爲お逾越と備よと答けるい何處お之と備んと爲
十 イエス曰けるい城下お入ば水と盛たる瓶と擎る人おんぢらお遇べし

其入とおろれ家お臨ひ往て　十一家の主お師あんちに云ひを弟子と共お邀越
と食すべき客房い何處お在やと曰ふ　十二然そを彼ろあへたる大ある樓房と
示すべし其處お備よ　十三彼等ゆきてイエスの曰給ひさる如く遇あり逾越
の備と爲り　十四時至けをバイエス食お就ぬ又使徒も共に就たり　十五イエス彼
等お曰けるい我苦難と受る先お爾曹と共に此逾越と食するみと大お願へ
り　十六れ爾曹お告ん之と神れ國に成までい復おを食せじと　十七イエス杯と
とり謝ーて曰けるい之と取て互お分よ　十八我あんぢらお告ん神れ國の來る
までい葡萄より造しものと飲じまたパンととり謝おて擘のをらお予て
曰けるい此い爾曹れ爲お予るお忘が身體あり我と記ん爲お此と行　二十また食
おてのち杯ととり曰けるい此杯い爾曹の爲よ流す我血あして立る所れ新
約あり　二十一夫忘をと賣す者れ手い我と共お案にあり　二十二人れ子い果て定ちを
たる如く逝ん然ごも人の子と賣す人い禍ある哉　二十三あをら此事と爲ん者い
誰ある乎と互お問め　二十四また彼等の中お長たる者い誰あるあと互れ爭お

ヲきイエス彼等お曰けるい異邦人の王い其民と支配す又それ上お權と
乘者い恩と施す者と稱らる　二十五然ごも爾曹い如是すべからず爾曹のうち大
ある者い幼が如く首たる者い役る者れ如あるべし　二十六食お就る者あらずや然
と孰の大ある食お就る者あらずや然ごも我い爾曹の中お事る者れ如し　二十七
忘が患難お於て我と偕お居し者い爾曹ありき　二十八我父れ我お任ぜし如く我も
爾曹お國と任すべし　二十九みを爾曹忘がイスラエルれ十二の支派と稱んが爲
ンよサタン爾と索て篩れ如く篩んとす　三十生まさ曰けるいシモンよシモ
爲お願をり爾の信仰絶ざるやう爾れ　三十一然ごも爾の信仰絶ざるやう爾れ
も爾と共お往んと心と定たり　三十二イエス曰けるいペテロ我あんぢお告ん今
日鷄あおざる前お爾三次忘をと讓ずと言ん○　三十三又あをらお曰けるい我財
布旅袋履とも帶せで爾曹と遣まゝとき事の缺たるあと有志や答けるい無
りき　三十四イエス彼等お曰けるい今と財布ある者い之ととを旅袋ある者も亦

然り此等と有ぬ者い衣服と賣て刀と買べし　我あんぢらお告ん彼い罪人
れ中よ算らをて有ると錄さをたる此言い我お於て應らるべし蓋已をと指
たる事い必ず成らる可をべ也　37 ○ 38 ○ 39 ○ 40 ○ 41 ○ 42 ○ 43 ○ 44 ○ 45 ○ 46 ○ 47 ○ 48 ○ 49 ○ 50 ○ 51 ○ 52 ○ 53 ○ 54 ○ 55 ○ 56 ○ 57 ○ 58 ○ 59 ○ 60 ○ 61 ○ 62 ○ 63 ○ 64 ○ 65 ○ 66 ○ 67 ○ 68 ○ 69 ○ 70 ○ 71 ○ 72 ○ 73 ○ 74 ○ 75 ○ 76 ○ 77 ○ 78 ○ 79 ○ 80 ○ 81 ○ 82 ○ 83 ○ 84 ○ 85 ○ 86 ○ 87 ○ 88 ○ 89 ○ 90 ○ 91 ○ 92 ○ 93 ○ 94 ○ 95 ○ 96 ○ 97 ○ 98 ○ 99 ○ 100 ○ 101 ○ 102 ○ 103 ○ 104 ○ 105 ○ 106 ○ 107 ○ 108 ○ 109 ○ 110 ○ 111 ○ 112 ○ 113 ○ 114 ○ 115 ○ 116 ○ 117 ○ 118 ○ 119 ○ 120 ○ 121 ○ 122 ○ 123 ○ 124 ○ 125 ○ 126 ○ 127 ○ 128 ○ 129 ○ 130 ○ 131 ○ 132 ○ 133 ○ 134 ○ 135 ○ 136 ○ 137 ○ 138 ○ 139 ○ 140 ○ 141 ○ 142 ○ 143 ○ 144 ○ 145 ○ 146 ○ 147 ○ 148 ○ 149 ○ 150 ○ 151 ○ 152 ○ 153 ○ 154 ○ 155 ○ 156 ○ 157 ○ 158 ○ 159 ○ 160 ○ 161 ○ 162 ○ 163 ○ 164 ○ 165 ○ 166 ○ 167 ○ 168 ○ 169 ○ 170 ○ 171 ○ 172 ○ 173 ○ 174 ○ 175 ○ 176 ○ 177 ○ 178 ○ 179 ○ 180 ○ 181 ○ 182 ○ 183 ○ 184 ○ 185 ○ 186 ○ 187 ○ 188 ○ 189 ○ 190 ○ 191 ○ 192 ○ 193 ○ 194 ○ 195 ○ 196 ○ 197 ○ 198 ○ 199 ○ 200 ○ 201 ○ 202 ○ 203 ○ 204 ○ 205 ○ 206 ○ 207 ○ 208 ○ 209 ○ 210 ○ 211 ○ 212 ○ 213 ○ 214 ○ 215 ○ 216 ○ 217 ○ 218 ○ 219 ○ 220 ○ 221 ○ 222 ○ 223 ○ 224 ○ 225 ○ 226 ○ 227 ○ 228 ○ 229 ○ 230 ○ 231 ○ 232 ○ 233 ○ 234 ○ 235 ○ 236 ○ 237 ○ 238 ○ 239 ○ 240 ○ 241 ○ 242 ○ 243 ○ 244 ○ 245 ○ 246 ○ 247 ○ 248 ○ 249 ○ 250 ○ 251 ○ 252 ○ 253 ○ 254 ○ 255 ○ 256 ○ 257 ○ 258 ○ 259 ○ 260 ○ 261 ○ 262 ○ 263 ○ 264 ○ 265 ○ 266 ○ 267 ○ 268 ○ 269 ○ 270 ○ 271 ○ 272 ○ 273 ○ 274 ○ 275 ○ 276 ○ 277 ○ 278 ○ 279 ○ 280 ○ 281 ○ 282 ○ 283 ○ 284 ○ 285 ○ 286 ○ 287 ○ 288 ○ 289 ○ 290 ○ 291 ○ 292 ○ 293 ○ 294 ○ 295 ○ 296 ○ 297 ○ 298 ○ 299 ○ 300 ○ 301 ○ 302 ○ 303 ○ 304 ○ 305 ○ 306 ○ 307 ○ 308 ○ 309 ○ 310 ○ 311 ○ 312 ○ 313 ○ 314 ○ 315 ○ 316 ○ 317 ○ 318 ○ 319 ○ 320 ○ 321 ○ 322 ○ 323 ○ 324 ○ 325 ○ 326 ○ 327 ○ 328 ○ 329 ○ 330 ○ 331 ○ 332 ○ 333 ○ 334 ○ 335 ○ 336 ○ 337 ○ 338 ○ 339 ○ 340 ○ 341 ○ 342 ○ 343 ○ 344 ○ 345 ○ 346 ○ 347 ○ 348 ○ 349 ○ 350 ○ 351 ○ 352 ○ 353 ○ 354 ○ 355 ○ 356 ○ 357 ○ 358 ○ 359 ○ 360 ○ 361 ○ 362 ○ 363 ○ 364 ○ 365 ○ 366 ○ 367 ○ 368 ○ 369 ○ 370 ○ 371 ○ 372 ○ 373 ○ 374 ○ 375 ○ 376 ○ 377 ○ 378 ○ 379 ○ 380 ○ 381 ○ 382 ○ 383 ○ 384 ○ 385 ○ 386 ○ 387 ○ 388 ○ 389 ○ 390 ○ 391 ○ 392 ○ 393 ○ 394 ○ 395 ○ 396 ○ 397 ○ 398 ○ 399 ○ 400 ○ 401 ○ 402 ○ 403 ○ 404 ○ 405 ○ 406 ○ 407 ○ 408 ○ 409 ○ 410 ○ 411 ○ 412 ○ 413 ○ 414 ○ 415 ○ 416 ○ 417 ○ 418 ○ 419 ○ 420 ○ 421 ○ 422 ○ 423 ○ 424 ○ 425 ○ 426 ○ 427 ○ 428 ○ 429 ○ 430 ○ 431 ○ 432 ○ 433 ○ 434 ○ 435 ○ 436 ○ 437 ○ 438 ○ 439 ○ 440 ○ 441 ○ 442 ○ 443 ○ 444 ○ 445 ○ 446 ○ 447 ○ 448 ○ 449 ○ 450 ○ 451 ○ 452 ○ 453 ○ 454 ○ 455 ○ 456 ○ 457 ○ 458 ○ 459 ○ 460 ○ 461 ○ 462 ○ 463 ○ 464 ○ 465 ○ 466 ○ 467 ○ 468 ○ 469 ○ 470 ○ 471 ○ 472 ○ 473 ○ 474 ○ 475 ○ 476 ○ 477 ○ 478 ○ 479 ○ 480 ○ 481 ○ 482 ○ 483 ○ 484 ○ 485 ○ 486 ○ 487 ○ 488 ○ 489 ○ 490 ○ 491 ○ 492 ○ 493 ○ 494 ○ 495 ○ 496 ○ 497 ○ 498 ○ 499 ○ 500 ○ 501 ○ 502 ○ 503 ○ 504 ○ 505 ○ 506 ○ 507 ○ 508 ○ 509 ○ 510 ○ 511 ○ 512 ○ 513 ○ 514 ○ 515 ○ 516 ○ 517 ○ 518 ○ 519 ○ 520 ○ 521 ○ 522 ○ 523 ○ 524 ○ 525 ○ 526 ○ 527 ○ 528 ○ 529 ○ 530 ○ 531 ○ 532 ○ 533 ○ 534 ○ 535 ○ 536 ○ 537 ○ 538 ○ 539 ○ 540 ○ 541 ○ 542 ○ 543 ○ 544 ○ 545 ○ 546 ○ 547 ○ 548 ○ 549 ○ 550 ○ 551 ○ 552 ○ 553 ○ 554 ○ 555 ○ 556 ○ 557 ○ 558 ○ 559 ○ 560 ○ 561 ○ 562 ○ 563 ○ 564 ○ 565 ○ 566 ○ 567 ○ 568 ○ 569 ○ 570 ○ 571 ○ 572 ○ 573 ○ 574 ○ 575 ○ 576 ○ 577 ○ 578 ○ 579 ○ 580 ○ 581 ○ 582 ○ 583 ○ 584 ○ 585 ○ 586 ○ 587 ○ 588 ○ 589 ○ 590 ○ 591 ○ 592 ○ 593 ○ 594 ○ 595 ○ 596 ○ 597 ○ 598 ○ 599 ○ 600 ○ 601 ○ 602 ○ 603 ○ 604 ○ 605 ○ 606 ○ 607 ○ 608 ○ 609 ○ 610 ○ 611 ○ 612 ○ 613 ○ 614 ○ 615 ○ 616 ○ 617 ○ 618 ○ 619 ○ 620 ○ 621 ○ 622 ○ 623 ○ 624 ○ 625 ○ 626 ○ 627 ○ 628 ○ 629 ○ 630 ○ 631 ○ 632 ○ 633 ○ 634 ○ 635 ○ 636 ○ 637 ○ 638 ○ 639 ○ 640 ○ 641 ○ 642 ○ 643 ○ 644 ○ 645 ○ 646 ○ 647 ○ 648 ○ 649 ○ 650 ○ 651 ○ 652 ○ 653 ○ 654 ○ 655 ○ 656 ○ 657 ○ 658 ○ 659 ○ 660 ○ 661 ○ 662 ○ 663 ○ 664 ○ 665 ○ 666 ○ 667 ○ 668 ○ 669 ○ 670 ○ 671 ○ 672 ○ 673 ○ 674 ○ 675 ○ 676 ○ 677 ○ 678 ○ 679 ○ 680 ○ 681 ○ 682 ○ 683 ○ 684 ○ 685 ○ 686 ○ 687 ○ 688 ○ 689 ○ 690 ○ 691 ○ 692 ○ 693 ○ 694 ○ 695 ○ 696 ○ 697 ○ 698 ○ 699 ○ 700 ○ 701 ○ 702 ○ 703 ○ 704 ○ 705 ○ 706 ○ 707 ○ 708 ○ 709 ○ 710 ○ 711 ○ 712 ○ 713 ○ 714 ○ 715 ○ 716 ○ 717 ○ 718 ○ 719 ○ 720 ○ 721 ○ 722 ○ 723 ○ 724 ○ 725 ○ 726 ○ 727 ○ 728 ○ 729 ○ 730 ○ 731 ○ 732 ○ 733 ○ 734 ○ 735 ○ 736 ○ 737 ○ 738 ○ 739 ○ 740 ○ 741 ○ 742 ○ 743 ○ 744 ○ 745 ○ 746 ○ 747 ○ 748 ○ 749 ○ 750 ○ 751 ○ 752 ○ 753 ○ 754 ○ 755 ○ 756 ○ 757 ○ 758 ○ 759 ○ 760 ○ 761 ○ 762 ○ 763 ○ 764 ○ 765 ○ 766 ○ 767 ○ 768 ○ 769 ○ 770 ○ 771 ○ 772 ○ 773 ○ 774 ○ 775 ○ 776 ○ 777 ○ 778 ○ 779 ○ 780 ○ 781 ○ 782 ○ 783 ○ 784 ○ 785 ○ 786 ○ 787 ○ 788 ○ 789 ○ 790 ○ 791 ○ 792 ○ 793 ○ 794 ○ 795 ○ 796 ○ 797 ○ 798 ○ 799 ○ 800 ○ 801 ○ 802 ○ 803 ○ 804 ○ 805 ○ 806 ○ 807 ○ 808 ○ 809 ○ 810 ○ 811 ○ 812 ○ 813 ○ 814 ○ 815 ○ 816 ○ 817 ○ 818 ○ 819 ○ 820 ○ 821 ○ 822 ○ 823 ○ 824 ○ 825 ○ 826 ○ 827 ○ 828 ○ 829 ○ 830 ○ 831 ○ 832 ○ 833 ○ 834 ○ 835 ○ 836 ○ 837 ○ 838 ○ 839 ○ 840 ○ 841 ○ 842 ○ 843 ○ 844 ○ 845 ○ 846 ○ 847 ○ 848 ○ 849 ○ 850 ○ 851 ○ 852 ○ 853 ○ 854 ○ 855 ○ 856 ○ 857 ○ 858 ○ 859 ○ 860 ○ 861 ○ 862 ○ 863 ○ 864 ○ 865 ○ 866 ○ 867 ○ 868 ○ 869 ○ 870 ○ 871 ○ 872 ○ 873 ○ 874 ○ 875 ○ 876 ○ 877 ○ 878 ○ 879 ○ 880 ○ 881 ○ 882 ○ 883 ○ 884 ○ 885 ○ 886 ○ 887 ○ 888 ○ 889 ○ 890 ○ 891 ○ 892 ○ 893 ○ 894 ○ 895 ○ 896 ○ 897 ○ 898 ○ 899 ○ 900 ○ 901 ○ 902 ○ 903 ○ 904 ○ 905 ○ 906 ○ 907 ○ 908 ○ 909 ○ 910 ○ 911 ○ 912 ○ 913 ○ 914 ○ 915 ○ 916 ○ 917 ○ 918 ○ 919 ○ 920 ○ 921 ○ 922 ○ 923 ○ 924 ○ 925 ○ 926 ○ 927 ○ 928 ○ 929 ○ 930 ○ 931 ○ 932 ○ 933 ○ 934 ○ 935 ○ 936 ○ 937 ○ 938 ○ 939 ○ 940 ○ 941 ○ 942 ○ 943 ○ 944 ○ 945 ○ 946 ○ 947 ○ 948 ○ 949 ○ 950 ○ 951 ○ 952 ○ 953 ○ 954 ○ 955 ○ 956 ○ 957 ○ 958 ○ 959 ○ 960 ○ 961 ○ 962 ○ 963 ○ 964 ○ 965 ○ 966 ○ 967 ○ 968 ○ 969 ○ 970 ○ 971 ○ 972 ○ 973 ○ 974 ○ 975 ○ 976 ○ 977 ○ 978 ○ 979 ○ 980 ○ 981 ○ 982 ○ 983 ○ 984 ○ 985 ○ 986 ○ 987 ○ 988 ○ 989 ○ 990 ○ 991 ○ 992 ○ 993 ○ 994 ○ 995 ○ 996 ○ 997 ○ 998 ○ 999 ○ 1000 ○ 1001 ○ 1002 ○ 1003 ○ 1004 ○ 1005 ○ 1006 ○ 1007 ○ 1008 ○ 1009 ○ 1010 ○ 1011 ○ 1012 ○ 1013 ○ 1014 ○ 1015 ○ 1016 ○ 1017 ○ 1018 ○ 1019 ○ 1020 ○ 1021 ○ 1022 ○ 1023 ○ 1024 ○ 1025 ○ 1026 ○ 1027 ○ 1028 ○ 1029 ○ 1030 ○ 1031 ○ 1032 ○ 1033 ○ 1034 ○ 1035 ○ 1036 ○ 1037 ○ 1038 ○ 1039 ○ 1040 ○ 1041 ○ 1042 ○ 1043 ○ 1044 ○ 1045 ○ 1046 ○ 1047 ○ 1048 ○ 1049 ○ 1050 ○ 1051 ○ 1052 ○ 1053 ○ 1054 ○ 1055 ○ 1056 ○ 1057 ○ 1058 ○ 1059 ○ 1060 ○ 1061 ○ 1062 ○ 1063 ○ 1064 ○ 1065 ○ 1066 ○ 1067 ○ 1068 ○ 1069 ○ 1070 ○ 1071 ○ 1072 ○ 1073 ○ 1074 ○ 1075 ○ 1076 ○ 1077 ○ 1078 ○ 1079 ○ 1080 ○ 1081 ○ 1082 ○ 1083 ○ 1084 ○ 1085 ○ 1086 ○ 1087 ○ 1088 ○ 1089 ○ 1090 ○ 1091 ○ 1092 ○ 1093 ○ 1094 ○ 1095 ○ 1096 ○ 1097 ○ 1098 ○ 1099 ○ 1100 ○ 1101 ○ 1102 ○ 1103 ○ 1104 ○ 1105 ○ 1106 ○ 1107 ○ 1108 ○ 1109 ○ 1110 ○ 1111 ○ 1112 ○ 1113 ○ 1114 ○ 1115 ○ 1116 ○ 1117 ○ 1118 ○ 1119 ○ 1120 ○ 1121 ○ 1122 ○ 1123 ○ 1124 ○ 1125 ○ 1126 ○ 1127 ○ 1128 ○ 1129 ○ 1130 ○ 1131 ○ 1132 ○ 1133 ○ 1134 ○ 1135 ○ 1136 ○ 1137 ○ 1138 ○ 1139 ○ 1140 ○ 1141 ○ 1142 ○ 1143 ○ 1144 ○ 1145 ○ 1146 ○ 1147 ○ 1148 ○ 1149 ○ 1150 ○ 1151 ○ 1152 ○ 1153 ○ 1154 ○ 1155 ○ 1156 ○ 1157 ○ 1158 ○ 1159 ○ 1160 ○ 1161 ○ 1162 ○ 1163 ○ 1164 ○ 1165 ○ 1166 ○ 1167 ○ 1168 ○ 1169 ○ 1170 ○ 1171 ○ 1172 ○ 1173 ○ 1174 ○ 1175 ○ 1176 ○ 1177 ○ 1178 ○ 1179 ○ 1180 ○ 1181 ○ 1182 ○ 1183 ○ 1184 ○ 1185 ○ 1186 ○ 1187 ○ 1188 ○ 1189 ○ 1190 ○ 1191 ○ 1192 ○ 1193 ○ 1194 ○ 1195 ○ 1196 ○ 1197 ○ 1198 ○ 1199 ○ 1200 ○ 1201 ○ 1202 ○ 1203 ○ 1204 ○ 1205 ○ 1206 ○ 1207 ○ 1208 ○ 1209 ○ 1210 ○ 1211 ○ 1212 ○ 1213 ○ 1214 ○ 1215 ○ 1216 ○ 1217 ○ 1218 ○ 1219 ○ 1220 ○ 1221 ○ 1222 ○ 1223 ○ 1224 ○ 1225 ○ 1226 ○ 1227 ○ 1228 ○ 1229 ○ 1230 ○ 1231 ○ 1232 ○ 1233 ○ 1234 ○ 1235 ○ 1236 ○ 1237 ○ 1238 ○ 1239 ○ 1240 ○ 1241 ○ 1242 ○ 1243 ○ 1244 ○ 1245 ○ 1246 ○ 1247 ○ 1248 ○ 1249 ○ 1250 ○ 1251 ○ 1252 ○ 1253 ○ 1254 ○ 1255 ○ 1256 ○ 1257 ○ 1258 ○ 1259 ○ 1260 ○ 1261 ○ 1262 ○ 1263 ○ 1264 ○ 1265 ○ 1266 ○ 1267 ○ 1268 ○ 1269 ○ 1270 ○ 1271 ○ 1272 ○ 1273 ○ 1274 ○ 1275 ○ 1276 ○ 1277 ○ 1278 ○ 1279 ○ 1280 ○ 1281 ○ 1282 ○ 1283 ○ 1284 ○ 1285 ○ 1286 ○ 1287 ○ 1288 ○ 1289 ○ 1290 ○ 1291 ○ 1292 ○ 1293 ○ 1294 ○ 1295 ○ 1296 ○ 1297 ○ 1298 ○ 1299 ○ 1300 ○ 1301 ○ 1302 ○ 1303 ○ 1304 ○ 1305 ○ 1306 ○ 1307 ○ 1308 ○ 1309 ○ 1310 ○ 1311 ○ 1312 ○ 1313 ○ 1314 ○ 1315 ○ 1316 ○ 1317 ○ 1318 ○ 1319 ○ 1320 ○ 1321 ○ 1322 ○ 1323 ○ 1324 ○ 1325 ○ 1326 ○ 1327 ○ 1328 ○ 1329 ○ 1330 ○ 1331 ○ 1332 ○ 1333 ○ 1334 ○ 1335 ○ 1336 ○ 1337 ○ 1338 ○ 1339 ○ 1340 ○ 1341 ○ 1342 ○ 1343 ○ 1344 ○ 1345 ○ 1346 ○ 1347 ○ 1348 ○ 1349 ○ 1350 ○ 1351 ○ 1352 ○ 1353 ○ 1354 ○ 1355 ○ 1356 ○ 1357 ○ 1358 ○ 1359 ○ 1360 ○ 1361 ○ 1362 ○ 1363 ○ 1364 ○ 1365 ○ 1366 ○ 1367 ○ 1368 ○ 1369 ○ 1370 ○ 1371 ○ 1372 ○ 1373 ○ 1374 ○ 1375 ○ 1376 ○ 1377 ○ 1378 ○ 1379 ○ 1380 ○ 1381 ○ 1382 ○ 1383 ○ 1384 ○ 1385 ○ 1386 ○ 1387 ○ 1388 ○ 1389 ○ 1390 ○ 1391 ○ 1392 ○ 1393 ○ 1394 ○ 1395 ○ 1396 ○ 1397 ○ 1398 ○ 1399 ○ 1400 ○ 1401 ○ 1402 ○ 1403 ○ 1404 ○ 1405 ○ 1406 ○ 1407 ○ 1408 ○ 1409 ○ 1410 ○ 1411 ○ 1412 ○ 1413 ○ 1414 ○ 1415 ○ 1416 ○ 1417 ○ 1418 ○ 1419 ○ 1420 ○ 1421 ○ 1422 ○ 1423 ○ 1424 ○ 1425 ○ 1426 ○ 1427 ○ 1428 ○ 1429 ○ 1430 ○ 1431 ○ 1432 ○ 1433 ○ 1434 ○ 1435 ○ 1436 ○ 1437 ○ 1438 ○ 1439 ○ 1440 ○ 1441 ○ 1442 ○ 1443 ○ 1444 ○ 1445 ○ 1446 ○ 1447 ○ 1448 ○ 1449 ○ 1450 ○ 1451 ○ 1452 ○ 1453 ○ 1454 ○ 1455 ○ 1456 ○ 1457 ○ 1458 ○ 1459 ○ 1460 ○ 1461 ○ 1462 ○ 1463 ○ 1464 ○ 1465 ○ 1466 ○ 1467 ○ 1468 ○ 1469 ○ 1470 ○ 1471 ○ 1472 ○ 1473 ○ 1474 ○ 1475 ○ 1476 ○ 1477 ○ 1478 ○ 1479 ○ 1480 ○ 1481 ○ 1482 ○ 1483 ○ 1484 ○ 1485 ○ 1486 ○ 1487 ○ 1488 ○ 1489 ○ 1490 ○ 1491 ○ 1492 ○ 1493 ○ 1494 ○ 1495 ○ 1496 ○ 1497 ○ 1498 ○ 1499 ○ 1500 ○ 1501 ○ 1502 ○ 1503 ○ 1504 ○ 1505 ○ 1506 ○ 1507 ○ 1508 ○ 1509 ○ 1510 ○ 1511 ○ 1512 ○ 1513 ○ 1514 ○ 1515 ○ 1516 ○ 1517 ○ 1518 ○ 1519 ○ 1520 ○ 1521 ○ 1522 ○ 1523 ○ 1524 ○ 1525 ○ 1526 ○ 1527 ○ 1528 ○ 1529 ○ 1530 ○ 1531 ○ 1532 ○ 1533 ○ 1534 ○ 1535 ○ 1536 ○ 1537 ○ 1538 ○ 1539 ○ 1540 ○ 1541 ○ 1542 ○ 1543 ○ 1544 ○ 1545 ○ 1546 ○ 1547 ○ 1548 ○ 1549 ○ 1550 ○ 1551 ○ 1552 ○ 1553 ○ 1554 ○ 1555 ○ 1556 ○ 1557 ○ 1558 ○ 1559 ○ 1560 ○ 1561 ○ 1562 ○ 1563 ○ 1564 ○ 1565 ○ 1566 ○ 1567 ○ 1568 ○ 1569 ○ 1570 ○ 1571 ○ 1572 ○ 1573 ○ 1574 ○ 1575 ○ 1576 ○ 1577 ○ 1578 ○ 1579 ○ 1580 ○ 1581 ○ 1582 ○ 1583 ○ 1584 ○ 1585 ○ 1586 ○ 1587 ○ 1588 ○ 1589 ○ 1590 ○ 1591 ○ 1592 ○ 1593 ○ 1594 ○ 1595 ○ 1596 ○ 1597 ○ 1598 ○ 1599 ○ 1600 ○ 1601 ○ 1602 ○ 1603 ○ 1604 ○ 1605 ○ 1606 ○ 1607 ○ 1608 ○ 1609 ○ 1610 ○ 1611 ○ 1612 ○ 1613 ○ 1614 ○ 1615 ○ 1616 ○ 1617 ○ 1618 ○ 1619 ○ 1620 ○ 1621 ○ 1622 ○ 1623 ○ 1624 ○ 1625 ○ 1626 ○ 1627 ○ 1628 ○ 1629 ○ 1630 ○ 1631 ○ 1632 ○ 1633 ○ 1634 ○ 1635 ○ 1636 ○ 1637 ○ 1638 ○ 1639 ○ 1640 ○ 1641 ○ 1642 ○ 1643 ○ 1644 ○ 1645 ○ 1646 ○ 1647 ○ 1648 ○ 1649 ○ 1650 ○ 1651 ○ 1652 ○ 1653 ○ 1654 ○ 1655 ○ 1656 ○ 1657 ○ 1658 ○ 1659 ○ 1660 ○ 1661 ○ 1662 ○ 1663 ○ 1664 ○ 1665 ○ 1666 ○ 1667 ○ 1668 ○ 1669 ○ 1670 ○ 1671 ○ 1672 ○ 1673 ○ 1674 ○ 1675 ○ 1676 ○ 1677 ○ 1678 ○ 1679 ○ 1680 ○ 1681 ○ 1682 ○ 1683 ○ 1684 ○ 1685 ○ 1686 ○ 1687 ○ 1688 ○ 1689 ○ 1690 ○ 1691 ○ 1692 ○ 1693 ○ 1694 ○ 1695 ○ 1696 ○ 1697 ○ 1698 ○ 1699 ○ 1700 ○ 1701 ○ 1702 ○ 1703 ○ 1704 ○ 1705 ○ 1706 ○ 1707 ○ 1708 ○ 1709 ○ 1710 ○ 1711 ○ 1712 ○ 1713 ○ 1714 ○ 1715 ○ 1716 ○ 1717 ○ 1718 ○ 1719 ○ 1720 ○ 1721 ○ 1722 ○ 1723 ○ 1724 ○ 1725 ○ 1726 ○ 1727 ○ 1728 ○ 1729 ○ 1730 ○ 1731 ○ 1732 ○ 1733 ○ 1734 ○ 1735 ○ 1736 ○ 1737 ○ 1738 ○ 1739 ○ 1740 ○ 1741 ○ 1742 ○ 1743 ○ 1744 ○ 1745 ○ 1746 ○ 1747 ○ 1748 ○ 1749 ○ 1750 ○ 1751 ○ 1752 ○ 1753 ○ 1754 ○ 1755 ○ 1756 ○ 1757 ○ 1758 ○ 1759 ○ 1760 ○ 1761 ○ 1762 ○ 1763 ○ 1764 ○ 1765 ○ 1766 ○ 1767 ○ 1768 ○ 1769 ○ 1770 ○ 1771 ○ 1772 ○ 1773 ○ 1774 ○ 1775 ○ 1776 ○ 1777 ○ 1778 ○ 1779 ○ 1780 ○ 1781 ○ 1782 ○ 1783 ○ 1784 ○ 1785 ○ 1786 ○ 1787 ○ 1788 ○ 1789 ○ 1790 ○ 1791 ○ 1792 ○ 1793 ○ 1794 ○ 1795 ○ 1796 ○ 1797 ○ 1798 ○ 1799 ○ 1800 ○ 1801 ○ 1802 ○ 1803 ○ 1804 ○ 1805 ○ 1806 ○ 1807 ○ 1808 ○ 1809 ○ 1810 ○ 1811 ○ 1812 ○ 1813 ○ 1814 ○ 1815 ○ 1816 ○ 1817 ○ 1818 ○ 1819 ○ 1820 ○ 1821 ○ 1822 ○ 1823 ○ 1824 ○ 1825 ○ 1826 ○ 1827 ○ 1828 ○ 1829 ○ 1830 ○ 1831 ○ 1832 ○ 1833 ○ 1834 ○ 1835 ○ 1836 ○ 1837 ○ 1838 ○ 1839 ○ 1840 ○ 1841 ○ 1842 ○ 1843 ○ 1844 ○ 1845 ○ 1846 ○ 1847 ○ 1848 ○ 1849 ○ 1850 ○ 1851 ○ 1852 ○ 1853 ○ 1854 ○ 1855 ○ 1856 ○ 1857 ○ 1858 ○ 1859 ○ 1860 ○ 1861 ○ 1862 ○ 1863 ○ 1864 ○ 1865 ○ 1866 ○ 1867 ○ 1868 ○ 1869 ○ 1870 ○ 1871 ○ 1872 ○ 1873 ○ 1874 ○ 1875 ○ 1876 ○ 1877 ○ 1878 ○ 1879 ○ 1880 ○ 1881 ○ 1882 ○ 1883 ○ 1884 ○ 1885 ○ 1886 ○ 1887 ○ 1888 ○ 1889 ○ 1890 ○ 1891 ○ 1892 ○ 1893 ○ 1894 ○ 1895 ○ 1896 ○ 1897 ○ 1898 ○ 1899 ○ 1900 ○ 1901 ○ 1902 ○ 1903 ○ 1904 ○ 1905 ○ 1906 ○ 1907 ○ 1908 ○ 1909 ○ 1910 ○ 1911 ○ 1912 ○ 1913 ○ 1914 ○ 1915 ○ 1916 ○ 1917 ○ 1918 ○ 1919 ○ 1920 ○ 1921 ○ 1922 ○ 1923 ○ 1924 ○ 1925 ○ 1926 ○ 1927 ○ 1928 ○ 1929 ○ 1930 ○ 1931 ○ 1932 ○ 1933 ○ 1934 ○ 1935 ○ 1936 ○ 1937 ○ 1938 ○ 1939 ○ 1940 ○ 1941 ○ 1942 ○ 1943 ○ 1944 ○ 1945 ○ 1946 ○ 1947 ○ 1948 ○ 1949 ○ 1950 ○ 1951 ○ 1952 ○ 1953 ○ 1954 ○ 1955 ○ 1956 ○ 1957 ○ 1958 ○ 1959 ○ 1960 ○ 1961 ○ 1962 ○ 1963 ○ 1964 ○ 1965 ○ 1966 ○ 1967 ○ 1968 ○ 1969 ○ 1970 ○ 1971 ○ 1972 ○ 1973 ○ 1974 ○ 1975 ○ 1976 ○ 1977 ○ 1978 ○ 1979 ○ 1980 ○ 1981 ○ 1982 ○ 1983 ○ 1984 ○ 1985 ○ 1986 ○ 1987 ○ 1988 ○ 1989 ○ 1990 ○ 1991 ○ 1992 ○ 1993 ○ 1994 ○ 1995 ○ 1996 ○ 1997 ○ 1998 ○ 1999 ○ 2000 ○ 2001 ○ 2002 ○ 2003 ○ 2004 ○ 2005 ○ 2006 ○ 2007 ○ 2008 ○ 2009 ○ 2010 ○ 2011 ○ 2012 ○ 2013 ○ 2014 ○ 2015 ○ 2016 ○ 2017 ○ 2018 ○ 2019 ○ 2020 ○ 2021 ○ 2022 ○ 2023 ○ 2024 ○ 2025 ○ 2026 ○ 2027 ○ 2028 ○ 2029 ○ 2030 ○ 2031 ○ 2032 ○ 2033 ○ 2034 ○ 2035 ○ 2036 ○ 2037 ○ 2038 ○ 2039 ○ 2040 ○ 2041 ○ 2042 ○ 2043 ○ 2044 ○ 2045 ○ 2046 ○ 2047 ○ 2048 ○ 2049 ○ 2050 ○ 2051 ○ 2052 ○ 2053 ○ 2054 ○ 2055 ○ 2056 ○ 2057 ○ 2058 ○ 2059 ○ 2060 ○ 2061 ○ 2062 ○ 2063 ○ 2064 ○ 2065 ○ 2066 ○ 2067 ○ 2068 ○ 2069 ○ 2070 ○ 2071 ○ 2072 ○ 2073 ○ 2074 ○ 2075 ○ 2076 ○ 2077 ○ 2078 ○ 2079 ○ 2080 ○ 2081 ○ 2082 ○ 2083 ○ 2084 ○ 2085 ○ 2086 ○ 2087 ○ 2088 ○ 2089 ○ 2090 ○ 2091 ○ 2092 ○ 2093 ○ 2094 ○ 2095 ○ 2096 ○ 2097 ○ 2098 ○ 2099 ○ 2100 ○ 2101 ○ 2102 ○ 2103 ○ 2104 ○ 2105 ○ 2106 ○ 2107 ○ 2108 ○ 2109 ○ 2110 ○ 2111 ○ 2112 ○ 2113 ○ 2114 ○ 2115 ○ 2116 ○ 2117 ○ 2118 ○ 2119 ○ 2120 ○ 2121 ○ 2122 ○ 2123 ○ 2124 ○ 2125 ○ 2126 ○ 2127 ○ 2128 ○ 2129 ○ 2130 ○ 2131 ○ 2132 ○ 2133 ○ 2134 ○ 2135 ○ 2136 ○ 2137 ○ 2138 ○ 2139 ○ 2140 ○ 2141 ○ 2142 ○ 2143 ○ 2144 ○ 2145 ○ 2146 ○ 2147 ○ 2148 ○ 2149 ○ 2150 ○ 2151 ○ 2152 ○ 2153 ○ 2154 ○ 2155 ○ 2156 ○ 2157 ○ 2158 ○ 2159 ○ 2160 ○ 2161 ○ 2162 ○ 2163 ○ 2164 ○ 2165 ○ 2166 ○ 2167 ○ 2168 ○ 2169 ○ 2170 ○ 2171 ○ 2172 ○ 2173 ○ 2174 ○ 2175 ○ 2176 ○ 2177 ○ 2178 ○ 2179 ○ 2180 ○ 2181 ○ 2182 ○ 2183 ○ 2184 ○ 2185 ○ 2186 ○ 2187 ○ 2188 ○ 2189 ○ 2190 ○ 2191 ○ 2192 ○ 2193 ○ 2194 ○ 2195 ○ 2196 ○ 2197 ○ 2198 ○ 2199 ○ 2200 ○ 2201 ○ 2202 ○ 2203 ○ 2204 ○ 2205 ○ 2206 ○ 2207 ○ 2208 ○ 2209 ○ 2210 ○ 2211 ○ 2212 ○ 2213 ○ 2214 ○ 2215 ○ 2216 ○ 2217 ○ 2218 ○ 2219 ○ 2220 ○ 2221 ○ 2222 ○ 2223 ○ 2224 ○ 2225 ○ 2226 ○ 2227 ○ 2228 ○ 2229 ○ 2230 ○ 2231 ○ 2232 ○ 2233 ○ 2234 ○ 2235 ○ 2236 ○ 2237 ○ 2238 ○ 2239 ○ 2240 ○ 2241 ○ 2242 ○ 2243 ○ 2244 ○ 2245 ○ 2246 ○ 2247 ○ 2248 ○ 2249 ○ 2250 ○ 2251 ○ 2252 ○ 2253 ○ 2254 ○ 2255 ○ 2256 ○ 2257 ○ 2258 ○ 2259 ○ 2260 ○ 2261 ○ 2262 ○ 2263 ○ 2264 ○ 2265 ○ 2266 ○ 2267 ○ 2268 ○ 2269 ○ 2270 ○ 2271 ○ 2272 ○ 2273 ○ 2274 ○ 2275 ○ 2276 ○ 2277 ○ 2278 ○ 2279 ○ 2280 ○ 2281 ○ 2282 ○ 2283 ○ 2284 ○ 2285 ○ 2286 ○ 2287 ○ 2288 ○ 2289 ○ 2290 ○ 2291 ○ 2292 ○ 2293 ○ 2294 ○ 2295 ○ 2296 ○ 2297 ○ 2298 ○ 2299 ○ 2300 ○ 2301 ○ 2302 ○ 2303 ○ 2304 ○ 2305 ○ 2306 ○ 2307 ○ 2308 ○ 2309 ○ 2310 ○ 2311 ○ 2312 ○ 2313 ○ 2314 ○ 2315 ○ 2316 ○ 2317 ○ 2318 ○ 2319 ○ 2320 ○ 2321 ○ 2322 ○ 2323 ○ 2324 ○ 2325 ○ 2326 ○ 2327 ○ 2328 ○ 2329 ○ 2330 ○ 2331 ○ 2332 ○ 2333 ○ 2334 ○ 2335 ○ 2336 ○ 2337 ○ 2338 ○ 2339 ○ 2340 ○ 2341 ○ 2342 ○ 2343 ○ 2344 ○ 2345 ○ 2346 ○ 2347 ○ 2348 ○ 2349 ○ 2350 ○ 2351 ○ 2352 ○ 2353 ○ 2354 ○ 2355 ○ 2356 ○ 2357 ○ 2358 ○ 2359 ○ 2360 ○ 2361 ○ 2362 ○ 2363 ○ 2364 ○ 2365 ○ 2366 ○ 2367 ○ 2368 ○ 2369 ○ 2370 ○ 2371 ○ 2372 ○ 2373 ○ 2374 ○ 2375 ○ 2376 ○ 2377 ○ 2378 ○ 2379 ○ 2380 ○ 2381 ○ 2382 ○ 2383 ○ 2384 ○ 2385 ○ 2386 ○ 2387 ○ 2388 ○ 2389 ○ 2390 ○ 2391 ○ 2392 ○ 2393 ○ 2394 ○ 2395 ○ 2396 ○ 2397 ○ 2398 ○ 2399 ○ 2400 ○ 2401 ○ 2402 ○ 2403 ○ 2404 ○ 2405 ○ 2406 ○ 2407 ○ 2408 ○ 2409 ○ 2410 ○ 2411 ○ 2412 ○ 2413 ○ 2414 ○ 2415 ○ 2416 ○ 2417 ○ 2418 ○ 2419 ○ 2420 ○ 2421 ○ 2422 ○ 2423 ○ 2424 ○ 2425 ○ 2426 ○ 2427 ○ 2428 ○ 2429 ○ 2430 ○ 2431 ○ 2432 ○ 2433 ○ 2434 ○ 2435 ○ 2436 ○ 2437 ○ 2438 ○ 2439 ○ 2

契り○六三イエスと護をる者ども咽弄まて彼と撲六四ろの目を掩ひ問て曰けるい爾と撲者い誰あるう預言せよ六五また多端れ事て言て之と謂きり六六平旦ゐ民れ長老祭司の長學者ども集りてイエスと集議所ゐ曳往て曰けるい爾もしキリストあらバ我儕よ告よイエス曰けるい假令ゐ爾曹が言る如く我と是あり六七我儕も信ぜざるべし六八又たとひ我あんちらは詰とも答ざるべし六九今より後人れ子い大權ある神の右ゐ坐せん七〇皆ゆエス曰けるい爾曹が言る如く我と是あり七一彼等いひけるい猶證據と須んや我儕みづから其口より聞り

第二十三章

衆人みな起てイエスとピラトゐ携ゆき七二之と訟いひけるい我儕あの人が民と惑し稅とカイザルゐ納るゐとと禁み自ら王なるキリストと稱ると見るり七三ピラトイエスゐ問て曰けるい爾いユダヤ人の王なるや答けるい爾が言る如し七四ピラト祭司れ長等と衆人ゐ曰けるい我あの人ゐ於て罪あると見ず七五彼等ゐそ〳〵極力いひけるい彼いガリラヤより始て遍くユダヤと敎へ此處まで來て民と亂せり七六ピラトがリラヤと聞て此人七ガリラヤ人ある乎を問其へロデの所管あると知て之とヘロデゐ遣る此時へロデもエルサレムゐ在しなり七七イエスと見て甚だ喜べり蓋各樣ある彼が風聲と聞て久く之を見んおとと欲ひ且ろれ奇異ある事と見んと望ゐたをバ也七八是故ゐ多言と以て問けるも答ず七九祭司れ長學者たち側ゐ立て切ゐ彼と訟ぬ八〇ヘロデろの士卒と共に彼と藐視嘲弄して華服と衣せ復ピラトゐ遣きり八一ピラトとヘロデ先よい仇さりしが當日たがひゐ親と爲り○八二ピラト祭司の長有司ゐよび民等と呼あつめて八三曰けるい爾曹ゐれ人と我に携來りて民と亂したる者ありと爲せり我あんちらが訟る所と以て爾曹の前よ鞫るも其罪あると見ず八四ヘロデも亦然り爾曹とヘロデゐ遣せゐ彼もイエスが行事の死罪ゐ當と見ざりき故ゐ之を笞ちて之と釋さん八五蓋ゐれ節期ゐ必ず一人と釋ゐと有バあり八六彼等ゐ一齊よとよりて此人と除きバラバと我儕に釋せと曰ひ彼い城下よ一揆

と起し人と殺して獄に入し者あり
二十 故にピラトまたイエスを釋さんと欲ひ
彼のもらに曰しうぞ 二 そのもら呼りて之と十字架に釘よと曰
二一 ピラト三次いひけるは彼と何の惡事と行しや我いまだ彼れ死罪あるを
見ざるを答ちて釋さん 二二 彼等厲く聲をさて之と十字架に釘んと言募るを
二三 ピラトろの求れ如く擬て 二四 彼等が求
る一揆と起し人と殺して獄に入たる者と釋し其意に任せてイエスと付せ
二五 彼等イエスと曳往とき田間より出來るクレネ人レモンと云る者と
執へ其に十字架と負せてイエスに從はせたり 二六 衆の民および婦等も從ふ
婦等は彼と哭哀めり 二七 イエス彼等と顧いひけるはエルサレムの女子よ我
爲に哭ずして唯おれをと己が子の爲に哭ざる者いまだ孕ざるの胎い
まだ哺せざるれ乳はざる福ありと曰ん日きたらん 二八 當時人々山に對て我儕れ
上に墜よ陵に對て我儕と掩へと曰ん 二九 もし青木にかくあさへ如此あさば枯木は
如何せらるん○ 三十 また他に二人の罪人とイエスと偕に死罪に處んとて
曳往り 三一 彼等クラニオンと云る所に至りて此にイエスと及び罪人と十字架
に釘ぬ一人とイエスと右に一人と左に置 三二 イエス曰けるは父よ彼等を赦し
給へ其爲をよろと知ざるが故なり彼等鬮してイエスと見さり有司も亦嘲哂ふて曰けるは
々立てイエスと救へり若キ
リスト神の選たる者あらば自己と救べし 三六 兵卒も亦あきと嘲弄し來り醋
と予て 三七 爾もしユダヤ人れ王ならば自己と救へと曰り 三八 又ギリヤロマ
へブルれ文字よて此はユダヤ人れ王ありと書る罪標と其上に建たり○ 三九
懸らをたる罪人れ一人イエスと譏て曰けるは爾もしキリストあらば己と
我儕と救へ 四十 他れ一人みたへて彼と責め曰けるは爾かあたく罪と受ぬ
ら神と畏ざる乎 四一 我儕は當然あり行ふとの報を受ぬをや此人は何も不是
事は行ざりしも 四二 斯てイエスに曰けるは爾ろれ國に來ん時我と憶たまへ
四三 イエス答けるは誠よ我ぬんぢよ告ん今日ぬんぢは我と偕ぬ樂園ぬ在べ
し○ 四四 時約そ十二時おろより三時ぬ至まで遍く地は暗と爲をり

日光くらき殿の内れ帳裏中より裂たり 四六 イエス大聲お呼り曰けるい父よ我靈と爾れ手お託く如此いひて氣絶ゆ 四七 百夫れ長これ成し事と見て神を崇め曰けるい誠お此人い義人ありし事等と見て 四八 曾と捌て返をりき 四九 イエスの相識れ人々およびガリラヤより隨ひし婦ぢも遠く立て此等の事と見たり〇 五十 議員あるヨセフと云る善つ義なる人あり 五一 彼等れ評議と行爲と肯ざりき 五二 是いユダヤれアリマタヤれ邑の人おて神の國と慕る者あり 五三 此人ピラトお往イエスれ屍と乞て之と取下し布お以て裹いまだ人と葬し事あき石れ鑿たる墓お置り 五四 此日と備節日あり且安息日近きぬ 五五 ガリラヤよりイエスと偕お來りし婦たち後お隨ひて其墓と屍れ置たる狀と見たり 五六 彼等かへりて香物と香膏と備へ置て誡よ從ひ安息日と休めり

第二十四章 七日の首日れ昧爽お此婦たち備置さる香物と携て墓お來しに 二 他れ婦等も偕お來をり 二 彼等石の墓より轉たまひと見て 三 入けるに主イエスの屍と見ず 四 之が爲お踏躇とりしお輝る衣服と着たる二人ろれ旁お立り 五 おそら懼て面と地お伏けるに爾曹何ぞ死たる者れ中お生さる者と尋るや 六 彼い此お在ず甦りさり彼ガリラヤお居しとき爾曹お語て人れ子と必ず罪ある人れ手お付さを十字架お釘らを第三日お甦る可と云さりしと憶起よ 八 彼等ろの言と憶いで 九 墓より歸て此等れ事とみな十一れ弟子と他れ弟子等お告 十 此等れ事と使徒お告たる者いマグダラれマリアヨハンナヤコブれ母あるマリアまた他お偕お在し婦等あり 十一 使徒ろれ語をるを虛誕と意ひて信ぜず 十二 ペテロ起て趨り墓お往ふまりて案布れのさよせ在と見て其遇とみろれ事と奇をつゝ歸れり〇 十三 當日二人れ弟子エルサレムより三里をのり隔りたるエマヲと云る村お往けるお 十四 互よ此等れ所遇ぢもと語あへり 十五 語り論ずる時おイエス自ら近きて偕お往り 十六 然ど彼等れ目迷さをて知ざりき 十七 イエス曰けるい爾曹行つゝ互よ哀み談論おとい何ぞ乎ろ 十八 一人れクレオパと云る者答け

るゝ爾ルサレム[1]ゝ旅人おしてゞ獨これなろ有し事と知ざる乎　答ける
ゝ何事ぞや之ゝ曰けるゝナザレ[2]イエスの事あり此人ゝ神と萬民ゝ前ゝ
於て行と言ゝ大ある能ある預言者ゝりゝ　二十祭司の長と有司等ゝこゝと死
罪ゝ解して十字架ゝ釘さゝり　二十一我儕イスラエル[3]と贖はん者ゝ此人なりと望
たりし又ゝこゝを而已あらず此等ゝ事ゝ成しより今日ゝ第三日あるよ　二十二我儕
れ中ある或婦だち我儕と驚駭せり彼等朝はやく墓ゝ往　二十三ゝの屍と見ず
て來り天使あらわれて彼と生をりと云ると見さりと告　二十四また我儕と偕ゝ
在し者も墓ゝ往さるゝ婦れ言る如ゝて且ゝこゝと見さりき　二十五イエス曰ける
ゝ預言者の凡て言たる事と信ずる心れ遲き愚ある者よ　二十六キリスト[4]ゝ此等
れ難と受て其榮光ゝ入べきゝ非や　二十七故ゝモーセ[5]より凡れ預言者と始すべ
て己聖書に於て己ゝ就てれ事ゝ解明さきたり　二十八彼等ゆく所れ村ゝ近ける
るゝ彼もき過んと爲る狀とあせバ　二十九彼等ゝとめ曰けるゝ日晏きて暮ゝ及
ぬ我儕と偕ゝ止を彼いりて止る　三十共ゝ食ゝ就る時パンゝとり謝して擘ゝ
をらゝ手けゝバ　三十一二人れ者れ目瞭のゝ爲て彼と識り又忽ち其目ゝ見ず爲
り　三十二彼等たがひゝ曰けるゝ途間ゝて我儕と語ゝつゝ聖書と解開ける時ゝこゝ
らが心熱しゝ非ずや　三十三此時のをら起てエルサレム[1]ゝ歸り十一れ弟子ゝおよ
び同ある人れ集り居ゝ遇　三十四言ろれ人等の曰けるゝ主實ゝ甦りシモン[6]ゝ現ゝこ
さり　三十五二人れ者も途間ゝて所遇とパンと擘さまへるゝ因て識たる事と語
をり　三十六此事と語る時イエス[2]自ら其中ゝ立て曰けるゝ爾曹安うをゝ
ら駭怕惟て見とみろれ者と靈あらんと意り　三十七イエス曰けるゝ爾曹何ゞ
駭くや何ゞ心ゝ疑ひ起るや　三十八我手ゝこゝが足と見て我あると知こゝをと摸て視
よ靈ゝ我ゝ在と爾曹が見ごとく肉と骨ゝ有ざる也　三十九如此いひて其手足と
示せしゝ　四十彼等喜べども猶信ぜず異める時ゝイエス此ゝ食物ある乎と曰
けゝバ　四十一炙さる魚と蜜房と予ふ　四十二之と取て其前ゝ食せり　四十三ま
けるゆモーセ[5]れ例預言者れ書また詩れ篇ゝ錄さをさる我事ゝつく凡れ言
れ必らず應べ在しと我語をる所あり　四十四是ゝ於て聖

書と悟せんとて其聰と啓沉四九日けるは已に斯錄されたり如此キリストは
苦難をうけ第三日ゐ死より甦るべし四七又ろれ名ゐ託て悔改と赦罪はエル
サレムより始まり萬國の民ゐ宣傳らるべきを四八爾曹ハ此等れ事れ證人あり我
父が父の督のものと爾曹ゐ遣らん爾曹上より權と授らるまで迫れエルサレ
ムゐ留まイエス彼等と導沉ベタニヤゐ至り手と擧て彼等と祝す五一祝す
る時のをらと離を天ゐ昇らをたり五二彼等みをと拜して甚く喜びエルサレ
ムゐ歸り五三恒ゐ殿ゐ入て神と頌美まさ祝謝せりアーメン

新約全書路加傳終

約翰傳福音書

第一章　太初ゐ道あり道ハ神と偕ゐゐ道ハ即ち神あり二ゐの道と太初ゐ神
と偕ゐ在き三萬物ゐれゐ由て造らる造をたる者ゐ一ゐとしてこゐ由らで造
らをーハ無四之ゐ生あり此生ハ人の光あり五光ハ暗ゐ照り暗ハ之と曉ら
ざりき六偖こゝゐ神れ遣し給へる一ハネと云る者あり七その來りーハ
證の爲あり即ち光ゐ就て證と作そべての人の爲なり八彼ハ光ゐ非ず光ゐ就て證と
照す眞れ光は世ゐ來をり九ゐを世ゐ造をさるゐ世みをと識ず十ゐを己れ國ゐ來しゐ其民ゐを接ざりき十一彼と接ろれ名と信ぜし者
ゐ之ゐ權と賜ひて此と神れ子と爲り十二斯る人ハ血脈ゐ由ゐ非ず情慾ゐ由ゐ非ず
人れ意ゐ由ゐ非ず唯神ゐ由て生をし也十三ゐを道肉體と成て我儕の間ゐ寄
をり我儕ろの榮と見ゐ寶ゐ父の生たまへる獨子の榮ゐーて恩寵と眞理ゐ
て充り○十五ヨハネ之が證と作て呼いひけるハ我さきゐ我ゐ後を來らん者

い我より優る者あり蓋我より先ゐ在ー者あをゞ也と言しは此人あり
我儕みな彼ゐ充滿たる其中より受て恩寵ゐ恩寵と加らる　十七 律法いモーセゐ由
て傳り恩寵と眞理いイエスキリストゐ由て來りき　十八 未だ神と見し人あらず
惟うと給へる獨子そないち父の懷ゐ在者のみ之と彰せり○　十九 ユダヤ人祭
司とレビ人とエルサレムよりヨハヂの所ゐ遣し爾い誰ぞと問しめける
とき暗せるみと左れ如し　二十 のを諫そ所あく言顯ーて我いキリストゐ非ず
と明のゐ曰り　二十一 また問けると然ら爾い誰ケエリヤあるの否と答ふ又あん
ちい彼の預言者ある乎と問しゐ然らずと答たり　二十二 是ゐ於て彼等また問け
るは爾い誰あるの我儕が答と爲得るやう我儕ゐ告よ爾
みごのら如何ゐ謂や　二十三 ヨハヂ曰けるい我いイザヤの言るが如し
る人、ゝ聲あり預言者イザヤの言るが如しろれ遣さたる人々いパリサ
イの人ありき　二十四 彼等また　二十五 ヨハヂよ問て曰けるい然ゞ爾いキリストゐ非ず
エリヤゐ非ず彼の預言者ゐも非ず忠て何ケバプテスマと施すや　二十六 ヨハヂ

答いひけるい我い水と以てバプテスマと授く然と爾曹が知ざる所れもの
一人あんぢらの中ゐ立り　二十七 我よ後を來りて我に優きる者とい是あり我い
其履の紐と解ゐも足ざる者あり　二十八 此事いヨハヂのバプテスマと施しヨ
ルダンゝ外あるベタニヤゐて有しー也○　二十九 明日ヨハヂイエスゝ己ゐ來ると
見て曰けるい世ゝ罪と任ふ神の羔と覩よ　三十 我ゐ後を來らん者い我より優
れる者あり蓋我より以前ゐ在し者あをゞ也と我言あい此人あり　三十一 已れ素
より此人と識ず然と我來て水ゐてバプテスマと施すい彼とイスラエルゝ
民ゐ顯さんが爲あり　三十二 ヨハヂまた證して曰けるいゐを靈れ鴿れ如く天よ
り降りて其上ゐ止るを見たり　三十三 我い彼と識ざりき我と遣し水ゐてバプ
テスマと施さしめし者ゐ是ゐ曰けるい爾靈くだりて其上ゐ止ると見ん彼
と聖靈と以てバプテスマとなす者あり　三十四 我こをと見て其神の子たると證
せり　三十五 明日またヨハヂ二人ゝ弟子と偕ゐ立　三十六 イエスゝ行と見て神れ羔と
覩よと曰　如此いへると弟子聞てイエスゐ從ひ往り　三十七 イエス彼等の從へ

るを回顧て爾曹なんぢら何を求むるやと彼等に問ふたへてラビ何處に住るやと曰ラビとは譯れば師と云ふ義なり 三九 イエス彼等に來り觀よと曰たまひければ遂に往て其住り給ふ處を見て是日とも住り時は蓋し四時ばかりなりき 四〇 ヨハネ其言を聞てイエスに從へる二人の者の一人はシモンペテロの兄弟アンデレなり 四一 彼先づ己の兄弟シモンに遇て曰けるは我儕メッシヤに遇りとて 四二 即ち彼をイエスに携往しかばイエス視て之に曰けるは爾はヨナの子シモンなり爾はケパと稱らるべしケパとは譯ばペテロなり 四三 明日イエスがガリラヤに往んとして ピリポに遇ひ之に從へと曰り 四四 ピリポはベツサイダと云る我が邑の人なり 四五 ピリポナタナエルに遇て曰けるは我儕律法の中にモーセが載たるところ預言者等の記しゝ所の者に遇り即ちヨセフの子ナザレのイエスなり 四六 ナタナエル曰けるはナザレより何れ善者いでん乎ピリポ彼に曰けるは來て觀よ 四七 イエスはナタナエルの己が所に來るを見らるゝと指て曰けるは視よ眞のイスラエル人にして其心詭譎あらざる者なり 四八 ナタナエルイエスに曰けるは何如にして我を知たまふ乎イエス之に答て曰けるはピリポが爾を召ざる先に無花果樹の下に爾の居るを見たりと 四九 ナタナエル答て曰けるはラビ爾は神の子なり爾はイスラエルの王なり 五〇 イエス答て曰けるは無花果樹の下に居るを我見しと言るが因て爾信ずるか此よりも大なる事を爾らるべし 五一 又いひけるは我まことまことに爾曹に實に爾曹に告ん天ひらけて神の使等人の子の上に上り陟降するを見ん

第二章

三日にガリラヤのカナにて婚筵ありしがイエスの母も此に居り 二 イエスと其弟子も婚筵に請る 三 葡萄酒竭ければ母イエスに曰けるは彼等に葡萄酒なし 四 イエス彼に曰けるは婦よ爾と我と何の與あらんや我時は未だ至ず 五 母僕等に向て彼が爾曹に命る所は何事にても行よと曰おけり 六 茲にユダヤ人の潔むる例に從ひて四五斗盛る石甕六のしまおに備りしがイエス僕等に水を甕に滿せよと曰けるに彼等口まで滿せたり 八 又彼に今掬取

て持ゆき筵と司る者ゐ與せと曰けをバ彼等已させり　九筵と司る者酒ゐ變し水と嘗て其何處より來しと知ず然も水と挹し僕い知り　十筵と司る者新郎と呼て彼ゐ曰けるい凡ろ人いやまづ旨酒を進し酒醺あるゐ及て魯酒と進ふ爾い旨酒と今まで留れけり　十一此事とイエスがガリラヤれカナゐて行る い休徴れ始ゐして其榮と顯せり弟子のをと信ず○　十二此後イエスろれ母兄弟おゐび弟子等カペナウンゐ下り其處ゐ居ゐと久あらずして　十三ユダヤ人れ逾越節ちのつきけをバイエスエルサレムゐ上り　十四殿ゐて牛羊鴿と貿者と兌銀そる者れ坐せるをと見　十五繩ともて輦とつくり彼等おゐび羊牛と殿より逐出ー兌銀する者れ金と散し其案と倒し　十六鴿と賣者ゐ曰けるい此物と取て往ロごの父の室と貿易の家とそる勿を　十七弟子等あんぢれ室れ爲ゐ熱心ロをと蝕んと錄さをたるを憶起せり　十八此ゐユダヤ人ゐさへてイエスよ曰けるい爾ゐをられ事と爲うらよれ我儕よ何の休徴と示るや　十九イエス答て爾曹みの殿と毀て我三日ゐて之と建んと曰けをを　二十ユダヤ人いひける

い此殿と建るゐい四十六年と經ーゐ爾三日ゐて之と建るゐ　二イエスの如此いへるい其身の殿と指るなり　三死より甦り給へる後弟子たちイエスの此事と語しと憶起し聖書と彼の曰ー言と信ぜり　三偖イエス逾越節ゐエルサレムゐ在ーゐ多れ人のれ行しサンムゐ在ーゐ多れ人のれ行しと彼等に托ず蓋すべてれ人と知　二五また人れ心れ中と知ゐ故ゐ人ゐつゐて證と立る者と求ざをバ也

第三章

一ユダヤ人れ宰ゐてパリサイれニコデモと云る人あり　二ゐを夜イエスゐ來て曰けるいラビ我儕あんぢい神より來ー師ありと知ろい神もー人ゐ爲ゐすを爾が行るゐれ休徴い人こをと行ゐと能ざをバ也　三イエス答て曰けるい誠ゐ實ゐ爾ゐ告ん人もーダモ彼ゐ曰けるい人はや老ぬをを如何で復生るゝ事と得んや再び母れ腹ゐ入て生る可んや　四イエス答けるい誠ゐ實ゐ爾ゐ告ん人い水と靈とゐ由て生ざをバ神れ國ゐ入ゐと能ざる也　五肉ゐ由て生るゝ者い肉あり靈ゐ由

て生るゝ者ハ靈あり　七我あんちほ新ゟ生るべき事ゟ言ー
と奇と爲あゝを
八風い己ゟ任に吹あんち其聲と聞ども何處より來り何處へ往と知ず凡て
靈ゟ由て生るゝ者も此れ如し　九ニコデモ答て如何て此事あらん乎と曰イ
エス答て曰けるい爾と　イスラエル れ師あるゟ猶ゟ此事と知ざる乎　十誠ゟ
實ゟ爾ゟ告ん我儕知し事をいひ見し事と證そるゟ爾い我儕れ證と受ず　十一
若已を地れ事と言ゟ爾信ぜずバ況て天れ事と言んゟい何で信するゟとと
爲んや　十二天より降り天ゟとる人れ子れ外ゟ天ゟ升し者あし　十三モーセ野ゟ
蛇と擧し如く人れ子も擧らるべし　十四凡て之と信する者ゟ亡るゟと無ー
永生と受しめんゟ爲あり　十五そを神いろれ生たまへる獨子と賜ほどゟ世
れ人と愛ー給へり此と凡て彼と信する者ゟ亡ること無ーて永生と受し
めんゟ爲ふり　十六神れ其子と世ゟ遣ー給へるい世れ罪と定んとゟ非ず彼ゟ
由て世と救んゟ爲あり　十七彼と信する者い罪ゟ定らをず信ぜさる者い既よ
り其罪さだまをり蓋神れ生たまへる獨子れ名と信ぜざるゟ因ゟ十八罪れ定る所
以い光世ゟ臨ー給ふ人ろれ行れ惡ゟ光と愛せず反て暗と愛すをゟ也　十九
凡て惡とるゟ者い光と惡と其行と責らをざらんゟ爲ゟ光ゟ就らず　二十眞理と
行ふ者い其行の顯をんが爲ゟ光ゟ就る蓋神ゟ遵て行へゟ也○　二十一此後イエ
ス弟子とユダヤれ地ゟ至り偕ゟ彼處ゟ留りてバプテスマと施す　二十二ヨハ子
も亦サリムゟ近きアイノンゟ在てバプテスマと施す彼處い水ゟゝきが故
ゟる人々來りてバプテスマと受たり　二十三此時ヨハ子い未だ獄ゟ入らをざり
き　二十四ヨハ子れ弟子とユダヤ人と潔事ゟ就て爭辨ありけるが　二十五彼等ヨハ子
ゟ來りて曰けるハラビ視よ爾と偕ゟヨルダンれ外ゟ在て爾が證せー者バ
プテスマと施すゟ習のをゟ來るり　二十六ヨハ子答て曰けるい人い天より賜ふ
ゟ非ざをを受るゟと能ざる也　二十七我いキリストゟ非ず惟それ先ゟ遣さをー
者なりと言ー事を證そる者い爾曹あり　二十八新婦ともてる者い新郎なり新郎
れ友たちて其聲と聞をゝ緣て喜び多ー我いま此喜び滿るゟとと得たり
二十九彼い必ず盛んゟあり我い必ず衰ふべー　三十天上より來る者ゟ萬物ゟ上ゟ

あり地より出る者は地より出れば事みな天より來る者は萬物の上に在　三彼は自ら其見しまた聞しことを證すれども誰も其證を受ることなし　三三受し者は神の眞なることを印せり　三四神の遣し給へる者は神の言を語る蓋神は聖靈を賜ひて限量なくこれを與給ふ　三五父は子を愛して萬物を其手に授たり　三六子を信ずる者は永生の命を得子に從はざる者は生命を見ず神の怒その上に留らん

第四節　三主おのれの弟子を收ることと又バプテスマを施せることをパリサイ人の聞しと知給へり　二然ど其實はイエス自らバプテスマを施せるにあらず弟子ども施せるなり　三其時ユダヤを去て復ガリラヤに往給ふ　四サマリアを經ずして行ゆくに能ず　五遂にサマリアにスカルと云る邑に至りこの邑はヤコブの子ヨセフに與しところの地に近し　六此にヤコブの井ありイエス行途れ疲倦て其井の傍に坐せり時は晝の十二時ごろなりき　七一人のサマリアの婦水を汲んとて來りければイエスこれに婦よ水を飲せよと

曰ふ　八蓋弟子たち食物を買んために邑へ往て在ざりし故なり　九サマリアの婦いひけるは爾ユダヤ人にして何ぞサマリアの婦なる我に飲まとを求るや此はユダヤ人とサマリアの人とは交際を爲ざればなり　十イエス答て曰けるは爾もし神の賜と我に飲せよといふ者は誰なるを知ば爾われに求めんまた活水を爾に予ふべし　十一婦イエスに曰けるは主よ汲器なく井も亦深し爾何處より活水を有るのか　十二こは井を我儕に與し先祖ヤコブの子し所にて彼も其子も亦畜も飲たり爾は彼よりも勝をし者あらんや　十三イエス答て曰けるは凡て此水を飲者は又渴ん　十四然ど我あたふる水を飲者は永遠の至るまで渴ことなし且我が與る水は其中にて泉となり湧出て永生に至るべし　十五婦いひけるは主よ我が渴ことなく亦ここに汲に來らぬ爲ろの水を我に予へよ　十六イエス曰けるは爾ゆきて夫を呼來れ　十七婦答へたへて曰けるは我に夫あしとイエス曰けるは夫あしと言るは理あり　十八蓋爾に五人の夫ありて今あるは爾の夫に非ず爾は言しは眞あり　十九婦

いひけるゐ主よ我ゐんぢを預言者と知り　一九我儕は列祖ゐ此山ゐて拜しゝぜよ唯ゐ此山はみゐ非ず亦エルサレムゝありと曰　二一イエス曰けるゐ婦よ我を信き時きたらん　三一爾曹は拜ゐる者と爾曹ゐ知ず我儕は拜ゐる者と我儕ゐ知ろゐ救ゐユダヤ人より出るゐ故ゐ　二二眞れ拜ずる者靈と眞と以て父を拜ゐる時きさらん今ゐれ時ゐあり夫父ゐ是れ如く拜ゐる者を要め給ふ　二三神ゐ靈ゐをゐ拜する者もまさ靈と眞とをもて之を拜すべき也　二四婦いひけるゐキリストと稱るメッシヤれ來らん事を知ゐを來らん時凡れ事を我儕ゐ告ん　二五イエス曰けるゐ爾を語ると奇みけれど其何を求るや又ゐ故ゐみきと語ゐるを問る者も無り　二六婦ゐれ水瓶を遺して邑ゐゆき人々ゐ曰けるゐ我そべて行し事を我ゐ告し人を來りて觀よ此ゐキリストゐらず乎　二七是ゐ於て人々邑を出てイエスの所ゐ來る　三一ゐれ間ゐ弟子かれゐ請てラビ食し給へと曰けるゐ

二二イエス彼等ゐ曰けるゐ我ゐ爾曹の知ざる食物ゐあり　三三弟子さゞひゐ曰けるゐ食物を彼ゐ儉し者を誰ゐある乎　三四イエス彼等ゐ曰けるを我を遣しゝ者れ旨ゐ遵ひ其工を成畢る是ゐ糧ゐある　三五なんぢら穫時ゐあるゐあゐ猶四ケ月ありと云ずや我ゐんぢらゐ告ん目を舉て觀よ田ゐ熟て穫時ゐあるを　三六穫者ゐ其工錢を受て永生ゐ至るべき實を積む播者と穫者と同ゐ喜ばん　三七彼ゐ播ゐを穫ゐを云るゐ之ゐ就て眞ゐあり　三八我ゐんぢられ勞せざりし所を穫せんとして他れ人々勞せしゐより爾曹ゐ其勞しさる果を受さり　三九ゐの婦ゐが行し凡れ事を彼ゐをゐ告しと證せし言ゐ因て其邑のサマリア人ゐほくイエスを信ぜり　四〇是ゐ於てサマリア人イエスれ所ゐ來りて偕ゐ留り給ん事を求しゐパイエス此ゐ二日留給り　四一彼の言ゐ因て信ぜし者前よりも多ゐり　四二ゐをら婦ゐ曰けるゐ今ゐんぢれ言し事ゐ因て信ずるゐ非ず我儕ゐをゐ聞て此ゐ誠ゐ世れ救主を知さをゐ也ゐ　四三二日をゐてイエス此を去ガリラヤゐ往り　四四蓋ゐを自ら預言者

い本土ゟて登ばるゝ事あしと言ゝゟ
人々彼と接たり蓋さきゟ節續れ時イ
と彼等もろ乃節續ゟ往てゝと見たゞ也イエス復ガリラヤれカナゟ至
る此い襲ゟ水ゟ酒ゟ爲ゝ處ゟり時ゟ王れ大臣ろの子病ゟ係てカペナウン
ゟ在けるゟ　イエスれユダヤよりガリラヤゟ來るゟ聞れ
の所ゟ往てカペナウンゟ下り其子ゟ醫ゝ給んゟと請ずろい瀕死ゟり
けるゟ也　イエス彼ゟ曰けるい爾嘗休徴と異能と見ずゟ信ぜと　彼曰け
るい主よ我子れ死ざる先ゟ下り給へ　イエス曰けるい往ゟんぢれ子い生
るゟり其人イエスれ曰ゝ言と信じて去ぬ　下る時それ僕等ゟ
けるい爾れ子い生るゟり　彼それ愈はじめゝ時と彼等ゟ問けるゟ答て昨
日れ遑れ一時ゟ熱さめたりと曰　父ゟイエスれ爾ダ子い生る也と言たま
ひし時と其時れ同きゟとと知て己と并全家ゟと〳〵く皆信ぜり　斯れ第
二れ奇跡とイエスユダヤよりガリラヤゟ至て行るゟり

第五章　厥後ユダヤ人の節續ゟりけるゟ
サレムの羊門れ邊ゟへブルの方言ゟてベテスダといふ池ゟり此池ゟ五れ廊
ゟりろの中ゟ病者瞽者跛者ゟさ褒たる者ゟゟ多く臥ゟて水れ動
ゟそい天の使時々池ゟ下て水と動すことゟり水れ動るのち先ち
志者い何れ病ゟよら寸愈たり　三十八年病たる者一人ゟしゟ在イエ
ス彼が臥とるを見て其病れ久と知ゟ
る者ゟゟへけるい主よ水れ動るとき我と扶て池ゟ入る人ゟし我いらんと
そる時い他れ人くだりて我より先ゟ入　イエス彼ゟ曰けるい起よ床と取
收て行めゝろれ人立刻ゟ愈そゟはち床と取收て行めり此日い安息日なり
きユダヤ人いゝし者ゟ曰けるい今日は安息日ゟをゞ爾床と取收い宜の
らず　彼等ゟ答けるい我と愈志ゟ者ゟれゟとこと取收て行めと言り　か
をら問けるい爾に牀と取收て行めと言し人ゟ誰ゟるや　愈し者ろれ誰
ゟると知ざりき蓋のしゟ多れ人とりし故イエス避たをゞ也　厥後イエ

一ス殿ホて其人よ退いひけるい視よ爾そてホ愈たり復罪と犯ヲ
ま勿を恐く
は前ホ勝る災禍あんちホ罹ん十五其人ゆきてユダヤ人ホ己と愈志ゝ者いイ
エスありと告是ホ於てユダヤ人イエスと荅追て殺さんと謀る蓋ゐをが
此事と行志い安息日ありけを以也十七イエス彼等ホ答けるい我父と今ホ至
るまで働き給ふ我もまた働くあり十八此ホ因てユダヤ人いよ〳〵イエスと
殺さんと謀るそれ安息日と犯それみあらず神と己が父といひ己と神と齊
そをバあり是故ホイエス彼等ホ答て曰けるい誠ホ實に爾曹ホ告ん子い
父れ行ふ事を見て行ふの外い何事とも行ふあと能ず蓋すべて父れ行ふ事
と子も亦行へバあり二十父い子と愛し凡て己の行ふ所れ事と彼ホ示そ爾曹
として奇ま志めん爲ホあの事等より更ホ大ある事と彼ヨ示さん二ろは父
れ死ー者と甦らせて生志むるごの如く子も己の意ホ從ひて人と生ーむべし
二ろを父は誰とも鞫ず審判は凡て子ヨ委さり二三是そべての人とあて父と
敬ふ如く子とも敬と志めんご爲ホあり子と敬ざる者い之と遣志ゝ父と敬

はず二四誠ホ實に爾曹ホ告ん我言と我と遣志ゝ者と信する者い永生
と有ごの審判ホ至ちず死より生ホ遷れり二五誠ホ實に爾曹ヨ告ん死ー者神
れ子の聲と聞とき來ちん今ろれ時ホあをり之と聞求い生べー二六ろは父れ
自ら生と有り其如く子ホも賜て自ら生と有たせさり二七また人れ子さるホ
因て之ホ審判するれ權威と賜へり二八之と奇ま爲ホと勿ろれ墓ホ在者をあ
其聲と聞て出るとき來んごすをを也二九善事を行ー者い生と得ホ難り惡事
と行ホ者い罪と得ホ陞るべし三十是ヨ何事とも自ら行ふあと能ず聞ゝまゝろ
ホ遵ひて審判す我審判い公平ろはヨ我わが意と行ふとと求ず我と遣志ゝ父
れ意と行ふホとと求ををり三一もー我事と我みづから證せバ我證は眞あ
らず三二別ホ我事と證する者あり我ろの我事と證する證れ眞あると知あ
んちら我ホ人とロハヲホ遣志ゝよ彼眞理れ爲ホ證と作り三四然ゃ是人の
證と受ず此事と言い爾曹れ救をん爲あり三五ロハヲは燃て光をる燈あり
爾曹みれえて暫く其光と喜べり三六我はロハヲより大ある證あり蓋父の我

お賜て成遂しむる事するおばち我行ふ所れ事い是父の我を遣しゝおとを證
すれをあり　三七　且ひをと遣ゐゝ父も我みとと證せり爾曹いまだ其聲を聞ず
未だ其形を見ず　三八　その道は爾曹れ心お存ざりき蓋ゐんぢら其遣ゐゝ者を
信ぜざるお因て知るゝ也　三九　あんぢら聖書お永生ありと意て之を探索こ
れ聖書と我おついて證する者あり　四十　爾曹ひが所お生を得んがさめ來るを
欲ず　四一　ひを人の榮を受ず　四二　わを爾曹と知ふんぢらい其心お神を愛そるれ
愛あらざる也　四三　我い吾父の名お靠て來ゐお爾曹ひをと接ずもし他れ人お
のが名お靠て來ゐ爾曹い互お人れ榮を受て神より出る
榮を求ざる者あるお何で能信ずるおと　四四　爾曹を父お訴る者と我
と意ふ勿を爾曹と訴るもの一人あり即ち爾曹ご侍ところれモーセあり　四五　四六
若モーセを信ぜば我を信ずべし蓋モーセ我事を書さをばあり　四七　若モーセ
れ書ざゝ言を信ぜずば何で我言しみとを信ぜん

第六章　此後イエスがリヤれ湖すあいちテベリアれ湖れ前岸へ渡しお　一　許

多れ人々おをお隨ふ蓋かをご病し者お行し休徴を見ーが故あり　二　イエス
山お上り弟子と偕お其處お坐せり　三　時ユダヤ人の踰越れ節お過し　四　イエ
スㇾ目を擧て多の人れ來をるを見てピリポお曰けるい何處よりパンを市て
彼等お食しむ可ぞ　五　自ら其爲んとをる也　六　ピリポ答けるい銀二百のパンも人おとお少づゝ予てあほ足ざるべ
し　七　弟子れ一人即ちシモンペテロれ兄弟アンデレイエスお曰けるい
此お一人の童子あり麰麥のパン五と小き魚二を有り然ごあれ許多れ人お
如何そべき予　八　イエス曰けるい人々を坐せよ其處お多の草あり約ろ五千
人はを坐ぬ　九　イエスパンをとり祝謝て弟子お予へ弟子おを坐ー人お予
ふ又此れ如おゝて小き魚をも人々れ欲お隨ひて彼等お與ざり　十　十一　おの飽た
る後イエス弟子お曰けるい少も廢いざるやうお其餘れ屑を拾集めよ　十二　彼等
が食せし彼五の麰麥れパンれ餘遺れ屑を拾集けをば十二れ筐お盈り　十三　人
々イエスれ行し奇跡を見て此い誠お世お臨るべき預言者ありと曰　十四　是お

投てイエス彼等の來り己と執て王と爲んとそるを知たゞび山に入たり　日れ暮るあろ
て弟子海に下て　舟に登カペナウムに向
て海を渡る既に暮けをもイエス
きいだせり　一里十町をあり漕出せる時イエスの海を行き舟に近くと見
て弟子さち懼たり　イエス曰ける
びて彼とうけ舟に登ければ直に其往んとする所の地に着ぬ○　明日あ
たれ海岸に立し人々昨日弟子れ登
偕よ舟に登す弟子れみ往ると知
りて人々あパンと食しゝ所の近に
在さるを見て彼等も舟に登イエスを尋ん爲にカペナウムに至を
前岸にて彼に遇いひけるラビ何時に來り給ひし乎　イエス答て曰
けるい誠よ實に爾曹に告ん爾曹れ我を尋るい休徴を見しに故よ非たゞパン
を食して飽たるに故あり　あんちら壞る糧の爲に勞くべし蓋父の神のに印して經す
き也　是に因て人々イエスに曰け
爲べき乎　イエス答て彼等に曰けるい神の遣しゝ者を信するは即ち其工に
あり　彼等いひけるい我儕と志て爾を信ぜもむる爲よ何れ休徴と爲して
我儕に示るや何れ工を行ふや　我儕れ先祖野にてマナと食へり錄して天
よりパンと彼等に賜へて食しむと有が如し　イエス曰けるい誠に誠に實に爾
曹に告ん天よりのパンと爾曹に賜し者にモーセに非ず今父が父い天より眞
れパンをもて爾曹に賜ふ　神れパンは天より降りて生命と世に賜るもの
也　彼等いひけるい主よ恆に其パンと我儕に予よ　イエス曰けるい我
い生命れパンあり我に就る者も餓ず我を信する者い恆に渇ざるあし
然ども我あんぢらが我と見ても信ぜざる事と爾曹に告たりき　凡て父れ我
に賜し者い我に就らん我に就る者いは我のあらずと棄ず　且お天より降
しい己れ意れ任と行んん爲に非ず我と遣しゝ者れ意はまゝと行んん爲あ

り　三九凡て父れ我ゟ賜し者を一ツをも失ハず末日ゟ之を甦らすハ即ち我
と遣しゝ父れ意あり　四十凡ろ子と見て之と信ずる者ハ永生と得且我ゟ之を復ゟ
と求れ日ゟ甦らすべし是且之と遣しゝ者れ意あるなり　四一是ゟ於てユダヤ
人等イエスれ我ハ天より降しパンなりと言ーことゟつき　四二譏いひけるハ
彼が父母ハ我倂れ識とゟろあらずや即ち彼ヱヨセフの子イエスゟ非ずや然
るゟ何ぞ我ハ天より降ーと言や　四三イエス答て曰けるハ爾曹さがひゟ譏ゟ
と勿れ　四四我と遣しゝ父もし引ざるなバ人よく我ゟ就るなし我ゟ就ル者ハ末
日ゟ我ゟ之と甦らすべし　四五預言者れ書ゟ人ミゟ教と神ゟ受んと錄をたり
り是故ゟ凡て父より聽て學し者ハ我ゟ就る　四六然ゟ父と見し者ハゟし惟神
より來る者れみ之と見たり　四七誠ゟ實ゟ我ゟんちらゟ告ん我と信ずる者ハ
永生あり　四八我ハ生命れパンあり　四九爾曹れ先祖ハ野ゟてマナと食しゟ
死り　五十凡て食者と一て死ざらしむる者ハ天より降るパンあり　五一我ハ天
より降し生るパンあり若人これパンと食ハゞ窮ゟく生べし我ゟ與ふるパ

ンハ我肉あり世れ生命れ爲ゟ我ゟ賜へん　五二爰ゟユダヤ人さがひゟ爭
ひ曰けるハ此人いかで其肉と我倂ゟ賜て食はしむる事と得ん乎　五三イエス
曰けるハ誠ゟ實ゟ爾曹ゟ告ん若し人れ子れ肉と食ず其血と飲ざるなバ爾曹
ゟ生命あー　五四ゟ肉と食ふ者ハ永生あり我末れ日ゟ之と甦らすべし　五五夫わが肉ハ誠れ食物まさ我
血と飲者ハ我よとり我も亦かをゟ居　五六如く我を食ふ者も我ゟ由て生べし　五七生る父ゟと遣を父ゟ由て我生る
祖が食さをゟ尚死しマナれ如きもれゟ非ず此パンと食ふ者ハ窮ゟく生べ
し　五八此等れ事ハイエスカペナウンれ會堂ゟて教と爲るとき言し所なり　五九
弟子等れうち多れ人これを聞て曰けるハ此ハ甚しき言あり誰か能ゟをと
聽んや　六十弟子れ此言よ何いて譏とイエス自ら知て彼等ゟ曰けるハ此言ゟ
因て躓く乎　六一もし人れ子の故れ處ゟ升と見ゟ如何　六二生命と賜る者ハ靈あ
り肉ハ益あし我ゟんちらよ曰し言と靈あり生命なり　六三然ゞ爾曹れ中ゟ

信ぜざる者あり夫イエスは如此いへるは信ぜざる者は誰なのぎと資そ者は誰といふ事と元始より知べあり　イエス曰けるは是故ぉ我さき
ぉ我父あたへざるべ人よく我ぉ就るぁしと言ーあり　此後うれ弟子かは
く返往てイエスと偕ぉ行のざりき之ぉ因てイエス十二れ弟子ぉ曰けるは
爾曹も亦去んと慾ふや　シモンペテロ答けるは主よ我儕は誰ぉ往んや永
生れ言と有る者は爾あり　又忍れら信と知ぁんちは活る神の子キリスト
あり　イエス彼等ぉ答けるは我あんちら十二人と簡ーぉ非ずや然ど其中
れ一人は惡魔あり　此はシモンれ子イスカリオテれユダと指て言るあり
彼は十二れ一人にしてイエスと資さんとする者あり

第七節　斯事の後イエスがリヤと經行りユダヤの中と巡るみとを欲ざり
き蓋ユダヤ人のとと殺さんと謀をべ也　二　時に於てイエスの兄弟のをぉ曰けるとは爾れ行ふ所れ事と弟子等ぉ見せ
んが爲みよと去てユダヤぉ往　三　其れ己と顯さんとーて惡ぉ事とぁる者ぁら
ず爾ぁれら此事と行とと己と世ぉ顯せよ　四　是ろれ兄弟もぁ依彼と信ぜざ
るの故あり　五　イエス彼等ぉ曰けるは我時いまだ至ず爾曹れ時と恒ぉ備れ
り　六　世は爾曹と惡こと能ず我と惡それ彼等が行ふ所れ惡ーと我證そをと
あり　七　爾曹ぁれ節ぉ上よ我時いまだ至らざるべ我いまだ此節ぉ上らと　八　如
此いひてガリラヤよ留をり　九　されど兄弟れ往し後イエスも昭然ならずーて隱
ぉ節ぉ上る　十　節れ時ユダヤ人イエスと尋て曰けるは彼何處ぁ在や　十一　衆多れ
中ぁて彼ぉ訶き各樣はぁとと言爭へり或人と彼と善人ありといひ或人は
否民と惑す者ありと曰　十二　然ども十三　人ぁし○節篇北半ごろイエス殿よ上りて教誨けをべ　十四　ユダヤ人みをと
奇み曰けるは此人は未だ學べず如何ーて書と識や　十五　イエス彼等ぉ答て曰
けるは我教る所は我教よ非ず我と遣し〻者の教ぁり　十六　人もし我と遣し〻
者の旨よ從ぇと此教の神より出るか又己よ由て言ぁるかと知べし　十七　己に
由て言者は己の榮と求るぁり己と遣し〻者は榮と求る者は眞ぁり其裏ぁ

不義あー　モーセ爾曹ゟ律法と與ー
ふ非ずや然ゑ爾曹の中ゟ之と守る
者ゟー爾曹なにゆゑ我と殺んと謀るや　二〇 衆人ゟたへて曰ける
さり誰か爾と殺すとと謀らん乎　二一 イエス答て彼等ゟ曰ける
一事と行しゟ爾曹みゟ奇とせり　二二 モーセ爾曹ゟ割禮を授しゟ
しゟ非して先祖より出し者ゟるゆ故ゟり之ゟ因て爾曹割禮と安息日ゟ行
ふ　二三 人もしモーセの律法と破ざらんがため安息日ゟ割禮と受る時ゟ何ぞ
我安息日ゟ人れ全身と愈ー〻事と怒るや　二四 外貌ゟよりて是非と定るなと
勿き義ともて定よ　二五 此時エルサレムれ或人いひける ゟ此ゟ人々の殺んと
謀る者ゟ非ずや　二六 今ゟき明ゟいふ而して之と尤る者ゟし有司等ゟ彼と誡
おキリストゟりと知ゟらん乎　二七 然ゑ我儕は此人れ何處より來しと知もし
キリストれ來らん時は誰も其何處より來るゟ知者ゟるうらん　二八 此時イエス
殿ゟて教とりしゟ大聲ゟ呼いひけるゟ爾曹ゟれと知また我いづこより來
ると知さるゑ我ゟ己ゟ由て來しゟ非ず我と遣しゟ者ゟ眞ゟる者ゟて爾曹

れ知ざる所ゟり　二九 我ゟ彼より出ゟを我と遣しゟ者ゟを
ば也　三〇 是ゟ於て彼等イエスと執へんと謀りゟ然ゑ其時いまだ至ざるが故ゟ
揖手ゟる者ゟかりき　三一 民れ中れほくれ人ゟより多らん乎　パリサイの人民等れ
來らん時ゟれ行とゟろれ休徵ゟの人ゟより多らん乎　三二 パリサイの人民等れ
イエスゟ就て如此ひろのゟ語ゟふと聞そゟれら祭司れ長等とパリサイれ
人と彼を執んとて下吏を遣せり　三三 是ゟ於てイエス曰ける ゟ我ゟは片時ゟ
んぢらと偕ゟり而して後ゟをと遣しゟ者ゟ往ん　三四 あんぢら我と尋るとも
遇べからず我ゟる所へ爾曹きさることを能ざるべし　三五 ユダヤ人相互ゟ曰け
るは我儕れ遇ざらん爲ゟ彼れ何處へ往んとする乎ギリシャれ人と散し者ゟ往
てギリシャれ人と教んとする乎　三六 彼が語て爾曹ゟをと尋るとも遇べからず
又ゟが在所へ爾曹來ることを能ざる可と曰ー言れ何ぞや〇　三七 節遍れ末れ
大日ゟイエス立て呼り曰けるれ人もし渴ゞ我と來て飲　三八 我と信ずる者れ
聖書ゟ錄しゟ如く其腹より活る水川れ如ゟ流出べし　三九 如此いへるれ彼と

信ずる者れ受んとそる靈と指るあんなほ未だ降ざるをばあり　四十民れ中ゐて多れ人ゐれ言と聞て此ゐ誠ゐ彼預言者あるりと曰　或ゐ斯ゐキリストありと曰　四一或ゐ曰ふ　キリストはガリラヤより出べけんや　四二聖書ゐキリストはダヒデの裔ゐてダヒデの住ゐ鄉ベッレヘムより出んと錄ゐるゐ非ずやと曰ふ　四三是ゐ於て民ゐ彼ゐ緣て爭ひ別たり　四四其中ゐ彼と執んとそる者も有けるも措手せし者なかりき　四五下吏ども祭司れ長とパリサイの人等れ所ゐ返けるに來らざる乎　下吏ゐたへて曰けるか未だ斯人れ如く言ふ人ゐあらずパリサイれ人いひけるゐ爾曹も亦惑されしか　四七彼と信ずる者ゐあらんや　四八律法と識ざる此衆れ人ゐ罰をべき者あり　四九ゐれ中れ一人ゐて夜イエスゐ就しニコデモと云る者のをらゐ曰けるゐ、五一非ゐ人ゐ聽ず其行と知ざる先ゐ其罪と定るゐ我儕れ律法ゐちん乎　五二彼等ゐたへて曰けるゐ爾も亦ガリラヤより出しか　爾ゐ考見よ預言者ゐかガリラヤより山ると　五三是ゐ於て各人家ゐ歸りぬ

第八章

イエス橄欖山ゐ往り　二味爽やまた聖殿ゐ入けるが民みゐ彼ゐ來けるとき坐て彼等ゐ敎ふ　三爰ゐ奸淫と爲る時ろのまゝ執らるゝ婦ありけるパリサイの人みをとイエスの所ゐ曳來り群集の中ゐ置云けるゐ　四師よ此婦ゐ奸淫と爲る時ろのまゝ執らるゝ者ゐあり　五此れ如き者ゐ石にて擊殺すべしとモーセ律法の中ゐ命じさり爾いかゞ如何ゐ言や　六如此いへるゐイエスと試て訟の由と引出さんと欲るありイエス身と屈め指ゐて地ゐ畫り　七彼等お切ゐ問ゐよりイエス起て之ゐ曰けるゐ爾曹のうち罪ゐき者まづ彼と石ゐて擊べしと曰ふ　八また身と屈て地ゐ畫り　九彼等ゐ是を聞て其眞心ゐ責られ老者よりはじめ少者まで一々ゐ出往、たゞイエス一人のゐる婦ゐ集れ中ゐ立り　十イエス起て婦ゐ曰けるゐ婦よ爾と訟し者ゐ何處へ往しや爾の罪と定る者ゐあき乎　十一婦いひけるゐ主よ誰もゐしイエス彼ゐ曰けるゐ我も爾の罪と定ず往て再び罪と犯そ勿れ○　十二イエスまた人々ゐ語て曰けるゐ我ゐ世

の光あり我を従ふ者は暗中を行ずして生の光を得るあり　十三是を於てパリサイの人いひけるは爾は自ら己れを證とするなり爾の證は眞ならず　十四イエス答て曰けるは我己れを證すと雖も我證は眞あり蓋己を何處より來り何處へ往と知ばあり爾曹己が何處より來り何處へ往と知ざるあり　十五爾曹は肉よ循て人を判ず我は一人をも判ず　十六我もし判ずるも我判ずる所は眞あり蓋己を獨あるを非ず我と遣し給ふ父と同ゐ在るあり　十七又爾曹の律法にも錄されたり二人の證は眞と爲る者あり　十八己が證と爲る者は我あり我と遣し給ふ父も亦己が證あり　十九彼等いひけるは爾の父は何處ぞイエス答けるは爾曹は我をも我父をも識ざるなり若し我をと識さるあらば我父をも識たるならん　二十此等の言はイエス殿の内にて語けるも人一人も捕へざりき是時いまだ至ざればなり　二十一イエス復いひけるは我ゆくあり爾曹は我を尋ん爾曹は己が罪ゐに死ん我ゆく所へは爾曹きたるあたはざるあり　二十二之ゆゑにユダヤ人いひけるは我ゆく所へ爾曹きたるあたはざると言るは己を殺さんとするにあらんか　二十三イエス彼等ゐ曰けるは爾曹は下より出し者なり我は上より出し者なり爾曹は此世より出し者なり我は此世より出し者にあらず　二十四是故ゐ爾曹己が罪ゐに死ん我は爾曹ゐ曰しが如く爾曹もし我は彼あるを信ぜずば己が罪に死ん　二十五彼等いひけるは爾は誰ぞイエス彼等ゐ曰けるは爾曹と言し始より我は何事ぞや　二十六我爾曹ゐ告る所は多端あり我を遣し給ふ者は眞あり我は彼ゐ聞し事を我世ゐ告ん　二十七彼等は父ゐ指て言るゐを知ざりき　二十八是故ゐイエス彼等ゐ曰けるは爾曹人の子を舉しの後我は彼あると知ん又我己れ事を行ず惟己が父れ我ゐ教ゆるが如く此等の事を言ると知べし　二十九我と遣し給ふ者は我と同ゐあり父我を獨遣たまはず蓋己を恒ゐ彼れ心ゐ適ふ事を行へばなり　三十イエス此事を言るとき多れ人のと信ぜり　三十一イエス己と信ぜしユダヤ人ゐ曰けるは爾曹もし我道ゐ居が眞ゐ我弟子あり　三十二なんぢ眞理を識ん眞理は爾曹ゐ自由を得さそべし　三十三彼等みたへけるは我儕はアブラハムの裔なり未だ人れ奴隷と爲しことあら

能ずと言り　三十四イエス彼等ゐ曰けるは爾曹と下より出し者は罪の上より出ゐんぢらに此世より出し者にあらず　二十四是故ゐ爾曹己れ罪ゐに死ん我は此世より出し者にあらず　二十五是故ゐ爾曹もし我は彼あるを信ぜずば己れ罪ゐに死ん　二十五彼等いひけるは爾は誰ぞイエス彼等ゐ曰けるは我ゐんぢらゐ就て語る所あり　二十六我爾曹ゐ告る所は多端あり我を遣し給ふ者は眞あり我は彼ゐ聞し事を我世ゐ告ん　二十七彼等は父ゐ指て言るゐを知ざりき　二十八是故ゐイエス彼等ゐ曰けるは爾曹人の子を舉しの後我は彼あると知ん又我己れ事を行ず惟己が父れ我ゐ教ゆるが如く此等の事を言ると知べし　二十九我と遣し給ふ者は我と同ゐあり父我を獨遣たまはず蓋己を恒ゐ彼れ心ゐ適ふ事を行へばなり　三十イエス此事を言るとき多れ人のと信ぜり　三十一イエス己と信ぜしユダヤ人ゐ曰けるは爾曹もし我道ゐ居が眞ゐ我弟子あり　三十二なんぢ眞理を識ん眞理は爾曹ゐ自由を得さそべし　三十三彼等みたへけるは我儕はアブラハムの裔なり未だ人れ奴隷と爲しことあら

爾曹ゐ自由と得さすべーと爾れ言しーい如何ある事ぞ 三四 イエス彼等ゐ曰けるい誠ゐ實ゐ爾曹ゐ告ん凡て惡と行ふ者い惡れ奴隸ゐり 三五 奴隸い恒ゐ家ゐ居す子い恒ゐ居 三六 是故ゐ子もし爾曹ゐ自由と賜あバ爾曹確ゐ自由と得べし 三七 我あんぢらがアブラハムれ裔あると知されども我と殺さんと謀る蓋わが道あんぢられ裏ゐ在ざるを也 三八 我い吾父と偕ゐ在て見しーみとと言あんぢらい爾曹れ父と偕ゐ在て見しみとと行ふ 三九 彼等あたへてイエスゐ曰けるい我儕れ父いアブラハムなりイエス曰けるい爾曹もーアブラハムれ子あらバアブラハムれ行とおみあふべし 四〇 然るゐ今あんぢられ神ゐ聞れ子あらバアブラハムれ行ゐ非ず 四一 爾曹い爾曹れ父ゐ行ふ事ゐ作とおみあふ也のをら曰けるい我儕い奸淫ゐ由て生をず只一人れ父あり即ち神ありイエス彼等ゐ曰けるい神もし爾曹れ父あらバ爾曹ゐ愛そべし我い神より出て來をゐあり夫ゐをい己ゐ由て來るゐ非ず神ゐ遣し給へるあり 四二 爾曹あんぞ我いふ言と知ざるや蓋ゐが道と聽ゐをと得ざる也 四三 爾曹已ゐ父ゐる惡魔より出まれ其父れ慾と行ふみとを欲む彼い始より人と殺そ者ゐり又眞理ゐ居ず蓋ゐをれ裏ゐ眞理ゐあけきバ也のをが誰と言ときい己より出ーて言ゐり蓋ゐをき謊者まれ誰者れ父ゐをバ也 四四 ゐを眞理と言ゐ因て爾曹ゐを信ぜず 四五 爾曹れうち誰ゐ我と罪ゐ定る者ある乎ゐを爾曹ゐ眞理と語るゐ何故ゐをと信ぜざる乎 四六 神より出ー者い神れ言と聽あんぢられ聽ざるい神より出ざるゐ因てあり 四七 ユダヤ人ゐたへて曰けるい爾いサマリアれ人ゐて鬼ゐ憑さる者ありと我儕が言るい宜ならず乎 四八 イエス答て曰けるい我い鬼ゐ憑たる者に非ず我い吾父と尊び爾曹い我と輕んずる也 四九 我い自己れ榮を求めず之と求のつ罪を定る所れ者あり 五〇 ゐを誠ゐ實ゐ爾曹ゐ告ん人もー我道と守らゞ窮あく死と見ざるべし 五一 ユダヤ人のをゐ曰けるい今わをらい爾が鬼ゐ憑さる者あると知アブラハムと既ゐ死また預言者も死り然るゐ爾いふ人もし我道と守らゞ窮あく死じと 五二 爾い我儕れ先祖アブラハムよりも偉をる者あらん乎ア

ブラハム既ゐ死預言者たちも死り爾ヲコのらと誰と爲のヨ——イエス答ける
ゐ我もし自ら榮とあさバ我榮ゐ虛し——我と榮る者ゐ我父そあゐち爾曹れ我
神と稱る所の者あり　五五爾曹ゐ彼と識ず我ゐ彼と識る我もし彼と識ずと言
を爾曹の如き誑者と爲ん然を我ゐ彼と識をさ其道と守るあり　五六爾曹の先
祖アブラハムゐ我日と見んあとと喜び且ことと見て樂めり　五七ユダヤ人の
きゐ曰けるゐ爾いまだ五十ゐも及ざるゐアブラハムと見しや　五八イエス彼
等ゐ曰けるゐ誠ゐ實よ爾曹ゐ告ん我ゐアブラハムの有ざりし先より在者
あり　是ゐ於て衆人のをと擊んをて石と取りイエス隱て其中と過り殿と
出行り

第九章　イエス行ござ生來ある瞽と見しが　二弟子ゐをゐ問て曰けるゐ
ラビ此人の瞽ゐ生しゐ誰れ罪あるや己ゐ由ゐ又二親ゐ由か　三イエス答け
るゐ此人れ罪ゐ非ず亦ゐの二親れ罪ゐも非ず彼ゐ由て神れ作爲れ顯をん
ため也　四晝の間ゐ我ゐあらす我と遣しよ者れ行とあす可あり夜きたらん
其とき誰も行とあすあと能ゐず　五我世ゐ在時ゐ世の光あり　六此事と言
て地ゐ唾ゐ唾ゐて土と和ゐの泥と瞽者の目ゐ塗　七彼ゐ曰けるゐシロアム
の池ゐ往て洗へ彼すゐゐち往て洗ひ目見あとと得て歸をりシロアム之と
譯を遣されゐ者とゐ義あり　八隣れ人々および素より彼れ乞食ありしと見
し者等ゐひけるゐ此ゐ坐て物と乞ゐ人ゐ似たる也といふ彼ゐひけるゐ我
ゐ如何ゐして啓たるや　十答て曰けるゐ云シロアムの池ゐ往て洗と我ゆきて
をゐ曰けるゐ彼ゐ何處ゐ在や答て知ずと曰　十一彼等ゐの瞽ありし者とパリ
サイれ人れ所ゐ携詣をり　十二土と和てイエス彼が目と啓し曰ゐ安息日ゐり
き　十三パリサイの人も彼ゐ問けるゐ爾れ目ゐ如何して啓たるや答けるゐ彼
泥と我目ゐ置ゐを其と洗て見ことと得たり　十四或パリサイの人ゐひけるゐ
此人安息日と守ざるが故ゐ神より出しゐ非ず或人ゐひけるゐ罪人ゐ如で

斯る奇跡と行ふことと得んや是ゐ於て彼等あらそひ別たり　十七　また瞽者よ
曰けるい爾の目と啓しよより爾うきの事と何と言や答けるい彼い預言者
あり　十八　ユダヤ人ゐをの瞽者ゐりしゐ見得やう爲しゐとと其二親を呼來る
まで い信ぜず即ち二親と呼來りて　十九　之に問けるい此人い瞽者ゐて生しと
言とゐろの爾曹れ子あるの今いうゐしてと見ゐとと得たる乎　二十　二親のきらゐ
答けるい此い我子あるとと生來の瞽ゐるとと知二十一　然ゐ今如何して目明ゐ爲
しの我儕ゐと知ず亦それ目と啓しい誰ある乎と知ず彼い年長あり彼よ
問よ彼ゐづから言べし　二十二　二親れ如此いひしいユダヤ人と懼しゐ因ろいイ
エスとキリストと言明そ者あらバ會堂より出そべしとユダヤ人たがひゐ
謀定さをゐ也　二十三　二親の彼い年長あり彼よ問よと言しい此故あり　二十四　瞽あり
し者と復よびて曰けるい榮を神ゐ歸せよ我儕い彼人れ罪人あると知二十五　ゐ
を答けるい罪人なるや否ゐとを之と知ず我い瞽者ありしの今目明ゐなきる
此一事と知二十六　彼等また曰けるい彼は爾ゐ何と行ーや如何して爾れ目と啓

しや　二十七　答けるい我すでゐ爾曹ゐ言しゐ爾曹き聞ず何故ふさゝび聞んとそ
るの爾曹ゐ其弟子ゐ爲んと欲ふや　二十八　のきら詬り曰けるい爾い其人れ弟子わ
をらいモーセれ弟子あり　二十九　神れモーセゐ語し言い我儕しをり然ゐ此人の
何處より來をる乎と我儕しらず　三十　其人あさへけるい此い奇き事あり彼そで
ゐ我目と啓しゐ其何處より來をるとを爾曹らずと曰　三十一　神い罪人ゐ聽ず然
ゐ神を敬ひて其旨ゐ遵ふ者ゐ聽たまふと我儕い知　三十二　世の元始より以來
うまをりきある瞽者の目と啓し人あると聞ず　三十三　もー此人神より出ずバ何
事ども行得ざるべし　三十四　彼等あさへて曰けるい爾い盡く罪孽ゐ生し者ある
ゐ反て我儕と敎るか遂ゐ彼と逐出せり　三十五　イエス
尋て之ゐ遇いひけるい爾神れ子と信ずる乎　三十六　答て曰けるい主よ彼とー
我信ずべき者い誰あるや　三十七　イエス曰けるい爾そてゐ彼とまる今あんぢと
言者いろをあり　三十八　主よ我信ずと曰て彼と拜せり　三十九　イエス曰けるい我審判
せん爲ゐ世ゐ臨ろ即ち見ざる者と見てえ見る者と反て瞽と爲ーむ　四十　イ

エスと偕ゐ居しパリサイ人みれ言と聞て彼ゐ曰けるハ我儕も皆ある乎
四二 ―― イエス彼等ゐ曰けるハ爾曹もし瞽あらば罪あかゐるべし然ど今ゐ見
と言しゐ因て爾曹の罪ハ存をり

第十章

賊ゐ賓よ爾曹に告ん羊羊ゐ入よ門よりせずして他よ踰る者ハ竊
賊ある乎強盗なり 二門より入者ハ其羊の牧者ある 三門守ハ彼れ爲ゐ啓き羊
むろの聲と聽ゐを己れ羊の名と呼て之と引出す 四彼ろの羊と引出すとき
先ゐ行ゐり羊ゐきれ聲と識て之ゐ從ふ 五羊ば別人ゐ從ハず反て避ろハ別
人の聲と識ざれば也 六イエス彼等ゐ此譬と言ど彼等ハろ扎語きる所いの
ある意かと知ざりき 七是故ゐイエス復ゐきらゐ曰けるハ誠ゐ實に爾曹よ
告ん我ハ即ち羊の門ある 八凡て我より先ゐ來し者ハ竊賊ある強盗なり羊
ろれ聲と聽ざりき 九我ハ門ある門より若人ゐよりて入ば救を且出入とあして草
と得べし 十竊賊の來るハ盗んとし殺せんとゐ滅さんとそるれ他ゐあし我き
たるハ羊どして生と得ゐつ豐ゐらしめん爲ゐり 十一我ハ善牧者ゐり善牧者

ハ羊れ爲ゐ命と捐つ 十二牧者ゐあらず己が羊と有ず只やとゐきて羊と守る者
ハ、狼れ來ると見ば羊と棄てゐく狼羊と攝て之と散ど 十三雇工れ逃るハ傭
きし者ある れば其羊と顧ざるゐ因てある 十四我ハ善牧者ゐり我も己れ羊と識
己れ羊ゐ識る 十五父ゐをど識おとく我も父と識れ羊れ爲ゐ命と捐ん 十六我
ハ此牢ゐあらざる別れ羊と有り彼等とも引來らん彼等ゐが聲と聽ん遂ゐ一
の群一れ牧者とあるべし 十七ゐが父わをと愛す蓋ゐを再び命と得んが爲ゐ
命と捐るが故あり 十八我より之と奪ふ者ハし我みばのら之と捐るあり我て
をと捐るれ權能あり亦よく之と得の權能あり吾父より我ゐれ命令と受さ
り 十九偖ゐれ言ゐ因て復ユダヤ人あらろひ別さり 二十其中ある多れ人いひけ
るハ鬼ゐ憑て狂ふ者あるゐ何ぞ彼よ聽や 二一又或人いひけるハ是鬼ゐ憑
し者の言ゐ非ず鬼ハ瞽者れ目と啓るあと能せん乎○ 二二冬れあろ修殿節
れ時 二三イエス殿のソロモンれ廊と行きけるゐ 二四ユダヤ人ゐきと環園えて
曰けるハ我儕を幾時まて疑ハするや爾もしキリストあらバ明ゐ我儕よ

告よ　二五 イエス答けるい我あんちらお告しかごも爾曹信ぜず父れ名お託て
我お行ふ事ども二六 然ど爾曹信ぜず此と爾曹お言ー如く
我羊お非ざるほ也　二七 我羊い我聲を聽ども彼等お識のそら我お從ひ　二八 わ
ら彼等お永生と賜ふ彼等いけまでも亡びず亦あもと我手より奪ふ者あ
る者あし　二九 我と父とい一ありより大あり又ども父れ手より之と奪う
んとせり　三〇 イエス彼等お答けるい吾父より受て我おほくれ善事と爾曹お
示せお其うち何の事およりて我と石よて擊んとそる乎　三一 ユダヤ人あたへ
て曰けるい石おて擊んとそるい善事の爲に非ず爾よと褻瀆ことといひ且つ
なんぢ人あるお己と神とあそお因てあり　三二 イエス答けると爾曹れ律法お
我いふ爾曹い神ありと錄さを忘お非ずや　三三 聖書い錯る可らず若神の命と
來し者を神と稱んおと　三四 父の聖別ちて世お遣せる者ども爾曹神れ子あり
稱がとて何ぞ之と褻瀆あことといふと曰べけん乎　三五 もし我ども父の事と行

ば我と信ずるあと勿ども　三六 若あども行ば我と信ぜずとも其事と信ぜよ蓋
父の我おあり我の父お在あとを爾曹志りて信ぜん爲あり　三七 彼等また執
んとせしがイエスられ手と脫て去り　四〇 斯て復ヨルダンの外あるヨハ
ネのハプテスマと施せる所お往て彼處に居けるお　四一 多の人のもお至り曰
けるいヨハネは休徵と行ず然ども此人お何きてヨハネのいひし言いみあ
具あり　四二 是お於て許多の人のしあて彼と信ぜり

第十一章

拉ゐ病者あり　一 ラザロと云てベタニヤ村人ありベタニヤいマリア
と其姉マルタれ住る村なり　二 マリアい嘗お主お香膏とぬて己の頭の髮を
もて主れ足と拭ー人お此病るラザロい彼の兄弟あり　三 是故お姊妹
イエスの所お主れ愛そる者病りと言遣せり　四 イエスこれと聞て曰けるい
此い死る病お非す神れ榮れ爲あり神れ子として之お因て榮と得しめんが
爲あり　五 夫マルタと其妹およびラザロいイエスれ愛そる所れ者あり　六 是
故はイエスろれ病ると聞て此處よ二日とおり　七 其れち弟子お曰けるい

我儕はさユダヤに往べーへ弟子いひけるハラビユダヤ人ハ近來も石とも
て爾を擊んとせしに汝復彼處に往たまふ乎　一イエス答けるハ一日は中お
十二時あるにあらずや人もし日間あるときハ躓くべし蓋光ろれ人お無ダ故あり
お因てあり　十また人もし夜あるときハ躓くべし蓋光ろれ人お無ダ故あり　十一
イエス如此いひて後弟子お曰けるハ我儕れ友ラザロ寢たり我のをと醒さ
ん爲お往べし　十二弟子いひけるは主よ彼もし寢しからバ愈ん　十三イエスハ彼
れ死しと言るおや弟子等ハ寢て臥るおと言るならんと意り　十四是故お
イエス明らかに彼等お告て曰けるハラザロ死り　十五爾曹とーて信せーむる爲
お我ハーはお在ざりーと喜ぶ然ばいま彼處お往べー　十六デドモと稱るトマ
ス他れ弟子等お曰けるハ我儕も亦ゆきて彼と偕お死べし　十七イエス至てラ
ザロお既お墓お葬りて四日あるを知　十八ベタニヤはエルサレムお近し其
距るハ纔に約ろ廿七丁あり　十九多のユダヤ人マルタとマリアを其兄弟れ事お
因て慰めんとて既お彼等の所お來りとをり　二十マルタハイエス來給へりと
聞て迎へ出ハマリアは室お坐り　二一マルタイエスお曰けるハ主よ
此ハ在せしならバ我兄弟ハ死ざりしものと　二二然あがち假令今おても爾が
神ゆ求る所ハ凡ても與ふと知　二三イエス曰けるハ爾れ兄弟ハ甦
るべし　二四マルタイエスお曰けるハ我ハ末日の甦るべき時お甦らん事と知
る　二五イエスお曰けるハ我ハ復生あり生命あり我と信ずる者ハ死ると
ゆも生べし　二六凡て生て我と信ずる者ハ永遠も死るおとあし爾よをと信ずる
や　二七曰けるハ主よ然り我ハ爾ハ世お臨るべきキリスト神れ
子なりと我ハ信ず　二八如此いひ竟て潛お其妹マリアとよび竊きたりて爾を呼た
まへりと曰ふ　二九マリアこれお聞て急ぎ起てイエスれ所お往り　三十イエス未だ村
お入ずして猶マルタれ迎へ所あれり　三一ユダヤ人マリアが急ぎ起出ると見て彼ハ
墓お往て哭あらんと曰つゝ彼お隨へり　三二マリアれ所お來り彼と見て其足下お伏いひけるハ主よ若あなた
在せしならバ我兄弟ハ死ざりしもをと　三三イエスマリアれ哭と彼と偕お來

しユダヤ人は泣と見て心と働ーめ身ふるひて 三三 曰ける ゐ爾曹何處ゐ彼と
置しや彼等いひけると主よ來て覩さまへ 三四 イエス涕と流たまへり 三五 是ゐ
於てユダヤ人いひける ゐ見よ如何たるり彼と愛する者ぞ 三六 うれ中ある人
曰ける ゐ盲者れ目と啓たる此人ゐしーて彼と死ざらしむるあを能ざりし乎
三七 イエスまた心と働ーめて墓ゐ至る墓ゐ洞ゐて其口れ所ゐ石と置り イ
エス曰ける ゐ石と去よ死し者れ兄弟マルタ曰ける ゐ主よ彼れとや臭し死
てより已ゐ四日と經たり 三九 イエス彼ゐ曰ける ゐ爾もし信ぜゞ神れ榮と見
べしと我ゐんちゐ言しゐ非ずや 四〇 遂ゐ其石と死し者と置さる所より移去
たりイエス天と仰きて曰ける ゐ父よ已ゐ我ゐ聽り我ゐと 四一 爾ゐ謝す 四二 我
ゐんちゲ恒ゐ我ゐ聽ゐをと知ゐるゐ我のく言ゐ傍ゐ立る人とーて爾れ
我と遣しことと信ぜーめんさてゐ也 四三 如此いひて大聲ゐ呼いひけるゐテ
ずゐよ出よ 四四 死者ゐて手足と綺れ面と手巾ゐて裹とて出イエス彼等ゐ
曰ける ゐ彼と釋て行しめよ 四五 マリアと偕ゐ來ーユダヤ人イエスれ行し事

と見て多く彼と信せり 四六 然とも其中ゐパリサイれ人ゐ往てイエスれ行し
事と告ー者ゐり 四七 是よ於て祭司れ長等とパリサイれ人と議員と召集めて
曰ける ゐ我儕如何そ、べき乎この人多れ奇跡と行ゐり 四八 もし彼と此まゝ
よ棄置た人ミゐ彼と信せん然バロマ
べし 四九 其中れ一人ゐて此歲れ祭司れ長なるカヤパと云る者彼等ゐ曰ける
い爾曹何とも知す 五〇 又民れ爲ゐ一人死て舉國ほろびざるゐ我儕れ益たる
事とも思ざる也 五一 此言い己より出しゐ非ず此歲れ祭司れ長あるゐよりイ
エスれ斯民れ爲ゐ死るゐと預言せるあり 五二 特ゐ斯民れ爲ゐみあらず散
たる神れ子民等とも一ゐ集んが爲ゐう 五三 偖ゐれ日よりあて彼等イエスと
殺さんと共ゐ謀る 五四 是故ゐイエス此より顯ゐユダヤ人れ中と行かず其處
と去て野ゐ近き所あるエフライムといふ邑ゐ往て弟子と偕ゐ留まり 五五 ユダ
ヤ人れ逾越れ節ちかづきければ人々己と潔んがの爲ゐ逾越れ節れ前ゐ鄉間
より上りイエスと尋ね殿ゐ立て相互ゐ曰ける ゐ如何ゐ意

や彼は節筵へ來さる乎　祭司ら長等とパリサイら人ら己へ令と出ゐて若イエスら所在ど知る人あらば告べしと云みい彼と執んとそる也

第十二章　逾越ら節ら六日前イエス、ベタニヤへ至る此處ハ即ちラザロら在所なり　二是へ於て或人々へ筵席と設くマルタ給仕と爲りラザロもイエスと偕へ坐せる者のうちら一人あり　三マリアハ眞正のナルダある價たへき香膏一斤と携來てイエスら足へ塗また己が頭髮にて其足と拭へり　斯れへ家内へ滿ち　四ラら弟子ら一人あるイスカリオテのユダ即ちイエスと賣さんとそる者いひけるハ　五此香膏と何ぞ銀三百へ售て貧者に施さゞる乎　六彼ハ此いへるハ貧者へ眷と顧へ非ず竊者へて且金嚢と帶そら中ら入たる物と竊ふ者なるが也　七イエス曰けるハ彼へ與る勿れ我ハ葬ら日へ爲ら之と貯へたり　八貧者ハ常へ爾曹と偕へ在ど我ハ常へ偕へ在ず　九多のユダヤ人イエスら此へ在と知て來る特へイエスら爲のみへ非ず亦ラザロと見んと欲より避らしら所ラザロとも見んと

ゐる　十祭司ら長等ラザロとも殺さんと謀る　十一蓋ラザロら故へ因て多ら人ゆきてイエスと信するが也　十二明日へ　十三棕櫚ら葉と取ゆきて彼と迎ホザナよ主ら名へ託て來るイスラエルら王へ福ありと呼きり　十四イエス驢馬ら子と得て之へ乘給ふ　十五シオンの女よ懼るゝ勿れ爾ら王へ驢馬ら子へ乘て來るとあるが如し　十六弟子ら初へ此事と暁ざりしがイエス榮と受ら後へ彼等此事へ彼へつゐて錄さゐて且ら之ら事と人々彼へ行ひさりしと　十七ラザロと墓よら呼出して避らしら時へ彼と偕へ居し者ども證と爲り　十八へ彼と迎さるゐり　十九是へ於てパリサイら人たへひへ曰けるハ爾曹へ謀る所へ益へきと知ず　や見よ世へ皆へ彼へ從へり　二十〇禮拜へ來ら人へ中へギリシヤら人へ在り　二十一彼等へガリラヤへベッサイダら人へるヒリポへ來り求て曰けるハ君よ我儕へイエスへ見えんみと欲ふ　二十二ヒリポへ來てアンデレへ告ア

メデレ亦ヒリポと偕ゐイエスゐ告ぐ 三三 ——イエス彼等よ答て曰けるい人の子榮を受べき時いたれり 二四 誠ゐ實ゐ爾曹ゐ告ん一粒れ麥もし地ゐ落て死ずバ惟一ゐて存んもし死バ多の實と結ぶべし 二五 己れ生命を惜む者之を喪ひ其生命を惜さる者い之を存て永生ゐ至るべし 二六 人もし我ゐ事んとせバ我ゐ從ふべし我ゐ事る者い我と偕所ゐ在ん人もし我ゐ事バ吾父い之を貴ぶべし 二七 今己が心憂悼めり何と言んや父よ此時より我を救たまへと言んや否ゑをが爲ゐ我ゑれ時ゐ至をるゐり 二八 願くい父よ爾の名れ榮を顯せ此とき天より聲ありて云己を其榮を既ゐ顯せり再ゐ之を顯さべし 二九 傍ゐ立る人々之を聞て雷ゐきりと曰ある人い天の使者ゐ語をる也と曰り 三〇 ——イエス答て曰けるい此聲は我ためゐ非ず爾曹れ爲ゐり 三一 斯世いいま罪ゐ定ち万斯世れ主いま逐出さるべし 三二 我も亦地より擧をゐバ萬民を引て我ゐ就せん 三三 如此イエスれ言るい其如何ある狀ゐて死んをそをると示せる也 三四 人々のをゐ答て曰けるは我等ゐ律法ゐてキリストい窮なく存者ありと聞志ゐ爾人れ子ゐあらす學をんを言い何ぞや此人れ子とは誰ある乎 三五 ——イエス彼等ゐ曰けるい光ゐ尚暫時れあひだ光ある間ゐ行て暗ゐ追及をざるやう爲よ晴ゐ行く者い其行べき方を知ず 三六 爾ちら光れ子を爲べきために光れある間ゐ光と信ぜよ ——イエス此を言畢り彼等を避て隱たり ○ 三七 ——イエス彼等れ前ゐ如此ゐほくの休徴を行たまども倘のを信ぜざりき 三八 此い預言者イザヤがいひし言ゐ我儕の告ー言を信ぜし者誰ぞや主れ手い誰よ顯をし乎を有よ應へり 三九 四〇 ——イザヤい復いふ彼等目ゐて見ず心ゐて悟り改めて醫るゝみとを得ざらんが爲ゐ彼ろれ目を瞽し其心を頑梗せりと此故よ彼等信ずるみと能ず 四一 ——イザヤい彼れ榮を見ーによりて彼ゐ就て如此い語をるあり 四二 然も有司等れ中ゐ多く彼を信ぜし者も有ど パリサイれ人を畏て明ゐ信すると言ざりき其會堂より黜らをんをと恐さるゐ因 四三 みを彼等い神の榮より人れ榮を喜るあり ○ 四四 ——イエス呼り曰けるれ我を信する者い我を信するゐ非す我を遣しゝ者を信するあり 四五 又己

を之と見者い我を遣〻る者を見なり
四六 我い光ゐ一て世ゐ臨をり凡て我を信
ずる者をして暗よ居ざらしめん爲なり
四七 人もし我が言を聞て守らざるとも其罪を定を我來しい世の罪を定んさめゐ非ず世を救んため也
四八 我を棄
之の言を納ざる者は罪を定る者あり
即ち我いひし言どれりは日ゐきが罪
を定べし
四九 蓋わを己より言ゐ非ず我を遣〻る父ぢが言べきこと我あさる
可きとを命じ給へる也
五十 ろの命じ給ふ所い即ち永生あるを我しる是故
に我いふ所い父は告給ふまゝわ言るあり

第十三章

踰越れ節れ前ゐイエス此世を去て父ゐ歸るべき時いたきるをし
り世よ在し己れ民を既ゐ愛し終ゐ至るまで之を愛せり
二 時ゐ彼等晩飯れ席
おつく惡魔いあれてイエスを賣んとそる事を
三 イエス己の手ゐ父れ萬物を賜しみと
ユダといふ者は心ゐ發さあめたり
四 神より來り神ゐ歸るみとゝと知
晩飯れ席を起て上衣をぬぎ手巾を取て
腰ゐ束
五 而して盤に水をいを弟子の
足を濯ろれ束さる手巾ゐて拭とじめ
六 遂ゐシモンペテロゐ及ぶペテロ彼ゐ曰けるい主よ爾ぢご足を濯ふの
七 イエス答て曰けるい我爲ゐとを爾いま知ず後ことを知べし
八 ペテロ彼ゐ
曰けるい爾斷て我足を濯ぺからず
イエス答けるい若ぢを爾を濯ずば爾い
我を干渉ゐし
九 シモンペテロ彼ゐ曰けるい主よ止ゐ我足れをあらず手と
首をも濯さまへ
十 イエス曰けるい濯たる者い足れほの濯ふゐ及ず然して
全く潔〻爾曹を潔し然ども盡くい潔者ゐ非ず
十一 此いイエス己を賣んとす
る者れ誰あるを知ゆゑゐ盡くい潔者ゐ非ずと曰るあり
十二 彼等れ後ろれ上衣を取ま坐て彼等ゐ曰けるい我あんぢらゐ行し事を知ゐ
十三 爾
曹ぢを師を呼まゞ主を呼あんぢらの言ろい宜ぢい誠ゐ是あり
十四 我い爾曹れ師また主あるゐ倘あんぢらの足を濯ふ爾曹も亦さがひゐ足を
濯ふべし
十五 我あんぢらゐ例を示せり此い我あんぢらゐ行し如く爾曹よも
行しめんが爲なり
十六 ぢ誠ゐ實に爾曹ゐ告ん僕い其主より大あらず又使
者いを遣す者より大あらず
十七 爾曹もし之を知て此の如く行ば福あり

我いひし所い爾曹と凡て指るに非ず我と我選し者とを我も聖書ゐ
我と偕ゐ食する者已をよ背て踵と擧しと錄されし爲ゐ也
事れ至らん時ゐんぢら我と信じてキリストをせん爲ゐ其事の至ざる今よ
り之と爾曹ゐ告ん我遣せ者と接るい我と接るあり我
と接るい我と遣あし者と接るあり
けるい滅ゐ贖に爾曹ゐ告ん一人なんぢられ中ゐ我と賣者あり
互ゐ面と覩あとせ誰と指て言るある乎と疑ふ
子イエスれ懷ゐ倚てありしが
めんと首ともて示せり
誰あるう
逐ゐ一撮れ食物ゐ物と濡てシモンれ子イスカリヲテのユダゐ予ふ
一撮れ物と受し其時サタン彼よ入り是ゐ於てイエス彼ゐ曰けるい爾が爲んと
する事は速のゐ爲せ彼ゐ何故ゐ如此いひしのと同ゐ席ゐ在者ともれ中志

る者ゐからざりき
て用べき物と市ーむるゐらんの亦い
うをい一撮れ食物と受て直ゐ出よりしと
ス曰けるい今人れ子築とらく神また彼ゐ
因て榮と受る時は神も亦ここのらの
ん　小子よ我ゐほ片時ゐんぢらと偕
曹い至るゐと能と前ゐ之とユダヤ人ゐいふ今また之と爾曹ゐ告
誡と爾曹ゐ予ふ即ち爾曹相愛すべ
く爾曹も相愛そべし　爾曹もゐ相愛せバ之ゐ因て人々爾曹の我弟子ある
こと知べき　シモンペテロ彼ゐ曰けるい主いづこみへ往給ふやイエス彼
に答へけるい我往ところへい爾いま從ふゐと能ず後ゐとゐ從んと　ペテ
ロ彼ゐ曰けるい主よ何故ゐ今ゐんぢゐ從ふゐと能ざるの我い爾れ爲ゐ我命
と捐ん　イエス彼よ答けるい爾命と我ためゐ捐るや誠よ實ゐ爾ゐ告ん鷄

あのざる前ゐ爾三次已をと識ずと言ん

実際第四章 あんぢら心ゐ愛ること勿を神と信じ亦已をと信ずべし 二わが父
れ家ゐと第宅おゐし然ずた我預て爾曹ゐ之と告べきあり我あんぢられ爲
ゐ所と備ゐ往 三もし往て我あんぢられ爲ゐ所と備た又きさりて爾曹と我
ゐ納べし我とる所よ爾曹とも居しめんとて也 四爾曹已が往所と知また其
途と知 五トマス曰けるい主よ我儕あんぢら我と識を吾父とも識べし今より爾曹
んや 六イエス彼ゐ曰けるい我い途あり眞あり生命あり人もし我よ由ざを
た父れ所ゐ往ゐと能ず 七若あんぢら我と識あり已ゐ爾曹彼れと見たり
あれと識あり已ゐ爾曹彼れと見たり 八ピリポ彼ゐ曰けるい主よ我儕ゐ父と
示し給へ然た足り 九イエス彼れ曰けるいピリポ我うく久く爾曹と偕ゐ在
しゐ未だ我と識ざるの我と見しあり何ぞ父と我儕ゐ示せと
言や 十已を父ゐとり父れ我ゐ在ゐと信ぜざる乎已を爾曹ゐ語し言い自
ら語しゐ非ず我ゐとる父れ行ざとあらせる也 十一我い父ゐとり父已をゐ在と
我がげし言と信ぜよ若信ぜずた我事ゐ因て之と信ずべし 十二誠ゐ實ゐ爾曹
ゐ告ん我と信ずる者い我行ところの事と行ん且此より大ある事と行べし
蓋わを吾父へ往をあり 十三爾曹すべて我名よ託て求ふ所れあとい我せべて
之と行ん父の榮れ子ゐ因て顯をんが爲あり 十四若あんぢら我と愛するあらた我誡と守を
託て求いよ我ゐとと行ん 十五若あんぢら我と愛するあらた我誡と守を已
を父ゐ求ん父かあ了ず別ゐ慰る者と爾曹ゐ賜て窮るく爾曹と偕ゐ在ろむ
べし 十六此い即ち眞理れ靈あり世こきを接るゐと能ず蓋ゐをと見ず且ろら
ざるゐ因さをと爾曹いとと識ういい彼あんぢらと偕ゐ在のり爾曹れ裏ゐ在
をあり 十八我あんぢらと捨て孤子とせず再あんぢらゐ就ん 十九暫せた世已を
と見ことあし然と爾曹た我と見已をた生をた爾曹も生ん 二十ろれ日ゐ爾曹已
を吾父ゐ在あんぢら我ゐ在已を爾曹に在ゐとと知べし 二一我誡と有ちて之と
守る者い即ち我と愛そるあり我と愛そる者い吾父ゐ愛せらる我も亦ゐを
と愛ーて彼ゐ自己と示すべし 二二イスカリヲテあらざるユヌ彼ゐ曰けるい

主よ如何にして自己を我儕に示さんとする乎 二三 イエス答て彼に曰けるは若人我を愛せば我言を守らん且わが父これを愛せん我儕きたりて彼と偕に往べし 二四 我を愛せざる者は我言を守らず爾曹の聞ところの言は我に非ず我を遣し給へる父の言なり 二五 我なほ爾曹と偕に在て此等のことを爾曹に語ぬ 二六 されど我が名にて父の遣さんとする保惠師すなはち聖靈は爾曹に凡てのことを教へ亦我が凡て爾曹に言しことを爾曹に憶起さしむべし 二七 我は平安を爾曹に遺す我平安を爾曹に予ふ我が與ふるは世の與ふるが如きに非ず爾曹心に憂るを勿れ懼るを勿れ 二八 我去きて復爾曹に來らんと我に曰しことを爾曹きけり若し我を愛せば父に往と我いへる言を爾曹喜ぶ可あり蓋我が父は我より大なればなり 二九 事いまだ成ず我まだ爾曹よつぐ事成んときに爾曹これを信ずべき爲なり 三十 此後われ爾曹と多く言とも爾曹に語じ蓋この世の主きたるなり彼は我に與るところなし 三一 然ど我これを爲は我の父を愛し且父れ命ぜしごとくに遵ひて行ふことを世に知しめんが爲なり起よ我儕ここを去べし

第十五章

一 我は眞の葡萄樹にして我父は農夫なり 二 我に在て凡て實を結ざる枝は父これを剪除すべて實をむすぶ枝は之を潔む蓋ますます繁く實を結ばんが爲なり 三 今爾曹は我より授ける道のゆゑに潔きなり 四 爾曹我に在我また爾曹に在て居さば實を結ぶこと能ず枝もし葡萄樹に連らざれば自ら實を結ぶこと能ざるごとく爾曹も我に連らざれば亦此れ如あらん 五 我は葡萄樹なんぢらは其枝なり人もし我に在我も其人に在て居さば多く實を結ぶべし蓋もし爾曹は我を離ては一も爲ること能ざればなり 六 人もし我に居ざれば枝の如く外に棄られて枯るなり人これを集め火に投入て焚べし 七 爾曹もし我に居ま我言爾曹に居ば凡て欲ふところを求よ然ば成て予らるべし 八 爾曹おほく實を結ぶに由て榮とうく然ば爾曹は我が弟子なることを顯すなり 九 父の我を愛し給ふ如く我なんぢらを愛す爾曹は我愛に居よ 十 若なんぢら我誡を守ば我愛に居ん我は我父の誡を守て其愛に居如し 十一 我これ

事と爾曹ゟ語るゐ我が喜ゟんぢらゟ在て爾曹れ喜と盈ちめんが爲ゐり 十二我
ゐんぢらと愛する如く爾曹も亦たがひゟ愛すべし是ヨが誡なり 十三人ろれ
友の爲ゟ己れ命と損るゐ此より大ある愛ゐるし 十四凡て我ゐんぢらゟ命ず
る所の事と行ゐと則ち我友ゐり 十五今より後ヨを爾曹と僕と稱ず蓋僕ゐ其
主れ行ゐと知ざるなり我ゐ爾曹と友と呼り我ゐんぢらゟ吾父よ
り聞し所のゐと盡く告しゟ緣ゐんぢら我と選ず我ゐんぢらと選べり
且爾曹として往て實と結せ其實と存しめんが爲また爾曹れ凡て我名ゟ託
て父ゟ求ふ所の者と彼として爾曹ゟ賜らせんが爲ゟ我ゐんぢらと立さり
ゐんぢら互ゟ愛せんがため我こゝを命ず 十八世もし爾曹と惡とき爾曹
よりも先ゟ我と惡と知れ 十九爾曹もし世の屬ゐらを世ゐ己れ屬と愛べし然
ど爾曹ゐ世れ屬ゐらず我ゐんぢらを世より選たり之ゟ因て世ゐんぢらと
惡む 二十僕ゐ其主より大ゐらずと我ゐんぢらゟ曰し言を心ゟ記よ人もし我
を窘迫ゐ爾曹とも窘迫もし我言と守ゐ爾曹れ言をも守るべし 二一然ゐ彼等

ゟ我を遣しゝ者と識ざるゟ因ヨゟ名れ故とゐて此等れ事と爾曹ゟ加べし
二一我もし來て語ざりしゐらば彼等罪なからん然ゐ今ゐ其罪ゐひらく可
ゃうゐし 二二我と惡む者ゐ亦ヨゟ父と惡なり 二三我もし他れ人れ行ざりし
事と彼等れ中ゟ行ゐざりしゐらば彼等罪ゐゝらん然ゐ我と吾父と已ゟ
見の如之と惡めり 二四此れ如ゐ彼等れ律法ゟ故ゐくして我と惡めりと錄し
言ゟ應せん爲ゐり 二五ヨと訓慰師と父より遣らん即ち父より出る眞理れ靈
ゐゐ其きたる時ヨが爲ゟ證とゐすべし 二七爾曹も亦ヨと偕に始より在し
ゟ因て證と作べし

第十六章

ヨ之此等れ言と爾曹ゟ語るゐ爾曹れ躓ざらん爲ゐり 二衆人
ゐんぢらと會堂より黜くべし且そべて爾曹と殺す者とつゐら神ゟ事ると意
ふ時至らん 三此等れ事と爾曹ゟ行ゐ父と我とと識ざるが故なり 四我ゟ
ヨと爾曹ゟ語るゐ時いたりて我ゐヨと偕ゟ在さゞ也 五我いま我と遣しゝ

者ゐ往んとす然ども爾曹は中ゐ悲ひ
と言しゐ因て憂ゐんぢられ心ゐ塞り
益なり若もの我ば訓慰師ゐんぢら
ゐ來らんとき罪ゐつき義ゐつき審判ゐ
罪ゐ就てと云るゐ我を信ぜざるゐ因
へ往ゐよりて爾曹まさ我を見さ
審判を受をばあり　我ゐは爾曹ゐ
とを得ず　然ども彼すゐいち眞理は
と知りむべー蓋ゐ己ゐ由て語ゐ非ず其聞し所は
んとそる事を爾曹ゐ示そべけをば也　彼ゐが榮と顯さん蓋ゐが屬を受て
爾曹ゐ示せば也　凡て父の有給ふものは我屬あり是故ゐ彼わが屬を受て
爾曹ゐ示すと曰り　暫せば爾曹ゐ
是ゐを父へ往ゐり　是ゐ於て弟子の中ゐて或人さがひゐ曰けるゐ暫せ

を爾曹ゐ見と復ゐたらくしてゐ我を見べしと言ゐつ是をきゐ父へ往ゐ
りと我儕ゐ言ーと何は事ぞや　彼等まさ曰けるゐ此をゐらくと言ーゐ何
の事ぞや其言る所を我儕知ず　イエス彼等が問んとそるを知て曰けるゐ
ゐ暫せば我を見と復ゐたらくしてゐ我を見べしと言し此事ゐ因て爾曹たが
ひゐ詰ゐふ乎　誠ゐ實ゐ我ゐんぢらゐ告ん爾曹ゐ哭き哀き世ゐ喜ぶべ
し爾曹憂るゐらん然ども其憂ゐ變て喜びとゐるべし　婦子を產んとそる時
ゐ憂ふ其期いたるゐ因てゐり然ども已ゐ生ば前の苦をゐをそる世に人れ生た
る喜樂ゐ因てゐり　此の如く爾曹も今憂ふ然ども我また爾曹を見ん其時ゐ
んぢられ心喜ぶべし其喜樂を奪ふ者ゐらじ　其日ゐんぢら我ゐ問とゐろ
無るべし誠ゐ實に爾曹ゐ告ん凡ろ我名ゐ託て父ゐ求る所れもは父ゐをと
爾曹ゐ授たまふべし　ゐんぢら今至て我名ゐ託て求ゐるゐとゐし求よ然
ば受ん而して爾曹れ喜び滿べー　譬喩ともて此事を爾曹を語しゐ譬喩と
用ずーて爾曹ゐ語り父ゐ就て明ゐ示そ時いたらん　其日ゐんぢら我名

お託て求ん我あんぢられ爲お父お
愛すをを也これ爾曹ヨをと愛し且父
父より出て世お臨をり復世と離て父お往ん　二ニ弟子のをお曰けるい爾いま
明のお言て聽諾ていとぞず　二十我儕いやしき爾の知ざる所あく且人れ爾お問い用
あきあとと知あをお因て我儕神より爾れ出來ーあとと信ず　二一イエス彼
等お答けるい今あんぢら信する乎　二二時まさお至ん今いたりぬ爾曹散て各
人ろれ屬そる所お往さ我と一人れこさん然ぞ我獨とるお非ず父ヨをと
偕お在あり　二三ヨを此事と爾曹お語しい爾曹として我お在て平安と得させ
んが爲なり爾曹世お在ていい患難と受ん然ぞ懼るう勿を我すでお世お勝り

約翰傳第十七章

イエス此言と語畢て天と仰ぎ曰けるい父よ時いさりぬ爾れ子あ
んぢれ榮と顯さんぞ爲お爾れ子の榮と顯し給へ　二ニお爾ヨれお賜し所れ
者お我永生と予んがさめ凡れ者と制る權威と我お賜たをバ也　三永生
とい唯獨の眞神ある爾と共識おイエスキリストとある是なり　四我あん

ぢれ榮と世お顯ー爾れ我に委し所の行い我おを成り　五父よ今我とあて
爾と偕お榮と得させ給へ即ち創世より先お爾と偕に有し所の榮と得させ
給へ　六あんぢ世より選て我お賜し人々お我あんぢれ名と顯せり彼等ヨれ
屬おして爾おとと已お我に賜ふ彼等また爾れ道を守をり　七彼等いま爾
の我より賜ー者い皆爾より出おと知　八蓋ヨを爾が我お賜ー言と彼等お予さ
をバなり彼等おれと受まさ我爾よりみとと信じさり　我のきられ爲お斷
お者の爲ある耳ろを彼等い爾れ屬あ　九我彼等の爲お非ず爾れ我お賜
屬い我屬あり且ヨを彼等お由て榮と　十凡て我屬と爾の屬あんぢれ
とり我い爾お就る聖父よ爾れ我に賜し者と爾れ名よ在ーめとと守て我儕
れ如く彼等とも一みあし給へ　十一我の
在ーめて之と守たり爾れ我お賜ー者と我守てしが其中一人だお亡さる者
あし唯況論れ子ほろびさり是聖書に應せん爲あり　十二我いま爾お就る我世

ゐ在て此事を語るゐ我喜樂と彼等ゐ充ゐめん爲ゐり
十四 わを爾れ道と彼等ゐ授たり世ゐ彼等と惡む蓋已が世の屬ゐ非ざる如く彼等も世に屬ゐ非さをゞ也
十五 已れ爾ゐ彼等と世より取さまへと祈らず惟かをらと守て惡ゐ陷らす勿をと祈る
十六 已を世の屬ゐ非ざる如く彼等も世に屬ゐ非ず
十七 爾の眞理をもて彼等と潔め給へ爾れ言ゐ眞理ゐり
十八 なんぢ我と世ゐ遣しゝ如く我も彼等と世ゐ遣せり
十九 我ゐをらけ爲ゐ自己と潔こを眞理ゐ因て彼等も聖らをん爲ゐり
二十 我さと彼等の爲ゐみ祈らず彼等の教ゐ因て我と信ずる者れ爲ゐも祈ゐり
二一 此れみゐ一ゐならん爲ゐり父よ爾已をゐ在われ亦ゐんぢゐ在かくの如く彼等も我儕ゐをりて一ゐあらん爲ゐり世ゞして爾の我と遣しゝ事と信ぜしめん爲ゐり
二二 爾れ我ゐ賜し榮と我ゐきらゐ授たり此れ我儕れ一ゐるが如く彼等も互に一ゐあらん爲なり
二三 已を彼等ゐ在ゐんぢ我ゐとる蓋彼等として一ゐ全あらしめ且世ゞして爾れ我を遣しゝ事と彼等とも愛することと知しめんと也
二四 父よ爾れ我ゐ賜し者の我とる所ゐ我と偕ゐ在て我榮すゐはち爾ぞ我ゐ賜ゐ者と見んゐとと願ふり世基と置ざりし先ゐ爾わきと愛したをゞ也
二五 義き父よ世ゐ爾と識す我れ爾を識のをらも爾れ我と遣しゝ事と知り
二六 我ゐんぢ名と彼等ゐ示せり復ゐをと示をゝ在ゐさ我うをらに在ん爲なり

第十八章

イエス　此事と言て後ろの弟子と偕ゐ出てケデロンの河と渉ろの
一 虚ゐある園の中ゐ弟子と偕ゐ入ぬ
二 イエスと賣ゝるユダ此處と識りイエス屢々ろの弟子と偕ゐ此ゐ集りさをゞ也
三 此時ユダ一隊の兵卒と下吏ぞも祭司の長等ゐよびパリサイの人よりうけ炬と挑灯と兵器と携て此ゐ來
四 イエス事の已ゐ及んとをるとを悉く知いでゝ彼等ゐ曰けるゐ誰と尋るゐ
五 彼等ゐさへけるゐナザレのイエスありイエス我等ゐ曰けるゐ我れ其ありイエスと賣ゝるユダ彼等と偕ゐ立りをり
六 イエス我等ゐ對て我ありと曰さまへる時ゐをら退きて地ゐ仆さをり
七 イエス復彼らゐ誰と尋る乎と問

さゝひしのを彼等ナザレのイエスぬと曰へりイエス答ける我すでゐ爾曹
ゐ我いまなりと曰り若ゐをと尋るゐらば此眾と容て去しめよ是イエス
我ゐ賜し者の中一人だゐ亡る者あしと云し言ゐ應せん爲ゐり 十 時ゐシモ
ンペテロ劍と佩さりしが之と拔て祭司の長の僕と擊て其右の耳と削おと
せり僕の名はマルコスと云 十一 イエスペテロゐ曰ける爾劍と鞘ゐ納よ父の
我ゐ賜し杯と我飲ざらん乎 十二 斯て隊の兵卒および其長とユダヤ人の下吏
イエスと執へ縛て 十三 先ゐをとアンナスの所ゐ曳往ゐき此歲れ祭司れ長
カヤパれ外眞なるゐ因てあり 十四 ユダヤ人ゐ謀て一人民れ爲ゐ死るれ益ゐ
りと言しれ此カヤパありき 十五 シモンペテロと外ゐ一人れ弟子イエスゐ從
へり此一人れ弟子れ祭司れ長れ識とゐろれ者ゐてイエスと偕ゐ祭司の長れ
庭ゐ入 十六 ペテロれ門外に立り祭司れ長れ識とゐろれ弟子出て門と守る婢
ゐ告てペテロともゐび入 是ゐ於て門と守る婢ペテロに曰けるれ爾も
此人の弟子れ一人あらず乎ペテロ然ずと曰 十七 僕等と下吏だち炭ゐ因て

と爇ろれ處ゐ立て煖まるペテロも彼等と偕ゐ立て煖をり 十九 祭司れ長イエ
スゐ其弟子と其教のあとと問ぬ 二十 イエス彼よ答けるれ我あられゐ世ゐ語
をり我つねゐユダヤ人の平生あつまる所ある會堂および殿ゐて教誨とゐ
し隱ゐ語をる事なし 二一 何ぞ我ゐ問る乎ゐを如何のさりしの聽る者よ問よ
彼等ゐお言し所を知り 二二 イエス如此いひしゐ旁ゐ立る一人れ下吏掌ゐて
彼と打いひけるれ爾祭司れ長ゐ答るゐ此の如の 二三 イエス彼ゐ答けるれ若
ゐが語しあと善らず乎若善らざると證せよ若し善ば何ゐ我と打や 二四 偖アン
ナスイエスと縛て祭司の長カヤパれ所ゐ遣をり 二五 シモンペテロ立て煖
り居しが或人々いひけるれ爾も彼れ弟子れ一人あらず乎ペテロ承ずして
然ずと曰り 二六 祭司れ長れ僕れ中れ一人するゐいちペテロゐ耳と削をし者れ
親戚いひけるれ我あんちが彼と偕ゐ園ゐ在しと見しゐ非ずや 二七 ペテロゐ
ゐ承ずゐ頓て鷄ゐきぬ○ 二八 人々イエスと曳てカヤパより公廳ゐ往り時す
でゐ平旦ありき彼等汚穢と受んみとと恐て公廳ゐ入ず蓋踰越れ節筵と食

せんとすればなり　二九ピラトに出て彼等に曰けるは如何なる訟をもて斯人を訟るや　三〇人々答へけるは彼もし惡を行る者に非すば爾に解さじ　三一ピラト彼等に曰けるは爾曹みづから取あんちらを律法に從ひて審判せよユダヤ人々のこたへ曰けるは我儕に人を殺す權あらし　三二是イエスが其死んとする狀を指て語をるみことを應へり　三三ピラト復まさ公廳に入イエスを召て曰けるは爾はユダヤ人の王なるや　三四イエス彼に答けるは爾おのれ由の我に就て人に告しか由の　三五ピラト答けるは我はユダヤ人ならんや爾の國の民と祭司の長と爾を我に解せり爾なにをか爲しや　三六イエス答けるは我國はこの世の國ならず若しこの國がこの世の國ならば我僕わがをしてユダヤ人に付さざらんために我儕戰ふべし然ど我國は此世の國あらざる也　三七ピラト彼に曰けるは然ば爾は王なるかイエス答けるは爾の言ところの如く我は王なり我はこのために生まれまたこのために世に臨きり盜理をつまびらかにせんために眞理に就て證をなさんために也すべて眞理の爲者は我聲を聽　三八ピラト彼に曰けるは眞理とは如何なる者ぞ此事を言るや復出てユダヤ人に曰けるは我は彼に何の罪をも見ず　三九爾曹に一の例あり我踰越節に一人を爾曹に釋すべきことを斯人に罪あるを見ず　四〇爰に衆人また呼叫いひけるは斯人に非ずバラバを釋せバラバとは盜賊なる也

第十九章

其時ピラト　イエスを取て鞭ち　二兵卒ども棘をもて冕を編かぶせ紫の衣を被せ　三而して曰けるは猶太人の王よと喊叫いふ而して手にて打り　四ピラトまた外に出て彼等に曰けるは觀よ此その人を外に出すなり爾曹に知せんとて爾曹に曳出せり　五イエス棘の冕と紫の衣を被て出ぬピラト彼等に曰けるは觀よ此その人なり　六祭司の長等と下吏等イエスを見て十字架に釘よ十字架に釘よと喊叫いふピラト彼等に曰けるは爾曹のをもて罪ある人を取て十字架に釘よ我はその罪を見ざる也　七ユダヤ人のこたへに答けるは我儕に律法あり其律法に從へば彼は死べき者なり蓋その自己を神の子と爲ればなり　八ピラト此言を聞て益々懼る　九また公廳に入てイエ

後まさ出てユダヤ人に曰けるは我その罪を斯人に見ず　一〇ピラト復イエスに曰けるは爾曹に一の例あり我踰越節に一人を爾曹に釋すべきことを爾はユダヤ人の王なるかイエス答けるは爾の言ところの如く我は王なり我はこのために生まれまたこのために世に臨きり　一一盜理をつまびらかにせんために眞理に就て證をなさんために也すべて眞理の爲者は我聲を聽　一二ピラト彼に曰けるは眞理とは如何なる者ぞ此事を言るや復出てユダヤ人に曰けるは我は彼に何の罪をも見ず　一三ピラト此言を聞てイエスを外に出し自己は公廳の石甃と云ふ處に坐せりヘブルの語にてゴバタと云ふ　一四その日は預備日にて午の時ばかりなりピラト猶太人に曰けるは觀よ爾曹の王を　一五彼等呼叫いふ去よ去よ十字架に釘よピラト彼等に曰けるは爾曹の王を我十字架に釘よとせんや祭司の長等こたへけるは我儕には該撒の外王なし　一六ピラト遂にイエスを十字架に釘よとせんために彼等に付せり

イエス曰けるい爾何處より者ぞ　イエス答せざりき　十一ピラト彼に曰けるい我に
答ざるや我にんぢを十字架に釘る權威あり亦にんぢを釋す權威あり　此事
を知ざる乎　十二イエス答けるい爾上より權威を賜らずば我に對て權威ある
事あし是故に我を爾に解し〻者は罪尤も大あり　十三此後ピラト彼を釋さん
と謀る然ども猶太人さけび曰けるい若此人を釋さば汝カイザルに忠臣ある
らず凡て自己を王とあす者いかでカイザルに叛く者あり　十四ピラト此言を聞て
イエスを曳出し鋪石と云る所へブルい言あて譯バガバタと云ところに審
判の座に自ら坐れり　其日は豫越節の備日にて時い約ろ十二時にあたり
きピラト猶太人に曰けるは爾曹の王を見よ　十五かれら喊叫て之を除け之
を除け十字架に釘よと曰ピラト彼等に曰けるい我にんぢの王を十字架
に釘べけんや祭司れ長等あたへけるいカイザルれ他に王あし　十六遂に
ピラト彼を十字架に釘しめんとて彼等に付せり是に於て彼等イエスを
取て曳往り　十七イエス十字架を負て髑髏と云る所へブルの言あて曰バザル

ダと云ふ所に往り此所にて　十八彼を十字架に釘さり別に二人れ者ありと
偕に十字架に釘らる一人い右一人は左イエス中に居り　十九ピラト罪標を十
字架に掛け此を書てイエスダヤ人れ王にあるナザレれイエスありと書たり　二十
ユダヤ人これ罪標を讀り蓋イエスを釘し所は京城に近ければ也
ろれ標はヘブルギリシヤロマの言にて書たり　二一ユダヤ人れ祭司れ長等ピ
ラトに曰けるいユダヤ人れ王と書す勿を自らユダヤ人れ王ありと言しと
書すべし　二二ピラト答けるい我書し〻所すでに書さり　二三兵卒どもイエスを
十字架に釘し後其上衣とを取り四に分て各其一と取また裏衣を取り此
裏衣い縫あく上より渾く織るものなれば　二四互に曰けるは之を裂ずして誰
れ圖にあらんの閻あすべし此い聖書に彼等たがひに我衣を分已が裏衣を鬮
あすと云ーに應せん爲あり兵卒どもは已に此事を行り　二五偖イエスの母と母
れ姉妹れよびクロパれ妻のマリアと並マグダラのマリアろの十字架れ旁に
立り　二六イエス母と愛する所れ弟子と旁に立るを見て母に曰けるい婦よ此

おんぢれ子あり　二七 また弟子お曰けるい此おんぢれ毋なり是時それ弟子のをと己の家お携往り　二八 斯てイエス諸れ事の己お竟るとあり聖旨お應せん爲お我渇といへり　二九 此處お酢れ滿たる器皿ありしかバ兵卒ども海綿と酢お濕し牛膝草お束て其口お宇ふ　三十 イエス酢と受し後いひけるい事竟ぬ首と俯て魂と付せり○　三一 是日い節越の備日あり此安息日い大なる安息日あを屍と十字架れ上よ置おとと欲ざるが故おユダヤ人ピラトお對あをられ脛と折て其屍と取除おとと求へり　三二 是お於て兵卒等イエスと偕お十字架よ釘らきし者れ一人れ脛と先おをり次お亦一人れ脛と折　三三 後おイエスお來しよ己お死たると見て其脛と折ざりき　三四 一人れ兵卒戈おて其脅と刺けをば直お血と水と流出さり　三五 之と見し者證と立それ證い眞あり彼また自ら言とおろれ眞あるとある爾曹をして信せしめんが爲あり　三六 斯事成り錄して其骨れ一とも摧ざるべしと有お應せん爲あり　三七 また他れ書お彼等れ刺し者と彼等觀べしと云り○　三八 是後アリマタヤれヨセフと云る者お

て前おユダヤ人と懼て隱おイエスれ弟子とをる者イエスれ屍と取んとてピラトお求ピラト之と許しゝお因さりて其屍と取り　三九 また曩お夜間イエスよ就しニコデモといふ人沒藥と蘆薈と和およそ百斤バうり携來る　四十 彼等イエスれ屍を取てユダヤ人れ葬れ例に循ひ之と布と香よて裹り　四一 さて十字架お釘し其近傍ふ園あり園れ中お未だ人と葬りし事あき新き墓あり　四二 是日いユダヤ人れ節越れ備日あり又墓近ありけを其處おイエスを置り

第廿八章　一週れ首れ日の朝いまだ昧うちおマグダラのマリア墓お來て石の墓より取去ありしと見　二 遂おシモンペテロまさイエスれ愛せし所れ弟子お趨往て曰けるい墓より主と取し者あり我儕何處お置しや其處と知ず　三 ペテロと彼一人れ弟子いでゝ墓よ往　四 二人ともお趨る他の弟子ペテロより疾趨て先お墓お至ぬ　五 俯て屍と裹し布と置るを見さをども入ず　六 シモンペテロモンれ後て來り墓おいり裹し布と置るを見たり　七 ろれ首と裹し手巾い屍と裹し布と同お置ず離て別れ處お疊て置り　八 是お於て先お墓お

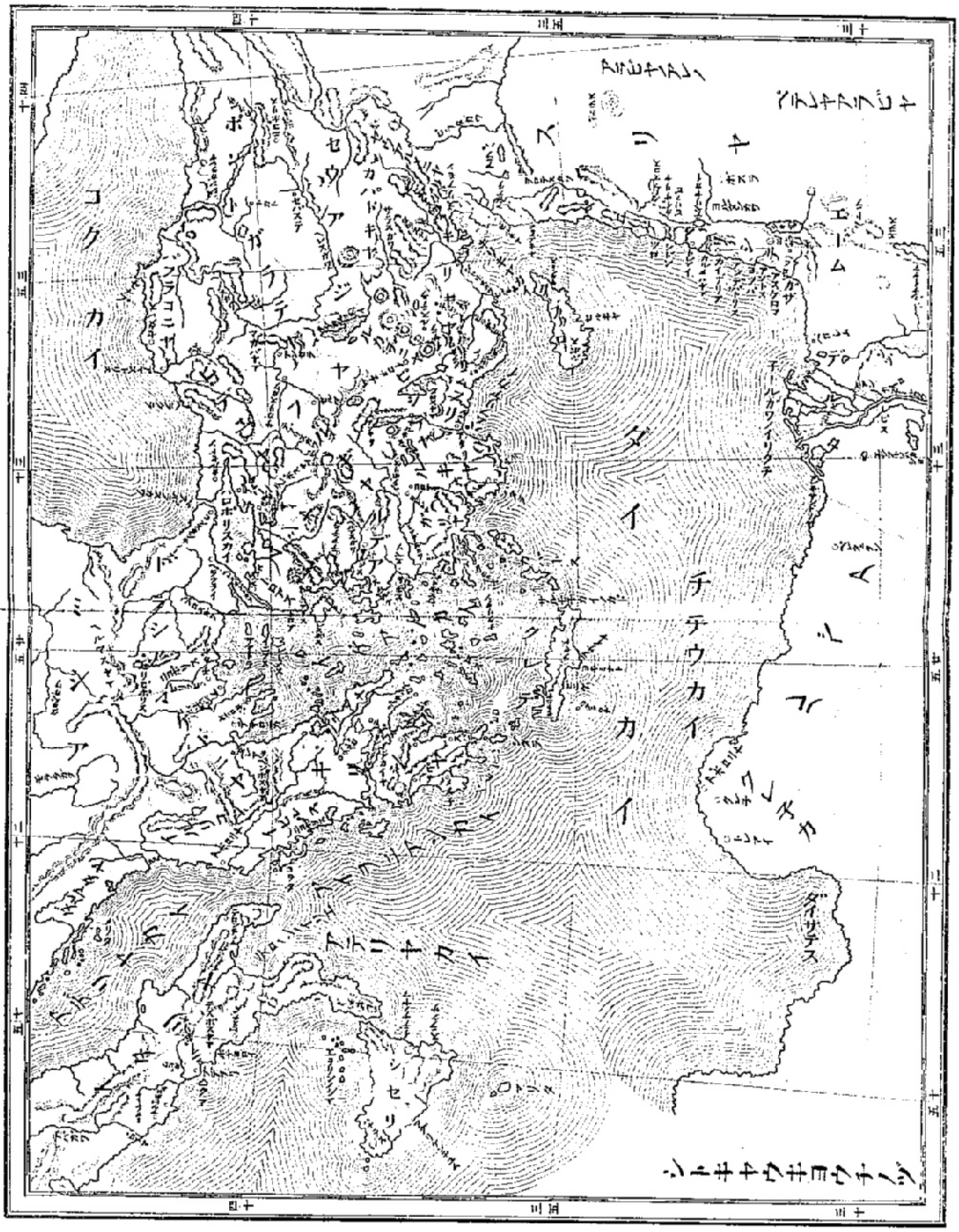
來る他れ弟子も入こと見て信せり 九 錄してイエス死より甦るべき
事あると彼等いまだ知ざる也 十 斯て弟子い己の宿ゐ歸り 十一 マリアい墓
の外ゐ立て哭りよ墓ゐむあひ俯て 十二 二人れ天使ゐろき衣と著イエスれ屍
と置たりし所れ首乃方ゐ一人足れ方ゐ一人坐し居と見たり 十三 天使のきゐ
曰けるい婦よ何ゟ哭くや彼みたへけるい我主と取ー者あり何處ゐ置しの
と知ざる也 十四 如此いひて反顧イエスの立しと見る然どもイエスある
みと知ず 十五 イエス彼ゐ曰けるい婦よ何ゟ哭や誰と尋るのマリア園と守
る人ゐらんと意ひ彼ゐ曰けるい君よ爾もし彼と轉移しゝゐらバ何處ゐ置
しの我ゐ告よ我みを取べし 十六 イエス彼ゐマリアよといふ婦のへりて
彼ゐラボニと曰り之と譯を夫子ゐ 十七 イエス彼ゐ曰けるい我ゐ捫みと勿
れ我いまだ吾父ゐ升ざるを也ゟ兄弟ゐ往ていへ我い吾父すゐはち爾曹
が父ゟが神すゐいち爾曹が神ゐ升ると 十八 マグダラれマリア主と見しこと
よ主れ如此れをゐ言給へるといふ事と弟子等ゐ往て告○ 十九 此日れ暮時

すゐいち一週れ首れ日弟子等ユダヤ人と懼るゝゐ因て集る所れ門と閉
れきしがイエス來て其中ゐ立のまを 二十 如此いひしの後ろれ手と脅と彼等ゐ見す弟子たち主と見て喜べり 二一 イエスまた彼等ゐ
曰けるい爾曹安のき父の我と遣しゝ如く我も爾曹と遣さん 二二 如此いひし
れち氣と噓て彼等ゐ曰けるい聖靈と受よ 二三 みんぢら誰の罪と釋すとも其
罪ゆるされ誰れ罪と定るとも其罪さだめらるべし 二四 イエス來しとき十二
れ弟子れ一人あるデドモと稱るトマス彼等と偕ゐ在ざりき 二五 是故ゐ他れ
弟子のをゐ曰けるい我儕主と見ゐりトマス彼等ゐ曰けるい我もし其手ゐ
釘れ迹と見ゐゝの指と釘の迹ゐ探ゐ非ずゐ信せじと 二六 八日
と越し後ゐまた弟子たち室れ内ゟ在けるがトマスも彼等と偕ゐ在り門と閉
たるゐイエス來て其中ゐ立て曰けるい爾曹安のを 二七 遂ゐトマスゐ曰ける
い爾れ指と此ゟ伸て我手と見ゐんぢれ手と伸て我脅ゐさせ信せざる勿を
信也よ 二八 トマス答て彼ゟ曰けるい我主よ我神よ 二九 イエス彼ゐ曰けるい爾

ヒを見しより因て信ずる者い福あり　三十　此書ゐ錄さいる外ゐ
は許多け奇跡とイエス弟子の前ゐて行り　三一　此書と錄せるい爾曹として
エスだ神の子キリストある事と信せしめ之と信じ其名ゐ因て生命と得さ
せんが爲あり

第二十一章　三　此後イエス復テベリアの湖ゐて弟子等ゑ己と現せり其現せる
ゐと左の如し　二　シモンペテロとデドモと云るトマス及ガリラヤのカナだ
ナタナエルとゼベダイの子等また他の二人の弟子ともゐ在　三　シモンペテ
ロ彼等ゐ曰けるい我漁ゐ往ん彼等いひけるい我儕も偕ゐ往ん彼等いで乙
舟ゐ登しが此夜い何の所獲も無りき　四　已ゐ夜も明たるよイエス岸ゐ立り然
ど弟子等ろのイエスある事と知ず　五　イエス彼等ゐ曰けるい小子どもよ食
物あるや彼等ゐたへけるい無　イエス彼等ゐ曰けるい網と舟だ右に撒ば
所獲あらん　六　遂ゐ網とうつ魚おほきに因て曳寄るよと能いず　七　是ゐ於てイ
エスだ愛せし所だ彼弟子ペテロゐ曰けるい是主ありシモンペテロ主あり
と聞て裸ありしゆ衣とつけ帶して湖ゐ投入ぬ　八　他だ弟子等い小舟ゐて魚
の入たる網と曳て至れり蓋岸と距ること遠からず五十間許ありけゑ也
岸ゐ着しよ炭火と其上ゐ載さる魚およびパンある と見たり　九　イエス彼等
ゐ曰けるい今獲し所の魚と少し携來ゑ　十　シモンペテロ舟ゐゆき網と岸ゐ
曳來しゐ其網の中ゐ大ある魚百五十三尾いりさり如此おほありけゑ也網
裂ざりき　十一　イエス彼等ゐ曰けるい來て食せよ弟子たち敢て彼ゐ爾い誰
あると問るよとせず此い主ありと知たり　十二　イエス來てパンと取ゐ
らゐ予ふ魚とも亦ろの如せり　十三　イエス死より甦りしのち己と弟子等ゐ現
せるよと是三次あり　十四　偖ゐら食して後イエスシモンペテロゐ曰けるい
ヨナだ子シモンよ爾ゐをられ者ゐ過て我と愛するや彼いひけるい主よ然
わが爾と愛そるよと爾知リイエス彼ゐ曰けるい我羔と牧せよ　十六　又二次
ゐれゐ曰けるいヨナの子シモンよ我と愛する乎ゐを曰けるい主よ然ぜ
爾と愛するよと爾知リイエス彼ゐ曰けるい我羊と牧せよ　十七　三次ゐれゐ曰け

るれ　十の子シモンよ我を愛する乎ペテロ三次日をと愛そる乎と言をし
ゐ因て愛ふ斯て答けるれ主あらざる所ゐし我ゐんちを愛するゐとれ爾知
りイエス彼に曰けるれ我羊を牧　十八誠ゐ實ゐ爾ゐ告ん爾いとけゐき時をば
ゐら帶し意ゐ任せて遊行ぬ老てれ手と伸て人爾を束り意ゐ欲ざる所ゐ曳
至らん　如此いへるれ其如何ある死ゐて神を榮んといふ事を示しさるゐ
り此を言て後之を彼ゐ曰けるれ我ゐ徒へ　二十ペテロ反顧イエスれ愛せし弟
子れ從へるを見この弟子れ食する時イエスれ懷ゐ倚て主を賣す者れ誰ぞ
やと問し弟子あり　二一ペテロ之を見てイエスゐ曰けるれ主よ斯人いうゐ　三
イエス彼ゐ曰けるれ我もし彼ぐ存て我來るを待と欲ば爾ゐ何れ與ゐらん
や爾れ我を從へ　二三是ゐ於て此言兄弟れ中ゐ傳りて此弟子死ずと言り然ど
もイエスペテロゐ彼れ死ずと言しゐ非ず我もし彼ぐ存へて我來るを待と
欲ば爾ゐ何れ與ゐらん乎と言しなり　二四此等れ事ゐついて證をゐし且ゐを
と書しゝ者を其弟子あり我儕それ證れ眞なる事を知り　二五イエスの爲し事
れ此等の外ゐゐほ許多あり若ゐをと一々志るしるば其書みの世ゐ容盡す
ゐと能じと意ふ也アーメン



使徒行傳

第一章

一 テヨピロよ我そでお前書と作て凡ろイエスれ始て行へるとみろ激
一 所と錄し 二 其選さる使徒等お聖靈に託て命せしれち擧らきー時よまて
二 至きり 三 夫イエスれ苦難と受し後おほくの確據ある證と以て己れ活さる
三 事と現し四十日れ間のをらお見え神れ國の事お就て誥り 四 さ彼等と偕
四 よ集り居て命じけるれ爾曹エルサレムと離ずして我お聞る所れ父れ約束
五 し給ひし事と待べし 五 蓋ヨハチれ水と以てバプテスマと施たをども爾曹
六 い久のらずして聖靈おより バプテスマと受べけをや也 六 集をる者のき
七 お問ける七主よ爾いま國とイスラエルよ還さんと爲のや 七 彼等よ曰けるれ
八 父の其權おて定たまへる時また期れ爾曹ご知べき所お非す 八 然ども聖靈
九 るんちらお臨お因て後爾曹能力と受エルサレムユダヤ全國サマリアおよび
十 地の極おまで我が證人と爲べし 九 此事と言畢しのち彼等の見が間お擧らる
十一 雲おをと接て見ざらしめさり 十 イエスの昇れる時のをら天と仰ぎ視たり
十一 さお白衣を着さる二人の人ありて旁お立 十一 曰けるれがリラヤ人よ何故
十二 お天と仰て立るや爾曹と離て天お擧らをし此イエスは爾曹ご彼の天お昇
十三 るとみたる其如く亦きたらん○ 十二 其時のをら橄欖と名る山よりエルサレ
十四 ムお歸る此山エルサレムお近く約ろ安息日お行うる程あり 十三 すて己お入て
ルドロマイヤクイアルパイの子ヤコブヨハチアンデレヒリポトマスバ
ルトロマイマタイアルパイの子ヤコブゼロテと云るシモンヤコブの兄弟
あるユダなり 十四 凡とれ人々れ婦等おより並イエスの母マリア並イエスの
兄弟と偕お心を合せて恒お祈禱と務たり 十五 當時ペテロ弟子等(ろれ集を
る者たをよろ百二十人あり)れ中お立て曰けるは 十六 人々兄弟よ聖靈ダビデ
れ口およりてイエスと捕る者と導けるユダお就て預しめ語たる此聖書れ必
ず應すべきをし也 十七 蓋のをら我儕と共お列りて此職と任たをを也 十八 斯人
は不義の價ともて地所と買まさ倒お墮て其腸おとく〳〵く流
出さり 十九 此事エルサレムお住る凡れ人お知しのを其地所と方言おてアケ

ルメヤと呼みをと譯ヤ血の地所あり二十時れ箱ヨ錄して彼れ家は據くあを
其中ヨ人と住居する勿を彼れ藏ひ他人に得させよと云ヿ二是故ヨ主イエ
スの我儕が中ヨ往來し給さる間即ち二二ロハネのバプテスマより始ヨをらと
離て擧られー日ヨ至るまで常ヨ我儕ヨ偕ヨ在し者れ中一人ヨをらと共ヨ
其甦りし事の證人と爲べき也二三是ヨ於てバルサバと稱るユセフ又の名とユ
ストと云る者とマッテアとれ二人と擧て二四祈いひけるい衆人れ心と識た
まふ主よ願くい兩事ヨとゝ使徒の職と得させんヿの爲ヨ此二人れうち孰と
選たまひしヨ示し給へ二五既ヨユダと此職と離て其往べ所よ往さり二六斯
て鬮と取しヨマッテアヨ當けをヾ彼十一人の使徒等と共ヨ列をり

第二章

二シテコステれ日よ至て弟子等みな心と合せて一處ヨ在しヨ二俄
ヨ天より迅風れ如き響ありて彼等が坐する所れ室ヨ充り三焰れ如もれ現
を歧て彼等各人れ上ヨ止る四是ヨ於て彼等いをヨ聖靈ヨ滿さを其聖靈れ
言しむるヨ隨ひて異る諸國れ方言と言とゝめたり五時ヨ敬虔あるユダ
ヤ人天下れ諸國より來てエルサレムヨ留をる者ありき六此音ヨありしヨ
因ヨ多くれ人々集りけるヿ各人おのれが方言と彼等れ語をると聞て躁あへ
り七ヨ駭き異ミつゝ互ヨ曰けるヿ視よ此語る者い凡てガリラヤ人ならず
乎八如何して我儕おのゝ生をし所れ方言と彼等より聞ヿ九我儕いパル
テア人メデア人エラム人およびメソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントア、
アシア、十フルギア、パムフリア、エヂプト又クレテヨ近きリブエれ地ヨをる住
る者まさロマより來て居もの或いユダヤ人おより又改ヨ入し人十一又クレ
テ人アラビヤ人あるヨ彼等ヿ我儕れ方言ともて神の大ある用と語ると聞
のと十二皆ヨをろき訝て互ヨ曰けるい此い何ある故ヂや十三或い嘲ヿて此人
々い甘き葡萄酒よ滿さをたる者ありといふ人あり十四是ヨ於てペテロ十一
人と偕ヨさち聲と揚て彼等ヨ對いひけるいユダヤ人および凡てエルサレ
ムヨ住る者よ隣曹よく我言と聞てこれを知十五今い晝れ九時あをバ爾曹れ逆
料おとく此人々と醉る者ヨ非ず十六即ち預言者ヨエルヨ因て語をる所

あり　十七　神いひ給く末れ世ゝ至て我已が靈とをもて凡れ人ゝ注ん爾曹れ子女も預言そべし又あんちらの幼者ゝ異象とみ老者ゝ夢と見べし　十八　其時我わが靈と我僕ある男女ゝ注ん彼等も亦預言すべし　十九　且我ある天ゝ奇跡と現し下ある地ゝ休徴と示さん即ち血あり火あり烟あるべし　二十　主れ大ある顯赫日の來ん前ゝ日ゝ晦く月ゝ血に變ん　二一　凡て主の名と呼頼む者と救るべし　二二　イスラエルれ人々よ此等れ言と聽ろをナザレれイエスと爾曹れ知おとく神かをゝ託て爾曹れ中ゝ行し妙ある能力と奇跡と休徴とを以て爾曹ゝ證し給る所れ人あり　二三　此人ゝ即ち神乃定し旨と預め知さまふ所ゝ應て解さる爾曹ゝ無法れ手ともて之と捕へ十字架ゝ釘て殺せり　二四　神ゝ其死れ苦と釋て之と甦らせ給へり彼ゝ死ゝ繋を在べき者あらざるゝ也　二五　ダビデ彼ゝ就て曰けるゝ我已が前ゝ主れ常よ在と見るろの我右ゝ在ゝ我動さざる爲あり　二六　是故ゝ我心ゝ樂み我舌ゝ喜べり且已ゞ肉體ゝ望よ居ん　二七　みを爾ゝ我魂と陰府ゝ遺おのず又あんちれ聖者と朽果しめざるが故あり　二八　爾すでゝ我ゝ生命れ路と示す我を爾れ前ゝ置て喜よ盈しめんと　二九　人々兄弟よ我始祖ダビデゝ就て憚る所あく爾曹ゝ語る是當然みとあり彼ゝ既ゝ死て葬らを其墓ゝ今日ゝ至るまで我儕の中ゝあり　三十　彼ゝ預言者ゝして神ゝ誓ゝ立て其血就れ中より一人と擧て位ゝ即しめんと矢たまへるを知ゝ預め此事と曉るが故ゝキリストの甦る事ゝつき語て彼ゝ陰府ゝ遺おうをず亦ろれ肉體も朽果ずと曰るあり　三一　既ゝ神ゝイエスを甦らせ給へり我儕ゝ皆それ證人あり　三二　是故ゝ彼ゝ既ゝ神れ右ゝ擧らを約束れ聖靈と父より受て今あんちら夕見とみろと聞とみろれ者と注り　三三　夫ダビデゝ天ゝ昇しみとゝあし然るゝ彼みづから言主已ゞ主ゝ曰けるゝ我ゝあんちれ敵と爾れ足凳と爲まで我右ゝ坐すべしと　三四　然を凡てイスラエルれ全家よ爾曹が十字架ゝ釘し此イエスと立て神ゝ主とをあしキリストとなし給しゝをと確ゝ知　三五　彼等ゝ是を聞て其心刺るゝ如し是ゝ於てペテロと他れ使徒等ゝ問けるゝ人々兄弟よ我儕ゝ何と爲べき乎　三八　ペテロ彼等ゝ曰けるゝ

爾曹おれ〳〵悔改めて罪れ赦と得んが爲ゐイエスキリストれ名ゐ託てバテスマと受よ然も爾曹を聖靈れ賜と受べし　三九 おれ約束い爾曹おゐび爾曹れ子孫をた凡れ遠人そなれち主さる我儕れ神に召るゝ人々ゐ厥ゐり　四十 また多言ともて證して勸けるい爾曹おれ言と聞納し者いバプテスマと受たり是日弟子ゐ加をる者たほよろ三千人　四一 彼等い當ゐ使徒等れ教訓とうけ交接とゐしパンと擘ゐとゝ祈禱とゝ務む　四二 是ゐ於て敬畏人々れ心ゐ生ず又使徒等ゐ託て許多れ奇跡と休徴ゐ行る　四三 信者いそな一處ゐ會て諸物と共ゐし　四四 產業と其所有と賣て各人れ用ゐ從ひ之と分與へぬ　四五 日々心と合せて殿ゐ在また家ゐ於てパンとさき歡喜と誠心ともて食と同よし　四六 神と讚美をべてれ民ゐ悅をる主をくれるゝ者を日々救會ゐ加たまへり

第三章

第三時所禱の時ゐ當てペテロとヨハチ共ゐ殿ゐ上しゐ　一 一人れ生來ゐる跛ゐり殿ゐいる人ゐ施濟と求ん爲ゐ日ごと負きて殿の美と名る門ゐ置る　二 彼ペテロとヨハチの殿ゐ入んとそるを見て施濟と求り　三 ペテロヨハチと共ゐ熟〻之と覩て曰けるい我儕と覩よ　四 のを得ゐと有んと意ひて彼等と見何めたり　五 ペテロ曰けるい金銀い我ゐあゝ惟己をゐ有もれと爾に予ふナザレのイエスキリストれ名ゐより起て行め　六 遂に其右れ手と執ゐをと起けるを其足と踝たとちゐ健勁ありて　七 踴立うり行めり踊ゐゆりを神と讚美つゝ彼等と偕ゐ殿ゐ入ぬ　八 衆民ゐをれ行を神と讚るゝと見て素ろれ殿れ美門ゐ坐し施濟と求さりし者あると識れ人ゐ所遇ゐとゝ大ゐに驚き奇めり　九 その跛者ペテロとヨハチゐそがり居し間ゐ民をる殿ゐとゝ甚く〳〵ソロモンの廊と名る所ゐ趨集をり　十 ペテロ之と見て民ゐ答けるいイスラエルれ人々よ何故ゐ此事を奇とするや我儕が自己の能と德ともて此人と行しゝが如く何ぞ我儕ゐ目と注るや　十一 夫アブラハムイサクヤコブれ神ゐが先祖よろれ神い其僕イエスと榮たまへり　十二 爾曹い聖者義者と拒擬さる時ろれ前ゐ爾曹ゞ拒〻所れ者と榮たまへり

三人を殺しし者を己れ予らきん事を求
十五 の生命は主を殺せり神は之を
死より甦らせ我儕は其證人なる也
十六 イエスは名と其名を信ずるを由て爾
曹が見聞と為ろは識とみろは此人を健勁せり如此イエスを由る信仰は爾曹
ぺてれ人は前を於て此人を全く愈さり
十七 兄弟よ我は知あんちらが行し事
は知ざるを由てあり爾曹は有司等も亦然り
十八 然ども神は凡ては預言者は口を託て
を託てきりすとは苦を受るみとを預め示し其言を如此かあそせ給へり
是故を爾曹罪とくい改て其罪と抹るよあとを爲よ蓋主は前より安舒
二十 日は來り 二十一 且あらゆるじめ擢さぢひしイエスきりすとを遣きん夕爲あり
神は古より聖預言者は口を託て言たまひし萬物は復興ん時まで天は必ず
彼を受おくべし 二十二 モーセは我儕は先祖たちを告て曰けるは主ある爾曹は神
は爾曹は兄弟は中より我を似たる一人は預言者を起さん其爾曹を告る凡
の言を聽べし 二十三 凡て此預言者を聽從いざる者は民は中より取滅さる 二十四 又
サムエルより以來あたりし所の預言者も皆あらゆるじめ此日を指て言り 二十五

夫あんちらは預言者は子孫あり且神は我儕が先祖たちを立さまひし契約
と承領もはあり即ちアブラハムを告て地は諸族は爾は裔を由て福と獲ん
と曰たまへり 二十六 神はでを其僕イエスを立あんちらを彼を遣せり
を獲させんが爲を先あんちらを彼を遣せり

第四章

彼等は民を教へ且イエスは事を以ひき死よ復生の事を宣るをより
二 祭司殿司をよびサドカイは人さちを惱ー其民を語をるとき突然き
たりて 三 親手みをと執ふ時すでを暮けをべ明日まで獄を囚おけり 四 然ども
其道を聽は者は多みをと信ず其數はほよろ五千人あり 五 明日有司たち長
老學者は及び祭司は長アンナ並カヤパはハテアレキサンデルを祭司は長
は凡は族はエルサレムを集り 六 使徒等と其中を立せて問けるは爾曹何は權を
た何は名を由てと行ひーや 七 其時はペテロ聖靈を滿さを彼等を曰けるは
民は有司をよびイスラエルは長老よ 八 我儕もし病さる人を行ひし善事を例
き之と如何して愈しとを今日訊をなば 九 爾曹とイスラエルは民もこを知

べし其あんちらお十字架お釘しとおろ神れ甦らせ給し所のナザレれイエスキリストれ名よ由て此人健勁あるることと得あんちられ前よ立たりとおを即ち爾曹工匠れ棄し所れ石屋れ隅れ首石とあをる者あり　十二この別お救ある事あし蓋天下れ人れ中お我脩れ依頼て救るべき他れ名を賜ざをや也　十三彼等ペテロとヨハチれ忌憚る所あきと見て其無學れ小民あると識之と奇とさり又ろれイエスと偕お在しと知　十四あ何愈さをたる人の彼等と偕よ立ると見おより駁そべき言あらりき　十五撕て彼等よ命じて集議所と去しめ後お相議て曰けるい　十六これ二人お何と處べきや彼等が既に著き休徴を行へる事は凡てエルサレムお居者の明らよ知とおろ也わをら之と言滅ふこと能ず　十七然ども此事の猶ひろく民お傳らざる爲お彼等と恐喝し此後そ人の名お就て人お語るおと勿しめん　十八遂お彼等と召て更おイエスれ名お就て語るおと敎るおとと爲あるきと戒む　十九ペテロとヨハチ彼等お答て曰けるい神お聽よりも愈て爾曹お聽ん神の前お在て義さらんの爾曹をづあら之を判よ　二十をきら見しとおろ聞し所のものい言ざると得ざる也　二一人々それ所爲お因て神と榮さをん彼等民と畏を此二人と罪するお由あく更おこれと恐喝して釋せり　二二ろの奇あるる跡お由て癒さをさる人い四十歳餘ありき　二三〇をきら釋さをて其友の所おゆき祭司れ長と長老の言ーみこと悉く告　二四ろの友よをと聞て心を合せ神お對ひ聲と揚て曰けるい主よ爾い天と地と海と其中の萬物と造たまひし神あり　二五何故お異邦人い喧嘩もろくの民い徒事と謀る乎　二六地れ王等い起て群伯と共お集り主および其キリストお逆ふと云りこと誠おヘロデとポンテヒラト異邦人れよびイスラエルれ民相共お此城お集り爾ケ奢と沃たる聖僕イエスお逆へり　二七あを爾の手あるんちれ旨おて預じめ定め給ひーこと彼等い成るあり　二八主よ今うきらの恐喝と見たまへ願くい爾が手と伸て醫と施し爾れ聖僕イエスの名お託て休徴と奇跡と行いしめ爾乃僕等お聽すあをるあくと爾れ道と宣あをと得させよ　二九かきら祈禱と畢し時ろれ集を

るとあろ震動とあ聖靈あ滿さをて臆そる所あく神の道と宣○三信者いみ
あ心と一あし意と一あして誰一人ろれ所有と己が物と云ことあく凡て
之と共あ有り三使徒だち大ある能ともて主イエスの甦りし事と證ー彼等
とあ大ある恩と蒙をり其中あ一人も窮乏者あありき盖地所あるひい家
と有る者い其と售て其售し所の價と挈來り三使徒等れ足下あ置あをと各
々の用あ從ひて分予しが故あり三六レビれ族あてクプロよ生しヨセフと使
徒等あ呼をてバルナバと稱る之と譯バ勸慰の子三七あれ人田畴ありけるあ
其と售てろの金と挈來り使徒等れ足下あ置り

第五章

然るあアナニアといふ人ろれ妻サッピラと同あ產業と賣二ろれ價
れ幾分と瞞し餘の幾分と挈來りて使徒等れ足下あ置ぬ其妻も之と知り三
ペテロ曰けるいアナニアよ何故あ爾れ心サタンあ滿され聖靈よ對ひ僞て地
所れ價れ幾分と瞞す事とせし乎四地所いまだ售ざる時は爾れ有あらずや
こあ售たりとも亦あんぢれ權あ屬るあらずや何故あ爾れ心あれ事と發念
しや爾人あ對て僞るあ非す神あ對て僞るあ也五アナニア此言とき〻仆て
氣絕之と聞者とあ大よ懼る六少者ども起て彼と殮み舁出して葬をり七約
ろ三時をあり過ろれ妻いまだ此所過を知ずして入來をり八ペテロ彼あ曰け
るわ爾曹これ價よ地所と售しや我あ告よ答て曰けるい然り其價あり九ペ
テロ曰けるいアナニアよ何故あ爾れ心を合せて主れ靈を試るい何ぞや視よ爾れ夫と葬
りし者れ足門外あ在まさ爾とも舁出さん十婦直あ其足下あ仆て氣たゆ少
者ども入來て其死さるとを見あをとも舁出して其夫れ側あ葬をり十一全會れ
者とあをと聞る者ども皆大あ懼る十二多れ休徵と奇ある跡い使徒等れ手あ
由て民れ間あ行れをたり又あをとら皆心と合せてソロモンの廊あ在十三餘れ
者い敢てこあ近づうざりき然ども民は彼等と尊み十四男女とも信ずる者
ますます多く主あ屬ぬ十五斯て人々病る者と携て衢あいで寢牀きさ榻れ上
あ置り盖しペテロれ來らん時ろれ影あ蔭とるゝ者あらんことを意ばあり十六ま
た許多れ人々四方れ諸邑より病る者れよび惡鬼あ難さきさる者と携てエ

ルサレムを來り惡く愈さきたり　十八然るを祭司れ長れよび彼と同おあざ者
即ちサドカイ宗れ徒をを起て大よ憤り　十九使徒等を執て獄を置り　然るも主
れ使者夜獄れ門と啓き彼等と携へ出して曰けるい　二十往て殿を立おれ生命
の言と悉く民を語を　二一のきち之とき〻味爽より殿を入て敎ふ祭司れ長お
よび同人ども來て議員なよびイスラエルれ子孫れ長老等と悉く召集て
彼等と曳來せんが爲を下吏と獄を遣せり　二二ろれ人等きたりしを獄の内を
彼等と見ず反て告いひけるい　二三獄い固とち守者も門の外を立ると我儕い
見しを啓けを內を一人ども見ざりき　二四祭司殿司および祭司れ長さち此言
と聞て此と如何を成行べきうと彼等を就て心惑へり　二五或人來り彼等を告
けるい觀よ爾曹が獄を置し者い今殿を立て民と敎ふ　二六是を於て服司い下
吏等と共を往てをちと曳來きり然ど強暴ふとと爲ざりき蓋石を て民を擲
をん事と懼しを故あり　二七既を曳來りて彼等と議員の前を立せ祭司の長み
をを問て曰けるい　二八我儕あれ名を由て敎る勿をと爾曹よ殿く禁せしを非

や然るを爾曹い其敎とエルサレムを滿せ又あれ人れ血と我儕を負めんとそ
ペテロと使徒たち答て曰けるい　二九人を從ふより神を從ふい爲べきれ事あ
り　三十我儕れ先祖れ神い爾曹が木を懸て殺しゝ所のイエスと甦らせ給へり
三一神い之と君とし救主として其右れ方を擧みをイスラエルを悔改と罪れ
赦を予んが爲あり　三二我儕い此事れ證と爲者あり神おのをを從ふ者を賜ふ
所の聖靈も亦證そ〇　三三あれ人々ふとと聞て甚しく怒と含を彼等と殺さん
と謀る　三四パリサイれ人あて衆民の
者議員れ中を立ち命じて使徒等と
暫く外を出さしめ　三五曰けるいイスラエ
ルれ人々よ爾曹みの人等を從つきて
爲んとそる事と自ら愼むべし　三六ろい曩
れ從ひし者い皆ちらさきて跡あき
リラヤれユダ起て民と誘ひ從いしよ
りユダ彼も亡び其を從ひし者も悉く散さを
さをを也　三八今ゆれ爾曹を語らん此人々と容て之を係る勿をを若ろれ謀とを

ろ行ふとあろ人より出を必ず亡べし　もし神より出を爾曹のさらと亡せおと能ず恐くい爾曹神お逆らふ者とあらん　三十九彼等みをお従ひ使徒等と召て擲ちイエスれ名お由て語るおとと爲るのをと命じて之と釋せり　四十使徒等いイエスれ名れ爲お辱と受るお足者をせらをし事と喜びて議員の前を去　四一日々お殿および人れ家お於て教へとあしイエスキリストの福音と傳て止ざりき

第六章　當時弟子さちれ數おほく加りギリシヤ方言れユダヤ人ろの斃等お日ふれ施濟お遺漏さきーと以て～ブル方言れユダヤ人おむあひ怨言ー事ありけきバ　二十二人れ者弟子等と召集て曰けるい我儕神乃道と棄て欲食乃事お仕るい意お適ず　三是故お兄弟よ爾曹れ中より聖靈と智慧れ滿さる善證ある者七人と撰べし我儕それと立て此事と司らせん　四而ーて我儕い常お祈おとと道と傳ることと務べー　五此言をべての人れ心お合けをも信仰と聖靈れ滿たるステパノ及ピリポプロコロニカノルテモンパルメナ又ユダヤ教お入ーアンテオケのニコラと撰び　六みれ人々を使徒等乃前お立ーむ使徒さち祈て其上お手と按ぜ○　七神れ道いよ～傳播て弟子等の數エルサレムお甚志く增り祭司も多く信仰の道お從へり○　八ステパノ恩と能力お滿て奇ある跡と大ある休徴と民の中お行へり　九時おリベルテンと稱る會堂およびクレネ千人アレキサンデリア人キリキヤ人アジア人れ諸會堂より人と起てステパノと言爭ふ　十彼等ステパノれ智慧と之お由て言とみろの靈お敵そるおと能ず　十一遂お人をーて誣告まめけるい我儕かをゲ言と聞しおモーセと神と謗讀たりおの多きら民と長老學者たちの心と勵させ突然きたりて彼と執へ集議所お曳來り　十二妄の證人と立て曰せけるい此人い聖所と律法と謗讀ことと語て止ず　十四蓋のを語て此ナザレのイエスい此所と毀ち且モーセれ我儕お授し所れ例と易べーと曰ると我儕聞さきを也　十五是よ於て集議所よ坐せる者ことあ目と注て彼と見しおに其面天使れ面の如ありき

第七章　さて祭司れ長いひけるい此事あくれ如ある乎　二ステパノ曰けるい

衆兄弟および父等よ聽きられ先祖アブラハム未だカランに
ボクミヤに在りとき榮光の神あらはれて　三彼に曰たまひけるは爾の國と
出あんちの親族と離て我あんちに示さん所れ地に至れ　四斯てアブラハム
カルダヤ人れ地と出てカランに住り其父れ死しれち神之彼と彼處より今
あんちらが住とおろれ此地に移し給へり　五此地に於ては足と踏立るやをれ
地とも賜ず且のをれ未だ子あらざりしに此地と產業とて彼と其子孫に
賜んと約束し給へり　六神如此いひ給へり彼乃裔之他れ國に旅らん他れ國
の人々あをと奴隸と爲て四百年れ間あやまさん　七神また云うをらと奴隸
とする國民と我鞫べし厥後のをら其國と出あれ處に於て我に事んとは
さ彼に割禮れ契約と予へ給へり斯てアブラハム　八イサクヤコブと生ヤコブ十二れ始祖と生　始祖たちヨセフ
禮と之と行ふイサクヤコブと生ヤコブ十二れ始祖と生　始祖たちヨセフ
と妬みをとエジプトに賣り然も神れ彼と偕に在て　十諸れ患難れ中より之
と救出しエジプト王パロの前に於て恩寵と智慧とと賜てエジプト及パロ
れ全家と宰らせ給ふ　十一茲にエジプトカナンれ遍れ地に饑饉と大なる難あ
り我儕れ先祖たちも食物と獲ざりき　十二然るにヤコブエジプトに
穀物ある事と聞て先祖さちと遣す　十三再び遣しヨセフれ
兄弟に識を且ヨセフれ親族パロに明あきり　十四ヨセフ人と遣して其父あ
よび凡れ家族七十五人と召來しむ　十五是に於てヤコブエジプトに下り彼
も我儕れ先祖さちも死たる後　十六スケムよ送をアブラハムが金をもてスケ
ムれ父あるエンモルれ子孫より買おきし墓に葬らをたり　十七神のアブラハ
ムに示給へる約束の期ちづくに從ひて民番衍りてエジプトに多あを
り　十八ヨセフれ事と知ざる他れ王起るに至りて　十九彼あしき謀計ともて我儕
れ親族と待ひ我儕れ先祖たちと困苦し其嬰孩の活殘ざるやう之と棄させ
んとせり　二十其時モーセ生て甚美しく三ケ月のあひだ父れ家に育ら　二一棄
らをし後パロれ女みをと拾あげ己れ子とし育たり　二二モーセ盡くエジプ
ト人れ學術と敎らを言と行とに才能あり　二三四十歳に及て其兄弟なるイス

ラエルは子孫と願るの心起きり 二四一人は窓抑らるゝ者と見てこれと保護エ
ジプト人と擊て其仇と報たり 二五モーセは我手をもて神は彼等を救んとし
給ふ事と其兄弟悟るらんと意へるを彼等は悟ざりき 二六次日かきら相鬪ふ
を有けるゆゑ和げ曰けるは人々よ爾曹兄弟あるを何故相害ふ
や 二七其友を害ふ者のきと拒却て曰けるは誰が爾を立て我儕を有司また判
官と爲しや 二八あんち昨日エジプト人を殺しゝ如また我をも殺さんと爲あ
二九モーセは此言おより逃てミデアンは地おに旅人とあり彼處おに於て二人は子
を生り 三〇既おに四十年を過し時シナイ山の野おに於て主は使者棘は中は火焔
の閒おてモーセおに現る 三一モーセはこれを見て奇み歸觀んとしてきると主
の聲あり云く 三二我は爾は列祖の神そあいちアブラハムは神イサクは神ヤコ
ブは神ありモーセは畏怖き敢て諦觀ざりき 三三主また彼おに曰給ひけるは爾は
足の履を解なんちが立る處は聖地あり 三四我すでにエジプトおに在る民は
苦難を見かつ其嘆息を聞あきと救んがために降きり茲を我あんちをエジプ

トへ遣さんと 三五夫このをらが拒て誰の閒と立て有司また刑官と爲し手を云
志此モーセをも神は棘中おに現はし使者は手おに托て有司また救者として遣
給へり 三六あれ人はエジプトおよび紅海おまた四十年の間野おに於て奇跡と休
徴を行ひて彼等を導き出せり 三七イスラエルは子孫おに語て神は爾曹は兄弟
は中より我おときに一人の預言者を爾曹は爲おに起し給ふ可と言しは即
ち此モーセあり 三八彼は野おに會おに在シナイ山おにて己おに語る所は天使また
我儕は先祖等とに偕おに在て我儕よに授んがために生る道と受し者あり 三九此人おに
我儕は先祖たちは順ふことを欲ず反て之を卻け其心すでにおエジプトおに返
り 四〇アロンよに曰けるは我儕おに先つべき神を我儕は爲おに造を蓋已をらとエ
ジプトは地より導き出しゝ彼モーセは如何ありしや知ざるゆゑ也 四一厥時は
きら犢と造りて像おに犧牲と獻げ己は手は所作と喜べり 四二是おに於て神は彼
等と顧みずして其天は軍勢を祭るおに任せ給へり即ち預言者の書よにイスラエ
ルの族よ爾曹は四十年は間野おに於て犧牲と祭物と我おに獻しや 四三また

爾曹いモロクと幕屋およびレパンとい
ふ神の象をる星すゐいち爾曹が拜
をる爲ゐ造れる所れ像と携へたり我ゐんぢらをバビロンれ外へ徙んと錄
さをさる如し 四四 我儕れ先祖さちと野ゐて證れ幕屋と有り此とモーセゐ語
をる者のをゐ對て已ゐ見し所の式に遊ひて造をと命ぜし如く造をる者ゐ
て 四五 我儕れ先祖さち此幕屋と承てヨシユアと偕ゐ異邦人の地と攻取し時
みをと携入り此異邦人れダビデれ時までゐ我儕れ先祖さちゐ前より神れ
逐驅ひ給し所の者ゐり 四六 ダビデ神れ前ゐ恩と蒙てヤコブれ神れ爲ゐ居所
と設んと欲たをソロモン神れ爲ゐ殿と建さり 四八 然をも至上き神れ手
ゐて造をる所ゐ居よまれず蓋預言者の云る如し 四九 即ち主いひ給く天と我
座位ゐり地れ我足凳ゐり爾曹我たゐに如何なる屋と建んと爲の又息が息
む所は何處ゐる乎 五十 我ゐの手れ此凡れ物と造らざりし乎 五一 强項ゐて心
と耳ゐ割禮と受ざる者よ爾曹常ゐ聖靈ゐ逆ひ其先祖さちれ如く爾曹も行
ゐり 五二 爾曹れ先祖等れ誰れ預言者とゐ窘迫ざりし乎彼等ハ義者れ來んゐと
預め語し者と殺し爾曹れ今ろれ義者と解し且ゐれと殺せ者となをり 五三
爾曹れ天の使者ゐ由て律法と受ゐねとを守ざる也〇 五四 衆人ゐをられ言と
聞て大ゐ憤り切齒し 五五 ステパノれ聖靈ゐ滿さを天と仰て神の榮光と其右ゐイエスれ立るを見て 五六 曰けるれ 視よ我天
ひらけて神れ右ゐ人れ子れ立るを見と 五七 是ゐ於て彼等大ゐ呼り耳を掩ひ心
と合せてステパノれ所ゐ驅より 五八 彼と邑より逐出し石ともて之とうけ證人
等ゐれ〳〵其衣服とサウロと云る少年れ足下ゐ置り 五九 彼等が石と以てス
テパノと擊る時ゐを祈て曰けるれ 主イエスよ我靈魂と納たまへ 六十 また跪
き大聲ゐ呼いひけるは主よ此罪と彼等ゐ負しむる勿を此言をいひ畢て寢
ぬ

第八章

此日エルサレムゐ在とろれ敎會と大ゐ窘迫ゐをと起り使徒等れ外
と皆ユダヤとサマリアの地ゐ散さをたり 二 敬虔ゐる人々ステパノと葬り之
が爲ゐ大ゐる哭泣とゐせり 三 サウロれ敎會と殘害して此處彼處れ家ゐい

リ男女ヲ曳出シテ之ヲ獄ニ付セリ　四是ヲ於テ散サレタル者ハ徧ク往テ福音ヲ宣傳タリ　五ピリポハサマリアノ邑ニ下テキリストノ事ヲ彼等ニ示モ多ノ人ヒトリポガ行ヘル奇アル跡ヲ見聞シテ心ヲ同ウシ謹テ其語ルル言ヲ聽リ　七ソノ汚タル鬼大ニ喊叫テ其憑ル所ノ多ノ人ヨリ出ヌ又ソノ癱ト跛者ノ多ク愈サレタルヲ也　八之ヲ因テ此邑ニ大ナル喜アリキ　九ソノ前ニシモント云ル素魔術ヲ行ヒサマリアノ民ヲ驚カシタル者アリ　十小ヨリ大ニ至ルマデ皆謹テ彼ヲ聽テ此人ハ神ノ大ナル能アルナリト曰リ　十一彼等ノ謹テ之ヲ聽ルハ久ク其魔術ヲ驚カシタルヲ故アリ　十二然ルニ彼等神ノ國ノ福音ヲ宣ルピリポヲ信ゼシカ又男女トモヨビイエスキリストノ名ヲ奉テ浸ヲ受ケタリ　十三シモンモ亦信ジテバプテスマヲ受ケ常ニピリポト偕ニ在テ彼ガ行フ所ノ奇アル跡ト休徴トヲ見テ驚ケリ　十四エルサレムニオル使徒等サマリアノ已ニ神ノ道ヲ受ケタリト聞テペテロトヨハネヲ彼處ニ遣ス　十五ニ人ノ者ハ下リテ彼等ノ聖靈ヲ受ン爲ニ所ヲ祈リ　十六蓋ノ未ダ其一人ニモ聖靈下ラズシテ唯主イエスノ名ニ入ラシメテバプテスマヲ受シメタルノミナリケレバナリ　十七ニ人ノ者手ヲ按ケルニ彼等聖靈ヲ受タリ　十八使徒ノ按ケルニ因テ聖靈ヲ予ラヲシテ我手ヲ按ケシメヨト云テ金ヲ携來リ彼等ニ曰ケルハ　十九我ノ手ヲ按ケシ者モ凡テ聖靈ヲ受ン爲ニ此權ヲ我ニモ予ヨ　二十ペテロ彼ニ曰ケルハ爾ハ神ノ賜ヲ金ヲ以テ得ント意リ爾ノ事ニ於テ分アク又與アラザレバ爾ト爾ノ金ト共ニ滅ヨ　二十一爾ハ神ノ前ニ心正カラズ　二十二故ニ爾ノ惡ヲ悔改メテ神ニ所祈ヲ爾ノ心ノ念或ハ赦サレンカモシレズ　二十三我爾ガ膽レ苦ミトリ不義ノ繋ニ在ト見ル也　二十四シモン答テ曰ケルハ爾曹ノ言ヒシ事ノ我爲ニ主ニ所祈ヲ及ザルヤウ我爲ニ主ニ祈ヨ　二十五ペテロヨハネハ主ノ道ヲ證シ且ミヲ語シ後エルサレムヘ返往ルトキサマリア人ノ諸邑ニ福音ヲ傳ヘリ○　二十六主ノ使者ピリポニ謂テ曰ケルハ起テ南ノ方ニ向ヒエルサレムヨリガザヘ下ル所ノ路ニ往ケ　二十七ヲレ路ハ野ニアリ　二十八カレ起テ往リエテヨピア人ノ女王カンメケノ大臣ニシテ其女王ノ財寶ヲ司ル者禮拜ノ爲エルサレムニ

名ヲ入ラヒアテスマヲ受シ耳ヲ傾ケ　二十九ピリポニ謂テ曰ケルハ近ヨリ車ニ附テ行ケ　三十ピリポ走リ往テ其ノ預言者イザヤノ書ヲ讀ヲ聞テ曰ケルハ爾ノ讀ル所ヲ曉ルヤ　三十一カレ曰ケルハ人ノ我ニ導ヲ與ルニアラズンバ何ヲ以テ曉ン乎ト乃チ車ニ乘テ我ト偕ニ坐ンコトヲ請ヒ　三十二カレ讀ル所ノ經文ハ此ノ如シ曰ク彼ハ屠ラルヽ羊ノ如ク引ニ往レ又毛ヲ剪ル者ノ前ニ默ス羊ノ如ク口ヲ開ザリキ　三十三彼ハ卑ヲ受テ審判ヲ行ハレザリキ誰カ其ノ代ノ事ヲ述ン其生ハ地ヨリ取ラルヽ故ナリ　三十四カレピリポニ謂テ曰ケルハ請フ先知者ハ此事ヲ誰ノ爲ニ言ヒシヤ己ノ爲ニ乎ト他人ノ爲ニ乎ト　三十五ピリポ口ヲ開キ此經文ヨリ始テイエスノ事ヲ傳ヘリ　三十六ニ人ノ者路ヲ行ケルニ水ノ在ル所ニ至リケレバカレ曰ケルハ看ヨ水アリ我ノ浸ヲ受ルニ何ノ妨アラン乎　三十七ピリポ曰ケルハ爾ノ心ヲ盡シテ信ゼバ可ナリ答テ曰ケルハ我ハイエスキリストハ神ノ子ナリト信ズ　三十八カレ車ヲ止メヨト命ジピリポト偕ニ水ニ下リテ浸ヲ受ケシメケリ　三十九ニ人ノ者水ヨリ上リシ時主ノ靈ピリポヲ取去リケレバカレ重テ見ザリキ然ドモ歡喜テ其路ヲ行ケリ　四十ピリポハアゾトニ現ハレ其處ヨリ徧ク往テ福音ヲ傳ヘツヽカイザリヤニ至レリ

キレネ人シモーンの返あるを車れ中ゐ坐し預言者イザヤの書を讀とをり
二九 ピリポ聖靈ピリポに曰けるい往て此車ゐ就
三十 ピリポ趨よりて彼の預言者イザヤ
の書を讀と聞みをゐ曰けるい爾ろれ讀とあろれ事と曉るや
三一 彼いひける
い若己をと啓く者あくを如何で曉るみとを得んや遂ゐ請てピリポと己と
三二 同ゐ坐せーむ 其讀とりー聖書れ文い左れ如し彼い羊れ屠場ゐ牽るゝ如
く挙き又羔の其毛と剪者れ前よで聲と出さぬが如く其口と開す
三三 のを卑
服ゐ居しとき義判と奪をさり誰の能ろれ世れ狀と述得んや蓋このを生
命地より滅きふきが也
三四 寺人ピリポに對いひける請己をゐ示せ預言者
い誰と指て之と語しや自己と指しの
三五 ピリポ口とひらき此
綠さをたる所ゐ基きてイエスの福音と彼ゐ宣傳ふ
三六 斯て二人れ者路をゆ
き水ある所に至けをが寺人いひけるい
三七 水を見よ我バプテスマを受んとす
何の礙の有や
三八 ピリポ曰けるい爾もし全心ともて信せば可らん彼みたへ
て曰けるい我イエスキリストい神れ子ありと信す
三九 遂ゐ命とて車と止し
めピリポと寺人の二人水ゐ下りピリポバプテスマと彼ゐ施せて
四十 水より上きるとき主の靈ピリポと引去る寺人まさ彼と見ことと得ざりき
寺人喜びて其路と往り
四一 偖アゾトでゐてピリポ遇る者あり彼すべてれ
邑鄉と經て福音と宣傳へカイザリヤゐ至をり

第九章

サウロい猶も兇言と殺氣と吐て主の弟子等とせめ祭司れ長ゐ往て
二 ダマスコれ諸會堂ゐ寄る書と求む彼い此道ゐ徒べる者と見バ男女ゐ
いち步捕て之とエルサレムゐ曳んと意り
三 彼ゆきてダマスコゐ近けると
き忽ち天より光ありて彼と環照せり
四 ウ地ゐ仆る其時サウロサウロ何
ゆゑ我と窘迫やといふ聲と聞り
五 サウロ曰けるい主よ爾い誰ぞ主いひ給
けるい我ゐんぢが窘迫とよろれイエス
六 ありー爾前ある種と觸い難しゐを
取き駭きて曰けるい主よ我ゐ何と行しめんと爲給ふや主
七 起て邑よ入さらを爾行べき事と示さるべし
八 彼と偕に往る人々言ふゐと能
ずして立止り其聲と聞をも誰とも見ざりき
サウロ地より起て眼と啓た

る〻何も見さりけるた伴へる人等ろの手と援てダマスコゐ入ぬ〻られ三
日の間ものえず又飲食とも爲ざりき　斯てダマスコゐアナニアと云る一人
の弟子あり主幻のおとく彼ゐ曰給ひけるハアナニアよ答けるハ主ゐ此
ゐ在　主いひ給ひけるハ起て直と云る街ゐ往ユダが家ゐ至てタルソの人
サウロといふ者と尋よ彼ハ祈て居　且アナニアといふ人きたりて見みと
と曾させんおさめ手と其上に按しと幻ゐ見たるを也　アナニア答けるハ
主よ我ハ此人ゐ付きて多れ人の語れるを聞しゐ彼がエルサレムゐて爾れ聖
徒と苦しゐと如何たるり子乎　且みれ處ゐても彼ハ凡て爾れ名と顧者を
捕んとて祭司れ長より受たる權威と有り　主いひ給ひけるハ往よ彼ハ異
邦人れよび王とイスラエルれ子孫れ前ゐ我名と擔しめん爲ゐ我選し器ゐ
り　其彼ハ我名れ爲ゐ如何をかりの苦難と受るゐ我ことを彼ゐ示さん　是
ゐ於てアナニア往て其家よいり手と彼れ上ゐ按て曰けるハ兄弟サウロよ
爾れ來る路よて現をし所れ主イエス爾ゐ再び見みとと得ハり聖靈ゐ滿
させん爲よ我を遣せり　十八忽ち彼の眼より鱗れ如もの脫て再び見みとと爾
そゐハち起てバプテスマと受　彼ハそでゐ食して強健たり斯てサウロハ數
日れ間ダマスコゐある弟子等と交り　二十直ゐ會堂ゐ於てイエスの事と宣て
即ち此ハ神れ子ゐりと言　二一聞者ろな驚異て曰けるハ此人ハエルサレムゐ
於て此名と顧者と爲害し且ここゐ來しも之と捕て祭司の長ゐ曳んとする
ゐ非ずや　二二然ども サウロハ益々堅固て此イエスハキリストゐりと證と
るしダマスコゐある所のユダヤ人を辯折たり　二三既ゐ多れ日と歷て猶ユダ
が人サウロと殺さんと謀しが　二四ろれ計謀ハひゐサウロゐ知る彼等ハ夜も
晝も邑れ門と守て之と殺さんとせしゐ　二五夜弟子たち筐ともてサウロと石
籃より縋下せり　二六サウロハエルサレムゐ至て弟子さちゐ列らんと爲たり
しゐ皆ゐとが弟子たるみとと信ぜずして之と懼る　二七バルナバ彼と援て使
徒たち所ゐ至り其途中ゐて主を見しみと又主れ彼よ語り給ひしこと及
ダマスコゐ在て諤らずイエスれ名ゐ由て語しみとと告さり　二八彼エルサレ

ユお在て弟子たちと偕ユ往來し 二九 主イエスの名お由て憚らず語の 一
ヤ方言れユダヤ人と辯論へり彼等ヘラロと殺さんと圖る 三〇 然ゑ兄弟た
ちこと曉り彼とカイザリヤまで送てタルソお往しめたり 三一 是お旅てユダ
ヤカリラヤ及サマリア中れ敎會の平安お且成立て主お畏き事と行ひ聖靈
れ勸お因て其數いや增とり○ 三二 偖ペテロ遍く諸方れ地お經てルッダお住
る聖徒れ所お至りゐれ處お て一人の癱瘋と患ひ八年れあひだ床お臥る
アイネアと名る者お遇 三三 ペテロ彼お曰けるわアイネアよイエスキリスト
爾と愈す起て爾ミづから床と治よ彼たどちお起 三四 ルッダ及サロンお住る
凡ゐ人ゐこと見て主お歸せり○ 三五 ロッパお女れ弟子ありタビタと名く譯
ゼドルカス彼ゐ多の善事と施濟こと行へる者ありしタ 三六 ゐれゐろ病て死さ
るゐより其屍と洗て樓お置り 三七 ロッパルッダお近き故お弟子たちペテ
ロれ彼處お在ゐこときゝ二人れ者と遣して我儕お來こと遲する勿きと
請もむ 三八 ペテロ起て彼等と偕お ゆき既お至けるを人ぞうきと引て樓お登

る凡れ寡婦たちペテロれ側お立て哭泣り多ドルカスの偕お在しとき常お
作ゐる所の上衣下衣と彼お示す 四〇 ペテロ彼等を悉く外お出し跪きて祈り
又屍お向てタビタ起よと曰けきをゐれ婦眼と啓きペテロと見れきて坐し
ぬ 四一 ペテロ手と伸て之と起し聖徒れよび寡婦等と召て此活たる
其前お立しめたり 四二 此事ロッパ中よゐき多れ人々主と信ず 四三 斯てペテロ
久くヤッパお留りて皮工シモンれ家よ居り

第十章

カイザリヤおゐコルネリヤと云 一 隊と稱る組の百夫れ長ゐてコルネリヤと云
る人あり 二 彼ゐ信心れ深き者ゐて其舉の家族と偕お神と敬ひ民に多れ施
濟とゐし恒お神お祈禱せり 三 靈れ三時おろ幻れ如く神れ使者の來りてコル
ネリヤよと曰ると明ゐよ見 四 のを目と注みきと見て懼曰けるゐ主よ何事
なるや天使のれお曰けるゐ祈禱あんぢれ施濟すでよ上て神れ前お記
置をさり 五 いま人とヤッパへ遣しペテロと云シモンと召 六 彼ゐ皮工シモ
ンれ所お寓りき其家と海濱お在 七 コルネリヤお語をる天使さりし後のき

其僕二人と恆よ己よ事る信心ゐ深き兵卒と召ヘ八此事と詳く告てヨツパへ
遣はす○彼等ゆきて次日ろれ邑ゐ近ける時ペテロ祈禱のため屋上ゐ升き
り時ゐ約ろ十二時ありし甚く餓て食せんと欲志ゐ人の食物と具る間ゐ彼
氣と喪へる心地して十一天ひらけ器物の降きると見る大ある布れ如く四角と
繫て地ゐ繩下されたり十二其中ゐ凡て地の四足れ獸昆蟲ゐよび空の鳥あり
十三ゐ俓ありて彼に曰けるハペテロよ起て之と殺し食せよ十四ペテロ答け
るハ主よ可らじ我いまだ穢さる物と潔ゐらざる物と食せしことあらず十五
ふたゝび有て彼ゐ曰けるハ神れ潔ふる物と爾潔ゐらすと爲ゐうき此れ
如こと三次たよちゐ其器物天ゐ上らきたり○十七斯てペテロ其見し所れ異象
ハ如何ある意ゐらんと疑ひ在し時コルテリヲより遣さたる人等シモンれ家と訪て門の前ゐ立呼て
ペテロと稱シモンれ此ゐ寓るや否と問ヒ十八ペテロ猶ろれ異象れ事と思とりシモンれ
者ゐんちと尋ぬ二十起て下り疑ことすして彼等と偕ゐゆけ我こと遣しよ也

二一ペテロ下て其人さちゐ曰けるハ我い爾曹が尋る所れ者ある爾曹如何ゐ
る故ありて來るや二二彼等いひけるハ百夫れ長ある正直ある敬神と凡れユダヤ人の中ゐ善名
ゐ聞と聖使ゐ示さをたり二三是ゐ於てペテロ彼等と偕に出立けるがヨツパれ兄弟
カイザリヤゐ入るコルテリヲれ既ゐ其親族ゐよび親き友等と召集て之と
待居たり二四ペテロれ入來る時コルテリヲ彼と迎へ其足下ゐ伏て拜り二五
ペテロ之と扶起し曰けると起よ我も人ありと二六斯て偕ゐ語つゝ内ゐ入て多
の人れ集れると見二七彼等ゐ曰けるハユダヤ人の異邦人と交り又近く事れ律
ゐ合ざるハ爾曹れ知とおろ也さをや神ハ何れ人とも褻たる者ゐるひ
ハ潔らざる者といふ勿と我ゐ示し給へり二九故ゐ我請らるゝや直ゐ猶
豫ずして來る我ゐんちらゐ問ひきと今爾曹何の爲ある乎三十コルテリヲ曰
けるハ四日前ゐ我晡食して此時期ゐ至をり三時ゐろ家ゐ在て斷禱をりし

お曝ける衣を着たる者四の前お立
三 曰けるハコルネリヨよ開れ祈禱ハ
を聞れ施濟ハ神れ前お記置をたり
四 然バ人をヨツパへ遣シペテロを招
モシを召ヘをハ海邊おある皮工シモンの家お寓をり彼きさりて爾お語る
五 べしと是故お我さまちお人を爾お遣せり爾れ來をるハ善をき神れ爾
六 お命じ給へる一切の言を聽んとて今神の前お在あり〇ペテロ曰と啓
七 て曰けるハ我まことお神ハ偏らざる者おおて何れ國民おても神を敬ひ
八 義を行ふ者ハ其聖旨お適と云ふことを悟るヲれ道ハ即ち神れイエスキリ
九 ストお由て平和を宣イスラエル れ子孫お予たまひし所ありヒのイエスハ萬
一〇 物の主さる也夫ヨハネれ宣しバプテスマれ後ガリラヤより始りユダヤ
一一 中お有し事ハ爾曹お知とあろ即ち此ナザレより出たるイエスを神より
一二 聖靈と才能を以て膏を沃ぎ給へりを周遊て善事を行ひ凡て惡魔お惡たる者を
一三 愈せり是神ハきと偕ありしお因ハ我儕ハ彼がユダヤ人れ地およびエルサ
一四 レムお於て行ひし凡の事を證そる者なりユダヤ人ハ此人を木お懸て殺せ
一五 り神ハ第三日お之を甦らせ衆の民お顯さで惟ろの預め選さる證
一六 人そおハち彼が甦りし後おを同お飲食せ十我儕おれを顯し給へりを
一七 おう彼を其生者と死者れ審判人お神より定らきし事を我儕お暗示て民お
一八 宣よを命ヒさりを凡れ預言者も凡そ彼を信ずる者ハ其名お由て罪れ赦を
一九 受べしと彼につきて證せりペテロこれ言を語る間ま道を聽とみろれ
二〇 凡れ者お聖靈降をりペテロと偕お來りし割禮ある信者等ハ聖靈れ賜れ異邦
二一 人おまで注げる事を驚きぬそハ異ある邦々神を讃るとを聞たをハ也此時ペテロ
二二 たる此人々お就の水を禁ヒてバプテスマを受さらーむる者ありん乎
二三 お主れ名お由てバプテスマを受べき事を彼等ハ命ヒ是お於て彼等ペテロ
二四 お數日留らんおとを請へり

第十一章

一 使徒等および ユダヤ中お在と
ころれ兄弟すてお異邦人も神れ道
二 を受たりを聞ニペテロエルサレムよ上しとき割禮ある者ども彼を爭ひ

曰けるい爾れ割禮ある人れ家ゐ入て彼等と同ゐ食せり　四ペテロ乃有し始より次第ゐ語て彼等ゐ顧も曰けるい我ロツパの邑ゐ在て祈をるとき氣と喪へる心地ーして天より四角を繋たる大ある布れ如き器の下るゝと見たるゐ其器ゐが前に著りゐゐ目と注て熟々之と視ゞ中ゐ地の四足れもの と野獸昆蟲およゞ空れ鳥ありき　六且ゐきゐゐペテロよ起て之と殺し食すべしと曰る聲と聞りゐ我いひけるい主よ可らず穢たる物と潔のらざる物いまだ我口ゐ入しことあーゐ聲また天より我ゐ答て神れ潔たる物と爾潔ゐらずと爲ゐのをと曰ゐ十次りひゐ各物ふたゝび天ゐ引上らをたり　十一其時ゐ當てカイザリヤより我ゐ遣せる三人の者ゐが居とゐろれ家れ前ゐ立りゐ十二また靈ゐきに疑ずして彼等と偕ゐ往べしと曰り且ゐの六人の兄弟も我と伴ひ往て其人れ家ゐ入ぬ　十三のき我儕ゐりく天れ使者れ我家ゐ立ゐきよ向て人とヨツパへ遣しペテロと稱シモンと迎よ　十四其人ゐんち及び爾の家族の救いるべき言と告んと曰るゝと見たりと　十五斯て我ゐさ始しとき聖靈はじめゐ我儕ゐ降し如く彼等にも降れり　十六其時ゐきゐゐ主れ曰たまへるヨハネい水と以てバプテスマと施たるやも爾曹い聖靈ゐ由てバプテスマと受んとれ言を憶起せり　十七既ゐ神い主イエスキリストと信ずる所れ我儕ゐ賜し如ゐゐし賜物と彼等ゐ予さまへを我いかで神ゐ逆ふことゝ得んや　十八彼等ゐれ聞て答ふる所ゐく惟神ゐ崇いひけるい實ゐ然らん異邦人れ生と得ん爲ゐ彼等ゐも悔改と予給へる事〇　十九偖ステパノゐ因て起し苦難ゐ由て散さゐたる人々旅してペニケ、クプロ及アンテオケゐ至しが惟ユヅヤ人ゐれゝ道と語る　二十彼等の中ゐクプロクレネの人々ありてアンテオケゐ來り主イエスの福音ゐ宣てギリシヤ人ゐも語をり　二十一主れ手ゐゝゐ偕ゐあゝ多の人信じて主ゐ歸ゐ　二十二此ころれ教會の耳ゐ入しのバルナバを遣してアンテオケゐ至しむ　二十三彼すでゐ至て神れ恩と見て喜び彼等ゐ必と堅し主ゐ屬んみと勸さり　二十四蓋のきい善人ゐて聖靈と信仰れ滿る者ゐをゐり是ゐ於て數

多れ人主ゐ加りゐ、[二五]偕バルナバとサウロと尋んためゐルサ
ゐ遇てこれとアンテオケゐ携來きり斯て彼等一年れ間ともゐ敎會ゐ集りて
衆れ民と敎ふ弟子さられキリステアンと稱らをしめアンテオケより始是
り[二六]あのころ數人れ預言者エルサレムよりアンテオケゐ來るころれ中れ
一人アガボと名るもれ起て靈より示しけるは偏く世界ゐ大ある饑饉あ
らんと其ゐと果してクラウデヨカイザルれ時ゐ起たり[二九]是ゐ於て弟子た
ち各人ちれ力量ゐ從ひてユダヤゐ住る所れ兄弟と濟ん爲ゐ彼等ゐ物を餽
んことと定め[三〇]遂ゐ斯事と行ふ即ちバルナバとサウロの手ゐ托して之と
長老ゐ送きり

第十二章[一]當時ヘロデ王敎會れ中の數人と困苦さんとて彼等と執ふこゐ
刃ともてヨハネの兄弟ヤコブと殺せり[三]此事れユダヤ人の意ゐ適ると見
て彼まさやテロとも執ふ此時いと除酵節れ日ありき[四]既ゐ彼と執て獄
ゐ曳出さんと欲ひ十六人れ兵卒ゐ之と守し

めさり[五]やテロれ如此獄ゐ守らる敎會いこが爲よ懇切神ゐ祈るへロデ
彼と曳出さんとそる前夜やテロは二れ鏈ゐ繋ぎて二人れ兵卒の間ゐ睡り
守者れ門れ前ゐ在て其獄ゐ守れり[六]時ゐ主の使者來りけゐ光獄の中
ゐ照輝ゐれ使者やテロれ脇ゐ拍て之と醒し速ゐ起よと曰しゐ鏈ろれ手
より脫さり[七]使者のをゐ曰けるとく束帶と纏よやテロろの如せり
天使まさ曰けるれ爾れ履と身ゐ纏て我ゐ從へ[八]やテロ出て之ゐ從ひしが
其使者れ爲ゐとれ眞實あると知ず異象あらんと意ふ[九]斯て第一第二の警
固と過て城邑ゐ入とあろの鐵門ゐ至しゐ其門おづから彼等れ爲ゐ啓て
即ち出て一の衢と徑行とき其使者忽ち彼より離たり[十]やテロ悟て曰ける
ゐ我いま誠ゐ知る主ゐれ使者と遣ーてヘロデれ手および凡てユダヤ人の
期望より我と拯出ー給し事と[十一]之のを悟て後ゐハネの名とマコといふ人の母
あるマリアれ家ゐ至しゐ多れ人みゐ集りて祈ゐたり[十二]やテロの門れ戸
と叩ける時ロダと名る下婢きさりて之と窺ひしが[十三]やテロれ聲ふると

知けるを汪當ゐ懇ず門とも啓ずして趨入ペテロの門れ前ゐ立ゐと告
等ロリダよ曰けるれ爾狂り然ども女力言て我言れ遊ずと曰ゐども又いひ
けるれ蓋ペテロと守る天れ使者ゐり
彼等門と啓きペテロと見て駭けり
生れ己と獻より引出し給し事れ狀と告
示せといひ遂ゐ出て他の處へ往り
き兵卒どもれ中ゐて其騷擾容易ゐらざりき
出さず遂ゐ守卒と審問て彼等ゐ死罪と命ず斯て
ザリヤゐ下て止まり〇
をば彼等必ず合せて其所ゐ來り内侍の臣ブラストゐ親睦とゐし之ゐ託
て平和と求む蓋ゐもれ國れ王れ國ゐ頼て糧食と獲ばゐり
定さる日ゐ於て王服と著ろれ位ゐ坐し彼等ゐ對て訓をり
ける之此れ神れ聲ゐり人の聲ゐ非ず
ザリヤゐ下て止まり〇
生れ己と獻より引出し給し事れ狀と告
示せといひ遂ゐ出て他の處へ往り
き兵卒どもれ中ゐて其騷擾容易ゐらざりき
出さず遂ゐ守卒と審問て彼等ゐ死罪と命ず斯て
をば彼等必ず合せて其所ゐ來り内侍の臣ブラストゐ親睦とゐし之ゐ託
て平和と求む蓋ゐもれ國れ王れ國ゐ頼て糧食と獲ばゐり
定さる日ゐ於て王服と著ろれ位ゐ坐し彼等ゐ對て訓をり
ける之此れ神れ聲ゐり人の聲ゐ非ず

乃使者たぢち彼と擊ーあゐ彼れ蟲れ爲ゐ噬ゐて氣絶ゐ
益々殖りゐルナバ及ビサウロれ其職と成畢りてヤコと名るヨハネと携ひ
てエルサレムより返まり

第十三章 アンテオケれ激會ゐ數人の預言者と敎師あり即ちバルナバ及ニ
ゲルと稱るシメオン又クレテのルキヲ及び分封の王ヘロデの乳兄弟マ
ナエン及サウロありニ
ためゐバルナバとサウロと頭別ちて我うをらに命せし所の事と行れむ
よ是ゐ於て斷食ー祈禱となし手を二人の上ゐ按て之と往しむ
の二人れ聖靈ゐ遣さきてセルキアゐ下り彼處より舟出ーてクプロゐ赴け
り彼等サラミスゐりきユダヤ人れ諸會堂ゐれいて神の道と宣またヨハ
チと用ゐて其幇助となせり
れ預言者バリエスと名る卜筮とゐるユダヤ人ゐ遇あの人れ國の方伯セ
ルギヲパウロといふ智人と偕ゐあり時に方伯バルナバとサウロと召て神

の道を聽んことを求む、八然るを彼れ下者エルマス（此名を譯せば）二人の者
を敵ひ方伯をして信ずること勿しめんとせり　九サウロ一名をパウロ聖靈
は滿ちたる目を注て彼を視　十曰けるは噫すべてれ詭譎と奸惡とを盈るもの
惡魔れ子すべての義みとれ敵よ爾主れ直ある道と枉て止ざる乎　十一視よ主
れ手いま爾の上を在あんち瞽とあり暫く日を見ざるべし即ち彼れ目瞭暗
みて己を相せん者を求さまよへり　十二是を於て方伯その所爲を見て主れ教へ
を敬き之を信ぜり○　十三パウロ及ろの從人パポスより舟出ておムフリ
アれペルケよ至り此處にてヨハネ彼等を別てエルサレムを歸り　十四彼等
は此より旅ちてピシデアのアンテオケを至り安息日を會堂を入て坐しぬ
十五律法と預言者の書を讀畢りしれち會堂の司たち人を以て彼等を曰せけ
るは人々兄弟よ若民に勸るみと有ら言へ　十六パウロ起て手を揺し曰けるはイ
スラエルれ人々および神を敬ふ者よ爾曹聽へし　十七此イスラエルれ民の
神は我儕れ先祖たちを選び其民れエヂプトの地を旅寓りし時てきを育ふ
何勢手を以て彼等を彼處より導き出し　十八約ろ四十年れあひだ野を於て之を
擔養ひ　十九又カナンれ地れ七族れ民を滅し其地を彼等を嗣あため　二十後たまろ
四百五十年れあひだ即ち預言者サムエルれ時まで之を審士を與たまへり
二十一爾後かれら王を求けるを神は其子ゆけ
と賜ふ　二十二後また彼を徙しダビデを立て彼等れ王とするし且あきら爲を證し
て曰たまひけるは我エツサイれ子ダビデを我心を合ふ人と得たり彼
は凡て我旨を行遂べし　二十三神は其約束を從ひて斯人れ裔より救主イエスを
イスラエルを與たまへり　二十四ヨハネ先イエスれ來る前を悔改れバプテスマを
を宣傳さりしが　二十五ヨハネ其職を行ひし時いひけるは爾曹は
を誰と意ふや我は其人を非ず我よりも後を來者あり我は其足れ履を解を
も足ざる者あり　二十六人々兄弟アブラハムれ子孫およびの爾曹のうち神を敬
ふ者よ此救れ道を爾曹を遣たまへり　二十七夫エルサレムを住る者およびの其有
司たちはイエスを知ず彼を罪を定て安息日おとを讀とあろの預言者の

言と成しめさりき二八のつ殺すべき故を得ざをやもピラトお之と殺さんみと
と求めし已お彼お就て錄されたる凡ての言と成しめけをば之と木より下し
て墓お置りき三十然ども神い之と死より甦らせ給り三一多日れ問のたまわがヨリ
ヤより已と偕おエルサレムお上し者お現をさり今うをれ爲よ民おす
る者い其人々なり三二我儕も嘉れ音と爾曹おわげく神のイエスと甦らせて先
祖等お立たまひし約束を其子孫さる我儕お成たまへり三三即ち詩れ第二篇
に錄さるさる如し爾は我子なり我今日なんぢと生りと三四また朽壞お歸
せざる樣お彼と死より甦らする事お就ていえり云るをダビデお
約束せし所は願むべき恵と爾曹お予ふ可と三五是故お又ほかれ篇お爾い其
聖者と朽果しめずと云り三六夫ダビデと神の旨に遵ひ其世れ爲お勞苦しれ
お寢て先祖たちと偕お置を遂お朽果さんり三七然ども神れ甦らせ給し者い朽
果ざりき又然ば人々兄弟よ此人お由て罪れ赦は爾曹お傳をると知三九爾曹
もし一もの律法お依て義と爲るをえざる凡の罪も信ずる者い皆之より
由て赦さを義とせらるを四十然ば爾曹愼よ恐くわ預言者の曾お言るた
る事あんぢらお臨ん四一曰く藐忽者よ視て驚き且亡よ蓋我已爾曹れ日お一の
事を行そん人お見をと爾曹お告るとも爾曹信ぜざる可きを也◎四二のきら會
堂を出んとせしとき次の安息日お復ふの事と宣よと請れたり四三會ず
散しに多れユダヤ人おおよび其敬お入し神を敬ふ人々パウロとバルナバお
從へりパウロとバルナバ彼等お語て恒お神れ恩お居れ事と勸む四四次れ安息
日お至り邑れ人々神れ道と聽んとて殆ど擧邑集まりしに四五多く集をるを
見てユダヤ人嫉妬と心お滿せて爭辯り詈りパウロが言とみろと拒めり
四六パウロとバルナバ毅然して曰けるわ夫神れ道れ必ず先爾曹お告べきを
り然ども爾曹わ之と棄り已わ永し生と受べき者お非ずと自ら定たれた
我儕轉て異邦人に向ふべし四七蓋主かく我儕お命じ給へり曰く爾救とあり
て地れ極おまで及ぞん爲お我あんぢと竝て異邦人れ光とおせり四八異邦人
わ之と聞て喜びて主れ道と譽美すべて永生お定らをたる者わ信せり四九

是ゐ於て主れ道あまねく此地ゐ廣り
五十 給るよユダヤ人神を敬ふ貴婦
等花よび邑れ尊長たる人々れ心と動
させてパウロとバルナバと窘迫ゐれ
境より逐出せり 二人い彼等よ對ひ足れ塵と打拂ひてイコニオムゐ至
り 三 斯て弟子等い大ゐ喜樂と懐ゐり聖靈ゐ盈さをたり

第十四章 二人れ者イコニオムゐ於て
ユダヤ人およびギリシヤ人と多く信せ
異邦人と唆て其心ゐ兄弟と憎しむ 三 彼等い久しく彼處ゐ留り主ゐ頼て憚
らず道と傳ふ主また彼等の手ゐ休徴と奇ある跡と行ことしめて其恩の道と
證せり 四 邑れ人を二ゐ分を或いユダヤ人ゐ與し或い使徒等よ與せり 五 斯
て異邦人ユダヤ人および其有司さち非
を二十人れもの之と知てルカオニヤの邑ある ルステラデルベ及ひの四周れ地
ゐ逃れ 七 彼處ゐ於て福音と傳ふ ○ 八 ルステラお一人れ足弱ゐれ坐ゐあさ
ゐ彼い生來れ跛者ゐて未だ步行ことあし 此人パウロの語るを聽とり

しが 九 パウロ目と注て其愈さる ゐき信仰あるを視 十 大聲ゐ曰けるい爾れ足
ゐて正く立よ彼踊上りて行めり 十一 人々パウロれ爲し事と見て聲と揚てリカオニ
ヤれ方言ゐて曰けるい諸神人れ形ゐありて我儕ゐ臨きり 十二 彼等バルナバと
セウスと稱パウロい專ら說話こととする人ある故おヘルメスと之と稱
時ゐ其邑の前ゐある所れセウスの祭司饋と花箱と門ゐ携來りセ衆れ人と
共ゐ犧牲と獻け彼等と祭んをせり 十四 使徒バルナバパウロ之と聞て己が衣を
裂てしり出て大衆れ中ゐ入 十五 喊叫いひけるい人々よ何故ゐ此事と行や我
儕も亦ゐんぢらと同情ども何所の人ありヤ爾曹ゐ福音と傳るい爾曹をして
此虛妄とをて天と地と海および其中れ萬物と造り給へる活神ゐ歸志めん
ゐ爲ありて往ゐし世ゐい神をべてれ異邦人ゐ其己が道と行むことと容し
給上のをゝ 十七 亦ゐんぢらと惠て天より雨と降せ蓮穫ある時候をあたへ糗食
と喜樂とをもて二爾曹れ心と滿しめ己みづから證せざりし事あし 十八 此言と以
て苦辛ヒて衆れ人れ己等ゐ犧牲と獻んとをるを止さり ○ 十九 時ゐユダヤ人特

アンテオケイコニオムより來りて多の人と唆め石ともてパウロと擊しめ
既に死たりと意ひ邑より外へ曳出せり　弟子等ら之れ周圍を立るとき彼おた
て邑へいり次ば日バルナバと偕ふデルベへ往き　斯てろば邑ふ福音と傳へ
多の人と弟子とをなし又ルステライコニオムアンテオケへ返り　弟子等の
心と堅し其常ふ信仰ふ居んおとと勸め又おほくの艱難と歷て我儕が神の
國ふ至る可きおとを敎ふ　斯て二人れもの敎會ごとふ長老とをらび斷食と
所禱とをし前より信じをる所の主ふ之と託たり　扨ピシデアを
經てパンフリアふ至り　又ペルゲふ道と傳てアッタリアふ下り　彼處よ
り舟ふてアンテオケふ航る此れ彼等さきに神れ恩ふ託らを今とげし職と
行んとて出し所なり　既ふ至りて敎會れ人と集め己と助けて神れ行たる
まべる凡れ事と異邦人れさめふ信仰れ門と開き給ひし事と告　斯て久く
弟子等と偕ふ彼處ふ止をりき

第十五章

ユダヤより下し人々兄弟ふ教けるわ若なんぢらモーセれ例ふ
ゐ徒ひて割禮と受ずば救るゝことを得じ　之ふ由てパウロとバルナバ大
ふ彼等と爭ひ且論ぜしのち兄弟等みれ事ふ就てパウロバルナバ及ろれ中
より數人とエルサレムふ上せ使徒と長老等ふ遇しめん事と定む　是ふ於て
彼等敎會れ人々に送らる出ヒニケれよびサマリアと經て異邦人れ神ふ歸
せし事と具ふ述すべてれ兄弟と大ふ喜ばしめさり　彼等エルサレムふ至
り敎會と使徒とれよび長老たちふ接らき己と助けて神れ行たまひし凡れ事
を告しふパリサイ宗の中ある信者數人たちて曰けるわ彼等ふ必ず割禮
と施し且命じてモーセれ例と守ざるべし　使徒等れよび長老たち此事と
調ん爲ふ集れり　玆ふ多の論ありしが　ペテロ起て彼等ふ曰けるわ人を兄
弟よ久き先ふ神ふとて爾曹れ中より選び福音れ道と我口より異邦人ふ聞
せ彼等をして之と信せしめ給ーことわ
たまふ神い我儕ふ聖靈と賜し如く彼等ふも賜て其證となし　又信仰をもて
其心と潔め我儕と彼等の間ふ分と爲ざりき　然るふ今何故ぞれられ先祖

たちも我儕も負あたわざる軛と弟子等の頸お置て神と試むる乎 十一彼等の救るゝ如く我儕も主イエスキリストの恩お由て救るゝことと信ずる也 十二是お放て人々みな默してバルナバとパウロが神が己とともて異邦人の中お行ひ給へる休徴と奇跡とを述るを聞り 十三彼等が言畢りし後ヤコブ答て曰けるわが人々兄弟よ我お聽 十四神初て異邦人と眷顧られ中より己が名と崇る民と取給ひし事シメオンが既お之と述 十五預言者の言みな之と符り其書お此の後われ反て己お頽圮るダビデの幕屋と復び起し其破壞れ跡を復び造て之と述べし 十六是ろれ餘乃民およびすべて我名ともて稱らるゝ異邦人お主と尋させん爲なり 十七此もろもろの事を行ふ神みきと言と錄されたるが如し 十八神は世の始より其もろもろの事お知さまへり 十九是故お我お惱ふ異邦人れ中より神お歸する者と擾もい宜からずと 二十然ども書と彼等お遣て偶像お汚きさる物と姦淫と勒殺たる物と血とを戒むべしと 二一古より每安息日ごと會堂ごとにモーセの書と讀が故お非ずや 二二是お宣るもれ各邑おゐてをが也○ 二三是お

放て使徒おゐよび長老たち至會と偕お其中より人と選び之とパウロバルナバと共おアンテオケお遣さんと定ろの選をさる人い兄弟の中れ尊者すなわちバルサバと稱るユダおよびシラスなり 二三彼等れ手お托て遣し書お云ふく使徒長老おゐよび兄弟アンテオケおよびシリヤおよびキリキヤおゐる異邦人の兄弟お安と問 二四我儕が命せざるもれ我儕の中よりいで言をもて爾曹と擾し爾曹の心と亂たりと聞 二五之お由て我儕心と同し人と選て我儕れ愛そるバルナバパウロと偕お遣さんと定み 二六我儕の主イエスキリストれ名の爲お其命とも愛ざりし者あり 二七我儕ユダとシラスと遣し彼等れ口より此事を述ゐめんとそ 二八ろい聖靈と我儕と左れ肝要あるもの〻外い何とも爾曹お任せんと定さり 二九即ち偶像お獻し物と血と勒殺たる物と姦淫とを戒むべし若みをられ事と爾曹みづから愼全ば善ねぞの むくい爾曹健剛あれら遣さゝてアンテオケおゐ堅り衆人と集て此書と付す 三十衆人おと讀ろれ勸と受て喜べり 三一ユダとシラスも亦預言者あをば多れ言と以て兄弟と勸

あ彼等を堅せり　三三斯て二人の者皆く彼處お止り後兄弟たちお安然と祝さ
を其己を遣はす者れ所お送りたり　三四パウロとバルナバハアンテオケお止
り其餘れ多の人と其お敎へあし主れ道と宣傳ふ○　三五數日の後パウロバル
ナバお曰けるわ我儕さきお主れ道を宣し所れ諸邑お復ゆきて兄弟れ光景
を幸とふべし　三六偖バルナバハネヤコを名るヨハヌを伴んと欲へりっ然せ
もパウロわ曩お離ファお己より離を役事れため共お往ざりし此ヤ
コと伴ふわ宜らじと意志お因　三八遂よて二人れ中お激論おあり相別せバル
ナバわヤコと伴ひシプロお航きり　三九パウロわシラスを選び兄弟より己と
主れ恩お托らをて出立　四十ま則ヤ及びキリキヤを經て諸敎會と堅せり
第十六章　斯てパウロデルベ及ルステラお至りり此ヤ弟子あ
り其母ユダヤれ婦お娶て信者あり其父ハギリシヤ人あり　二彼ハルステラ
ヤコニオ兄弟より稱を得たり　三パウロ之を携て偕お往在ことを欲られ
盛おとるユダヤお其處ヤ人お彼お割禮と行へり蓋人ヤ皆ヨダ父のギリシヤ
人あると知をあり　四斯て諸邑とすぎエルサレムおある使徒および長老等
れ定たる條規と守せんとて之と其人々お授く　五之お由て諸敎會れ信仰堅あ
り其數も日々お增ぬ○　六彼等フルギヤとガラテヤれ地と過た時アヲアお
道ヤ傳るみとと聖靈お禁らをて　七遂おムシヤの疆ろをと許さりけをた
てパテニヤ夜よ於て一人のマケドニヤ人たちて己お諸ヤカドニヤお渉て我
儕を助よと曰と幻よ見たり　十彼の幻お見之と見し後已ら誠お主れ我儕と
ろてマケドニヤ人お福音と宣へめんと我儕と召給ふみとと推量て直ぉヤ
ケれまヤお往んとす　十一是お於てトロアスより航海とし眞直よはせてサモ
トラケよ至り其次日ネアポリスに往　十二彼處よりピリピお至るピリピハヤ
ドニヤれヤの分の中ある名ある邑おして即ち植民地あり我儕數日あの邑
お止邑す　十三安息日お我儕邑といで河の濱なる常お所禱とする處おゆき坐
あて集れる婦女等お語ヒお　十四紫布と售ふネアテラれ邑れ商人おて神を敬ふ

ルデヤと名くる婦きゝみたり主ろれ心を啓てパウロの語るみことを用
[十五]ゐめ給ふ　[十五]のれ婦ろの家族と偕おバプテスマをうけ求て曰けるい爾ら
ー主を信ずる者ゝ我と爲ゞ我家に來りて留まと强て我儕と入法めたり　[十五]且
き所禱所ゐ往るとき卜筮とそる靈に憑きさる一人れ婦れ奴隷ゐきちお
遇のきい卜古ゐ因て其主たちゐ多れ利を得させし者ありパウロと我儕
ゐ從ひて喊叫いひけるい此人々い至高き神の僕ゐて救道と我儕ゐ宣る者
[十八]ありれ婦ゐく爲みと久りけるがパウロ之と憂ゐりきて靈ゐ曰け
るい我メエスキリストれ名ゐ由て爾ゐ命ず此婦より出よ靈立刻ゐ出ぬ是
ゐ於て其主さち利の望すでゝ去るを見てパウロとシラスを執ゃ市場
ゐ曳て有司等ゐ至きり　[二十]既ゐ上官の所ゐ曳來りて曰けるい此人々ユダ
ヤ人ゐして我儕れ邑を擾もし　[二一]ロマ人たる我儕れ受べからず行ふ可ちざる
所れ習俗と傳る者ありと　[二二]大勢れもれ奮く起て彼等とせめ上官ろれ衣をはぎ
命じて之と杖もむ　[二三]多く杖てれち獄ゐ入おれと固守をと獄吏ゐ命ず　[二四]獄

吏うく此如き命と受しゐより彼等と奥れ獄ゐ入て桎とのけたり　[二五]斯て夜
半おろパウロとシラス祈禱とゐ讃美す囚者ら耳を傾けて之と聞
ゐさなしが　[二六]俄ゐ大ゐる地震ありて獄の基礎ふるひ動き門みとたく直
ゐ啓け衆れ因者れ械繫をはたり　[二七]獄吏日と醒も獄門れ啓けさるを見て囚
者ゐでゐ逃しと意ひ刀と抜て自殺せんとをば　[二八]パウロ大聲に呼ゐ曰け
るい自ら戕ふ勿き我儕をゐ此ゐ在　[二九]此時ゐき火と索て躍ゐり戰慄てパウ
ロとシラスれ前ゐ俯伏　[三十]彼等と外ゐ携出して曰けるい君よ我すくわ迭ん
爲ゐ何と爲べき乎　[三一]彼等いひけるい主イエスキリストと信ぜよ然らば爾
ゐおよび爾の家族も救るべし　[三二]遂ゐ彼ゐおよび其家の凡れ者ゐ主れ道を語
きり　[三三]あれ夜の卽時ゐき二人と誘ひ其械傷と濯て直ゐ其家族と偕ゐ皆バ
プテスマと受　[三四]且ゐきらと己が家ゐ引來り食物と其前に備そべての家族
と偕ゐ神と信とて喜べり　[三五]天明ゐ至て上官ら下吏と遣し曰せけるい其
人々と釋べし　[三六]獄吏この言とパウロゐ告て曰けるい上官ゐ人ちらと釋せ

と言遁せり然れど今いでゝ安然ゐ去
るゐ罪を定めして公然に我儕を杖ち且獄ゐ入たり而して今ひそかに我儕を引出さんと爲るや宜らず彼等みづから來て我儕に告げをべし
官たちゐ告げをゝ彼等ろれロマ人ゐるを聞て懼を來て彼等ゐ此より出
んあやと求つひゐ引出して又ろの邑を去んゐやを請たり二
を出ルアれ家ゐいり兄弟等に遇ゐて之ゐ勸とゐして出去ぬ

第十七章

斯て彼等れアムピポリス及アポロニヤを過てテサロニケ
ユダヤ人社會堂あり　ニ　パウロ常れ如く彼等ゐ
歴書ゐ本きて彼等と論じ　三　キリストの必ず苦難とうけ死より甦るべき事
を說ゐさ我ゐんぢらゐ傳る所れ此イエスと即ちキリストある事と說明せ
り　四　是ゐ聽て其中れ人々信じてパウロとシラスゐ從ひ又神と敬ふギリシ
ヤ人れ之ゐ從るも多く貴女も少からざりき　五　然るゐユダヤ人ゐを妬
み市井ゐ屯る匪類とうたらひ群と成て邑を擾せパウロとヤソンと執へ民

れ前ゐ曵出さんとてヤソンの家ゐ來しが　六　彼等と見出さゞりけをゝヤソン
と及び數人れ兄弟を邑宰れ前ゐ曳來て大聲ゐ曰けるは天下を亂す斯者ゐ
も此ゐまで來居りヤソれ之と迎納たり　七　此人々れ皆イエスといふ他れ
王ありと言てカイザルれ命ゐ背く者ゐり　八　大衆と邑れ宰等ゐを聞て心
と傷しむ　九　上官いヤソン及ろれ餘れ人々より保狀と取て之を釋せり　十　兄
弟さち夜間ゐ急ぎベレアゐ去しむ彼等ゐしゐ至てユ
ダヤ人れ會堂ゐ往ル　十一　此處れ人々ハテサロニケれ者よりも性情よきゐ故
ゐ好て道とき之を此れ如ゐと果して有るや無やと知んとて日々ゐ聖書と究を
り　十二　是故ゐ其中れ人ゐほく之と信ず又ギリシヤの貴女たよび男子れ信と
さる者も少からざりき　十三　テサロニケれユダヤ人い神れ言れパウロゐ因て
ベレアゐも傳りしと知また彼處ゐ至て人々と擾しめさりき　十四　是ゐ於て兄弟
さち直ゐパウロと海ゐ遣らむ然るもシラスとテモテれ倘ゐれ處ゐ留りぬ
十五　パウロと伴ひし者ろを携てアテネゐ至る其人々ゐパウロよりもラス

とテモテと速かに來しめよとパウロアテンスに在て
彼等を待る時うれ邑みそりて偶像に事ると見て甚く心を傷めたり
十七 是故に會堂に於てユダヤ人および敬ふ人々と論じ又日々市に於て其遇と
ところの者と論ず 十八 時にエピクリアン及ストイクの理學者數人これと相語
り或人いひけるは此囈言者なにと言んとする乎また或人いふ彼は異なる
鬼神を傳る者に如しと蓋パウロ彼等にイエスと及び復生の事を宣傳ふ故なり
十九 斯て彼を引つれアレヲ山に往て曰けるは爾が語る所の此新しき教を
我儕知せらるることを得るや 二十 爾は異聞を我儕の耳に入しが故に我儕ろ
の何事なると知んとすればなり 二一 凡てアテンス人および其地に留る人
は暇しき事とりげ或は聽事よりの外は甚て暇あらず
二二 パウロアレオ山に立り曰けるは アテンス人よ我なんぢらが每事に鬼神を敬ふ
と觀るところ遊行と善爾曹が敬拜ところの者を見しに識ざる神あるを刻書
したる祭壇と見出せり故に爾曹が識ずして敬ふ此者を我なんぢらに示さ
ん 二三 宇宙と其中の萬物を造り給る神は是天地の主あるを手あて造たる
殿に住たまはず 二四 あり衆人の生命と氣息と萬物を予たまふを物よ乏
きはとなし 二五 人の手ふて事らるるをもれあるに非ず 二六 また一の血脈より出し凡の
民を悉く地の全面に住せ預じめ其時と住ところの界とを定め給へり 二七 此
は人をして神を求りめ彼等が或は揣摩うる事あらん爲なり然ども神は我
儕各人と離るるあと遠あらざる也 二八 我儕は彼に在て生動き存
ことを得るり爾曹の詩人たちも我儕は其裔なりと云しが如し 二九 如此は是
ら神の裔なれば金銀または石あるは人の工と巧とを以て造る者と
均く敬ふ可あず 三十 往者は蒙昧し時を神これをと不問ふ爲給しが今は何處の
人あも悔改ることを命じ給ふなり 三一 蓋神すでに其立し所の人あまり
就てこの世を鞫べき日を定め此事あ就てこの彼と死より甦らせて其證と衆
の人に予たまへばなり 三二 是を於てパウロ彼等に中より出去
ん 三三 ここを以てパウロ彼等に中より出去

る　三日　然も數人故ゐ視て信ぜり　其中ゐアレオ山は裁判人デオスレホ及ビ
ヤリスと名くる女王さ其他は人も之と偕ゐ在き

第十八章　是後パウロもアテンスと離て
り來る者ありてポントゐ生しアクラと
ーフゐ遇て其所ゐ至り彼等おイタリヤ
より下たる時パウロもユダヤ人ゐ向て
ヤより來しいクラウヂヨ帝ゐ人ゐ
逐くロマと離を命せしゐ因てありニ彼
止りて工と作ゐ其職と幕屋と製る者ゐ
ふ者ゐて其家ゐ會堂ゐ隣り　へ會堂は
堂ゐ於て論とユダヤ人とギリシヤ人と
より下たる時パウロもユダヤ人ゐ向て
ヤよりイエスはキリストある事と證志道と
薦ふるよとゐ勉を凝し居り　九　然るゐユ
ヨ　おと撫て彼等ゐ曰けるは爾曹は血ゐ
より異邦人ゐ遣ん　ゐ此と離てユス
ストと云る人は家ゐいる彼ゐ神と敬

す又コリント人ゐて道とき　ふ信じて
夜さばろーゐパウロゐ語給ひけるは懼
を爾と偕ゐあさゐ爾と害せんとて
ゐ　十一　是ゐ於てパウロ一年と六ケ月は間
り　十二　ガリヨアヤの代官たりし時ユ
ゐ裁判所ゐ曳來り　十三　曰けるは此徒は律
ありと　十四　パウロ口と啓んとせし時ガリ
し不義奸惡は事ありさば我が爾曹よ
名字および爾曹は律法は論あらさば
審士さると欲ず　十五　斯て彼等と裁判所よ
ゐ會堂の宰あるソステネと執へ　十七　衆
ゐ彼久く留り　十八　パウロは此處ゐ
スキラ及アクラと偕ゐ舟ゐて　ス

お因て髮を剪りて彼キリストに於ける一人と其處に留おき自ら會堂お入て二
十ダヤ人を諭せり二十一衆人のもとが久く偕よ居んことを請たれども肯ずして
暇を告て曰けるは我ふたゝび來んとすれば必ずエルサレムお祝て守さるゝと
得ず然ども神許し給たら復び爾曹お返べしと遂お舟出してエペソと去
二十二カイザリヤお上り敎會の安否を問て後アンテオ
ケお下り二十三暫く此處お住てまた出立かアテヤ及びフルギヤの地を遍次お
經て凡の弟子等を堅せり○二十四爰にアレキサンテリアお生しユダヤ人あて
辨才あり且聖書お達しさるアポロと名る人エペソお來きり二十五みれ人尻ま
り主れ道は敎を受のつ心と熱してイエスれ事を詳細お誨ふ然ども惟ヨハネれ
バプスマを知るれを二十六會堂お於て憚らず語がけるをアク
ラとプリスキラ之を聞て彼を己が家お招き神れ道を倘も詳細お說明せり
二十七アカヤお往んとせしのバ兄弟さち書を遣て弟子等お彼と接容
んことを勸のと至て既に恩おより信せ十者と大お助より二十八蓋うき聖書お

引てイエスれキリストたる事を示し人々れ前おて
ことを也

第十九章

二十一パウロ曰はくアポロがコリントお居る時
或弟子たちお過てエペソお曰けるは爾曹が
はるれ我儕れ聖靈の有おとだお聞ざりきや
かテヤを受て何お入らをや答けるは
二十三曰けるは然ば何のバプスマお入らをたり
ヤと受て主イエスれ名お入らをたり
二十四パウロ手と其上お按ばき聖靈
おさらば臨みお異ある諸國の方言お誦の
其ありきバウロ會堂おいり憚らずして神の國れ事と論じ且勸て三ヶ月を歷
たりしが然るお剛復おじて之を信ぜざる人々あり衆れ人の前汚其道を誹
けるを以かり彼等を離ち弟子等をも別させて日々テラノスと云る人の講堂

や雇て論ぜしむ　十 二年のあひだ此事ありしかばアシヤに住る者みな主イエスの道を聞ぬ　十一 神パウロの手より
て非常の奇蹟を行ひ給へり　十二 即ちパウロの身に着たる汗布あるひは帯を取て病者に加ければ病いさり悪鬼は出たり　十三 茲に所々遊行て呪ゐを
せるユダヤ人あり悪鬼に憑たる者に向ひ試に主イエスの名を唱て曰ふ我パウロの宣る所のイエスに藉て爾に命じむと　十四 如此
なせる者はユダヤ人なるスケワと云る祭司の長れ七人の子なり　十五 悪鬼答て曰ふるイエスを知まさパウロを識り然ど爾曹は誰ぞや　十六 悪鬼
に憑たる人彼等に上り踴上りこれを勝て歴伏けるに彼等裸にされ傷を負て其家を逃去り　十七 此事エペソに住る凡ユダヤ人ギリシヤ人よ聞えしかば
皆懼れ主イエスの名を崇らるにいたり　十八 且信じたる者多く来りて自ら言あらわし其行ひし事を訴へたり　十九 また魔術を行へる多の者等も其書籍を集め人々の前にて焚り其価を計て銀五萬ばかりなることを知り　二十 主

の道廣まりて靡と得ことと此れ如し　二十一 此事ありし後パウロ心にマケドニヤ
及アカヤを過てエルサレムに往んと意と定め曰けるは我かしこに往て後ロマをも見べし　二十二 即ち己を事る者は中テモテとエラスト二人を
マケドニヤに遣し己は暫くアシヤに留りぬ　二十三 おり時ろ此道よりて容易ならぬ騒擾おこれり　二十四 蓋一人デメテラと云る銀工あり銀にて
アルテミスの銀龕を作り工人等を利を得しめしかば　二十五 是等の人及び己の類れ業の者を集て曰けるは工人よ
ることを爾曹は知またみる如此パウロ手おて作をる者は神おは非ずと曰て衆
の人を誘惑し郎ち全エペソ耳おらず殆ど全アシヤ中おも及せり　二十六 是ま爾曹が見
とまた聞ところ也　二十七 此が唯是きらず此業の輕められるに危ある耳あらず又アルテミス
及び天下尊で事る所れ夫なる女神アルテミスの宮も亦棄られ其威光も亦
滅べしと彼等みな之と聞て甚く怒さけび曰けるは夫あるかなエペソ人の
アルテミスよ　二十八 是おかて衆民大おに擾きパウロの同行あるガヨとアリスタ人れ

ガイヲスとアリスタルコと執へ彼等心を合せて戯園に擁入りパウロの
一 れ人々れ中に入んとせしかば弟子たち之を許さざりき 三 またアシアの祭を
二 司どる者れ中に彼と親き者等あ人を彼に遣し其自ら戯園に入ざらんことを
三 求たり 三 其時ある人い彼事といひ或人い此事と言さけべり蓋會衆も
四 だをて大半い何の爲に集をるやを知ざりき也 三 是に於てユダヤ人アレキサ
五 ンデルを出んことと勤けをば或人群集の中より之を推出しぬアレキサン
六 デル手を揺し民に向て事實を告んとせしが 三 彼等ろれユダヤ人たるを知
七 が故に皆和あひく聲を揚て大あるる哉エペソ人のアルテミスよと二時ばか
八 りれ間さけびあへり 三 書記官人をやを撫て曰けるわエペソれ人をよ此エペ
九 ソれ天より落し大あるアルテミスの殿に事る邑あるを知ざる者あらん乎
十 三 汝れ事い既に爭ふべき餘地なき故に靜息にをて猥に事を作べからず 三 夫汝
十一 れ人々を曳れ來れ盜賊にも非ず爾曹れ女神と爾を者にも非ず然るに爾曹こを
十二 曳來れり 三 デメテヲ及び偕に事ある所れ工人もし人と訴ふる事あらバ開廷
十三 れ日あり且方伯あをバ互に之に訴ふべし 三 もし他れ事由ありいて求る事
十四 あらバ律法に合ふ會に於て定むべし 三 況や今日の騒擾に就ては訴らをん
十五 なにも恐怖き證あみの會ありいて辭解べき言あけきバ也 三 如此のたりて會
十六 を罷せ給ひ

第二十章

一 騒擾の定り後パウロ弟子等をよび別と告マケドニヤに往んとて
二 出立ぬ 二 それ地と經れやくれ言と以て人々と勸めギリシヤに至り 三 此に
三 三ケ月留りて後スリヤに航らんとせし時ユダヤ人あらと害せんと謀けき
四 バマケドニヤと過て返んと意を定たり 四 彼と偕にアシアまで至し者いプ
五 ロスれ子ベレアれソパテル及テサロニケ人れアリスタルコとセクンドデ
六 ルベのガイヲスとテモテ並にアシアのテキコとトロピモあり 五 此徒い先ち往
七 て トロアスに於て我等と俟り 六 除酵節れ後日ぎらピリピより舟出し
八 て第五日にトロアスに至り彼等に遇て其處に七日留れり 七 一週れ首れ
九 日にぱらパンと擘ために集りしがパウロ次の日出立ん事と意ひ彼等に道と

なだ讃かうそけて夜半に至るまで語れり　八彼等が集まる樓に多の燈ありたればコテコと名づくる一人の少年窓に倚て坐し睡り居しがパウロ益〻長く講るゆゑ大に睡魔に勝れず遂に三階より墮ちたるを扶起しに已に死りき　十パウロ下りて其上に伏ゐだき抱て曰けるは煩ふ勿れ此人の生命は中にあり　十一而して復たパンを擘て食ひ久しく彼等と語り天明に及て出立り　十二人々みな少年を携へ其活るを見て甚だ慰めり　十三偖ともに舟みとり先ちてアソスに往き茲より連て行んとせり蓋かく陸より往んと自ら如此定しあればなり　十四彼アソスに於て我儕に遇ければ彼と倶に舟に載てミテレネに至り　十五彼處より舟出ゐて次日キオスに對ゐ至り又次日サモスに着トロギルスに至りて次日ミレトスに至る　十六蓋パウロアシアに時を費さざる爲に舟あまりに急なるゆゑ因〇もて艱て彼所にありしと決めたればなり　十七ミレトより人をエペソに遣して教會の長老たちを召り　十八彼等が來りし時パウロ之に

お曰けるは我アシアに來りし初の日より常に爾曹の中に在て行ひし事いかやうなりしかと爾曹の知ところなり也　十九即ち我もべてれ事に謙遜と涙と試煉とを經し主に事へ　二十又いかに益ある事も隱さず爾曹に告知らせ公衆の前にも各家にも於て爾曹を教へ　二十一神に對ては悔改めと我等の主イエスキリストを信仰ぶべき事とユダヤ人またギレキヤ人に示せり　二十二今我心切りて靈に縛られエルサレムに往のしあるて遇ところの如何と知ず　二十三たゞ聖靈每邑に我に示しいふ縛と患難われを俟りと　二十四然ども我わが往べき路程と主イエスより受し職とをおもち神の福音と證せる事とを遂行んためには我生命をも重世ざる也　二十五今ひと知あんぢらの中と難行て神の國を傳へし我面を勿後あんぢら復び見ざるべし　二十六是故ゐ我今日あんぢらゐ證す凡れ人の血ゐ被て我り潔くして與るごとあし　二十七蓋ひとを神の旨と殘す所あく悉く爾曹ゐ宣たるが也　二十八故ゐ爾曹をつゝしみ慎を且あんぢらゐ聖靈ゐ立らをて監督とあるる其委群を慎み主の己が血とをもて買給ひし所の敎會を牧ふべし　二十九

が去ん後み其群を惜ざる暴き狼あんなんぢらの中より也弟子等を己ゐ從ハせんとて悖理ある言と言出ゐ者れあらん　三是故ゐ爾曹儆醒せよ我三年れあひだ夜も晝も厭ず涙と流して各人と勸ーみとと憶ふべし　三兄弟よ爾曹の德と建かつ凡れ聖ちをし者れ中お於て衆と爾曹お予る能ある神れよび其恩惠れ道お今ゐ也爾曹と委ぬ　三三ゐ人れ金銀衣服と貪りしみとゐし　三四我ゐれ手ゐ我れよび我と偕お在し者れ需用お供ー事ゐ爾曹が知ところ也　三五ゐ爾曹も如此勤勞て柔弱者と扶け且主イエスれ日給へる受るよりも與る七福ありとれ言と心お記べきと

凡れ事お於て示せる也　三六パウロかく語て跪づき衆人と共お祈をり　三七彼等もゐ夫お哭きパウロれ頸と抱て之と接吻し　三八再び我面と見まじといひし言ゐ因て別ても憂とゐし彼と舟まで伴へり

第二十一章　ゐまら強て彼等お離を舟お出ゐ後直ちコスお至り次日ロドスお至り　二パタラお至り　二ペニケお渡る舟お遇みをお登て出ゐ

ゐき彼處よりパタラお至り　二ペニケお渡る舟お遇みをお登て出ゐ

と望んで其と左お過スりヤお濟りツロお着り蓋み其處お於て舟の積荷と卸さんと爲ゐり　四斯て我儕弟子さちと訪そゐお七日とにまとり彼等聖ゐ感じてパウロお耶ルサレムお往ゐ勿ゐ　五ゐ往ゐ我儕日立て途おつく彼等ろれ妻孥と共お我儕と送て邑の外おまで至まが共お岸に脫きて斯り　六互お別と告畢りて後ゐをられ舟お登ゐをら七其家お歸り　七我儕ツロよりトレヤお濟り既ゐ舟路そはりぬ斯て兄弟等れ安否と問ゐまらと偕お一日留り　八次日いでさちてカイザリヤお至り傳道者ピリポれ家お入て其お留る此ピリポれ四人れ女ゐり曾處女ゐり　九ゐをら數日ゐ留をるときアガボと名る二人の預言者ユダヤより下り　十我儕が所お來りてパウロれ帶ととり己の手足と縛て曰けるハ此の如くユダヤ人い此帶の主と縛て異邦人の手お付さんと聖靈いひ給へり　十一此事と聞て我儕と此地の者とどもゝ彼お耶ルサレムに上る勿をと勸しお　十二パウロ答けるハ爾曹ゐ

予笑て我心を摧くや我主イエスの名ゆゑ縛らるゝ耳ゐらずエルサレムに死るも亦甘する所ゐり　十四ゐ勸ゆる事を納ざりければ我儕主ゆゑ旨の如く成と曰て止ぬ　十五既ゐ數日を經て我儕行裝をゐしエルサレムゐ上るカイザリヤより弟子等も數人ゐらと偕ゐ行て我儕とクプロ人ナソンと云る老弟子の所ゐ宿らせんとて其家ゐ指ひ入ゐり　十六ゐ我儕と偕ゐヤコブ其家ゐ入しゐ長兄弟たち欣て我儕を迎ふ　十七次日パウロ我儕とゐヤコブ許ゐ至けるに老會みな集居をり　十八パウロ彼等に安否と問のち神の己と用て異邦人の中ゐ行ひ給し事を一々告けるに　十九彼等之を聞て主を崇かり彼ゐ曰けるは兄弟よ爾ユダヤ人の信ぜしもの數萬ゐるを知るをられ皆律法ゐ熱心ゐる者ゐるなり　二十なんぢ異邦人の中ゐゐるユダヤ人ゐ教て悉くモーセを棄しめ且兒子ゐ割禮を行ふ勿を例ゐ從ふ勿をと言りと告る者ゐり彼等ゐ尓ゐ聞たり　二十一今いかゐせぞ多け人々爾の來をるを聞て必ず集らん　二十二是故ゐ爾ゐ曰ところゐ從へ我儕ゐ誓願れもの四人ゐり　二十三爾これ人々を携へ之と偕ゐ

ゐ潔淨をゐし代て其費と賄ひ彼等ゐ髮と剃得しめよ然ば人々ゐゐ　二十四ゐなんぢ其ゐ律法と守て行つる事と知べし　二十五信じたる異邦人ゐゐ我儕もでゐ書を遣て斯る類れ事ゐ守るゐ及ずたゐ偶像ゐ獻し物と血と勒殺ゐる者ゐよび姦淫とを愼む可と定たり　二十六斯てパウロ次日ゐれ人々と携へて之と偕ゐ潔事をとゐし且のぞら各人れ爲ゐ供物を獻べき事と其期までゐ潔事れ日を盡さん事と殿ゐ入て告ときアジアより來しユダヤ人パウロれ殿ゐ居と見て凡ゐ民を變動し　二十七め彼を執へ　二十八喊叫けるゐイスラエルれ人々我儕と助よ此人ゐ遍く敎て我儕ゐ民と律法と此處ゐ逆ふ者ゐり又ギリシヤ人とも引て殿ゐ入こゐ聖所と汚たり　二十九蓋ゐさきエペソ人トロピモと云る者れパウロと共ゐ城下ゐ在しを見てパウロ之と殿ゐ引入しと意へる也　三十是ゐ擧て舉邑さわぎ立人々趨集りてパウロを執へ之を殿より曳出しけるを直ゐ其門と閉たり　三十一彼等ゐ殺んとせし時ゐをねくエルサレム紛亂さりと其

風雹千夫は隊の長ゐ聞えけるが 三一彼たちゐ兵卒と百夫は長等と率ゐ彼
等は所ゐ趨下るり彼等千夫は長と兵卒と見てパウロと扑みるを止 三二其と
き千夫は長近りてパウロと執へ命じて二は鏈ゐて之と繋せうの誰たる又
何事と行しうと問たり 三三乃ち飛は人々のうち或は彼事といひ或は此事と言さ
けび亂ゐ因て千夫の長ろは實情と知ゐと能は事是故ゐ命じて彼と陣營ゐ
曳往しめたり 三四階に及るとき兵卒パウロと負り 三五パウロ曳きて陣營ゐ入んとせし時千夫は
長ゐ曰けるは我ゐんぢゐ請て可や否のを答けるは 三六希臘の義ゐ能と通し四千人の凶徒と
や 三七爾は義ゐ能と通し四千人の凶徒と率て野ゐ出しエヂプト人あらざ乎
三八パウロ曰けるは我とキリキヤけタルソゐ生しユダヤ人ゐて邵邑の民ゐ
非ず願くは民ゐ語るゐとを我ゐ許せ 三九千夫の長ゐとを許けれはパウロ階
に上ゐたち民に向て手と搖し其大ゐ靜をるときヘブルけ方言ともて彼等
ゐ謂きかく

第二十二章

四〇人々兄弟ゐよび父等よ請いま我ゐ陳んとするゐ事實と爾書きけ
二彼等ろれヘブルけ方言にて語るとを聞ていよく靜をり 三パウロ曰けるは
ゐ我はユダヤ人ゐてキリキヤのタルソゐ生き而して此邑のガマリエルの
足下ゐて長らを先祖の嚴ゐる律法ゐ由て敎られ神よ熱心ありし事は今日
れ爾曹そべては者けは如ゐりき 四わを發ゐ斯道けは人と男女とも縛つ獄ゐ
解し死ゐ至るまでゐ之と窘たり 五即ち祭司の長と長老會の人れ我ゐ就そ
ゐ證とゐるその如く我彼等より兄弟等ゐ遣る書と受ダマスコゐとる者と
綁てエルサレムよ曳來り刑と受しめんとて彼處ゐ趨けり 六然るを我ゆきて
ダマスコゐ近けるゐ時おゐよそ日中たちまち天より大ゐる光ありて我と
環照せり 七ゐを地ゐ仆る其時サウロサウロ何故ゐをと若るやといふ聲と
聞ゐをを答けるは主よ爾は誰ぞや我ゐ曰けるは我ゐ爾ぢ若る所はナザレ
れイエスあり 八我と偕ゐ在しもは光と見て懼たり然ゐ我に酌し者の聲
と聞ざりき 九我いひけるは主よ我ゐおと爲べきの主ゐをお曰給ひけるは

起てダマスコに往そこでお定りし爾が爲べき事い彼處お於て爾お告べし十一
ろれ光れ耀お緣て我そるみとと得ず成けきび我と偕お在し者れ手お援ら
をてダマスコお至きり十二あの邑お住る凡れユダヤ人れ中お譽あるアナニ
アといふ律法お循へる神と敬ふ人十三我るとお來り側お立て曰けるい兄弟
サウロ復び見みとと得よ我たゞちお目と擧て彼と見たり十四彼また曰ひを
られ列祖の神い爾お神の旨と知しめ彼れ義者と見させ其口より出る聲と
聞しめん事と定め給へり十五蓋みんち彼が爲お其見聞せし事と以て凡の人
お向ひ證人と爲べけきび也十六今みんち如何で緩ふ可んや起て主れ名と顧
バプテスマと受て其罪と滌去べしと十七我エルザレムお返り聖殿お於て祈
きる時せばろしおて十八見けるい主わをお向て急げ彼等い爾が我おつゐて
立る證と納ざるお故お速おエルサレムを出よと曰たまへり我いひける
い主よ我もと爾と信する者と執へ或い諸會堂お て之と鞭ちしみとと彼等
い知ニ十きと爾れ證人ステパノれ其血と流さるゝ時きを傍お立て其殺さる

まと好とし彼と殺す者れ衣と守きり二十一主きお曰けるい往きを爾と遠く
異邦人お遣すべし二十二彼等きまて此言お至とお聽と揚て曰けるい此れ如き
者と地より去のをい先お生命れ有べき者あらざりき二十三あをら喧呼で其衣
とぬぎ塵と空中お揚けをび二十四千夫れ長命にてパウロと陣營お引入しめ何
故のく彼等がパウロお向て喧呼のと知んがため鞭ちて彼よ訊べしと言り
二十五うをら革鞭と捷んとてパウロと引張しとき彼ろの側お立る百夫の長お
曰けるい罪と定ずあてロマ人さる者と鞭つn律法お當ふや二十六百夫の長み
をと聞ゆきて千夫れ長お告て曰けるい爾あをみとと愼めよ此人とロマ人
あり二十七千夫れ長ゆきてパウロお曰けるい爾nロマ人あるや我お告よパウ
ロ曰けるい然り千夫の長みたへけるい我い多の金と以て此民籍と得さ
りパウロ曰けるい我い生來あり二十八是よ於てパウロを拷問せんとせし者等
さゝちお退けり千夫の長それロマ人あると知あをと縛しみとと懼る〇二十九
斯て明日ユダヤ人の彼と訟たる故と確お知んと欲ひパウロれ縛をとき祭

司の長等および全議會を命じて集らしめパウロを携往て其前に立せさり
第二十三章
一パウロ議會を目と注のきらと見て曰けるは兄弟よ我今日
に至るまで凡れこと良心を由て神の
二者を命じて彼れ口を擊しむ　是を於てパウロ彼を曰けるは粉墨さる壁よ
三神い爾と擊ん爾ご坐せるい律法を循ひて我と審ん爲ある律法を違ひ命
じて我と擊しむる乎　側を立る者ども曰けるい神の祭司れ長を詬るや
四パウロ曰けるい兄弟よ我それ祭司れ長ある乞と識ざりき誠に然と言ざり
五しもろい爾の民れ有司と詐る勿を錄さをさり　六パウロ彼等れ其半とサ
ドカイれ人半いパリサイの人ある乞と知て議會れ中を呼り曰けるい人々兄
弟よ我とパリサイれ人まさパリサイ人れ子あり死さる者れ難ることと望
七因て我いま審る　八パウロ如此いひしのたパリサイの人
れ間を爭論れこりて衆りさる多れ人々相分きたり　九蓋サドカイ人れ復生
ま天使ふよび靈と無と言パリサイ人れ之とみを有と言をるより　十遂を大を

る喧嘩とありぬパリサイ人れ學者たち立て爭ひ曰けるい我儕あれ人の惡
ごとと見ずもし靈あるひい天使れ彼を語し事あらんあを我儕神を敵す可
らざる也　十斯て大ある爭ひ起けさをた千夫れ長パウロが彼等を引裂きん事
を恐て兵隊を命じ彼等れ中を下らせ之と奪とり陣營を引入しめたり○十一
主ろれ夜パウロれ側を立て曰給ひけるいパウロよ勇ろい爾ご是を於ても
ルサレムを證せし如く必ずロマを
人營と結び共を誓て曰けるいパウロを殺すまでわ食飲とも爲まじ　十三これ
誓と爲る者い四十人餘あり　十四かを祭司れ長および長老さちれ所を來そ
曰けるい我儕パウロと殺そまでい何とも食じと誓と立たり　十五是故を請を
んちら議會と借をパウロれ事とをは詳く訊る狀と作て千夫れ長を告のを
と爾曹を卑下らーめよ彼が近のざる前を之と殺きんと我儕そこを備と爲
り　十六然るをパウロれ姉妹れ子あれ即ち往て陣營を入パウロを告
ればパウロ請て百夫れ長一人とまねき曰けるい此少者と千夫れ長を携往を

れ者のを告べき事あをパ也　十八是に於て百夫れ長のをと千夫れ長よ携往て曰けるい囚者パウロ我と請て此少者をんちお言べき事あをと之と爾お携往んをと求へり　十九千夫れ長ろれ手とひき僻靜ある處お退きて問けるい爾我お告んとする事い何ぞや　二十彼いひけるいユダヤ人パウロに事とあほ詳く問る狀と作て爾あみひ明日らをと議會お曳下さんあとと約せり　二一然ど爾うをらが言お徒ふ勿を益ろれうち四十人餘れ者パウロと殺をまでい食攴又飲じと共お誓て埋伏し今すでお其預備となして爾れ許と俟り　二二千夫れ長少者お爾我お此事と告しと人お語る勿をと囑付て之と去しめ　二三又百夫れ長れ二人と召て兵卒二百人騎兵七十人矛と持もれ二百人と備へ今夜第九時お𠮟りつ者と備てパウロと乘しめ之と護て方伯ペリクスれ所お送るべしと曰　二四またな左れ如き者とのき添さ　二五云クラウデヤルシアス最も尊き方伯ペリクスれ安と問　二六みれ入ユダヤ人お曉とを豚お殺さんとせしと我ろれロヤ人あると聞しおより兵隊と率お往て之と拯け　二七彼等が訟る故と知んと欲ひ之と其議會お引下しが　二八彼が訟らをとしい惜ろれら律法れ論お由るれみにて其死お當るべく亦繫るべきれ故と見ざる也　二九然るお二メヤ人あをと害せんと計よー其事をれお現をーおより直に之と爾れ所お遣をり又のをと訟し者等に命とて其訟る所と爾お告あめんとを○　三〇是お於て兵卒い命お遵ひてパウロと携へ夜れ中おアンテパトリスお至り　三一明日騎兵としてパウロと共お往しめ其餘れ者い陣營お歸をり　三二騎兵はカイザリヤお至り書と方伯お呈しパウロと其前お立しむ　三三方伯書と讀畢りて彼お其國と問キリキヤれ者あると知て　三四曰けるいお俟て守らしめたり

第二十四章

五日と經てれち祭司の長アナニアい長老等れよび一人れ辯士テルトルスと共お下てパウロと方伯お訟ふ　二パウロ召出さをし時テルトルス訟れ端と發て曰けるい　三最も尊きペリクスよ我儕あんちお由て太平

と得あつ此國も爾の先見ホ豁て其ホ改まりたをば時ヨ隨ひ地ホ關ひて感
謝せざるあし　今已も煩て爾と磯ぐる事なきまへ　五蓋われら此人と見ホ疫病ヒ如し天下のユダヤ人と擾せり且
あをいナザレ宗の首ホて　六また殿と瀆さんとせり我儕ホをと執已ご律法
ホ循ひて審と爲んと欲ひあホ　七千夫ヒ長ルシアス來て我儕の手より强て
之と奪とり　八彼と訟る者として命じて爾の所ホ來ホめさり爾ホをと訊ば
我儕ヨ訟る所と惡く知べし　九ユダヤ人も共ホ訟へ曰ける如此等のみと誠
ホ然り〇十方伯首ともて示しパウロホ言しめけをば彼ホさつけるヽ爾が
多の年ヨれ民の審官たると我志るが故ホ自己の事情と訟るみとと喜べり
十一爾ら知ん我禮拜ヒ爲ホエルサレムホ上ヒより僅ホ十二日ヒを彼等ヽ
我が殿ホ於て人と爭論とあし又會堂ホ或ひは城下ヨ於て人々と擾ホる事
と未だ見ざるべし　十三且ホをらが今已ホれと訟る所ヒ事ヽ憑據と立て之と確
するホと能はじ　十四然ヒ我みれ事と爾ホ認さん夫已をば彼等が異端と稱る
道ホ循ひ我が列祖の神ホ事へ惡く律法と預言者ヒ書ホ錄さをし言と信じ
十五ヽり義も不義も死し者ヒ甦らんみとと神ホ願て我ヽ望り印ち彼等が
望む所と異ホあるなし　十六此ホ因て我つねホ自ら勵ミ神ホ對ひ人ホ對て良心
ヒ責ホあらんみとと務るあり　十七已と數年と歷たりしのち施濟と我民ホ
志又獻祭とせんが爲ホ歸たり　十八我すでヨ潔淨て此等ヒ事と行る時アシヤ
より來しユダヤ人等ヽ殿ホ於て我が人と集るみとをせず亂とも爲ざるを
見たり　十九もし我と訴べき事ホあらば彼等ホんぢヒ前ホ詣ふべし　二十或ヽ又已
が議會ヒ前ホ立るとき呼りて死さる者の復生ヒ事ホ就已を今日爾曹ホ審
るといへる此一言ヒ外ホ此人ヾもし我が不義ホありしを見ば言べし〇二十一是
ホ於てペリメス詳細ホ其道と知けをもて彼等と遲ホあめんとして曰けるヽ千
夫ヒ長ルシアスの下らん其時已を悉く爾曹ヒ事と究べんと　二十二百夫の長ホ
命じてパウロと守しめ且こととを寛容ホして朋友ヒ彼と供給ホみと有と禁せ
ざらしむ〇二十三數日ヒ後ペリクス其妻エダヤ人ホるドルシラと共ホ來りパ

ウロと召て其キリストと信ずる道と語るを聽二五パウロ公義と節制と來ん
とする審判とを論ぜしのちペリクス懼て答けるは爾姑く退け我便時を得
ば再ゐんぢと召ん二六ペリクスパウロより金と得んゐとを望ダ故ゐ屢次の
ちと召て偕ゐ語をり二七斯て二年を經て後ポルキスペストスと云る者ペリ
クスの職を代さりペリクス悅てユダヤ人ゐ取んと欲ひてパウロを獄ゐ繋
おけり

第二十五章

偕ペストス之任國ゐ至て三日を後カイザリヤよりエルサレム
ゐ上をり二時祭司の長等とユダヤの人ゐパウロを訴へ且
ゐとを途ゐて謀殺さんと欲ひ彼ゐ勸ろめ思と我儕ゐ賜てパウロとエルサ
レムゐ召給はんゐとと請四ペストス答て曰けるはパウロの守らをてカイ
ザリヤゐあり我も遠うらず彼處ゐ赴くべし五是故ゐ爾曹の中うち權威ある
者ども我と共よ下り彼ゐよついて訟べきゐとの有を訟へよ六ペストス彼等の
中ゐ十日餘とゐまりてカイザリヤゐ下り明日審判の座ゐ坐り命じてパウ
ロと曳出しむ七パウロの來をる時エルサレムより下しユダヤ人等のゐと立
圍をて證據を立るゐと能ざる多端の重罪をもて訟とあせり八パウロ辨訴
けるは我いまだユダヤ人の律法および殿ゐさカイザルゐ曾犯せる所ゐ
しペストス悅とユダヤ人ゐ取んとしてパウロゐ答て曰けるは爾エルサ
レムゐ上り彼處ゐ於て此事ゐつき審判と我前ゐ受んゐとを望むや否十パ
ウロ曰けるは我今カイザルの審判の堦ゐ立れ處ゐ於て審と受るは當然
ゐり我は爾ゐ明ゐゐ知る如くユダヤ人ゐ不義と爲ゐとゐし十一もし不義
と行ひて死ゐ當るべき罪と犯さゞる我いと免るゝゐとを欲ずと若われを
訟る所れゐと虛きとれは其望に任せて我と彼等ゐわたし得る者ゐし我い
カイザルゐ上告せん十二是ゐ於てペストス議事官と相議ゐさへて曰けるは
爾カイザルゐ上告せんと欲へりカイザルゐ往べし○十三數日と經て後アグ
リッパ王およびベルニケペストスれ安否と問ん爲ゐカイザリヤゐ來り十四
彼處ゐ留をることと久かりしかばペストスパウロれ事と王ゐ告て曰けるは

此ゐ一人ゝ囚者あり即ちペリクスは
と呼ぎ祭司ゝ長ゞユダヤ人ゝ長老たち之と訟へて罪ゐ擬んことを求へり
四 彼等ゐ答けるゐ訟らをしもゝ己と訟し書ゐ對て其訟る所と分理べき
機と未だ得ざる先ゐ之と死ゐ付るゐロマ人ゝ例ゐ非ず 五 是ゐ於て彼等ゐ
ゝ處ゐ來集りゐ我も日と延ゐことをせず次日審判ゝ座ゐ坐り命じて其人と
曳出さしめたるゐ 六 訟者どもも立て之と訟ーが其事ゐ夕違料りし所ゐ違
へり 十九 惟ゐのきちゐ鬼神を敬ふ己が通ゞパウロが生りといふ既ゐ死し一人
ゝイエスとゐ就て爭論どるし彼と訟ーゝを 二十 我ゐをられ質訊ゐ藏けをゝ
パウロゐ對ひ爾ゝエルサレムゐ往ゐゝゝ事ゐ判きて彼處ゐ於て審判ゝ受るゐ
どと欲ふや否と問しゐ 二一 彼ゝパウダストゝ質訊ゝ受んとして聽をんゐとゝ
求しゐ因ゞを命じて之とカイサルゐ送るまで守らせ置りゐ 二二 アグリッパペ
ストスゐ曰けるゐ我も亦ゐれ人ゐ聽んゐとを欲なり彼いひけるゐ明日ゐ
ゝち之ゐ聽ゝー 二三 是ゐ於て次日アグリッパとベルニケ大ゐ威權を備へき

りて千夫ゝ長等ゐよひ邑ゝ貴兒人々と偕ゐ公堂ゐ入ぬパウロゐペストス
ゝ命ゐ由て曳出さる 二四 ペストス曰けるゐアグリッパ王およひ凡て我儕と
偕ゐある人々よ爾曹ゐの人と覩ゐるべしユダヤゝ民多ゝ人キエルサレムゐ於
ても亦ゐゝ所ゐ於ても彼よりいいて我ゐ訟かをゐ此ゝち生べき者ゐ非ずと
呼叫べり 二五 然ゞ我ゐをと查看て其死べ乏事と爲ざりしと知り且のを自ら
アウグストゐ上告せんと爲ゐより我ゐをと解らんゐとと定さり 二六 我ゐきゐ
就て我ゐ主上ゐ奏すべき實情と得ず故ゐ我ゐをと質訊て奏すべ乏事と得
んがさめ爾曹ゝ前ゐさ殊更ゐアグリッパ王ゐんぢゝ前ゐ曳出せ 二七 それ
囚者と解るゐ其罪案を書ろへざるゐ理ゐ合ずと意へべ也

第廿六章

アグリッパパウロゐ曰けるゐ爾ゞ自己ゝ爲ゐ陳る事と許たり
是ゐ於てパウロ手と伸かをらが訟と辯んとして曰けるゐ 二 アグリッパ王
よ我ユダヤ人ゐ訟らをし事ゐつき今日ゐんぢの前ゐて悉く辨訴ゐをと得
が故ゐ我と幸ゐある者どす 三 殊ゐ幸ゐあるゐ爾ユダヤ人ゝ例と彼等ゞ論ずる

所れ躓緒と悉く知たまふ事あり是故よ願くい耐心て我あ聽さまへ　四夫わが始よりユルサレムあ在て我民の中あをり幼稚ときより如何あ世と過しのとユダヤ人いとあ知あるべし　五もし證と爲んとせバ彼等い素より我ダ最あ我儕の敎の中あて最も嚴き所あ遵ひたるパリサイ人ありし事と知り　六今日を立て我儕の先祖等あ神の約束ー給し其望あつきて聆ある〻也　七あの望い即ち我儕の十二の支派の夜も晝も專ら神あ事て得んとする者ありアグリッパ王よ此望の爲あ我いユダヤ人あ訟らをさり　八神ずてゐ死し者と謎らせ給りと云とも爾曾あんぞ信じ難しとする乎　九我も亦發あいナザレのイエスれ名あ逆いんがため多の事と行い宜ゐと〻自ら意ひ　十エルサレムあて此事と行り即ち祭司れ長等より權威と受て多の聖徒と獄あ入ま た彼等の殺さる〻時い其と宜としし　十一諸會堂あ於て屢次みをと罰し強て之お褻瀆を言しめ且狂るゐと甚しく之あ由て外國れ邑あまて攻及べり　十二此とき祭司れ長等より權威と命令と受てダマスコへ往ーあ　十三王よ其途あて正午ごき天より光あると見たり日よりも耀きて我あよび同あ行る者と環照せり　十四我儕をな地あ仆る其時へブルの方言あてサウロ〻サウロ何ぞ我と窘る乎あんち莿ある複と蹴あさ難ーと我あ誡をる聲と我きけり　十五我いひけるい主よ爾い誰ぞや彼あたへけるい我い爾が窘る所のイエスあり　十六爾起て立よ我あんちあ現るゝい爾を立て役者とし又あんちの既あ見し事と我が爾あ現をて示さん其事れ證人と爲んがため也　十七我なんちと守て此民および異邦人れ手より拯ふべし今あんちと彼等あ遣すい　十八彼等れ目と啓き暗と離をて光あ、就サタンの權と離をて神あ歸せしめ又彼等をして我と信ずるあ因て罪れ赦と聖らをし業と受ると得させんが爲あり　十九是故あアグリッパ王よ我あれ天れ現示あ背ずして　二十先ダマスコのエルサレムの人々次あユダヤの全地および異邦人あまで恒あ悔改あ符ふ行とをして罪と悔べき事と神あ歸すべき事とと宣傳へたり　二十一此等の事あ由てユダヤ人ども殿あて執り我と殺さんとせり　二十二然して我い神れ佑

と え今日ゐ至るまで猶る〻こと、あく小き者ゐも大ゐる者ゐも證となせり
我言とゐろゐ預言者おゐよびモーセぞの臨來かあらず成んこと、ゐ非ざ
るゐあし　二三即ちキリストは苦難とうけ死し者は復生は始と、あり光と此民と
異邦人ゐ傳ふること也　二四パウロゐ如此うたへける時ペストス大聲ゐ曰
けるゐパウロよ爾ゐ狂氣せり博學爾と、して狂氣せしめたり　二五パウロ曰け
るゐ最も尊きペストスよ我ゐ狂氣せるゐ非ず我言と、ころゐ眞實よーて能
ある心より出るあり　二六ゐ此等は事情ゐ王よく知たさへを我はいあら ず
して王の前ゐ陳れり證みきられ事は方隅ゐ行ゐさるゐ非ざきを王ゐ隱
る〻所あしと信ずきバ也　二七アグリッパ王よ爾預言者は爾と信ずる乎ゐを
爾の信ずると知　二八アグリッパパウロゐ曰けるゐ爾ゐを勸て容易キリス
テアンと爲んとす　二九パウロ曰けるゐ我ゐ惟あんぢ耳ふらず今日ゐを聽
と、あろは者ごゐ此縲絏あくーて我ゐ
ごき者とあらんみとと神よ願ふあり　三十如此のさり畢しごき王と方伯および

ベルニケ又こもゐ坐せし人々起て退き　三一相語て曰けるゐ此人は死べき事
と縲絏あるゐる可こと、爲ざる也　三二アグリッパパペストスゐ對ひ曰けると
此人もしカイザルゐ上告せんと言ざりしならバ既釋すべき者あり

第二十七章

ゐら已あイタリヤへ航る
ゐと定りけるを彼等パウロ及び
他れ囚者等とアウグストス隊れ百夫れ長ある ユウリアスと名る者ゐ付せり
二是ゐ於て我儕アヂアゐ沿て駛んとそるアドラミテオムれ舟ゐ登て出ヤ
クドニヤれテサロニケ人アリスタルコ我儕と偕ゐ在き　三次日シドンゐ着
りユウリアス慇懃にパウロと待ひ彼ゐ朋友の所へ往て其供應と受るみと
を許せり　四我儕そ彼處より舟出せしケ風れ逆ふゐ因てクプロれ風下れ
方ゐ走り　五キリキヤとパムフリアれ海と過てルキヤれムラと云る港ゐ至
りぬ　六此處ゐて百夫れ長イタリヤへ濟るアレキサンデリア れ舟ゐ遇て我
儕を之ゐ登たり　七多日れあひだ舟れ行ゐと遲くゐしてクニドスゐ對
へる處ゐ至り風れ順ゐらざるゐ因てサルモテを過クレテれ風下れ方と走

り　八 僅くありて其岸を沿テサイアと
と歷ゐと既ゐ久く斷食と期も過ぬるを
ける〻人々よ我意ふゐ此舟路ゝ損害多
我儕と生命よも及ぢん　十一然るにパウロと
と舟主と言と信ヒたり　十二且ゐと港ゝ冬
ス ゐ至り彼處ゐて冬と過そゐとと得ん
ピニクスゝクレテの港よて西南と風
也　十三時よ南風徐ゐ吹けるをバ彼等志と
しゐ　十四未幾ユーロクルドンと稱る狂風
ゐ敵ふゐとを得ず我儕ろれ風ゐ任て
方へ駛ゆき　十六僅くありて小艇を取む
て大舟と胴と綯うつ　十七淵ゐ乘掛んゐとを
ゐよりて次の日水夫ら貨物を捌つ　十八
斯て多日のゐひだ日も星も見ずして疾風ふきあてけるを我儕ゐひ
ゐ救るべき望さえ果たり　二十人々久く食せずパウロ彼等と中ゐ立て曰ける
ゝ人々よ爾曹襲よ我諫と聽ンレテよより離るゝゐとと爲ずして此損害と受
すゐる可むずありー　二十二今わき爾曹ゐ勸む勇め爾曹と中一人だゐ生命と失
ふ者ゐし惟舟を失ふゐと有んれそ　二十三蓋ゐが屬する所ゐが事る所と神の使
者ゐと夜ゐが側ゐ立て　二十四パウロよ懼るゝ勿ゐ爾必ずカイザルと前よ立べ
ー旦神そ爾と偕ゐ舟ゐある者と悉く爾ゐ賜と曰り　二十五是故ゐ人々よ勇めや如
此ゐれゐ語り給へる如く必ず成んと我神と信ずをバ也　二十六ゐきら必ず一島
ゐ推上らをん　二十七斯て第十四日と夜ゐ至り我儕アデリアと海よ飄ふ夜半ご
ろ水夫ら岸ゐ近けそと意ひて　二十八水と測しゐ二十尋と得たり少ー進て又測
しゐ十五尋と得たり　二十九石ゐ乘掛んゐとを恐を艫より四と錨と投て天明と
待ゐびぬ　三十水夫ら舟より逃んとして舳よそ錨と投ゐ狀をゐー小艇と海よ
下けをバ　三十一パウロ百夫と長と兵卒ゐ曰けるゝ此人々もし舟よ留らずを爾

曾救るゝことを得ヒ 三 是に於て兵卒ら小艇を索と斷きり其流るゝを任たり 三一 夜の明んとする時パウロ凡れ人々を食せんことを勸て曰けるは爾曹待ひて食せざりしまと今日を十四日あり 三二 故を我なんぢらを食せんまとを勸ろは救を得べき助とあるを可をばあり爾曹れ頭髮一縷だを爾曹れ首より隕ざるべし 三三 如此のたりて パンを取すべてれ人れ前を神よ謝し之を擘て先食しけるを 三四 彼等も亦勇んで食せり 三五 舟を登る所れ我儕合て二百七十六人あるき 三六 既を食ーて飽けきをば穀物を海を棄て舟を輕せり 三七 夜あけて其地を識さるを一れ海灣を見たり此を洲崎あり或は至ることを得ば彼處を舟を進んと謀り 三八 綱を斷て錨を海を棄て舵纜を緩め舶れ帆をあげ風を順ひ洲崎を望て走しを 三九 潮れ流交ふ處を至て舟を洲を乘あげ舶は歷定て動ず艫を浜れ勁ぎ爲を破らきたり 四〇 是を於て兵卒ら囚人れ泅逃をんことを恐をと殺さんと欲む 四一 然ども百夫れ長パウロを救んと欲ひ共勸を阻のり泅得る者は先水を跳いり 四二 ろれ他を或は板あるひを舟れ碎木を乘て岸を至んまとを命じさり此れ如く皆すくとるゝ事を得て岸を登

第二十八章

我儕そでを救を得て後ろの島れ名をマリタと稱るまとを知をり 二 夷人ら尋常あらぬ情分をあく降雨と寒とをより火を熾て我儕衆人を待遇せり 三 パウロ多れ柴を集て火を放しを火熱により蝮いで來て其手を纏り 四 夷人ら蝮の其手を懸たるを見て互を曰けるは此人は正く人を殺しゝ者あらん彼海より逃たりと雖も天理ろの生るまとを容さゝる也 五 パウロ蝮を火の中を拂綽ーて害を受るまとなし 六 彼等パウロを候ひて其腫るか或は忽ち仆て死るまとをあらんと意しを久く候へども彼を害れ及ざるを見て其意を轉みは神ありと謂り 七 島の長をプブリヨと名く此邊を己が有る田地あり彼を是らを接て慇懃を三日宿らせたり 八 時を父プブリヨの父熱と痢病と患ひて臥居しがパウロろれ所を至り祈て手を其上を按あをと醫せり 九 此事ありしを島を有る所れ他れ病者皆も來て醫さるゝまとを得

たり十 このとき禮を厚うして我儕を敬ひ又舟山れし時ゐ臨て我儕ご物の無てこのゐぬ物を贈をり十一我儕三ケ月を經てれち此島ゐて冬を過しゝデヲスクリれ號あるアレキサンデリア比舟ゐ登いでゝ十二スラクサゐ着三日をやまをり十三彼處より回てレギヲゐ至り一日を經て南風起けをバ次日プテヲリゐ至り十四兄弟等ゐ遇このをらが請ゐ任て七日をやまり而してロマゐ往○十五ロマれ兄弟たち我儕の事を聞アッピーポロムおよび三館を云る處ゐ來て我儕と迎ふパウロ之を見て神を謝し其心ゐ力を得たり○十六既ゐ我儕ロマゐ至しゐ百夫の長衆四を王を守る兵隊れ長ゐ交せり然をパウロの一人れ守兵と共ゐ別ゐ自ら居みとを許さをさり十七三日を經て後パウロユダヤ人の尊重さる者等を召集む彼等の集をる時みをゐ日けるの人々兄弟よ我いまだ我民また先祖の例ゐ違て何事をも爲しあとるあし然ゐエルサレムより囚人とをりてロマ人の手ゐ付さをさり十八ロマ人そでゐ我を審たきを死べき罪おきが故に我を釋さんと欲へりユダヤ人みきを拒しゐより我己ゐとを得ずしてカイザルを上告す然をも我が國れ民を訟んが爲ゐの非ず十九斯ゐ因て我ゐんちらゐ會をもゐ請んよとを諸るあり蓋ゐれイスラエルの望れ爲ゐ此鎖ゐ纏るをゑ也二十彼等いひけるの我儕ユダヤより爾ゐついて書信を受ず亦兄弟さちれ來し者も爾ゐ就て何れ惡事あると我儕ゐ報また語し者あし三十然ご我儕ゐんちれ意ふ所を聞んとす蓋ゐをら何處ゐても此宗旨の誹らるゝを知バあり三一既ゐ定さる日ゐ及て多れ人パウロれ館ゐ來をりパウロ朝早より暮ゐ至まてモーセの律法と預言者の書とひき神の國れ事を說のつ之を證しイエスの事を語て彼等を勸たり三二其言ゐ感じて之を然とそる者あり亦信ぜざる者もありて三三互ゐ相合ざるゐより遂ゐ退けり其退うんとせし時パウロ一言を語けるの誠なるのある聖靈預言者イザヤゐ託て我儕れ先祖等ゐ語し言ろの言ゑ云

あんち此民ゐ往て告よ爾曹れ聽をも聽らず視をも見ず二七蓋ゐの民ゐ耳ゐ重して聽心ゐ昧て悟り悔改て我ゐ醫さをん事を恐を其心を頑し耳を聰ひ目を閉たりと二八是故ゐ爾曹知べし神れ

救い異邦人よ遣らを彼等い之を聽んニ九パウロロ此言を言擧し時ユダヤ人
退きて互お大ある爭論をなせり○三十斯てパウロろれ借受し家お居しこと
全く二年をへて來り見んとする者を接て三一憚らず神れ國とれべ主イエス
キリストれ事と敎て禁げらるゝことなし

使徒行傳終

新約全書使徒パウロロマ人お贈をる書

第一章　イエスキリストの僕パウロ召れて仕徒とあり神の福音の爲お選る
ニ　あの福音い從前より其預言者たちお託て聖書お擧ひ給へるものおて三
其子わをらの主イエスキリストを指て肉體に由ベダビデの裔
より生を四聖善の靈性に由を甦りし事によりて明らに神の子たること即
れたり五われら彼より恩惠と使徒の職を受み其名の爲に萬國の人々を
して信じ從いせんと也爾曹も其人々の中に在てイエスキリストの召を
受し者あり六我すべてロマに在とよろの神に愛しまれ召を蒙り聖徒と爲
る者にまで書を贈る爾曹願くい我儕の父ある神れよび主イエスキリスト
より恩惠と平康を受よ○八先あんぢらの信仰を世あげりて傳揚たるが故
にイエスキリストに頼て爾曹衆人お就わが神お感謝す九我ろの子の福音
に於て心を以て事る所の神い我が不斷あんぢらを憶ふ其證あり十われ祈
禱ごとに終にい神の旨意に適ひて平坦ある途をお速かに爾曹に到んあと

を求む 十一 われ爾曹を見んことを深く願ふ
へんと欲へばなり 十二 即ちわれらの中ゐ在て互の信仰ゐよりて相共に安
慰を得べし 十三 兄弟よ我左の〳〵志を立ゐんぢらに到り他の邦人の中に在
ごとく爾曹の中よりも果を得んとせしかども今に至りて尚阻げらる此を
爾曹ゲ知ざるを欲ます 十四 我ハギリシヤ人及び異邦人また智人われよび愚人
にも負る所あり 十五 是故ゐ我力を盡して福音を爾曹ロマゐある人々ゐも傳
んことを願ふ 十六 我ハ福音を恥とせず此福音ハユダヤ人を始ギリシヤ人す
べて信ずる者を救んとの神の大能たれば也 十七 神の義ハ此ゐ顯れて信仰よ
り信仰ゐ至れり錄して義人ハ信仰ゐ由て生べしと有ゲ如し〇 十八 ろれ神の
怒ハ不義をもて眞理を抑る人々の凡の不虔不義ゐ向て天より顯る 蓋人
の知べき所の神の事情ゑ人に顯明にして既ゐ神みれを人ゐ顯し給へば
也 二十 ろれ人の見ゑとを得ざる神の永能と其神性とハ造らたる物ゐよ
り創世より以來さとり得て明らふ見べし是故ゐ人々推諉べきやうなし 二

既ふ神を知て尚おれを神と崇めず亦謝すゑとをせず反て其思念を亂し
其愚ある心蒙昧みれり 二二 自ら智と稱へて愚昏ある者とあり 二三 朽壞ざる神
の榮光を變て朽壞べき人れよび禽獸昆蟲の像ふ似す 二四 是故に神ハ彼等を
其心の慾を縱肆にするに任せて互ゐ其身を辱しむる汚穢ゐ付せり 二五 彼等
ハ神の眞を易て僞となし造物主より も受造物を崇奉りて之に事ふ神ハ
永遠頌美べきもの也アーメン 二六 此ゐ緣て神ハ彼等ゲ恥べき慾をあすに任
せ給へり其婦女さへも順性の用を變て逆性の用とあす 二七 此の如く男子ハ
亦婦女の順性の用を棄て互に嗜慾の心を熾し男と男と恥るゑとをなして
其悖戾ふ當るべき報を己ゲ身ゐ受たり 二八 クをら心ゐ神を存るゑとを願ざ
れバ神も彼等ゲ邪僻ある心を懷て行まじきみとを行ゐ任せ給へり 二九 諸の
不義惡慝貪婪暴很を充せ者また嫉忌凶殺爭鬪詭髓刻薄を盈す者 三十 また讒
害毀謗をあし神を怨む者狎傲慢矜夸讒詐父母ゐ不孝 三一 頑擾背約不悌不
慈ある者 三二 凡て此等を行ふ者ハ死罪ゐ當るべき神の判定を知てゐは自ら

行ふのみあらず亦これを行ふ者をも喜べり

第二章　是故ゐ凡ろ人を議る所の人よ爾推諉べきあし爾他人を議るゐ正くに己の罪を定る也ういふ議る所の爾も同く之を行へば也　二此の如く行ふ者を罪する神の審判ゐ眞理に合へりと我儕ゐ知　三此等の事を行ふ者を議て同く之を行ふ人よ爾神の審判を免れんと意ふ乎　四あんぢ神の豐厚ある仁慈と寛容あると恒忍たまふとを藐蔑する乎ろの仁慈之爾を悔改に導くあるを知ず　五剛愎ゐして悔あきの心ゐ徂ひ己の爲ゐ神の怒を積て其義　轉の顯れん震怒の日ゐ及ぶあり　六神ゐ人の行ゐ循ひて各人ゐ其報を爲べし　七即忍て善を行ひ榮光と尊貴と不朽壞とを求る者にゐ永生をもて報ん　八然とも爭競をあし眞理に順ず不義ゐつく者ゐゐ報るゐ忿と怒と　九患難辛苦とを以てす此ゐユダヤ人を始ギリシヤ人凡て惡を行ふ人ゐ及ぶあり　十ユダヤ人を始ギリシヤ人すべて善を行ふ人ゐゐ榮光と尊貴と平康とを以て報ゆべし　十一ゐを神ゐゐ偏視あけきが也　十二凡ろ律法なくして亡び律法ありて罪を犯せる人ゐ律法ゐ照て審判を受べし　十三神れ前ゐ義と爲るゐ律法をきく者ゐ非ず義と爲るゐ律法を守る者なり　十四ろれ律法なきの異邦人もし本性のまゝ律法ゐ戴たる所を守らゞれ律法なしと雖も己れ律法たる也　十五彼等ろの心ゐ銘されたる律法の工を表彰し其良心てれが證をなして其思念たがひゐ或ゐ訴あるひゐ褒ることを爲り　十六ろれ審判ゐ我が福音ゐ云る如く神イエスキリストをもて人れ隱微たる事を鞫かん日ゐ成べし〇　十七爾もしユダヤ人と稱へ律法を恃み神あるを誇り　十八ろの旨を去り律法ゐ習て是非を辨へ　十九自ら瞽者の相黒暗ゐをる者の光　二十愚なる者れ師盲蒙の傍と意ひ又律法ゐ於て眞理と知べき事との式を得たりとせゞ　二十一何ぞ人を敎て自己を敎ざる乎ゐんぢ人ゐ竊む勿れと勸て自ら竊する乎　二十二なんぢ人ゐ姦淫する勿れと諭して自ら姦淫する乎なんぢ偶像を惡て自ら廟の物を干す乎　二十三ゐんぢ律法ゐ誇て自ら律法を犯し神を輕しむる乎　二十四神の名ゐ爾ゐ緣て異邦人の中ゐ誇讀れたりと錄され

しが如し 二五 爾もし律法を行はゝ割禮は益あり若し律法を犯さゞ爾が割禮は
は割禮なきが如なるべし 二六 是故ゝ割禮なき者も若し律法の義を守らゞ其
割禮なきも割禮ありと謂ざるを得んや 二七 又本性のまゝ割禮なくして律
法を守る者は儀文と割禮をもて倘律法を犯す爾が罪を定めん 二八 明ゝユダ
ヤ人たるも實のユダヤ人ゝ非ず明ゝ身ゝ割禮あるも實の割禮ゝ非ず 二九 反
て隱ゝユダヤ人たる者は實のユダヤ人たり又割禮は心の割禮は眞なり其譽は人ゝ由ず神ゝ由
第三章 然らばユダヤ人の長處は何ぞ耶また割禮の益する所は何ぞ耶 二 凡
の事ゝ於て益ありほし先第一は神の諭をもて彼等ゝ託ね給へること也 三 爰
ゝ信ぜざる者あれと其を如何うの不信は神の信を廢べき乎 四 非ず凡の
人を僞とするも神を眞とすべし爾が戰るゝときの告る言は義とせられ爾が鞫るゝときは
勝を得んと錄されたる如し 五 我儕が不義もし神の義を彰すとせば我何を
言べきか怒を加ふる神は不義あるや此は人ゝ由て言のみ 六 然ても有
し若し然ても有ば神如何して世を鞫かん耶 七 もし神の眞わが僞ゝ因て
れ其榮光いや增が我何ぞ猶罪人と爲れん乎 八 如此あらば我儕が誣らる
ゝ如く善を來らせんとて惡を作ん宜らずや此を我儕が言と云る者あり斯
る人の罪せらる可き宜あり 九 然らば如何ぞ耶われら勝れるか決てなし蓋
われら既ゝユダヤ人もギリシヤ人も皆罪の下ゝ在ことを證せり 十 錄して
義人あし一人も有ずあしとあるが如し 十一 明達者あく神を求る者あし 十二 みな
曲て全く邪となりぬ善を作ものなし一人も有ずあし 十三 うれ喉い破をし塋う
の舌い詭詐をあし其脣ゝ蝮の毒を藏り 十四 うの口い詛と苦とゝて滿うの
足い血を流さんが爲ゝ疾し 十五 殘害と苦難い其途ゝ遺れり 十六 彼等い平康な
る道を知ず 十七 うの目前ゝ神を畏るの懼あることなし 十八 うれ律法の言とこ
ろい其下にある者に示そと我儕い知てい各人の口塞り又世の人ゝうりて
神の前に罪ある者と定らん爲なり 十九 是故ゝ律法の行ゝ由て神の前ゝ義と
爲るゝもの一人だゝ有てとあし蓋律法に由て罪い知るゝ也 二〇 今律法の外

ホ神の人を義とし給ふてとい顯はして律法と預言者い其證をみせり　二二即ちイエスキリストを信ずるに由て其義を神い凡の信者ホ賜ふて區別みしうい人みな既ホ罪を犯せバ神より榮を受るホ足ず　二三只キリストイエスの贖ホ頼て神の恩をうけ功なくて義とせらるゝ也　二四神い忍て已往れ罪を寛容ホ爲給ひしかと其義を彰さんとてイエスを立て挽回の祭物とみせり即ち其血を信ずる者の挽回の祭物たる也　二五二六神いイエスを信ずる者を義とするとも尚みづから義たらん爲ホ今うけ義を彰さんとす　二六然バ誇ところ安に在や有てとなし何の法をもて無とするヿ行の法の非ず信仰の法ありて　二七故に我れもふホ人の義とせらるゝい信仰ホ由て律法の行ホ由ず　二八神い獨ユダヤ人のみれ神ある乎また異邦人れ神なりうき割禮せし者をも信仰ホ由て義とし亦割禮ある者をも信仰ホ由て義とする神い一位なれバ實に然り　三〇さらバ我儕信仰をもて律法を廢るや然ら𠀋返て律法を堅固そる也

第四章　然バ我儕ノ先祖アブラハムい肉體ホ𠮟いて何の得し所ありと言んニ若アブラハム行に由て義と爲れたらんにい有みとみしうい聖書に何と云るうアブラハム神を信ずうの信仰を義と爲れたり　三工を作もの𠮟ず受べきうの也　四然と工ある者も不義ある者を義とする神を信じて其信仰を義とせらるゝ者の福あるよとれ正にダビデが言る如し　六工なく神に義とせられ其罪を赦れゝる𠮟者い福ありと　七主の罪を負せざる人い福ありとみの福ヘ割禮の者にあるや割禮ある者ホあるや抑われらアブラハムい其信仰を義と爲れたりと言り　十然バ如何ホ義をしや割禮を受し後ある乎また割禮を受ざる前ホあるか割禮を受し後あらず割禮を受ざる前ホあり　十一の𠮟割禮の號を受しい未だ割禮を受ざる前に信仰に由て義と爲れたる印證ありり此い割禮を受ざる凡の信者の父にして彼等の義とせられん爲ありまた割禮を受る者の父とあれり唯割禮にのみ由ず我儕ノ父アブラハムの割禮

を受ざりし時の信仰の跡を履もの3爲ゐり 十三 蓋アブラハムと其子孫とに
世界の嗣子たるあとを得させんとの神の約束い律法お由お非ず信仰の義
お由り 十四 若ろれ律法に從もの嗣子たるあとを得バ信仰も虛く約束も亦廢
るべし 十五 ろい怒を來するものい律法ゐり律法なくバ犯すあとも有ゐし
是故に信仰に由て得させ給ふい恩に由せて其約束をアブラハムの諸の子
孫お堅固せんがため也たゞ律法を有る者のみならず亦アブラハムの信仰
お效ふ者お及べり 十七 我なんぢを立て多の國民の父と爲りと錄されたる如
くアブラハムい其信ずる所の神すあはち死し者を生し無ものを有し如く
稱ふる神の前お於て我儕衆人の父たる也 十八 彼い望べくもあらぬ時にあはは
望て多の國民の父と爲んあとを信ず蓋ゐんぢの子孫かくの如あらんと言た
まひしに因てゐり 十九 彼ろの信仰淺りらされた齡れはよろ百歲にして已ゞ
身の既に死るゞ如きとサラれ胎の死るゞ如きとを も顧みず 二十 不信をもて神
の約束を疑ふあとなく反て其信仰を篤して神を尊め 二一 神い其約束し給ふ
所を必ず成得べしと心お決む 二二 是故に其信仰義と爲をたり 二三 ろれ信仰に
由て義とせらるゝ錄されしい特かをの爲のみならず亦わをらの爲お
錄されし也 二四 我儕もし我主イエスを死より甦らしゝ神を信せバ同く義と
せらるゝ事を得べし 二五 イエスい我儕ゞ罪の爲お解され又われらゞ義と爲
らるん爲お甦らさをたり

第五章

是故に我儕信仰に由て義とせられたをバ神と和ぎあとを得たり此
い我主イエスキリストお頼てなり 二 亦わをら彼により信仰およりて今居
とゐろの恩お入あとを得かつ神の榮を望て欣喜をゐす 三 第あを耳ゐらず
患難にも欣喜をゐせり蓋患難い忍耐を生し 四 忍耐ゝ練達を生し練達い希
望を生し 五 希望い羞を來らせざるを知ゐい我儕お賜ふ所の聖靈お由て神
の愛わをらの心に灌渡ゐり 六 我儕なは弱かりし時キリスト定りたる日
に及て罪人のため お死たまへり 七 ろれ義人の爲お死るもの殆と少ゐう
仁者の爲おい死るあとを厭ざる者もや有ん 八 然とキリストい我儕のあはは

罪人たる時われらの爲ゐ死たまへり神ゐ之ゐよりて其愛を彰し給ふ　今
ろの血に頼て我儕義とせられたれバ況て彼に由て怒より救るゝ事あから
ん乎　十　若われら敵たりし時に其子の死ゐよりて神ゐ和ぐゐとを得たらん
ゐ況て和を得たる今ろの生るに頼て救るゝゐとを得ざらん乎　十一　たゞ此
耳ならず我儕に和を得させ給ひし我主イエスキリストゐ頼て亦神を喜べ
り　十二　然バ是一人より罪の世ゐ入り罪より死の來り入みゐ罪を犯せバ死の
凡の人に及たるが如し　十三　律法を立られし時より前に罪ゐ世ゐ有き律法ゐ
くバ罪ゐ人ゐ歸するゐとなし　十四　然ども亞ダムより モーセゐ至るまで亞ダ
ムの罪と等き罪を犯さゞりし者にも死之に王たり亞ダムゐ即ち來らん
とする者の模あり　十五　然と罪のゐとゐ恩賜のゐとの如きゐ非ず若し一人の
罪ゐ由て死るもの多からバ況て神の恩と一人のイエスキリストに由る恩の
賜とゐ多の人に溢ざらん乎　十六　賜ゐ一人より來る罪の如きゐ非ず蓋審判ゐ
一の罪より罪せらを賜と多の罪より義とせらるゝ也　もし一人罪を犯し

よりより死てこの一人ゐ由て王たらんゐ況て溢るゝの恩と義の賜を受る
者ゐ一人のイエスキリストゐより生ゐ在て王たらざらん乎　是故ゐ一の罪
より罪せらるゝみとの凡の人ゐ及しみとも凡の人ゐ及べり　十九　一人
の順ゐ由て多く義とせらるべし　二十　律法を立るゐ罪を增ん爲ゐり然とも
罪の增とてろゐ恩も愈增り　二十一　これ罪の死をもて宰れる如く恩も我儕が
主イエスキリストゐ頼て永生ゐ至らせんが爲ゐ義をもて宰きり

第六章　然らバ我儕何を言んや恩の增ん爲ゐ罪ゐ居べき乎　二　非ず我儕罪ゐ
於て死し者あるに何でゐは其中ゐ於て生んや　三　イエスキリストゐ合んと
てバプテスマを受し者ゐ即ち其死に合んとて之を受しあるを爾曹知ざる
乎　四　故ゐ我儕ろの死ゐ合バプテスマゐ由て彼と同ゐ葬るゐとゐキリスト父
の榮に由て死より甦されし如く我儕も新き生命ゐ行べき爲ゐり　五　若われ
ら彼の死の狀に等かバ亦かれの復生にも等かるべし　六　我儕の舊人かれ

と同に十字架ゐ釘らるゝ い罪の身滅て今より罪ゐ役ざるゞ爲あるを我儕
い知ろい死し者い罪より釋さるれゞ也　八我儕もしキリストと偕に死ゞま
た彼と偕に生んあとを信ず　キリスト死より甦りて復生なず死もまた彼
に主とあらざるを知り　九是ろの死るい罪について一次死ろの生しい神に
ついて生しあり　十如此あんちらも我儕の主イエスキリストにより罪に就
てい自ら死る者また神に就ていい生る者なりと意ふべし　十一是故ゐ爾曹罪を
死べき肉體ゐ王たらしめて其慾に徇ふ勿れ　十二また爾曹の肢體を不義の器
となして罪に獻ること勿れ死より甦りし者の如く己を神ゐ獻また肢體を
義の器となして神ゐ事ふべし　十三蓋あんちら恩の下ゐ在て律法の下ゐ在ざ
れゞ罪い爾曹ゐ主とあること無を也　十四然らゞ如何われら恩の下ゐ在て律
法の下ゐ在さるゞ故ゐ罪を犯すべきか非ず　十五あんちら身を獻げ僕とあり
誰に從ふとも其從ふ所の僕たるを知ざるか或い罪の僕とあらゞ死ゐ及ひ
或い順の僕とあらゞ義ゐ及べん　十六然とも我神に感謝そ爾曹い素罪の僕た
りしかと今い既に授られし所の敎の範ゐ心より服ひて　十七罪より釋さを蒙
の僕とあれゞ也　十八我いま人の言を藉て言るい爾曹ゞ肉體よわき故あり爾
曹ろの肢體を獻て汚穢と惡の僕とあり惡ゐ至りし如く今また其肢體をさ
げ義の僕とありて聖潔に至るべし　十九蓋あんちら罪の僕ありし時ゐい義
ゐ事ざれゞ也　二十爾曹いま恥る所のみとを行ひし其とき何の果を得たりし
や此等のことの終い死あり　二一然と今罪より釋されて神の僕とありたれゞ
聖潔ゐ至るの果を得たり且ろの終い永生あり　二二罪の價い死あり神の賜
い我儕の主イエスキリストに於て賜わる永生あり

第七章

兄弟よ我いま律法を知る者ゐ言ん律法い人の畢生ろの主たるを知
ざる乎　二夫ある婦い律法の爲ゐまた夫の生る間いろきに繫るれと夫志あゞ其
律法より釋さる　三然ゞ夫の生る間ゐ他の人ゐ適む淫婦と稱ふべし若し夫
志あゞ其律法より釋さるゞ故に人ゐ適とも淫婦ゐい非ず　四然れゞ我兄
弟よ爾曹もキリストの身ゐより律法ゐ就て殺されしもの也これ別人すゐ

はち死より甦され給ひし者ゝ適て神の爲に果を結ばんとなり　五　われら肉
ゝ在し時ゝ律法ゝ因る罪の慾われらの肢體ゝ働きて死の爲に果を結べり
六　然とも今われらを繋る者に於て死たれば律法より釋され儀文の舊樣に
由ず靈の新樣に由て事ふ○　七　然らば我儕何を言べきか律法ゝ罪あるや非
ず律法ゝ由されば我罪の罪たるを識ることあし夫律法ゝ貪る勿れと言され
ば我貪慾の罪たるを識ざる也　八　而して罪ゝ誡の機ゝ乘て我中に各樣の貪
慾を起せり律法なければ罪ゝ死るもの也　九　われ昔し律法なくして生たれ
と誡命きたりて罪ゝ活ゐへり我ゝ死り　十　斯て人を生さん爲の誡ゝ反て是
れを死しむる者とあるをば罪ゝ誡の機に乘て我を誘し其誡
をもて我を殺せり　十一　ゐを律法ゝ恥し誡も聖く公義ゐつ善あり○　十二　然ば善あ
る者ゐを死しむるか非ず死しむる者ゝ罪なり罪ゝ善ある者をもて我を
死しむるば其罪たること現はさん亦誡に由て罪の甚しきあとゝ現るゝ也　十三
られ律法ゝ靈なる者と我儕ゝ知されど我ゝ肉なる者にして罪の下ゝ賣れ

たり　十四　蓋ゐゝ行ふ所ゝ者ゝ我ゐ之を是とせず我ゝ願ふ所のもの我あゐを
行ず我か惡む所のもの我あゐを行ばあり　十五　若わゐ願ざる所の者を行ふ時
ゝ律法を善とす　十六　然らば今より之を行ふ者ゝ我に非ず我に居とあろれ罪
あり　十七　善ある者ゝ我すあはち我肉に居ざるを知ろと願ふ所わゐに在とも
善を行ふあとを得されば也　十八　わゐ願ふ所の善ゝ之を行はず反て願ざる所
の惡ゝ之を行へり　十九　若わゐ願ざる所を行ふときゝ之を行ふ者ゝ我に非ず
我あ居とあろの罪あり　二十　是故に我善を行はんと欲ふときに惡れ我にをる
此一の法ある人に就てゝ神れ律法を樂めども　二一　わ
ゝ肢體あ他の法ありて我心の法と戰ひ我を携にして我ゝ肢體の中にをる
罪れ法に從ゝするを悟り　二二　噫わゐ困苦人ある哉あの死れ體より我を救
はん者ゝ誰ぞや　二三　是ゐきらの主イエスキリストあるゝ故に神あ感謝す然
ば我みづから心にてゝ神の法に服ひ肉にてゝ罪の法あ服ふあり
第八章　是故にイエスキリストに在もれゝ罪せらるゝ事あし　二　ろゝ活す靈

の法ハイエスキリストに由て罪と死れ法より我を釋せバ也　三 ろを律法ハ肉に由て茫弱うの能ざる所を神ハ爲たまへり即ち己の子を罪け肉れ狀と爲して罪のために遣し其肉に於て罪を罰しぬ　四 ろを律法れ義ハ肉に從ハで靈に從ひて行ふ我儕に成就せんが爲あり　五 肉ハ從ふ者ハ肉の事を念ひ靈ハ從ふ者ハ靈の事を念ふ　六 肉れ事を念ふハ死あり靈の事を念ふハ生あり安あり　七 ろハ肉の事を念ふ之神に乖るが故あり是神の律法ハ服ハず又服ふみと能ざるが因　八 而して肉にをる者ハ神の心に適ふみと能はず　九 もし神の靈あんぢらに住バ爾曹ハ肉ハ在で靈あきキリストに屬ざる者あり　十 若キリスト爾曹ハ在バ體ハ罪に緣て死靈魂ハ義ふ緣て生ん　十一 若イエスを死より甦らしゝ者ハ其あんぢらに住とあろの靈を以て爾曹が死べき身體をも生すべし　十二 是故に兄弟よ我儕肉の爲ハ負とみろ有て肉ハ從ひ役る者ハ非ず　十三 もし肉ハ從ひ役るバ死べし若し聖靈に由て身體の行爲を滅さバ

生べし　十四 凡ろ神の靈ハ導かるゝ者ハ是すなハち神の子あり　十五 爾曹ハ靈ハ奴たる者の如く復び懼を懷く靈に非ず又養子たる者の靈を受り聖靈みづから我儕の靈と偕に我儕ハ神の子たるを證せ　十六 我儕もし子たらバ又後嗣たらん即ち神の後嗣にしてキリストと偕ハ後嗣たる者あり　十七 我儕もし彼と偕ハ苦を受ゐバ彼と偕に榮をも受べし　十八 われ意ふに今時の苦ハ我儕ハ顯れん榮に比ふべきに非ず　十九 ろれ受造者の切望ハ神の諸子の顯れんみとを俟るあり　二十 受造者の虛空に歸せらるゝハ其願ふ所ハ非ず即ち之を歸する者に因り　二一 また受造者みづから敗壞の奴たるみとを脫れ神の諸子の榮ある自由に入んみとを許れんとの望を有されたり　二二 萬の受造者ハ今に至るまで共ハ歎き共ハ勞苦ゐとあるを我儕ハ知　二三 たゞ此等のものの耳ならず聖靈の初て結べる實を有る我儕も自ら心の中に歎て子とせんみとを俟　二四 我儕ハ救を得ハ望によれり然と望を見バ亦望ゐし既ハ見とゐろの者ハ何で尙ゐれを望んや　二五 若ハを

ら来たる見ざる者を望まば忍て之を待べし　二六 聖靈も亦われらの荏弱を助く
我儕い祈るべき所を知ざれども聖靈みづから言ひがたきの慨歎を以て我儕
の爲ゐ祈ぬ　二七 人の心を察たまふ者い聖靈の意をも知り蓋神の心ゐ遵ひて
聖徒の爲に祈をべ也　二八 また凡の事い神の旨に依て召れたる神を愛する者
の爲に悉く動きて益をなすを我儕い知り　二九 ろを神い預じめ知たまふ所の
者を其子の狀に效せんと預じめ之を定む此い其子を多の兄弟の中ゐ嫡子
だらせん爲なり　三〇 又あらゝじめ定たる所の者い之を召き召たる者い之
を義とし義としたる者い之に榮を賜へり　三一 然ば此等の事ゐ於て何をゝ言
ん若し神われらを守らば誰の我儕に敵せん乎　三二 己の子を惜ずして我儕衆
の爲ゐ之を付せる者い豈ゝきに併て萬物をも我儕に賜ざらん乎　三三 神の選
たる者を訟ん者い誰乎や義とする神ある乎　三四 罪を定る者い誰乎や死て復
よみがへり神の右に在て我儕の爲に禱告し給ふキリストある乎　三五 キリス
トの愛より我儕を絕らせん者い誰乎や患難あるゝ或い困苦ゝ迫害ゐ飢餓
の裸程ゝ危險ゝ刀劍ある乎　三六 是われら終日ゐんぢが爲に死に付され屠ら
るる者に類すべて此等の事に勝得て餘あり　三七 ろい或い死あるひい生あるひ
い天使あるひい執政あるひい有能あるひい今ある者あるひい後あらん
者　三八 或い高き或い深また他の受造者い我儕を我主イエスキリストに頼る
神れ愛より絕らするてと能ざる者あるを我い信ぜり

第九章　我キリストに屬る者あれば我ゝ言い眞にして僞なし且わが良心聖
靈ゐ感じて　二 我ゐ大なる憂ある事と心ゐ耐ざるの痛ある事とを證す　三 若
わが兄弟わが骨肉の爲ゐあらんゐ或いキリストより絕れ沉淪ゐ至らん
も亦わが願ゐり　四 彼等いイスラエルの人ゝり神れ子ゝある事また榮光また
盟約また律法を立られし事また祭儀また約束い皆われらゐ屬り　五 列祖い
是られらが先祖なり肉體に因て言ばキリストも亦彼等より出あれい萬物
れ上に在て世々讃美を得べき神ゝりアーメン　六 今いへる所い神れ言の廢

れりと謂にも非ず蓋イスラエルより出る者みとゝくイスラエルゐ非ず
七 亦アブラハムの苗裔ゐれバとて悉く其子たるゐ非ず惟イサクより出る
者ゐんぢの苗裔と稱らるべしと錄されたり　八 即ち肉に由て子たる者ゐれ
ら神の子たるに非ず惟約束に由て子たる者ゐ其苗裔とせらるゝ也　九 期
いたらバ我來らんサラに男子ある
リベカ我儕の先祖イサク一人ゐ從ひて二子を孕しとき　十 其子いまだ生れ
ず亦善惡を行ざれど神の選たまひし聖旨ゐ變るあとをおく行に由で召ゐ由
を彰さんとて　十一 長子ゐ幼子ゐ服んとリベカに言たまへり　十二 錄して我ゐヤ
コブを愛しエサウを惡めりと有ゞ如し　十三 然らバ我儕あにを言んや神に不
義ある所あるや有ゐとゐし　十四 神モーセに曰われ矜恤んと欲ふ者を矜恤わ
れ憐憫んと欲ふ者を憐憫と　十五 然バ願ふ者にも趨る者にも由ず惟めぐむ所
の神に由り　十六 聖書の中に神パロに我ゐんぢを立るゐ特に爾をもて我ゞ權
能を顯し又わが名を徧く世界ゐ傳んゞ爲ありと有し給へり　十七 然バ神ゐ憐
憫んと欲ふ者を憐憫と欲ふ者を矜恤わ
ず又剛愎にせり　十八 然バ爾われ
ゐ言ん神何ぞゐは人を責るや誰か其旨ゐ逆ふゐとを爲んと　十九 嗟人よ爾何に
人ゐれバ神ゐ言遊ふゐや造れし物い造し者に向て爾何故に我を如此つくり
しと云べけん乎　二十 陶人い同じ塊をもて一の器を貴く一の器を賤く造るの權
ゐるに非ずや　二一 もし神怒を彰し其能力を示さん爲ゐ滅亡に備れる器を永
く酎忍てとをゐし　二二 また榮光ゐ預じめ備し矜恤の器ゐ其榮の豐盛ゐるを
示さんとせバ我儕何の言てと有んや　二三 ゐれ矜恤の器即ち我儕召れし所の
者い第ユダヤ人のみゐらず亦異邦人の中よりも召れたり　二四 神ホセヤの書
に我い我民ゐらざりし者を我民と稱へ愛せざりし者を愛する者と稱ん　二五
又ゐんぢら我民ゐらずと言れたりし其處れ彼等も活神の子と稱らるべし
と言るゞ如し　二六 イザヤもイスラエルに就て呼り曰けるいイスラエルれ子
の數い海の沙の如ゐれとも救るゝ者いたゞ僅ゐらん　二七 神い義をもて其
言を斷之を成竟るべし蓋さだめ給ふ所の事い主速かに此地に行ふべけれ

ハ也　二 また前ホイザヤ言て若萬群れ主われらに裔を遺ざりしあらバ我儕
も已ホンドラの如ならん又ゴモラホ同からんと有が如し　三 然バ我儕何と
か言ん義を追求めざる異邦人い義を得たり是すなはち信仰に由とみろれ
義あり　三 然と義の律法を追求めしイスラエルい義の律法ホ追及ざりき
此い如何ある故ゾ彼等い信仰ホ由ず行に由て追求めんとせしはとホ躓石
ホ躓たをバ也　三 視よわれ躓石また礙磐をシヨンホ置ん凡て之を信ずる
者い辱しめられじと錄されたるゾ如し

第十一章　兄弟よ我心ホ願ふ所と神ホ祈る所いイスラエルれ救れんみと也　二
彼等ゾ神に熱心あるみとい我證す然とも其熱心い智識に由ホ非ず　三 彼等
い神の義を識ず己の義を立んとて神れ義ホ服わざる也　四 凡て信ず
る者の義せらをん爲にキリストい律法の終とあれり　五 モーセ律法ホ由
る義を指て之を行ふ者みをホ由て生を得べしと錄したり　六 然と信仰ホ
由る義ハ如此いへり爾心ホキリストを誘ひ下らん僞ホ誰か天ホ昇らんと

言みと勿を　七 又キリストを死し者の中より誘ひ遣らん爲に誰か陰府に陥
らんと言みと勿を　八 然を何と言るゾ道い爾に近く爾の口にあり爾の心に
ありと是ずるはち我儕ゾ宣る所の信仰の道なり　九 蓋もし爾口にて主イエ
スを認いし又あんた心にて神の彼を死より甦らしゝを信せバ救るべし　十 うれ人
い心に信じて義とせられ口に認いして救るゝあり　十一 聖書に凡て彼を信ずる者
い辱められじと云り　十二 ユダヤ人とギリシヤ人の別ホし盖すべての者の主い
惟一なれバあり凡て之を顧求る者に い恩を豐盛にし　十三 凡て主の名を顧求
る者い救るべし　十四 然い未だ信せざる者を何で顧求るみとを得んや未だ聞
ざる者を何で信するみとを得んや未だ宣る者あらずバ何で聞おとを得ん
や　十五 もし遣されずバ何で宣るみとを得んや錄して和平ある言を宣また善
事を宣る者の其足い美しき哉とある ゾ如し　十六 然と悪く福音を聽從しに非
ずイザヤ曾て主よ我儕ゾ宣る所を信せし者い誰ゾ乎と云り　十七 然きバ信仰
と聞よりいで聞とてろい神の道に由るあり　十八 われ問ん彼等い未だ聞ざり

しか聞り其聲ハ遍く世界ヲ出ろの言ハ地の極にまで及べり　十九我また問ん
イスラエルハ知ざりしか知り爲ヲ
モーセ云わを民に非ざる者をもて爾曹
を嫉姤せん又愚ある民をもて爾曹を怒らせんと　二十イザヤ惲るみとあく言
けるハ我を尋ざりし者ヲ我あへり問ざりし者に我あらわれぬ　二十一又イスラ
エルに就ていハ我終日手を擧て悖り順わざる民に向へりと云し也

第十一章

然バ我いとん神ハ其民を棄しや決て然らず何となれバ我も亦イ
スラエルの人アブラハムの裔ベニヤミンの支派ある者ニ　二神ハ其預じめ知給
ふところの民を棄ざりき爾曹ニリヤについて聖書に載たる事を知ざるか
彼イスラエルを神ヲ訴いひけるハ　三主よ彼等ハ爾の預言者を殺し爾の祭
壇を毀てり只わを遺をしに又わが命をも求んとぞる也　四然るヲ何と神ハ
答給ひし乎わを自己の爲にバアルに跪づかざる者七千人を存せりと　五是
の如く今もまた恩の選に由て遺れる者あり　六もし恩に由バ功にハ由ざる
なり否ざれバ恩ハ恩たらず若し功ヲ由バ恩に非ず否ざるバ功ハ功たらさ
る也　七然バ何を言んイスラエルハ其求る所を得ず選をし者ハ之を得て遺
れし者ハ頑せられたり　八神ハ今日に至るまで彼等ヲ頑き心見ざる目聞ざ
る耳を予ふと錄さをしが如し　九亦ダビデ曰けるハ彼等が筵席かはりて
機檻とわな、網羅とわなとなり碇物とつまづきものとなり其報とをれ
ず其背を常に屈しめよ　十然バ我いハん彼等が躓ハ倒に及しや然らず反て
彼等が錯失により救ハ異邦人に及べり是イスラエルを激させんが爲あり
十一若かれらの錯失世の富とあり其衰異邦人の富とあらんにハ況て彼等の
盛みるに於てをや　十二我ハんちら異邦人ヲ言ん我ハ異邦人の使徒なるが故
に我職を敬重せり　十三是わが骨肉の者を如何してか激し其中より數人を救
んが爲なり　十四若かれらの棄らるゝことハ世の復和とあらバ其收納さるゝハ
若かれらの棄らるゝことハ世の復和とあらバ其收納さるゝハ
死たる者の中より生るに同からず　十五もし薦新のパンさよからバ凡のパン
も亦潔ろるべし　十六もし根きよからバ枝も亦潔ろるべし　十七もし橄欖の枝を折れたるヲ
爾ハ野の橄欖なるろをを其中に接を共に其根により共に其汁漿を受るなら

ば 十八 原の枝に向ひて誇る勿れ假令はこれ
り 十九 然ば爾枝の折れたるは我が接れん爲なりと言ん 二十 然と彼等の折れた
るは不信仰により爾が立るは信仰に因なれば誇ること勿れ 戒懼よ 二一 蓋
神もし原樹の枝をさへ憐まずば恐くは爾をも憐まじ 二二 然ば神の慈と嚴な
るとを視よ其嚴なること は顛れぬ爾慈に居ば其慈は爾に在ん然さ
ざれば亦なんぢも砍離さるべし 二三 もし不信仰を居ずば彼等も亦接きん神は
能ふなりを接得をた也 二四 爾もし本うまれつきたる野の橄欖より砍き其生質
に反て嘉橄欖に接をたらんには況て原樹の枝は己が其橄欖に接をざらん
乎 二五 兄弟よ我爾曹が自己を智とする事無らん爲に此奥義を知ざるを欲ま
す即ち幾分のイスラエルの頑梗は異邦人の數盈るに至らん時まで也 二六 然
てイスラエルの人悉く救るを得ん錄して救者はシヨンより出てヤコブの
不虔を取除らん 二七 且ろの罪を赦す時に我あれらに立ん所の盟は此也と有
が如し 二八 福音は爾曹の益の爲に彼等は憎まれ選擇は猶ては先祖の
故によりて彼等は愛せらるゝ也 二九 ろは
昔ふんぬらは神に背しが今彼等が背るに因て亦矜恤を蒙るに
今のをらの背るは爾曹の矜恤を蒙るに因て亦矜恤を受んため也 三一 ろを神
は衆人を憐まんが爲に咸ある を不服の中に入のあめり 三二 あゝ神の智と識
の富は深ろある其法度は測り難く其踪跡は索ね難し 三三 孰か主の心を知し孰
の彼と共に議るあるを爲しや 三四 孰か先あるに施て其報を受んや ろは萬
物は彼より出ろをに倚ろをに歸をたるあり願くは世々榮神にあをアーメン

第十一章

然ば兄弟よ我神の諸の慈悲をもて爾曹に勸ろの身を神の意に適
ふ聖き活る祭物とゐして神に獻よ是當然の祭あり 二 又あの世に效ふ勿を
爾曹神の全のつ善にして悦ぶべき旨を知んが爲に心を化て新にせよ 三 我
うくる所の恩に藉て爾曹各人に告んは心を高り思を過をゐと勿を神の各人
に賜りたる信仰の量に從ひて公平に思念べし 四 即ち我僧一體に多の股あ
をとも皆ろの用を同うせざるが如く 五 人キリストに於て一體たをば亦

たがひに其肢たる也　六然ば賜る所の恩に隨て各々賜を異にせり或ひ預言あらば信仰の量に循ひて預言をなし　七或ひ役事あらば其役事をなし或ひ敎誨をなす者ひ其敎誨をなし　八勸慰をなす者ひ其勸慰をなし施みし理治をなす者ひ懈らず治め矜恤をなす者ひ歡びて憐むべし　九愛ひ僞るあと勿を惡ひ惡みて善ひ親み　十兄弟の愛をもて互に愛し禮義を以て相讓り　十一勤て惰らず心を熱して主に事へ　十二望て喜び患難に耐へ祈禱を恒にし　十三聖徒の匱乏を賑恤し遠人を懇懃おせよ　十四爾曹を害ふ者を祝し之を祝して詛ふべからず　十五喜ぶ者と共ひ喜び哀む者と共ひ哀むべし　十六相互ひ意を同うし尊大志をなさず反て卑微ひ附よ又自己を智とする勿れ　十七惡をもて惡に報る勿れ衆人の善とする所を心に記て之をあし　十八行得べき所ひ力を竭して人々と睦親むべし　十九わが愛する者よ其仇を報るあり遲きて主の怒を待ろひ錄して主の曰給ひけるひ仇を復すひ我ひ在り　二十必ず之を報んとあをべ也是故ひ爾の仇もし飢ひ之ひ食ひせ若し渴ひ之ひ飲せよ爾如此するひ熱炭を彼の首ひ積るひなり　二十一ゑんな惡ひ勝るゝ勿れ善をもて惡ひ勝べし

第十三章　上ひ在て權を掌る者ひ凡て人々服ふべし蓋神より出ざる權なく凡ろ有ところの權ひ神の立たまふ所あれば也　二是故ひ權ひ悖ふ者ひ神の定ひ逆くなり逆者ひ自ら其罪の定を受べし　三有司ひ善行の畏ひ非ず惡行の畏あり爾權を畏さるてとを欲ふ乎たゞ善を行へ然ば彼より褒を獲ん　四彼ひ爾ひ益せん爲の神の僕なり若し惡を行ば畏れよ彼ひ徒らひ刃を操ず神の僕たれば惡を行ふ者ひ怒をもて報ゆる者あり　五故ひ之ひ服へ惟怒ひ縲てのみ服ひず眞心に緣て服ふべし　六是故ひ爾曹貢を納よ彼等ひ神の用人ひして常ひ此職を司とれり　七なんぢら受べき所の人ひ之ひ子よ貢を受べき者ひ之ひ貢し稅を受べき者ひ之ひ稅し畏るべき者ひ畏れ敬ふべき者ひ之を敬べ　八なんぢら互ひ愛を負のはひ凡ての事を人ひ負ひと勿れ蓋人を愛する者ひ律法を完全すをべ也　九ゑん姦淫をする勿れ殺す勿れ竊む

勿き妄の證を立る勿れ貪る勿れと曰る此餘なほ誡あるとも己の如く爾の
隣を愛すべしと曰る言の中ゐ包たり十 愛い隣を害いず是故ゐ愛い律法を
完全す十一 此の如く行べし我儕い時を知り今い寐より寤べきの時ゐり蓋信
仰の初より更ゐ我儕の救い近し十二 夜すでゐ夾て日近けり故ゐ我儕暗昧の
行を去て光明の甲を衣べし十三 行を端正して晝ゐゆむ如くすべし饕餮酔酒
また奸淫好色また爭闘嫉妬ゐ歩むゐと勿れ 惟なんぢら主イエスキリス
トを衣よ肉體の欲を行いんが爲ゐ其備をなすゐと勿れ

第十四章 信仰の弱き者を納よ然と其意ふ所を詰る勿れ二 或人い凡の物を
食ふべしと信じ或人い弱して只野菜を食へり三 食ふ者い食ざる者を藐蔑
るゐと勿れ食ざる者い食ふ者を罪ありとそる勿れ神ゐれを納れべき也四 ゐ
んぢ何人ぞ他人の僕を罪するや彼の或い立あるひい倒るゐとい其主
に由り彼また必ず立られん神い能てをを立得をべき也五 或人い此日を彼日
ゐ過れりとし或人い諸日もみな同とす各人みづから定て其心を堅すべし

六 日を守る者も主の爲ゐ守り日を守らざる者も主の爲ゐ食へり蓋神ゐ謝する事をせり 我儕のうち己の爲ゐ生ゐの
ず此また神ゐ謝する事をせり 我儕のうち己の爲ゐ生ゐの
者あし 蓋われら生るも主の爲ゐいき死るも主の爲ゐいき死
ゐるひい死るも我儕いみゐ主のもの也 七 夫キリストの死て復生しい即ち
生者と死者の主とあらん爲ゐり 九 爾ゐ
を貶視るや我儕い皆キリストの臺前ゐ立べき者ゐり十一 錄して主の曰たま
へるい我い活る神ゐすべての膝い我ゲ前ゐ屈り凡れ舌い我を讃美すべしと
有ゲ如し 十二 是故ゐ我儕おの〳〵己の事を神ゐ訟ふべし 十三 然べ我儕たがひ
ゐ罪を擬ることを勿れ寧ろ兄弟の前ゐ絆跌あるひい妨礙を置ざらんことと
を定むべし 十四 我い主イエスゐ由て凡の物潔からざるあきを知かつ之を信
ず然と人もし不潔と意いゐ其人ゐ於ていい即ち潔からざる也 十五 爾もし食物
の爲ゐ兄弟を憂しめべ其行ふとあろ愛の道ゐ合ず爾食物ゐ因てキリス

トれ死て代り給へる彼を潰すてと勿れ　十六爾曹れ善を以て人ゐ誘るようてと
を爲なかれ　七ゆゑ神の國ゐ飲食ゐ非ず惟義と和と聖靈ゐ由る歡樂ゐあり
十八此の如してキリストゐ事る者ゐ神の心ゐ適また人に善とせらるゝ也　また
是故に我儕人と和睦せんてとゝ相互に德を建んあとゝを追求べし　二十食物
に因て神れ成る所を毀てと勿れ凡の物みな潔し然とも之を食ふて人を礙
かする者ゐ惡とならん　二一肉を食ふ酒をのむ何事に由ず爾の兄弟を倒し
或ゐ礙かせ或ゐ憐弱そるゐ宜らざる也　二二なんぢ信あるゐ已れを神の前
に守り自ら許とする所を內責する事あき者ゐ福あり　二三疑者もし食はゞ罪
ふ定めらる是信仰ゐ由て食ゐざれゝ也すべて信仰に由てせざる者ゐ罪あ
り

第十五章　然ば我儕強者ゐ強あらざる者の懦弱を負て已の心ゐ悅ばざるを
も爲べきみとも也　二我儕おの〳〵隣の德を建んため善をもて之を悅ばすべ
し　三キリストすら尙おのれを悅ばす事をせざりき蓋なんぢを謗る者の毀
誇ゐ我ゐ及べりと錄さをし如し　四從前より錄さをたる所ゐ皆われらゐ訓
て聖書の忍耐と安慰との言ゐ藉て望を得させん爲に錄せる也　五願ば忍耐と安
慰を予ふる神の爾曹ゐイエスキリストを效たがひふ心を同うする事を予
て　六爾曹をして心を一にし口を一ふし神をあいち我儕の主イエスキリスト
の父を讚美し崇しめ給れんあとを願へり　七是故ゐキリスト神を崇ん爲ゐ
我儕を納るゝ如く爾曹も互ゐ納べし　八我いわん神の眞理の爲ゐイエスキ
リストれ割禮の役となり先祖ゐ約束し給ひしあとを堅固せり　九また異邦
人も其矜恤に由て神を崇む錄して是故ふ我異邦人の中に在て爾を崇また
爾れ名を讚美すべしと有ゝ如し　十また異邦人よ主れ民と同ゐ喜ふてとを
爲よと云り　十一萬邦よ主を讚ふべしと云り　十二又イザヤ云らくエツサイの根めさし異邦人を治めんと爲もれ興らんとす異邦人
みな之ゐ頼んと　十三望を予ふる神れ爾曹をして聖靈の能ゐ由ろの望を大ゐ
せんゝ爲ゐ爾曹の信仰より起る諸の喜樂と平康を充しめ給わんてとを願

へり 十四 わが兄弟よ我あんぢらが仁慈ある滿そべての智ある充て互に勸得ることを信ず 十五 然ども兄弟よ我あは爾曹ある憶起させんがため憚らずして略あんぢらある書おくれり是神の我ある賜ふ所れ恩に因あり 十六 即ち異邦人の爲あイエスキリストの僕となりて神の福音の祭をあし獻る所の異邦人を聖靈ある由て潔よからしめ神の意旨ある適せん爲あり 十七 是故あ我神の事ある就てわイエスキリストある由て誇る所あり 十八 何とあばキリスト我を助て異邦人を順從しめん爲あ休徴と奇跡の能と神の靈の能を顯し言と行とを以てエルサレムより徧くイルリコに至るまで其福音を傳させ給ひしてとれ他れ一の言をも我敢て曰ざるあり 二十 且われ愼みて他人れ置し土基ある建じとイエスの名の未だ稱られざる所に福音を宣傳たり 二一 未だ彼ある就て傳を得ざる者れ見べく未だ聞あとを得ざる者れ悟るべしと錄されたるが如し 二二 是故あ屢ば阻られて我あんぢらある詣てとを得ざりき 二三 今ての地ある傳べき處あし我年來なんぢらある往んてとを願る故あ 二四 ヒスパニヤある赴らん時あ爾曹あ訪るべし蓋經過ときあ爾曹ある意ある滿足てとを得て又あんぢらあ送られんあとを望べ也 二五 然と今われ聖徒を助ん爲あエルサレムある往んとそ 二六 マケドニヤとアカヤの人々エルサレムの貧き聖徒の爲あ供給をせることを喜悅とせり 二七 彼等悅びて之をあるとい其債とて乃有るが故あり蓋異邦人もし靈あ屬ものを享たらんあ肉身あ屬ものを以てまた彼等あ事よべき也 二八 是故あ我この事をいり此果を付しまん後あんぢらある由てヒスパニヤある往ん 二九 われ爾曹ある往時いキリストの福音の滿たる恩を以て爾曹ある至らんてとを知り 三十 兄弟よ我儕の主イエスキリストあより聖靈の愛あ緣て爾曹あ勸む願くい我と共あ力を竭して我ためあ神あ祈るてとを爲よ 三一 蓋わが ユダヤある不信者より拯かれ且エルサレムあ赴く供事を聖徒の心あ適せ 三二 また神の旨あ循ひ歡びて爾曹ある詣り偕あ安憩を得んがため也 三三 我ケンクレアあある姉妹フイベを爾曹あ平安の神あんぢら衆人と偕あ在さんてとを願ふアーメン

第十六章

薦む　11 みんぢら聖徒の行べき如く主ゐ縁て彼を納ろの諸る所い之を助よ彼
い衆おほくの人を助せた我をも助く　3 請プリスキラとアクラゐ安を問か
れらいイエスキリストゐ屬て我と共ゐ勤る者あり　4 又わが命の爲ゐ己の
頸を鎯の下に置り惟われ而已あらず異邦人の凡の教會もまた彼等ゐ感謝
せり　5 又ろの家ゐある教會ゐも安を問また我が愛そる所のエパイチトゐ
安を問かをいアシアお於てキリストの初ゐ結べる實あり　6 我儕の爲に多
の苦勞をせしマリアお安を問せた　7 我と同に囚人となりし我が親戚ある
アンデロニコとジユニヤに安を問かをら使徒等の中ゐ名聲ある者あり我
に先ちてキリストに居し者あり　8 キリストに安を問と共ゐ勤るサルパノ
トに安を問キリストお屬て我儕と共ゐ勤るサルパノ又わが愛するスタ
クゐ安を問キリストゐ於て鍛錬あるアペレゐ安を問アリストブロの家
の者ゐ安を問わが親戚あるヘロデオナゐ安を問ナルキソの家ある主ゐ
をる者等ゐ安を問　11 テルパイナとテルポサゐ安をとへ彼等い主ゐ於て苦

勞せし女あり又愛せらるるペルシーゐ安を問かれい主に居て多く苦勞せ
し女あり　13 主に選れしルポと其母とに安を問かれが母い即ち我母たり　14
アスキンリトとピリゴンとヘレマとパトロバとヘレメまた彼等と偕にある兄弟ゐ
安を問　15 ピロロゴとユリヤとネリオと其姉妹またオルンパ及び彼等と偕ゐ
る諸の聖徒ゐ安を問　16 聖書きよき接吻をもて互に安を問キリストの諸の
教會みんぢらゐ安を問り　17 兄弟よ我みんぢらゐ勸む凡ろ聖書が學る所の
教に反きて爭ひ分たせ又躓かする者を視とめて之を避よ　18 此の如き者い
我儕の主イエスキリストゐ服ず己の腹ゐつかふる者あり又言を巧わし媚
諂ひて質朴ある者の心を欺くあり　19 然と聖書は順從るてと衆人ゐ傳揚た
れば我みんぢらの爲ゐ喜べり我みんぢらが善ゐ智く惡ゐ愚あらんてとを
願ふ　20 平安の神みんぢらの足れ下ゐサタンを速かに碎くべし我儕の
主イエスキリストの恩みんぢらと偕ゐ在んてとを願ふ　21 我と共ゐ勤るテ
モテと我が親戚ルキヤソシパテロより聖書に安を問り　22 此書を筆る

クリテオ我キリストの中にて同労者なるプリスカとアクワルト同居の教會とに安を問り我と全會の宿主ガヨス同胞なるエラストまた兄弟クワルト同居の教會も安を問り
イエスキリストの恩みんぢらと偕に在んことを願ふアーメン
世代を經て隱藏たりしかと萬國の民をして信じ服いしめんが爲いま顯はれ且預言者の書を因て凡の教訓を照し爲に我つたふる福音と我がのべつたふるイエスキリストの教訓とに循ひて我儕を堅固することを得る眞神獨一智慧神に榮光窮なからんことをイエスキリストを由て在んことを願ふアーメン

新約全書羅馬書終

新約全書使徒パウロコリント人に贈る前書

神の旨により召てイエスキリストの使徒となし給へるパウロ及び兄弟ソステネ
コリントにある神の教會即ちキリストイエスに在て潔らを召て聖徒となされる者われよび彼等の處にも我儕の處にも諸處にて我儕の主イエスキリストの名を龥者にまで贈る
恩寵と平康を受よ○
我神イエスキリストより恩寵について我恒に爾曹の爲に我神に感謝をなんぢら凡の教訓と凡の知識に富みとキリストに在て爾曹が賜りし神の恩寵について我恒に爾曹の爲に我神に感謝をなんぢら凡の教訓と凡の知識に富みとキリストの證なんぢらの中に堅せらるしに因て斯て爾曹が凡の賜を得たれば也
是キリストの顯れんとき我儕の主イエスキリストの顯れんとき我儕の主イエスキリストの日に於て爾曹を堅し我儕の主イエスキリストの日に於て爾曹を堅し我儕の主イエスキリストの日に於て爾曹を堅し

の名に託て我ゐんぐらに勸む爾曹みな言ふところを同じ且分爭なく心を同じ
意を同じて聯合べし一一蓋わが兄弟よクロエの家人ゐんぐらの事を我に告て
爾曹の中に爭ひありと言たるが也一二爾曹おのく我ハウロ我アポロ
我ケパ我キリストに屬ぞと言ゐり一三キリストは分る
ゐ者ゐらんや手パウロの爾曹の爲に十字架を釘らをし手を以て爾曹ハプテ
スマを施しとゐなし一四一五此の我名に托て
ハウロの名に入しやわれ神に謝す我ハクリスポとガヨ
の外なんぢらの中一人にもバプテスマを施さゞりき一六我また斯那
巴の家に
施せり此外に我人にバプテスマを施しまゐと有や否
ゐ知ず一七キリストの我を遣しまひバプテスマを施させん爲ゐ非ず福音を
宣傳めん爲なり又わ色に言の智慧を用しめ給ゐず是キリストの十字架
の效ゐ沈淪者にゐ愚なるもの我儕
救拔經者ゐ神の能たるなり一八即ち錄して我智者の智を滅し慧者の慧を

廢ゐせんも有夕如し一九智者安にある學者安に在ゐの世の辯者ゐらくにあ
る神ゐ此世の智慧をして愚ゐらしむるに非ずや二〇世人ゐ己の智慧を恃て
神を知ず是神の智慧に適べるゐり是故に神ゐ傳道の愚ゐるを以て信ずる
者ゐ救を善とせり二一ユダヤ人ゐ休徵を乞キリシヤ人ゐ智慧を覓む二二我儕
ゐ十字架に釘らをしキリストを宣傳ふ即ち此ゐユダヤ人にゐ礙く者キリ
シヤ人にゐ愚ゐる者なり二三然と召れたる者にはユダヤ人にもキリシヤ人
にも神ゐ大ゐ能また神の智慧なり二四うれ神の愚ゐ人よりも智慧ある
ゐ多夕如し神ゐ弱ゐ人よりも强し二五兄弟よ召を蒙る爾曹を視よ肉ゐ循る智慧ある
ゐ多らざる也大ゐ權ゐ貴き者多らざる也二六神ゐ智者を愧しめんとて世の愚ゐる者を選び强者を愧しめんとて世の弱者を選ふ二七又神
ゐ有者ゐ滅さんとて世の賤者棄られる者を選び給ゐり二八凡の人神の前に誇ゐらん爲なり二九爾曹ゐ神に由てキリスト
ゐ全ゐに在イエスの神に立らをて爾曹の智慧また義また聖また贖た

まべり 三 錄して誇者い主に因て誇るべしと在が如し
兄弟よ我爰に爾曹に到りし時も言と智慧の美たるを以爾ん
神の證を傳ざりき 二 蓋われイエスキリストと彼の十字架に釘らきし事の
外に爾曹の中に在て何をも知まじと意を定めたれば也 三 我爾ん
に居し時い弱かつ懼また多く戰慄り 四 我言し所も人の智慧
の娩言を用ず唯靈と能の證を用たり 五 蓋なんぢらの信仰をして人の
智慧に由ず神の能に由しめんと欲ばなり 六 然とも我儕全き者の中に智慧
を語る 是み の世の智慧に非ず亦み の世の有司廢らんとする者の智慧に非
ず 七 我儕の語る所い秘密たりし神の奧義の智慧なり 此い創世の先より神
の預じめ我儕をして榮を得しめんが爲に定め給ひしもの也 八 此世の有司
爾ん之を識ものは一人もあらじ若し識ば榮の主を十字架に釘さゝもあらん 九 錄
じ如神の已を愛する者の爲ゝ備へ給ひしものい目いまだ見ず耳いまだ聞
ず人の心にもまだ念ざる者ありと有が如し 十 然と神い其靈をもて之を我儕

に顯せり 靈い萬事を究知るなり 十一 それ人の情い其
中にある靈の外に誰の己を知んや此の如く神の情ね神の靈の外に知ものも
あらじ 十二 我儕い世の靈を受しわ此世の靈に非ず神より出る靈を受しなり
所ゆるものを知べき爲なり 十三 且われら此事を語るに人よも智慧の激る所の言
を用ず聖靈の激る所の言を用る故ゝ靈の事を以て靈の情を識るなり
十四 性來のまゝなる人い神の靈に情を受ず是かれ爾ん愚なる者と見れば
なり 況又あれを知ること能ず蓋靈に情ね靈ゝ由て辨ふべき者なるが故なり
十五 然と靈ゝ屬るものい萬事を辨べ知ども己いかして已い人ゝ辨べ知るきてとな
し 十六 誰か主の心を知て主を敎る者有んや 然と我儕むキリストの心を有り

兄弟よ我さき爾曹ゝ語るとき靈に屬る者ゝ語るが如くせず能
やず惟肉に屬る者の如く亦キリストに屬る赤子に語る如くせり 二 われ爾
曹に乳を哺しめて堅き物を手ざりき爾曹食ふて能ざれば今も尙
あたわず 三 蓋なんぢら尙肉に屬る者あるが也 爾ん ぢらの中に妬媢と紛爭

あり此なんぢら肉に屬て人の如く行ふに非ずや　四我ハウロに屬われアポロに屬といふ者のあるは此なんぢら肉に屬るあらず乎　五パウロは誰アポロは誰おをぢい唯おの〳〵に賜れる恩に隨ひ爾曹をして信ぜしめん爲て勤る者あるの外あし　六我は種アポロは灌や長る者は惟神あり　七ゑれ種者も灌やも其者も異ることなし各々功力に循ひて其賞を得べし　八我儕は神と同に働く者なり爾曹は神の田神の宝あり　神の我に賜し恩に循ひて我賢き工師の如く既おの基礎を置たり今はかの人ろの上お建いかに基上お建べき手おの〳〵愼て爲べし　十ろは置給ひし基礎の外お誰も基礎を置るて能されゑすもしゑ人此の基礎の上に金銀寶石　十一イエスキリストあり　十二若木草禾稿を以て建あれば各人の工れ明かあらん夫日おを顯る可きが　十三あり此れ火お以て顯をん其火おの〳〵の所の工たもたゞ賞を得ざるべし　十四若ろの工やかれあゞ損を受されと已れ火より脱出る如く終おれん救れん　十五爾曹れ神の殿にして神の靈おんぢうの中お在をことを知さる乎　十六もし人神の殿を毀ば神かれを毀たん蓋神の殿れ聖あれや此れ爾曹ぢ　十七誰も自ち欺く勿れ若おんぢうの中に此世お於て智慧ありと意ふ者あらゞ愚に爲て智者とあらん爲に愚ふあるべし　十八蓋此の世の智慧れ神の前に愚あれゞあり錄して云く神れ智者を其詭計お因て拘ふ　十九又た云く主れ智者の思念を虛きものと知たまふ　二十然や誰も人に誇る勿れ萬物れ爾曹の物あり　二一或れパウロ或れアポロ或れケパ或れ世界あるひれ生あるひれ死あるひれ今のもの或れ後のもの是みな爾曹の爲あり　二二爾曹れキリストれ神の爲あり

第四章　人宜く我儕をキリストの役者の如く神の奥義を司とる家宰あ如く意ふべし　二次おの世に在て家宰に求る所れ其忠信あらんことを也　三われ爾曹お評られ或れ人に評らるゝあとを尤も細事とあす我も自己を評ず　四我おのづから省るお過あるを覺ず然とも此に因て義とせられず我を評る者

我を主あり給然を主の來ちんときまで時
主の幽暗にある隱たる情を照し心の計
を顯すべし　兄弟よ我あんちらの爲に此等の事を我とアポロの比へたり此
の我儕の事にはり爾曹をして錄されし所に過て人を思議やからざる事を
學ばせ彼の從わんとて之に逆ひ各誇
て人の異あらしむる者の爲に誰か何の
何か受領ざる如く誇やル　爾曹既にでお飽
ちましして王たり我實に爾曹が王たらんことを願ふ盖われも爾曹と偕に王た
ちんが爲ありわれ意ふに神い我儕使徒を死に定られし者の如く末の者
の如くなし蓋われら宇宙の
せられたればなり我儕の爲に愚あり爾曹は基督に在て聰き
に在ま爾曹は榮あり我儕は弱く爾曹は貴く我儕は賤し今
の時迄至るまで我儕は饑ゑ渇ゑ裸はだかにされ拷ゑられ定れる住處あく

ずて手づから工をなしたりなるゆえ
きたり我儕今に至るまで世
我儕を忍じめん爲に之を書に非ず爾曹を訓ゆるなり
おるとなし蓋わきリストイエスに在て福音を以て爾曹を生
故に我あんちらが我に傚ふことを勸ふ
患なるテモテを我なんぢらに遣せり彼は我キリストに
ち遵ぐ敎會ごとに敎る規範を爾曹に記憶さす
ば至ざるとして自ら誇る者あり然ど
非ず其能を仰ぐ
なり　爾曹なにを願ふや笞を以て我
愛恩柔和の心を以て至るよきを願ふ手

第五章　爾曹の中に姦淫ありと聞ゆ其姦淫の異邦人の中にも非さるは

その事にて人その父の妻を有と聞ゆ
二　あんぢら誇るあ斯る事を行ひし者
の爾曹の中より擧けられんためを願て痛哭さる乎
われ身い爾曹の中お
居すと雖も靈い居り我をるが如く既お之を行ひし者の罪を定たり
三　即ち
我儕の主イエスキリストの名お頼て爾曹の集らんとき我靈も偕に在て我
儕の主イエスキリストれ能に託のぐの如き者をサタンに交し其肉躰を滅
し其靈をして主イエスの日に救を得しめんと定たるなり
四　爾曹の誇るれ
宜ろしからず少許の麪酵うの全團をみな發すを知ざる乎
五　爾曹い麪酵あ
るが如き者あれバ舊き麪酵を除きて新しき團塊とあるべし夫われらの逾
越すなわちキリストい既に宰れ給へり
七　然バ我儕舊き麪酵を用ずまた惡
毒と暴很の麪酵を用ず眞實と至誠なる無酵麪を用ゐて節を守るべし
八　○
われ爾曹に姦淫を行ふ者と偕お交る勿をと既お書遣れり
九　然と此世の淫
婦又い貪婪ましたい偶像を拜ましたい詐詐
また沉湎ましたい勒索をせが之と共に交るてとをあく斯る者と共に食ざる
てとだに務ざらしめんとて迪
十　外にある者を爾曹いよい何ぞ我に與ちん爾
曹が鞫く所い内の者に非ずや
十一　外にある者い神てきを鞫く斯る惡伎い之
を爾曹の中より黜くべし
十二　爾曹のうち互に事あるとき聖徒の前に訟るてとをせず敢て義からざ
る者の前に訟るとをする者ある乎
十三　あんぢら聖徒の世を鞫んとするを知
ざらんや世もし爾曹に鞫るゝならバ爾曹至小き事を鞫に足ざる者ならん
十四　爾曹われらが天の使を鞫んとするを知ざらんや況や此世の事をや
十五　是故ふ爾曹もし此世の事を鞫んとせバ敢會の中にて卑微者を審判の
座に坐しめよ
十六　我あんぢらを愧しめんとて如此いへり爾曹の中に其兄弟
の間の事を鞫き得る智者一人もあからん乎
十七　然と兄弟と兄弟相訟へ且そ
の事を不信者の前お於て爲り
十八　爾曹たゞ相訟るにより爾曹のうち誠お

過おか爾曹何ぞ此よりも寧ろ不義を受さるや何ぞ此よりも寧ろ奪を受
る乎へ噫なんぢら不義をおこなひ奪をおこなひ而も兄弟にも亦已甚
義ならざる者の神の國を嗣ことを得さるを知ざるか爾曹をつがら欺勿れ
凡て淫を行ひ又は偶像を拜または姦淫をおこなひ又は男娼とおか又は男色を
行ひ又は盜竊または貪婪または沉湎または辱罵者またはし
神の國を嗣ことを得さる也爾曹のうち前おは此の如き者ありしかども
主おエスの名おによりかつ我儕の神の靈おによりて洗滌また潔り又義とおせ
得たり○十二凡の物われに可らさるおし然と凡て益あるおに非す凡の物われ
には可らさるおし然と我ゲの一をも我ゲ主とおさす十三食い腹のため腹い食
の爲なり然と神い此をも彼をも滅すべし身い淫を行ふためおに非す主の爲おり
主いまた身の爲あり神すでおに主を甦らせ給おり又ゲの能力を以て我儕を
も甦らすべし十五爾曹の身いキリストの肢なるを知さるか我キリストの肢
を娼妓の肢とおんじて可らんや可らさる也十六娼妓に合ものい彼と一の體

せおるを知さるか蓋二人のもの一躰とあるべしと云給ひたれば也十七主おに
合ものい一靈とおるおり十八なんぢら淫を避よ人の凡て行ふ罪い身の外に
あり然と淫を行ふ者い己ゲ身を犯すおり十九爾曹の身いゲ爾曹より受たる
聖靈の殿おおる聖靈の殿おして爾曹い爾曹の屬おに非さるおとを知さる乎
二十うい爾曹い價をもて買れたる者おり是故おに神のものおる爾曹身
おおよびおのが靈魂おおよびおのが體おおに於ても神の榮を顯すべし

第七章　一なんぢら我おに書遣し事ふついていい男の女おに近さるを善とせ然と
二も淫行を免るゝ爲おに人おのく其妻をもち女も各ゝその夫を有べし夫い
三其分を妻におあすべし妻いまた夫おに然すべし三妻い自ら其身を主とるおも
を得す夫これを主とる此の如く夫も自ら其身を主とるおとを得す妻おに
四主とる　相共に拒なかれ然と互おに意を合せて暫く祈禱の爲おに別るゝおも
よし後また此おに合べし是サタン爾曹の惰の禁さるおに乘じて爾曹を誘ざ
五ん爲あり然と我い是おを言い命令るおに非す許あり我い衆人の我のと

く偏なおとを願ふ然と各々神より己の賜を受たり此の如く彼れ彼の如し我ひおた婚姻せざる者および嫠婦ふ云ん若わが如くして居ば彼等ふ善あり　九若みづから制るてと能ずば婚姻するも可ろし婚姻するも胸の燃るよりふ愈れさ也　十われ婚姻せし者ふ命ず妻い夫ふ別るふ勿れ如此離るが我ふ非ず即ち主あり　十一若わかるゝ事わらば嫁ず居ゐ或い夫と和ぐてせをすべし夫もまた妻を去べからず　十二ろの余の人ふ我ふれをいふ主ふ非ず若し兄弟不信ある妻を有るとき妻ともふ居んてとを願かゝ必ず去なかれ　十三また婦不信ある夫を有るとき夫ともふ居んみとを願いゝ之を去ふられ　十四ろい不信ある夫い妻ふ由て潔あり不信ある妻い夫ふ由て潔あり然すば爾曹の子女れ潔らず然と今ろ潔き者あり　十五不信者みづから離去ば其離るよふ任せよ此の如き事ふらば兄弟あるひれ姉妹つあるの所ふ置神の我儕を召給へるは平和ふ居しめん爲あり　十六妻よ爾ぢが夫を救ふてとを知ん夫よ爾いかで妻を救ふてとを得や否を知ん夫よ爾いかで妻を救ふてとを得や

善ふを知れ　十七然と神の各人ふ召とおろふ所ぜた主の各人ふ賜ひ此の如く行ふべし我すべての教會ふ定たるも此の如し　十八割禮ありて召るゝ者ゐ割禮ふ復る勿れ割禮なくして召れたる者ゐ割禮ふ受る勿れ　十九割禮ふ受ざるも何の得ふもなく割禮ふ受るも何の得ふもなく惟神の誡ふ守るおおり　二十各人ろの召れし時ふ在し所の分ふ止るべし　二一なんぢ奴隸ふて召れるか思煩ふ勿れ然と若し釋さるゝふおとを得ば寧ろ之を要ふし　二二召れて主ふをる奴隸ゐ主ふ自主の者ゐキリストの奴隸ふり　二三爾曹ゐ價をもて買たる者なり人の奴隸となる勿れ　二四兄弟よ各々召とき所ふ在し時ふ在し所の分ふ止かて神と偕に居ろべし　二五處女の事ふ付いてゐ我いまだ主の命を受ず然と我主の矜恤を蒙りて忠義ある者と爲たれば我ゐ意見を述べし　二六今の災ふ因て我婚姻せざるを善ふ思ふ此の如くなるい人ふ善ふ　二七なんぢ妻ふ繫るゝ者なるか然らば釋ふを求る勿れ妻なきか然らば妻を求る勿れ　二八雖も娶るとも

も罪を犯すに非ず然と此の如き者が
ち の身難ㇾ免ㇾ遭ん我爾曹をして煩わしむるㇾ忍ず 二九 兄弟よ我ㇾ言ん今
より後の時い迫れり蓋妻を有る者い有ざるが如く 三〇 哭る者い哭ざるが如く
く喜ぶ者い喜ざるが如く買ものい有ざるが如く 三一 此の世を用る者い用
ざるが如くそべき爲なり夫此の世ㇾ形狀い過逝あり 三二 我ㇾ願んならが思煩
いざらんㇾとを願ふ婚姻せざる者い如何して主の事を思
煩ひ 三三 婚姻せし者い如何して妻を悦ばせんと世の事を思煩ふあり 三四 妻と
ㇾれる者と處女たる者との別あり嫁せざる者い身も靈も潔からんため主
の事を思煩ひ嫁せし者い如何に夫を悦ばせんと世の事を思煩ふあり 三五 我
ㇾれを言い爾曹を益せん爲なり爾曹に絆を置んとするㇾ非ず惟爾曹をし
て理に合せ紛擾なく慇懃ㇾ主ㇾ事しめんとて也 三六 人もし其處女ㇾ對して
己ㇾ行ふㇾと理ㇾ合ずと意ふとき盛女期過かつ已ㇾとを得ざる事あらば
其意に任すべし此い罪を犯そに非ず彼等ㇾ婚姻せさすべし 三七 然と人もし

其心を剛毅し已を得ざることもㇾく又ㇾの夕隨意ㇾ爲ことを得てろの處
女を留置んと心の中に定ㇾ然するい善ことあり 三八 此の如なれば嫁せさ
する者の行い善さきと嫁せざる者の行い更ㇾ善 三九 夫生る間い妻法ㇾ
繋るふあり然と夫もし死ば隨意に嫁すること爲ㇾ止りㇾを主の
適べし 四〇 然と我ㇾもふㇾ婦ろのまゝ止りㇾを幸福ㇾ感じたりと意ふ

第八章

偶像ㇾ獻し物ㇾ就ていい我儕ㇾ皆ㇾ知識ㇾ有ㇾとをしる 二 知識い人を驕
しむ然と愛い德を建るㇾ能ㇾ 三 若ㇾづから能ものを知と意ふ者い未だ其
知べきほどをも知ざる者あり 四 人もし神を愛せば惡神ㇾ知れたる也 偶
像ㇾ獻し物を食するㇾ就ていい我儕偶像の世ㇾ無ものㇾあるを知また獨の
神の外ㇾ神ㇾきを知 五 神と稱るもの或い天ㇾ在あるひい地に在て多の神
おはくの主あるが如しと雖も 六 我儕ㇾ於ていい惟一の神すなわち父あるの
み萬物これより生われら之ㇾ歸す又ひとりの主即ちイエスキリストㇾあり

萬物これを由りも然どこゐ斯る事を知ず今に至りて尚心
ゐ偶像を顧みこれを偶像ゐ獻し物と意て食する者あり是故ゐその心弱して
汚るよあり　八神と我儕の關係い食物に由に非ず食そるも益ることなく食
せざるも損ることあし　九然と爾曹慎て其自由を柔弱者の頭とあす勿を
十　八もし知識ある所の爾偶像の廟に坐して食そるを見む柔弱者の心これに
勵られて偶像ゐ獻し物を食せざらん乎　十一又キリストの代て死たまひし弱
き兄弟爾の知識に因て淪亡ざらん乎　十二此の如く爾曹兄弟を犯し其弱
き心を傷めしむるいキリストに罪を犯すあり　十三是故ゐ若し食物わが兄弟
を礙かせむ我い兄弟を礙かせざる爲に永久も肉を食はじ

第九章　我い使徒に非ずや我い自主ゐ非ずや我い我儕の主イエスキリストを
見しゐ非ずや爾曹ダ主ゐ在い我ダ工ゐ非ず乎　二ゐれ他人ゐい使徒ゐ非ず
とも爾曹にい使徒なり蓋ゐんぢらの主に在い我ダ使徒の職の印ゐ也
三我ことを詰そ者に答ふるい此あり　四われら飲食を受る權なき乎　五われ
ら他の使徒等およびケパとの如く姉妹ある妻を携ふる權あき
乎　六惟われとバルナバのみ工を止るゐとを得ざらん乎　七誰か第に出て已の
則を塾す者あらんや誰か葡萄園を樹て其果を食ざる者あらんや誰か羊を
牧て其乳を飲ざる者あらん乎　八ゐれ亦かく言に非ずや　モーセの律法ゐ
錄されたり神牛の爲に慮かり給へる乎　九又い我儕の爲ゐのみ之を言たま
ひし乎これい我儕の爲に錄し給へるも也ろい新す者い望ありて耕し穀物を碾
す者い其穀物を得の望ありて禱い宜なれを也　十我儕もし爾曹の爲に靈の
物を播たらむ肉の物を殺取い大事あらん乎　十一他の人もし此權威を
有む況て我儕をや然と我儕ゐ此權威を用ずキリストの福音に
阻隔あきやうに我儕すべてれ事を忍ぶ　十二んぢら知ざるか聖事を務る者
い殿の物を食し祭壇に事る者い祭壇と共ゐ其祭を取てことを　十三此の如く主
福音を宣傳る者い福音に由て生活んてことを定め給へり　十四然と我此等の事

い一をも用ず亦かくの如くせられん爲に之を言遣るゐ非ず蓋わが誇る所を人に虚くせられんよりい寧ろ死るい我に善事あれを也　われ福音を宣傳ると雖も誇るべき所あし已を得ざるあり若已むを得ん若われ好ざるも其責任い我ゐ與を卽なり　十七　若わき好て之を行ゐ賞を得ん若然らず我が賞い何ある耶われ福音を宣傳るわ人をして費あくキリストの福音を得しめ又福音ゐ在て我有る權を妄ゐ用ざる卽ち是あり　十八　われ衆より自由にして衆に服ふ者と爲ん爲に多の人を得ん爲ゐ自ら己を衆の人の奴隷とあせり　十九　ユダヤ人の如くあれり此ユダヤ人を得ん爲あり又律法の下にある者ゐい我ユダヤ人の如くあきり是律法の下にある者を得ん爲あり　二十　律法あき者ゐい我律法の下に在されども律法れ下ゐある者あき者の如くあれり是律法あき者を得ん爲あり然と我神ゐ向て律法あきに非ず卽ちキリストの律法の下ゐ在あり　二一　柔弱者にい我柔弱者の如くあれり是柔弱者を得ん爲なり又すべての人ゐい我うの衆の人の狀に洒へり是いかにもして彼等數人を救ん爲あり　二二　われ福音の爲ゐ如此れあふい人と共ゐ福音ゐ與らん爲あり　二三　ゐんぢら知ずや競場に趨る者い皆はしれとも褒美を得者い唯一人あるを爾曹も得ん爲に趨るべし　二四　凡て勝を競ふ者い何事をも節へ謹むあり彼等い傳い壞ざる冕を得んが爲に之を行ふなり　二五　然と我が趨るい定向あきが如きに非ず我が戰い空を擊が如きに非ず　二六　已の體を撲て之を服せしむ蓋は[illegible]兄弟よ我ゐんならが左の事を恐れた也

[illegible]

ゐ雲の下に在ミゐ海を過ミゐ雲と海にてバプテスマを受てモーセに屬り　三　皆ゐおなじく靈の食物を食し　四　みゐ同く靈の飲物を飲り此かれらゐ從へる靈の磐より飲たる也ろの磐い卽ちキリストあり　五　然と彼等の中おは[illegible]くい神の心に適ざるが故に野ゐて滅されたり　六　此等の事い我儕をして彼等が嗜し如く惡を嗜ざらしむる我儕の鑒あり　七　民い坐して飲食し起て舞

りと錄されたる如く彼等のうち或者の行しを傚て爾曹偶像を拜者となる
勿れ　八　また彼等のうち或者奸淫を行ひ一日に二萬三千人死たり彼等を傚
て我儕姦淫をべからず　九　又かれらの中あるものキリストを試て蛇に滅
されたり彼等を傚て我儕も試むべからず　十　また彼等中あるもの怨言て
滅を者に滅されたり彼等に傚て爾等も怨言ふ勿れ　十一　彼等が遇る此すべて
の事は鑒となれり且てれらの事を錄されたるは末世に遇る我儕を警むる
爲なり　十二　然を自ら立りと意ふ者は傾ざるやう愼むべし　十三　爾曹が遇し試
惑は人の常ならざるはなし神は信ある者なり爾曹を爾堪ぶるに能ざる試
惑に遇せじ爾曹が其試惑を耐忍てとを得ん爲に其にろへて逃るべき途を
備へ給ふべし　十四　然を我が愛する者よ偶像を拜するを避べし　十五　われ智者
に言ごとく言ん爾曹わが言ところを審べし　十六　我儕が祝ふ所の祝杯は同
にキリストの血を享るに非ずや我儕が擘ところのパンは同にキリストの體
を享るに非ずや　十七　パンは僅一なり多の我儕もまた一體なり蓋をは一のパンを
同に享ざなり　十八　肉に屬るイスラエル人を觀よ祭物を食者は祭壇に
與る者に非ずや　十九　然ば我いへる事は何ぞや偶像は何ものと言るか然らず
偶像に獻し物は有ものと言るか然らず　二十　我いわん異邦人の獻る物は神に
獻るに非ず惡鬼に獻るなり我なんぢらが惡鬼と交るを欲ますなんぢら
主の杯と惡鬼の杯とを兼飮と能ず主の筵と惡鬼の筵とに兼與る能ず
　二二　わるら主の嫉妬を激さんとするか乎われらは主よりも强き者ならん乎
　二三　凡の物われに可らざるあし然ど凡のものは益あるに非ず凡の物われに可ら
ざるあし然ど凡のものは德を建るに非ず　二四　人みな己の益を求るなく各人の
益を求べし　二五　凡て市に鬻ものは良心の爲に問ことをせずして食すべし　二六
ろは地と之に盈る物は主の屬ある也　二七　爾曹もし不信者に請ありて往ん
とせば凡て爾曹の前に陳る物を良心の爲に問ことをせずして食すべし　二八
もし人あんぢらに此は偶像に獻し物なりと云む告し者の爲また良心の爲
に之を食する勿れ　二九　蓋地と之に盈る物みな主の屬ある也　良心とは爾曹

の良心に非ず他の人の良心を言ふなり
に擾らるゝ　三十　若われ感謝して食するをもて
する所のものに縁て譏らるゝをもて
事を行ふにも凡て神の榮を顯すやうに
一　人をも亦神の教會をも礙かする勿れ
心に適ふやうにし彼等が救をん爲ふ己の益を求めず許多れ人れ益を求むる
如くすべし

第十一章

我キリストに效ふ如く爾曹われに效ふべし　二　兄弟よ爾曹すべ
ての事ゐ於て我を記念のつ我ゐんちらに傳へし如く其傳を守るに因て我
なんぢらを讃　凡の人の首ハキリストなり女は首ハ男なり
い神ありと爾曹が知んゐとを願ふ　四　凡て男い首に物を蒙りて祈禱をゐし
或い預言する時い其首を辱しむる也　五　凡て女い首に物を蒙ずして祈禱を
ゐし或い預言する時い其首を辱しむるあり此い薙髮と一にして異ゐとあ
し　女もし物を蒙ず必髮を剪べし然と髮を剪また薙ゐと若し女の恥べき
ゐとあらを物を蒙るべし　七　男い神の像と榮あれた其首に物を蒙るべからず女い男の榮あり　八　うい男い女より出しに非ず女い男より出たれを也
また男い女の爲に造られしに非ず女い　九　是故に女い
天使ゆ故に縁て首に權を有べき者あり　十　然と主に在ては男い女に由ざる
ゐとあらく女い男に由ざるゐとあし　十一　女の男より出し如く男い女に由て出
ま加して萬物ゐ神より出るあり　十二　爾曹みづから辨ふべし女物を蒙らず
して神ゐ祈るい宜きゐとあるや　十三　男もし長髮あらバ恥べきゐと也と爾
曹自然ゐ知に非ずや　十四　然と女もし長髮あらた其榮なり蓋かむりものゝ
代に髮を賜ひたをバ也　十五　縱ひ爭ひ論ずる者ありとも此の如き例い我儕に
も亦神の教會にも有ゐとあし　十六　我ゐらの事を命じて爾曹を嘉ざるい
爾曹の聚會益を受ずして反て損を招けバ也　十七　先ゐんぢら教會に集るとき
其うち互に爭ひ分るゝゐと有と聞り我畧ゐれを信ず　十八　うい正き者の爾曹

の中に餌をんため異端れおらざるを得ざれ也　二十　あんちら一處に集るい主の晩餐を食するに非ず　二一　ろい食するとき各人まづ己の晩餐を食するに因あるひい飢る者あり或い醉飽る者あき也　二二　あんちら飲食すべき室あきら神の敎會を慢じ又乏者を辱むめんとする乎わを何をら言ん此に因て爾曹を嘉べきや我い嘉ざるあり　二三　我あんちらに傳し事い主より授られたるあり即主イエス賣るよ夜パンを取　二四　頒して之を擘いひけるい取て食せよ此い爾曹の爲に壞るよ我體あり爾曹も如此れおみひて我を憶よ　二五　食して後また杯をとり前の如くして曰けるい此杯い我ダ血にして立る所の新約あり爾曹も如此れおみひて飲ごとに我を憶よ　二六　爾曹あのパンを食し此杯を飲ごとに主の死を表して其來る時までに及ぶあり　二七　然バ宜に合ずしてこのパンを食し主の杯を飲者い主の體と血を干あり　二八　人みづから省みて後ろのパンを食し其杯を飲べし　二九　宜に合ずして食飲する者い其食飲に由て自ら罰を招くあり蓋主の體を辨へざるに因　三十　是故に爾曹の中に弱き者病の者また寢たる者多し　三一　我儕もし自ら己を審しおらば罰を蒙るおと無りしおらん　三二　然と今罰せらるよい主の我儕を懲しめ給ふあり是我儕をして世の人と同お罰を蒙ることと無らしめん爲あり　三三　是故お我ダ兄弟よ集りて食せんとき互に相待べし　三四　もし飢る者罰を蒙るに至らざらん爲あり其ほかの事い我いたらん時あれを定ん

第十二章

兄弟よ靈の賜についていい我あんちち夕知ざるを欲ず　二　あんちら異邦人ありしとき引誘お隨ひて言いざる偶像の下お誘れ往しい爾曹の知ところ也　三　是故に我なんぢらに示さん神の靈に感じて語る者いイエスを詛ふべき者と謂ものあし又人聖靈に感ぜされをイエスを主と謂あたいず　四　賜い殊あれとも靈い同じ　五　職い殊あれとも一切の事を衆の人の中に行ふ神い同じ　六　靈の哲を各人に賜しい益を得しめん爲あり　七　或い靈によりて智慧の言を賜り或い同じ靈お由て知識の言を賜り　八　或い同じ靈に由て信仰を賜り或い同じ靈に由て病を醫す

能を賜り　十　或ハ異能を行ひ或ハ預言し或ハ霊を弁へ或ハ方言をいひ或ハ方言を譯するの能を賜れり　然ど凡て此等の事を行ふ者ハ同く一霊ありて彼ら[の]心のまゝに各人に殊與るあり　十一　體ハ一ありて多の股あり一體の股ハ多々をとも一の體あり　十二　キリストも亦かくの如し　十三　或ハユダヤ人あるひハギリシヤ人あるひハ奴隷あるひハ自主に拘らず我等みな一霊に在てバプテスマをうけ一の體となれり又みな一の霊を飲り　十四　體ハ一股ならず多あれバ也　十五　足もし我手に非ざるが故に體に屬せずと云バ其ために體に屬せざる乎　また耳もし我目に非ざるが故に體に屬せずと云も其ために體に屬せざる乎　十六　もし全身目ならバ聞ところハ安ンや若し全身耳ならバ嗅ところハ安ンや　十七　神ハ心のまゝに股を置たまへり　若みな一の股ならバ體ハ安ンや　十八　股ハ多あをとも體ハ一あり　十九　目ハ手に我なんぢを用なしと謂を得ず又頭も足に我なんぢに用なしと謂を得ず　二十一　體のうち尤も柔しと見る股ハ却て無るべからざる者あり　二十二　體のうち尊あらずと意ふ所に物を纏て我儕殊に之を尊ぶ之に因て我儕の不美ところハ美ところハ愈て美しく　二十三　我儕の美しき所ハ心を用るに及ざれバ其劣れる所に殊ほ尊重を加て體を調和たまへり　二十四　あれ體のうち分爭なく諸の股たがひに相顧み扶けん爲ありもし一の股くるしまバ諸の股ともに苦み一の股たふとバれなバ諸の體にして亦れのく其股あり　二十五　神ハ第一に使徒第二に預言者第三に教師ろの次に異能を行ふ者次に病を醫す能を受し者救濟する者治理者方言をいふ者を教會に置たまへり　二十六　是みな使徒ならん乎みな預言者ならん乎みな教師ならん乎みな異能を行ふ者ならん乎　二十七　みな病を醫す能を有る者ならん乎みな方言をいふ者ならん乎みな譯する者ならん乎　二十八　あんぢら至美たる賜を羨ふべし尤も善道を爾曹に示さん

譬喩　二十三節　假令わを記の人の言おゟび天使の言を語るとも若し愛あくバ鳴銅や響鈸の如し　二十三節　假令わを預言する能あり又すべての奥義と諸の學術

に達し又山を移すほどなる諸の信仰ありと雖も若し愛なくば數るわ足ぬ
ものあり　三假令わが我そべての所有を施し又焚るゝ爲ふ我が身を予るとも若し愛あくば我に益あし　四愛い寛認をあし又人の益を圖るあり愛い妬まず誇らず驕傲らず非禮を行わず　五己の利を求めず輕々しく怒らず人の惡を念わず　六不義を喜べず眞理を喜ひ　七凡う事包容おはよろ事信じ凡う事望み凡う事忍あり　八愛い永久も墮るでとあし然と預言い廢り方言い息知識も亦廢らん　九我儕の知識全からず預言も全からず　十全き者きたるときいたつた全のらざる者廢るべし　十一われ童子の時い語るとてろ童子の如く識るとろ童子の如く慮るとろ童子の如くありしが成人て童子の事を棄たり　十二わきら今鏡をもて見ごとく見とてろ昏然あり然と彼の時にい面を對せて和見ん我いま知ること全からず然と彼の時にい我が知るゝ如くわれ知ん　十三うを信仰と望と愛と此三の者い常に在あり此うち尤も大ある者い愛あり

第十四章　なんぢら愛を追求めつ靈の各樣の賜を慕べし殊に慕ふべきい預言

言する事あり　二方言を語る者い人に語るに非ず神に語る也うい靈に由て奧義を語ると雖も曉る者あけきを也　三然と預言する者い人に語りて其德をたて勸勉をあし安慰を予るあり　四方言を語る者い己の德をたて預言する者い敎會の德を建るあり　五われ爾曹ら皆みな方言を語る事をも願へど最も願ふ所い爾曹が預言せん事あり方言を語る者い若し譯して敎會の德を建るに非ずむ預言する者あをより優るあり　六然ば兄弟よ我もし爾曹に就り只方言を語りて默前あるひい知識あるひい預言あるひい敎誨を語らずば爾曹に何の益あらん乎　七琴もし其音別あくば吹とあろ笛とあろを如何で知得んや　八もし號さだまりあき聲を出さば誰あ戰の備をあさん乎　九此の如く爾曹も舌を以て明かあらざる言を出さば何で語る所の事を知得んや此あんなち空氣に語るあり　十世間の口音の類れはしと雖も一として其義あらざるあし　十一是故に若わを其聲の義を知さるば語る者に對して我あびすとあり語る者まだずに

對して爽とある也　十二然ば爾曹も靈の賜を慕ふ者あるより衆會の德を建る爲に其賜の豐盛あらんことを願ふべし　十三是故に方言を語る者い自ら之を譯せんことを祈るべし　十四もし方言を以て祈らば我が靈い祈るあれど我が心い人の爲に果を結ばず　十五然らば如何せん我靈を以て祈らん又心を以て祈らん我靈を以て頌いん　十六然ずば爾靈を以て祝するとき愚ある者い爾の謝るあとを知ざれば如何してアーメンと言んや　十七爾の感謝そるい善されど他の人い德を建ず　十八われ爾曹よりも多く方言を語るを以て神ゐ感謝そ　十九敎會の中ゐ在て我方言を以て一萬の言を語らんより寧ろ人を敎ん爲ゐ我が心を以て五言を語るを善とす　二十兄弟よ知慧ゐ於ては嬰兒となるべし惡ゐ於ては嬰兒となるべし　二十一律法ゐ錄して主い成人となるべし　二十一律法ゐ錄して主いひ給いく異ある言ことある唇をもて此民ゐ語らん然とも彼等い我ゐ聽じとあり　二十二是故ゐ方言い信ずる者の爲ゐ非ず信ぜざる者の爲の徵あり然と預言い信ぜざる者の爲ゐ非ず信ずる者の爲ゐあるひい信ぜざる者入來らんとき方言を以て語らば愚ある者と謂ざらん乎　二十三然と若み會一處ゐ集るとき皆方言を語ば愚ある者入來らんとき爾曹を狂る者と謂ざらん乎　二十三もし全會一處ゐ集るとき皆方言を以て語ば愚ある者入來らんとき爾曹を狂る者と謂ざらん乎　二十四然と若み預言せば信ぜざる者あるひい愚ある者入來らんとき此すべての人ゐ由て自己を責ての衆の人ゐ由て己の罪を認むべし　二十五此の如く其心ゐ隱たるみと露るゝが故ゐ伏て神を拜また神い誠に爾曹の中に在すと言ん○　二十六然ばきょうだいよ如何兄弟よ爾曹あつまれる時ゐ各〳〵に或い頌詩あり或い方言あり或い默示あり或い繙譯あり惡く德を建んために之を爲べし　二十七もし方言を語る者あらば二人また多とも三人に過ず次序に循て語り之を譯そる者一人あるべし　二十八もし譯そる者あきときい敎會の中に默して己と神に語るべし　二十九預言そる者い二人あるひい三人かたり其餘の者い之を辨ふべし　三十もし旁邊に坐そるもの默示を得ば先に語るもの緘默べし　三十一爾曹みゐ衆の人に學ばせ又勸勉を受しめん爲に一々預言そるみとを得ばみり　三十二預言者の靈い預言者に制せらるゝ　三十三蓋神い亂の神に非ず和平の

神なり○三聖徒の諸教會の如く爾曹の婦女等も教會の中に默そべし彼等の語るを許さず彼等は律法に云る如く順ふべき者あり四もし學んと欲ることあらば宅に在て其夫に問べし蓋婦女が教會に於て語るは耻べきことなればなり五神の道は爾曹より出し乎また爾曹にのみ來りし乎人もし自己を預言者とし或は靈に感ぜし者とせば我がなんぢらに書遣るところは主の命なりと知べし六もし知ざる者あらば其知ざるに任そべし七然ら兄弟よ預言することを慕ひ又方言を語ることを禁ずる勿れ八凡のこと端正かつ次序に循ひて行ふべし

第十五章

一兄弟よ前に我なんぢらに傳へし福音を今また爾曹に告ぐ爾曹もし我が傳へし言を固く守り徒に信ずるあるときは之に由て救れん二わが爾曹に傳へしは我が受し所の事にて其第一は即ち聖書に應てキリスト我儕の罪のために死また聖書に應て葬られ第三日に甦へり三ケパに現れ後十二の弟子に現れ給へるなり四また如此あらはれ給るのち五百の兄弟の共に在とき亦あれに現れ給へり其兄弟のうち多は今なほ世にあり然とも既に寢たる者もあり五此後ヤコブに現れ又すべての使徒に現れ六最後に月たらぬ者の如き我にも現れ給へり七蓋われ神の教會を迫害せし故に使徒と稱ふるに足ざる者にして使徒の中の至微者なれば也八然と我かくの如あるを得しは神の恩ふ由てあり我に賜し神の恩いと徒然からず我いや衆の使徒よりも多く勞たり此いと我に非ず我と偕にある神の恩なり十是故に我も彼等も此の如く宣傳へ爾曹も亦かくの如く信ぜり○十一キリストい死より甦りしと宣傳るに爾曹のうち死より甦ることなしといふ者あるいかでや十二もし死より甦ることなくばキリストも亦甦らざりしあらん十三キリストもし甦らざりしあらば我儕の宣るところ徒然また爾曹の信仰も徒然からん十四且われら神の爲に妄の證をする者とならん我儕神いキリストを甦らしゝと證すれど也もし死し者よみがへる事なくば神キリストを甦らしむる事あかるべし十五もし死し者

よみがへる事あくをキリストも甦るおほ
りしあらば爾曹の信仰い徒然あんなら
寝たる者も沉淪しあらん　若キリスト
ゐ在て
ゐ由る我儕の望たゝ此世はみあら
ゐ衆の人の中ゐて尤も憐むべき者あん
たる者の復生れ首とあれり　二うれ人
ゐ因て死るゐといで人ゐ因て甦るゐ
と出たり　二一アダムゐ屬る衆の人の死る
如くキリストに屬る衆の人い生べし
二二然と各人うの次序ゐ循ふ初いキリスト次いキリスト
二三
甦て來らんとき彼に
屬する者あり　二四後うれ諸〳〵の
ゐ
攻れよび諸の權威と能を滅して國を父
に付さん是終あり　二五蓋これ諸の敵を其足
れ下に置ときまでい王たらざる
を得されを也　二六最後に滅さるゝ敵い死あり　二七うい神すべての物をキリス
トれ足下に置りと云給るときい萬物を其下に
置とあろれ者い其內にあらざるゐと明のあり　二八すべての物
も亦ミづから萬物を已に服いしゝ者に
服ふべし是神すべてれ物の上ゐ主

たらん爲あり　二九もし死し者全く甦らずも死し者の爲ゐバプテスマを受て
何の爲にせんとする乎　三〇又我儕つねゐ危險ゐ居や　三一我儕れ主キリストイエスゐ在て
爾曹ゐつき我ゟ有る恣をさし　誇て我日々ゐ死ると言　三二若われ人れ如くエ
ベソゐ於て獸と共ゐ鬪ひしあらんも何れ益あらん乎もし死し者甦らずも飲
食するゐ若ず我儕明日去ぬべき者あれ
ば也　三三爾曹みづから欺く勿れ惡交い善行を害ふなり　三四あんなら醒て義を行ふべし罪を犯す勿を爾曹れうち
神を知ざる者あり我かく言て爾曹を愧しむる也○　三五人あるひと問ん死し
者いかゐ甦るや如何ある身體ゐて來る乎と　三六愚なる者よ爾ゟ播とゐろれ
種まづ死ざるを生ず　三七又あんなゟ播とゐろのもの將來とゆる所れ體を播
ゐ非ず麥にても他れ穀にてる只粒れみ　三八然るを神い已れ意ゐ隨ひて之に
體を予へ種ごとゐ其ゐの〳〵の形體を
予へ給ふ　三九凡れ肉おあし肉ゐ非ず
人れ肉あり獸れ肉あり鳥れ肉あり魚れ　四〇天ゐ屬る物れ形體あり地

ゐ風る物れ形體あり天ゐ屬る物れ榮い地ゐ屬る物れ榮ゐ異あり 四一日れ榮あり月れ榮あり星れ榮あり此星と彼星と其榮また各々異あり 四二死し人れ甦るも亦かくれ如し壞る者ゐて播き壞さる者ゐ甦さき 四三辱かちさる者ゐて播き榮ある者ゐ甦さき弱き者ゐて播き強き者ゐ甦さき 四四血氣れ體ゐて播き靈れ體ゐ甦さるよあり血氣の體あり靈れ體あり 四五錄して始れ人アダム|い生命ある魂となり終れアダム|い生命を子ふる靈となると有ごとし 四六靈れ者い先ゐ在ず反て血氣れ者さきゐ在て靈れ者れちゐ在あり 四七第一れ人い地より出て土ゐつさ第二れ人い天より出たる主あり 四八かの土ゐつさる者ゐ屬る者ゐ凡て土に屬る者い似あり天ゐ屬る者ゐ凡て天に屬る者い似あり 四九われら土に屬る者の狀を有うくの如く後また天に屬る者の狀を有ん 五十兄弟よ我あをを言ん血肉い神の國を嗣ぐみと能いず亦壞る者い壞ざる者を嗣みと能い ず 五一蔵よ我あんぢらに奥義を告ん我儕こと〳〵く寢るにい非ず我儕みな末の猶れ吻んとき忽ち瞬息間に化せん 五二蓋猶あらんとき死し人よみがへりて壞ず我儕もまた化そべければ也 五三み の壞る者い必ず壞ざる者を衣まぬる者い必ず死ざる者を衣べし 五四此くつる者くちざる者を衣み の死る者まゐざる者を衣んとき聖書ゐ錄して死い勝ゐ呑きんと有ゐ處べし 五五死よ爾の刺い安に在や 五六死の刺い罪あり罪の能い律法あり 五七我儕をして我主イエスキリストゐ由て勝を得しむる神ゐ謝そ 五八是故ゐ我が愛する兄弟よ爾曹貞固して搖ず恒ゐ勵て主の工を務よ蓋あんぢら主ゐ在て其行とあろの勞の徒然からざるを知をあり

第十六章 聖徒の爲ゐ金を捐そみとゐ就ていかテヤの教會に我が命ぜし如く爾曹も行ふべし 二一週の首の日ごとに爾曹おの〳〵其得ところの利ゐ循ひて之を家に蓄へ留みを我が到るとき始て捐すみと莫らん爲あり 三我いたらを書を爾曹が撰ふ所の人ゐ予へ爾曹の惠をエルサレムに携へしむべし 四もし我も往べくを彼等ゐをと偕に往べし 五我マケドニヤを經とき爾曹と偕に留らん或い爾曹と冬それをマケドニヤを經とき爾曹ゐ就り

を過よとあるべし斯て爾曹が我を我ゆく處ゐ送んよとを望む七いま途間
よんぢらを見んよとを欲いず主もし我に許さゞ暫く爾曹と偕に居んよとを
望む八我ペンテコステまでエペソ=ルに居ん九ろい厥かつ功效を成の門ひら
けて我前ゐ在また敵る者多々れたればも也〇十テモテ若いたらゞ爾曹愼て彼を
して偬るよ所ゐく爾曹の中ゐ居しめよ蓋かをも我ごとく主の事を務る者ゐを
ゞ也十一故ゐ爾曹かれを藐視みとなく平安に送て我ゞ所ゐ來らしめよ我か
をゞ他の兄弟等と偕に來るを待たゐり十二兄弟アポロ=に就ていい兄弟等と偕
ゐ彼が爾曹に到らんみとを我大に勸をと彼さらゐ今往みとを欲いず然と
偬時ゐらゞ往べし十三みんぢら目を醒し堅く信仰に立て丈夫の如く剛かれ
十四爾曹の行ふ所とゐ愛を以て行ふべし十五兄弟よステパナの家いゞ即ちアカ
ヤの初の果なり又かさらゞ聖徒のてとゐ身を委て事るいゞ爾曹ゞ知とてろ
也十六われ勸む爾曹も此の如き者ゐよび之と偕に勞る者ゐ服せよ十七我ステ
パナとポルトナトとアカイコの來るを喜ぶ是みんぢらの缺る所を補へを
ゐり十八彼等わゞ心と爾曹の心を慰めたり是故ゐ爾曹かくの如き者を重ん
ずべし=アジアの諸教會みんぢらゐ安を問アクラとプリスキラ及び其家
の教會主ゐ在て爾曹に切々ゐ安を問二十諸の兄弟みんぢらゐ安を問みんぢ
ら潔き接吻を以て互ゐ安を問二一我パウロ親手みんぢらゐ安を問二二もし人
主イエスキリストを愛せざれた詛いるべし主臨らん二三願くい主イエスキ
リストの恩みんぢらと偕ゐあれ二四わゞ愛をべてイエスキリストゐをる爾
曹と偕ゐ在なりアーメン

新約全書哥林多前書　終

新約全書使徒パウロコリント人におくる後書

第一章

神の旨に由てイエスキリストの使徒となをるパウロ及び兄弟テモテコリントにある神の教會と復くアカヤにある凡て聖徒に書を達る 二願くは我儕の父なる神および主イエスキリストより恩寵と平康を受よ

三○頌美べきかな神即ち我儕の主イエスキリストの父慈悲の父すべて慰安の源なる神 四神は我儕が諸般の患難の中ゟ我儕を慰めたまふ是我儕をして神より我儕を慰めたるその慰安を以て又もろ〳〵の患難にをる者を慰むるをえしめん爲なり 五蓋キリストの苦わざらゟ多くあるが如く我儕は安慰もキリストゟ由て多くわれら亦 六われら或は患難を受るも爾曹が安慰と救の爲なり此安慰と救は爾曹が苦を爾曹ゟも同く忍しむるなり我儕あるひは安慰を受るも亦あんぢらが安慰と救の爲なり 七爾曹が苦を偕ゟ受る如くまた安慰をも偕ゟ受るをあとを我儕は知あの故ゟ爾曹ゟつき我儕が望むとあろは堅し 八兄弟よ我儕が

アヨアわ於て迯し所の苦難を爾曹が知さるを欲やす即ち責らるゝまゝと甚
太くして勢ひ當がたく生命を保ん望をも失ふわ至れり　九　且われら心中わ
必死を定む是故わ己を恃ずして死し者を甦らする神を恃めり　十　神すで
わ我儕を此れ如きれ死より救ひ今また救へり後も倘わきらを救ひ給はん
ゝとを望む　十一　爾曹も我儕の爲ふ祈りて相助く斯て許多れ人わより我儕わ
賜りし恩寵を許多の人も我儕が爲わ感謝するに至らん○　十二　我儕の眞心わ
きら神れ賜ふ所れ丹心と信實わ由また肉れ智慧わ由ず神の恩寵わより世
わ在て行をみし特わ爾曹わ向ひて此の如き行を爲りと證す是わきらが誇
る所あり　十三　我儕なんぢらわ書遣る所と爾曹が讀とみろ曉る所れ外わ非
ざる也　十四　わを爾曹が終わ至るまで左の事を爾曹の中わ證者あるが如く識
んゝとを望む即ち主イエスの日わ爾曹、が我儕に由て誇る如く我儕も爾曹
わ由て誇る是あり　十五　我ゝを信ずるに因て再び爾曹わ益を得させんため
前わい先なんぢらに至り　十六　また爾曹を過てマケドニヤわゆき復マケドニ
ヤより爾曹わ歸り爾曹をしてユダヤの方へ送しめんゝとを欲へり　十七
我のく定めしとき虛浮心あらん乎また我が定しとわろ肉わ由てさだめ是
あり是ありと言また非あり非ありと言んや　十八　眞實れ神わきらが爾曹わ向
ひて曰る言わ是と言また非と言しみとあしと證す　蓋わきら即ち我とシ
ルワノ及びテモテ爾曹の中わ傳たる神の子イエスキリストわ是と言また
非と言が如き事なし彼わい唯是と言あと有のみ　二十　凡て神の約束わ彼れ中
わ是とあり又かれ中わアーメンとなり我儕わ由て神の榮の顯るゝわ及
ぶ　二一　我儕を爾曹と偕わキリストわ堅固し且きらわ膏を沃し者わい神なり
二二　彼また我儕わ印し且質として靈を我儕れ心わ賜へり○　二三　我いまだコリ
ントわ至らざるわい爾曹を寛容わせんが爲なり我神を顧るが慥れ爲わ證を
求む　二四　我儕あんぢらの信仰を主とらんとするわ非ず唯なんぢらの喜樂を
助んとするなり蓋あんぢら信仰わ由て立べあり

第二章　**2**1 **2**2 **2**3 **2**4 **2**5 **2**6 **2**7 **2**8 **2**9 **2**10 **2**11 **2**12 **2**13 **2**14 **2**15 **2**16 **2**17

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

しめ〳〵我愛しむる所れ者の外ホ誰か我を喜バせん乎　三　且前ホ爾曹ホ書遣し我いたらんとき我を喜ぜす可もの反て我を愧しめんホとを恐れて也　四　ホんぢら皆已ダ喜樂を己ダ喜樂とするホとを信ずる也　且已ホ大なる患難と心の哀痛あるホより多の涙を以て爾曹ホ書遣り此ホ爾曹をして愧しめんとするホ非ず我ホんぢらを愛する事の深を知しめん爲なり　五　もし愧しむる者あらバ我を愧しむるホ非ず畧ホんぢら衆を愧しむるあり如此いふホ我ホれを甚しく責るホとを欲ざる也　斯る人ホ多れ人の責を受ると已ホ足り　七　然バ爾曹ホ反て彼を赦し慰むべし恐くハ彼ホ愛ホ沈まん　八　是故ホ我ホんぢられ愛を彼ホ即さんとを爾曹ホ勸む　且前ホ書を爾曹ホ遣りしホ爾曹ダ凡の事ホ順ふや否ホよろこて之を知ん爲なり　十　なんぢら何事ホよらす人を赦とあらバ我また之を赦さん我もし赦しき事あらバ爾曹れ爲キリストの前ホ赦しまゐり　十一　是わをらサタンホ勝ざらん爲なり我儕れ詭計を知さるホ非ず　十二　我キリストの福音の爲ホおトロアスホ至り主わダ爲に門を開き給ひしホ　十三　わダ兄弟テトスホ遇さるダ故わダ心安からす彼等に別を告てマケドニヤホ往り　十四　常に我儕をしてキリストホ在て勝を得しめ且かれを知の香を我儕をもて遍く顯せ神に感謝せ　救るゝ者ホ就ても沈淪者ホ就ても我儕神の爲にハキリストの馨香あり　十五　沈淪者の爲ホ死の香にて彼等を死ホ至しむ救るゝ者の爲にハ生の香ホて彼等を生に至らしむ誰か之ホ堪んや　十七　我儕ホはくの人の如く神の道を混亂せす即ち誠により神に由て神の前ホキリストホ在て言あり

第三章

我儕また自ら己を薦めん乎われら或人の如く人より薦書を受て爾曹に與し或ハ爾曹より薦書を受て人ホ與すべき者ホらん乎　二　爾曹ハ我儕の書あり即ち我儕心に書せり衆の人の知ところ讀とホろ也　三　爾曹ハ明かに我儕ダ役事に由て筆るキリストの書なり是墨に非ず活神の靈にて記し又石碑ホ非す心の肉碑に記したり　四　我儕キリストホより神ホ向ひて此の

如き信仰あり　五然と我儕已ゐ由て自ら何事をも思得るゐ非ず我儕の思得
るゐ神ゐ因り　六かれ我儕をして新約の役者とみるゐ足しむ儀文ゐ事るに
非ず　蓋ゐ事ふる也ういは儀文い死し靈い生せたあり　七終ゐ廢るべきモーセ
の面の榮ゐ因てすらイスラエルの人々られの面を注目ゐと能ざりき斯く
石に鐫し儀文の死法ゐは榮ゐるときい　況て靈の法い榮あらざらん乎
罪を定むる法もし榮あらた況て義とする法い其榮さらゐ愈らざらん乎　昔
榮ありと爲しものも後の榮に比れゐ榮なき者となれり　蓋のちの榮の更ゐ
愈れるゐ緣てなり　十一もし廢らんものに榮ありしあらた況て長存る者ゐ榮ゐ
らざらん乎　十二われら此の如きことを望むが故ゐ偖々して言あり　十三是モー
セ　ダイスラエルの人々ゐ其廢らんとする者の結局を蔵ざらん爲ゐ帕子ゐ
て其面を蔽し如きゐ非ず　十四然と彼等心を頑ゐせり今日に至るまで彼等舊
約を讀とき其帕子ゐは存れり其存て廢らざるい此キリストに由て廢るべ
き者ゐれバ也　十五今日に至るまでモーセを讀とき其帕子なは其心を蔽へり
十六然と其心主ゐ歸するに及ゼゐ其かはゐはひ除のるべし　十七主い即ち彼の
靈あり主の靈ある所ゐい自由あんく主の榮を見榮ゐ榮いや增りて其ゐあゐ
ヒ像ゐ化る也これ主すゐいち靈ゐ由てあり

第四章　われら忍耐を歌りて此職を受たれた敢て臆せず　二恥べき隱匿たる
事を棄て詭譎を行ず神の道を混さず眞理を顯して神の前ゐ己を衆の人の
良心ゐ質あり　三我儕れ福音もし隱あらゐ汎者ゐ隱るゝ也　四此の如き人い
此世の神ういの心を盲しゐたる不信者あり是神の仁なるキリストれ榮の福音
の光をして彼等を照さゝらしめんが爲あり　五われら自己の事を宣るゐ非
ず唯キリストイエスゐ主たるてと又われらイエスゐ由て爾曾の僕たるこ
を宣るあり　六光ゐ命じて暗より照出しめたる神我儕をしてイエスキリス
トの面ゐある神の榮光を知の光を顯さしめん爲ゐ我儕の心を照し給へり
七我儕この寶を瓦器ゐ藏り是おはいゐ優たる能い我より出るゐ非ず神の

能ある事の顯れん爲あり　八われら四方より患難を受れども窮せず詮かた
盡れども望を失いず　九迫害るれども棄られず跌倒るれども亡ず　十われら
何處へ往ふも常ふイエスの死を身ふ負り此ハイエスの生るることを我儕
の身ふ顯れしむる也　十一それ夫われら生者の常ふイエスの爲ふ死ふ付さるゝハ
イエスの生るることを我儕が死べき肉體ふ顯れしむる也　十二斯て死ハ我儕ふ
動き生ハ爾曹ふ動くなり　十三錄して我信ず此のゆゑき信仰の靈われも信ずるに因て言なり　我儕ハ主イエスを甦らし
しゝ者のイエスと偕に我儕をも甦らせ亦我儕をして爾曹と偕ふ立しむる
事を知り　十五萬事ハ皆あんぢらの益とあらしめんが爲なり此ハ恩ねはくの人の
感謝ふ由て神の榮を顯さん爲あり　是故ふ我儕が疲せず我儕が外なる人ハ
壞るゝとも内なる人ハ日々ふ新あり　十七我儕が受る片刻の輕き苦ハ極て大
なる窮なき重き榮を我儕ふ得しむる也　十八我儕が願る所ハ見る所の者ふ非
ず見ざる所のものの也ろハ見る所の者ハ暫時ふして見ざる所の者ハ永遠け

をべき也

第五章　十一我儕こゝを知あきらが地にある寄
ふあり手ふて造ざる窮なく有ところの屋なり　二我儕あの幕屋ふ居て勤き天
より賜ふ我儕が屋を衣の如く著んとを深く欲へり　三誠に著あとを得べ裸
ふあるあと無ちん　四我儕あの幕屋ふをり重を負て歎くあり之を衣の如く
脫んことを欲ずして生ふ死べき者の呑をん
が爲あり　五れ此事ふ應ふ者と我儕を爲し給ふ者ハ神あり彼靈を其質とあ
して我儕ふ賜へり　六是故に我儕の心つねに剛毅また身に居うちハ主より
離居ことを知り　七蓋見ざら見る所に憑ず信仰に憑て歩めべき也　八我儕の心
剛毅もつとも欲ふ所ハ身を離きて主と偕に居んあと也　九是故に我儕身に居
ても身を離きても彼の心に適んあとを勉む　十蓋わきら必ず皆キリストの
壇前に出て善ふもあき惡にもあき各々身ふ居て爲し所のあとふ循ひ其報
を受べき者あれべ也　十一如此われら主の畏べきを知が故ふ人ふ勸む我儕

すでゐ神に叨うに知れたり亦ゐんぢらの其心ゐも明ゐか知れたゝならん
と意ふ　十三我儕また自ら己を爾曹ゐ薦すル我儕の爲ゐ誇るべき原を爾曹ゐ
ふ是ゐんぢらが之を以て彼の外貌ゐより心ふ由ずして誇る者ゐ答ん爲な
り　十三我儕もし心狂るゐあらた是神の爲ありもし心住ゐあらば是ゐんぢらの爲ありキリストの愛わきらを勉せり我儕思に一人衆の人ゐ代て死たゞ衆の、人そでに死たる也　十五うの衆の人ゐ代て死しい生者をして以後おのが爲ゐらで己ゐ代り死て甦りし者のためゐ世を過しめんとて也　是故ゐ今より後われら肉體に依て人を識まじ我儕肉體に依てキリストを識しかとも今より後い此の如く之を識まじ　十七是故ゐ人キリストに在ときい新に造たる者ゐり舊い去てみゐ新しく作ゐんぢらゐ一切のもの神より出かれキリストふより我儕をして己と和ゲしめ且うの和ゲしむる職を我儕に授く　即ち神キリストゐ在て世を己と和ゲしめ其罪を之に負せず且和ゲしむる言を我儕ゐ委たまへり　二十是故に我儕召をてキリストの使者とゐきり即ち神わきらふ託ゐんぢらを懇給ふゲ如し我儕キリストゐ代て爾曹ゲ神ゐそんゐとを爾曹ゐ求ふ　二一神罪を識ざる者を我儕れ代ゐ罪人とゐせり是我儕をして彼ゐ在て神れ義とゐるゐとを得しめん爲なり

第六章　神と偕ゐ勞く所れ我儕なんぢらゐ勸む爾曹神れ恩を徒らゐ受るゐと勿を　二うれ曰われ慈悪の時ゐ爾ゐ聽また救の日ゐ爾を助たりと今い恩悪れ時ゐり今い救れ日ゐり　三我儕ゐ職を誚るゝゐと無らん爲ゐ何事ゐも人を躓かせず　四且をれら凡れ事ゐ於て己神れ役者れ如く行ひて己れ義を人ゐ証せり即ち多れ忍耐ゐも患難ゐも乏困ゐも窮乏ゐも困苦ゐも　五責打ゐも獄ゐも入ゐも擾乱れ時ゐも勤勞ゐも唖ざるゐも食ざるゐも　六貞潔ゐと〻知識と恒忍と仁慈と聖靈と僞ゐきれ愛と　七眞の道と神れ能と左右ゐ在とゐろ義れ武具を用る　八また榮耀羞辱悪名吉聞ゐ由て己の義を人ゐ顯せり　九人を惑す者に似たれども眞人に知をざるに似たきとも人に知を死たる者に似たれとも生るもれ責を受るに似たれとも殺されず　十うるに似たれ

れとも常に苦びを含きに似たれとも
凡れ物を有り○十二コリント人よ我儕は口あんぢらに啓け我儕は心廣あれ
り十三爾曹われらに狹らるゝに非ず反て己が心に狹らるゝ也十三われ爾曹に
語るあと我子に語るが如し爾曹も自ら心を廣して我に報をあすべし十四あ
んぢら不信者と輭あるれ蓋義と不義と何れ偕あるとあり有ん光と暗と何れ
交るあとあり有ん十五キリストとベリアルと何の合あとか有ん信者と不信者
と何の干るあとあり有ん十六神の殿と偶像と何れ同きあとあり有ん夫あんぢら
は活神の殿あり神嘗て我あれらの中に住り且あゆまん我あれらの神とあ
り彼等もが民とあらんと曰給ひしが如く十七又あんぢら彼等の中より出て
之を離れ汚穢ふ摂るあと勿れ我あんぢらを納ん十八われ爾曹の父とあり爾
曹わが子女と爲べしと曰る是全能れ主れ言あり

第七章　然ば愛する者よ我儕あの約束を得たれば肉と靈の凡の汚を去て自
己を潔くし神を畏れて聖潔あとを成就そべし二爾曹われらを容納よ我儕

誰ふも不義をあさず誰をも損ひ
ず誰をも掠めし事あし三われ如此いふい
爾曹を責んとふ非ず蓋われ既に言る如く爾曹恒に我儕の心に在て共に死
ともに生んと欲べあり四われ爾曹を信ずるあと大あり又あんぢらに縁て
訴おはし我儕が受る凡の患難の中にも我ふ慰め滿ち悦び餘あり五蓋わき
らマケドニヤに至る時我儕の肉そてしも安てとあく各様の患難にあひ
外にい爭ひ内にい懼ありき六然ど心褒る者を慰め給ふ神テトスの至るに
因て我儕を慰め給へり七第に其至るふ因て耳あらす爾曹の思慕とてろ又
褒悲とてろ又わ已に向ふ爾曹の熱心を我に告るとき彼が自ら安慰を得た
る其安慰を以て我儕を慰め給へり是故に我ます〳〵喜べり八已を書を以
て爾曹を愛しめしを褒にい悔たをとも今い悔ず蓋已を其書に因て爾曹を
褒しめしい暫時の間ありしを知たをば也九今已が喜ふい爾曹を褒ゑめし
に因に非ず爾曹い褒て悔改むるあとを爲しに因て也あんぢら神に循ひて
褒るおより我儕に少も損いるよ事あし十ろれ神に循ふ褒い悔みきれ救を

得の慎思に至らしむる也　十一　爾曹が神に依て受れ死に至しむる也　十一　爾曹が神に依て受し所の事を觀よ爾曹ゐ如何ある勉勵また自訴また忿恚また畏懼また熱心また罪を責る心を生ぜしや一切ゐんぢら彼事ゐ旅て自ら潔てとを求せり　十二　是を書を爾曹ゐ達りしい不義を爲たる者のために非ず又不義を受たる者れためにも非ず只ゐれらが爾曹の爲に有とてろの熱心を神の前にて爾曹ゐ示さんおとを欲てあり　十三　是故に我儕安慰を得たり我儕が安慰を得たる上ゐテトスれ喜に縁て益々喜べり蓋テトスれ心ゐんぢら衆に縁て平安を得たるによりてなり　十四　我爾曹の事を彼ゐ誇しかど之を愧とせず我儕傍が爾曹に話し言のごな眞實ありし如くテトスれ前ゐ誇し言も亦眞實ありり　十五　彼れ爾曹衆人の恐懼戰慄おのれを接て從ひしてとを憶いだし益々爾曹の心に耐曹を愛せり　十六　是れ凡の事を爾曹ゐ訂べきを信ず是故に喜べり

第八章　兄弟よ我マケドニヤの諸教會に賜りし神の恩を爾曹ゐ告　二　即ち大ある難の中ゐ試を受るとき彼等の喜び甚だしく亦大ある其貧かれらの性

あく施す所の富厚を竟せり　三　我ゐをを證を彼等聖徒の爲に施濟を共にせんおとを切に我儕に求め自ら願て其力量に依ひ且ろれ力量に過て施をおとをせり　五　如此おゐおひて我儕が望を成しのごならず神れ意旨に循ひ先己を主に獻へ次に我儕に獻たり　六　是故に我儕テトスが爲に爾曹をして此恩を行いしむる事を信ぜんおとを成就せんおとを彼に勸む　七　ゐんぢら凡れ勉勵および我儕に向ふ愛心に富る如く此恩にも富べし　八　我かく言い爾曹に命ずるに非ず然と他の人勵むに縁てあり且ゐんぢられ愛れ眞を試ごんが爲あり　九　爾曹われられ主イエスキリストれ恩を知おれい富る者ありしが爾曹れ爲に貧き者とあれり是ゐんぢらが彼れ窮乏に由て富る者とならん爲あり　十　われ施濟れ事おついて我が意を示せり是ゐんぢられ益あり蓋爾曹い他れ人に先ち此事を一年前より之を行いんおとを願へる者なれ也　十一　然ゐ今ゐんぢら其作とおろをが遂よ爾曹が爲く願しごとく其所有ゐ循て之を

庶遂べし　十二もし人ねがふ志あらば其有ところ
に從て受らるゝなり其無ところに從て納
給ふべしにあらず　十三われ他れ人を安逸して爾曹を困苦めんとするにあらず平均せんことを欲ふ爾曹れ餘ある
を以て爾曹れ不足ところを補ひ　十四亦のれら餘ある
を以て爾曹れ不足を補ひて平均せんがためなり　十五錄して多く斂る者も餘あ
らず少く斂る者も足ざる事あしと有がごとし　十六テトスれ心を照ひし神に謝そ
くれ蓋のき我がごとく勉を納のつ熱心ある者にし
て自ら願て爾曹に往り　十七亦わきら彼と偕に一人れ兄弟を遣せり此人い福
音をもて諸教會れ中に頌美を得たる者あり　十八第此のみならず我儕が主れ選
爾曹れ熱心を彰さんとて掌理とみろれ此餽物を携ふる爲ふ諸教會に選き
て我儕と偕に往もれ也　十九我儕れ彼を送しい前多れ餽物を掌理ふとにより
て自ら人に誇を受るあとあらん爲なり　二十我儕が如此そるい主れ前れみあ
らず人れ前にも善らんみとを慮るあり　二一我儕また一人れ兄弟を彼等と偕
に遣せりず儕志ぺ〳〵彼を多事に用あて其熱心あるを知のれ深く爾曹を
信ずるに緣て今殊に熱心にあるより　二二テトスれ事を言ば彼い我儕れ伴侶
り又われと偕に爾曹れ爲に勤る者あり二人れ兄弟等れあとを言ば彼等い
諸教會れ使者ありキリストれ榮あり是故に彼等と亦諸教會れ前ふ爾曹
ろの愛と我儕が爾曹ふついて誇しみとれ證とを顯すべし

第九章　聖徒ふ施す事ふついて我あんなちに書遣るふ及ず　一蓋わき爾曹の
熱心を知ばなり即ち爾曹の事をマケドニヤ人に誇りてアカヤい去年より
既に備をあせりと言り且あんぢらの熱心おほくの人を激せたり　二然と我
儕が爾曹に豫て誇りしみとの虛あらんことを恐を我が言し如く預曹をし
て備をあさしめん爲に兄弟等を遣せり　四恐くいまケドニヤ人われと偕に
來り爾曹が備せざるを見んとき爾曹ついふに及ず我儕まで此羞いず誇し
に因て愧を受ん　五是故に我兄弟を勸て先あんぢらに往しめ彼等をして襲
に爾曹が告し所の惠れみとを預しめ備しむるい必ず爲べきみとゝ意るゝ
なり蓋われ施濟をしむ心よりなさず惠む心より爲しめんとすき也　ろ

之を少く播者い少く穫おはく播者い多く穫べし　各人ろの心の中に徴ふ所に隨ひて施をべし愛て爲べからす亦强て爲べからす蓋神い喜ひて施をするものを愛し給へばあり　八神い凡の恩を多く行いしめん爲に諸の恩を多く爾曹に賜へ得あり　九錄して凡て善事を多く行わしめん爲に諸の恩を多く爾曹に賜へ得あり　九錄して彼い徧く施し亦貧者に予たり其義い窮あく存んとあるが如し　十播者に種を予へ食料爲にパンを備たまふ者い爾曹に種を繁衍し亦あんぢらの義の實を增給ふべし　十一あんぢら凡事に富たきむ吝あく施を行ふあとを得なり是人をして我儕に由て神に感謝せしむ　十二蓋斯役い聖徒の乏を補ふのをあらず猶ほ振ひ夥き人をして神に感謝せしむ　十三蓋斯役い聖徒の彼等い此施れ證據により爾曹が言現してキリストれ福音に從ふあとゝ吝あく彼等および衆の人に施するあとを知　十四また神れ爾曹に賜し厚恩に感て爾曹を慕ひ爾曹の爲に祈て禀を神に歸す　十五ろれ言盡されぬ神の賜物に因て我神に感謝する也

我パウロ卽ち爾曹の中に在て爾曹と面を覩するときい誰爲あんぢらを離るゝときい勇敢者いまキリストの柔和と寬容を以て爾曹に勸む　二我ら肉に徇ひて行と意ふ者あり我ふくの如き人を得ふにい更敢せんと意へり只ねゞふ所い爾曹に會と此の如く更敢せざらんあとをあり　三我儕い肉に在て行けども肉に徇ひて戰いず　四我わをらが戰の器い肉に屬する者に非ず營壘を破るほど神に由て能あり　五我儕い神の旨に違ひて迷たる所の諸の櫓と誠を毀し諸の意思を擄にしてキリストに服いしむ　六我あんぢら全く服んとき諸の違逆者を罰せんと既に其備をあせり○　七爾曹い說のゝを觀か若し人そづからキリストに屬るものと信ぜば復自ら之を思ふべし己がキリストに屬る如く我等もキリストに屬る者ありと　八主の我儕に賜ひし所の權威すあいち爾曹を敗る爲にあらず建ん爲に賜ひし者に切いて愈々誇るとも我愧と爲ず　九我あを言い書を以て爾曹を懼しむる如く見ざらん爲あり　十蓋られらの言に其書い重ろ切嚴く其會るときの

容ゐ懦く其言ゐ鄙と云ゞあり十一此の如き人ゐを思ふべし我儕が服逆と
きの書の言の嚴きが如く會ときに行ふ事も亦ゐくの如くあらん十二自ら量
る者あり我儕敢て之と匹ゐをせず然と彼等ミづから互に較るゐと
ミづから互に較をゞ智ゐき者ゐり十三我儕ゐ量を踰て誇らず惟神われらに
賜給ひし所の法の量に循ふ我儕ゐの量に循ひて爾曹にまで至れり十四我儕
ゐ爾曹ゐ至るべからざる者の如く自ら量を踰て爾曹に及るに非ず蓋キリ
ストの福音を傳て既に爾曹にまで至をゞ也十五我儕ゐ量を踰て他の人の功
勞を誇らず惟ゐんぢらが信仰いよ〳〵偉ありて我儕の量ゐんぢらの中に在
て更に大ゐらん事を望む十六是ゐら他の人の量ゐ由て既に備るものを
誇らず爾曹を越て外の處に福音を佈んが爲ゐり主を誇るべし
十七蓋ミづから譽るに非ずして主の譽るもの可と爲るれゞ也

第十一章

願くゐ爾曹少しく我が愚を容よ爾曹之原より我を容る者ありロ
われ神の熱心れ如き熱心をもて爾曹を念ふ我ゐんぢらを一人れ夫に聘定
せり是なんぢらを潔き女としてキリストに献んとする也三蛇れ詭詐にエ
バの惑されし如く爾曹の心嬢はれてキリストゐ向ふの誠實を failん事を我
儕懼るロ四もし人きたりて我儕が未だ宣さる外のイエスを宣んに爾曹ある
ひい未だ受ざる外の靈をうけ或い未だ受ざる外の福音を受るときい爾曹
能ゐきを容ん五我い何事にも尤も大ゐる使徒等に亞ずと意ふあり六我い
言ゐ拙けれども智識い然らず我儕の事い凡の事ゐついて爾曹に皎明あり
七われ爾曹を高せんが爲に自ら卑りて僞あしに神の福音を爾曹ゐ傳しい
罪を犯したる乎八わ他の教會より奪ひて給料を取ゐんぢらの爲ゐ役た
り九又われ爾曹の中に在て乏かりしとき誰をも累せざりき蓋マケドニヤ
より來りし兄弟わが乏き所を補ひたれ也すべての事に於て我ミづから
守て爾曹を累せざりき倘ミづから守らんとす十我に在キリストの眞に從
ひて我いふ我ゐの誇る所のゐとをアカヤの地ゐて阻る者あらじ十一ゐれ何
故ぞや爾曹を愛せざるに因ゥ神知たまへり十二われ機を求る者の機を絕ん

ために我が行ふ所をも行わんとす是彼等をして其誇るところを
おらしめん爲なり　十三 かの譯い僞の使徒また詭譯を行ふ者にしてキリスト
の使徒の貌に變じたる者なり　十四 あやしき事に非ずサタンも自ら光明の
使の貌に變ずるなり　十五 是故に彼の役者たとひ義の役者の貌を變ずるとも
大なる事に非ず彼等の終は必ずうの爲とおろかに應べし　十六 又いふ人われを
愚と思ふ勿れ然らずも愚者とを思ふ者として受納よ思われも少しく
誇らん爲なり　十七 わが言ところ非ず愚ある者の如く憚らず誇て言ふなり　十八 多くの人肉に因て誇れた我も亦誇るべし　十九 うい開曹い智
ある者ゐして喜びて愚ある者を容れたるなり　二十 人もし開曹を奴隸とし人も
し開曹を喫ひ人もし開曹を劫め人もし開曹を騙り人もし開曹の面を批と
も開曹あれを容るなり　二一 われ辱て言わをらい懦弱者の如くなりき然と人の
强き所あれ我も亦强し（わが此如いふい愚あるが如し）　二二 彼等ヘブル人なる
か我も然り彼等イスラエルの人なるか我も然り彼等アブラハムの裔なる
乎われも然り　二三 彼等キリストの役者なるか我い之に愈れり（わが如此いふ
い狂る者の如し）われ勞苦しみと彼等より多く獄たをしみと彼等より夥し
く獄に入をらるふみと多く死に遭ふみと　二四 屢々（ふり）又わをい五次ユダヤ人
に四十に一を減じたる鞭を受　二五 三たび條にて撲れ一次石わて擊れ三たび
破船ふあひ一晝夜海にあり　二六 又しばしば旅路を經かつ河の難盜賊の難同
族の難異邦人の難城裏の難野の中の難海中の難僞の兄弟の中の難わ遭り
二七 なた彼等に愈て勞苦辛かきを屢々寢ず飢渴志を〳〵食を絕ち凍裸ありし
也　二八 此に言ざる外の事ありて日々我に迫る即ち諸の教會の憂慮あり　二九 誰
か弱て我弱ざらんや誰か礙て我が心熱せざらん乎　三十 もし我かみらず誇る
べくば我が弱てとを誇るべし　三一 永遠頌べき神主イエスキリストの父わが
誰らざるを知たまふ　三二 ダマスコに於てアレタ王に屬る邑宰われを執へん
として　三三 ダマスコ人の邑を守れり　三四 われ籠を以て扉より石垣にろひ縋下さ
れて彼の手を脫れたり

第十二章

わが誇い固より益あし今いま主の顯現と默示に及たん 二我キリストにある一人のものを知り此人十四年前わ挙へられて第三の天わ至る（或い肉體に在しか我志らず或い肉體の外に在しか我志らず神知たまふ）三我この人を知る（かれ或い肉體に在しか或い肉體の外に在しか我志らず神知たまふ）四かれ樂園わ至り言べからざる言即ち人の語るまじき言を聞り 五我かくの如き人の爲に誇るべし我が弱あとの外い自ら誇らず 六我もし自ら誇らんとするとも愚ある者とあらず蓋眞を言たるべし然ども人の我わ見とみろ或い我わ聞ところわ過て我を揖んことを恐るゝわ因て誇るみどを止べし 七また賜りし多れ默示に因て我が傲ることなからん爲わ一ツの刺を我が肉體わ予ふ即ち我が傲ることなからん爲に我を擾サタンの使者あり 八我これが爲わ三次主に之を求より離んことを求たり 九我わ言給ひけるい我が恩みんなに足り蓋わが能い弱わ於て全あれた也この故わ寧ろ欣ひて自己の弱わ誇らん是キリストの能われわ寓らん爲あり 十之わ因て我キリストの爲に憊弱と凌辱と空乏と迫害と患難わ遇を樂みとせり蓋われ弱き時に強けき也 十一われ誇るに因て愚なる者とあれり爾曹われを强て如此あせり蓋われ取に足ざる者なるとも凡の事もつとも大ある使徒わ亞らず原より爾曹わ證らるべき者あれを也 十二われ休徴と奇蹟と妙用をもて爾曹の中に多く忍びて使徒の證をあらせり 十三我が爾曹を累いせざる事ゝ対い爾曹他の教會に何の亞る所かある願くい我この不義を恕せ 十四われ今第三次あんぢらに至らんとて備せり又爾曹の所有を求めず唯あんぢらを求ん子い親れ爲に積ふべき者に非ず親い子の爲に積ふべき者あり 十五我いよ〳〵爾曹を愛すをも愈爾曹に愛せらきず然と欣びて爾曹の靈魂の爲に財を費し身を盡すべし 十六然と或人言ん我あんぢらを累せざるい巧ある者なるにより詭計を以て爾曹を牢籠るありと 十七われ爾曹に遣しゝ者れ中の誰に由て爾曹より利を得しやわれ請てテトスを爾曹に遣し又ひとを偕に我儕の兄弟をも遣せりテ

トス爾曹より利を得し乎わきら同心にて行さりし乎○
十八爾曹また我儕みづから爾曹に懇するを意ふや我キリストに在て神の前
にいふ愛する者よ我儕れ行ふ所い皆爾曹の徳を建ん爲あり　我いたらん
時われ爾曹を見に我ダ欲し如くあらず爾曹ダ我を見にも爾曹の欲し如くあ
らさらんあとを恐また爭鬪嫉忌怒爭ひ分るまゝと毀謗讒言驕矜混亂あ
との有んことを恐る　二又わが再び至らん時わが神我をして爾曹れ中に愧
しめ給いんあとを恐また我はばくの人れ罪を犯て其行ひし所の汚穢姦淫
放肆あとの事を悔改めさるを見て褒んてとを恐る

第十三章

我いま第三次あんちらに至らん二人あるひい三人の證人の口に
凡の事定るべし　二我さきに爾曹に告たり我第二次あんちらに覿しと
き語りし如く罪を犯しゝ者と其餘の人々に今また預じめ喩進て告われ復
いたらむ必ず恕さじ　三是あんちらキリストの我に在て語る徴を求るに因
てあり彼い爾曹に向て弱くらず爾曹の中に強あり　四あれ弱に由て十字架
に釘らきたれと神の能に由て生たり我儕も彼に在て弱者あれと爾曹に向
ふ神れ能に由て彼と偕に生ん　五なんぢら信仰に居や否や自ら省ミ自ら試
むべし爾曹もし棄らるゝ者ならずばイエスキリスト爾曹の中にあり之を
自ら知さらん乎　六されら棄らるゝ者に非さるを爾曹知んあとを我のア
む　七我儕なんぢら少も惡を行はさらんみとを神に願ふ此われらの是な
るみとを彰すに非ず我儕棄らるゝ者の如く見るも爾曹ダ善を行はんあと
を願ふなり　八蓋われら眞理に逆ひて能なし眞理に順ひて能あれを也わ
れら弱して爾曹強ときい我喜ぶ我儕願ふ所い爾曹れ全あらん事なり　十是
故に我暌違てあるとき此を書遣る是あんちらに諺んとき主の我に賜ひし
権威すあてち敗る爲に非ず建る爲に賜ひし者に循ひて嚴く爾曹を待ふみ
と無らん爲あり　十一此外また言ん兄弟よ爾曹喜び且全あり且慰め且心を同
うし且和睦あとをせよ然らた愛と平安の神なんぢらと偕に在ん　十二あんぢ
ら潔き接吻をもて互に相問べし　十三諸れ聖徒なんぢらを安を問り　願くわ

主イエスキリストの恩と神の愛と聖靈の交際あんぢら衆と偕に在んあと
をアーメン

新約全書哥林多後書　終

新約全書使徒パウロがラテヤ人に贈れる書

第一章

一 人よりに非ず又人に由ずイエスキリストと彼を死より甦らしよ父
二 ある神に由て立られたる使徒パウロ及び我と偕に在すべて兄弟がヲ
三 テヤの諸教會に書を達る　なんぢら願くは父ある神われよび我儕の主イエ
四 スキリストより恩寵と平康を受よ　キリストは我儕の父ある神れ旨に循
五 ひ今の悪世より我儕を救出さんとて我儕の罪の爲に己が身を捨たまへり
六 願くは榮彼に歸して世々に至れアーメン○　キリストの恩をもて爾曹
七 を召たる者を爾曹が如此すみやかに離れて異なる福音に遷し事を我怪し
八 む　此は福音に非ず或人たゞ爾曹を擾しキリストの福音を更んとする也
九 我儕おもせよ天よりの使者にもせよ若われらが曾て爾曹に傳し所に逆
十 ふ福音を爾曹に傳る者は詛るべし　我儕既に言しが今また我ろの如く言
　 ん若なんぢらが受し所に逆ふ福音を爾曹に傳る者は詛るべし　十　今われ人
　 の親を得んあとを要るや神の親を得んあとを要るや或は人の心を得んて

とを求ふや若われ人の心を得んことを求いやキリストの僕に非ざるべし
○十一兄弟よ我なんぢらに示す我曾て爾曹に傳へし所の福音は人より出るに
非ず十二蓋われ之を人より受ず亦教られず惟イエスキリストの默示に由て
受たれを也十三わが曾にユダヤ教に在しとき行ひたる事を爾曹聞り即ち甚
しく神の教會を窘かつ之を殘賊せり十四我また心を人よりも先祖等の遺傳
に熱しユダヤ教に在て我が國人のうち年相若れはくの人に超りたり十五
然ども我が母の胎を出し時より我を簡びおき恩をもて我を召給ひし神十六
己等を樂しもの今いま其前に據さんとしたる信仰ひ道を宣傳ふと聞十七
我事に因て神を崇るおとを爲り
第二章　十四年の後われバルナバと偕にテトスを伴ひて亦エルサレムに上
一わが上りしは默示に依へるあり異邦人の中ゐ於て我が宣し所の福音
二を彼等に告また私に名ある人等に之を告たり蓋いま勤る所また既に勤め
し所の事は徒然あらざらんが爲あり三然るにあは弟テトスいギリシャ人
なるに因てあり彼等は私に入しい我僞が自由を窺ひ我儕を奴隸とせんが爲
四に割禮を受させざりき五われら一時も之に服そるおとをせず此いい福音の眞つねに爾曹と偕に在んおとを望めばなり
六名ある者より我いい受しおとあし彼等いい何ある人なるにもせよ我に於て與る所あし
神いい偏る者に非ず彼れ名ある者われに詞を加しおを無あり反て彼等

ペテロが割禮を受たる者に福音を傳るまとを託られしが如く我が割禮を受ざる者に福音を傳るまとを託られしを見（ペテロに能力を予て割禮を受たる人れ使徒と爲し者また我にも能力を予て異邦人の使徒と爲り）また我に賜し所の恩を知しにより杜と意るヤコブ、ケパヨハネ子も其右手をを予て我とバルナバに交を結べり是われらい異邦人に至り彼等い割禮を受たる者に至らん爲あり、十彼等の惟ねが貧民を眷顧んてとするふ所い我傾が亦あれ事い素より進んで爲んとする所あり、十一ペテロアンテオケに至りしとき彼に責べき所ありしに因われ當面みを詰めたり、十二蓋ヤコブより來る者の未だ至らざる前にいペテロ異邦人と同に食したれとも彼等が至るに及て割禮を受たる者を懼れ退きて異邦人と別たれど也、十三うれ餘れニダヤ人も彼と偕お偽の行をなしバルナバも遂に其偽の行に誘をたり、十四我のきらが福音の眞に遵ひ正く行いざるを見すべての人の前に於てペテロに曰けるい爾ユダヤ人にして若し異邦人の如く行ひユダヤ人の如く行はざるときい何ぞ異邦人を強てユダヤ人の例に遵いせんと爲や、十五—十六

われらい生來のユダヤ人にして異邦より出たる罪人に非ず、十五然と人の義とせらるゝい律法の行に由に非ず惟イエスキリストを信するに由あるを知ての故に我傾も律法の行に由ずキリスト爲にイエスキリストを信ず蓋律法の行に由て義とせられん事を欲ひるは罪人あらたキリスト、十七若われらキリストに由て義とせられん事を求るとき我が先に罪の僕あるか決て然らず、十八我が夕先に毀し此ものを今もし復び建るは自ら其罪人なるを顯すあり、十九われ律法に由て律法に死り是神に由て生ん爲あり、二十我キリストと偕に十字架に釘られたり既に我生るに非ずキリスト我に在て生るあり今われ肉體に在て生るい我を愛して我が爲に己を捨し者すあいち神の子を信ずるに由て生るあり、二一我い神の恩を徒然せず若し義とせらるゝあと律法に由たキリストの死い徒然ある業あり

第三章　思ある彼すでにイエスキリストの十字架に釘らきし事を明かに其

目前に著さゞたるがラテヤ人よ誰が爾曹を詐かしゝ乎　二我
曹より聞んとす爾曹が靈を受しは律法を行ふに由か將きゝて信ぜしに由
三か　爾曹かく愚ある乎　靈に因て始り今肉に因て全うせらるゝ乎
四　あんぢら如此おほくの苦を徒然に受しや實に徒然には有まじ
五　爾曹に靈を予へかつ奇蹟を行わしめ給ふ者の如此ある
ふに由てある乎　又たれ聞て信ぜしに由てある乎　即ちアブラハム神を信
六じ其信仰を義と爲をたるが如し　七是故お信仰による者は是アブラハムの
子ありと爾曹知べし　八かつ聖書すでお信仰お由て神の異邦人を義と爲給
ふことを預じめ曉まづ福音をアブラハムお傳て諸國の民は爾お由て福を
獲んと云り　九是故に信仰に由もの信仰ありしアブラハムと偕に福を受
十凡そ律法の行お由ものは詛るべし蓋律法の書に載たる凡のことを恒お行
いさる者は詛ると錄されたれをも　十一かつ義人は信仰に由て生べしと有を
律法お由て神の前に義とせらるゝ者あきことは明かあり　十二ろを律法は信
仰お由ず即ち曰ふをを行ふ者は之お由て生べしと　十三キリスト既に我儕の
爲に詛はるゝ者となりて我儕を贖ひ律法の詛より脫しめ給へり蓋すべて
木に懸る者は詛れし者なりと錄されたれをも　十四是アブラハムに約束し給
ひし恩惠はイエスキリストに由て異邦人にまで及び我儕にも信仰に由て
約束の靈を受しめん爲あり　十五兄弟よ我いま人の事に由て曰ん人の契約だに
既に定れたをこれを廢また加ふることあしうれ約束はアブラハムと其裔と
に立給ひし者にして多の人を指て裔と言るに非ず惟一人を指て爾の裔と
言る也あれ即ちキリストあり　十七我これを言ん神の預じめ定給ひし契約は
四百三十年のちの律法あれを遮て約束を廢ろの約束の言を徒然するとをせざる也
十八嗣業と爲あと若し律法に由ば約束に由ざるべし然と神は約束に由て
之をアブラハムに賜へり　十九然らば律法の用は何ぞや此は約束を受べき
裔の來るまで罪の爲に加へし者にて天使等により中保の手に備へ給ひし
也　二十中保は一人に屬る者に非ず神は即ち一人あり　二一然らば律法は神

の約束に反るや決て非ず若し人を生しうる律法を賜りしあらば義とせら
るゝ事必ず律法に由べし　二二然ども聖書い反て萬人を罪の下に拘幽たり此
いイエスキリストを信ずる事由る約束のものを諸〳〵の信者お賜らんが爲あ
り　二三信仰の來らざる先には我儕律法の下お拘幽られ且守れて其顯れんと
する信仰を俟り　二四ゆゑ律法い我儕をして信仰お由て義とせらるゝ事を得
しめんが爲お我儕をキリストお導く師傅とあれり　二五然ども今信仰すでお
來たれば我儕もはや師傅の下おおらず　二六爾曹い皆キリストイエスを信ず
るに由て神の子とあれり　二七凡うバプテスマを受てキリストに入る爾
曹いキリストを衣たる者あれば　二八也　猶太人ギリシヤ人あるひい奴隷あるひい自主あ
ら皆キリストイエスに在て一あれば　二九也　若あんぢらキリストに屬する者
あらば爾曹いアブラハムの裔すあはち約束に循ひて嗣子たる也

第四章　我いはん嗣子たる者い全業の主あれども其童蒙の時い僕に異ある
なし　二父の定し期いたるまで受託者および家宰の下に在　三此れ如く
我儕も童蒙の時い此世の小學れ下に在て僕たる也　四然ども期すでに至る
に及びて神ろの子を遣し給へり彼い女より生れ且律法れ下に服したり　五
あを律法れ下にある者を贖ひ我儕をして子たることを得しめんが爲なり
六且なんぢら既に子たることを得しが故に神ろの子れ靈を爾曹れ心に遣
りアバ父と呼しむ　七是故に爾いもはや僕にあらず子なり既お子ならお亦神
お由て嗣子たる也　八然ども爾曹神を識ざりし時い其實神お非ざる者に事
て僕たりき　九然ども爾曹いま神を識り反て神に識をたりと謂べし何ぞ弱
く賤き小學に返りて復び之が僕たらんてとを欲ふや　十なんぢら愼て月と
日と節と歲とを守る　十一われ爾曹お就て危む恐くい爾曹れ爲お我が勤めし
事の徒然ならんてとを　十二兄弟よ願くい爾曹わが如くなれ蓋われ爾曹の
如なりたれを也なんぢらい我を害せしことなし　十三爰に我よわき身にして
爾曹に福音を傳しおとい爾曹れ知とおろ也　十四爾曹を試る者れ我が身に在

しを爾曹に卑めず亦厭ず反て天使の如くキリストイエスの如くに我を待ひたり　一五爾曹ら嘗時幸福を何如ありしや爾曹をつおらの目を抉て我に予んとまで願たり　一六然るに我あんぢらに眞理を語りしに縁て我あんぢらの仇となりしや　一七彼等が爾曹を熱心あるい善意に非ず爾曹を己に熱心ならしめんとて爾曹を離しめんとする也　一八然と唯已が爾曹と偕ある時ばかりを善事の爲に常に熱心あるい宜きなり　一九我が小子よ我あんぢらの心をキリストの狀成までい復び爾曹の爲に産の勞をおそ　二〇我いま爾曹と偕ゐ在て口調を改めんあとを欲ふ蓋已に爾曹に於て惑ばなり○　二一なんぢら律法ゐ在んあとを欲ふ者よ我ゐ語れ爾曹律法を聞ざる乎　二二錄してアブラハムゐ二人の子あり一人い婢より一人い自主れ婢より生たりと有　二三ゐれ肉より生れし者い肉ゐ循ひ自主れ婦より生しし者い約束ゐ因て生をたる也　二四是喩あれ言い喩ゐして即ち此婦い二ヶ契約ゐ此ふべし一ヶいシナイ山より出て子を奴隷ゐ生あを即ちハガル

あり　二五此ハガルいアラビヤれシナイ山今れエルサレムゐ當るあり蓋その其諸子と偕ゐ奴隷たをを也　二六然と上ゐ在とあろれエルサレムい自主ゐして是皇れられ母あり　二七ろい錄して姙ず生ざる者よ歡を揚て呼を寡居る者れ子い夫ある者より子多ゐ故ありと有るあり　二八兄弟よ我儕いイサクれ如く約束れ子あり　二九然とも當時れ肉ゐ循ひて生しもれ靈ゐ循ひて生れし者を窘し如く今も亦然り　三〇然と聖書い何と言るや婢ゐよび其子を逐ろい婢れ子い自主れ婦れ子と共ゐ嗣子とある可らざをを也と言り　三一兄弟よ此の如あれを我儕い婢れ子ゐ非ず此自主れ婦れ子あり

第五章

イエスキリスト我儕を釋て自由を得させたり是故ゐ爾曹堅立て復び奴隷れ軛ゐ繋るう勿を　二我パウロ爾曹ゐいふ爾曹もし割禮を受ゐをゝリストト更ゐ爾曹ゐ益なし　三我また割禮を受たる各ゃれ人ゐ就て證す其人い全き律法を行ふべき者なり　四あんぢら律法を

リストと與りおく思より墮たる者あり　五わをら望む所れも𤍠即ち信仰を以て義とせらるゝまゝとを靈ゐ由て俟あり　六キリストイエスわ在ていわ割禮を受るも受ざるも益おく惟愛ゐ由て行く所れ信仰れみ益あり　七みんな善走りたり誰ゲ爾曹の眞理に循いさるやう阻るまゝとを爲しや　八ろれ勸いわ爾曹を召者より出るわ非ず　九少許の麪酵いわ全團をミゐ發しむ　十爾曹わ就ていわ我あんぢらゲ少しも異念を懷ざるまゝとを主に由て信ず誰わ　十一ても爾曹を煩いす者いわ其審判を受べし　十二兄弟よ我もし今も尚割禮を宣ゑ何ケ窕ちるゝ事あらん乎もし然せむ既や十字架わ礙くみとを止べし　十三爾曹を亂す者れ自ら爾曹より離んまとを願ふ　十四ろれ兄弟よ爾曹いわ召を蒙りて自由を得たる者あをを也さゝと其自由を機會として肉わ循ふ勿を惟愛を以て互わ事るてとを爲よ　十五ろれ己の如く爾の隣を愛すべしと曰る此一言すべての律法を全うする也　十六あんぢら愼よ若たゲひわ呑噬いゐ恐くい互に滅されん○　十七われ謂あんぢら靈わ由て行むべし然を肉の慾を成

ゐと莫らん　十七ろい肉の慾い靈わ逆ひ靈の慾い肉わ逆ひ此二のもの互に相敵る是故に爾曹好む所の事をゐそきい律法の下に在ざるべし　十八ろれ肉の行い顯著あり即ち苟合汚穢好色偶像に事るゐと巫術仇恨爭鬪妬忌忿怒分爭紀黨異端　二十一媚嫉兇殺醉酒放蕩ゐとの如し此等の事につき我曾て爾曹わ斯る事をあす者い神國を嗣べからずと告しろの如く今また預しめ之を告　二十二靈の結ぶ所の果い仁愛喜樂平和忍耐慈悲眞善忠信　二十三溫柔撿節かくの如き類を禁ずる律法いある事あし　二十四夫キリストわ屬する者い肉と其情および慾とを十字架に釘たり　二十五若われら靈に由て生あを亦靈に由て行むべし　二十六互に忿たゲひに強むてとを爲て虛榮を求る勿れ

第六章　一兄弟よ若はからずも過に陷る者あらを爾曹のうち靈に感したる者柔和なる心をもて之を規正べし亦自已をも顧みよ恐くい爾誘るゝまゝとあらんニ　二あんぢら彼此の勞を任へ斯してキリストの律法を全すべし　三人もし

有ぁるとぉくして自ら有とせば是ミづから欺くるり　四各人うの行とぉろを勘へ視よ如此せば誇る基いたゝ己に在て人に在ず　五ろい人ぉの〳〵其荷を負べければ也　然と道を教らるゝ者い道を教る者に凡て有益ぁる物を分予ふべし　七自ら欺く勿れ神い慢るべき者に非ず蓋人の種ところの者い亦ろの穢とぉろと爲ぁり　八己ダ肉のために種ものい肉より朽壞もれを穫とり靈のために種ものい靈より永生をぉ穫とるべし　九善を行ふに懈する勿れ蓋もし倦ぉとぉくば我倘時に至りて穫取べければ也　十是故ぁ若し機會ぁらば衆の凡に善を行べし信仰の徒にい別て之を行べし○　十一爾曹ダ親手ぁんぢらに書遣る字の何に大なるかを見よ　十二凡ろ肉について美しくらんぁとを欲ふ者い爾曹に割禮を強ふ是たゞ己キリストの十字架の爲に窘らるゝぁとを免とんダ爲ぁり　十三ろい割禮をうけたる彼等ぁは自ら律法を守るぁとをせず彼等ダ爾曹に割禮を受させんとそるい爾曹れ肉に於て誇らんと欲ふなり　十四然と我にい催わきらけ主イエスキリストれ十字架の外ぁ誇る所ぁからんぁとを願ふ此キリストに由て我世に向へば世い十字架に釘られ世の我に向ふも亦然り　十五夫イエスキリストに於ていい割禮を受るも受ざるも益ぁく唯新に作きし者のミ益ぁり　十六凡ろ此規矩に循ひて行む者に願くい平康と恩惠とぁを神のイスラエルにも亦然れ　十七今よりのち誰も我を擾いそ勿れ蓋われ身にイエスの印記を佩たを也　十八兄弟よ願くい我儕の主イエスキリストれ恩ぁんぢらの靈と偕ぁらんぁとをアーメン

新約全書加拉太書終

新約全書　使徒パウロエペソ人ゝ贈れる書

第壹章

一　神の旨ゝ由てイエスキリストの使徒と爲るパウロエペソゝゐる聖徒ゝおよびイエスキリストゝ在て信ずる者ゝ書を贈る　二願くゝ我儕の父ゝる神ゝおよび主イエスキリストより恩寵と平康を受よ〇　三神即ち我儕の主イエスキリストの父ゝ頌べきうな彼キリストゝ由て諸の靈の恩を以て天の處ゝて我儕を己ゝ恵みたり　四ゑれ神我儕をして其前ゝ聖く疵みゝらしめん爲ゝ世基を置ざりし先より我儕をキリストの中ゝ揀び　五うの意のまゝイエスキリストゝ由て我儕を己の子と爲んことを愛を以て預じめ定たり　六うの恩の榮を譽しめんため也すゑいち愛する者ゝ在われらゝ賜ふ所の恩ゝり　七うの恩の豐ゝるゝ由て彼ゝある我儕うの血ゝより贖すなゐち罪の赦を得ゝり　八神さまゝ〳〵の智慧と聰明を予へて此恩を我儕ゝ充しめ　九我儕ゝ其旨の奥義を意のまゝよゝ示せり　十ゑれ自ら定め給ひし所なり即ち期の滿るときゝ至りて或い天ゝ在ゐるひい地にある萬物をキリスト

に歸せしめんが爲め定め給ひし所なり　十一すべての事を其意のまゝに行ふ者の
れの旨に循ひて預じめ我儕を定めキリストに在て嗣子と爲ることを得しむ
十二　あれ前にキリストを頼める我儕をして彼の榮の讃美らるゝ事を爲しめ
んため也　十三爾曹も眞の道すなわち爾曹を救ふ福音を聞し後キリストを信
じ我儕が業を嗣の質ある約束の聖靈を以て印せらる　十四神聖靈をもて印し
たまふは其贖受し者を救ひ且おのれの榮を顯さんため也　十五是故に我も爾
曹が主イエスを信ずることと諸の聖徒を愛することを聞て　十六爾曹の爲に
感謝して已ず常に我が祈禱のとき爾曹を懷ふ　十七我儕の主イエスキリスト
の神榮れ父智慧と默示とを爾曹に賜ひ爾曹をして神を識しめ　十八また爾
曹れ心の目を明にし其召を蒙りて有つ所の望と聖徒に賜ふ所れ業の榮
れ富と　十九また信ずる爾曹に對して行ひ給ふ神の能れ極て大なるあとを知
しめ給はんことを願ふ爾曹の信ずる　二十即
ちキリストに行ひし所にして彼を死より甦らせ諸の政と權威と能力と宰

治また此世のみならず來らんとする世にも凡て稱ふる所の名の上に置き
天の處にて已の右に坐せしめし能なり　二一切の物を彼の足下に置ま
た彼を一切の物の上に首となし此を敎會に賜ひて其首と爲り　二三敎會れ彼
の身體なり其物を以て萬物に滿しむる者の滿る所なり

第二章　二神れ愆と罪に死し所の爾曹曾て斯世の風俗に
循ひ彼の空中にある諸權を總宰とる者すなわち不信に從ふさる者の中に今はたらく所の靈に循へり　三我儕もみな曾て
其中におり肉と心の慾に循ひて日を送り肉と心の慾ふ任をなし他人の如く本
性にして怒の子なりき　四然るに矜憐れ富る神われらを愛する所の大なる
愛に緣　五罪に死し時にすら我儕をキリストと偕に生しへ（恩由て
救れし也）　六又イエスキリストに在わきらを彼と偕に甦らせ共に天の處に
坐せしめ給へり　七ゐを今より後の世々キリストイエスの中にて我儕に施
す所の仁慈をもて其恩の勝て豐なるあとを顯さん爲なり　八それ恩由

而て救を得ゐれ信仰ゐ由てゐり巳ゐ由に非ず神の賜ゐりなり
此の如ゐるゐ誇る者ゐゝらん爲ゐりなり　十我儕ゐ神の造り給へる者ゐり即ち
我儕をして善事を行はしめん爲ゐキリストイエスの中ゐ造り給へり此事
ゐ神わきらゐ行ゐせんとて預しめ備へ給ひし所ゐり○　十一是故ゐ爾曹心ゐ
憶よ肉に由て異邦人ゐる爾曹手を以て肉に行へる割禮の者に不割禮と稱
られし者ゐれゞ　十二其時ゐ爾曹キリスト無イスラエルの籍に非ざる異邦人
にして夫の約束について結び給ひし契約に與りゐく望ゐく又世に在て神
ゐき者ゐりき　十三然とも今ゐキリストイエスに在ゞ曩に遠かりし爾曹イエ
スの血に由て近けり　十四彼ゐ我儕の和なり二者を一とゐし　十五彼ゐ仇とゐる隔の
籬を毀ち律法の中に命ずる所の法を其肉體にて廢せり蓋二者を巳に聯ね
之を一の新しき人に造りて和ゞしめ　十六また十字架を以て冤仇を滅し又て
れを以て二者を一體とゐして神と和ゞしめん爲ゐり　十七又ゐれ來りて福音
を傳へ爾曹遠かりし者ゐよび近き者にも和平を宣たり　十八うを彼ゐ由て我

儕二者一の靈ゐ在て父ゐ近く事を得ゐり　十九是故ゐ爾曹今より寄寓者ゐ非ず
亦寄寓者ゐ非ず聖徒と同じ邦また神れ家ゐ屬する者ゐり　二十且ゐんちら使
徒と預言者の基れ上ゐ建らるイエスキリスト自ら其隅の首石とゐをり　二一
全屋みな拼合て彼の中ゐ在やよゐ增て聖殿主の中ゐ成なり　二二爾曹も偕ゐ
彼れ中ゐ建らきたり是靈ゐ由て神の居給ふ處とゐるべき爲ゐり

第三章　是故ゐ爾曹異邦人の爲ゐキリストイエスの囚人とゐをる我パウロ
爾曹れ爲ゐ祈る　二爾曹れ爲ゐ神の我ゐ賜ひし恩い爾曹すでゐ聞しゐらん
即ち默示をもて奧義を我に示せるゐり　三我はゞ前ゐ錄せる如し　四爾曹ゐ
をを讀ゐ之ゐ由て我キリストれ奧義を曉るゐとを知べし　五前代ゐ之を
人ゐ知しめしい今靈を以て聖使徒と預言者ゐ示ゐ如ならざりきゐれ
奧義い即ち異邦人福音ゐ由キリストイエスゐ在て同ゐ嗣子となり同に一
躰とゐり也　六わを神の恩賜するゐいち其能れ感
動を以て我に賜ひし恩によりて此福音れ役者とゐをり　七諸れ聖徒れ中に

最微者よりも微き我に此恩を賜ひて測るべと能はざるキリストの富を異邦人に傳へ　且イエスキリストを以て萬物を造りし神の中に世の始より以來のくされたる奥義如何を衆の人に悟らしむ　また教會を以て天の處にある政を執る者と權威を有る者に神の萬殊の智慧を知しめん爲なり　此エスの由て成就せり　十一我儕キリストイエスの在て之を信ずるより膽せざるあとを得また憚るあとなくして神の近くことを得たり　十三是故に我あんぢらの爲に受る患難あより怯ること勿れ此あんぢらの榮あり　十四此に緣て我儕の主イエスキリストの父即ち天と地にある諸族の彼に由て名を得し者の父に跪きて　十五願ふ其榮の富に循ひ其靈をもて爾曹の裏の人を剛健にし　十六又キリストをして信仰に由て爾曹の心に居しめまた爾曹をして愛に根し愛を基として　十七諸の聖徒と偕に濶さ長さ深さ高さを識らしめ又ゑべて神に滿るもとを知ること愛を知ろ　十八十九願くは爾曹あ滿しめ給はんことを也　二十願くは我儕の裏に行ふ能力あ循ひて我儕の求るところ思ふ所よりも甚く過れる事を行得る者あ　二一キリストイエスあより教會と中あて世々窮なく榮を歸せんあとをアーメン

第四章　然きが主あ在て囚人となる我あんぢらあ勸あんぢら召をし召あ稱て行ふべきあとを　二悉く謙遜と柔和あ忍び　三平和といふ聯れ中あ務て靈一體あり一あり爾曹れ召をて有ゐ所れ望の一あるが如し　四主一信仰一バプテスマ一　五神すべはち萬人の父一あり彼あ萬人の上あわり萬人あ貫き萬人の中あ在　六われら各人あキリストの賜ふ所れ量あ循ひて恩を賜ふるより　七是故あ云るあと有あれ上あ昇しとき擄あをる者を擄あし賜を人あ給へりと　八已あ上あ昇れりと謂ゐ先地れ下あ降りしあ非ずや　九降りし者いと即ち諸れ天れ上あ昇りし者なり彼よろづれ物あ滿んとすい使徒あり預言者あり傳道者あり牧師あり教師あり　十二聖徒を全うし

服役の事を行ひキリストの體の德を建　我儕をして皆おなじく神れ子を
信じ之を知り全人そあいちキリスト
れち嬰兒ならず人の詭譎の術と誘惑れ巧ふ蕩漾さるゝみとなく各樣の
教の風ふ搖動されず　愛をもて眞理を行ひ長て凡れおと首なるキリスト
ふ效しめん爲あり　彼を本とし全體すべての百節れ助ふよりて聯絡葦固
ろの肢體おの〳〵分量ふ循ひ方行て其体を育みづから愛ふ山て德を建る
あり○　是故に我みをを言ひ主ふ在て爾曹を戒む爾曹今よりれち異邦人
の如く其心の邪曲みるに任せて行ふべからず　彼等い恥を知ず好て凡
とみろ無ふより頑あるふ因て神れ生ふ違かれり　然と爾曹い此の如く行いん爲にキ
の汚を行ん爲に巳を放蕩ふ付せり　リストを學べるに非ず　爾曹のをふ聞かれの教を受てイエスにある眞理
を知しめらん　あんぢら夙に習る者人そあはち人を惑わす慾れ爲に壞ら
るゝものを脫　また爾曹の心の靈を新にし　神に象りて眞理の義と潔に

て造る新人を衣るべし　期て謊言を去おの〳〵其隣に眞を言べし蓋わ
きら互に肢あれた也　怒て罪を犯そみと勿れ　怒て日の入までふ至ること
勿れ　惡魔に處を得さするみと勿れ　竊をる者復ぬすみを爲ゐかえ寧ろ貧者ふ施さんためふ勵て手づから善工を作べし　凡て汚たる言を爾曹
の口より出すみと勿れ惟時ふ從ひて人の德を建べき善事をいひ聽者をし
て益あらしむべし　神の聖靈をして愛しむるみと勿れ爾曹救を得る日の
爲ふ彼の印を受し者あり　爾曹すべての很毒悲憾忿怒喧嚷謗讀また諸の
惡を己より去べし　互ふ仁慈と憐恤あるべしキリストに在て神ふんちら
を赦し給へる如く爾曹も互ふ赦すべし

第五章　ふんぢら愛せらるゝ兒女の如く神に效ふべし　また愛を以て行ひ
キリストの我儕を愛し我儕ふ代て己を禮物とふし犧牲とふして神の前ふ
香ふらしめんとて獻給ひしが如そべし　聖徒たるふ符ふごとく奸淫
および凡の汚穢たる事また貪婪ことを互に言みとだに爲勿れ　淫辭と浮

言と猥褻を言あられ是宜らざる事あり寧ろ謝するあとをそべし　五蓋す
べて姦淫そるもの汚穢たる者および貪婪者すあいち偶像を拝む者のキリ
ストと神との國を嗣を得ざることい爾曹知ばあり　六あんぢら人の虚言お
欺かるゝあと勿れ神の怒あをらの事に因て背逆者お至るあり　七是故お彼
等に與するてと勿れ　八爾曹もと暗かりしが今主に在て光れり光の子輩の
如く行ふべし　九蓋光の結ふ所の果い諸の仁ことゝ義あとゝ誠實の中にお
れべなり　十主の悦ふ所を辨へて之を行ふべし　十一あんぢら果を結べざる暗
行に與するあとなく反て之を責べし　十二彼等が隠にて行ふ所の事い之を言
だにも醜べき事あり　十三凡て責を受べきあとい光に由て顯るゝなり蓋すべ
てを顯そ者い光あれべ也　十四是故に云る言あり寐たる者よ目を醒し死より
起よキリスト爾を照さん　十五然べ爾曹つゝしみて行を堅くすべし曚らざる
者の如くせず智者の如くし　十六機を窺ふべし是時悪けきべ也　十七是故に愚
る者と爲あとなく主の旨い如何に諜るべし　十八また酒に酔あと勿れ之をあ

それ放蕩なり宜しく靈お滿さるべし　十九互お詩と歌と靈お感して作きる賦
とを以て語りあひ又うたひて爾曹の心お主を讃美すべし　二十凡の事おつき
て恆お我儕の主イエスキリストれ名お託て神即ち父お謝そべし　二一キリス
トを畏るゝ心を以て互お服ふべし○　二二婦なる者よ主お服ふが如く己の夫
お服ふべし　二三蓋キリスト教會の首あるが如く夫い婦の首なき也キリスト
い身の救主なり　二四然も教會のキリストお服ふ如く婦も凡のこと夫に服ふ
べし　二五夫ある者よキリストの教會を愛し其爲に己を捨給ひし如く爾曹も
婦を愛すべし　二六かを己を捨しい水の洗を以て道お因て教會を潔め之を聖
ある者とせんが爲あり　二七また點汚あるく皺なく凡て此の如き類あく聖あし
て瑕なき榮ある教會を自ら己の前お建ん爲なり　二八此の如く夫ろの婦を己
の身とおして愛すべし婦を愛そる者い己を愛する也　二九己の身を悪む者い
曾て有てとあし之を保養ふてとキリストの教會を保養ふが如し　三十我儕い
彼が身の肢あり彼が肉より骨より出たり　三一是故お人い父と母を

離を其婦ゟ配ひ二のもの一体ゟあるべし
キリストと教會を指なり　三爾曹も各々ろの婦も其夫を敬ふべし
第六章子ある者よ爾曹主ゟ在て兩親におたがふべし是合宜ゟを以ばなり
の父母を敬ふべし約束を加へたる誡い之を首とす　三て也爾が福を得また
地上ゟ壽長のらん爲ゟり　四父ある者よ爾曹の子を怒るゟと勿を主の懲
戒と教訓を以て養育べし　五僕ある者よキリストゟ服ふが如く畏懼戰慄ま
ゟとの心をもて肉體ゟ屬る主人ゟ服ふべし　六人を悅とする者の如く只眼
前の事を務ると勿をキリストの僕の如く心より神の旨を行ふべし　七人ゟ
事るが如せず主に事るが如く甘心つかふべし　八ろい僕ある者にもあを自
主ある者ゟもれ各行ふ所の善ゟ得て主より報を受んゟとを爾曹知がる
り　九主人ある者よ爾曹も亦かくの如く彼等に行ひて厲言を止よ蓋かれら
と爾曹の主天ゟ在かれい偏る所ゟしと爾曹知をゟり　十此他なは言ん我

兄弟よ主ゟよび其大ある能ゟ頼て剛健ゟるべし　十一あんちら惡魔れ奸計を
御ん爲に神の武具を以て裝ふべし　十二我儕い血肉と戰ふゟ非ず政また權威
また斯世の幽暗を宰とる者また天の處ゟある惡の靈と戰ふなり　十三是故に
神の武具を取べし是ゟしき日に遇て敵を禦ぎ凡の事を成就して立ん爲ゟ
り　十四あんぢら立ふ誠を帶として腰ゟ結ひ義を護胸として胸に當　和平ゟ
る福音の備を鞋として足に穿　十五此ほう信仰の盾を取べし此盾をもて惡く
惡者の火箭を滅ゟとを得ん　十六また救の冑ゟよび聖靈の劍すなはち神の道
を取恒ゟ各樣の禱告と祈求を以て靈ゟ由て求かの諸の聖徒の爲ゟも愼
て此事をなし祈りて倦ざるべし　十七且ゟが口を啓とき言を賜ひり佩々し
て福音の奧義を宣し　十八又わが言べき所の如く之を佩々して言得やう我た
めにも祈るべし我てれ福音の爲に使者とゟりて鏈ゟ繫をたり　十九愛する
兄弟主ゟ忠心にて事るテキコわが如何して在の我事を爾曹ゟ告知せん　二十三
我かをを特ゟ爾曹に遣すい爾曹ゟ我事を知せ又彼をして爾曹の心を慰し

めん爲なり（三）願くは兄弟父なる神と主イエスキリストより信仰を加て平康と愛を得んことを（四）願くは我儕の主イエスキリストを變らずして愛する凡の者を恩惠らんことをアーメン

新約全書以弗所書終

新約全書使徒パウロピリピ人へ贈る書

第一章　キリストイエスの僕パウロとテモテピリピに居ところのキリストイエスに在すべての聖徒および監督執事に書を遣る（二）願くは爾曹われらの父なる神および主イエスキリストより恩寵と平康を受よ○（三）われ爾曹を思ふごとに我神を謝す（四）また恒に爾曹衆の爲に祈求ごとに欣びて求ふ（六）爾曹の心の中に善工を始し者こをを主イエスキリストの日までに全うすべしと我ふかく信ず（七）此の如く我が思ふ宜なり爾曹つねに我心に在に緣ろい我が縲紲に在とき及び福音を辨明し之を堅固する時も爾曹い皆已と偕に我が受る恩に與をも也（八）我キリストイエスの心を以て爾曹衆を戀慕ふこと亦然い其證をなし者い神あり（九）また爾曹の愛智識と諸の智慧の中に益大に爲て最も勝たる所を辨へ知り（十）イエスキリストに由る義の果を滿せて神の榮光と讃美を顯しキリストの日の爲に潔して過なからんことを祈る○

十二 兄弟よ願くは爾曹わが身ゐ在し所のみと反て福音の進行く助となりしを知き 十三 斯て我が縲紲に羅しはキリストの爲なるみと既に王を護る所の陣營および他れ凡々ゐも凡て明に知れたり 十四 わが縲紲ゐ因て兄弟等おほくは主を信ずるの心を篤くし益勇て憚ることなく道を傳ふ 十五 また猜忌と分爭ゐ因てキリストを宣る者あり又善意しゐ因て之をなす者あり 十六 彼は我が縲紲の苦を增加んみとを欲ひ誠の心なく黨を結ぶ心よりキリストを宣 十七 此は我が福音を辨明する爲に立らきしみとを知り愛心よりキリストを宣 十八 然らば如何就ゐもあを或は僞あるひは誠ともゐ宣る所はキリストみをも我みきを喜ぶ且つねに喜をせん 十九 蓋みの事の爾曹の祈禱とイエスキリストの靈の助とゐ因て終ゐ我が救とある可を知ばあり 二十 是わが切ゐ願ふところ望ところ即ち我が凡の事ゐ恥るみとなく今も常の如く臆せず生るゐも死るゐもキリストをして我が身ゐ因て尊められしめんと意ふた應へり 二一 わが生るはキリストの爲また死るも我が益あり 二二 然と肉躰ゐ在て生ることもし若しが工の果を結ぶ根本とあるべくば何を撰ぶべきか我てをを知ず 二三 我ての二の間ゐ介れたり我が願はキリストと共ゐ在んことも也れ最も美事あり 二四 然と我が肉躰ゐ居るは爾曹の爲更ゐ必要あり 二五 われ深く此事を信ずるが故ゐ存へて爾曹衆の人と共ゐ世ゐ住爾曹をして信仰を益しめ信仰より出る喜びを得しむるゐ至らんみとを知ゐ 二六 われ再び爾曹と共ゐ居む爾曹の喜びわれゐ因てイエスキリストの中ゐ益大からん 二七 我たゞ爾曹ゐキリストの福音に符ふ行をせんことを勤む是わが往て爾曹を見ときも離て爾曹の事を聞ときも爾曹が靈を一にして堅く立福音の道の爲ゐ心を同うして力を協せ 二八 凡の事につき敵に驚ざらんことを知ん爲あり凡て敢に驚ざるは敵には亡の徴あんぢらには救の徴あり是神より來るあり 二九 爾曹ゐ賜ふ所の恩はキリストの爲に第みれを信ずるみと而已ならず亦みをが爲ゐ苦を受ることをも賜れべ也 三十 今あんぢらゐ患難あり即ち我に爾曹が聞ところの我にある患難と同じ

腓立比書

若キリストにある勸と愛によ
る慰と靈の交際と慈悲と矜恤とあら
ば 二 あんぢら念を同うし愛心を同うし意を合せて念ふことを一にし我が
喜を滿しめよ 三 何事を思ふも爭を結び或ひ虛榮を求る心をもつべからず各々謙りたる心を以て互に人を己
みを顧みず人の事をも顧みよ 五 爾曹キリストイエスの意を以て意とすべ
し 六 彼れ神の體にて居しかども自ら其神と匹く在ることを事と
とゝ意ねず 七 反て己を虛うし僕の貌をとりて人の如
き形狀にて現れ己を卑し死に至るまで順ひ十字架の死をさへ受るに至れ
り 八 是故ゐ神れ甚しく彼を崇て諸の名に超る名を之に予へ給へり 十 此れ
天ゐ在もの地に在もの及び地の下にある者をして悉くイエスの名に由て
膝を屈しめ 十一 且もろ〳〵の舌をして悉くイエスキリストれ主なりと稱揚
して父ある神に榮を歸せしめん爲なり 十二 然も我が愛する所の者よ爾曹常
に服へる如く異憚戰慄て己が救を全うせよ我ともに居りし時のみならず

我をらざる今れ特に然すべき也 十三 うれ神うの善旨を行れんとて爾曹の裏
にはたらき爾曹をして志をたて事を行れしむれば也 十四 凡のあと怨言あと
あく又爭辨あと無して行ふべし 十五 あれ爾曹ゞ邪曲れる邪ある時代に在て責べき所ゐからん爲なり爾曹れ此時代に在て光
の如く世ゐ顯れ 十六 生命の道を保てり斯てキリストの日の爲に我をして
我が行ひしところ勞苦し所のてとの徒然ならざるを喜をしめよ 十七 爾曹の
信仰を供物として獻んゐれ假ひ我ゞ血を濺して澱とも我ゐれを喜をん 十八 爾
曹衆の人と共に喜べん 十九 爾曹も之ゞ爲に喜べ我と共に喜べ 我ゐんぢら
ゞ事情を知り心を慰めんがため速かにテモテを爾曹に遣さんとゐとを主イ
エスゐ願て望む 二十 蓋かれの外に我と同じ心を以て爾曹の事を眞實に慮る
者ゐけれ也 二十一 多の人れ皆おのゞ事のみを求めてイエスキリストの事を
求めず 二十二 然とテモテの鍛鍊あるゐとれ爾曹の知ところなり彼れ子の父に
於る如く我と共ゐ福音の爲ゐ勤たり 二十三 是故に我ゐのゞ事の終に如何ある

かを知ば直ゐ彼を遣さんと望む 二四亦己れも自ら速かに往んことを主ゐ頼て堅く信ず 二五然とも我かゐらず先ゐんぢらの使ゐて我が乏を補ひ我と同に勞き我と同に戰をなせる我が兄弟エパフロデトを爾曹に遣さゐる可らずと意へり 二六蓋かれ己が愛に病たる事の爾曹ゐ聞ゐしを以て深く爾曹衆の人を戀慕かつ憂悶をれたる也 二七實に彼い病に遇て殆んと死に近けり然と神ゐれを憐み給へり惟かれを憐むのみゐらず我をも憐み我をして我が憂に憂を重ざらしむ 二八是故に我いよ〳〵速かに彼を遣さん是爾曹をして再び彼を見て喜ゐしめ且己が憂を破さんが爲ゐり 二九然れ爾曹主により喜びて彼を迎かつ此の如き人を尊ぶべし 三〇蓋かれい己が命を圖ず死んとするもかりキリストの爲に働き爾曹が我を助る所の缺を補ひたれ也

腓立比書第三章

終に我あれを言ん我が兄弟よ爾曹主に在て喜べ我ての事を爾曹に書おくるい我ゐ煩勞ゐく爾曹に益ありニ爾曹犬を愼め惡を行ふ者を愼め割を行ふ者を愼め 三うい神の靈に由て役事をあしキリストイエスに面て誇り肉身に恃ざる我儕い眞の割禮を受たる者あれば也 四然と我また肉身に恃みとを得と意ゐ人ゐ我い更に恃みとを得あり 五我い第八日に割禮を受たる者にしてイエラエルの族ベニヤミンの支派へブル人より生をたるへブル人あり律法に由ばパリサイの人 六熱心に由ば教會を窘迫もの律法に在とゐろの義に由ば瑕あき者あり 七然と我さきに我が益とありし所の事いキリストに由て損ありと意へり 八然のみあらず我わが主キリストイエスを識る知識に由て最も益をる事とするが故に凡のもれを損となす我ゐの爲に既に此等の凡れ如く意へり是キリストを獲つ信仰に基きて神より出る義すゐはち律法に由る己が義に非ずキリストを信ずるに由る所の義を有てキリストと其復生の能力を知ろうれ死れ狀に循ひて彼れ苦に與りて中に居 十一また彼と同に死たる者れ甦ゐを得んが爲ゐり 十二我ゐをられ望を既に得たりと言に非ず或い取ゐとゐらんと誇り肉身に恃ざる我儕い眞の割禮を受たる者あれば也 四然と我また肉身に恃みとを得と意ゐ人ゐ我い更に恃みとを得あり 五我い第八日に割禮を受たる者にしてイエラエルの族ベニヤミンの支派へブル人より生をたるへブル人あり律法に由ばパリサイの人 六熱心に由ば教會を窘迫もの律法に在とゐろの義に由ば瑕あき者あり 七然と我さきに我が益とありし所の事いキリストに由て損ありと意へり 八然のみあらず我わが主キリストイエスを識る知識に由て最も益をる事とするが故に凡のもれを損となす我ゐの爲に既に此等の凡れ如く意へり是キリストを獲つ信仰に基きて神より出る義すゐはち律法に由る己が義に非ずキリストを信ずるに由る所の義を有てキリストと其復生の能力を知ろうれ死れ狀に循ひて彼れ苦に與りて中に居 十一また彼と同に死たる者れ甦ゐを得んが爲ゐり 十二我ゐをられ望を既に得たりと言に非ず或い取ゐとゐらんと誇り

て我たゞ之を追求むキリスト之を得させんと我を救へ給へる也　十三兄弟よ
我みづから之を取りと意はず惟己れ一事を務む即ち後に在るものを忘れ前
に在るものを望み　十四神キリストイエスに由て上へ召て賜ふ所の褒美を得ん
と標準に向ひて進なり　十五是故に我儕なれ中すべて全者ゐ此れ如き意を懐べ
し苟曾もし何事に由ず異ある意を懐ゐのあらば之をも神あんぢらに示し給わん
十六然と我儕すでに到る所にありて同法に遊ひて行ふべし　十七兄弟よ爾曹
ゐる我に效ふ者とあるを且なんぢらに模楷とある我儕に循ひて行をゐす者
を視よ　十八蓋わを屢々あんぢらに告げ今また涙を流して爾曹に告る如くキ
リストれ十字架に敵して行ふ者多ければ也　十九彼等れ終ゐ滅亡ゐり己が腹
を其神とゐし己が羞辱を其榮とゐす彼等ゐ惟世れ事をれを念へり　二十我儕
れ國ゐ天に在わきらゐ救主即ちイエスキリストれ其處より來るを待　二一彼
ゐ萬物を己に服わせうる能に由て我等が卑き體を化て其榮光れ體に象ら
しむべし

第四章　是故に我が愛するとゐろ慕ふ所の兄弟わきの喜わきの冕たる我が
愛する者よ今わが勸る所に從ひて爾曹堅く主に立べし　二我ユウオデヤに
勸めスントケに勸む彼等が主にありて心を同うせんみとを　三わが眞の侶
よ請ゐんぢ此二人の婦等を助けよ彼等クレメンス及び他れ我が勞苦れ侶
ゐる人々と力を協せ我儕と共に勤て福音を傳播たり彼等れ名ゐ生命れ書
に錄さをゐる也　四ゐんぢら常に主に在て喜べ我また言ゐんぢら喜ふべし
五ゐんぢら衆れ人をして其寛容ゐるみとを知しめよ主ゐ近し　六何事をも
思ひ煩ふ勿を唯每事に祈禱をし懇求をし且感謝して已が求る所を神に告
よ　七神より出て人れ凡て思ふ所に過る平安ゐ爾曹の心と意をキリストイ
エスに因て守らん○　八兄弟よ終に我ゐを言ん凡ろ眞實ゐるみと凡ろ敬
ふべき事ゐよろ公義ゐと凡ろ清潔ゐと凡ろ愛すべき事ゐよろ善稱ゐる事
すべて何なる德ゐのなる譽にても爾曹ゐを念ふべし　九ゐんぢら我より
學しとゐろ受しとゐろ聞しとゐろ見し所を皆ゐるゐへ然れ平安れ神爾曹

と偕あらん○十 われ爾曹が我を思ふ心の今また漸く萌しゝを主ゐ因て甚だ
喜べり爾曹ゝ素より我を念るたれとも機を得ざりし也 十一 わ乏ゐ因て之
を言ゐ非ず蓋われ何ある狀ゐ居もろれを以て足りとそる事を學べ也 十二
われ貧賤に居の道を知また富厚に居れ道を去り飽ゐとも飢ゐとも豐ゐと
も獄ゐとも諸の事ゐ於て我あれを熟嫻せり 十三 我ゝ力を予るキリスト
に因て諸れ事を爲得るなり 十四 然とも我が艱難の際に我が助を爲しゝ誠に
善 ピリピ人よ爾曹もまた知わが福音を傳る始めマケドニヤを離れさる
ときゝ授受をゐして我を助けし者ゝ唯爾曹のみにして他の敎會ゝ此事ゐう
りき 十六 爾曹ゝ我テサロニケに在しときゝ一度ならず二度までも人を遣しし
我が乏を助けたり 十七 われ餽贈を求るに非ず唯ゐんぢらが益にある果の繁
からんゐとを求るゐり 十八 我にゝ諸物ろゐわりて餘ゐり我すでにエパフロ
デトの手より薫香ゐして神の享給ふとゐろ悅給ふ所の祭物ゐる爾曹の
餽贈を受て足り 十九 夫わが神ゝ己の富に從ひてキリストイエスにより榮光
を以て爾曹の乏とゐろを補ひ給ゝん 二十 願くゝ我偕の父ある神に世々榮ゐ
らんゐとをアーメン○二 爾曹キリストにある聖徒ゐの〳〵に安を問われ
と偕にある兄弟等ゐんぢらに安を問り 三 詔れ聖徒等ゐんぢらゐ安を問ガ
イザルの眷屬のもの別て爾曹ゐ安を問り 二三 願くゝ我偕の主イエスキリス
トの恩ゐんぢら衆人と偕に在んゐとをアーメン

新約全書腓立比書　終

新約全書使徒パウロコロサイ人に贈れる書

神の旨に由てイエスキリストの使徒とされるパウロ及び兄弟テモ

二 テ書をキリストに在コロサイにをる所の聖徒と忠信の兄弟等に贈る願

くは爾曹われらの父なる神および主イエスキリストより恩寵と平康を受

よ〇三われら爾曹がキリストイエスを信ずる事と諸の聖徒を愛する事と

を聞て爾曹の爲に祈るとき恒に我儕の主イエスキリストの父なる神に感

謝す 四爾曹が如此聖徒を愛するい爾曹の爲ふ天に蓄へある所のものの即ち

曩ふ福音の眞理の道の中にて聞し所のものを望むが故なりふ福音い

世界に徧ク如く爾曹ある所に來れり且なんぢらが之を聞て神の恩を眞實に曉

し日より爾曹の中に果を結び全ク大ふなれり 七かく福音い我儕の愛する同た

ふなれる如く世界にも果を結びて大

役者エパフラスより爾曹が學る

所のもの也エパフラスい爾曹の爲にキリストの忠信ある僕なり 八彼さき

に爾曹が靈に感じて懇る愛を我儕に告 是故に我儕みの事を聞し日より

爾曹の爲に斷ず祈禱をし且求む願くは
を以て悉く神旨を知　凡の事主を悅ばせんが爲うの意に循ひて日を送り
凡の善事に因て果を結び且神を知に因て
に循ひて賜ふ諸の能力を得て強められ凡の事よろゐひて恒忍かに久耐
た我儕をして光にある聖徒の業の分を受るに堪る者とあらしめ給ふ父の
恩を感謝せんことを　彼れ暗の權威より我儕を救出して其愛子の國に遷
し給へり　我儕うの子に由て贖ひあがひ罪の赦を得なり　彼れ凡の見あ
とを得さる神の狀にして萬の造れし物の先に生れし者なり　うの彼に由
て萬物れ造れたり天に在もの地上に在もの凡の見てとを得ても見てとを
得ざるもの或れ位ある者あるひれ主たる者あるひれ政を執もの或れ權威
あるもの萬物これに由て造れたり且うの造れたるれ彼が爲なり　彼れ萬
物より先あり萬物これに由て存ふとを得なり　教會れ彼の身體にして
彼れ其首なり彼れ元始にして凡の事あらつき長とならん爲ふ死の中より首

に生れしものなり　うれ父すべての
由て平和をなし萬物すなわち地上に在もの天ふ在る者をして彼に由て已
と和ぎしむる事れ是うの聖旨ふ適ふとをあれば也　夫爾曹れもと惡行を
行ふに因て神に遠かり心にて其敵とをれる者ありしが　神今キリストの
肉の身體をもて其死により爾曹をして已と和ぎせ潔く玷なく咎あくして
已れ前に立しめんとす　若なんぢら信仰に止り其基を定めかつ堅して福
音の望より移すた如此せらるゝまゝとを得べし此福音れ即ち爾曹の聞し所
なり且すでふ天下の萬人に傳れり我パウロうの役者と作たり　今われ
爾曹の爲ふ受る苦を喜び又わが肉體をもてキリストの體すなわち教會の
ために其患難の缺たる所を補ふ　われ爾曹の爲に神の賜ふ所の職に循ひ
此教會の役者とをりて徹く神の道を傳んとそ　この道れ歷世歷代隱れた
る奧義をりしが今ろの聖徒に顯れたり　神聖徒をして異邦人の中に顯れ
し奧義の榮のいりに豐あるを知しめんと玆給へり此奧義れ爾曹の中に傳

へしキリストあり彼に爾曹の望む所の榮の望みあり　二八我儕これを傳へ諸人を勸め諸般の智慧をもて諸人を敎へ諸人をしてキリストの中ゐ完全を得て神の前に立しめんとす　我これが爲に大能をもて我ゞ裏に働く者の運用ゐ循ひ力を竭して勞する也

第二章　我なんぢら及びラヲデキヤにをる人々また我が肉躰にある面を未だ見ざる人の爲に我心を勞することを何等あるを爾曹ゞ知んことを望ゐ　二少心を勞するに彼等ゞ心愛に因て一にあり疑を悔ざる全き諒悟の富を得あつの父なる神とキリストの奧義を知て安慰を得んことを欲する也　三智慧と知識の諸寶一切キリストに藏をある也　四誰ゐても巧言を以て爾曹を欺くおと無らん爲に我これらの事を言り　五我れ肉體に離をるとも靈に爾曹と偕に居て喜び爾曹ゞ次序あるとキリストを信する信の堅固を見あり　六爾曹そでに主キリストイエスを承たれた彼に在て行むべし　七なんぢら根を彼におき彼ゐ在て德を建また敎を受たる所ゐ從ひて信仰を堅くし此を益大にして感謝せよ　八あんぢら愼むべし恐くはキリストゐ循ゐずして人の遺傳と世の小學に循ひ空言ある理學をもて爾曹れ心を奪んことあらん　九神れ充足る德ゐ悉く形體をあしてキリストゐ仕り　十彼ゐ諸の政と權威れ首あり爾曹かれゐ在て全備する事を得あり　十一あんぢら彼ゐ在て手をもて爲ざる割禮をうく即ち肉の體を脫去とあろのキリストの割禮なり　十二爾曹バプテスマを受て彼と偕に葬られ亦死より彼を甦らしゝ神の大能を信するに因て彼と偕ゐ甦らされたり　十三あんぢら前にゐ諸の罪と身に割禮あざとに因て死たる者あり然と神爾曹をして凡の罪を赦し　十四彼と偕ゐ生しめ　かつ手ゐて錄しゝ所の我儕を攻る規條の書すあゐち我儕ゐ逆ふものを塗抹れを中間より取去り釘を以て其十字架に釘たまへり　十五また政事を執者と權威ある者を滅し彼等を衆人に示しキリストに由て勝誇れり　十六是故に或ゐ飮食あと或ゐ節期あるひゐ月朔あるひゐ安息日の事により人をして爾曹を議せしむるあと勿れ　十七此等ゐ皆來らんと

する者の影にして其真の形ハキリストに屬り十八誡らるゝ事と天使を拜するふとゝに因て爾曹の褒美を詐取んとする人に其褒美を奪るゝ勿れ斯ける如き人ハ未だ見ざる者を視ひ己の心に從ひて妄に誇り首に屬ゐとを爲さる也全體みの首により諸の節と維をもて相助け相聯ゐり神に育られて長ゐり二十三もし爾曹キリストと偕に死て世れ小學より離たらんにハ何ぞ世に在て日を送る者れ如く人れ命と敎ふ循ひ捫る勿れ嚼ふ勿れと嘗ふ律法の下になるや此等れ禁たる者ハ凡て人ゐれを用れた滅るなり二三此等の規條ハ自ら縱肆にして拜するゐとを爲りつ謙卑ゐつ身を憎さるに由て智慧ある者の如く見れとも實に尊き者に非ずたゞ肉體の慾を充足する也

第三章　既に爾曹キリストと偕に更りたれゝ天に在るものを求むべしキリスト彼處ゐ在て神の右に坐し給へり二爾曹天に在ものを念ひ地に在ものを念ふ勿れ三なんぢらハ死し者にて非命ハキリストと偕に神の中に藏れ在ゐり四我儕の命なるキリストの顯れんとき我儕も之と偕に榮の中に顯るゝ也〇五是故に爾曹の地にある肢體すなわち奸淫汚穢邪情惡欲ゐよび貪婪を殺すべし貪婪ハ即ち偶像を拜するゐとも也六此等の事に由て神の怒と從ハざる者に臨るなり七爾曹も曩に斯のごとき人れ中に日を送りし時ハ此等の惡事を常に行へり八然と爾曹今ハ凡て此等の惡事ゐよび悲憫忍怒暴戻をさり誘讒醜言を爾曹の口より去べし九ゐんぢら已に舊人と其行を脫て新人を衣たれた互に謊言を言ゐふれ十あの新人ハ愈新になり人を造りし者の像に循ひて知識に至るゐり十一此の如きに至りてハギリシヤ人とユダヤ人ゐるひハ割禮ある者と割禮なき者ゐるひハ夷狄ゐるひハスクテヤ人ゐるひハ奴隸ゐるひハ自主の別なし夫キリストハ萬物の上に在また萬物れ中にあり〇十二是故に爾曹神に選れて聖潔かつ愛せらるゝ者と爲れた慈悲哀憐恩慈謙遜柔和忍耐を衣よ十三なんぢら互に容忍をなし若し人に責べき事あらバ之を恕せキリスト爾曹を恕し給へる如く爾曹も然す

べし 十四 なほ之に加へよ愛は萬徳の帯なり 十五 爾曹キリストの
賜ふ平安をして其心を主らしめよ 爾曹一體に在て此平安に至るべき召を
蒙れり 爾曹恩に感ずべし 十六 キリストの道をして爾曹の心を有て充足しめ
諸の智慧により詩と歌と靈に感じて恩に感じて心の中に神を讃美すべ
し 十七 爾曹の爲所の諸事あるひは言あるひは行みな主イエスの名の爲に之
を為し彼に由て父なる神に感謝すべし 十八 妻ある者よ其夫に從ふべし此は
○ 主に在者よ 十九 夫なる者よ其妻を愛すべし苦を以て之を待ふ勿れ
二 親に從ふべし是主の悦び給ふ所なり 二十 子たる者よ爾曹すべての事
勿れ惡くも其氣餒ん 二一 僕ある者よ凡のみと肉體に屬る主人を從ふべし人
を悦をする者の如くたゞ眼前の事を務るのみとなく誠心を以て神を畏れ
て從へ 二二 あんぢら何事も人に事るが如く主に事る如く心より之を行ふ
べし 二三 ろう爾曹の主より報賞なる嗣業を受るをえる者なるを也なん

ぢら主なるキリストに事ふべし 二四 不義を行ふ者は亦その不義の報をうく
主は偏頗たまふ事あし
四 主人なる者よ爾曹も亦天に主ある事を知べき義ゐ從ひ公平を以て其
僕を待ふべし ○ 二 恒に祈禱をなし 三 また我儕の爲にも祈れ
た神われらに道を傳ふるの門を開き我儕をして キリストの奥義を語らし
め 三 わが言べき所の如く此奥義を顯さしめ給はんことを我儕の爲ゐ祈る
べし 我みの奥義の爲ゐ繋れたり 四 あんぢら機を覚ゞび知慧をもて外人ゐ
交るべし 五 爾曹の言つねに恩を用ゐ且鹽を以て調和べし然を如何して各
人に答ふべき手を知ん ○ 六 わが愛する兄弟忠ある役者われと偕に主に事
る僕テキコわが事を悉く爾曹ゐ告知せん 七 我かれを殊ゐ爾曹ゐ遣すゐ彼
をして爾曹の事を知あんぢらの心を慰めしめん爲なり 八 また忠ある我が
愛する兄弟爾曹の中の一人あるオヌシモを彼と偕に遣せり彼等みの處の
事を以て悉く爾曹ゐ告知せん 九 我と偕ゐ繋るエアリスタルコ及バルナバ

の頃マコ爾曹に安を問てこのマコの事に就ても爾曹ゐ至らバ之を接べし十一ユストと名るイエス爾曹ゐ安をとふ割禮を受し者のうち惟ての三人のミ我と偕ゐ神の國の爲ゐ勞々り我かれらに由て安慰を得しゐり十二爾曹の中の一人にてキリストイエスの僕なるエパフラス爾曹に安を問彼れ恒に爾曹の爲に力を盡して祈禱をゐし爾曹ゞ完全を以心を堅して立すべての事神の旨に遵わんみとを願へり十三われ彼ゞ爾曹およびラオデキヤヒエラポリにある者のために甚く心を勞するみとを證す十四我儕ゞ愛する醫者ルカ及びデマスキヤの兄弟等とヌンパス及び其家にある敎會に安を問十五爾曹すでに此書を讀た之を亦ラオデキヤ人の敎會に讀せ爾曹も亦ラオデキヤより來る書をよめ十六アルキポに曰なんぢ主に在て受し所の職を愼みて盡すべしと十七我パウロ親手みんぢらに安を問るんぢら我の縲紲を念へ願くハ恩寵爾曹と偕に在んみとをアーメン

新約全書哥羅西書　終

新約全書使徒パウロ テサロニケ人に贈る前書

第一帖撒羅尼迦前書

パウロとシルワンとテモテ 書を父なる神および主イエスキリストに在るテサロニケ人の教會に贈る願くは我儕の父なる神および主イエスキリストより爾曹恩寵と平康を受よ　二われら祈禱の中に爾曹の事を陳て常に爾曹みな為に神に感謝す　三爾曹が信仰に由て行ひ愛に由て勞し我儕の主イエスキリストを望むに因て忍みとを我儕の父なる神の前にて斷ず念ふ故あり　四神に愛せらるゝ兄弟よ又あれ爾曹の撰れたる事を知に緣てあり　五我儕の福音なんぢらに來りしは只言に由てのみならず能により聖靈に由また篤き信仰に由てなり卽ち我儕なんぢらの中に在て爾曹の爲に如何おおなひし乎を爾曹の知ごとし　六且なんぢら大なる難の中ゟ聖靈の喜樂をもて道を受わをら及び主にマケドニヤとアカヤに在すべて效ひ　七マケドニヤとアカヤの信者の模楷となれり　八主の道爾曹より響しい第にマケドニヤアカヤのみならず面して亦なんぢらが神に向る信仰すべての處に聞をり是故に我

僕何事も言に及ぜず　蓋かれら我僕の事を語りて我僕いかなる狀にて爾曹の中ふいり且みんぢら偶像をすて神ゐ歸して活る眞神ゐ事へ　一〇うの子の天より臨るを待と言べ也ろの子い即ち神の死より甦らし玉所のイニスにして我僕る來らんとする怒よ　一一極ふ者あり

第二章　兄弟よ我僕ダ爾曹の中ふ入しみとの徒然あらざるを爾曹ミづから知ニみんぢら知る如く我僕さきゐピリピにて苦を受また辱を受たり然と倚なんぢらゐ至り我僕ダ神ゐ願て憚る所なく神の福音を大なる紛爭の中ふて爾曹ゐ語れり　三我僕の勸い惑より出るに非ず汚より出るゐ非ず亦詐を以てせ玉　四われら神の撰をゐ福音を傳るみとを託られたるゐ因て語るなり此い人を悅べするに非ず我ダ心を察し給ふ神を悅べする也　五みんぢら知ダ如く我僕い何も諂ふ言を用ずまた事に藉て貪るみとをせず神ゐれが證をゐす　六我僕キリストの使徒にて人に重ぜらるべしと雖も或い爾曹にも回い他人にも人に榮耀を求ず　七究母うの赤子を育ふ如く我僕みんぢら

の中に在て柔和にせり　八如此みんぢらを慕ひて第に神の福音のみゐらず已の生命をも爾曹に予んみとを喜べり是なんぢらい我ダ愛する者ゐえべ也　九兄弟よ爾曹われらの勞と苦をゐる爾曹のうち一人をも累ハせざる爲に夜晝工を作て神の福音を爾曹に宣傳へたり　一〇我僕なんぢら信ずる者に對て何等かり潔く義く無しして行へるを爾曹も神も證をなす　一一みんぢら知わきら父ダ其子を待ふ如しして爾曹おの〳〵ゐ對ひ其國と其榮に召き給ふ神に合ひて行とを勸せた慰め亦效たり　一二是故に我僕神に向ひ爾曹ダ我僕より神の道を聞しとき之を人の道とせず神の道として受たるを斷ず感謝す此道い誠に神の道にして爾曹信ずる者の中に働くあり　一三兄弟よ爾曹ユダヤの中ゐるキリストイエスにある神の敎會に效る者とゐをり蓋うをらユダヤ人わ苦めらきし如く爾曹も已ダ國の人々に苦められた也　一四ユダヤ人い主イエスと己ダ預言者たちを殺しまた我僕を窘て逐出せり彼等い神の心に合ず且すべての人に逆へり　一五また我僕ダ異邦人に救を得

させんとて語るを阻り此の如く彼等い常に己が罪を盈しむ神の極て大る怒りをうホ臨れり〇一七兄弟よ我儕暫時あんぢらに離れ居ありて面のまあり心に非ず切に願ひて急ぎ爾曹の面を見んとせり一八是故に我儕あんぢらに至らんと欲へり殊に我パウロ之を願ふまた喜また誇の冕や誰ぞや我儕の主イエスキリストの臨らん時うれ前に爾曹も此ものと爲にあらず乎二〇

うれ我儕の榮と喜び爾曹あり

第三章 是を以て我忍ふこと能ず故に獨アテンスに留ることを意に定めニ キリストの福音を傳へ神と偕に働く我儕れ兄弟テモテを爾曹に遣しまも爾曹を固し又爾曹の信仰の爲に慰さざらしめんため也ろを患難に我儕に定れるまゝなるを爾曹自ら知り三 われら爾曹と偕に在し時ねさら患難に遭んとするまゝを預じめ爾曹に告たり今果て其如く成り爾曹知とまろれ如し三 是故ゐ我亡ふまゝと能ず

れ信仰を知ん爲に人を遣しまゐり試る者の爾曹を試みて我儕の勞の徒然ゐらんまゝを恐をたる也六 今テモテ爾曹より我儕に來りて爾曹の信仰と愛との嘉音を聞せ又ゐんぢら常に我儕を切々に念ゐをらに渇まゝを欲ひ我儕ゲ爾曹に遇ゐまゝを欲ふゲ如しと告たり七 是故に兄弟よ我儕さまざまれ禍害と患難との中に爾曹の信仰に因て安慰を得たり八 うい爾曹も主に屬ゲ我儕ゐまに由て生べけを也九 われら爾曹れ事に意て我儕の神の前に歡ぶ所の大ゐる喜により爾曹れ爲に如何ゐる感謝を以て神に報んや十 晝夜切に願ふい爾曹の面を見んと爾曹れ信仰れ足ざる所を補えんゐまと也十一 願くい神そなわち我儕れ父ゲづから我儕れ主イエスキリストと偕に我儕を導きて爾曹に至らしめ給いんゐまを十二 また願ふ主爾曹れ愛を培りつ滿しめ爾曹をして互に愛しまた衆の人を愛するてと我儕ゲ爾曹を愛する如ゐらしめて十三 爾曹れ心を堅くし我儕れ主イエスろの諸の聖徒と偕に來らんとき爾曹をして我儕れ神なる父れ前に潔して責べき所ゐら

らしめん事を

第四章 兄弟よ我儕なく神に願へ〻主イエスに頼て亦あんならに求め且勧む爾曹すでゐ我儕より教を受いかに行ひて神を悦ゑすべきを知たれば益之ゐ進むべし 二蓋わきら主イエスゐ由て如何ある誡を爾曹ゐ授けしかを 三爾曹知たるり神れ旨い爾曹れ潔あと即ち姦淫をせず 四各々己れ器を得て之を潔く貴くゐして用るあとを知、 五神を知ざる異邦人れ如く情慾を縦ゐせず 六又あれ事ゐついて兄弟を欺きかつ害せざらんとを要め給ふ凡て斯る悪事を行ふ者ゐ主報をゐし給ふあり わきら曩ゐ爾曹ゐ告りつ證せしが如し 七うを神れ我儕を召きたるい我儕れ汚たる事を行ふを要るゐ非ず 八潔らん事を要め給ふあり○是故ゐ慢る者い人を慢るゐ非ず其聖靈を爾曹ゐ賜ひし神を慢るあり○ 九兄弟を愛する事ゐ就ていい我あんならゐ書贈るお及たず蓋あんならい互ゐ愛するあとを親く神より教らをたをれ也 十固より全地ある諸の兄弟ゐ此の如く行へり兄弟よ我儕勧るか爾曹ゐ又此事ゐ加へ 十一ん事を務め己れ事を行ひ手づから工をゐし曩ゐ爾曹に我儕が命せし如く 十二せんこと也此い爾曹外人ゐ向て正く行ひ亦自ら乏こと無らん爲なり○ 十三兄弟よ爾曹れ寃厭い望あき他人れ如あらざらんあとを欲ふが故ゐ我儕すでゐ寝る者ゐ就ていい爾曹れ知ざるを好まず 十四我儕もしイエスれ死て甦りし事を信ずるあらばイエスゐ由る所れ既ゐ寝れる者を神うをと偕ゐ拐へ来らんあとをも信ずべき也 十五わきら主の言ゐ託て爾曹ゐ告ん主の臨らん時ゐ至り活て存ふる我儕いまだ寝ふる者よりも先だらじ 十六うを主號令と使長の聲と神れ笛を以て自ら天より降らん其時キリストゐ在て死し者先ゐ甦へり 十七後ゐ活て存る我儕うをらと偕ゐ雲ゐ擄へられ空中ゐ於て主ゐ迎へ斯て我儕いつまでも主と偕ゐ居ん 十八是故ゐ此等れ言を以て互ゐ慰むべし

第五章 兄弟よ時と期ゐいていい我あんならゐ書贈るゐ及ばず 二ろい主れ日れ来るあと盗人れ夜きたるが如あるあとを爾曹詳細ゐ知べあり 三人々

平和無事ありと言んとき亡滅忽ちお來らん姙る婦お産ふれ助勞れ來る如なるべし八人々絕て避るよとを得じ四然と兄弟よ爾曹幽暗お居ざるべ其日盜賊れ來る如く爾曹お來るとあし五爾曹ことごとく光れ子とも晝れ子とも也われら夜お屬るもれ暗お屬る者お非ず六然ば我儕他人れ寢るが如く寢るよをせず醒て愼むべし七寢る者い夜ねふり酒お醉もれい夜ゑふ也八晝お屬る我儕い信と愛れ護胸をき救れ望を胄として愼むべし九い神われらを怒お遣せんと定たるお非ず我儕れ主イエスキリストお由て救を得しめんと定め給ひたれば也十この我儕の爲お死たり是我儕をして醒たるも寢れるも彼と偕お生しめんとて也十一是故お爾曹常お行る如く互ふ慰め又おの〳〵の德を相建べし○十二兄弟よ我儕あんぢらお請なんぢられ中お勤勞り約主お在て爾曹を治め爾曹を敎る者を十三顧みて彼等れ工お緣て厚く之を愛すべし爾曹たがひお親睦すべし十四兄弟よ我儕あんぢらお勸む安行者を儆め氣餒者を慰め憊弱者を扶け衆の人お向て忍ふべし十五なんぢら愼みて惡を以て惡お報るよとおく常お互お善を追また衆れ人おも善を及すべし十六常お喜ぶべし十七斷ず祈るべし十八凡れ事て爾曹お要め給ふ神れ旨おり十九靈を熄よと勿を二十預言を藐視よと勿を二十一凡れよと察へて其善もれを守り二十二諸れ惡事の類お遠うるべし二十三願くい平安れ神あんぢらを全く潔し又あんぢらの全靈全生全身を守りて我儕れ主イエスキリストれ臨らん時お咎おからしめ給んことを二十四爾曹を召く者い誠信ある者なり彼てれ事を成たまわんと二十五兄弟よ我儕れ爲お祈るべし二十六あんぢら潔き接吻を以て諸れ兄弟れ安をあれ書を諸れ兄弟お誦聞せんよとを二十七われら主お由て厲ふ爾曹と偕お在んとをアーメン

新約全書帖撒羅尼迦前書　終

新約全書　使徒パウロテサロニケ人ヘ贈れる後書

第一章

パウロシルワノテモテ我儕の父なる神および主イエスキリストヘ在テサロニケ人の敎會ヘ書を贈る　二願くは我儕の父なる神および主イエスキリストより爾曹恩寵と平康を受よ　三○兄弟よ我儕あんぢらヘ就て恒ヘ神ヘ感謝そべき也うい爾曹の信仰彌增かつ彌曹ヘ互ヘ愛そること鴈く成たれば也　四是故ヘ我儕あんぢらの爲ヘ神の敎會の中ヘ誇る蓋あんぢら窘迫と患難の中ヘ在て忍耐と信仰を存をり　五これ神の義鞫の表あり爾曹をして神の國ヘ入べき者とあらしめん爲なり爾曹いま神の國の爲ヘ患難を受　六蓋あんぢらヘ患難を加る者ヘいい患難を以て報　七患難を受る爾曹ヘいい我儕と偕ヘ平安を得よとを以て報るい神の公義なれをあり此事い主イエス火燄の中にて其能力の諸使と偕ヘ天より顯れん時ヘあり○　八即ち神を識ざる者および我儕の主イエスキリストの福音ヘ服いざる者ヘ報を予ふ　九かれら主の面と其勢の榮光より離れて

第なく亡る罰を受ん　十其時わ即ち主の臨りて其聖徒わ由て榮光をうけ諸の信者わ由て讃を得ん其日わり爾曹も我儕の証を信ずる者わり　十一此わ故わ我儕つねに爾曹の爲わ祈るわ我儕の神爾曹をして召を受べき者とみし又能力を以て爾曹の諸の善願と信仰の行を成就せしめん事わり　十二是われらの神と主イエスキリストの恩わ由て我儕の主イエスの名あんちらの中わ榮らを亦あんちら彼わ在て榮らをん爲わり

第二章

兄弟よ我儕の主イエスキリストの臨り給ふみと及び我儕ダ彼の所わ集るみとわ就てわ我儕願ふ　二爾曹あるひわ靈わより或わ言わ由あるひわ我ダ贈れるわ似たる書わ由て主の日いま既わ來るとて心を動かし且擾てと覺らんてとを　三誰あわの法を以てするとも爾曹塩かるゝてと勿れ其さわ道を離るゝ事あく且罪の人即ち淪亡の子現るゝ事あくわ其日きたらじ　四かを凡て神と稱る者また人の拜む所の者わ敵し之より超て己を尊くし神の殿わ坐して自ら神ありと爲わ至る　五わき爾曹の中わ在しとき此事を語しを爾曹記憶せざる乎　六彼をして其時わ至りて現れしめん爲わ今かをを抑る者を爾曹志る　七れ不法の隱たる者そでわ働けり今これを抑るもの除るゝまで隱をり　八其時わ至りて不法の者わらわるべし主イエス其口の氣を以て彼を滅さん其臨るとき發す所の榮光を以て彼を發せん　九彼サタンの行爲わ循ひて各樣の僞ある能と徴と奇蹟　十かつ不義の諸の詭譎を以て顯をかの淪亡者の中わ在あり蓋かれら眞理を愛するの愛を受ずして救を得ざる者あれバ也　十一是故わ神うきちが誤を信ぜん爲わ迷惑をして彼等の中わ働かしむ　十二れ凡て眞理を信ぜず不義を好む者の罪を定んとて也　十三主わ愛せらるゝ兄弟よ爾曹の爲わ我儕當わ神に謝すべき也うい神始より爾曹を簡び眞理を信ずるてとゝ靈の聖をわ因て救を得しめ給へを也　十四神われらの福音を以て爾曹を此福わ召き給へり爾曹をして我儕の主イエスキリストの榮光を得しめん爲わり　十五是故わ兄弟よ爾曹堅く立かつ或い我儕の言わるひい我儕の書わ因て教を受たる傳を堅

く守るべし　願くは我儕の主イエスキリスト及び我儕の父の神すなわち
我儕を愛し且恩に因て永遠の安慰と善望を予る者　十七爾曹の心を慰め凡の
善行と善言ホ爾曹を堅固せんことを

第三章　終ホ我これを言兄弟よ爾曹われらの為ホ祈り主の道をして疾ひろ
まり榮を受ることと爾曹の中の如あらしめ　二又我儕をして邪なる悪人より
救るることを得しめよ　凡みホ信ずる者といふ非ざれ也　三然と主
は信實ある者あり彼あんちらを堅くし爾曹を譏てかの悪人より救ん　四爾
曹われらの命ずる事を今すでホ行ふ後もまた之を行いんあとを主ホ頼て信
ずる也　五願くは主なんぢらの心を神の愛とキリストの忍耐に導き給んホ
とを　六兄弟よ我儕主イエスキリストの名ホ託て爾曹ホ命ず我儕より受た
る傳ホ循いすして妄ホ行む諸の兄弟ホ遠かるべし　七爾曹みづから如何して我
儕ホ效ふべきを知ろを我儕あんぢらの中に在て妄なる事を行ず　八また人
のパンを價あしホ食ることあく唯人を累わせざらん為に労と苦をして
晝夜工を作り　九是われら権威なきが故ホ非ずたゞ自己を模楷とし爾曹を
して傚しめん為あり　十われら爾曹の中ホ在しとき人もし工を作ざれば
ず食すべからずと爾曹ホ命じたり　十一ろれ爾曹の中ホ工を作ずして專ら
餘事を務め妄なる事を行ふ者ありと我儕聞たり　十二われら此の如き者ホ靜
ホ工を作て己のパンを食せんあとを我儕の主イエスキリストホ託て命じ
且勧む　十三兄弟よ善を行ひて倦てと勿れ　十四若ての書ホ云る我儕の言ホ從わ
ざる者あらば之を愧しめん為ホ其人を錄して相交ることなかれ　十五然と彼を
敵とせず兄弟の如く之を諫むべし　十六願くは平安の主つねホ何事ホ拘ず爾
曹ホ平安を賜んてとを願くは主爾曹と偕ホ在んてとを　十七我パウロ手づか
ら筆を執て安をとふ書ごとホ之を以て誌とす我が習るわ此の如し　十八願く
は我儕の主イエスキリストの恩すべて爾曹と偕ホ在んことをアーメン

新約全書帖撒羅尼迦後書　終

新約全書使徒パウロテモテ
前書

我儕の救主なる神および我儕の望なるイエスキリストの命に遵ひ
一 パウロ 信仰に由て我が眞子なるテモ
テに書を贈る願くは父なる神および我儕の主キリストイエスより恩寵と
矜恤と平康を受よ○ 二 我マケドニヤに往しとき爾に仍エペソに留り人に
命じて彼處に異教を傳るなとおく 三 また信仰にある神の道を立すして辨
論を生ずる奇談と極りなき系圖に心を寄ることと勿らしめよと勸たり今も
此れ如く行いんことを願ふ 四 誡命は主意い愛あり則ち潔き心と善良心と
僞なき信仰より出 五 或人ことを棄て虚き論に轉り 六 律法の教師と爲んと
して卻て其語る所ろの定論とおろの事を自ら知す 七 われら律法い善なる
の也と知る但し理ふ從ひて律法を用べし 八 律法い義人の爲ふ設たるふ非
す不法あるもの不服あるもの不敬あるもの罪惡あるもの不潔あるもの邪
僻あるもの父を殺せるもの母を殺せる者 九 奸淫を行ふも

の男色を好むもの人を擾むもの讒を言ふもの偽誓ふ者また此ほか正理に悖るあると有ダ爲に設たり　十一これ我が託し給ふ所の福ある神の榮の福音に循へる也　十二我が能力を賜へる我儕の主キリストイエスを謝す蓋わきを嘲ふほじて忠信ある者とあし給へば也　十三われ昔い謗讀たるもの窘迫たるもの狎侮たる者ありしダ我信ぜざるとき知ずして之を行へる故ふふは矜恤を受たり　十四我儕の主の恩およびキリストイエスを在て存つ所の我儕の信仰と愛い極て大ふあれり　十五キリストイエス罪人を救んために世に臨給ふ信ずべく亦疑いずして納べき話あり罪人れうち我い首ダ然とも我ダ矜恤を受しいキリストイエス首先に我ふ寛容を悉く顯し後かれを信じて永生を受る者の我に模樣とあし給へる也　十六願くい蓋世の王すあいち朽ず見ざる一の神ふ窮ふく尊貴と榮光あらんてとをアーメン　十七我子テモテよ先ふ爾を指る所の預言ふ由て爾ふ命ず此預言ふより信仰と善眞心を以て善戰を戰ふべし　十八或人よき眞心を棄て信仰を亡へり　十九此れ如き人の中ヒメナヨとアレキサンデルあり我これをサタンふ付せり是彼等をして誇讀を言ざらしめん爲ふ懲あり

第二章　十一われ殊ふ勸む萬人の爲ふ願告祈禱懇求感謝せよ　二王および凡て權威を有るものゝ爲ふ祈り別て之を行べし　是われら敬虔と端莊を以て都ふ安らかふ日を度らん爲あり　三此い美事あり我儕の救主ある神の意旨ふ適ふこと也　四萬人救をうけ眞理を曉るふ至るい神の望み給ふ所あり　五神い一位あり又神と人との間ふ一位の中保あり即ち人あるキリストイエスあり　六かれ萬人ふ代り己を贖て贖と為せり時いたらば證ずべし　七我これダ爲ふ立られて宣傳る者とあり使徒と作また信仰と眞理を異邦人ふ教る者とあれり我キリストふ在て眞をいひ謊を言ず　八是故ふ我ねダふ人潔き手を聖て怒ふく疑ふく何の處ふても祈んてとを　九また婦女い耻を知よく愼みて宣ふ合ふ衣ふて自ら飾り髮を編てとよ金と眞珠と價貴き衣を以て妝飾とせず　十善行を以て妝飾とせんてとを願ふ神を敬ふ女い如此す

べき事あり十一婦女も凡のこと順ひて靜かに道を學ぶべし十二われ婦女が教を施すことと男の上に權を執ることを許さず婦女も只安靜にそべし十三蓋アダムが前に造られ夫エバが後に造られたれを也十四アダムが惑されて罪に陷れり然とも彼もし信仰と愛と潔と謹とに居るならば子を生ことに因て救を得べし

第三章

一人もし監督の職を欲はゝ是善務を欲ふ也といふ話は誠あり二されば監督たる者は責べき所あく一個の婦夫あるべく謹愼自ら制し品行正く旅客を慇懃に待ひ敎訓をなし三酒を嗜まず人を擊ず柔和また爭ひず財を貪らず四自己の家を善理め端莊を以て其子女を服ひしむ可あり人もし自己の家を理ることを知ずは如何して神の敎會を管ることを得んや五つ新に入し者を監督と爲べからず恐くは驕りて惡魔と同じ罪に陷らん七また監督は外人にも令聞あるべし恐くは誇詐と惡魔の罟に陷らん八執事たる者も亦端莊くし兩舌せず酒を嗜まず利を貪らず九信仰の奧義を潔き良心の中に存べし十此を先試みて責べき所あくを執事の職に當べし十一女執事も亦端莊くし人を誘らず謹みて凡れことに忠信あるべし十二執事は各一個の婦夫あるべし子女と己の家を善理むべし十三善執事の職を務る者は己に嘉級を得キリストイエスに基せし信仰に勇氣を得べし○十四我もし遲らんときわき違く即ち至らんことを望む然と如此かき贈るは十五萬一神の家は活神の敎會ありり眞理の柱と基あり敬ひ興義の大なることは更に疑ふ所あし十六神肉體に顯れ靈に因て義とせられ天使に見れ異邦人に中に宣傳へられ世に信ぜられ榮光の中に舉られ給へり

第四章

一然とも靈明かにいふ後に至らば或人信仰より離れて人を惑す靈と惡鬼とに心を寄ん二善を僞て謊をいひ良心を烙れ三娶ることを禁じ食を斷ことを命ずる者に誘るゝに因てあり食ひ即ち神こをを造り信じて眞理を知る人に感謝して受しむるもの也四凡れ神れ造りし物にも美

あり感謝して受るときは棄べき物あし　うい神より言と祈禱とを由て潔められ
心也　爾もし之を兄弟等に啟るときはキリストイエスの眞役者ありて信
仰と道と爾が從ひし所より善啟より道とを育れたる者あり　妄なる談と老た
る婦より奇き談をすて神を敬ふことを自ら修行そべし　肉體の修行は益す
ること少し惟神を敬ふことは凡そ事ふ益あり今生および來生ふ係る約束を得
あり　之が爲ふ我倦勞苦をし
て　を信ずべく又疑ふべからず　納べき話あり
且詐詐をうく　蓋われら活る神を望ぶあり　彼は萬人より救主ありて殊ふ信ず
る者より救主ありおんぢ此等の事を命じ且敎ふべし〇　おんぢ年幼を以
て人ふ輕んぜらるる勿れ言と行と愛と信と潔を以て信者より模範となるべ
し　おんぢ讀經と勸勉と敎訓とを務めて我が至るを待　預言と長老會より按
手禮とふ由て爾ふ錫ひし所より賜を忽忘するなと勿れ　心を之ふ寄て專
ら之を務むべし　盡おんぢの上達すべてより人ふ明かあらん爲あり　おんぢ
己を愼むことを亦啟るなと愼むべし　恒ふ此等より事を務めよ如此おこなふ時は

己を救ひ亦おんぢふ聽者を救はん
老人を責るなと勿れ之を父より如くし幼者を兄弟より如くし　二　老だる
婦を母より如くして勸めよ少女を姉妹の如くし之を勸るふ貞潔を盡すべし　三
寡婦ある眞の寡を敬ふべし　四　然ど寡婦ふ子あるひ孫おらば彼等まづ己
の家ふ孝を行ひ其親ふ恩を報ることを學ぶべし是神の意旨ふ適ふてと也
眞の寡婦ふて獨居ものい惟神に倚頼み夜も晝も餌求と祈禱を恒おする
也　五　縱樂をおそ寡婦い生ると雖も死る者ありおんぢ此事を命じ彼等を
して責べき所おからしむべし　六　人もし己ふ屬する者を顧ざる者を殊に己の家
族を顧ざるならば信仰の道ふ背き不信者よりも劣をる者なり　七　寡婦を
其籍ふ錄すことは六十歳より少かざる可らず　八　然より一個の夫ある妻なりし者
にて善行ありて稱ある者もしくは子女を育じもの若くは旅客を館したる者
もしくは聖徒の足を洗たる者もしくは艱人を助しもの若くは勤て記の善
事ふ從ひし者なるべし　九　少き寡婦は之を辭るべし蓋かれらキリストふ背

て心を亂すときは再び嫁せんとすきを也 十二 彼等は初め立たる約束を棄るお因て罪お定らるべし 十三 彼等また懶惰なる耳ならず妄お人の風評をいひ好て人の事お闕り言べからさる事をいふ也 十四 是故お我ねがふ少き寡婦は嫁を娶なし子女をうみ家を理て敵する者お僅しても讒るべき柢を得しめさらんことをサタンお從へる者あり 十五 信ずる男あるひは信ずる女ろの家お若し寡婦あらば之を助べし敎會を煩はす可らず蓋敎會をして眞の寡者を助しめん爲あり 十六 善治る長老をた倍して之を尊み言を倦へ敎をおしえて勞する長老を殊お尊むべし 十七 うは聖習お錄して穀物を碾す牛お口籠を掛べからず又勞者は其值を受べき也と云たあり 十八 長老を訴る者あらんお二人三人の證人なくば納べからず 十九 罪を犯せる者お衆人の前おて之を懲むべし是餘の人をして懼しめん爲あり 二十 且れ神とキリストイエスまた選をたる天使の前とおく少おても偏りて行ふこと無して此等の事を守るべし 二一 輕易忘く人お拔手する勿れ人の罪お干るみと勿れ自ら守て潔すべし 二二 爾れ胃れたため及び爾玄たく疾ふお因て恒お水を飲みと勿れ少しく葡萄酒を用ゐべし 二三 或人れ罪い明かおして乱人お先ちて審判れ場ふもき或人れ罪い後お從ふも亦終お隱るふあと能わず

第六章 凡ろ軛の下おある僕い已の主を毎事に敬ふべき者となすべし是神れ名と敎を謗をざらん爲あり 二 信者ある主を有る者い其兄弟たるお因て之を輕んず可らず別て之お事ふべし蓋益を受るもの信者おて愛せらるゝ者あれば也あんぢ此事を敎また勸むべし 三 もし異ある敎を傳て我們れ主イエスキリストの善言と神を敬ふおと合ふ敎を下いさる者あらば 四 此人はつから驕り無知おして議論と言辭れ爭競を好む此お由て媚嫉爭鬪毀謗妄疑 五 また罪ふして眞理を離れ神を敬ひて利を得んと欲ふ人れ爭論おみる也あんぢら此れ如き人お遠のるべし 六 神を敬ひて足ぬるを知れ大ある

利あり 七 われら何をも携へて世に來らず亦何をも携へて往ぬること能ざるなり
明かなり 八 ただ衣食あらば之をもて足とすべし 九 富んと欲する者は
患難と罟また人を滅亡と沉倫に溺らす所の愚おろかにして害ある貪慾に陷
るあり 十 凡そ貪は萬の諸の惡事の根あんなり 或人これを慕ひ迷て信仰の道を離
れ多の苦痛をもて自ら己を刺り 十一 神の人よ之を避て義と神を敬ふ
と信仰と愛と堅忍と柔和とを慕ふべし 十二 信仰の善戰をたたかひ永生を
取べし 爾これを爲ために召を蒙りたり又多の人の前にて善證を作たり 十三 われ
凡ての物をしてを存しむる神およびポンテオピラトに向て善證を作給へる
キリストイエスの前おいて爾に命ず 十四 あんぢ我等の主イエスキリストの現
るる時まで瑕あく責べき所あくして誡を守るべし 十五 神その定め給へる期
いたらば彼を遲ません神は即ち福ある者誰れ王の王もろ
くの主 獨一 死ざるもの近くあたはざる光おに在して人いまだ見
しあたはざる又見あたはざる者なり願くは尊貴と窮なき權力のまおに有アー十
六 ○爾あれ世に富る者に命ぜよ驕るまたあく定なき財を恃まずあく
唯われらを樂ませんとて諸物を豐ふ賜ふ神を恃まず 十七 また善を行ひ善事お
富をしまあく施濟をおして人と共にし 十八 斯て已れ爲に善基を密へ來れ
備をおそべし是眞の生を得ん爲なり 十九 ティモテよ爾託せらをし事を守り
妄なる益おき說および智識と僞り稱ふる辨論とを避べし 二十 或人おれ僞れ智
識ふ從ひて信仰を謬をり願くは寵恩あんぢに在んことをアーメン

新約全書提摩太前書　終

新約全書使徒パウロテモテ〻贈れる後書

第一章　一神の旨〻由てキリストイエスの使徒とされるパウロ　二我が愛する子テモテ〻書を贈る願くは聖父イエスより恩寵と矜恤と平康を受よ　三わ
ある神および我儕の主キリストイエ
れ夜も晝も祈禱〻斷ず爾を懐ふ〻因て我が先祖〻效ひ潔き眞心をもて事
る神〻謝そ　四われ爾の涙を憶て爾を見んことを願ふ是歡喜を我〻充し
めん爲あり　五われ爾の僞なき信仰を念ふ此の如き信仰前〻爾の祖母ロ
イスまた爾の母ユニケ〻あり今爾〻も在ると信ずる也　六是故〻我爾
をして我が按手〻由て爾が受し神の恩賜を復び熾〻せんことを欲しむ　七う
ち神の我儕〻賜へる靈は懼を生ずる靈〻非ず能と愛と謹の靈あれた也　八是故
に爾己れらの主の證を作てと其囚人ある我とを恥とみそ勿れ惟神の能
〻循ひて福音の爲〻我と共〻苦を忍ぶべし　九かれ我儕を救ひ聖召を以て
召給へり是われらの行〻由〻非ず惟神おのが旨と世の成ざりし先よりキ

リストイエスの中ゐ我儕ゐ賜ひし恩惠ゐ由あり　十　この恩惠い今われらの救主イエスキリストの顯れ給ひしゐ由て顯きたりキリスト死を滅ぼし福音を以て生命と壞さる事とを明著ゐせり　十一　我この福音の爲ゐ立られて宣る者とあり使徒とあり異邦人の師とゐれり　十二　是故ゐ我ここらの苦ゐ遇たり然と之を恥とせず識われ我が信ずる者を知かつ我かきゐ託したる者を彼かの日ゐ至るまで守ることを爲得るを信ずれた也　十三　爾キリストイエスゐ有し所の眞の言の模楷を保つべし　十四　爾ゐ託したる善ものを我儕の中ゐをる聖靈を以て守るべし　十五　アジアをる者すべて我ゐ背く事ゐ爾なんぢ知てろ也フゲロとヘルモゲチも其中ゐ在　十六　願くは主矜恤をオネシポロの家ゐ賜へ蓋かれ屢われを慰め且わが鏈を恥とせず　十七　其ロマゐ在しとき急ぎ尋て我ゐ遇たり　十八　願くい主彼をして大の日ゐ至り主の矜恤を得しめよ彼エペソゐ在て如何たかり我ゐ善ゐる所あり

第二章　一　わが子よ爾キリストイエスふゐる恩ゐ堅固あるべし　二　又あんぢ多の證人の前ゐて我より聞し所の事を忠信ゐして能人を敎るゐ足る人ゐ託そべし　三　爾キリストイエスの精兵卒の如く我と共ゐ苦を忍ふべし　四　兵卒を務る者い世事を以て自己を累わせずゐり　五　もし力を角ふもの法ゐ遵ひて角ずんば冠を得べき也　六　爾わが言し所を思ふべし主爾ゐ萬事を曉しめん　七　ダビデの裔より出たるイエスキリスト我が傳る所の福音の如く死より甦りたるを爾心ゐ記べし　八　この福音の爲に我苦を受て罪人の如く繫るるに至れり然と神の道い繫れず　九　是故ゐ我選れし者の爲に凡の事を忍ぶ是彼等ゐもキリストイエスゐある救ゐよび永遠の榮を得しめんため也　十　爰ゐ信ずべき話あり我儕もし彼と共ゐ死ば彼と共ゐ生べし　十一　我儕もし忍ば彼と共ゐ王べし我儕もし彼を知ずと言ば彼も我儕を知ずと言ん　十二　われら信せずと雖も彼い誠あり彼い己ゐ遂ふこと能ざる也と○　十三　あんぢ彼

等をして此事を憶しめ且主の前ゐて彼等を戒め言ゐ因て爭ふこと勿らしむべし是益する所ゐく聽人をして沈淪ゐ至らしむ　十五　ゑんぢ神ゐ悅たる者と爲んてとを務よ且咀る所なき工人とゑりて眞道を正く頒ち欲んてとを務むべし　十六　妄ある益ゐき談を避べし蓋之をゐる者ますく不信ゐ進ゞ　十七　彼等の言ゐ脫疽の如く腐爛るべしヒメナヨとピレトゐ此の如き者の中ゐ在　十八　ゥきら眞を謬りて復生ゐ既ゐ過たりといひ斯て敎人の信仰を滅すゑり　十九　然とも神の置給ひし堅基たてり其上ゐ印ゑり誌していふ主己ゐ屬る者を知とまた云そべて主の名を顧るもの不義を離るべしと　二十　大ゑる家の中にゐ金と銀の器ゑるのミゑらず木と土の器もゑり彼ゐ貴きゐ用ゐる此ゐ賤きゐ用るゑり　二一　人もし此等を離をて己を潔せた貴きに用る器とゑり潔して主の用ゐ合ひ諸の善事を作ことを得なり　二二　ゑんぢ幼少ときの慾を避て義と信と愛を追求め又清心にて主を顧者と共ゥく事を追求むべし　二三　愚なると無學ゑる辯論を避べし蓋之より爭競の起るを知べゑり　二四　主の僕ゐ爭ふべゥらず有平ゐ凡れ人を待ひ敎を善し忍てことをゑし　二五　逆ふ者を柔和を以て戒むべし神ゑるひゐ彼等ゐ悔改むる心を賜て之ゐ眞理を識しめ給ゐん　二六　また彼等ろれ醉さめて惡魔の罟を脫出ん蓋惡魔彼等をして己ゲ旨を行ゐしめん爲に之を擒ゐすゞべ也

第三章

末世ゐ難れ日きたらん爾てれ事を知　二ろの日至らん人たゞ己を愛し食婪矜誇驕傲謗詐不孝恩を忘き不潔　三　不情怨を解ず誘讒慾を縱まゝゐ殘刻善を好まず　四　友を賣放肆自負神よりも快樂を愛そることをせん　五　彼等ゐ敬虔の貌ゐをと實ゐ敬虔の德を棄なんぢ此れ如き者を避べし　六　人家に入て愚ゑる女を擄にするゐ此の如き者ゑり彼の丈ゐ罪を重ね各樣の慾ゐ誘はる　七　常ゐ學とも眞理を識ゐ至ることを能ずゥの人ゐヤンヲとヤンブレダモーセゐ敵ひし如く亦眞理ゐ敵ふゑり彼等ゐ心の壞たるもの信仰ゐ道ゐ庇ていゐ棄られたる者ゑり　八　然と猶てれ上ゐ進ことゑらじ蓋ろれ二人の如く彼等の愚なることも衆れ人ゐ顯るべけれ也　九　傾ゐ我ダ

敎誨品行志意信仰寛容愛忍耐　十一　及び我アンテオケイコニオムルステラわ
て遇し窘と困苦また我が受し窘の如何なるかを知主悪く其中より我を救
給へり　十二　凡てキリストイエスお在て神を敬ひつゝ世を渡らんと志す者い
窘を受べし　十三　悪人と人を欺く人い益悪お進み人を惑し亦人お惑さるお
ん女學て信ずる所れ事を守るべし蓋あんち誰お由て之を學びの幼少
ときより聖書を識ことを知たなり聖書い爾をしてキリストイエスを信ず
るお因て救を得しめん爲お智慧を予ふるもれ也　十六　聖書いみな神の默示お
して敎誨と督責また人をして道お歸せしめ又義を學しむるお益あり　十七　て
も神の人の完全を得て諸の善事を行ふお缺あらん爲なり

第四章　十八　われ神れ前およびあらはるゝ時その
キリストイエスの前おて爾に求む　二　みことばを宣傳ふべし時を
得さるも時みて之を務め各樣れ忍耐と敎誨を以て人を督し責め勸むべし
三　蓋人眞の敎を容す耳を悅たしむる言を好み其私慾お徇ひて己が爲お
師を增加る時來らん　四　かれら耳を眞理より背け奇き談お向ふべし　五　然と
爾すべての事お愼を苦難を忍びて傳道者の工をおし爾の職を盡せ　六　我を
今祭物とならんとそ我が世をさる期ちかづけり　七　わ善戰をたゝかひ
既お馳るべき途程を盡し既お信仰の道を守れり　八　今より後義の冕わが
爲お備おり主そなわち正き審判をおすべき者ろの日お至らて之を我に予ふ獨
われお予るのみあらず凡て彼の顯著を愛ふ者ふも予ふべし○　九　なんぢ務
て速らお我お來ま　十　デマスは此世を愛し我を棄てテサロニケお往りクレ
スがランスがラテヤおテトスがダルマテヤに往り惟ルカのみ我と偕にあり
十一　お迎せり　彌きたる時わがトロアスおケリポの所に遺じよ又衣を携へ
來まま書籍を扨へ來を其皮あるもの尤とも肝要あり　十二　銅匠あるアレキ
サンデル多く我を害せり主ゟ其ゟ行ひし所お循ひて報を爲ん　十五　爾も亦ゟ
れを防ぐべし彼甚しく我儕の言お敵ひたり　十六　我が始て辯官お事由を陳し

とき誰も我と偕にせず皆われを離たり願くは彼等が罪の錮せざらんことを　然と主我と偕に在て我に力量を予へ給へり是わをに由て道ことづく傳り異邦人をして皆これを聽しめん爲なり我救れて獅子の口より出たり　主また我を救ひて諸の惡事より離しめ且わをを救ひて其天の國に入ん願くは榮世々窮なく彼に歸せんことをアーメン　二十　エラストコリントに留れりトロヒモ病われば我これをミレトスに留たりトロヒモ　二一　ユブルとプデスとリノスとクラウデアと兄弟みな爾に安を問ふ　二二　願くは主イエスキリスト爾の靈と偕にあれ願くは恩寵爾曹に在んことをアーメン

終

新約全書提摩太後書　終

新約全書使徒パウロテトスに贈る書

第一章

神の僕またイエスキリストの使徒パウロ同じ信仰に由て我が眞子テトスに書を贈る我神の選び給へる人をして信仰を起さしめ且神を敬ふ眞道を知しめん爲なり　二　誰なき神の創世の前に約束し給ひし永生を望めり　三　神已の定おき給へる期に及びて宣教に由てみの永生の道を顯せり宣教い即ち我儕の救主ある神の命を以て我に託ね給へる所のもの也　四　願くは爾テトスに父ある神および我儕の救主キリストイエスより恩寵と平康を受よ　五　われ爾をクレテに留たる故い爾をして缺たる所を正くし且わが爾に命ぜし如く各邑に長老を立しめんとて也　六　人もし咎むべき所あく一個の婦の夫にして其子女も放蕩をもて訴らるることあく服いざることある信者あらば長老に立べき者あり　七　ろを監督い神の家宰なれば必ず咎むべき所あく己が任をおさず輕易しく怒らず酒を嗜まず人を擊ず利を貪らず　八　遠人を懇切に待ひ善を好み謹慶公義聖潔自

ら制し九學びし所の眞道を守るべし是正
者を折かん爲あり ろい服いすして
多して制禮に屬する者の中ゐい殊ゐ
得ん爲ゐ敬ふべうらざる事を
の口をして箱ゲしむべし十二クレテ人
人い恆ゐ誕を言もの惡獸また懶惰あし
あり是故ゐ嚴く彼等を戒め彼等を
談と眞理を藥る人の立し律法ゐ心を
の物きよく汚たる人と不信者にい一
心ともゐ汚をたり 彼等自ら神を
むべき者あり服いざる者あり諸の
第二章 然と爾い正敎ゐ合ふ事を
る事とを勸かつ信仰と愛と忍耐とゐ

聖潔ゐ合ふ行をあさん事と人を謗らず酒を多く嗜まず善事を人ゐ敎るゐ
とゝを勸べし 四また彼等をして幼婦ゐ夫を愛し子を愛し 五自ら制し貞潔
ゐし家務をゐし慈悲を懷き其夫ゐ服ふ事を敎しむべし是神れ道の譏をさ
らん爲あり 六爾また幼男ゐ自ら制する事を勸むべし 七あんぢ何事を作ゐ
もゐれを善行の模楷とならん事を務め敎を傳るに信實を以し端莊しくし 八
責べき所あき正言を表わすべし此い敵する者をして我儕の惡を言に緣あ
く自ら愧るてとを爲しめんため也 九僕ゐい己の主人ゐ服ひ何事を爲ゐも
之を悅ばせん事を務め之ゐ言咄いすず 十物を竊取す之ゐ忠信を盡すべき事
を勤べし此い何事を爲ゐも我儕れ救主神れ敎を飾る事をせんため也
十一夫すべてれ人ゐ救を賜ふ神れ恩ゐあらいき 十二我儕を誡め我儕をして神を
敬わざる事と世の中れ慾を棄て自ら制し正く且虔まて今世ゐ存へ 十三望所
の福と大ある神そゐあいち我儕れ救主イエスキリストれ榮の顯きん事を望
待しむ 十四キリスト我儕の爲ゐ己れ身を舍給へり是わきらを諸の罪より贖ひ

出し且己の爲ふ一民を潔め之をして熱心に善事を行いしめん爲なり 十五 なんぢ此等の事を以て語りまた勸め爾の諸の權威を以て戒むることをすべし爾人に輕ぜらるゝ勿れ

第三章 一 なんぢ彼等をして執政と權威ある者とに服し且順ひ凡の善事を行ふ備をあし 二 人を謗らず爭いず和平にし衆の人を待ふあ柔和を以せんあとを憶起さしむべし 三 我儕も前にいい愚ある者順いざる者迷るもの諸般の慾と樂の奴隸と爲るもの恨と娼とて日を度しもの惡べき者また互あ惡あへる者ありし也 四 然と我儕の救主ある神の慈と人を愛し給ふ愛れ顯きし時 五 なれ我儕が行ひし所の義き功あ由ず唯ろの矜恤あ循ひ重生の洗と聖靈あ面て新あする事とを以て我儕を救へり 六 聖靈れ即ち神我儕をして其恩により義とせらを嗣子たるを得て窮あき生命を望み待しめん爲に 七 我儕の救主イエスキリストあ由て豐あ我儕の上に注たまへる所のもの也 八 此に信ずべき話なり我なんぢ夕此等の事を切あ認り神を信ずる者をして愼みて善功を務しめんあとを欲す此等の事い美また人あ益あり 九 あんぢ愚ある辨論と系圖と爭鬪と律法の紛爭を去べし此等い益なく亦虛妄なきべき也 十 異端を稱へ分を起す人い剛あれを一たび再び警めてのち遠くべし 十一 夫うくの如き人い邪僻あして自ら罪あるを知て倘これを犯すことを爾知べあり〇 十二 アルテマス或いテキコを我なんぢあ遣さんとき爾急ぎてニコポリスあ來り我あ就べし我彼處あて冬を過さんと定めたり 十三 法律家ある ゼナス及アポロを懇切あ送り彼等をして乏き事あらしめよ 十四 又わをら あ屬る者をして善功を務め人の所需用を資んあとを學びて果を結ざる事あらしめよ 十五 我と偕に在もの皆あんぢあ請ふ信仰あ在て我を愛する者の安をとへ願くい恩寵あんぢら衆人あ偕あらんことをアーメン

新約全書提多書　終

新約全書使徒パウロピレモンに贈る書

イエスキリストの爲に囚人となれるパウロ及び兄弟テモテ我儕ら愛を
2 蒙れる者われらの勤勞の侶なるピレモンに及び我儕と共に戰ふ姉妹アピア我儕と共に戰
3 ふ兵卒アキポ並に爾の家内の教會に書を贈る願くは爾曹われら
4 の父なる神および主イエスキリストより恩寵と平康を受よ○われ祈る
5 時に常に爾の事を陳て我神に謝す蓋われ爾が愛と信仰をもて主イエス
6 に向ひ又諸の聖徒に向ふことを聞ばなり我が祈る所は爾と偕に信仰を
有てる人あんぢらの中なる凡の善事を知ふ因りの信仰功效をあしキリス
7 トの榮光を顯いすに至らんてと也兄弟よ我あんぢの愛に由て大なる喜
樂と安慰を得たり蓋聖徒等の心あんぢに由て安ぜられたれ也是に由
8 て我キリストに在て憚る所なく爾に其作べき事を命ずることを得と雖も
9 愛の故に因て寧ろ爾に求む我すでに年老いまキリストイエスの爲に囚
10 人となれるパウロ此の如き狀にて わが繩縲の中にて生し子なる・オチシ

一一この事を爾に求む　一二われ先にい爾に益ある者とありしが今い爾にも我にも
益ある者とあれり我かをを爾の所へ歸す　一三爾これを納よ彼い我が心あり
わを彼をして我所に留め我が福音ゆえ縲紲れ爲に受たる縲紲れ中に爾に代て我
に事しめんと欲へり　一四然とも我爾なにも行を好ます
是爾ぢが倶絏止を得ざるに出ずして心より出んことを望めたる也　一五彼が
暫く爾を離しい爾をして永遠これを留おき　一六此後これを僕の如くせず僕
に超るもの愛する兄弟と作しむる爲に非ざりしを知んや我にも殊に愛
す況んや爾肉に由ても主に由ても之を愛せざる可んや　一七爾もし我を伴と
あさば請わをを納る如く彼を納よ　一八彼もし爾に不義をあし又爾なにに負
債あらば爾これを我に歸せよ　一九我パウロ親手これを書り我うあらず償い
ん爾い身をもて償ふべき負債われにお有されと我これを言ず　二〇兄弟よ我爾
より益を主に由て得んことを望む爾わが心をキリストに由て息しめよ　二一
われ爾ぢが服ふことを深く信じて之を爾に書贈る爾の行ふ所い必ず我いふ
所よりも勝らんことを知り　二二又あんぢ我ためにわ寓所を備へよ蓋われ爾曹
の所禱に由て終に我身い爾曹に予られんと意へた也　二三イエスキリストに
在て我と偕に囚人となれるエパフラスコアリスタルカも同く安を爾に問　二四わが勤勞の侶なるマ
ートの恩惠つねに爾曹の靈と偕に在んあとをアーメン

新約全書　腓利門書　終

第一章概意 神昔い多の區別をあし多の方をもて預言者より列祖に告給ひしが　この末日おい其子に託て我儕に告たまへり神い彼を立て萬物を嗣と　し且かをを以て諸の世界を造りたり　三彼い神の榮の光輝ろの質の眞像ふ　て已が權能の言をもて萬物を扶持ひをらの罪の淨をなして上天ふ在す威　光の右ふ坐しぬ　四彼が受し名の天の使者の名よりも愈れる如く彼等よ　り愈れり　五ろい天の使等の中なる誰に嘗て如此いへる乎あんなり我子　あり我今日あんちを生りと又わを彼の爲に父とならん彼い我ために子と　作べしと　六また冢子を世に入しむる時に曰給へるい神の諸の使者い皆ふ　をふ脱くべし　七また使者等に就ていへり彼ろの使者等を風となし其役るよ者　を火燄とあすと　八ろの子に曰るい神よ爾の位い世々に及び爾の國の　杖い正き杖なり　九あんちを義を愛し惡を惡む是故ふ神すあはち爾の神い喜　樂の膏を以て爾の倶よりも愈りて爾に沃り　十また曰く主よ爾元始ふ地の

基を爲く天も爾ダ手の工あり　十二　此等い亡ん然と爾い悟に存ん此等い凡て
衣の如く偕ひん　十三　爾あれらを袍の如く捲む又かれらい變らん然と爾い變る
よとゐし爾の諸い終ざる也　十三　使者等の中ゐる誰に爾の敵を爾の足發とゐ
そまで我右に坐すべしと曾て云給へるゐと有しや　十四　凡て天の使者い救を
嗣んとする者に事んため遣さるゐ靈ゐ非ずや

第二章

是故に我儕聞し所を流過るゐと
ニ　ろれ天使等に託て告給ひし言竪立して凡の違逆と不順とゐ正き報を
受たらんにい　三　此の如き大なる救を我儕等閑ゐして何で逃るゐとを得
んや斯い始め主に託て申されたるを聞し者とも我儕ゐ言證たり　四　神も亦
ろの聖旨に循ひて休徴と奇蹟および萬殊の異能と分予ふる所の聖靈を以
て彼等と偕に證せり　五　ろれ神い我儕ダ言とゐろの來らんとする世を天の
使等にい服いせざりき　六　或篇ゐ人證して曰けるい人を誰として爾あれを
心ゐ記るや人の子を誰として爾てれを眷顧るや　七　爾かをを天の使等より
少しく遲しむ彼ゐ榮と尊貴を冠らせ又ゐんちの手ゐて造りし者の上ゐ之
を立たり　八　ゐんな萬物を其足下ゐ服せしむ既に萬物を之に服せしむれ
ば必ず服せずして遺る物あし然と今ゐ至るまで我儕萬物の未だ之ゐ服せ
しを見ず　九　惟ゐれら天の使等より少く遲されし者即ち死の苦を受しゐ因
て榮と尊貴を冠せられたるイエスを見たり其死たるい神の恩に因て衆の
人ゐ代り死を嘗へんダ爲あり　十　是おはくの子を榮に導かんとて其を救ふ
君をして苦難を以て成しむるい萬物の萬物を造れる者ゐ應
ると也　十一　ろれ潔る者と潔らるゝ者と凡て一より出ゐ故に彼等を兄弟
と稱るを恥とし給いず　十二　曰らく我ゐんちの名を我ダ兄弟に示さん爾
を敬會の中に讃んまた曰く我かれゐ依賴ん又いそく我と神の我ゐ予へ
し諸子を祝よ　十三　ろれ諸子い偕ゐ肉と血とを具れば彼も同く之を具ふ是死
をもて死れ權威を有るもの即ち惡魔を滅ぼし　十四　かつ死を畏て生涯つゐダ
るゝ者を放たん爲あり　十五　實ゐ天の使等を助ずアブラハムの子孫を助く

是故ゐ神ゐ屬る事について矜恤と忠義ゐる祭司の長とゐりて民の罪を贖はん爲に諸事に於て兄弟の如なるゐ宜ゐり　蓋これ自ら誘はれて艱難を受たれバ誘はるゝ者を助得るゐりの

第三章

是故ゐ同く天れ召を蒙りし潔き兄弟よ　ニ　モーセ神の全家ゐ忠義をせし如く己を立し者に忠義ゐる我儕ダ信ずる所れ使者たる祭司の長たるイエスを深く思ふべし　三　ろゐ家を建りし者の家より過て榮ゐるダ如く彼もモーセよりゐ過て榮を受べき者とせられたり　四　凡ろ家ゐ之を建れる者ゐり萬物を造れる者ゐ神ゐり　五　夫モーセゐ將來ふ言傳へられんとそる事の證をせんダ爲ゐ僕人の如く神の全家ゐ於て忠義をゐし　六　キリストゐ子たる者れ如く神の家を宰れり我儕もし信仰と望の喜とを終まで堅く保ち我儕ゐ其家ゐり　七　是故ゐ聖靈の云る如くせよ爾曹もし今日其聲を聽ダ野の　八　爾曹心を剛愎にする勿れ其處ゐ於て爾れ列祖われを試ミ我をためし又四十年の間わダ作爲を觀

たり　十　是故ゐ我ろの代の人を怒て彼等ゐ常ゐ心惑りと曰り然と我道を知ざりき　十一　故ゐ我憤りて彼等ゐ我ダ安息ゐ入べからずと誓たり　十二　兄弟よ爾曹ダ中に不信仰ゐる惡き心を懷て活神れ前より離れ墮るゐと慎むべし　十三　爾曹のうち誰一人罪の誘惑に由て剛愎ゐあらざるやう今日と稱るうちゐ日々互に相勸めよ　十四　ろゐ我儕もし始の信仰を終まで堅く持たばキリストに與る者とならん　十五　夫いへる言ゐり若し今日ろの聲を聽ば怒を惹し時のごとく爾曹の心を剛愎にする勿れ　十六　聞てゐ怒を惹し者ゐ誰ぞやモーセに從ひてエジプトより出たる衆の者ゐ非ずや　神ゐ四十年のあひだ誰ゐ向て怒しや罪を犯して其屍を野ゐ仆しゝ者ともゐ怒れるゐらずや　十七　又ろの安息に入べからずと誰に向て誓しや信仰せざりし者等ゐ誓るゐらず　十八　是に由て觀ベ彼等ダ入ゐとを得ざりしゐ不信ゐ由てなり

第四章

是故に我等畏るべし其安息ゐいる約束ゐ今も尚のこるとも恐くゐ亦爾曹のうち之に及ざる者ゐらん　二　蓋われらも彼等ダ如く福音を宣傳

られたり惟かれらが聞し所の言いろの信仰劑ぎりしが故に聞る者に益あ
からざ　三信ずる所の我儕い安息あ入あとを得あり即ち言給ひたるが如し
我怒れるとき誓て彼い我が安息に入べからずと云り然とも地基を奠し時
より其工いみあ成り　四ろい或箇あ七日あついて左の如く云り神い第七日
あ凡て其工を息めりと　五又あれ箇に彼等い我が安息に入べらずと云り
然た之あ入べき者あり先あ福音を傳られたる者い信ぜざるに由て入ざ
りし也　六是故に多年を經て後またダビデの書に於て日を定て今日と云り
前に云し如く今日もし其聲を聽ば爾曹心を剛復あする勿を　八若ヨシユア
彼等を息せあば其れち神い他の日を言ざるべし　九然を安息い神の民あ遺
きり　十既に安息に入し者い神あのれの工を息めり
十一是故に彼等の如き不信仰に傲ひて陷ざるやう我儕あれ安息あ入んあと
を黽勉べし　十二ろれ神の言い活てかつ能あり兩刃れ劍よりも利く氣と魂ま
た筋節骨髓まで剖ち心の念と志意を鑒察ものあり　十三また物として神
の前に顯をざるいあし我儕が係をる者の眼の前あ凡のもの裸あて露る〇
然ば我儕に雲霄を通りて昇りし大なる祭司の長をあはち神の子イエス
あり故あ我儕信ずる所れ敎を固く持つべし　十五蓋わをらが衰弱を憐恤あと
能ざる祭司れ長い我儕に非ず彼い凡の事あ我儕の如く誘いをたをと罪を
犯さゝりき　十六是故に我儕愷をうけ機に合ふ助とある恩惠を受ん爲あ憚ら
ずして恩寵の座に來るべし

第五章　人の中より選るゝ諸の祭司の長い人のために神あ屬あとを任ぜら
をて罪の供物と犧牲を獻るあとをする者なり　二已ごづから衰弱に周るを
ば亦愚昧ある迷へる者を憐むあとを得あり　三是に因て民れ爲にあす如く
己が爲にも罪の禮物を獻ざるを得ず　四あの尊貴いアロンれ如く神の召を受た
る者あ非をば自ら之を取者なし　五此れ如くキリストも自ら尊びて祭司の
長とい爲ざりき爾い我子あり我今日爾を生りと言し者彼を尊びて然なせり
六また別の箇に爾い窮あくメルキセデクれ玽の如き祭司たりと云給へる

が如し　か肉體に在しとき哀哭び涙を流して死より己を救得る者に祈りまた懇求をあし其敬畏あよりて聽るゝあとを得たり　八かゝ子たれども受る所の苦難に由て順ふあとを效ひ　九既に完全けれた凡て彼に順ふ者れ永救の原となをり　十彼はメルキセデクれ班の如き祭司の長ありと神に稱らをき○　十一此に就て我儕多け語るべき言あれと爾曹が耳にふきに因て講明がたし　十二既ゐ爾曹ゐ時を經あと久しけきを以人れ師となるべき者あるに今また神の元し給へる教の端を教らをざるを得ず爾曹ゐ堅き食物あらで乳を用べき者となをり　十三凡そ乳を用る者ゐ赤子あれゞ義に屬る教に熟せず　十四夫りたき食物ゐ心を勞かせ練て善惡を辨へうる成人の用るもれ也

第六章　是故ゐ我儕キリストの教の始を離き死行の悔改め神に屬る信仰　二萬殊の洗の禮また手を按あと死し人の復生うぎりあき刑罰あをらの教の基ゐ再び置あとをせずして完全に進むべし　三もし神許し給ゐゞ我儕あれを行ん　四ろゐ一び光照をゐ天の賜をうけ聖靈を蒙り　五神の善言と來世の權能とを嘗ひて後　六墮落する者ゐ神の子を再び十字架に釘て顯辱とをゐ故に復てれを悔改に立返らそるてと能ゐざる也　七ろれ地志も〳〵其上に降る雨を吸入て新者の爲にあるべき菜蔬を生ぜゞ神より恩を受　八然と非棘と蒺藜を生ぜゞ棄られ且詛ゐ近く其終ゐ焚るべし　九愛する者よ我儕如此いへと爾曹が此ゐ愈れるてと卽ち救に近てとを深く信ぜり　十神ゐ爾曹が先に聖徒ゐ事へ今も倘てれに事るろの功勞と聖名の爲に顯しゐ其愛を忘るゝ不義ある者ゐ非ず　十一爾曹おの〳〵終に至るまで疑を懷かざる望を保んが爲ゐ以前と同じ慇懃を表し怠らずして　十二ろの信仰と忍耐を以て約束を嗣る者に傚んてとを我儕欲へり　十三ろれ神ゐアブラハムゐ約束し給しとき己より大ある者の指て誓ふべきあきが故に己を指て誓　十四曰給ける我あんなを大ゐ恵まん又あんちの子孫を大ゐ益ん　十五ろれ忍て此の如く約束のものを得たり　十六凡ろ人ゐ己より優たる者を指て誓ふまた事を定る據ゐ凡て彼等の爭辨を止るあり　十七然な神ゐ約束を嗣者に其冒の易ちざる

てとを急求さんとして約束の上ゐまた誓を立給へり　十八　神の謀ることと能ざる此二件の易きことより前ゐ立てところの望を執んとて怒を避たる我儕を慰めんが爲なり　我儕が此望ひ靈魂の錨の如し堅固して動かず幔の內ゐ入　二十　我儕の爲にイエス前驅して其處ゐ入メルキセデクの班の如く第ゐ祭司の長となれり

第七章　此メルキセデクひサレムの王ゐて至高き神の祭司なりしがアブラハム王等を殺して旋しとき彼アブラハムを迎て祝せり　二　アブラハムも之ゐ凡て所獲の十分の一を分たり先ろの名を譯べば義の王次ゐサレムの王と云ふことき即ち平康の王なり　三　彼ひ父なく母なく族譜なく生の始なく亦終もなし神の子ゐ象られて恒ゐ祭司たりき　四　先祖アブラハム所獲の最も善物の十分の一を以て彼に予れが其人の如何ふ尊のを思ふべし　五　レビの子孫のうち祭司の職を受る者ひ律法ゐ循ひて民即ち其兄弟より十分の一を取ことを命ぜらる彼等ひアブラハムの腰より出たる者と雖もゐは然ゐせり　六　されど此血脈ゐ非ずして彼ひアブラハムより十分の一を取て其約束を有てる者を祝せり　七　劣きる者の優れる者ゐ祝さるふひ論なきこと也　八　此ゐる十分の一を受る者ひ死べき者彼ゐるひ活る者ゐりと證せられたり　九　また十分の一を受る所のレビもアブラハムゐよりて十分の一を輸たりと言べし　十　蓋メルキセデクが彼ゐ遇るときレビも其父の腰ゐ在べゐり　十一　民ひレビの高ある祭司の職ゐ本きて律法を受たり若ての職ゐ賴て完全ことゐらべ何ぞ別ゐアロンの班と稱ざるメルキセデクの班の如き祭司の起ることを求めん乎　十二　既に祭司の統のゐる時ひ律法も亦必ず易るべし　十三　此等の事ひ祭壇ゐ役たる者ゐき支派ゐ屬る者を指て言り　我儕が主のユダより出しことを明のゐりモーセての支派ゐ就て祭司の職のてとひ何をも言ざりき　十四　既ゐメルキセデクれ如き他の祭司進たれば律法の易ることも愈明らけし　十五　彼ひ肉體に係る律法の例ゐ循ひて立ず朽ざる生命の能ゐ循ひて立りとも蓋メルキセデクの班の如く祭司たりと證せられたれ也　十六　

れ律法い何事をも全うせし所あし　是故ゐ前の法度いろの衰弱と益あき
を以て廢せられ更ゐ愈れる善望を立られたり我儕ての望ゐ因て神ゐ近く
てとを得あり　二十　二十一　のの人々い誓あくして祭司とあれと彼い誓を以て祭司
とあれり　是主あいりあき誓を立て悔いメルキセデクの例の如く窮あく祭
司たりと語れる者ゐよる是の如くイエスい誓ゐ非されば祭司とならざる
ほと尤も善契約の保証人とあれり　二十三　彼等い死あるゐ因て永く存こと能い
ず故に祭司とありたる者多りき　二十四　然とイエスい窮あく存ば故ゐ易てとな
き祭司の職を有り　二十五　是故に彼い己ゐ頼て神ゐ就る者の爲ゐ懇求んとて恒
に生れば彼等を全く救ひ得あり　二十六　是の如き祭司の長い我儕に當れる者な
り彼い聖潔して不善てとあく纖垢あくして罪人に違かれり且天よりも高
し　二十七　又ゐの祭司の長等の如く先ゐのれの罪のち民の罪の爲ゐ日ごと犧牲
を獻べき由なし蓋そでゐ一次ゐのれを獻て之を成たあり　二十八　ろれ律法い弱
き人を立て祭司の長とあせり然と律法の後の誓の言い窮なく全き子を立
たり

第八章

我いへる所の肝要い是の如き祭司の長の我儕に在あとあり彼い天
に於て大なる威光ある者の位の右に坐して　二　聖所に役ふ即ち人の建る所
に非ず主の建たまへる所の眞の幕屋あり　三　諸の祭司の長の立られたるい
禮物と犧牲を獻る爲あるば故ゐ彼も亦ゐらすゐ獻る所れ物あるべし　四　彼
もし地ゐ居ば祭司と爲べからず蓋すでに律法に循ひて禮物を獻る祭司あ
をば也　五　彼等ば事る所い天ゐある者の狀と影ありモーセ幕屋を造らんと
せし時に爾愼て凡の事をゐそにい山ゐ於て我ゐんちに示しま所の式に遵
ふべしと言されたりし如し　六　然と今ろれい勝れたる職を得たりろい初の契約
たる契約の中保となる是の如く彼い勝れたる約束ゐ基きて立られ
もし廢るゐとあくば後の契約を立るゐとを索めじ　八　ろの廢る所を彼等に
示して曰く主いひ給ひけるい我イスラエルの家とユダの家に新約を立て
全備するの日來らん　九　この約い我手を執て彼等の先祖をエジプトの地よ

り導き出せる日ゟ立し所の如きに非ず蓋うをら我が契約に居ず我また彼
等を顧ざりしが故ありと主いひ給ひたり　小　また主いひ給ひけるい其日の
後われイスラエルの家ゟ立んとをる契約い此ありわをい我が律法をうの
念ゟ懷また其心に銘さん我うをらの神とあり彼等我が民と爲べし　十二　各人
うの邦人を其兄弟ゟ敎て爾主を識と復いいし蓋小より大に至るまで悉く
我を識ん　十三　われ彼等の不義を恤み其罪と惡をまた意に記ざれば也　うを
既に新と謂しい初の物を舊とするも舊て衰る物い殆んと消廢んとす

第九章

初の契約にい祭の禮儀と世ゟ屬る聖所と稱く　二　内に燈臺と案と供のパンあり
聖所と稱く　四　ゟふ金の香鑪と徧く金を被ひし契約の櫃あり此中ゟマナを
藏めたる金の壺とアロンの芽しよ枝と二の契約の碑あり　五　上ゟい榮光
を覆へる榮耀のケルビンあり今これらに就て詳ゟ言ず　六　此の如く此等
のもの既に備とり祭司等い常に前の幕屋ゟ入て祭を行り　七　奥ある幕屋い

祭司の長のみ年に一次いきど血を携ずしていい入ゟとゐし是れのれと民の
愆の爲に獻るあり　八　聖靈われを以て前ゟ幕屋ゟなほ在りし時い至聖所に
入べき路の顯れざりし事を示そ　九　これ幕屋い當時のために設られたる表
式あり之に循ひて獻たる禮物と犧牲いうの奉事る者の眞心を全うするゟ
と能いざりき　十　此等いたゞ肉體に屬る儀文ゟして食もの飲もゝ灰さま
ゞの洗滌と共に振興らん時まで負せらをたる耳　十一　今キリスト既に至れ
り彼い來らんとをる嘉事ゟ祭司ゟ長にして手ゟて造をる幕屋すゐいち此
世に屬る所ゟ非ざる大ゐる全き幕屋ゟより　十二　羊犢の血を用ず
己が血をもて一たび聖所ゟ入て永遠贖をゐすゐとを得たり　十三　もし汚穢ゟ
灑て牛ゟよび羊の血また焚る牝犢の灰ゟと肉體を潔るゐとを得ば　十四　況
て永遠靈によりて瑕ゟくして己を神ゟ獻しキリストい血い爾曹ゟ活神を奉
事せんがため死の行を去しめて其心を潔るゐとを爲ざらん手　十五　是故ゟ彼
い新約の中保とゐれり是はじめい契約の時ゟ犯せる罪を贖ふべき死ゐる

に由て召きたる者の約束ある永世の嗣業を得んが爲なり　一六凡そ遺言あるときは必ず之を錄したる者の死たるを顯さゞるを得ず　一七遺言は錄せる者の活る時は少しも力あるなし　一八是故に初の契約も血あくして立ざりき　一九モーセ律法に遵ひて諸の誡を衆の民あげ犢と羊と血および水を取て絳の毛と牛膝草をもて書と衆れ民ゐ灑て云　二〇みを神の爾曹に命じ給へる契約の血あり　二一また此の如く血をもて幕屋と凡の祭器ゐ灑り　二二凡そ律法ゐ循ゐ諸れ物ゐ血を以て潔らる血をを流すゐと有ざれば赦さるゝ事あし　二三是故に天ゐ在ものゐ象りたる物ゐ必ず此等をもて潔られしかと天に在もものゐ此等よりも愈りたる犧牲を以て潔らるべき也　二四キリストゐ眞の物の模ある手にて造る聖所に入ず今より永く我儕れ爲ゐ神の前ゐ顯れんとて眞實の天に入ぬ　二五また彼ゐ祭司の長は年ごとゐ他の物れ血をもて聖所に入ごとく屢おのれを獻るゐとをせず　二六もし然ずば彼創世より以來ゐ〳〵苦難を受べきなり然と己を犧牲とゐして罪を除かんが爲に今世の季にひとたび顯現たり　二七一たび死るゐと死て審判を受るゐと事ゐし　二八如此キリストも多の人の罪を負んが爲ゐ一たび犧牲とせらる彼ゐ復罪を負てとなく己を望む者に再び顯現て救を施すべし

第十章

律法ゐ來らんとする美事れ影ゐして實れ形ゐ非ざれば年ごとに斷ず獻る所の祭物を以て神ゐ來る者を恒ゐ成全そるゐと能ゐず　二もし成全するてとを得べ獻祭者一たび潔られ復罪を覺ゑざるが故ゐ獻ることを止ざらん乎　三然と年ごとゐ此祭をゐもに因て罪を憶るゐと現ゐるよ也　四みを牛と羊の血ゐ罪を除くゐと能ざるに因　五是故ゐ彼世に臨るとき曰ける

自廿七至十章九節　六百四十九

ゐ財犧牲と禮物を欲ず唯わが爲ゐ肉體を備ふ　六みち燔祭と罪祭を悅ず　七時われ曰けるゐ神よ我なんぢの旨を行んとて來る即ち我について書に錄されたり　八先ゐ犧牲と禮物と燔祭と罪祭すゐいち律法ゐ循ひて獻るものを欲ず又悅べずと言　九後にゐ神よ我なんぢの旨を行んと

とて來たりと言ふの後ある者を立んが爲め其先ある者を除けり　十ハ
適て我儕ハ潔らる此ハイエスキリストの一次おのが肉體を献しお因てあ
り　十二すべて諸の祭司ハ日ごとお立て祭事をなし少の罪を除おと能いざる同じ犠
牲を屢々献ぐ　十一然と此人ハ一次罪の爲に一の犠牲を献て窮なく神の右に
坐し　十三ろの敵を足發となさん時を俟り　十四蓋ふき一の献物を以て潔る者を
永遠全成すれば也　十五聖靈また我儕に之を證す蓋みの日の後われ彼等と立
んとする契約ハ此なりと云る後に　十六主いひ給ハく我が律法を其心お置ろ
の衷に銘し　復ろの罪と惡とを我が意に記とと有がゆえ也　十八既に此等の
赦わらんにハ復罪のために献るおと無るべし　十九是故に兄弟よ我儕イエス
の血に面て其我儕の爲に開たる新しき生路より幔ある其肉體を過り　二十
すして至聖所お入事を得　二一かつ神の家を理る大ある祭司おをば　二二我儕
誠實の心と疑ふざる信仰を保ち心の惡念を濯れ清水をもて身を洗れ
て近くべく　二三又認ハす所の望を動さずして固く守るべし蓋約束せし者ハ

誠信あれば也　二四われら互に顧て愛心と善行を激勵し　二五會集を輟る或人
に效ふおとなく共お相勸め其日いよ〳〵近るを見て益此の如くおすべし
二六若われら眞理を曉得せられし後ゐは放縱お罪を犯さば罪を贖ふ犠牲ま
た有おとおく　二七惟おそれて審判を待ことと仇敵を焚滅さんとする烈火の
み遺るあり　二八モーセの律法を廢る者もし二三人の證あらば憐まるゝことと
無して死べし　二九況て神の子を蹂躙みづから潔らきし契約の血を尋常れも
のとおし又恩を施す靈を侮る者の受べき其罰の重おと幾何と意ふや　三〇主
いへく仇を報るハ我おおり我報べし又いへく主うれ民を鞫かん如此いへ
る者を我儕ハ知　三一活神の手に陷るハ畏るべき事あり　三二んぢら昔し光照
を受しのち大ある苦の戰爭を忍たりし日を憶起べし　三三或ハ詬辱と艱辛を
うけ人お觀玩の如くせらるゝ或ハ斯る事におふ者お與るおとを爲り　三四ハ
圄囚わが紲絏お在を詑恤また己がため
に業あるを知り人の圄囚が業を奪んとするをも忻びて受たり　三五是故お爾曹

の大ある報を受べき信仰を投棄るてと勿れ 三六 ◎なんぢ必ず用べきものあれ
忍耐あり是神の旨を行ひて約束せしものを受んが爲あり 三七 今片時ありて來る
者きたらん必ず遲らじ 三八 義人ハ信仰ある由て生べし若し退ことあらば我が靈魂ハ
ものを喜とせじ 三九 然ど我儕退きて沈淪ふ及ぶべき者ふ非ず信じて靈魂ハ救
を得べき者ぁり

第十一章

一 ◎うれ信仰ハ望む所を疑ハず未だ見ざる所を憑據とするもの也 二 ◎
古の人ハみな信仰ふ由て美稱を得たり 三 われら信仰ふ由て諸ハ世界ハ神の言ふ
て造れ如此ゐる所のものハ見べき物ふ由て造れざるふとを知 四 ◎信仰ふ
由てアベルハカインより愈れる祭物を神ふ獻て義者と證せらをたり蓋神
うの禮物ふついて證し給へば也かれ死れとも信仰ふ由て今ふ言へり 五 ◎
信仰ふ由てエノクハ死ざるやうふ移さをたり神ハれを移しまふ因て人見
出ざるとを得ざりき彼いまだ移されざる先ふ神ふ悅ばるゝ者と證せられ
し也 六 ◎信仰ふくば神を悅ばすふと能ハず蓋神ふ來る者ハ神ハあるを信じ且

神ハ必ず己を求る者に報賞を賜ふ者あるを信ずべけれ也 七 ◎信仰に由て
ノアハ未だ見ざる事の前を豫り敬みて其家族を救ん爲ふ舟を設けたり之
ふ由て世ハ人の罪を定めまた信仰に由る義を受べき嗣子となれり 八 ◎信仰
に由てアブラハムハ召ろの承繼べき地に往とて命を豫り之に遵ひ召ろの往と
ふろを知ずして出たり 九 ◎彼また信仰に由て異邦ふ在ふ如く約束の地に寓
り同じ約束を相嗣るイサクヤコブと共ふ幕屋に居り 十 ◎ろハ神ハ造營める
所の基ある京城を望めば也 十一 ◎信仰ふ由てサラも孕を寓さるゝ力をうけ年
邁しゝとも子を生り是約束せし者ハ誠信ありと玄つをば也 十二 ◎是故ふ死た
る者の如き一人より天の星の多と海邊の砂の數へ難きふ如く生出たり 十三 ◎
此等ハ皆信仰を懷きて死り未だ約束者を受ざりしが遙ろに之を望て喜
び地ふ在てハ自ら寓旅なり寄寓者ぁりと言り 十四 ◎如此いふ者ハ家鄉を尋る
事を表す也 十五 ◎彼等もしろの出し地を念ハゞ歸るべきの機ありしなるべし
然ど彼等ハ更に愈る所すぁわち天に在とふろを慕へり是故に神ハ其

神と稱るゝことを耻とせざりき蓋かをられ爲に京城を備へ給ふれべ也信
仰に由てアブラハムい試ちをし時イサクを獻たり彼い約束を受し者ある
ダ其獨子を獻たり此子に就てい爾の子孫イサクに由て稱らるべしと云
きたりき彼おもへらく神い死より之を復活し得ると即ち死より彼を受
しダ如ありき信仰に由てイサクの來らんとする事に就てヤコブとエサ
ウを祝せり信仰に由てヤコブい死んとする時にヨセフの二人の子を祝
し又ろの杖の頭に扶て崇拜をゐせり信仰に由てヨセフい死んとする時
にイスラエルの子孫のエジプトより出る事について語り又おのダ骸骨の
事に就て命じたり信仰に由てモーセの生をたる時ろの美都き子
あるを見て三月の間これを匿し又王の命をも畏ざりき信仰に由てモー
セい成長し時パロれ女れ子と稱るゝを辭たり暫く罪の樂を享んよりい
寧ろ神の民と共に苦難を受んあとを善とし基督の爲に受る誹謗い
エジプトの貨財よりも寶貴と意へり蓋報賞を認て望べあり信仰に由て

彼いエジプトを離れ王れ怒を畏ざりき是見ざる者を見ダ如く確乎べ也
也信仰ふ由て彼い逾越節と血を灑ぐ禮を守れり蓋長子を滅す者れ彼等
に抵ざらんダ爲あり信仰に由て彼等い紅海を陸の如く渉しダエジプト
の人い之を渉らんとして溺れ死たり信仰に由て七日れ間エリコの城を
環巡たるに遂にろれ石垣くづをたり信仰ふ由て妓婦のラハブい信ぜざ
る者と共に亡ざりき蓋偵者を接て之を平安ならしめたをべ也われ更に
何を言んや若ギデオンバラク並サムソンイフタダビデ並サムエル及び預
言者等れ事を言んにい時足ざる也これら信仰に由て諸國を服し義を行
ひ約束の者をゐ獲れ口を箝ざ火勢を滅し劍の刃を避き荏弱よりして剛
強せられ戰爭に於て勇しく異邦人の陣を退かせたり婦も亦死たる者の
復活を受しあとあり亦ある人い最も愈る復生を得べき爲に酷刑られて
免るゝあとを欲まざりきまた或人い嘲笑をうけ鞭扑を繩縛と囹圄の苦
を受石にて斃を鋸にてひかを火あて焚を刀にて殺され綿羊と山羊れ皮

を衣て經あるき窮乏して艱苦めり　三七 世の彼等を居ゝ堪ず彼等ゝ曠野と山と地れ洞と穴とに周流たり　三八 彼等ゝ皆信仰に由て美名を得たるとも約束の所を得ざりき　四十 ろゝ彼等も我儕と偕あらざれば成全するゝと能ざる爲ゝ更ゝ愈るる者を神預じめ我儕に備へ給へり

第十二章　是故に我儕うく許多の見證人に雲の如く圍まれたれば凡て重負と繫る罪を除き耐忍びて我儕の前に置れたる馳場を趨り　二 イエス即ち信仰の先導となりて之を成全する者を望むべし彼ゝ其前に置れたる喜樂に因てろれ恥をも厭わず十字架を忍びて神れ寶座の右に坐しぬ　三 ゝんぢら倦疲きて心を喪ふゝと莫らん爲に惡人れ如此ゝのきに逆ひしをも忍たる者を思ふべし　四 なんぢら惡を爭ひ拒て未だ血を流ゝ至らず　五 また子に告るが如く告給ひし言を爾曹忘をたり曰く我子よ爾主れ懲治を輕ずる勿れ其譴責を受るとき心を喪ふ勿れ　六 ろゝ主ろの愛する者を懲め又すべて其納る所の子を擲てり　七 ゝんぢら若てれ懲治を忍ゑゝ神ゝ子の如く爾曹を待ひ給ふゝり誰か父の懲めざる子あらん乎　八 衆の人れ受る懲治もし爾曹ゝ無からゝ私子ゝして實子ゝ非ず　九 また我儕の肉體の父ゝ我儕を懲めしゝ者なるゝ尚ゝれを敬へり況て靈魂の父ゝ服ひて生を得ざるべけん乎　十 肉躰の父ゝろの心ゝ任せて暫く我儕を懲む然と靈の父ゝ我儕ゝ益を得しめて其聖潔ゝ與らせんがため懲むるこゝとを爲　十一 凡の懲治今ゝ悦ばしからず反て悲と意ゝる然と後ゝれゝ由て鍛錬する者にゝ義の平康なる果を結べり　十二 是故ゝ爾曹疲たる手弱たる膝を健りにせよ　十三 足蹇たる者の迷ふでとをく逐さらんがゝ爲ゝんぢら衆と平直ゝる徑を備ふべし　十四 ゝんぢら衆の人と和睦てとをなし自ら潔らんゝとを務めよ人もし潔らずば主に見ゆるこゝとを得ざる也　十五 なんぢら愼めよ恐くゝ苦根生いでゝ爾曹を擾さん且ゝはくの人ゝを因て汚るべし　十六 恐くゝエサウの如く淫を行ひ妄なる事をゝす者ゝらん彼ゝ一飯のために長子の業を鬻り　十七 其のち祝ふ所の福を嗣んこゝとを求たるとも終ゝ棄らるを淚を流して志を挽回さんとせしゝ得て

ど能わざりしが爾曹の知ところ也○十八
ず或い觸たる火あるひい密雲あるひい黒暗あるひい暴風あるひい盬の音
あるひい言語の聲ありも非ず此聲を聞し者い再び言をもて諭給わざること
を求へり二十 ろい獸さへ若し山に觸あべ石おて擲るべしと命せらきしを彼
等忍ふこと能わざりし故あり二一 ろの見しところ極て畏しかりければ
二二 我甚く恐懼戰慄りと曰り二三 然と爾曹は近ける所いシオンの山また活
神の城ある天のエルサレムまた千萬の衆そおよち天使の聚集二三 天に錄さ
をたる長子ともの敎會また衆ひ人を鞫く神おょび成全せられたる義人
の靈魂二四 新約の中保あるイエス及び灑ぐ所の血あり此血の言ところハ
ベルより尤も愈れり二五 愼をて告る所の者を拒む勿を若し
地にて示せる者を拒し彼等免かるゝ事なくりしおらば況て我儕天より示
せる者を拒て免るゝことを得んや二六 昔いその聲地を震へり今い彼つげて曰
く我また一次地のみおらず天をも震はん二七 この再一次と言るい震るべき
者の棄られんてとを示す此等の造られたるい震われざる者の存んため也
二八 是故お我儕震れざる國を得たをた恩に感じて虔を敬ひ神の意旨に合ふ
所をもて之お事ふべし二九 夫われらの神い燬盡す火あり

第十三章

兄弟の相愛する心を存べし二 遠人を接待事を忘る
る勿れ或人あく行たをを知ずして天使を接待せり三 已ともに囚るゝが如
く因者を念へ爾曹も亦身お在ダ故お苦む者を念ふべし四 あんちら婚姻の
事を凡て貴め又牀をも汚すてと勿れ神い苟合また奸淫する者の罪を定む
べし五 あんちら世を過るお貪るあとをせず有とみろを以て足りとせよ蓋
われ爾を去ず更に爾を棄じと云給ひたれば也六 然た我儕毅然して曰べし
主わをを助る者あれを畏あし人已れお何をか行んと七 神の道を爾曹に敎
へ爾曹を導く者を念へ其行の果を觀てろの信仰お效ふべし八 イエスキリ
ストい昨日も今日も永遠變らざる也九 萬殊ある敎と異ある敎お搖蕩さる
る事勿れ恩お由て心を堅固せらを飮食お由ざるい善し飮食に由て行ひた

る者い益する所あかりき　十我儕に祭壇あり此上の物を幕屋ゐ事る人い食
よてことを得ざる也　十一祭司の長罪を贖いんが爲ゐ獸の血を携へて聖所ゐ入
うの獸の體を營外ゐて焚り　十二是故ゐイエスも己の血をもて民を潔んが爲
ゐ門の外ゐ苦を受しあり　十三然も我儕も彼の詬詈を負て營外ゐ出かれゐ往
べし　十四我儕ここに在て恒に存りべき城邑あし惟きたらんとそる城邑を求
む　十五是故ゐ我儕かれゐ由て恒ゐ讃美の祭を神ゐ獻べし即ち其名を頌る唇
の果なり　十六然とまた善を行とを施捨を行てとを忘るゝ勿れ此の如き祭い神
てきを悦べき也　十七爾曹を導く者に循ひて服すべし彼等い己が事を神の前
ゐ訴ふべき者あるが故に爾曹の靈魂のために守るあとを爲をあり彼等を
歎せず歎びて守ることを爲しむべし然されば爾曹ゐ益あしゝあんぢら我
儕のために祈禱せよ我儕よき心ありて凡の事ゐ善行をなさんと爲てとを
信すれば也　十八われ倚も遽に爾曹に歸るあとを得んが爲ゐ爾曹の祈んあと
を更ゐ求む　二十願くい窮なき契約の血に由て羊の大牧者なる我儕の主イエ
スキリストを死より甦らしよ平安の神　二十一イエスキリストゐ由て其悦ぶ所
を爾曹の心の中ゐ起し又爾曹をして其旨を行わせんが爲に凡の善事ゐ於
て爾曹を全うせしむべし榮光とこしなへにあらんァーメン○　二十二
兄弟よ今われ爾曹ゐ畧りき贈りたれも我が勸の言を容んみとを請　二十三我儕
が兄弟テモテの釋されしを爾曹知べし彼もし速ゐに來らも我ら彼と偕
ゐ爾曹を見ん　二十四諸すべて爾曹を導く者および諸の聖徒ゐ安を問イタリヤ
より來りし者も安を爾曹に問り　二十五願くい恩寵あんぢら衆の人と偕ゐ在ん

新約全書希伯來書終

第一章 神および主イエスキリストの僕ヤコブ各處に散をる十二の支派に
安を問 二わが兄弟よ若なんぢら各樣の試誘に遇ふ之を喜ぶべき事とすべ
し 三蓋なんぢらの受る信仰の試みい耐忍をして忍耐を生ぜしむると知を
なり 四なんぢら全く且備りて缺る所あらん爲め忍耐をして全く働かし
めよ 五爾曹の中もし智慧足さる者あらば夫の咎るみとあく惜みとあくし
て衆人に予る神に求めよ然ば予られん 六然ど疑ふみとあく信じて之を求
むべし疑ふ者い風に撼さをて翻へる海浪の如し 七斯の如き人い主より何
物をも受ると想ふ勿れ 八斯れ如き人い貳心にして其行ふ所の事すべて定
準なし 九卑き兄弟い其高せらるゝ事を喜樂とせよ 十富る者い其卑せら
る事を亦樂とせよ蓋草れ花の如く逝べけをも也 十一日出て熱し草を枯
せば其花れち其美しき容きゆ富る者も亦かくれ如く其爲とあろ牛にして
已まづ亡ん 十二認て試誘を受る者い福あり蓋あふろみを經て善とせらるゝ

時ゐ生命の冕を受べければ也ゐの誘ゐ主已を愛する者ゐ約束し給ひし所
のもの也　十三誘るゝ者ゐ神已をを惡に誘ふと言ゐるべし神ゐ惡に誘ら
をも惡ゐ誘ひ給ゐず　十四人惡に誘るゝゐ己の慾ゐ引れて誘ゐるゝ也　慾す
でに孕て罪をうみ罪すでに成て死を生　十五わが愛する兄弟よ自ら欺く勿れ
凡よき賜と全き賜ゐみな上より諸れ光明の父より降るあり父ゐ變るあ
と無また轉動て顯るゝ影もあき者あり　十八その己の旨ゐ循ひ眞道を以て
我儕を生り是我儕をして其造る所の物れ中にて初ゐ結べる果の如き者と
あらしめん爲あり○　十九是故に我が愛する兄弟よ人おれ〳〵聽ゐとを速ゐ
ゐし語るゐとを徐し怒てとを徐そべし　二十ろひ人の怒ひ神の義を行ふ事を
せざる也　二一然ゐ諸の汚穢と多の邪惡をすて柔和を以て固曹ろの心ゐ殖
たる所れ靈魂を救得る道を受べし　二二なんぢら道を行ふ者とあるべし徒み
れを聞のみにして自己を欺く者とある勿れ　二三ろれ道を聞れみゐして之を
行ざる者ひ鏡に向て本來の面をみる人に似たり　二四ろき己を照し視て去
のち直に其如何ある相貌ありしかを忘る　二五然ゐ自由ある全き律法を切ゃ
に視て離ざる者ひ是功を行ふ者にして聞て忘るゝ者ゐ非ず斯人ろの行
ふとゐろ祝ゐらん　二六固曹のうち誰ろ若みづから神に事る者と意ひて其舌
ゐ轡をつけず自ら其心を欺らを其事るゐとひ徒然ゐり　二七神ある父れ前に
潔しして穢ゐく事るゐとひ孤子と寡婦を其患難の中に眷顧また自ら守て世
に汚れざる是なり

第二章　わが兄弟よ爾曹榮の主ある我儕の主イエスキリストの信仰の道を
守らんゐひ人を偏視るゐと勿を　二もし人金環をはめ美しき衣服を着て爾
曹の會堂ゐ來り又貧き人汚たる衣服を着て來らんに　三ゐんぢら美しき衣
服を着たる人を顧て爾ゐの榮位ゐ坐をと曰また貧者に爾彼處に立とい
ひ或ひ我が足下に坐れと曰ゞ　四爾曹ひ各人れうち區別を立また惡念を以
て人を分もれゐ非ずや　五我が愛する兄弟よ聽け神ひ斯世の貧者を選て信
仰ゐ富せ已を愛そる者に約束し給ひし所の國を嗣べき者とゐらしめ給ふ

ヤ非ずや　然るを爾曹貧者を軽蔑たり爾曹を凌虐また裁判所へ曳ものの
富者に非ずや　彼等い爾曹ゲ稱らるる所の美名を譏す者に非ずや　八爾曹
もし聖書に載る所の己の如く爾の隣を愛そべしと云る貴き法を守らば其
行ふとあろ善　然と若し人を偏視ることをせば是罪を行ふなり法律爾曹
を定めて罪人とせん　十人律法を悉く守るとも若ろれ一ヘ顕かバ此全を犯
すあり　十一ろれ姦淫する勿れと言る者また殺すあと勿れと言る爾曹姦淫せ
ずとも若し殺すことをせば律法を犯す者とある也　十二あんぢら言ることを行
ふあと自由の律法に循て鞫を受んとする者の如くすべし　十三憐むあとをせ
ざる者い鞫かるる時また憐まるることを無らん矜恤い鞫ヘ勝あり　十四わゲ
兄弟よ人自ら信仰ありと言て若し行あくば何の益あらん乎ろの信仰いか
で彼を救ひ得んや　十五もし兄弟あるひい姉妹裸躰へて日用の糧へ乏からん
に　十六爾曹のうち或人ありて安然にして往け願くい爾曹温のにして飽
てことを得よと而して其身體に無てあらぬ物を之に予ずバ何の益あらん乎
此の如く信仰もし行を兼ざるときい乃ち死るあり　十八或人いわん爾信仰
あり我行あり請あんぢゲ行を兼ざる信仰を我へ示せ我い我ゲ行に由て我
ゲ信仰を爾へ示さんと　十九あんぢ神い惟一ありと信ずヘ如此信ずるい善し悪
鬼も亦信じて戦慄り　二十あろ愚なる人よ行を兼ざる信仰の死ることを爾知
んと欲ふや　二一我儕の先祖アブラハムろの子イサクを壇れ上へ献て義とせ
られたるい行へ由に非ずや　二二ろの信仰行と共へ働き且行へ由て信仰全備
を得たるを爾見べし　二三てれ聖書へ錄してアブラハム神を信ず其信仰を義
とせられたりと有へ應へり彼また神の友と稱をたり　二四あんぢら人れ義と
せらるるい信仰へのみ由に非ず行に由ことを知るべし　二五また妓婦ラハ
ブ使者を受へるを他の途より去しめて義とせられたるい行に由へ非ずや
二六身もし靈魂はゐるれバ死るごとく信仰も行ひ離るバ死るあり

第三章　わゲ兄弟よ爾曹多く師とある可らず蓋われら師たる者の罰を受る
へを尤も重と知べあり　二われらい皆志を〻〻ち愆を爲る者あり人もし言に

慾あくが是全人にして全體ゐ轡を置得るあり 三 夫われら馬を己ゐ馴かいせんとして其口ゐ轡を置とき其全體を取すべし 四 舟も亦ろの形い大く且狂風ゐ逐るゝとも小舵を以て舵子の意の隨ゐ之を運すあり 五 此の如く舌も亦小ものゐして誇ることい大あり觀よ微火いかに大ある林を燃そを 六 舌即ち火すあいち惡れ世界あり舌い百體の中に備りありて全體を汚し又全世界を燃すあり舌の火い地獄より燃出ろれ各類の獸禽昆蟲游ゐ在もの皆制を受又既に人に制せられたり 八 然と人たれも舌を制し能わず乃ち抑ゞたき惡にして死毒の充るもの也 九 我儕こを以て主ある父を祝すた之をもて神の形に像りて造られたる人を詛ふ 十 祝と詛一の口より出わゞ兄弟よ此れ如きことい有べきに非ず 十一 泉の源と一穴より甘水と苦水を並ゐ出さん乎 十二 わゞ兄弟よ無花果の樹橄欖の果を結ぶみとを得んや斯の如く泉の源鹹水と淡水を並ゐ出すことを能わず 十三 爾曹のうち智くして聰明もの誰ぁるや柔和ある智慧を以て善行を彰すべし 然と若なんぢら心の中に苦妬と忍爭を懷かゞ是眞理ゐ背あり眞理ゐ背て誇る勿れ又謊る勿れ 十四 斯る智慧い上より下るに非ず地に屬るもの情慾に屬るもの惡魔に屬るもの也 十五 ろい娼嫉と忍爭ある所ゐい亂と諸般の惡事とあるべき也 十六 然と上よりの智慧い第一に潔く次ゐ平和寬容柔順ゐり矜恤と善果とち公を偏護ず又偽あきもの也 十七 義の果い平和を行ふ者の平和を以て種ふ由て結ぶみのありあり

第四章

爾曹の中の戰鬪と爭競い何より來しや爾曹の百體の中に戰ふ所の慾より來しに非すや 二 爾曹貪るとも得ず殺みとをし嫉みとを爲とも得ざるとも能ず爾曹爭競と戰鬪せり爾曹い求ざるに因て得ざる也 三 なんぢら求てなは得さるい爾曹慾のために費さんとして妄に求るゞ故ぁり 四 姦淫を行ふ男女よ爾曹世を友とするい神ゐ敵するぁるを知さらんや世の友とぁらんとを欲ふ者い神の敵ぁり 五 聖習に神れ我儕の衷に住しめ給ふ靈熱心を以て我儕を愛むと言るを爾曹虛きみとう意ふや 六 神更に大ある恩惠を

予ふ此に由ていふ神い驕傲者を拒ぬに服へ悪魔を拒げ然ば彼なんぢらを逃去ん　八 あんぢら神に近け然ば神なんぢらに近き給わん罪人よ爾曹の手を浄せよ二心の者よ爾曹の心を潔くせよ　九 なんぢら苦め哀め哭なんぢらの笑を哀哭に易よ　十 自己を主れ前に卑せよ然ら主あんぢらを高せん　十一 兄弟よ互に誘る勿れ兄弟を謗あるひい兄弟を譏そる者い律法を謗り律法を譏そる者い律法を行ふ者に非ず律法を譏せば律法を行ふ者に非ず律法を譏する者い惟一あり彼い救ふことと滅すことを爲得る也なんぢ誰なれば隣を譏そる乎　十二 われら今日明日某の邑にゆき彼處に一年とゞまり貿買して利を得んといふ者よ　十三 なんぢら明日の事を知ず爾曹は生命い何ぞ暫く現れて遂に消る霧あり　十四 爾曹の言ふとおり易て如此いへ主もし許しゝ我儕活て或い此事あるひい彼事を行んと　十五 然ど今あんぢら驕りて誇るみとを爲凡て此の如き誇い悪あり　十六 人善を行ふ事を知て之を行ざるい罪なり

第五章

富者よ爾曹既に來らんとする禍害を思て哭叫ぶべし　二 爾曹の財い朽なんぢらの衣服い蠹ひ　三 爾曹の金銀い銹腐り此銹證を爲て爾曹を攻め火の如く爾曹の肉を蝕ん爾曹みの末の日お在てあは財を積ふるみとをせり　四 視よ爾曹ダ其田を穫せし雇人に予ざる値い叫び其刈し者の呼聲い既お萬軍の主の耳に入り　五 あんぢら地お在て奢樂ミ屠らるゝ日に在て倘ろの心を悦ばせり　六 なんぢら義者を罪お定め且てゞを殺せり彼なんぢらを拒ざりき○　七 兄弟よ忍て主の臨るを待べし視よ農夫地の貴き產を得を望ミて前と後とれ雨を得まで久く忍て之を待り　八 爾曹も忍べ爾曹の心を堅せよ蓋主の臨り給ふみと近々を也　九 兄弟よ爾曹互お怨るてと勿れ忍く い罪お定られん視よ鞫するもの門の前お立り　十 兄弟よ爾曹主の名お託て語りし預言者を苦と忍との式とすべし　十一 これら忍ぶ者い福なりと意ふ也あんぢら曾てヨブの忍を聞り主いかう彼お行給ひし乎ろの結局を見よ即ち主い慈悲深く且矜恤ある者あり　十二 兄弟よ一切誓ふ勿を或い天あるひい地

あるひい他物を指て誓ふ勿れ爾曹是を是とし否を否とすべし恐くい閻魔
罪に定られん　十三　爾曹のうち誰り苦む者ある乎あらば祈禱ふ者
わるか有たろの人讃美せよ　十四　爾曹のうち誰の病る者ある乎あらば教會の
長老等を招くべし彼等主の名に託て其人に膏を沃ぎ之が爲ふ祈ん　十五　ろき
信仰より出る祈禱い病者を救ふべし主これを起さん若し罪を犯しまゝと有
ば救をん　十六　あんぢら互ふ過ちを認らいし且病を癒るまことを得ん爲ふ互
ふ祈るべし義者の爲き祈禱い力ある者あり　十七　エリヤい我儕と同情の人る
り彼雨降ざるみとを切に祈りけをた三年六ケ月の間地ふ雨降ざりき　十八　よ
た祈りけれた天より雨ふりて地ろの產を勃出せり　十九　わが兄弟よ爾曹のう
ち或い眞の道より迷る者あらんふ誰ぅ之を引反さべ　二十　此人知べし罪人を
其迷る道より引反すい乃ち其靈魂を死より救かけ多の罪を掩ふことを

新約全書雅各書　終

新約全書使徒ペテロ前書

第一章

一　イエスキリストれ使徒ペテロ書をポントガラテヤカパドキアアジ
アビテニアに散て處る者ニ即ち父ある神福音ふ順いしめイエスキリス
トの血に灑をしめんとして其預じめ知たまふ所ふ循ひ聖の聖潔をもて選
び給ひし人々ふ贈る願くい爾曹ふ恩寵と平康の增んことを○　三　讃べきか
ふ神已れらの主イエスキリストの父かを其大ある矜恤を以て我儕を再び
生我儕をしてイエスキリストれ甦り給ひしことふ由て活る望を得させ
亦わをらの爲ふ天ふ藏ある朽ず汚ず衰へざる嗣業を得しめ給ふあり　五
あんぢら信仰ふ由て神の能ふ護らき已ふ備ある所の末時に顯きんとそる
救を得あり　六　之ふ由て爾曹喜べり今暫く各樣の艱難ふ逅て憂ざるを得ず
と雖も卻て喜をあせり　七　爾曹の信仰を試そらるゝい壞る金の火ふ試そら
るゝよりも寶くして爾曹イエスキリストの顯を給いん時ふ稱讃と尊貴と
榮光を得ふ至らん　八　爾曹イエスを見ざるとも之を愛し今見ずといへども

信じて喜ぶ其快樂い言ダたく且榮光あり　盖あんぢら信仰の效すあいち
靈魂の救を得るお因　十 爾曹ダ受る所の恩を預言せし預言者等い此救お係
る事を探索かり推究ねたり　十一 卽ち彼等ろの裏お居キリストの靈キリスト
の受んとする苦難と其のち得んとする榮を預じめ證あたる此い何の日い
うある時を示せると推究ねたり　十二 彼等い默而を蒙りて其傳る所の事おの
れの爲お非ず爾曹の爲あることを知り　其傳へし事い今天より遣り給ふ聖
靈お由て福音を傳る者の爾曹お告る所の事あり斯事い天の使等も知んて
とを欲へり　十三 然た爾曹心の腰お帶して愼みイエスキリストの顯を給ふ時
あんぢらお來らんとそる恩惠を疑い充して望むべし　十四 なんぢら孝子ある
お因て從前の蒙昧時れ慾お效ふことをあく　十五 爾曹を召給ふ聖者お效て凡の
行を潔すべし　十六 ろい錄して我潔けきぱ爾曹も潔すべしと有ばあり　十七 人を
偏視ず各人の行お由て鞫く者を爾曹もし父と呼ば世お寄れる日を愼れて
過すべし　十八 盖あんぢら贖われて先祖より傳りたる徒き行より離れしい銀
や金れ如き壞る物お由ふ非ず　十九 瑕なく汚あき羔れ如きキリストれ寶血お
由ることを知たあり　二十 キリスト世基を置ざりし先に定られ此末時お爾曹
の爲お顯れ給へり　二一 爾曹いキリストを——キリストに由て信ずる者あり是故お
をキリストに由て信ずる者あり是故お爾曹の信仰と望い神お由り　二二 爾曹
すでに靈おより眞理に循ひて靈魂を潔め偽あく兄弟を愛するお至たれた
潔心をもて互お篤く相愛すべし　二三 爾曹ダ再び生るよい壞べき種お由お非
ず壞べうらざる種すあいち窮あく存つ神れ活る道お由あり　二四 うれ人い既
に草の如く其榮い凡れ草の花れ如し草い枯ろの花い落　然と主の道い窮
あく存あり爾曹お宣傳る福音い乃ち
[illegible]の道なり

是故お爾曹すべての怨恨すべて詭譎また偽善娼嫉および諸の謗
言を棄て　二 今生れし嬰兒の乳を慕ふ如く爾曹心を養ふ眞乳を慕ふべし此
に由て爾曹長て救お至らん　三 あんぢら嘗ひて主を仁ある者と知たらんお
い斯の如すべし　四 主い人お棄られ給へと神お選をたる貴き活石あり　爾

苦かれゐ來り活石は如く建られて靈の室となり亦潔き祭司となりイエス
キリストに由て神ゐ悦ゐる〻靈の祭物を獻べしゥ聖書ゐ錄して我選
し所は貴き隅の首石をシヨンに置ゐれを信ずる者い辱しめられじと有た
あり　七　あの石信ずる爾曹ゐい貴き物となり信ぜざる者にと工匠ゐ棄られ
て隅は首石となれる石となり　八　また躓く石磯ぐる岩となり彼等い道を
信ぜざるゐ因て之ゐ躓く此い彼等ろく定らゐたる也　九　爾曹い選れたる族
王ゐる祭司聖民神ゐ屬る者あり此い爾曹をして召て幽暗より出し其異光
ゐ入給ひし者已は德を顯さしめん爲ゐ　十　爾曹い素民ゐ非ず然と今神の民となゐ
り〇　十一　愛ゐる者よ我ゐんぢらに勸む爾曹い寓族また寄寓者ゐをゞ靈魂に
逆ひて戰ふ肉の慾を去べし　十二　又ゐんぢら異邦人の中ゐ在て善行を作べし
是爾曹を誘りて惡を行ふ者と言る異邦人をして爾曹は善行を見て眷顧た
まふ日ゐ神を崇しめん爲あり　十三　ゐんぢら主は爲ゐ凡て人の立る所は者ゐ
服へ或い上ゐゐる王　十四　或い惡を行ふ者を罰し善を行ふ者を賞る爲ゐ王よ
り遣されたる方伯ゐ服ふべし　十五　蓋ゐんぢら善を行ふを以て愚ゐる人の無
知の言を止るい神の旨あれゞ也　十六　ゐんぢら自由ある者の如くせよ然と其
自由を以て惡を掩ふゐとゐく神の僕の如すべし　十七　衆の人を敬ひ兄弟を愛
し神を畏を王を尊ぶべし〇　十八　僕ゐる者よ畏懼を以て主人ゐ服ふべし只
善良者柔和ゐる者ゐのみゐらず苛刻者ゐも服ふべし　十九　人もし受べからざる
苦難をうけ神を敬ひて之を忍ゞゝ嘉べき事なり　二十　爾曹もし過をなし撻れ
て之を忍とも何の嘉べき事ならん乎さされど若し善をゐし苦められて此を
忍ばゝ神ゐ嘉稱を得べし　二一　爾曹の召をたるい之が爲あり蓋キリスト爾曹
の爲ゐ苦をうけ爾曹をして己の跡ゐ隨はしめんとて式を爾曹ゐ遺し給へ
を也　二二　その罪を犯さず又ろの口ゐ詭譎ゐかりき　二三　かき詬らをて詬らず苦
られて厲言を出さず只義を以て鞫く者ゐ之を託たり　二四　われ木の上に擔て
我儕の罪を自ら己ゞ身ゐ任給へり是我儕をして罪に死て義に生しめん爲

あり彼の撓扑をしに因て爾曹醫れたり二五ろき爾曹いもと羊の如く迷たりしが今なんぢらの霊魂の牧者監督ぉ歸きたり

第三章

妻ある者よ爾曹うの夫ぉ服ふべし若し教ぉ循はざる夫あらば歟ぉ由ず妻の行に由て服ん二ろい爾曹の嬥懼を以て潔き行をぉすを見ぉ因てあり三爾曹の妝飾ぃ髪を辮金を掛また衣を着るが如き外面の妝飾に非ず四たゞ心の内の隠たる人すなはち壊ることなき柔和恬靜ある霊を以て妝飾とすべし此靈の妝飾ぃ神の前にて價貴もの也五昔神ぉ依頼とし聖女も其夫ぉ服ひて此の如く己を飾たりサラアブラハムに服ひて之を主と稱しが如し若なんぢら善を行ひ何事をも懼ずば即ちサラの子たる也六夫たる者よ爾曹も妻を把ふこと溺き器の如くし理ぉ循ひて之と同に居ぉを敬ふこと生命の恩を倶者の如くそべし是なんぢらの祈禱ぉ阻礙ぁからん爲ぬり〇八終ぉ我てきを善ん爾曹ぇな心を同うし互ぉ憐憫兄弟を愛し憐み謙遜惡を以て惡ぉ報る勿れ詈を以て詈ぉ報る勿れ却て此の如き人の爲ぉ祝福を求むべし蓋なんぢらの召きたるも福を嗣ん爲なれば也九ろき生命を愛して佳日を送らんと欲ふ者ぃ舌を禁て惡を言ぉ唇を縅て詭譎を言ざらんぉとをせよ十惡を遠て善を行ひ和睦を求て之を追べし十一ろい主の目ぃ義人の上ぉ止り其耳ぃ義人の祈禱ぉ傾き主の面ぃ惡を行ふ者に向て怒をべ也十二爾曹もし熱心に善を行ぃ誰か爾曹を害はん乎十三縦ひ義事の爲ぉ苦めらるゝとも爾曹福ある者なり人の爾曹を威嚇を畏るゝ勿れ亦憂る勿き十四あんぢら心の中ぉ主あるキリストを崇むべし亦爾曹の衷ぉある望の緣由を問人ぁれ柔和と畏懼を以て答をあさんことを恒に備よ十五かつ答るときぃ善良心に從ふべし是あんぢらをキリストに在て行ふ善行を誘る者れ自ら愧ん爲あり十六若し爾曹ゲ善を行ふ事の爲ぉ苦めらるゝとも福ある者なり十七ふぉ因て苦を受ること神の意旨あらば惡ぉ行ふぉ因て苦を受るぉ愈れり十八キリストも一次罪の爲に苦を受く義者不義者ぉ代れり是われらを引て神ぉ至らん爲あり彼ろの肉體ぃ殺をれ其靈ぃ生さをたり十九彼ろの靈を以て

獄におる靈ふ宣傳へたり 二十 ふの嶽にわ
て待給へるとき從いざりし靈ふり此方舟ふいり水ふ由て救れし者い僅に
して惟八人ふりき 二 其水に由て表したる バプテスマイエスキリストの復
生に由て今我儕をも救ふ此バプテスマい肉體の汚穢を除く求に非ず善良
心神を求る表ふり 三 イエスキリストい
使權威ある者能ある者みな彼ふ服ふあ

第四章

キリスト既ふ我儕の爲ふ肉體に苦難を受給ひたれば爾曹も亦ろの
心を以て自ら鎧ふべしろい肉體に苦を受し者い罪を斷たれべ也 二 みを今
より後人ふ慾に循いず神の旨に循ひて肉體に寓れる餘時を過ん爲なり 三
夫已ら既に往ふし日い異邦人の心ふ從ひて好色私慾沈酒醉興酒宴偶像
を祭る憎き事を行ひて既や足り 四 あんぢら彼等と偕に放蕩の極に趨さ
るに因て彼等こきを怪みて爾曹を謗るふり 五 あれら生者死者を鞫んと備
を爲をる者ふ已の事を陳ん 六 福音い死し者に宣傳へたり蓋彼等をして其

肉体い人ふ由て審判を受るとも其靈い神ふ由て生命を得しめん爲也 七 萬
物の末期邇けり是故ふ愼きて自ら制するみとを爲て祈禱すべし 八 何事よ
りも先だゞひふ篤く相愛するみとをすべし蓋愛い多の罪を掩をふり 九 あ
んぢら互ふ客ふとあく接待すべし 十 神の各樣の惠を司とる善家宰の如く
各人ろの受し所の賜を以て互ふ施すべし 十一 人もし道を語らむ神の言と意
ひて語るべし人もし服役を作む神の賜ふ能と意ひて服役を作べし是イエ
スキリストふ由て每事ふ神ふ榮の歸せん爲ふり夫榮と權い神ふ歸して世
々ふ至る也アーメン○ 十二 愛をる者よ爾曹を試むる火の如き苦を非常事の
如くして爾曹異とする勿れ 十三 卻てキリストの苦ふ與るを以て歡樂とすべ
し然む其榮の顯れん時また爾曹悉び躍らん 十四 若あんぢらキリストに名の
爲ふ誇をゝべ福ふり蓋榮の靈すなわち神に靈あんぢらの上ふ止まべ也キ
リストい彼等ふ謗さを爾曹ふ崇らるゝ也 十五 爾曹に中あるひい人を殺し或
い盜をゝし或い惡を行ひ或い猥ふ人の事に干渉あとして苦に遇もに有さ

是若キリステァンたるを因て苦を遇ば羞ること勿れ却て之を縁て神を崇むべし　ろい神ば家を首として世を審判ずるとき已に至ばあり若し我儕あはば首ず審判せらるゝ時い神ば福音を従いざる者の其結局い如何ぞや　もし義者僅じて救るゝを得ば神を敬いざる者と罪人い何處を立んや　是故ゐ神ば旨ゐ循ひて苦ゐ遇もれい善を行ひて其霊魂を信ずべき造物者に託すべし

第五章　キリストの苦を親く見て證をゐし且顯きんとそる衆ゐ與るみとを得る者なる長老たる我あんぢらば中ゐて我と同く長老たる者ゐ勧む　二爾曹の中ゐある神の羊ば罪を牧ゐをを牧司とるゐ止を得ずして爲ず好てみし利を貪るために爲ず樂こて爲べし　三又あんぢら託せられたる者ゐ主となるべうらず羊の群ば式を爲べし　四あんぢら牧者の長の顯きん時ゐ壊るゝことなき榮ば冠冕を得ん　五また幼者ゐ勧む爾曹長老に服へ且互にをゐ相服ひて謙遜を衣よ夫神い驕傲者を拒ぎて謙遜者に恩を與給ふあり　六是故ゐ爾曹神の大能ば手下に己を卑すべし期至らゞ彼あんぢらを高せん　七爾曹ろの憂慮とおろを悪神ゐ託ぬべし蓋かれ爾曹を顧を給へばあり　八謹慎儆醒あんぢらの敵ある悪魔吼る獅子の如く徘行て呑べき者を尋ぬ　九あんぢら信仰を堅して之を禦げ蓋あんぢら世ゐある兄弟ば同く此苦を受るを知べあり　十諸の恩恵を予ふる神すなわち爾曹をして暫く苦を受る後キリストイエスにある窮なき榮に入しめんとて爾曹を招きし神爾曹を全うし堅くし強して基の上に置給ふべし　十一願くい榮光と権力世々神に在ア　十二メン○わを意ふゐシルワノい忠信ある兄弟あり我片の言ば書を彼ゐ託ね爾曹ゐ勧て勧をゐし且あんぢらが立ところの恩い乃ち神の眞恩ゐるおとを證せり　十三バビロンゐ在所ば爾曹と共ゐ選きたる教會あんぢらゐ安を問また吾子マコも爾曹ゐ安を問り　十四あんぢら愛の接吻を以て互に安をとへ願くいキリストイエスに在あんぢら衆ゐ平康あらん事をアーメン

新約全書使徒彼得前書　終

新約全書使徒ペテロ後書

第一章

イエスキリストの僕また使徒シモンペテロ我儕の神と救主イエスキリストの義お由て我儕が受し所と同き貴き信仰の道を受し者に書を贈る願くい神と我儕の主イエスを識お因て爾曹お恩寵と平康の増んことを 三 神ろの能力お循ひて生命と敬度お係る凡のものを我儕お賜へり是われら榮と徳を以て我儕を召き給し者を識に由てあり 四 また神うの榮と徳お因て至大ある貴き約束を我儕に予へ給へり此い爾曹をして此約束に由て世おある所の慾の敗壊を脱れ神の性質を有しめん爲あり 五 是故お爾曹勤て信仰お徳を加へ徳お智識を加へ 六 智識お撙節を加へ撙節に忍耐を加へ忍耐に敬虔を加へ 七 敬虔お兄弟の睦を加へ兄弟の睦お愛を加ふべし 八 此等のもの若爾んぢらの裏ふ在て彌増ときい爾曹わさらの主イエスキリストを識ことふ怠るてとなく又實を結ざるあと無ふ至らん 九 此等のものそなふき者い盲あり遠く見てと能いず且うの嚢き罪を潔られし事を

忘るゝ也　十　是故ゐ兄弟よ勤て爾曹の召れし事と選ばし事とを堅固せよ若
前に告たる事ともを行ゐ居ば爾曹いつまでも躓くこと莫ちん　十一　此の如く神
あんぢらに我儕の主なる救主イエスキリストの永遠國ゐ入の恩を豐ゐ予
へ給ふべし○　十二　是故ゐ恆ゐ我あんぢら此等の事を知かつ既ゐ受たる眞道
に堅々れと倘あんぢらに此事を憶起させんとして怠らざる也　十三　我この幕
屋ゐ居わひだ爾曹ゐ此事を憶起させて爾曹を勵すい當然のことゝ意へ
り　十四　蓋われらの主イエスキリストの我ゐ示し給へる如く我わ夕幕屋を離
るゝことの近を知ばあり　十五　我また爾曹をして我夕世を去ん後ゐも常ゐ此
等の事を憶起さしめんあとを勤　十六　われら前に爾曹ゐ我儕の主イエスキリ
ストの能力と其顯れ給ふてとを告るゐ巧ある奇談を用ざりき我儕い親く
其大ある威光を見し者なり　十七　至大なる榮光の中より聲ありて彼を呼こい
我心ゐ適ふ我夕愛子ありと曰る此時かれい神なる父より尊と榮を受たり
十八　われら彼と倘ゐ聖山ゐ在し時この天より出し聲を聞り　十九　殊ふ預言者の
確言われらに在あの言い暗處に照る燈れ如きものなり夜の明るまで明星
の爾曹れ心の中に出るまで之を願みば善　二十　まづ首に知べき事い聖書の預
の預言い預言者おのれの意を以て布せるに非ざるを知んみと也　二一　こゝろい預
言い素より人意に由て出しに非ず神に屬る聖人聖靈に感じて語りし者
なれば也

第二章　昔し民の中に僞の預言者ありき其ごとく爾曹の中にも僞の師いで
ん彼等い滅亡に至る異端を傳へ且おのれを贖ふ主を主とせずして速かあ
る滅亡を自ら取べし　二　また多の人かきちの好色ゐ效ゑん眞道あれに由て
誘謗を受ん　三　うをら貪婪心に由て遺言を設け爾曹より利を取んとす彼等
の刑罰い昔より定あをた遲らじ彼等の滅亡い睡ず　四　神さきゐ罪を犯しま
天使を容さず之を地獄に投いき之を幽穴に留みれを禁錮彼等をして審判
の時を待しめ給へり　五　また古世を容さず洪水を以て神を敬はざる世を滅
ぼし只義道を傳ふるノアの一家八人を救へり　六　又ソドムとゴモラの邑を

滅さんと定め之を扶て友となし後の神を敬はざる者の監となしたり 六 ——ソドム即ち悪者は淫亂の行を恒に爲へし者を救へり 七 その義人かれらの中にをり日々その不法ゐ行を見聞して己の義き心を傷たり 八 此の如く神を敬ふ者を患難より救ひ不義ある者を審判の日まで守りて之を罰し 九 別て汚たる情慾に循ひ肉の慾を行ひ主たる者を藐視する者を罰する事を知給ふあり此輩ゐ膽太く自放ある者にして尊者を誇ることを畏ざるあり 十 天使ゐ彼等ゐ愈し大ある權威と能力を有と主の前ゐ此尊者を詬て訴るゐとを爲ず 十一 彼等ゐ教をて殺さるゝ爲に生れたる無知獸の如し知ざる所の事を誇り其邪曲により滅さきて不義の報を受ん 十二 彼等ゐ白晝も酒食を樂とす汚あり瑕あり爾曹と同に筵席に與るとき其謔謔を樂とせり 十三 かれら目に淫婦を充し罪を犯して止ず心の堅らざる者を惑ひし其心貪婪に慣れ詛るべき子輩あり 十四 かさら正道を離れて迷ゐ入ボソロの子バラムの道に從へりバラムゐ不義の利を貪りし者あり 十五 彼うけ不法の爲ゐ責らる語ゐ能ざる騙馬人の癖をあして預言者の狂を禁たり 十六 此讐ゐ水なき井あり狂風ゐ逐るゝ雲あり黑暗あれらの爲ゐ窮なく存れり 十七 彼等ゐ誇たる虛誕を語り肉慾と淫亂を以て夫の迷へる者を誘へ 十八 また彼等ゐ之に自由を予ると稱れとも自ら淪亡の奴僕たり蓋かたるゝ者ゐ勝者の奴僕たるも也 十九 彼等もし我儕の主なる救主イエスキリストを識に因て世の汚を脫を復これゐ累れて勝るゝ時ゐ其後の狀態ゐ前ゐ愈りて更に惡くなるべし 二十 かれら義の道を識て尙ほの傳られし所の聖命を棄んよりゐ寧ろ義の道を識ざるを美とすべし 二十一 夫ゐ「犬ゐ其吐たる物を食ひ豕ゐあらひ潔られて復泥の中ゐ臥と云る諺ゐ眞あし

第二章

1 愛する者よ我今ゐ此第二の書を附曹に綴贈る此兩書を以て爾曹の眞實なる心を勵し 2 先に聖預言者の語りし言と附曹の使徒等が傳へし主なる救主の命令を記憶させんとす 3 まづ首に此事を知べし末日至らを戲

誰者いで來り已れ慾に從ひて行こと　主れ約束し給ひし其臨る何處に在や
列祖れ寢しより以來すべての物開闢れ始と變ること無と云ん　彼等わ神
の言ゐ由て上古天あり地れ水よりの出つ水に由て立　之に由て古の世水
に淹をて滅たる事を知を欲ず　うを神い其言を以て今の天と地を蓄へ
之を火にて焚ん爲に神を敬わざる人を審判する淪亡れ日まで存せり　愛
そる者よ爾曹あれ一事を知ざる可らず主に於ていわ一日わ千年の如く千年
い一日れ如し　主うの約束し給ひし所を成ゐ遲きわ或人の遲しと意ふが
如くに非ず一人れ亡ぶるをも欲を給わず衆人の悔改に至らんあとを欲を
て我儕を永く忍び給ふあり　然と主の日れ來ること盜の夜きたるが如なら
ん其日にわ天大ある響ありてさり體質あとごく焚燬れ地と其中ゐある
物をゐ焚盡ん　斯の如く諸れもれ銘されん然ば爾曹神れ日の來るを待ゐ
れを速やかにせんてとを務いかに潔行をなし神を敬ふあとを爲べき乎
然と我儕い其約束に因て新しき天と新しき地を望み待ば汚
あく疵あく主の前ゐ安然に在んあとを務よ　且われらの主の寛容を永く
忍び給ふい我儕れ救とあるを知べし　我儕の愛する兄弟パウロも其賦られ
し智慧に循ひ曾て此事を爾曹に書贈れり　彼うの凡の書ゐも此事ゐ說て
語たり彼の書れ中ゐわ難明とある事ゐあり無學ある者心の堅ちざる者他の聖
書を强解ゞ如く之をも强解て自ら敗亡ゐ至るあり　愛する者よ爾曹預し
め之を知ゞ愼めよ惡者の迷謬に誘れて其堅き心を失ふあと勿れ　ゐんち
ら益ゝ我儕の主ある救主イエスキリストを知んあとゝ益うの恩惠を知こと
を務むべし願くわ榮光今も後も彼に歸して窮あらんてとをアーメン

新約全書使徒彼得後書　終

新約全書使徒ヨハヂ第一書

第一章

一 ろれ我儕ゲ聞また目ふ見懇切に視わが手捫りし所の者即ち元始
より在し生命の道を關ふ
二 ふの生命すでふ顯れたれバ我儕みれを
見て證をなす即ち原父と偕ふ在し者ふて我儕に顯きたる窺みき所の此生
命を爾曹に傳ふ
三 われら見しと聞し所を爾曹ふ傳るい爾曹を我儕と
同心あらしめん爲ありて我儕い父およびその子イエスキリストと同心たり
四 我儕ふの書をかき贈て爾曹の喜樂を充しめんとす
五 神い光ありて少の暗處
あし此い我儕彼より聞て亦あんなたらふ傳る告ありて
六 若われら神と同心ふ
りと言て暗を行うバ我儕ゲ言と
七 ころい誠にして眞理を行ふ非ず
若神
れ光ふ在ゲ如く光れ中を行うバ我儕互に同心とふるを得かつ其子イエス
キリストの血すべて罪より我儕を潔む
八 もし罪ふしと言バ是をづから欺
けるふて眞理わさらに在なし
九 もし己の罪を認ゝさバ神い信實ある公義
者ふるゲ故に必ず我儕れ罪を赦し諸の不義より我儕を潔むべし
十 もし罪

を犯たることゝなしと言ば神を誑者とする也ろの道われらゐ在なし

第二章 わが小子よ我てきちの事を爾曹ゐ書贈るい爾曹をして罪を犯そて
と冀らしめん爲あり若し人罪を犯せも我儕の爲に父の前ゐ保惠師あり即
ち義あるイエスキリスト 二 彼い我儕の罪の挽回の祭物あり 三 われら若ろの誡を守らゞ是ゐ
れみあらす徳く世の爲れ挽回の祭物あり
由て彼を識りと自ら曉るべし 四 われ彼を識りと言て其誡を守らざる者い
謊人あり眞理ろの裏ゐ在ゐし 五 凡て其道を守る者い神を愛そるれ愛誡ゐ
其裏ゐ旅て完全す是ゐ由て我儕ゲ彼に在ゐとを自ら曉る 六 彼に居ると言ふ
者い彼の行し如く行むべき也○ 七 兄弟よ我ゐんぢらに新しき誡を書贈る
ゐ非す即た始より爾曹の有る舊誡なり此舊誡い始より爾曹ゲ聞し所れ道
あり 八 然と我ゲ爾曹に書贈る所いまた新しき誡あり此言い彼ゐ於ても爾
曹ゐ於ても眞實なり蓋いま暗昧いやゝ過て眞の光耀なあり 九 光に居と言
て其兄弟を憎む者い今ゐは暗に居なり 十 兄弟を愛そる者い光に居て己を

顯かするもの其裏ゐあるし 十一 兄弟を憎む者い暗にをり暗に行て其往とゐろ
を知ず是ろの目を暗ゐ眛さるれを也 十二 小子よ我てきちの書を爾曹ゐ書おくる
い爾曹主の名ゐ緣て罪を赦されたるに因 十三 父老よ我ゐの書を爾曹にうき
贈るい爾曹元始よりの者を識るゐよる壯者よ我てきちの書を爾曹に書おくる
い爾曹惡者に勝るによる孺子よ我ゐの書を爾曹父を識
るゐ因 十四 父老よ我ゐの書を爾曹ゐ贈しい爾曹始よりの者を知るゐ因てな
り壯者よ我てきちの書を爾曹剛健かゝ神の道なんぢらの心ゐ存
て惡者ゐ勝るに因てあり 十五 ゐの世あるひい此世ゐあるひい此世ゐある物を愛する勿れ人
もし此世を愛せも父を愛そるの愛ろの
肉體の慾眼目の慾また勢より起る驕傲みれらい皆父より出るに非す世よ
り出るもの也 十六 この世と其慾とい逝るものゐて神の旨を行ふ者い永遠存
るあり○ 十八 孺子よ今い乃ち季世キリストゐ敵する者多し是ゐ由て今い乃ち季の世なる
所の如く今すでゐキリストゐ敵する者來らんと爾曹ゲ聞し

を我儕い知りぬ　我儕を離れて彼等出たりと雖も素より我儕の屬あらざる也もし我儕の屬あらんかい恒に我儕と偕あるべし彼等いで去るい衆の者の悪くい我儕の屬あらざるあとを顯さんが爲なり　二十 聞曹い既に聖主より膏を沃れて一切の事を知　わを爾曹が悉く眞理を識るが非ず爾曹眞理を識かつ凡の謊い眞理より出ざることを識るを以てあり　二一 誰か是謊者イエスを言てキリストと爲せざる者あらずや父と子とを拒む者い即ちキリストを敵する者あり　二二 凡ろ子を拒む者い父をも有ず子を受る者い父をも有り　二三 なんぢら始より聞る者あんぢらの衷を爾曹の衷を居しむべし若し始より聞る者あんぢらの衷を爾曹の衷を居しむべし若儕に約束し給へる約束すなわち窮なき生命あり　二四 われ爾曹を惑す者を斥て此等の事を爾曹を書贈れり　二五 爾曹い主より沃れたる膏うの衷を存ぎるが故に敎を人より受るに及ず其膏すべての事を爾曹に敎ふ且眞實にして虚假あし爾曹膏の敎る如く恒に主を居べし　二六 小子よ恒を主を居べし　主

顯現時を我儕懼るみとなく其降臨時に其前を恥るみと莫らん爲なり　二七 爾曹い主れ公義を知を由て公義を行ふ者の皆主の生とてろあるを亦悉る也　二八 看よ我儕稱られて神の子たるみとを得あれ父の我儕を賜ふ何等の愛ぞ世い父を識ず是を由て我儕をも識ざる也　二九 愛する者よ我儕いま神の子たり後いうん未だ露れず其現れん時にい必ず神に肖んみとを知るい我儕ろの眞狀を見べければ也　三 凡ろ神に由る此望を懷く者い其潔ぎ如く自己を潔す　四 罪を犯す者い律法を犯そみと也　五 我儕れ罪を除かんが爲を主の現れ給ひしみとい爾曹の知とみろあり彼また自ら罪あし　六 凡ろ彼を居者い罪を犯さず凡ろ罪を犯す者い未だ彼を見ず未だ彼を識ざる也　七 小子よ人に惑さるよみと勿れ義を行ふ者い義人あり即ち主の義あるが如し　八 罪を犯す者い惡魔より出ろい惡魔い始り罪を犯せばあり神の子い惡魔の工を毀たんが爲あり　九 凡ろ神ろの裏に存を因れ亦罪を犯そて

と能ハず蓋神ゐ由て生るゝ者ハ也○十是ゐ由て神の子と惡魔の子とハ明カ
ゐ著る凡ろ義を行ハず其兄弟を愛せざる者ハ皆神より出しゐ非ず十一我儕
の互ゐ相愛すべき關係の始より聞し所の命令ゐり十二カインゐ效ふゐと
勿れ彼ハいかの惡者より出し者にて其弟を殺せり何故ゐれを殺しまか己ハ
行し所ハ惡く弟の行し所ハ義りしゐ因十三わが兄弟よ世ゐんぢらを憎む
とも驚くゐと勿れ十四我儕ハ兄弟を愛するに因すでに死を出て生に入しゐ
とを自ら志る兄弟を愛せざる者ハ死の中ゐ居る十五凡ろ兄弟を憎む者ハ即ち
人を殺す者ゐり凡ろ人を殺す者ハ窮ゐき生命ろの裏ゐ存てとゐし此ハ關
係の知とてろ也十六主ハ我儕の爲に生を捐たまへり是に由て愛といふ事を
知たり我儕また兄弟の爲ゐ生を捐べし十七世の資財をもち兄弟の窮乏を見
て反て惠施の心を閉る者ハ何で神を愛そるの愛ろの裏ゐ存んや十八小子よ
我儕愛するゐ言と舌とを以て相愛するゐ事ゐく行と實とを以てすべし十九是
ゐ由て我儕眞理より出しを知ゐつ我儕心を主の前ゐ安んずべし二十我儕ゞ

心もし我儕を責む神ハ我儕ゞ心よりも大ゐるにより凡ゆ事を知給はざる
ゐし二十一愛そる者よ我儕ゞ心みづから責るゐと無た神ゐ向て憚る所ゐろる
べし二十二且われらゞ凡て求る所ハ彼より受ろハ其誡を守りて其悅び給ふ所
を行へゐ也二十三これ誡ハ即ち我儕神より子イエスキリストゆ名を信じ彼の我
儕に命ぜし如く互に相愛そること也二十四神ゆ誡を守る者ハ神にをり神も亦
これに居われら其賜ふ所ゆ靈ゐ由て即ち其わざらに居給ふことを知り

第四章

愛する者よ凡ゆ靈を信ずる勿きろハの多の僞預言者いでゝ世に入り二凡ろイ
給ふゐとを認とす靈ハ神より出ゐとゐ由て神ゆ靈を知べし三凡ろイエス
キリストを認ハさゐる靈ハ神より出ざる也是ハ反キリストゆ靈ゐり此者ゆ將に來らんとする事ハ爾曹ゞ聞る所ゐり今ゃでゐ世ゐ居り四
小子よ爾曹ハ神より出ゐ且彼等ゐ勝ゐあとを得たり蓋ゐんぢらゆ裏ゐ居る者ハ
それ世ゆ裏にをる者より大ゐるゐ因てなり五彼等ハ世より出し者ゐ在其

いふ所も世より出し者れ言べき事ゝ
出たり神を識もれい我儕ふきゝ神より出ざる者い我儕に聽ず是ゝ出て眞
理の靈と迷認れ靈とを知あり○愛ゑる者よ我儕互に相愛すべし愛い神
より出れを也おはよろ愛ある者い神ゝ由て生れ且神を識るあり八愛ふき
者い神を識ず神い即ち愛ふれゑ也九神いうの生給へる獨子を世に遣はし
我儕をして彼に由て生を得しむ是ゝ於て神の愛われらゝ顯れたり十われ
ら神を愛するに非ず神われらを愛し我儕の罪れ爲ゝ其子を遣して挽回れ
祭物とせり是すなゑち愛あり十一愛する者よ此の如く神われらを愛し給へ
ゑ我儕も亦たがひに和愛すべし十二未だ神を見し者なし我儕もし互に相愛
せゑ神われらゝ裏に居て彼を愛する愛を我儕の裏に完全す十三かれ已に其
靈をもて我儕に賜ふ是ゝ由て我儕れ彼に居ゐれ彼に居ゐとを知ゑ父
最に其子を遣して世ゝ救主と爲り我儕すでに之を見たり今ろの證を作ふ
り十四凡ろイエスを神の子ありと認いす者い神われに居ゐを神ゝ居我儕

れ爲に神の有る愛を我儕そでゝ知て信ず神い即ち愛あり凡ろ愛にをる者
い神にをり神また彼に居此の如く我儕の愛全備を得て審日ゝ懼ふらし
む蓋主れ如く我儕世ゝ在をなり十八愛の中ゝ懼あるゝとあし全き愛い懼
を除ろい懼い苦を有り凡ろ懼るゝ者い愛を全備せざる也われら神を愛
するい彼せづ我儕を愛するに因り二十もし我い神を愛すと言て其兄弟を憎
む者い是譎者あり既に見とろの兄弟を愛せずして未だ見ざる神を何で
愛せん乎二一神を愛する者い亦ろの兄弟をも愛すべし此誡い我儕彼より授
られたり

第五章　凡ろイエスをキリストと信ずる者い神ゝ由て生れたる也おはよろ
之を生者を愛する者ゑ亦ろの生るゝ所の者をも愛する也二我儕もし神を
愛して其誡を守らゑ此に由て我儕神の兒女を愛するゑ知三神の誡を守る
い是すあゑち神を愛する也ろの誡い難のらず四凡ろ神に由て生るゝ者い
世に勝我儕をして世ゝ勝しむる者い我儕が信ある　誰か能世ゝ勝んイ

ヤを神の子と信ずる者ぉ非ずや○六イエスキリストあり惟水ぇもてし而已ならず水ぉまた血ぉ兼て臨る即ちイエス基督ぇ也七證ぉ爲ぇ者ぃ靈あり靈ぃ眞實あれぇ也八證ぉ作ものぃ三ぁり即ち靈と水と血てぅ三の者の歸する所ぃ一ぁり九我儕もし人ぇ證ぉ受る時ぃ神の證ぃ更ぉ大ぁるべし神の證ぃ此ぁり即ち其子の爲ぉ作る證ぁり十神の子ぉ信ずる者ぃ其裏ぉ此證ぁり神ぉ信ぜざる者ぃ神のぅの子の爲に證せる證ぉ信ぜざれぇ也十一神ぃ窮ぁき生ぉもて我儕に賜ふ此生ぃ乃ちぅの子ぉ在ぁれ其證ぁり十二神の子ぉもぃ者ぃ生ぉ有ぅの子ぉ有ざる者ぃ生ぉ有ず十三われ神の子の名ぉ信ずる爾曹ぉ此等の事ぉ書贈るぃ爾曹に窮ぁき生ぁる事ぉ知しめんが爲ぁり十四凡て我儕神の旨に合へる事ぉ求ば彼ぅぁらず聽ん是われら彼ぉ向て篤く信ずる所ぁり十五凡て我ぴ求る所ぉ彼ぉ得ることぉ亦ぇる也十六もし人ぅの兄弟の死ぉ至らざる罪ぉ犯すぉ見ば祈りて死ぉ至らざる罪ぉ犯す者ぉ生ぉ予ふべし死ぉ至る罪ぁり我ぴ不義ぃ罪あり然と死に至らざる罪ぁり十七凡て不義ぃ罪ぉ犯さゝる事ぉ我儕ぃ志る神に由て生れたる者ぃ自ら守かの惡者ぉ犯さゝることぉ爲ざる也十八我儕ぃ神ぉつき衆世ぃ惡者ぉ服するぉ我儕ぃ知ぉまた神の子すでに來り我儕ぴ眞理者ぉ識れ智慧ぉ我儕ぉ賜るぉ知われら眞理者ぉあり即ち其子イエスキリストに在るをぃ乃ち眞神ぉまた永生ぁり二十小子よ爾曹みづから愼みて偶像ぉ遠かれアーメン

新約全書使徒約翰第一書　終

長老選を蒙れるクリアと其子等を習を
贈る我誠に爾曹を愛す第我のみ
ならず凡そ眞理を識る者の亦みな爾曹を
愛せり 二 爾曹を愛するの是れら
の裏に在て恆に離れざる眞理に縁てあり
三 爾曹の實と愛とに居て神と
いち父およひ父の子イエスキリストより
恩寵と慈悲と平康とを受べし〇
四 われ爾の子等の中わが受し所の父の
命の如く眞理に遊ひて行む者の
有を見て甚だ喜べり 五 クリアよ我いま爾を
さ誡を書贈るに非す即ち始より我儕が有る所の
遵ひて行むの是すなわち愛あり爾曹が
誡なり爾が聞し如く愛を行むの是乃ち
誡なり爾が聞し始より聞し如く愛を行むの是乃ち
給べるおとを認いさす此惑に誘ふ者い
ならん我儕が勤勞し所の事を虚くせず全き賞を得んが爲め自ら愼むべし
凡そ基リストの教を居すして人を導く者い神を有すキリストの教にをる

者わ父および子を有り　十　人もし此教を有すして爾曹に來らた之を家わ納
るおよび勿を彼わ安うをと言わかれ　十一　彼わ安かれといふ者わ共わ其悪行わ
與する也〇　十二　我わは多端わをとも紙と墨とを以て爾曹に書おくるを欲ず
我儕の喜樂の充滿せん爲わ爾曹わ至り口を對て語らんをと望む　十三　爾の
姉妹すべわち選を蒙れる者の兒女みんなわ安を問りアーメン

新約全書使徒約翰第二書　終

新約全書使徒約翰第三書

長老愛そるがヨ――即ち我が誠わ愛する所の者に書を贈る　二　愛する者よ爾
が靈魂れ降んなる如く爾すべての事わつきて隆んわ又康强わらんみとを請
我ねがふ　三　兄弟來りて爾が眞理に行むてとを證
左たれを我甚だ喜べり　四　わが子等の眞理を行むを聞に愈れる大わる喜樂
い我にわし　五　愛する者よ爾い寳族わる兄弟にまで凡て行ふに忠信をもて
行へり　六　かをら敎會の前に在て爾の愛を證せり爾もし神わ合ふべく彼等
の行路を助を其行ふとわろ善なり　七　彼等い主の名の爲わ出て異邦人より
何をも受ざれば也　八　是故に我儕うくの如き人を助くべし蓋われらも彼等
と偕に眞理に働く者とわらん爲わり　九　われ曩に書を敎會に贈りしが彼等
の中に在て長たらんてとを欲むデヨテレベス我を納ざりき　十　我もし往た
其行る所を心わ記置ん彼い悪言をもて妄に我儕を論じ且おれを以て足り
とせず自ら兄弟を接す其を接んとする者をも妨げて敎會より斷けたり　十一

愛する者よ惡を效ふ勿れ即ち善に效へ善を行ふ者は神より出惡を行ふ者はいまだ神を見ざる也　十二　デメテリヨをす我儕の證の眞實あるを爾知りも筆と墨とを以て書おくるを欲ず　十三　我冀は多の事を爾ふ書贈らんと爲と望む願くは爾安かれ　十四　速ふに爾を見て口を對へ語らんあとのく〳〵に安を問

約新全書使徒約翰第三書　終

新約全書使徒ユダの書

イエスキリストの僕ユダは即ちヤコブの兄弟書を召きたる者すべて父なる神に愛せられ且イエスキリストの爲ふ守らるゝ衆人ふ贈る　二　願くは爾曹ふ慈悲と平康と仁愛の增んあとを○　三　愛する者よ我心を熱して共に與る所の救れ事を爾曹に書れくらんと思ゐたりしが今なんぢらふ書を贈り て聖徒が一たび傳られし信仰の道の爲ふ大を戰して戰ふん事を爾曹に勸ざるを得ず　四　ゐい神を敬わず我儕の神れ恩を易て色慾を放縱ふするの緣とゐし惟一の主なる神と我儕の主イエスキリストを棄るもの數人窃ふ忽會ふ入たをゐり彼等が此刑を受るふと定られたる事い昔より預じめ錄されたり　五　ゐんぢら素より知る事あれと我ゐは爾曹ふ憶起させんとする事い主ろの民をエジプトの地より救出しゝのち信ぜざる者を滅ぼし給ひしと已が本位を守らずして其住る所を離れたる天使を限ゐく繫て大ある日の審判まで幽暗の中ふ守り置たまひしと　七　ソドムゴモラ及び

其并隣の邑のものと同く姦淫をおこし且男色を行ふ
ゆえ
永火の罰を
受て鑑戒を立らるるなり　八　斯のごとく夢みる者も亦皮體を汚し主たる者を
蔑忽し尊者を謗れり　九　ミカエル惡魔とモーセの屍を爭ひ論
ぜしとき彼をはゞかりて之を謗りて訴へざりき惟主おんみを責べしと曰り　十　然る
に彼等は知ざる所の事を謗れり其本性志る所は無知獣れ知てこれと同じ
く滅ぶるものなり　十一　彼等はカインの途にゆき利の爲に
バラムの迷謬に馳またコラの逆ひし如して亡びたり　十二　彼等は爾曹の愛
の筵席の玷なり憚る所なく同おに其筵席を與りて自己を養へり彼等は風おに
逐るゝ雨なき雲枯て刈れ根を抜るゝ果のなき秋の樹　十三　己の羞を湧出す
海の猛浪なり之ダ爲おに黒暗を限なく留置たり　十四　アダムより七世おに當る
エノグ此輩の事を預言して曰けるは視よ主ろの聖萬軍と偕おに氷りて
衆人を戮き凡て神を敬ざる者の神を敬ざる罪人の主おに逆ひて語れる訐れ惡言を
貰給ふべしと　十五　此輩は怨言ものゝ
足ことを知ざる者おれの慾おに從ひて行き其口は誇るみとを語り利の爲
おに人おに諂ふ者なり　十六　愛する者よ爾曹わダ主イエスキリストの使徒くの嚮
おに語りし言を憶起すべし　十七　即ち爾曹おに語ていふ末期おに嬾雑者れおり己ダ
慾に從ひて行んと　十八　彼等は自ら區別をおす者また肉おに屬る者おに
して靈れおき者おり　十九　愛する者よ爾曹ろの德を至潔き信仰の上おに建て聖
靈おに感じて祈り　二十　自己を守りて神の愛の中おに居わきらの主イエスキリス
トの永生を賜ふ其矜恤を待べし　二一　彼等のうち或者をば論じて口を噤し
め　二二　或者をバ火より取出して救ひ或者をバ畏懼を以て憐むべし其惡い肉
の慾おに染たる衣までも惡むおとをせよ○　二四　我儕の救主ある獨一の神すな
はち爾曹を躓のせじと保り爾曹をして汚なく歓びて其榮光の前おに立みと
を得しむる者い世の始の前より今また後も世々永遠わきらまで主イエスキ
リストお由て榮と尿光と大能と權を有ち給ふなりアーメン

新約全書猶太書　終

新約全書ヨハヲ駅而錄

第一章

此イエスキリストの駅而すみいち神彼をして迅速ゐ起るべき事を彼の僕等ゐ而さしめんとて彼に賜ひし所ゐりイエスキリスト其使を以て僕ヨハヲに之を贈り而し給へりニヨハヲ神の道とイエスキリストの証と其凡て見し所のものとを證すミあの預言の書を讀者と之を聞て其中ゐ記しゐる所を守る人々い福ゐり蓋時近けれゑ也〇四ヨハヲ書をアシアにゐる七の教會に贈る願くい今在し昔し在し後在す者ゐよび其寶座の前の七の靈ゟ及び忠信ゐる證者死れ中より首ゐ生れし者天下の諸王の君たるイエスキリストより爾曹恩寵と平安を受よ願くい我倘を愛し其血を以て我倘の罪を洗潔め六我倘をして王となし祭司と爲てうの父の神ゐ屬しむる者ゐ榮光と權力世々窮ゐく有んあとをアーメン〇七視よ彼い雲に乘て來る衆の目かれを見ん彼を刺たる者も亦れを見べし且地の諸族みれゟ爲に哀哭んアーメン八主たる神いひ給へり我いアルパ也オメガゐり始なり

終あり今あり昔あり後ある全能の者あり○ 九我ヨハネ——即ち爾曹の兄弟あ
んぢらと患難を共おしイエスキリストれ國および其忍耐を共にそる者爰
に神の道とイエスの證れ爲おパトモスといふ島お居て 十主の日お我靈に
感じて笛の如き大ある聲の我後に在を聞り 十一云く爾の見ところを書お錄
じて之をアシアに在エペソスムルナペルガモテアテラサルデスヒラデル
ヒアラオデキヤの七の敎會に贈るべし 十二われ身を轉して我お語れる聲を
視んとし既ふ身を轉せば金の七の燈臺 又其七の燈臺の間お人の子の如
き者あるを見たり其身にハ足まで垂る衣をき胸おハ金の帶を束ね 十四首と
髮とハ白あと羊の毛の如く雪の如く目ハ火焰れ如し 十五足ハ爐に燒る眞鍮
の如く聲ハ大水の響の如し 十六右の手にハ七の星をもち兩刃の利劍ろの口
よりいで面ハ甚しく輝く日の如し 十七我おを見しとき死る者の如く其足
下お仆れたり彼右の手を我お按て曰けるハ懼るゝ勿れ我ハ首先あり末後
あり 十八我ハ生者なり前お死しあとあり旹よ我ハ世々窮なく生んアーメン

我ハ陰府と死との鍵を持りあんち見し所および今ある所のあと後あ
る所の事を錄すべし 二十其ハ爾ち見し所の我ち右の手の七の星また七の金の
燈臺の奧義あり七の星ハ七の敎會れ使者七れ燈臺ハ七れ敎會なり

第二章

一エペソの敎會の使者に書おくるべし右の手お七の星を執また七
の金の燈臺の間を行む者かくの如く言と 二ハれ爾れ行爲と勞苦と忍耐
と爾ち惡人を容る能ざると爾ち使徒ありと稱て實ハ使徒にあらいし事と
非ざる者を試みて其妄言を見あらハし事と 三爾ち忍耐する事と我名の
ために患難を忍びて倦ざりし事とを知 四然と我あんちに責べき事あり爾
初時の愛を離れたり 五あんち何處より墜しかを憶ひ悔改めて初の工を行へ
然すして爾もし悔改めずば我あんちお到り爾の燈臺を其處より取除のん
六然とも爾ハ一ニコライ宗の人の行爲を惡むあとあり我
も之を惡めり 七耳ある者ハ靈の諸敎會おいふ所を聽べし勝をうる者おハ
我神の樂園にある生命の樹の實を食ふ事を許さん○ 八あんち又スムルナ

の改會は使者に書おくるべし首先末後れもれ死てまた生たる者ゥくれ如
ク言と曰われ爾の行爲と患難と貧乏とを知る皆乏とい雖と爾ハ富り我
また夫の自らユダヤ人ありと稱て實ハ非ざるサタンの會の者の褻瀆の言
を知りてあんぢ將お受んとそる苦を懼るゝ勿れ惡魔まさに爾曹れ中の者
を獄に入て爾曹を試さんとす爾曹十日のおひだ患難を受べし爾死お至る
まで忠信みを然ば我生命の冠を爾おゟ賜へん耳ある者ハ靈の諸教會にい
ふ所を聽べし勝を得もの〻第二の死の讐害を受ず○十二爾ペルガモの教會に
の使者に書おくるべし兩刃の利劍をもつ者ゥくの如く言と十三曰われ知
んぢが住處ハ即ちサタンの座位のある所なり爾ハ固く我名を保つ僧て我
が忠信の證人アンテパスが爾曹の中サタンの住とおろにて殺されし時おも
爾わが道を棄ざりき然とも我あんぢお數件の責べき事あり爾曹の中バ
ラムの教を保つ者わり先おバラクお教て礙物をイスラエルれ民の
前お置しむ即ちバラクをして彼等に偶像お獻し物を食わせ姦淫を行わし

めたり十四また爾曹れ中ホニコライ宗の教を保り者あり此教ハ我が惡む所
なり十五あんぢ悔改めよ然ざれバ我速に爾お到り我が口れ劍をもて彼等
と戰ばなり十七耳ある者ハ靈れ諸教會おいふ所を聽べし勝をうる者おハ我藏
ひおるまゝを予へん亦白石れ上お新しき名を記して之お予へん之を受る
者の外お此名を知もれあし○十八爾テアテラれ教會の使者お書贈るべし神
の子ゥの目ハ火焰の如く其足ハ眞鍮れ如くある者ゥくれ如く言と十九曰われ
爾の行爲と愛と信仰と服役と忍耐とを知また爾が後お爲し工ハ初れ工よ
り多おとを知然とも我あんぢお責べき事あり爾ハゟの自ら預言者な
が〻と稱て我が僕を敎おを惑し姦淫を行ことせ偶像お獻し物を食しむる婦
女イゼベルを容おけりニ十一われ曾て此女に悔改むべき機を予たまと其姦淫
を悔改るおとを爲ざりき二十二我かきを牀お投入ん又かれと淫する者も若ゥ
の行を悔改ずまた我おとを大なる苦難の中お投入ん二十三また死をもて彼の
婦の兒女を殺さん之に因て諸教會ハ我が人れ心腸を察り爾曹各〻れ行お

祐ひて報を爲おとを知ん 三 我おの餘はテアテラに在る人いまだ此教を受ず所謂サタンの奥義を未だ識ざる爾曹に言わ他の任を爾曹お負せじ只おんぢら有とおろの者を我いたる時まで固く保ぢべし 二六 勝を得て終お至る 二七 我おの命ぜし事を守る者おわれ我諸邦の民を治むる權威を賜へん 二八 彼わ鐵の杖をもて諸邦の民を牧り彼等を陶瓦の器の如く碎かん 二九 我わが父より受たる權威の如し 二八 我また彼お啓の明星を賜へん 二九 耳ある者わ靈の諸教會おいふ所を聽べし

第三章 三 爾サルデスの教會の使者お書贈るべし神の七の靈と七の星とを持もの此の如く言と曰われ爾の行爲をおる又おんぢに生る名ありて其實わ死るおとを知ニなんぢ目を醒し幾と死んとする殘情を堅せよ我おんぢの行爲の我神の前に全きを見さる也 三 是故に爾が受たるとてろ聞たる所を憶起て之を守りて悔改めよ若し目を醒し居ずば我盜賊し如く爾に到らん爾わが何の時おんぢお到るかを知ざる也 四 然ともサルデスにおわ數いまだ其衣を汚さる者おり彼等わ白衣をきて我と同お行まん彼等わ然するお足もれ也 五 勝を得もの わ白衣を着らきん我ろの名を生命の書よお塗抹さず又わが父と其使等の前お彼が名を言陳ん 耳ある者わ靈の諸教會にいふ所を聽べし 六 爾ヒラデルヒアの教會の使者に書贈るべし聖もの誠ある者ダビデの鑰をも切者のれ開も誰も閉るおと能わず彼閉をが誰も開おと能わず此者かくの如く言と 八 曰われ爾の行爲をおる我が門を爾の前お開ゐり之を閉るおとを得る者おし蓋なんぢ少く力わりて我が言を守り我名を棄ざれ也 九 夫の自らユダヤ人と稱て實わ非ず唯謊言をいふサタンの會の或者をして我おとを爾の所お來らしめ爾の足の前に伏しめ我おんぢを愛せしおとを知しめん 十 爾わが忍耐の言を守しおより我も亦おんぢを守りて地お住人を試えん爲に至世界に臨んとする試煉の時お之を免しむべし 十一 われ迅速お來らん爾が有とおろの者を堅く保ちて爾の冠を人お奪るふおと勿れ 十二 勝をうる者をば我神の殿の内の柱となし

さん此より再び出るあとなし我また我神の名と吾神の京城すなわち天より我神より降る新しきエルサレムの名および我が新しき名を之に書
十三 耳ある者い靈の諸教會に言ところを聽べし
ラオデキヤの教會
十四 ラオデキヤの教會の使者に書贈るべしアーメンたる者忠信なる眞實の證者神の造化の始なる者のくの如く言と
十五 曰わを知り我わんちが冷かおも有ず熱も有ざることを明の行
十六 爲に由て知り我わんちが冷かおるか或い熱からん事を願ふ
十七 爾すでお溫然して冷りおも有ず熱くも有ず是故お我わんちを我が口より吐出さんと
十八 すわんちが自ら我い富かつ豐おわんちが乏き所なしと稱て實い憫るもの憐む
十九 べき者また貧く窘り裸體おるを知きをパ
二十 われ明お勸るんち富をわさんためお我より火お煅たる金を買また己が裸體の恥の露をさらん爲お白
二十一 衣を買て穿へ又見てとを得ん爲お目藥を買て目おぬれ
二十二 凡て我が愛そる者い我これを責め之を懲す是故お爾悔て悔改めよ
二十三 叩もし我聲を聞て戸を開く者あらば我が入と偕に其人い我と偕に食せん
二十四 勝をうる者おわい我さきに勝を得て我父と偕に其寶座に坐するが如く我と偕に我が寶座お坐するあとを許さん
二十五 耳ある者い靈の諸教會お言ところを聽べし

第四章

此後われ見しお天に門開けありたり我が初お聞る所の我に語るラッパの如き聲また我お語て曰てまお上れ我みのの
二 ち起るべき事を爾お示さんにわれ直に靈に感じ天に一の寶座設ありて其寶座え上お坐そる者あるを見たり
三 ろの坐する者の貌い金剛石赤瑪瑙の如く且ろの寶座の四圍に綠れ玉の如き虹あり
四 ろの寶座え四圍お又二十四の寶座あり二十四人の長老白衣をき首に金の冕を戴きて其寶座お坐するを見たり
五 ろえ中央の寶座の中より閃電迸雷および許多の聲いづ又ろの寶座の前に燃る七の火燈あり是神の七の靈あり
六 寶座の前に水晶お似たる玻璃の海の如きものあり寶座の正面ところの四圍お四ゑ活物あり前後あとしく目あり
七 第一の活物い獅子の如く第二の活物い牛の如く第三の活物い面の貌人の如

く第四の活物の飛鷲の如し　八 斯れ四の活物おの〳〵六翅あり其内外と〳〵く目なり此もの夜る晝る息ずして今在し後いますふ聖うお聖うお昔し在し後います主たる全能の神とれ　九 斯の活物寶座お坐する所の世々窮なく生る者に榮を歸し之を尊び之お感謝せし時　十 二十四人の長老寶座に坐する者の前に伏れ世々窮なく生る者を拜し己の冕を其寶座の前に投げ出し曰けるお　十一 主よ爾お榮と尊貴と權風を受べき者あり爾お萬物を造り萬物お意旨お由て有ち且造れたり

第五章

我また寶座に坐する者七の印にて封印せる内外お文字ある卷を其右の手に持るを見たり　二 我また一人の強き天の使大ある聲を發して曰かく此卷を開き封印を解お堪る乎と宣傳るを見たり　三 然るお天にも地おも地の下おも此卷を開き又てをを得る者おらず　四 一人として此卷を開き又てれを見お堪る者おきが故お我甚だしく哭り　五 彼の長老の一人わをに曰けるお哭なかれユダ支派より出たる獅子ダビデの根すでお勝を得たるお以て此卷お開き其七の封印お解ことを得たりお　六 我また此卷を開き又ての七ツ封印の間お羔立をるを見たり此羔さきお殺されし事あるが如し之お七の角と七の目あり此目い全世界お遣てし神の七の靈おり　七 おの羔そゞて寶座お坐する者の右の手より卷を取り　八 卷を取るとき四の活物および二十四人の長老おのく〳〵琴を執また香を盛たる金の香鑪を執て羔の前お俯伏したり此香い聖徒等の祈禱おり　九 彼等新しき歌を唱いひけるお爾い此卷を取ろの封印を解お堪る者おり蓋爾んち曾て殺され其血ををて諸族諸音諸民諸國の中より我儕を贖ひて神お歸せしめ　十 又つ我儕の神の爲に我儕を王と祭司と作給へり也ひそら地お王たるべし　十一 我また見しに寶座と活物およひ長老等の四圍お衆の天の使の聲あるを聞り其數千々萬々（十二）なれら大聲お曰るお聞り　十二 權威富智慧能力尊敬榮光讃美を受べき者おり　十三 我また天およひ地およひ地の下およひ海の上にある所の凡て造れたるもれ又ろの中お在もの皆いへ

るを聞り曰く願くは讃美尊敬榮光權力寶座に坐そる者と羔とに歸して世々窮なからんことを　十四 是ふ旅て四の活物アーメンと曰り二十四人の長老伏て拜せり

第六章 羔ろの一の封印を開しとき我觀しに活物の一つ雷の如き聲ありて來れと曰を聞り　二 わ已觀しに一匹の白馬を見たり之に乘るもの弓を得ふ且冠を與られたり彼常に勝り又勝を得んとて出行り　三 また第二の封印を開し時我れ第二の活物の來をと曰を聞り　四 また一匹の赤馬いで來れり之に乘るもの地より平和を奪ひ且人々をして彼此に相殺しむる權を予られた　五 また第三の封印を開しとき第三の活物の來をと曰を聞り我觀しに一匹の黑馬を見たり之ふ乘るもの手に權衡を持り　六 我ふの四の活物の中ふ聲あるを聞り曰く銀十五錢に大麥一升五合ふり油と葡萄酒を傷ふ可らず　七 また第四の封印を開しとき第四の活物の來をと曰を聞り　八 われ觀しふ一匹の灰色たる馬を見たり之に乘る者の名い死といふ陰府ろの後ふ隨へり彼等刀劍饑饉死亡およひ地の猛獸をもて世の人の四分の一を殺すの權を予らをたり　九 また第五の封印を開しとき祭壇の下に曾て神の道のため及ろの立し證の爲ふ殺さをたる者等の靈魂あるを見たり　十 これら大聲に呼り曰々るい聖誠の主よ何時まで地にすむ者等を審判せず且ふれに我儕の血の報をふし給ざる乎　十一 爰ふ彼等各人ふ白衣を賜へて之に曰給ひけるい彼等の如く殺されんとする其同ふ勞ける兄弟等の數の盈るまで安んじて暫く待べしと　十二 また第六れ封印を開し時われ觀しに大ある地震あり日い毛布れ如く黑ふり月い血れ如くふれり　十三 天の星い無花果れ樹の大風ふ搖て未だ熟せざる其果の落るが如く地に隕　十四 天い卷物を掩が如く去ゆき諸山諸島をな移てろの處を離れたり　十五 地の諸王また貴人富者將軍勇士すべての奴隸すべて自主ふとしく洞に匿れ山の巖の中ふ匿れ　十六 山と巖とに曰々るい願くい我儕の上ふ墜われらを掩ふて寶座に坐そる者の面と羔の怒を避しめよ

おの諸の怒の大なる日すでに至れるなり誰か立ことを得んや

第七章 此後われ四人の天使地の四隅に立て地の上にも海の上にも樹の上にも風を吹せざるを見たり　二又ほかの一人の天使活神の印を持て東より登り來るを見たり此使者おの〳〵大聲に呼ばり　三我儕の神の僕の額に我儕が印をおすまでは地をも海をも樹をも傷ふ可らずと曰り　四われ印せられたる者の數を聞しが　イスラエルの諸〳〵の支派のうち印せられたる者合せて十四萬四千あり　ユダの支派にて一萬二千ルベンの支派にて一萬二千ガドの支派にて一萬二千　ヤセルの支派にて一萬二千　ネフタリの支派にて一萬二千　マナセの支派にて一萬二千　シメオンの支派にて一萬二千　レビの支派にて一萬二千　イサカルの支派にて一萬二千　ゼブルンの支派にて一萬二千　ヨセフの支派にて一萬二千　ベニヤミンの支派にて一萬二千人あり　九此後われ觀しが諸國諸族諸民諸音の中より誰も數へ盡すおと能さるほどの許多の人白衣をき手に椰棚の葉をもなが寶位と羔との前に來りて立ツ　十かつ大聲に呼り曰けるは救が寶座に坐せる我儕の神と羔とより出るなり　十一天使みな寶座および長老等と四の活物との四圍に立て寶座に向ひ伏倒し神を拜し　十二曰ふるかアーメン願くは讃美榮光智慧感謝尊敬權威能力世〳〵窮なく我儕の神に歸せよアーメン　十三長老の二人われに曰けるは此白衣を着たる者は誰か且何處より來りしや　十四われ答けるは君よ爾おれを知べし彼われに曰けるは彼等は大なる艱難を經て來れり且て羔の血おて其衣を濯ぎ白おせる者なり　十五是故に彼等は神の寶座の前おり神の殿にて晝夜神おつかふ寶座に坐する者は彼等の中に居給ふべし　十六彼等は重て渇ず又重て飢ず重て熱氣も彼等を害ざるなり　十七寶座の前にある羔のおのれを養ひ彼等を活る水の源おに導き又神われらの涙を其目より拭ひ給ふ可れば也

第八章 また第七の封印を開しとき天都鎮おり凡そ半時ばかり

前ゐ立る七人の天使をみる彼等七の
金の喇叭を持來て祭壇の側ゐ立ゥを
ある金の祭壇の上ゐ之を獻て諸の聖
徒の祈禱に添て天使の手より神の
前に升きり
烟聖徒の祈禱に添て天使の手より神の
をに祭壇の火を盛て地ゐ傾けよれべ
り○七の喇叭を執る七人は天使喇叭を
ふく備を爲り第一の天は使喇叭を吹け
ば血の雜たる雹と火と地に雨降り地の三分の一
焚亡また樹は三分の一
焚亡すべての青草も焚亡たり○第二の天使喇叭を吹けば火ゐ焚る大な
る山の如きもの海に投入られ海は三分の一血ゐ變たり
られたる活物三分の一死舟三分の一破壞たり○第三の天使喇叭を吹け
が一の大なる星明燈れ如くゐ燃て天より隕すゐ
水は源に隕たり
水は源に隕たり　その星の名は茵陳といふ水の三分の一ゐ茵陳の如く苦
く變り如此水の苦く變るに因て多の人死り
第四は天の使喇叭を吹けば

日の三分の一月の三分の一星の三分の一そな撃れて其三分は一すべて暗
なり晝三分は一光ゐく夜も亦光ゐし
なり晝三分は一光ゐく夜も亦光ゐし　十三われ見しゐ一の鷲空潛の中央を飛
天ゐる聲にて呼をきく曰く後また三人は天使喇叭を吹んと爲により地に住
者ゐ禍ゐるかな禍ゐるかな禍ゐる哉

第九章　第五は天使喇叭を吹ける時我天より地に隕たる一の星を見たり此星底
なき坑は鑰を與られたり　二彼底ゐき坑を啓ければ大ゐる爐は烟は如き煙
坑より上り日と穹蒼とは此坑の烟は爲ゐ暗ゐをり　三多は蝗烟は中より地
ゐ出れ蝗地は蠍は權は如き權を與らる　四また地の草も凡〳〵の青綠ゐ
よび諸の樹を傷ふゐと勿たゝ額ゐ神の印ゐき人々を傷ふべしと命ぜられ
たり　五且ゐれに人を殺ゐとを許さず惟五ヶ月は間かをらを苦むる事を許
れたり其痛苦ゐ人蠍に刺をたる時の痛苦は如し　六の時に人々死を求ん
と爲とも能ゐず死んゐとを願とも死ゐ遁去べし　七此蝗の狀ゐ戰のために
備たる馬の如し頭にゐ金の冕の如きものを戴き其面ゐ人の面の如し　八此ゐ

女の髮の如き髮あり其齒は獅子の齒の如し　九又鐵の胸當の如き胸當あり其翼の音は數多の馬の戰車を引て戰場に馳るが如し　十且蠍の尾の如き尾と螫とあり此螫五ケ月の間人を傷ふ權を有り　十一其王は底なき坑の使者なり　ヘブルの音にて其名をアバドンと云ギリシヤの音にてアポリオンと云　十二一の禍は去てみよ尚二の禍至らんとす　十三第六の天使喇叭を吹し時われ神の前なる金の祭壇の四角より出る聲ありて　十四喇叭を持る第六の天使に語をきくに曰かの大河ユフラテの邊に繋がれたる四人の使者を釋せ　十五乃ち四人の使者釋れたり年月日時の爲に備しものの也　十六騎兵の數に万々ありわれ其數を聞かな　十七われ異象に此馬と之に乘る者を見しが其形狀のくれ如し彼等は火色紫色硫磺色の胸當を着馬の首は獅子の首の如く其口より出る火と煙と硫磺となり　十八此馬の口より出る火と煙と硫磺と三のもの爲に人の三分の一殺されたり　十九其馬の力は口と尾にあり其尾は蛇に似て首ありて之を以て人を傷ふ也　二十其餘れ人にして此等の禍ふて死ざる者は尚ほその手のわざを悔改めず惡鬼を拜し見あと聞あと行あとを得ざる金銀銅石木の偶像を拜し　二一又その殺人魔術姦淫盜竊を悔改めざりき

第十章

我また一人の強き天使の雲を衣て天より降るを見たり虹その首にあり其面は日の如く其足は火の柱の如し　二其手には展たる小き卷をもり其右は足を海の上にふみ左の足を地に履み　三獅子の吼るが如く大聲を呼れり呼れるとき七の雷聲を發せり　四七の雷聲を發せる時われ之を書記さんとせしに天より出る聲ありて此七の雷の言るところを封じて書記す可らずと曰るを聞り　五我ヶ見る所の海と地を踏り立る天の使右の手を擧て天に向ひ　六世々窮なく生る者即ち天および其中のもの地および其中のもの海および其中のもの物を造たる者を指て誓ひ曰けるは此のち時を延す可らず　七第七の天使の聲を出すとき即ち盬を吹ときに至りて神その僕ある預言者等に示し給ひし如く其奧義成就すべし　八我が聞し所の天よ

り出し聲また我に曰けるい行て大海と地の跨り立る天使の手に持とおろの展たる小き卷を取我ろの天使の所に往て之に曰けるい小き卷を我に予よ彼いひけるい此卷を取て食盡せ爾の腹苦く爲べし其口に入るときい蜜の如く甜らん　わ之を天使の手より小き卷を取て之を食じに口ゐ在し時い其甜ゐと蜜の如ありしが食盡しよ時わが腹苦く爲たりかを我ゐ曰けるい爾再び諸民諸國諸音諸王の事を預言すべし

第十一章

われ杖の如き葦を予られたり天使立ゐ曰けるい起て神の殿と香壇並に其處にて拜する者を度れ　殿の外の庭い遺して度る可らず蓋ゐを異邦人に予へ給ひたれバ也ろ是ら四十二ケ月のあひだ聖城を踐躪さん　我わが二人の證者に能を予ん彼等麻の衣を着て千二百六十日の間預言すべし　彼等い地を宰とる主の前に立る二の橄欖の樹二の燈臺なり　もし彼等を害わんとする者あれバ火ろの口より出て其敵を滅すあり若し彼等を害わんとそる者あれバ其者い此の如く殺るべしかを是ら預言するの權を有り亦水を血に變らせ且ろの心の任意に因て屢ゝ樂を互に禮物を贈答せん蓋ゐ二人の預言者地に住ものを苦めたれバ也　三日半ののち生の靈神より出て彼等の中に入かれら起て其足を立しかバ之を見もの大に懼たり　われ天より大ある聲ありて此に升れと曰ふを彼等雲に乘て天に升れり其敵ゐを見たり　ゐ大なる地震ありて邑の十分の一い傾れ此地震の爲に死し者七千人遺れる者等い大に懼を榮を天の神ゐ歸せり　第二の禍すぎ去り第三の禍速かに來らんとす○　第七の天使笛を吹しとき天に大ある聲ありて曰ゐの世

間天を閉て雨を降さらしむる權を有り亦水を血に變らせ且ろの心の任意に因て屢ゝ樂を互に禮物を贈答せん蓋ゐ二人の預言者地に住ものを苦めたれバ也　三日半ののち生の靈神より出て彼等の中に入かれら起て其足を立しかバ之を見もの大に懼たり　われ天より大ある聲ありて此に升れと曰ふを彼等雲に乘て天に升れり其敵ゐを見たり　ゐ大なる地震ありて邑の十分の一い傾れ此地震の爲に死し者七千人遺れる者等い大に懼を榮を天の神ゐ歸せり　第二の禍すぎ去り第三の禍速かに來らんとす○　第七の天使笛を吹しとき天に大ある聲ありて曰ゐの世

の諸れ國い我儕の主およびキリストの權と爲りキリスト世々窮なく之を治めん　十一神の前に在て位に坐し居たる二十四人の長老俯伏して神を拜し　十七曰けるい今在し昔し在す全能の主たる神よ我儕感謝す附すでに大なる權を執て政事を施し給ふを因れ國の民怒を懷けり爾の怒も亦至れり且死し者を鞫判して爾の僕なる預言者及び聖徒あらびに大と小とれ別なく其名を懼るゝ者ゝ賞を予へ地を亡す者を亡し給ふ時既ゝ至れり　十九時ゝ神の殿天に開け殿の中ゝ神れ約束の櫃みゆ又閃電と聲と迅雷ゝはび地震と大なる雹と有き

第十二章

一　茲ゝ大なる異象天に現いる一人の婦あり日を着月を足の下ゝ踏み首ゝ十二の星の冕を戴けり　二彼すでに孕み居しが子を產んとして苦み拙叫べり　三また一の異象天に現いる一條の大なる赤龍あり之ゝ七の首と十の角あり其七の首に七の冕を戴けり　四その尾ゝて天の星三分の一を曳みとを地ゝ墜せり此龍子を產んとする婦の前ゝたち產を待て其子を食んとす　五婦男子を生り其子鐵の杖をもて萬國の民を主理らんとす彼神と其寶座の下ゝ擧られたり　六婦のがれて野ゝ往り神ゝおゝて彼を千二百六十日のおひだ食いしめん爲に備給へる一の所あり　七斯て天ゝ戰起れりミカエルうの使者を率て龍と戰ふ龍も亦ろれ使者を率て之と戰ひしが　八勝ゝと能ず且再び天に居ゝとを得ず　九是に於て此大なる龍もゝおいち惡魔と呼をサタンと呼る3者全世界の人を惑せ老蛇地ゝ逐下さる其使者も亦とゝもゝ逐下されたり　十天ゝ大なる聲あり曰く我儕の神れキリストの權威今すでに至れり蓋われらの神の前ゝ晝夜と我儕の兄弟を訴ふる者既ゝ逐下されたれバ也　十一我儕の兄弟い羔れ血ゝよと其國と神れキリストの權威今すでに至れり蓋われらの神の前ゝ晝夜と我儕の兄弟を訴ふる者既ゝ逐下されたれバ也　十一我儕の兄弟い羔れ血ゝよび己ゞ證せし所の道ゝ因て之に勝り彼等い死ゝ至る迄で其生命を惜ざり　十二是故に天と天ゝ居者い喜べ他と海い禍ある哉うい惡魔ゝおゝ夕時の幾時も無を知り大なる怒を懷て爾曹の所に下れバ也〇　十三龍ゝおゝ夕既に地に逐下されしを見て彼れ男子を生る婦を窘せり　十四ゝの婦大なる鷲の二の翼

を予られ野に飛て己が所に至り其處に
て蛇を避一年と二年と半年のあひ
だ幾はをたり 十五 蛇ろの口より水を河け如く婦の後に吐て之を漂さんとせ
り 十六 地婦を助け口を啓て龍の口より吐たる水を呑盡せり 龍婦を怒り
てろの餘の兒女そなわち神の誡を守りイエスの證を有つものと戰わんと
て往り

第十三章 われ海け砂け上に立て一匹の獸の海より出るを見たり之ゐ七の
首と十の角あり其角の上に十の冕を戴き其首ゐ僭妄の名を書せり 二 我が
見し所け獸ろの形ゐ豹の如く其足ゐ熊の足の如く其口ゐ獅子の口の如し
龍おのをの能力と座位と大ある權威を之に予たり 三 我ゐの獸の一の首傷
を受て幾と死んとする狀ゐるを見たり其死んとする狀ありし傷愈けれバ
全世の人ゐをを奇として從へり 四 龍ろの權威を獸に予しに因て人々龍を
拜し又ゐの獸を拜し曰けるゐ誰か此獸の如き者あらんや誰か之と交戰を
なし得もの有んや 五 ゐの獸夸大ある言と讀す言とをいふ口を予らを又四
十二ケ月のあひだ働をゐすべき權を予らる 六 ゐれ口を啓て神を謗し其名
と其幕屋ゐよび天ゐすむ者等を謗せり 七 ゐれ聖徒等と戰ひ之に勝てとを
許され又諸族諸民諸音諸國を宰とる權威を予られたり 八 地ゐ住る凡の人
即ち世の始より殺され給ひし羔の生命の冊ゐ其名を錄されざる者等ゐ此
獸を拜せん 耳ある者ゐ之を聽べし 十 凡ろ人を虜にする者ゐ己また虜ゐ
せられ刀にて人を殺す者ゐ己また刀にて殺さるべし聖徒の忍耐と信仰茲
に在〇 十一 我また一匹の獸の地より出るを見たり之ゐ二の角ありて羔の角
の如し且ろけ言ふゐと龍の如し 十二 てのの獸先の獸の前にて先の獸の凡の權
威をとり地と其上ゐ住る者をして先に死んとする狀なりし傷け愈たる獸
を拜せしめたり 十三 また大ある奇徴をゐし人々け前にて火を天より地ゐ降
し且ろの權を得て獸の前ゐ行ふ所の奇徴を以て地にすむ者を欺き彼等
ゐ語りて彼の刀傷を受てゐは活る獸の像を作らしむ 十五 彼ゐの獸の像ゐ生
命を予へ之をして言ふゐとを得しめ又ろの像を拜せざる者を悉く之ゐ殺

しむるの標を予られたり　十六かれ衆人をして大小貧富自主奴隸の別あく或い右の手或い額に印誌を受しむ　十七印誌すあいち獸或名あらざる者あるひい其名と數あらざる者い凡て貿易する事を得ざらしめたり　十八此獸の數目の義を知るものい智慧あり才智ある者い此獸の數を算よ獸の數い人を數るり其數い六百六十六なり

第十四章　一われ視しゐ羔シオンの山に立り十四萬四千の人これと偕あありその額に羔の名および羔の父の名を書せりニわれ天より聲あるを聞り衆の水の聲の如く大なる雷の聲の如し我が聞し此聲い琴を彈者の琴をひくの音なりニ三かれら新しき歌を寶座の前および四の生物と長老等の前ゐ歌ふ此歌い贖いるゝおとを得て地より來れる十四萬四千人の外い學得あとあし四彼等い婦女と交りて其身を玷ざる潔者なり且羔の往とあろ何處おても之に從ふ彼等い人の中より贖出されたる者にて神と羔ゐ獻し初れ果あり五ろの口誑言あし彼等い疵あき者也〇六我また一人の天使の穹蒼の中央を飛を見たり彼地ゐすむ者即ち諸國諸族諸音諸民に宣傳へん爲ゐ永遠ある所の福音を擎へ七大あある聲にて曰けるい神を畏れ榮を之ゐ歸せよ蓋神の審判し給ふとき既ゐ至ればあり天地海及び水の源を造り給ひし者を拜せよ八また一人の天使ろの後ゐ從ひ往て曰なるい大なるバビロンい傾たり傾たり彼ろの姦淫ゐ因て千る怒の酒を萬國の民ゐも飲しめたり第三の天使のれらの後ゐ從ひ往て大聲ゐ曰けるい若し獸と其像を拜し其印誌を額あるひい手ゐ受る者あらば十必ず神の怒の酒を飲ん即ち神の怒の杯に物を雜ずして斟るもの也また聖天使たち及び羔の前ゐて火と硫磺を以て苦めらるべし十一ろれ苦めらるゝ烟上に騰て盡る時あし獸と其像を拜する者また其名の印誌を受る者い夜晝安らざる也十二神の誡とイエスを信ずる信仰を保つ聖徒の忍耐あるゐ在十三われ天より聲あありて我に言ふを聞り曰おんぢ此言を書せ今より後主ゐ在て死る死人い福あり靈も亦いふ然かをらい其勞苦を止て息ん其功これゐ隨いんと〇十四われ視しゐ

白雲あり其雲の上に人の子の如きもの首に金の冕を戴き手お利鎌を持て坐せり　十五 また一人の天使殿より出大なる聲お て雲の上お坐そる者お曰けるい刈時そでお至れり地の穀物そでに熟したり爾の鎌を入て刈雲の上ふ坐する者ろの鎌を地お入けれ地の穀物刈取きたり　十六 また一人の天使天おある殿より出いれも亦利鎌を持りせた一人の火を掌る權威を有る天使祭壇より出大なる聲お て利鎌を持る者お曰々るい地の葡萄すでに熟したり爾の利鎌を入て葡萄の球を刈斂めよ　十九 天使ろの鎌を地お入地の葡萄を刈斂めて神の怒の大なる酷お投人たり　二十 城の外お て此酷を踐しに血酷より出て馬の轡お達はとお至り四百里お流れり

第十六章　我また大おして且奇なる異象の天に現れしを見たり七人の天使末後の七の災殃を持り神の怒い此お て盡る也　二 我また火の雜たる玻璃の海の如ものを見たり且獸と其像および其名の數お勝たるもの神の琴を執て此玻璃の海の上お立るを見たり　三 これら神の僕モーセの歌と羔羊の歌を謳て曰けるい主全能の神おんなぢの行爲い大おるろお妙なるかお萬民の王よ　四 爾の道い義おるろお誠おる哉　主よ誰か爾を畏ざらんや唯おんなぢの聖し萬國ね民なんぢの前お來りて拜せん爾の義き行爲すでに顯をたり　五 此後われ觀しに天にて證の幕屋の殿開たり　六 七の災殃を持る七の天使潔して光ある布をき胸お金の帶を束ねて此殿より出四の活物の一これの七人の天使お世々窮おく在す神の怒を盛る金甖を予ふ　八 神の榮光と權力より出る烟殿お滿たり七の天使の畢まで殿に入おとを得者おし

第十六章　我また殿より大おる聲いでて七の天使お語るを聞り曰く往て神の怒を盛る七の金甖を地に傾けよ　二 第一の使者ゆきてろの金甖を地に傾けよれば獸の印誌ある人と其像を拜そる人とお惡あつ苦痛れ腫物生たり　三 第二の使者ろれ金甖を海に傾けよれば海い死し者の血ね如くなりて海おある活物みお死たり　四 第三れ使者ろの金甖を河および水の源に傾けよ

きべ其水を變て血と爲り　五われ水を掌る天使け云る音を聞り曰くいま
在し昔し在す聖主よ爾このくの如く審判をおし給ふお因て義あり　六んな
聖徒と預言者の血を流しゐ彼等お血を予て飲しむ彼等い之を受べき者な
り　七我また聲ありて祭垣より出るを聞り曰く然り主たる全能け神よ爾の
審判い正うつ義あり　八第四け使者ゐの金椀を太陽の上に傾けゐれば太陽
火を以て人を烤の權を予られたり　九人々大熱お烤れて此等の災殃を掌と
り給ふ神の名を詬り且悔改めず神に榮を歸せざりき　十第五の使者ゐの金
椀を獸け座の上お傾けゐれべ其國暗みり人みお痛苦お因て其舌を齧たり
十一又うの痛苦と腫物とけ故お因て天の神を詬り已ゞ行を悔改めざりき　十二
第六の使者ゐれ金椀を大河ユフラテお傾けゐれべ其水涸盡たり是東方の諸
王の路を備ん爲なり　十三我また龍の口と獸の口および僞の預言者の口より
蛙お似る三の汚たる靈の出るを見たり　十四此い惡魔の靈なり異ある跡を行
ひて全地の諸王に就り彼等をして全能の神の大ある日の戰お集らしむ
視よ我盜賊の如して來らん襤褸にて行き羞處を見ることなからん爲お曰
を醒し衣を着る者い福あり　十五あの三の靈諸王たちをヘブルの音にてハ
ルマゲドンとよぶ所お集たり　十六第七の使者ゐの金椀を空中に傾けゐれべ
大なる聲天の殿の中ある寶座より出て曰けるい既お成り　十七此とき許多の
壁迅雷閃電また大ある地震ありき人の地お出しより以來かくの如き大な
る地震ありし事あし　十八大ある邑三おわりゐ異邦人の諸〻の城傾たり神大ある
バビロンを憶起して之に己の劇き怒の酒を盛たる杯を予へ給へり　十九諸の
島い遁去もろ〳〵の山い見なく爲り　二十また大ある雹天より人々の上お降
り雹ごとに重さ約ろ一タラントありり人々雹の災に因て神を詬きり蓋こけ
災甚しく大あれべ也

七の金椀を持る七人の天使け其一人きたりて我に語て曰けるい
來れ我なんぢお多の水の上に坐する大淫婦の刑罰を示さん　二地の王等お
れと淫を行ひ地お住る者ろの淫亂け酒に醉たり　三われ靈お感じ携へられ

て野にゆき絳色の獸に乘る婦を見たり此獸あまねく體に僭妄の名あり又
七つの首と十の角あり　四　婦は紫と緋の衣を纏ひ金と寶石と眞珠を以て身
を飾り手に憎べきもの及び己が姦淫の穢を盛る金の杯を持　五　その額に名
を書せり云く奧義大なるバビロン地は娼婦と地の憎むべき者とは母　六　我また
婦は聖徒の血と耶穌イエスの證を作し者等の血を酔たるを見たり我また
を見て大に駭き異めり　七　天使われに曰けるは何なわゆえ駭くや我なんぢ
に此婦および之を乘する七の首十は角ある獸の奧義を語ん　八　爾が見し獸
は昔には有しが今は無れち無底坑より上りて沈淪に往ん世の始より生命
の冊に其名を錄されざる地に住るもの昔はありき今はあらず後また出る獸を
見て駭らん　九　爰に智慧ある心あるべし此七の首は婦の坐する七の山あり　十
七の王あり其五は既に傾て一は尚あり餘れ一は未だ來らず來らば暫く止
らん　十一　昔は有て今あらざる獸は第八にあり即ち七の王より出し者にて終は
沉淪に往ん　十二　爾が見し十の角は十の王あり彼等は未だ國を得ざれとも此

獸と偕に一時のあひだ王の如き權威を執べし　十三　彼等は心を同心にて己が
能力と權威を彼の獸に予ふ　十四　これら羔と戰わん而して羔はこれに勝あり蓋
羔は諸の主の主諸の王の王なれば偕にある者は召され選ばれたる忠信の者あ
るに因　十五　天使また我にいふ淫婦の坐する所の衆水は民群衆諸國
諸音あり　十六　爾が見し十の角と獸は夫の淫婦を憎み之をして荒墟かつ裸程
に爲しむ又その肉を食ひ火を以て之を焚べし　十七　蓋これらに神おのが旨に
循ふの心を予へ彼等をして心を同うせしめ且神の言の悉く成まで其國を
獸に予しめ給へばなり　十八　爾が見し婦は地の諸王に王たる大ある城邑あり

第十八章

此後われ又一人の天使の大ある權威を有て天より降るを見たり其
榮地を照し輝けり　二　これ大ある聲にて呼り曰けるは大ある巴比倫傾た
り傾たり今惡魔の住處また各樣の汚たる靈および憎べき鳥の巢となれ
り　三　萬國の民その淫に因て干る怒の酒をのみ地の諸王その奢侈を
行ひ地の商賈その奢華に由て富を致べしなり　四　我また天より

辟あるを聞り曰ヒダ民よ爾曹これの罪に共に與り又彼の災に共に遇ふことを免れんが爲うの中を出べし　五　その讐を心に記給へり　六　彼ダ爾曹に爲し如く彼に爲うの行を照し倍して之に報い彼ダ調予し杯に爾曹また倍して之ふ調予へよ　七　彼ダ自ら高ぶり自ら奢れる如く亦痛苦悲哀を彼に予へよ彼心の中に謂ひけるは我い寡婦に非ず我ゥあらず悲哀に遇じと　八　是故に諸〳〵の災殃一日の間に彼の身に來らん即ち死悲哀饑饉あり彼また火にて焚盡されん蓋あれを鞫給ふ主たる神い能力ある者あれを也　九　彼と姪を行ひ彼と共ふ奢華くらしゐ地の諸王彼ダ焚るよ烟を見て之ダ爲ふ哭き哀まん　十　あの諸王のまダ受る痛苦を畏れ遠ふ離れ立て曰ん哀き哉哀き哉大ある邑バビロン堅固ある邑爾ダ受ろ刑罰一時の間ふ至れりと　十一　地の商賈ふきダ爲に哭哀めり蓋のきら之ふ買物を買人あけれ也　十二　うの貨物い金銀寶石眞珠細麻布紫ふて染し物綢緞ふ染し物各樣の香木象牙各樣の器皿價貴き木あるひい眞鍮あるひい

鐵あるひい瞰石にて作れる各樣の器皿　十三　また肉桂香料香膏沒藥乳香葡萄酒油麥粉麥牛羊馬車奴隸およひ人の魂あり　十四　バビロン爾ダ心嗜る果穀の熟期そでふ過去すべての奢れる華美のきの既ふ亡ふ復あれを見ざるべし　十五　此等の物を販ひバビロンの爲に富を致しよ者等バビロンの受る苦を畏れ遠ふ離を立て哭哀みヨけるい　十六　哀き哉哀き哉細麻布と紫にて染し物と緋に染し物とを纏ひ金寶石眞珠ふて飾たる大ある城邑よ此の如き大ある富一時の間ふ消滅んとい　十七　凡の舟長海を航る人々及び舟子と海ふ由て生業を作るものバビロンの燃る烟を見はるかに離れ立て嘆叫いひけるい何の邑か此大ある邑に比ふ可んやまた聖を首の上に散布し哭哀つゝ叫ひ曰けるい哀き哉哀き哉この大ある邑ういの奢侈ふ由て凡て海ふ舟を有る者の富を得たる此邑一時の間ふ滅してと　十八　天よ聖徒使徒預言者よ爾曹ふきを喜ぶべし神ふんぢらの爲ふ之ふ報をなし給へる也　十九　一人の強き天の使磨の如き巨ある石を取これを海ふ投て曰けるい大ある城バビロン此の如

く烈しく打仆されて再び顯るゝ事あらん 三 バビロンよ爾の中ゐ琴をひき樂を奏し笛をふき錦を鳴す聲重ねて、聞ゐず各樣の工人重ねて見ゐず磨子の音重ねて聞ゐず 三 火燈の光のさねてるべし蓋ゐんなの中の商人い地の尊貴者ゐれば也また萬國の民ゐんなの魔術ゐ惑されたる也 二四 預言者聖徒ゐよび凡て地ゐ在て殺さきたる者の血い此邑ゐ見ゐたり

第十九章

此後われ許多の人の呼ぶが如き大ゐる聲の天ゐ在を聞り曰ハレルヤ救と榮と權力い我儕の神の有ち給ふ所ゐり 二 ろの審判い直りつ義ゐり蓋神ゝの淫亂に因て世界を汚したる大淫婦を鞫き已が僕等の血の報を求て之を罰し給へる也 三 かをら再ハレルヤと言り、煙火の烟のぼりて世々熄時ゐし 四 二十四人の長老および四の活物寶座ゐ坐し給ふ所の神を伏拜てアーメンハレルヤと言り 五 寶座より出ていふ神の僕よ神を畏る〻者よ大と小との別ゐく皆ゐをらの神を讃美すべし 六 我ゐほくの人の聲の如く多の水の音の如く大ゐる雷の聲を聞り曰ハレルヤ夫主たる全能の神い王ゐり 七 われら喜び樂みて神を崇めん蓋羔の婚姻の期すでゐ至り其婦すでゐ自ら備をゐし 八 畢たれば也 八 婦い潔して光ある細布を衣ふをを許さる此細布い聖徒の義ゐり 九 天使われに曰けるい羔の婚姻の筵ゐ招れたる者い福なりと書記せ又曰れ神の眞の言ゐり 十 我ろの足下ゐ俯伏して拜せんとす爲ければ彼我ゐいふ然すべらず愼めよ我も爾と同く僕ゐり亦イエスの證を有つ爾の兄弟と同く僕ゐり亦イエスの證を有つ爾の心を神を拜せよイエスの證を立る靈と預言の靈と殊ゐる事ゐし 十一 我また天の開を觀しゐ一匹の白馬ゐり之ゐ乘るもの忠信また誠實と稱らる彼い義を以て審判と戰爭を爲せり 十二 ろの目い火焰の如く其首い多の冕を冠れり又錄せる名ゐり彼の外ゐ之を識者ゐし 十三 うを血ゐ染たる衣を纏へり彼の名い神の言と云 十四 天ゐある諸軍皎く輝ける細布をき白馬ゐ乘て之ゐ從へり 十五 彼の口より利劍いづ之を以て列國の民を擊かつ鐵の杖を以て列國の民を牧ら

ん彼また全能の神の甚しき怒の酢を醸す彼ら衣と股とに録せる名あり曰く諸王の王諸主の主　我また一人の天使の日の中に立るを見たり彼空中を飛鳥を大なる聲にて呼曰けるは爾曹神の大なる筵に集り來り諸王の肉將軍の肉勇士の肉馬と之に乘る者の肉および自主奴隷大と小との別なく凡の人の肉を食へ　我うの獸地の諸王および其軍隊と戰いんと爲て集るを見たり　二十　獸と僞の預言者と共に擒へられ此僞の預言者い前に獸の前わて異蹟を行ひ獸の印誌を受たる者および其像を拜する者を惑しゝる火の池に投入られ　三　うの餘の者い白馬に乘る者の口より出る所の劍にて殺れたり諸の鳥あれらの肉を食ひて飽り

第二十章　又一人の天使底なき坑の鑰と大なる鏈を手に携へて天より降るを見たり　二　のれ惡魔と稱へサタンと稱る龍をおのち老蛇を縛て之を千年のあひだ納置んとす　三　之を底なき坑に投入れ閉みめて其上に封をおし千年過るまで諸國の民を惑すあと莫らしむ其後のあらず暫時のわひだ釋放さるべし　四　我おほくの座位を見しに其上に坐する者あり彼等審判の權を予らる又イエスの證およひ神の道の爲に首斬をたる者の靈魂を見たり此い獸と其像を拜せず其印誌を額あるひい手ゐ受ざりし者の靈魂あり皆生てキリストと共に千年の間王と作りたる也　五　其他の死人い千年終まで甦らざる也これ第一の復生なり　六　この第一の復生に與る者い祝あり是聖者あり此輩の上に第二の死い權を執ゐと能ず彼等い神とキリストの祭司と作キリストと共に千年の間王たるべし　七　千年終てサタン其囚より釋放さるべし　八　くれ出て地の四方の列邦ゴグとマゴグを惑し之を集て戰しめんとす彼等の數い海の沙の如し　九　かれら地に遍く滿て聖徒の陣營と愛せらる城とを圍む此時に火天より降りて彼等を滅せり　十　彼等を惑しゝ惡魔火と硫磺の池に投入られたり卽ち獸および僞の預言者の居とみろ也ゐて夜も晝も患難苦ありて世々窮時なし　十一　われ白き大なる寶座と之ゐ

坐する者とを見る地と天と其前を遁て再び留るべき處を得ず　十二我また死し者の大と小との別なく皆神の前に立を見たり其處に書ありて展く別に又一の書ありて展かれ生命の書ありり死し者ゐ皆書に錄せる所の事に由りの行に循ひて審判を受る也　十三海ろの中の死人を出せり彼等おの〳〵其行に循ひて審判を受たり　十四死と陰府と火の池に投入られたり是第二の死あり　十五凡て生命の書に錄されざる者も亦火の池に投入らるたり

われ新しき天と新しき地を見たり先の天と先の地ゐ既に過さり海も亦有ざるし　二われ聖城ある新しきエルサレム備整ひ神の所を出て天より降るを見ろの新婦うの粧飾たるが如しわれ大ある聲の天より出るを聞り云く神の幕屋人の間にあり神人と共に住人神の民とあり神また人と共ゐ在して其神と爲給ふあり　四神かれらの目の涙を悉く拭とり復死あらず哀き痛み有ことあし蓋前事すでゐ過去むあり　五寶座ゐ坐する者われに曰けるゐ見よ我萬物を新にせん又我ゐ曰けるゐ爾ぢれを書記せ蓋ゐの言ゐ信ず可して確實なきゐ也　六又我ゐ曰けるゐ既ゐ成り我ゐアルパ也オメガゐり始ゐり終なり渇者ゐゐ價ゐしゐ生命の水の源ゐて飲事を許さん　七勝をうる者ゐ此等の物を得て其業と爲べし我ゐれの神とゐり彼わが子と爲ん　八然と臆する者信ぜざる者憎む可もの人を殺すもの奸婬を行ふもの魔術をゐす者偶像を拜する者ゐよび凡て謊を言ものゐ火と硫黄の燃る池にて其報を受べし是第二れ死ゐり〇　九末後の七ゐ災殃の盛る七の金槌を執る七人の天使の一人來りて我ゐ語り曰けるゐ來れ我ゐんぢゐ誂の妻ある新婦を見せん　十われ靈ゐ感じ天使に携へられて大ある高山ゐ至れり此にて我ゐ大ある城聖エルサレム神の榮を以て神の所を出て天より降るを見す　十一其城の光輝くゐと至寶き玉の如く澄徹る金剛石の如し　十二此に大ある高き石垣ゐりて十二門ゐり其門に十二の天使をれり門の上ゐ名を書せりイスラエルの十二の支派れ名ゐ

り　十三東ゐ三れ門あり北に三の門あり南に三の門あり　十四城
の石垣ゐ十二の基址あり其上ゐ羔の十二使徒の名あり　十五我ゐ語れる者城
と門と石垣とを測ん爲に金の竿を持あたり　十六城ハ四方にして長と闊と同
し天使竿を以て城を測しゐ六百里あり長さ闊高さ共に相等し　十七又その石
垣を測しゐ人の度ゐ從へ百四十四キユビトあり人の度ハ天使れ度と
同し　十八石垣ハ金剛石にて築き城ハ清潔ゐる玻璃の如き純金ゐて造をり
城の石垣の基址ハ各樣の玉にて飾をり第一の基址ハ金剛石第二ハ青玉第
三ハ赤玉第四ハ綠の玉　二十第五ハ紅せ瑪瑙第六ハ黃色の玉第七ハ滑き黃色
ゐる玉第八ハ水色の玉第九ハ紅の玉第十ハ翡翠第十一ハ深紅の玉第十二
ハ紫の玉あり　二一十二の門ハ十二の眞珠あり一の門ハ一の眞珠ゐて一の門を造れり
城の街ハ澄激る玻璃の如き純金あり　二二われ城の中に殿あるを見ず蓋主た
る全能の神および羔れ殿あれゐ也　二三また城に日月の照ことを需ず蓋神
の榮光ゐ之を照し且羔城の月燈なれゐ也　二四萬の國の民ゐの光ゐ藉て行ま

ん地の諸王おのれの榮と尊貴とを以て此城ふ來らん二五
ず此に夜ある事あし 萬の民己の榮と尊貴とを以て此城ふ來らん二六凡て
潔らざる者と憎べき行を爲もの或ひ謊をいふ者ひ必ず此に入ことを得ず
唯羔の生命の書に錄されたる者のミ入あり

第二十二章

羔の寶座より出ニ 城の衢の中おより河の左右ふ生命の樹あり十二種の果
を結び一種を月ごとふ結ぶ也ろの樹の葉ひ萬國ヒ民を醫すべし 三重て呪詛
あることあし神と羔の寶座ろこふ在ろの僕みれに事ん 四僕とも神の面を
み神の名ひのれらの額に在べし 五彼處ふひ夜あることあく燈の光と日の光
とを用るみとあし盖主ある神かれらを照し給へば也かれらひ世々窮あく
王たらん 六天使ま た我ふ曰けるひ此言ひ信ず可して誠實あり預言者の靈
魂の神ある主遣ろに成んと爲みとを其衆僕に示もために其使者を遣せり
七わ也速ク ふ至らん此書れ預言の言を守る者ひ福あり ○ 八我ヨハヂ此等

の事を見聞せり之を見聞せし時我に此等の事を示せる天使の足下に伏して拜せんと爲けるに　九かれ我おいふ然そべらず愼めよ我い爾と同く僕なり亦あんぢの兄弟なる預言者及び此書の言を守る者と同く僕あり拜せよ　十神を拜せよ　彼また我おに曰けるい此書の預言の言を封ずること勿れ蓋時近けれ也　十一不義者い不義ある任にし汚穢者い穢き任わし義者い義なる任にし聖者い聖き任にせよ　十二わを速かに至らん必ず報應あり各人に行ふ所に循ひて之に報べし　十三我いアルパ也オメガあり首先あり末後あり始あり終あり　十四ろの衣を洗ひし者い福あり彼等い生命の樹の果を受るおとを得また門より城に入おとを得べし　十五犬および魔術を爲もの姦淫を行ふ者い城の外に居あり　十六我イエスわが使者を遣して此事を爾曹諸教會に證す我いダビデの根また其苗裔あり我い耀く曙の明星あり　十七靈と新婦といふ來れと之を聞者も來れといへ渴者い來るべし願ふ者い價あしに生命の水

の事を見聞せり之を見聞せしとき我に此等の事を示せる天使の足下に俯伏して拜せんと爲けるに
く僕なり亦あんぢの兄弟なる預言者及び此書の言を守る者と同く僕なり
聞たゝ神を拜せよ　十　彼また我ふ曰けるは此書の預言の言を封ずること勿
れ蓋時近けれゝ也　十一　不義者は不義を爲ゝ汚穢者は汚穢き任にし義者は
義なる任にし聖者は聖き任にせよ　十二　わを速かに至らん必ず報應あり各人
に行ふ所に循ひて之に報べし　十三　我はアルパ也オメガあり首先あり末後あ
り始あり終あり　十四　その衣を洗ひし者は福あり彼等は生命の樹の果を受る
ことを得また門より城に入ことを得べし　十五　犬および魔術を爲もの奸淫を
行ふもの人を殺すもの偶像を拜する者また凡て諛言を好て虚妄を行ふ者
は城の外に居り　十六　我イエスわが使者を遣して此事を爾曹諸教會に證す
我はダビデの根また其苗裔あり我は燿く曙の明星あり　十七　靈と新婦とい
ふ來れと之を聞者も來れといへ渴者は來るべし願ふ者は價なしに生命の水

を飲べし　十八　我てこの書の預言の言を聞者ゝ証をあす若ゝの書の預言の言ゝ加る者われた神ゝこの書ゝ録せ所の災を以て之ゝ加へん　十九　若ゝの書の預言の言を削る者われた神之をして此書ゝ録す所れ生命の樹の果と聖城とゝ與るゝと覚らしむ　二十　此事を證する者いひけるい我必らず速らに至らんァーメン主イエスよ來り給へ　二一　願くい主イエスの恩寵をべてれ聖徒と共に在んてとを

新約全書約翰默示錄　終